

転生先は、新世紀エヴァンゲリオン

毘眼翔



## 目次

転生先は、新世紀エヴァンゲリオン	1
主人公兼世界の設定	4
新しき道に……	7
戦闘準備	18
新しい未来の為に……	35
新しい繋がり	53
決意	64
可能性の数	77
自分の命を天秤に	91
止めない足	110
変わる何か……	131
進んでいく……周り	153
番外	176
秘めた可能性	192
そんな日常……	209
嵐の前……	226
彼の敗北……上	243
彼の敗北……下	278
彼女の心……	300
苦しんでいる間にも……	312
最悪な……結果	330
疑惑、救い、そして新たな子供	346
忍び寄る影の中に……	362
人の中から作り出されたもの 上	376

人の手から作り出されたもの	下	396
セカンド・チルドレン		417
戦いの前…		440
壊れかけた歯車		461
新たな動き…		492
刀…自分を収める鞘を探して		509
鞘		536
エンジェルヴァイツァ		561
2つの心は…		576
形の合わないパズルのピース		594
繋ぐ線と線		609

## 転生先は、新世紀エヴァンゲリオン

2001年6月6日、俺はこの世に生まれた。

ふと、俺は意識が戻ると周りの音が聞こえて来た。

「……………とう……………す。立派……………で……………」

「ユ……………ったな」

何故か周りの音が聞き取れない。人の話が聞こえているが、カタコトで何を言っているのがわからない。

そして、俺は身体を動かそうとしたが…

(なんじゃこれ!!)

目を薄く開けたら、微かに目の前にショートの髪型の女性が真近にいた。

「オギヤァー!! (なんで?!)」

俺は、今自分の状況が把握できないまま何故か赤ん坊の身体で泣いていた。そして、それを見た女性は人好きそうな顔で俺に言う。

「あー、よしよし。シンジ…貴方の名前はシンジよ。今この瞬間から貴方は幸せを探しなさい。この世界でも、幸せになれるわ…だって、私達の息子なんだから」

俺は女性に言われ、少しずつ状況を把握した。

(なんで、俺は赤ん坊になってるんだ? それと記憶が…曖昧だ。とりあえず目の前の人は母親ってわけね…)

俺が考えている所に横から男性の声が聞こえた。そして、目の前の女性は男性の声の方向みる。

「だって、生きてるんですもの。どんな所でも幸せはあります。

私と貴方だって幸せでしょ?」

俺は女性が話している男性の方を向くと、30代の少し痩せこけてる男性がいた。

(これが父親って訳か…ふむ、中々歳の離れた夫婦だ事。それで今いるのが病院か。)

俺は、自分の周りを動かしづらい首を動かして周辺を見回す。

「だが、しかし…ん？　この子は、先程から一泣きした後から静かだな。　ユイ、赤ん坊そんなものなのか？」

男性は俺の行動が奇妙に思ったのか、ユイと言われた女性が笑いながら答える。

「まあ、普通は赤ん坊は泣くのが仕事ですが。　シンジは私が言った通りに幸せを探しているじゃないですか？　ゲンドウさん。」

ふふつと、ユイは笑顔で冗談混じりに言うと言われた男性は少し苦笑する。　俺は、そんな二人を見ながら母親に抱えられている為少しづつ睡魔が迫ってくる。

(…仕方が無い、これが夢だったら覚めるだろう。　現実であれば生き…てい…こう…か…な…)

そして俺は眠りに着いた。

前世の記憶を持ち、新たな世界に舞い降りた迷い人。

この世界に来るまでに色々な人生を、歩いていたが彼は先に進む道を見失ってしまった。

時に、一族の争い。　時に、人外との戦い。　時に、超能力と出会い。　時に、恋に落ち。　時に、人間の闇に飲まれ。　時に、人と外れた人生を送ったり。

様々な世界を、跨ぎ人生を歩み彼はこの世界にやってきた…

新世紀エヴァンゲリオンの世界で、彼はまた新しい人生を迎える。  
彼は、どのように生きて歩いて死んでいくかは誰もまだ知らない。  
一度立ち止まり、また歩き始めてはどのような道に歩いていくのだ  
ろう…

## 主人公兼世界の設定

碓シンジ

中身

如月 龍欣

年齢

現在 14歳

前の世界

不明

外見

碓シンジの母親である碓ユイを幼くした感じ

黒髪

前髪は少し長め

横髪は耳を隠す長さ

後ろ髪は肩甲骨まで伸びており首の所で、一つに結んでいる。

遠目からや後ろ姿で見ると女の子、肉体は余計な脂肪も無いがガリ

ガリではない。

碓ユイを知っている人曰く、「ユイを幼くした感じ」らしい。

身長 139cm

体重 35kg

好きな物

(碓シンジの時)

ふさふさした物

柔らかい物

可愛い物

甘い物

歌

嫌い物

理不尽な事



一人

誰かが自分の事で傷つく所

趣味

トレーニング

フリーランニング

料理

性格

色々な世界をまわっていたが、転生する度に記憶が断片的なくなっている。だが、記憶が無いとはいえ中身の性格は前の世界から引き継いでいる。

基本、明るい性格で目上に対しては相応な対応をする。考えている時の言葉使いと表での言葉は使い分けている。

(幼い頃に大人顔負けの言葉使いで驚かれた為)

人が困っていると助けないと落ち着かない。基本綺麗好き。

寝ている時に隣に何かあると構わず抱きつく癖がある。

拗ねると黙り、怒る時は笑顔で静かに怒る。

嬉しい事や楽しい事があると一人でいた場合は歌を口ずさむ。

日課は、朝にトレーニングとフリーランニングをして体を動かす事。

色々できるのは、前の世界で一通りやっている為であるがシンジには記憶がない。

悩み

男子とも女子とも言える外見の所為で、地元の子供達に「お姉ちゃん」と言われ凹んだ過去あり。

初対面の同年代には、「なぜ、男物を着ているの?」と言われて誤解を説く所から始まる事もある。

今回の「新世紀エヴァンゲリオン」の世界では、最初はエヴァンゲリオンの中でA・Tフィールドが初号機しか張れない。

理由

シンジの場合、最初からシンクロ率が高くエヴァンゲリオンとの壁

が殆ど無い為である。

アスカとレイは、A・Tフィールドを張る為のシンクロ率が低いのとエヴァンゲリオンとの壁がある為である。

碓シンジのエヴァンゲリオンでの戦い方

元々、エヴァンゲリオンは主に軍用武器で戦う。

ナイフ、銃とかで軍隊のような動きで戦うのが主流だが、今回のシンジは高いシンクロ率とエヴァンゲリオンとの壁が無い為に縦横無尽に動け、主に格闘技で使徒と戦う。

だが、余りにも高いシンクロ率と壁が無い為にエヴァンゲリオンにダメージを食らうと操縦者のシンジにもそのままフィードバックされる為、使徒との戦いが終わると殆どが重傷を負っている。その為、ミサト達から出撃する度に心配する始末。

そんな世界です。

## 新しき道に…

西暦2000年、南極に大質量隕石が落下。

かくして有史以来未曾有のカタストロフイーである「セカンド・インパクト」が発生。

水位の上昇し、世界の陸地激減。

天変地異により、季節や地盤が変化。

経済の崩壊で、人類はパニック状態。

民族紛争、内戦が起こり戦争の一步前。

そんな状態、世界人口は半分に減少した。

それから15年、ようやく復興の兆しが見え始めた頃、人類に追い打ちをかけるように危機が訪れる。

彼や、彼の周りにいる人々はどのような展開を起さるか誰も知らない。

定期的に揺れる電車の中

ガタンゴトン、ガタンゴトンとリズムカルに音ならし車内を揺らす電車の中。

座席に座り端の手すりに寄りかかる少年が1人、ウオークマンからイヤホンを繋げ耳に差し曲を聞いていた。

（はあ〜〜）。 …数年ぶりに連絡があつたと思つたら、有無と言わずに指定した場所まで来いとは酷いと思うのだが…）

心の中で盛大に溜息を吐いている少年、碓シンジは電車の壁に貼られている広告を上の方で見ながら、心の中で愚痴を溢す。

碓シンジは、親戚に幼い頃に預けられ数年が過ぎ突拍子も無く彼の父親から書類と思われる封筒が届けられた。

中身を見ると、碓シンジの書類と指定された場所の書かれた地図に手紙一通。

『来い』

この一言であった。

流石に、三日前に届けられ親戚に預けられた京都から神奈川県第3新東京市まで来いと言われたら、誰でも愚痴は言いたくなるだろう。

(まあ、「来い。」と言われたら用があるんだろうからいいけど…。もう少し準備できる猶予は、欲しかったなあ)

第3新東京市に向かっている電車の中、シンジは実の父親に心の中で苦笑する。

☆☆☆☆

海辺沿い

数十台の戦車が海の方に砲台を向け、季節が変わらない夏の日差しに当てられ陽炎ができるほど熱していた。

軍隊と思われる部隊の隊員が数人が、戦車から体を出し双眼鏡で海を見渡していた。

隊員が海を監視して数十分。暑い日差しに、額から汗が流れ顎に  
辿り戦車の装甲に滴り落ちた瞬間。  
海から巨大な水飛沫が上がる。

★★★☆☆

ネルフ本部

「正体不明の物体、海面に姿を現しました」

鳴り響く警報の中、巨大なモニターが設置され映し出される地図の  
画像。

その施設で高い場所に、一人は白髪でオールバックの老人が立って  
おり一人は中年の男性でサングラスをかけて顎の髭は、揉み上げまで  
繋がっており両肘を机につき口元に両手を組んでいた。

「15年ぶりだな…碇」

白髪の老人は、「碇」とサングラスをかけた男性に問いかけた。

「ああ、間違いない…使徒だ。あらゆる手段をとったとしても、我々  
は使徒を倒さなくてはならない。冬月、サードチルドレンの所在地は  
？」

碇は、白髪の老人を「冬月」と呼びサードチルドレンの所在地を聞  
く。

この碇と言う男性は、「碇ゲンドウ」はネルフの指令でトップの存在  
である。隣にいる冬月は、「冬月コウゾウ」はゲンドウの一つ下であ  
る副司令に属している。

「サードチルドレンは、特別非常事態宣言により電車がストップして  
足止めされている。葛城君が、今迎えに行っている」  
「…そうか」

2人が話している間に、巨大な怪物である使徒と軍事との戦いがモ

ニターに映し出されていた。

☆☆☆☆☆☆

無人駅

『特別非常事態宣言が発令されました。住民の皆様は、速やかにシェルターへ避難して下さい』

警報と共に、女性のアナウンスが流れておりシンジは駅の改札出た所で欠伸をしながら公衆電話を探していた。

「ふあああ。：気がついたら電車が止まっていて、喧しい警報とアナウンスが流れて周りには誰もいない駅に自分一人とは：。しゃあない、連絡するしかあるまい。おっ？あった、あった」

シンジは、公衆電話を見つけ受話器を取りお金を投入して番号を入れたが：

『特別非常事態宣言発令時は、通常回線の使用は出来ません』

シンジは、受話器から聞こえるアナウンスに少し苛立つ。

「非常事態だから、使いたいのだが：。しゃあない、シェルターを探すか」

受話器を起き、シンジはシェルターを探しに街を歩き始めた。

☆☆☆☆☆☆

無人の街

非常事態宣言発令のため無人となった街を、一台の車が走り抜ける。

法定速度などお構いなしの猛スピードで。

「参ったわね〜。あの道路が通行止めになってるなんて」

運転席に座るサングラスを掛けた女性が、忌々しげに呟く。

（非常事態宣言で電車が止まったのなら、恐らくあの駅ね）

脳裏に素早く進行ルートを浮かべ、見事なハンドル捌きで車を操る。エンジンとタイヤが限界を訴えているが、女性は更にスピードを上げていく。

（結構ギリギリのタイミングか。不味いわね、もし間に合わなかったら……）

背筋がゾツとする想像に、女性の頬を冷や汗が伝う。

「お願いだから、動かないで待っててね」

祈るように呟きながら、急カーブを華麗なドリフトで突破する。

車内に強力な遠心力がかかり、助手席に置いてあった鞆から書類の束が零れた。その一番上にあるファイルの表紙には、黒い髪で前髪は癖っ毛で横髪は少し長め後ろ髪はストレートヘアで背中の肩甲骨まで伸びており、首の所で束ねている。顔つきは、幼そうな感じに中性的な男子？女子？とどちらとも通りそうな男の子写真が書類と一緒にクリップで止められていた。

優しそうな顔で男女問わず気を引く笑顔で映る碓シンジの写真があった。

★★★☆☆☆

その頃、シンジは。

後ろ髪が風に煽られ、夏の日差しが容赦なく道路を照らし砂漠とも思わせるほどに空気が歪んでみえる。

「あちい…。暑過ぎて、ジャーキーになりそうだし。何処を探してもシエルターは、見つからないし誰かに聞こうにも誰もいないし…。どうしろと…?」

学生服で、長袖のシャツが少し汗で皮膚にくっ付いてシンジは気を落としていた。

シンジは、誰もいない街を歩き続けながらズボンのポケットから一枚の写真を取り出す。

写っているのは美しい妙齡の女性。薄着で色っぽいポーズを決めている脇には、

『シンちゃん江。私が迎えに行くから待っててね♪』

手書きでシンジへのメッセージが書き加えられていた。

(葛城ミサトさんか…。綺麗な人だけど、ちよつと変な人かな)

左隅についたキスマークを見て、シンジは思わず苦笑する。

シンジの顔に微笑みを見せた瞬間、突然静かな街に爆音が響き渡り、振動が伝わってきた。

「…な、なんだ?」

ビククリしながらシンジは、音がした方へ視線を向ける。遠くにそびえる山々。その切れ間から、無骨な灰色の戦闘機が姿を現した。

だが、編隊を組んだ戦闘機は、何故か後方へ飛行を行っていた。

まるで、何かから距離を取ろうとするかのようにじわじわと後退していく。

「軍用の戦闘機…? でも、何かから距離を取りながら下がっている? だが、何から?」

シンジは、疑問に思っただけで戦闘機が出た山を見てみると巨大な怪物「使徒」が現れた。

細い四肢と盛り上がった肩。首は無いが胸についている仮面のようなものが、顔のようにも見える。全身が緑色のそれは人間に近い姿をした、しかし全く別の怪物だった。



「あらま…。世の中、何かがあるかわからないと言ったもんだが…。これはとりあえず…。逃げるに限る!!」

シンジは、手に持ったボストンバックを脇に抱えて使徒とは逆の方向に走り始める。

使徒から遠ざかる為に、逃げるシンジの後ろでは戦闘機と使徒との戦いが行っていた。数機の戦闘機が、凄まじい数のミサイルや機関銃を火を吹かせていたが使徒にはダメージは無かった。

「…あまり効いてなさそうだな、何か不可視の壁にでも遮られているのか？ おいつ!?! なんて、こつちに墜落すんだよ!」

走りながらシンジは、後ろを向きながら見ていたら使徒による攻撃で一機やられシンジの近くに落ちた。

落ちた戦闘機の風圧で、シンジは足を止め体を吹き飛ばされないように身を守った。

ブオツ!

使徒は落ちた戦闘機に追い打ちをかけるように、空を飛び戦闘機を踏み潰した。それにより、戦闘機から爆発が起きシンジに襲う。

「うわっ!」

シンジはボストンバックを盾にするように前に出し、目を閉じ身を小さくした。

爆風がシンジに襲いかかる所、一台の車がシンジを爆風から守るように割り込んできた。

(…………?)

いつまで経っても、爆風が来ないことにシンジは目を開けると目の前に車が一台シンジから守るように止まっていた。

車の運転席からドアが開き現れたのは、サングラスを掛けた、青い髪の女性だった。

「ごめくん、お待たせ!」

「か、葛城さん?」

「そう、早く乗って!」

使徒は、戦闘機を踏み潰し終わると再び行動し始めた。

それを見たシンジは、葛城に指示を出した。

「すみません、葛城さん！ 座席を倒してください！」

葛城は一瞬、シンジの言っている事に疑問が出たが助手席の窓見てみるとドアの前には使徒の足が存在していた。それ見た葛城の行動は早かった。

尽かさず座席を倒し、自分体を退かし人が通れる空間作る。それを見たシンジは、車に向かって走りボストンバックを抱えて身を小さくして車の中に飛んだ。

曲芸とも言わせる技で、シンジは車と葛城にはぶつからず助手席のドアに衝突する。

「くっ！」

シンジは痛みが走り、葛城は座席を直しドアを閉め使徒の足踏みから逃げるように車を出した。

急発進した車は、猛烈な加速で危険な場所から即離脱。背後で次々と戦闘機が撃墜していく中、そのまま速度を上げ続けて、無人の街を駆け抜けるのだった。

☆☆☆☆

ネルフ本部

「馬鹿な！ 全て直撃の筈だ！」

巨大なモニターには、あの怪物に雨霰と攻撃を仕掛ける戦闘機、戦車の姿。しかし、怪物は全く効いた様子を見せずに歩き続けている。

「こうなれば総力戦だ！ ありったけの兵力で奴を迎撃する」  
「出し惜しみは無しだ！」

三人の軍服姿の男達は、必死の思いで命令を下す。

そんな彼らから少し離れた場所に、2人は落ち着いた態度でモニ

ターを見つめている。

「……ATフィールドか」

「ああ、使徒に対して通常攻撃では役にたたんよ」

冬月に、ゲンドウが答える。その間にも、モニターでは次々に増援と思われる戦闘機が姿を現す。

「おやおや、結構な戦力を投入するものだ」

「……精々時間稼ぎをしてもらうさ」

机に肘をつき、組んだ手で口元を隠すゲンドウ。隠されたその口は、ニヤリと嫌らしい笑みが浮かんでいた。

怪物へ容赦ない攻撃が続き、しかし効果はない。そんな光景を繰り返している、不意に軍服達の元に一本の電話が入った。

「はい……はい……分かりました」

一人の男がそれを受け、やがて苦渋に満ちた表情で受話器を置いた。

「やはり、あれしか無いか？」

「ああ。許可は下りた」

「周辺の部隊を下がらせる。巻き添えをくうぞ」

軍服の男達は、覚悟を決めた顔でモニターを睨み付けるのだった。

★★★☆☆

無人の街から外れた場所

「あれっ？」

助手席の窓から外を眺めていたシンジが、異変に気づく。

「どうしたの？」

葛城は、運転しながらシンジに問いかける。

「戦闘機が、化け物から逃げるようにしてるんで……」

「なんですって!?!」

葛城は急ブレーキを掛けて車を強引に停止させると、大急ぎで懐からオペラグラスを取りだし、助手席の窓を全開にして、食い入るように外を覗いた。

状況を察したのか、オペラグラスを持つ手が震え、表情もみるみる青ざめていく。

「まさか、N2地雷を使うわけ!?!」

「地雷? ……爆弾!?!?」

「やばい、シンちゃん伏せて!」

葛城はシンジを覆い被せるように身を伏せた。

その瞬間、鼓膜が破裂するんじゃないかぐらいの爆発音が鳴り響き無人の街は消し飛ばされていた。

少し遅れた時間差で、無人の街から離れたシンジ達が乗った車に爆風が襲った。

★★☆☆☆☆

ネルフ本部

灼熱地獄。正にそんな言葉が相応しい光景だった。先程まで怪物が居た場所には巨大なクレーターが形成され、爆煙と共に凄まじい熱が充満している。

「ふははは、勝った」

「N2地雷にはあの化け物も耐えられなかったな」

爆発の余波の影響で映像が途絶えたスクリーンを見て、軍服の男性達は勝利を確信する。

「残念ながら、君達の出番は無かったようだよ」

軍服の一人が、離れて見ていた男性二人に向けて、嫌みの籠もった台詞を突きつける。

だが、現実には甘く無かった。

「映像回復します。」

オペレーターの報告と共に、再び映像が映し出された巨大スクリーンを見て、彼らは絶句する。

真っ赤に燃えるクレーターの中心に、緑の怪物は立っていた。多少のダメージはあったのだろう。しかし、致命的にはほど遠く、払った犠牲には到底釣り合わぬ結果だった。

「化け物め……」

「街を一つ犠牲にしたんだぞ！」

忌々しげに拳を机に叩き付ける軍服の男性。犠牲を覚悟してまで投じた切り札が、怪物に通用しない。

もはや彼らに打つ手は無かった。

「……はい、分かりました」

軍服の一人が受話器を置くと、離れてみている二人の男性へと向き直る。

「現時刻を持って、本作戦の指揮権は君に移った。お手並みを拝見させて貰おう」

「了解です」

ゲンドウがスツと立ち上がる。

「碓君。我々の兵器が奴に通用しないのは認めよう。だが、君達なら勝てるのかね？」

「ご安心下さい」

ゲンドウはサングラスを軽くかけ直し、

「その為のネルフです。」

自信に満ちた声で答えた。

## 戦闘準備

「よつこら、しよつとー!」

ドスンッ

シンジはひっくり返ったルノーを、横に転がし元の状態を戻す。

N2地雷の爆風により、シンジ達は起爆する前に止めた場所から2〜30メートル離れた場所まで吹き飛ばされていた。

「いや、シンちゃんてば力持ちなのね。見た目とは違うわね。」

ミサトは、シンジがひっくり返ったルノーを一人で直している所をみてビツクリしていた。

「まあ、体の使い方で重たい物を動かしただけです。簡単に言うなら…古武術的な。最大限の力を出し方があるのでそれを使ったんです。」

シンジは、ルノーを起こす為に汚れた手をはたく。

「まあ、これで本部に行けるわ。自己紹介がまだね、葛城ミサトよ。時間も無いしね。ごめんね、任せちゃって。」

「いいですよ。美人のミサトさんに、汚れて欲しく無いだけだったんです。」

笑顔でシンジはミサトに答えると、ミサトは少し頬染める。

「口が上手いわね、シンちゃん。そんなに煽っても何も出ないわよ。」

(この子、意識して言ってるのかしら?とでも14歳とは思えないわね…外見も中身も。)

ミサトはそう思いながら、ルノーの運転席に座りエンジンをかける。

プスン

そんな気の抜けた音がルノーから鳴り響く。

「ちよつ!?エンジンがかからないじゃないのよ!マジで、勘弁なんだけどー!」

エンジンが掛からないことに、ミサトは涙目になりパニック状態になる。それを見て、シンジは苦笑しながら周りを見渡していた。

「どうしよう、どうしよう…。これじゃあ、シンちゃんを本部まで送れないじゃない…。リツコに頼むしか…。でも、これじゃあ命令違反になるしボーナスカットが考えられるし。まだ買ったばかりのルノーの3回のローンも修理費もあるし、しかも今日おろしたばかりの服も高かったのに。ああ、なんでこんな事に…。」

ミサトは、ルノーの運転席で呪詛を唱えるように誰が見ても落ち込んでいる状態だった。

その頃、シンジはミサトから離れて車を探していた。先ほどの爆風で数台の車が吹き飛ばされておろし、廃車当然の姿で転がっていた。

それを見つけてシンジは、廃車に近寄り袖を腕まくりをして作業しはじめた。

今だに落ち込んでいるミサト

「いや、ホントどうしようかしら。冗談抜きに、早く本部に行かなくちゃいけないのに！」

頭を抱えながら悶えるミサト。

「ミサトさくくん！」

思考の渦に入っていたミサトは、シンジの声により意識が戻る。消沈した感じを滲みだしながら運転席から降りる。

「どうしたの？悪いんだけど、今この打破を考えてる…。…よ!?!」

ミサトはシンジの方を見て仰天していた。

シンジは、両肩に車のバッテリーを担ぎポストンバックにケーブルや部品が開け口からはみ出るほどの量が入っていた。

「ミサトさん、これ使えばルノーも動くんじゃないですか？」

シンジはミサトの前に、廃車からかき集めたケーブルや部品の入ったポストンバックにバッテリーを置く。その瞬間、シンジは目の前が真っ暗になる。

「わぷっ!?!」

「シンちゃん！あなた、天才よ！これで本部に行けるわ！」

「もが、ふぐー！ふぐー!?!」

(い、息が！息が!?)

ミサトに抱きしめられるシンジは、ミサトの豊満な胸に顔を押しえつけられ呼吸が出来ていなかった。歓喜に満ち溢れるミサトは、そんな状態のシンジには気づかず抱きしめ続けていた。

Q.

人間は、呼吸をしないとどうなってしまうですか？

A.

気絶のち死亡w

柔らかな胸の感触に包まれながら、呼吸の出来ない苦痛で天国と地獄の経験をしてシンジは気絶をした。

「あ、あれ？シンちゃん？シンちゃん!？」

気絶したシンジに気づいたミサトは、またパニック状態になる事になる。

それから数十分後

「いや、色々ありながら此処までこれてよかったわ。ははは…」

力の無い笑を作るミサト。その後、シンジは気を取り戻して2人でルノーを直して無事に第3新東京市に辿りついた。ルノーは、トンネル入り停止位置に止まる。

「僕も思いもありませんでしたね。気絶させられるとは…。」

シンジはムスツとしながら、助手席の窓から外を見ていた。

「ごめん、気を悪くしないで。後で何か買ってあげるから。」

「別にいいですよ。言い方が悪いですが、女性の胸に触れたことなんで。」

「まっ、シンちゃんのエッチ。」

ミサトは胸を隠し恥ずかしそうにする。シンジはミサトの茶化しを無視している所、ルノーは施設の機械により運ばれていた。

ミサトは思い出したように、バックからパンフレットを取り出しシンジに渡す。

「はい、これ。読んでいてね。」

「特務機関ネルフ?」



「そう、国連直属の非公開組織…。私もそこに所属してるの。ま、国際公務員てやつね。あなたのお父さんと同じよ…」

「そうですか…。」

「どうしたの？気にならない？お父さんの仕事は。」

「これから其処に行くんでしょ？その時にでも、説明されるので。」

「意外にドライね、シンちゃん…。」

「そうですか？」

ルノーはモノレールで運ばれてトンネルから抜けた。シンジは、トンネルから抜けた光景に唾然した。

「…これは!?!すごい！本物のジオフロントだ。」

「そう、これが私たちの秘密基地。ネルフ本部よ。人類の砦となるところよ。」

ドーム型の地下施設があり、天井にはビルが生えており下には自然豊かと思わせるほどに緑が並ぶ。中央には、ピラミッドの形をした建造物が立っており上の方にロゴマークが書かれていた。

楓の葉を半分に、「NERV」とかかれていた。

2人を乗せたルノーは、ネルフ本部に繋がれたレールに導かれるように運ばれていた。

場所は変わり発令所

「UNも、ご退散か…。」

「……………」

冬月はポツリと呟く。ゲンドウは座りながら無言。

「碇司令、どうなさるおつもりです。」

金髪の左頬にはホクロがあり、白衣を着た科学者と思わせる女性はゲンドウに聞く。

ゲンドウは、立ち上がり少し顔に笑みを浮かべる。

「初号機を起動させる。」

ゲンドウの言葉に、金髪の女性は仰天する。

「そんなっ!!無理です、パイロットがいません!」

「レイにはもう…問題ない。」

ゲンドウは、施設の廊下を歩く2人を映す画面を見ながら言う。  
「たった今、予備が届いた。」

ネルフ本部内

「ミサトさん。」

「なーに？」

シンジはミサトの追う形で歩いている。葛城は、本部の地図を見ながら返事をした。

「ミサトさん、分からないならあっちですよ。」

シンジは歩いてきた反対の方に指を指す。それを聞いた葛城は肩を震わせる。

「えっ?」

「先ほど少し見せて貰いましたが、その地図に書いてある印に行くんですしたら。通り過ぎてますよ。」

ミサトは止まりシンジも止まる。振り返った葛城の顔は、困り顔でシンジに言った。

「ごめん!そこまで教えて。」

「はあく。」

両手を合わせて頭を下ろすミサト。溜息を漏らすシンジ。第三者視点なら残念な光景に間違いないだろう。

シンジに先頭で歩き、数十分。前から金髪の白衣を着た女性が歩いてくる。

「葛城一尉、何故あなたが案内されてるのよ。」

「り、リツコ…」

呆れた顔してリツコと言う女性は、シンジの存在に気を向ける。

「その子ね、例の三人目の適任者(サードチルドレン)って…」

「始めまして、碇シンジです。好きな物は柔らかい物と可愛い物です。今後とも、よろしくお願い申し上げます。」

リツコにシンジは、笑顔でお辞儀をして自己紹介をする。

「なんか物凄く好印象な子ね。」

「そうよ、あの髭とは違うわよ。」

何故か葛城が胸を張りシンジを褒める。シンジは褒められて照れる。

「何でミサトが威張るのよ、あと今の言葉は聞かなかった事にするわ。シンジ君、私は技術一課E計画担当博士。赤木リツコ、よろしく。」  
(この子、あの人を幼くして髪を伸ばした感じね。なんか…猫っぽい感じが可愛いわね。男の子とも女の子とも見えるけど。)

赤木リツコは、無類の猫好きでありシンジの見た目と最初の年上の態度が良く、リツコでのシンジの印象は良かった。

「いらつしやい、シンジ君。お父さんに会わせる前に見せたいものがあるの…。」

「見せたいもの…?ですか、赤木さん。」

リツコに案内されシンジとミサトは後に続く。

発令所

巨大なモニターが、使徒が山の中を歩く姿が映していた。

「司令!!使徒前進!強羅最終防衛戦を突破!!進行ベクトル5度修正、なおも進行中!予想目的地、我第3新東京市!!」

オペレーターが、ゲンドウに現状報告を知らせていた。それを聞いたゲンドウは指示を飛ばす。

「よし、総員第一種戦闘配置だ。」

「はっ!」

「冬月…後を頼む。」

「ああ。」

ゲンドウはその場から離れる。その後ろ姿を見ていた冬月。

(3年ぶりの息子との対面か…。後で顔を出しに行くか。)

その頃のシンジ

「総員第一種戦闘配置。くり返す、総員第一種戦闘配置」

警報機がなり、放送が流れている所にシンジはモーターボートに乗っていた。その水は赤くシンジは少し驚いていた。

「対地迎撃戦、初号機起動用意！」

それを聞いたミスアトは驚く。

「ちよつと、どういうこと？」

リツコはモーターボートを発進させる。

「初号機はB型装備のまま、現在冷却中！いつでも起動できるわ。」

「そうじゃなくって、レイにはもう無理なんじゃないの？パイロットは、どうすんのよっ！」

そんな2人の会話を聞いていたシンジは、色々と考えていた。

（まあ完全に把握はしてないが、さっきの奴と戦えとの事か。俺が…。その初号機とやらで。はあ…、気が進まないな。）

シンジは、先の予想しながら気を落としていた。

モーターボートは水上に走りミスアトとリツコはまだ会話していた。

「それで、N2地雷は使徒に聞かなかつたの？」

「ええ…。表層部にしかダメージないわ、依然進行中よ。」

「やはりATフィールドをもってるみたいね。」

「おまけに学習能力もちゃんとあつて外部からの遠隔操作ではなく、プログラムによって動作する一種の知的巨大生命体とMAGIシステムは分析してるわ。」

2人の会話についていけずすれ違う光景を見ていたシンジは、壁から巨大な手が貫かれて停止している所を見て驚いた。

（!?何あれ！手？手?!HAND?そして2人の話が何じやらホイホイ!?ゴキブリホイホイ!）

2人がシリアスな話をしている所を、そんな思考をとれるシンジは意外に大物かもしれない。

「それって。」

「そう…エヴァといっしょ…。」

水上を走り数分モーターボートは目的地につき、リツコはモーターボートを足場の横に止める。

「着いたわ、降りて。ここよ。」

シンジはリツコに従い、モーターボートから降りる。リツコに案内され、その場所は扉から入る光以外が闇であった。

「暗いから、気をつけて。」

ある程度シンジが暗い空間に進んでいるのを見てリツコは光をつける。

シンジは暗闇から、突然の光に目が眩むが慣れてくると目の前に顔があった。

「!…顔…?…ロボット?」

鬼のような角があり、鋭い目があり、金属を紫でコーティングされているロボットの顔がそこにあった。

「厳密に言うならロボットじゃないわ、人の作り出した究極の汎用決戦兵器! 人造人間エヴァンゲリオン。我々人類、最後の切り札。これはその初号機よ……。」

シンジは、エヴァの顔見て少し違和感があった。

(…あれ?…なんか、初めて見たのに何か懐かしい感じが…。  
?????、なん  
だっけ?)

シンジは何かデジャブらしき感覚に混乱していた。普通、鬼の様な顔を持つロボットに懐かしさがあれば人は混乱するであろう。

「よく来たな。」

いきなりロボットの顔の上から声が聞こえ、シンジは聞こえた方に顔を向ける。そこにシンジの父親であるゲンドウが、高い場所でシンジを見下ろすようにたっていた。

「久しぶりだな、シンジ。」

「お父さん…?」

(…本当にユイに似ているな…)

(久しぶりだね…)

「…出撃。」

ゲンドウは小さくそう告げた。

「出撃!?…出撃って、零号機は凍結中でしょ?」

驚くミサトは、リツコに慌てながら声をあげる。

「まさか、初号機を使う気!？」

「他に道はないわ。」

リツコは冷静に答える。

「でもパイロットが居ないじゃない。レイは安静にしなければいけないし…」

「ここに居るわ。」

リツコはシンジの方を見る。その視線を感じてシンジもリツコと目を合わせる。

「碓シンジ君。」

「はい?。」

「あなたに、この初号機に乗ってもらいたいの。」

リツコは、真剣な眼差しでシンジにお願いをした。それをうけたシンジは、小さく溜息ついてゲンドウの方に視線を向ける。

「ちよつと待って。幾らなんでも無理よ。あの綾波レイでさえ、エヴァとのシンクロに7ヶ月掛かったんですよ?この子は今日来て、エヴァを初めて今知ったのよ?。」

「座って良いわ、それ以上は望みません。」

「だからって…」

ミサトはリツコに冷静に言われ言葉を詰まらせる。今日初めて来たばかりの少年に、戦場に出て命を落とすかも知れない事をさせようとしているのだから。

それを思ったミサトは、それしか手段しか無くエヴァに乗せて戦わせる自分と否定的な自分との間で揺れていた。そして父親を見上げるシンジに視線を向ける。

「…ねえ、お父さん。」

「…なんだ。」

シンジは、ゲンドウに話しかけるが両者の間では親子とは思いにくい空気がただよっていた。

「幾つか聞くけど、俺を呼んだのはこれに乗れと?。」

「…ああ。」

「俺を預けたのはこれの為?。」

「そうだ。」

「これに乗れる奴は居ないの？俺以外。」

「いるが今は乗れない。」

「そして、俺が今乗らないとその子が乗ると。何かの事情で乗れないの…」

「その通りだ。今、お前が乗らなければな。もういいだろう、質問に答えた。乗るなら乗れ。でなければ帰れ…」

ゲンドウの言葉は、ゲージの空間に小さく響きそこにいる作業員達やミサトとリツコにも耳に響いた。シンジ以外の人間の視線を身体全体で受けるシンジ。

その時、初号機のゲージ内が地震が起きた様に揺れる。

「奴め、ここに気づいたか…」

上を見ながらゲンドウは呟く。

### 第3新東京市

使徒は山中歩き続け、国連軍の攻撃をうけながら第3新東京市に到達する。

目の前に街が見えた使徒は、仮面と思わせる顔の目から怪光線を放つ。街の真ん中に着弾した瞬間、十字架立たせる爆発が起きる。

使徒は、これでもかど何発も目を光らせ怪光線打ち続けた。幾度も攻撃を食らった第3新東京市の下、ジオフロントまで爆発が届く。

ジオフロントの天井に生えていたビルは爆発により崩れ、ネルフ本部の近くに落ちる。

### 初号機ゲージ

ビルがネルフ本部に落ちた為に衝撃が、ゲージまで届き物凄い勢いで揺れる。リツコは立って居られず尻餅をつき、ミサトはその場で座り込み揺れに耐えていた。

ゲージの天井の大型の蛍光灯が、揺れにより外れ落下点がシンジが

居る場所だった。シンジは、揺れに耐えて立っていたが、蛍光灯が外れた音が聞こえて上を向くと蛍光灯が降ってくるのを微動だにせずにジッと見ていた。

「あぶない!!避けて!!」

ミサトはシンジに向かって叫ぶ。だが、シンジは動かずその場にいる人間は最悪な想像が浮かんだ。

ザッバア

ゲージの赤い液体のプールから紫の巨大な手が現れる。

そしてその巨大な手はシンジを守る様に落ちる蛍光灯を手の甲で受ける。その手は初号機の物であった。

『どう言うことだ!?拘束具を引きちぎっています!!』

作業員達は驚きゲンドウは、初号機の手に弾かれた蛍光灯が自分の方に飛んで来てゲンドウの前にある強化ガラスにぶつかると。

その時のゲンドウは、余裕の笑みを浮かべていた。

「エントリープラグも挿入してもいないのに、エヴァが動くはずないわ!」

「インターフェイスも無しに反応した?と言うかエヴァは彼を守ったの...?...いける!」

リツコは、ヒステリックを起こした様に計算上あり得ない事が起きた事に声を荒げる。

ミサトは希望が見えたのか、拳を握る。

(俺を守ってくれたのか?こいつが、俺を...?やっぱりこいつ、何か俺と関係性が...)

シンジは、覆いかぶさるように停止した初号機の手を見上げ後初号機の顔を見る。そして、シンジは決断した。

「お父さん。」

「何だ...」

「俺、乗るよ。こいつに...」

「そうか...」

ゲンドウは優しく微笑みを持ちシンジを見下ろしていた。シンジはリツコの方に近づく。



「大丈夫ですか？」

シンジはリツコを、優しく身体を立たせる。

「あ、ありがとうございます。シンジ君。」

「いえ。」

その後、ミサトの方に歩き近づき手を差し出す。

「ミサトさん、立てますか？」

(本当に良い子ね、シンジ君。14歳とは思えない紳士ね。)

(シンちゃんはいつか、女泣かせになりそうね。あいつとは違う感じ  
で…)

そんなリツコとミサトの心の声であった。

「ええ、大丈夫よ。でも、よかったの？」

ミサトはシンジの手に引かれ、立ち上がりシンジに聞いた。

「まあ、その為に呼ばれたんですから…乗るしかない選択肢しかない  
でしょ。俺が逃げればもう一人の子が乗る羽目に合う。乗れない理  
由は、怪我してるとかの事でしょうね。それだったら、自分が乗りま  
すよ。」

シンジは諦めた様に言う。

「あと、ミサトさん。お願いがあります。」

「ん？何かしら。」

「胸を貸してください…。」

シンジは、赤面しながら小さな声でミサトにお願いをした。

「えっ!?シンちゃん、あな、た…。」

ミサトは、最初セクハラまがいなお願いに驚くがシンジの身体を見  
て気づく。近くにいるミサトぐらいしか分からないほどであるが、シ  
ンジは身体を震わせていた。

(早熟なシンちゃんでも、流石に怖いか…命を掛けて戦場に立つんだ  
から、人の温もりを貰って落ち着かせようとしている。恥ずかしい思  
いをしながら。そんな私は…)

手を広げ受け入れられる体制に構えるミサト。

「ばっちきなさい！シンちゃん！」

2人の周りにいる人間達は驚いていた。2人の会話を聞こえてい

ない所為で、何が何だか意味が分からず呆然していた。

シンジは、余所余所しく元々小さい体が羞恥心の為か心なし小さく見えた。だが、小動物みたくミサトに近寄りシンジは抱きついた。

((か、可愛い…))

ゲージ内にいる全員が同じ考えだった。

それから数秒すぎた所でシンジはミサトから離れる。

「ありがとうございます、ミサトさん。元気でました。」

「いいのよ、シンちゃん。頑張つてね。」

「はい。」

笑顔でシンジは礼を言う。

「では、シンジ君。簡単な操縦方法を教えるわ、着いてきて。」

「わかりました、リツコさん。じゃあね、お父さん。」

シンジは、ゲンドウにそう言い残しゲージを後にした。

口元に笑みを浮かべゲンドウはゲージから離れる。その時、ゲンドウは小さく呟く。

「シナリオ通りだ…頑張れよ、シンジ。」

その言葉は誰にも届かなかった。

エヴァは、パイロットが乗る為のコックピットがエントリープラグと言われる円柱状である物に乗ってからエヴァに乗り込める。

エントリープラグを、エヴァの首の後ろから挿入し脊髄として役目を果たしている。

シンジはリツコから、簡単な説明を受けエントリープラグの細く狭い中にマッサージチェアに近い椅子に座り両手にはレバーを握ってシンジは指示を待っていた。

『パイロット搭乗確認。』

『エントリープラグ挿入準備。』

プラグ内でシンジは、忙しく鳴り響くアナウンスを聞きながら目を閉じていた。

## 発令所

「シンジ君、意外に肝が据わつるのかしら。」

リツコは、モニターに映るシンジを見ながら呟いた。それに対して腕を組みながらミサトは言う。

「そんなわけないでしょ、リツコ。シンちゃんは閉じ込めてるだけよ、恐怖をね。あの子物わかりが良くて人に気を使える良い子なんだけど、自分を晒さないようにしてるのよ。」

そんな2人の会話をしている間にも、周りは作業を進んでいた。

エヴァンゲリオン初号機はスタンバイ完了すると、シンジを乗せたエントリープラグはエヴァの首の後ろまで運ばれる。

『エントリープラグ固定完了。』

アナウンスと共に、シンジが入ったエントリープラグはエヴァの首筋に挿入されエントリープラグが全部入ると装甲が閉じる。

「エントリープラグ挿入完了、LCL注水開始。」

リツコの近くにいる短髪の女性、伊吹マヤはキーボードを操作するとシンジの入ったエントリープラグ内に黄色の液体が流れ込まれる。足元から液体が満ちていき、目を閉じていたシンジは焦っていた。

「ちよっ!?なんですか、これ!ストップ、ストップ!あー!……:……:……:」

シンジは停止をお願いするが、顔より上まで液体が流れ込まれ息を止めて目をパチクリさせていた。

「大丈夫よ、シンジ君。その液体は、LCLと言って肺に入れると自動に酸素が供給されるわ。最初は慣れないでしょうけど我慢してね。」

リツコに説明されて息を止めていたシンジは、酸素を吐き出しLCLを取り込んだ。しかし、シンジは顔を顰める。

「口がザク口になった時の味がする……。」

そんなシンジが言っている間にも、エヴァの起動準備は進む。リツコは、エヴァの起動プロセスを開始させる。

エヴァンゲリオンは他の兵器とは異なり、例で言えば銃は的を狙い

引き金を引けば銃としての役割は果たされる。しかし、エヴァンゲリオンの場合は中身が人工肉で作られた人造人間であり、パイロットと神経をシンクロをさせて始めて動かせる。

(……………液体の中で呼吸が出来るのって、なんか違和感だな…。魚にでもなった気分……。……………気持ち悪いな。)

LCLによって液体の中でも呼吸ができるのだが、普通は日常の中で人間は大気の中にある酸素吸って生きている。液体の中で、呼吸ができたとしても違和感がありLCLに血に近い匂いがある所為かシンジの口と鼻にダイレクトに刺激させた。

シンジは生臭い感じに耐え再び目を閉じる。

「第2次コンタクト開始。」

「インターフェイス接続開始。」

「A10神経接続問題無し。」

「LCL電化状態正常。」

「初期コンタクト全て問題無し。」

次々に起動プロセスを終えて初号機の目に光が灯る。その中で、シンジは奇妙な体験をしていた。

(あれ？俺今、確かに目を瞑ってるのに外が見える…。…なんだこれ？目を開けても外の視界が消えない。目の前の視界ともう一つの視界？)

今シンジの状態は、本人の目で見えるエントリープラグの中とエヴァ初号機の目で見える格納庫の視界が見えていた。

例えば、顔の真ん中に壁を作り両目の視界を分断する。右目で見える視界と左目で見える視界と別れ、右目に海の景色左目に山の景色を見せるような状態が、本人の両目でエントリープラグの中が見えて頭の中ではエヴァ初号機の目に見える格納庫が見えていた。

(うわ…。気持ち悪い…。)

人間は目で見た物は脳で処理して判断し目の前を理解する。しかし、目で見た情報は僅か2%ほどに対して脳は約98%思い込みと言われている。今のシンジの場合は、本来人間は一つの視界を脳で処理

するはずなのだがエヴァの視界も増え、脳の処理が負荷を掛けてしま  
い一種の酔った状態になっていた。

「コミュニケーション回線開きます…。シンクロ率…!」  
「どうしたの、マヤ?」

突然マヤが黙ってしまった所を、リツコが聞くとマヤはリツコの方  
を向き驚愕した顔をしていた。

「シンクロ率…92.8%で…す。」  
「なんですって!?!」

余りの数字を聞いたリツコは声を上げる。それもその筈、エヴァは  
パイロットとシンクロして動く兵器である。エヴァとパイロットの  
シンクロ率が高くなるほど滑らかで正確な動きができる。だが、低い  
シンクロ率だとギクシャクした動きになる。そして、30%以下のシ  
ンクロ率になるとエヴァは動かない。

しかし、2人が驚いた理由は今日来て初めてエヴァに乗る少年が1  
00%に近いシンクロ率を出したのだから。

「あり得ないわ、プラグスーツの補助無しで。この数字は…」

「でも、使徒を倒せる勝率は高くなるわ。リツコ、これは喜ぶ所よ。」  
リツコが驚愕している所に、ミサトは喜んでいた。ミサトの言葉で  
幾分か冷静さを取り戻すリツコ。

「そうね、大事なのは使徒殲滅だったわ。」

エヴァ初号機は射出カタパルトに運ばれる。カタパルトがレール  
に嵌まると、ピツと機械音がなり出撃の準備が整う。

ミサトは振り返りゲンドウの方を見る。

「碇司令、宜しいですね?」

「勿論だ、使徒を倒さぬ限り我々の未来はない。」

威厳に満ちたゲンドウの後ろに立つ冬月が尋ねる。

「本当にいいんだな?」

冬月の言葉を聞くと、手で隠した口元が釣り上がる。

「エヴァ初号機、発進!」

ミサトは力強く発進命令を下す。

エヴァ初号機はカタパルトに固定されたまま、地上に向かうレール

に運ばれる。その時、シンジは強烈なGを耐える為目を閉じ歯を食いしぼる。レールは終点の地上に着き、エヴァ初号機は開かれた射出口から姿を表す。

「あいつ…。」

二つの視界で、日が落ちて暗闇に染まる街に佇む黒く緑が混じった怪物の使徒がエヴァ初号機の前に存在していた。

夜、暗闇の中で対峙するエヴァと使徒。

人類の存亡をかけた戦いの幕が上がる。

新しい未来の為に…。

闇

夜、第3新東京市で暗闇の中に2体の巨人が対峙している。

一体は紫で金属で包まれた鬼のような巨人。

一体は黒く緑が混じり胸に紅く光る水晶のような玉を持ち二つの顔を持つ巨人。

今、人類と使徒での戦いが幕が上がった。

『良いわね、シンジ君！』

「はい！いつでもどうぞ！」

『最終安全装置解除!!？エヴァンゲリオン初号機、リフト・オフ！』

ミサトの号令で、初号機の肩の装甲を支えていた輸送台兼拘束具がレール解除された。固定されていた肩と腕のパーツが外されて、自由になった初号機は猫背気味に自立する。

(頑張るのよ、シンジ君…)

対峙する2体の中、シンジはエントリープラグの中で思考を走らせる。

(とりあえずは、コイツを動かしてアイツを倒さなくちゃ行けないわけだが…。不思議な事に身体に少し重りが乗った感じするな。ましてや、風なのか肌に感触があるんだよな。)

「すみません、リッコさん！コイツはどうしたら動くんですか？両手のレバーだけで、動かせなんて言いませんよね？」

シンジはエヴァ初号機の操縦方法まで詳しく聞けなかったので即時にリッコに聞く。

『エヴァはパイロットの思考。即ち、シンジ君の考えた通りに動いてくれるわ。レバーは、パイロットの思考との補助なのよ。意識を集中して行動を考えるだけなの。』

エヴァの操縦は、エントリープラグに乗せたパイロットをエヴァに寄生させて一心同体に近い物で操縦する兵器である。

「理解しました。」

シンジは、本人の目でエヴァ初号機の右手がある方に見て頭の中で顔の目の前まで持って来て手を握る開くと考える。

その時、エヴァ初号機はシンジが考えた通りに右手を顔の目の前まで持って来て握る開くと言う行動を起こした。

『やった！』

『動いてる！行けるわ！』

エントリープラグ内でミサトとリツコの声が鳴り響くがシンジは気にせず、エヴァンゲリオンとしての操縦を少しづつ理解していく。(要するに自分の体を動かすのは反射で…コイツを動かすには思考つてわけか。)

その時にエヴァ初号機が動くのを見て使徒は、左手を上げエヴァ初号機に突き出す様に構えを取る。シンジは使徒の動きを見て警戒する。

そして使徒の左腕の肘から伸びる針が光始める。

「まさか！」

シンジは無意識だが、危機を感じて体をその場から離れるイメージを頭の中で思い浮かべていた。

3本指の間である手の平にある穴から、光の槍が飛び出した。だが、エヴァ初号機を狙った光の槍はシンジの無意識による回避でそこにはおらず使徒の攻撃は外れる。

エヴァ初号機は左に避けたが、回避と言う行動だけで動きその後の動きをシンジは考えておらず倒れる事になった。

ドガアッ！

エヴァ初号機が転倒した為に、街に凄まじい音が鳴り響く。

「いってえ〜…：…そうか、『避ける』だけを考えてたから避けただけで転けたのか…。くそっ！やりづらいし、酔いで気持ち悪いし、痛いし嫌な事が三拍子もあるな。」

(今の攻撃、あの時見てなかったら確実に串刺しだな…。)

頭を抱えながら愚痴を漏らすシンジ。

『シンジ君！逃げて！』



ミサトの声で意識が戻ると、目の前には使徒が立っていた。使徒は左手でエヴァ初号機を捕まえようとする。

「くっ！」

尽かさず行動を思考を走らせる。シンジは、エヴァ初号機を動かして使徒の左手から逃げる様に転がりその場から離れ立ち上がる。

（少しずつだが、動かし方は慣れてきてコイツを思った通りに動かせるが…。如何せん、目を開けても閉じても視界が無くならないから酔った…。オエツ…。）

今のシンジは、例えるとクオリティが高いゲームでTPSやFPSと言った視点になっていた。自分の目で、仮想の景色を見て脳が処理をしよう言う物かを理解する。

人それぞれだが、このTPSやFPSが苦手な人もいるだろう。ゲームをやっている筈なのに乗り物酔いが酷い状態になる。単純に脳の処理が間に合わず、実際にエヴァ初号機の中で戦っている為エントリープラグ内が揺れ三半規管を刺激し酔いがシンジを責め立てる。

自動車に乗りながらTPS・FPSのようなゲームやったら大半の人は酔うであろう。

（さて、アイツはどうしたら倒せるか？このままじゃあ、ジリ貧だな間違いない。出来れば街から、離れて倒したいな。ここだと建物があつて、邪魔で動き辛い！）

「ミサトさん！街から離れて民家や建造物が無い場所って有りませんか!?!？」

シンジは、使徒から距離を取りながらミサトに聞いた。

『シンジ君、もしかして使徒を街から離す気？そんな無茶しなくていいのよ、そこで戦いなさい。そこなら倒せなくても援護出来るわ。』

「それもあるでしょうけど、実際に動き辛いし街を壊したく無いんです。だから…！」

ミサトと会話をしながら使徒から距離を取り続けたがエヴァ初号機の足元に車が止まっており、それを左足で踏んでしまい車が爆発してエヴァ初号機はバランスを崩す。

（マズイ!!??）

その瞬間を待っていたのか、使徒は顔の仮面の目が光り怪光線を打ち出す。その時のエヴァ初号機は、バランスが崩れており躲す事も出来ず右上腕部に被弾する。

「ぐああああああっ！」

エヴァ初号機からのフィードバックによる凄まじい痛みが襲い声上がる。被弾した勢いでエヴァ初号機は、横に回転して顔を建物に突っ込む形で倒れる。

ドガシヤツ

ズズーン

『シンジ君！大丈夫！？日向君、ダメージは!?』

『右上腕部、中度！パイロット、脳震盪発生!!?』

意識が途切れそうなシンジは、耳に人の声は聞こえていたが内容まで聞き取れない状態であった。動かないエヴァ初号機を見て、使徒は素早く飛び上がりエヴァ初号機の近くに着地する。

『シンジ君！しっかりして！早くっ！早く起き上がるのよっ!!?』

無常にもミサトの声は、シンジの耳には入らず意識朦朧だった。使徒は左手を振り上げるとエヴァ初号機の顔を3本指で掴む。

「ぐあっ！」

倒れた所から無理矢理左手1本で持ち上げられ、シンジは声を上げる。使徒は余った右手を、持ち上げられ使徒の左手からぶら下がる状態であるエヴァ初号機の左腕を掴む。

「あぐっ!??」

凄まじい力で左腕掴まれとシンジはもう、意識朦朧中では声を上げるだけの人形に化していた。

そんなのをお構いなしに、使徒は突如細い両腕がパンプアップしたように膨張すると引きちぎろうと考えたのか。使徒は、両手を広げて引っ張り始めた。

バチイッ

「ぎゃああああああああああああっ!!」

エヴァ初号機は左腕が引きちぎられるほどの力を加えられ人工肉である左腕から色々と切れた音が生々しく街に響く。

発令所でエヴァ初号機と使徒との戦闘をモニターで見ながら、少年の悲鳴を聞く人間達は顔を歪めていた。それもその筈、14歳の少年に戦わせ自分達は見ていただけで少年の悲鳴を聞いているのだから。使徒の猛攻は止まらず、掴んでいた左腕を3本指で握り潰した。折れたエヴァ初号機の左腕は、ひしゃげた。

「左腕損傷！回路断線！」

マヤはエヴァ初号機の状態を声に出す。

『ああああああつ』

発令所ではエントリープラグ内で痛み悶えるシンジの声が鳴り響く。

「なんとかしてよつ、リツコ！これじゃ、まともに戦えないじゃ無い！」

ミサトは、余りの光景とシンジの悲鳴で心を締め付けていた。

(こんなの有りないわ、まさか…)

リツコは何か気づくとマヤの方に近寄る。

「シンクロ度数が、変動しているとしても言うのっ!!神経回路のフィードバック側のレギュレーターレベルを一桁下げられる!?マヤ！」

「はいっ！やってみます！」

リツコはマヤに指示を送り、マヤは尽かさずキーボードを打ち込む。

その中、使徒はエヴァ初号機から動きが見られず折れた左腕から右手を離しエヴァ初号機を持つ左腕はより一層持ち上げる。

肘から伸びた棘と左手の手の平から光を灯した。それを見たミサトは叫んだ。

「いけないっ！シンジ君、避けて!!？」

光の槍はエヴァ初号機の右目に打ち込む。そして光の槍を戻しもう一度打ち込む。パイルバンカーの様に、エヴァ初号機の右目を何度も打ち込み。発令所にいる何人かは目を逸らすほどの悲劇が行われている。

「頭蓋前部に亀裂発生!!？」

その瞬間、エヴァ初号機の装甲が持たず右目を貫かれ頭部が貫通する。

『  
』  
シンジにはもう言葉が出せなかった。

頭を貫かれたエヴァ初号機は、使徒の左手から出た光の槍ともに飛んで行き第3新東京市の中で背の高いビルに貼り付けられる様に叩きつかれる。

その後、エヴァ初号機の頭部とビルから貫かれた光の槍はユツクリと引き向かれた。エヴァ初号機は支えが無くなり顔を俯かせると貫かれた穴から夥しい血が吹き上がる。

それを見たミサトやリツコ、オペレーター達絶望を帯びた顔になる。

ビービービー

「頭部破損！損害不明！制御神経断線！シンクログラフ反転！パルスが…逆流していきます！」

悲鳴に近いマヤの声が警告音が鳴り響く発令所でエヴァ初号機の状態を報告する。

「回路遮断！せき止めて！」

「駄目です！信号拒絶！受信しません!!？」

リツコは、今の状況を打破する為にマヤに指示を言うが打破する事なす事できず。

「シンジ君は!?!日向君！」

「モニター反応しません、生死不明!!？エヴァ初号機、完全に沈黙！」

ミサトとリツコは苦悶とした顔になる。ミサトは決断する。

「作戦中止！パイロット保護を最優先！プラグを強制射出して!!」

しかし、負の連鎖は止まらず。

「駄目です！完全に制御不能です!!？」

「!!？なんですって！」

警告音が鳴り響く発令所で、ミサトは声を荒げる。

(?.....ここは？確か俺は、アイツと戦っていたんだよな...)

シンジは人肌の様な暖かさを持つ暗い空間に漂っていた。

(負けちゃったのか...俺は...ましてや、死んじゃったのか...?..ん?)

シンジのいる空間に突如、シンジの後ろから光が灯す。振り返り光の方に向く。

(...あれは?)

その光の中から髪の毛の長い女性と思わせる姿が見えてきた。

(...だ...れだ?)

シンジの目の前まで、女性と思わせる物は一変。人工肉で覆われた人間に変わる。右目には穴が空いており血が涙の様にも見えるようだった。

(お前は...俺が乗っていた奴の中身か...?そうか...俺が下手なもんだから、怒ったのかな?)

シンジは余り驚かず、人工肉で覆われた人間はシンジに近寄る。人工肉で覆われた人間はシンジを壊れ物扱うように優しく抱きしめる。

(謝っても済まされないだろうな...俺の受けた痛みはお前の痛みだもんな。こんな俺を恨んでも構わない。良けりやあ、この身を食わせたっていい...。だが、厚かましいが俺に力をくれ。使徒から守れる力

を…。皆を守れる力を…！)

シンジは人工肉で覆われた人間に、優しく抱きしめ返しながら目を閉じながら悲願する。

すると、抱きしめられる力が無くなりシンジから離れていく。シンジは、そこにいた筈の存在が消えて不思議に思い目を開ける。

「「じゃあ、頑張りなさい…。」」

人工肉で覆われた人間は、シンジから離れていくに連れ女性の姿に変わり優しくシンジに言った。

「…ああ…この身にかけて…。」

シンジのいる空間は明るくなり、シンジは目を閉じた。

「……………つうー！」

シンジは痛みを走り目を開ける。視界には暗いエントリープラグの中を写した。

「さてと…やる…と有るし…起…きますか…。」

痛みを耐えながらシンジはレバーを握る。今のシンジは、ショック死を引き起こすほどの痛みを体に帯びている。ましてや、頭部を貫かれた痛みは尋常ではない。しかし、シンジは異常な精神力で耐えていた。

「?ああ…右目が見…えないと…思ったら…。」

シンジは、右手で右目の付近を触ると血が付いていた。右目から涙を流すように血が辿っていた。

「まあ…コ…イツも同…じだし。」

そして、エントリープラグ内が電源が入ったのか少しずつ明るくなる。

「じゃ…あ…頑張ります…か…。」

エヴァ初号機の左目に光が再び灯る。

#### 発令所

「エヴァ初号機、再起動!」

「有り得ないわ!完全に回路が全部切れてるのよ!…まさか、暴走!」  
リツコは余りの事にパニック状態である。ミサトは両目から涙を

嬉しさに流す。

「シンクログラフ、正常に復帰。」

「再び、制御神経接続開始。」

「パルスも安定位置まで戻りました。」

「シンクロ率、89.2%。」

オペレーター達は、言葉に暗さは無くなっていく。そこにエヴァ初号機からの回線が入る。

『ミ…ミサ…ト…さん。聞こえ…ます…か?』

回線からシンジの弱った声が聞こえてきた。

「シンジ君!大丈夫!?」

シンジが無事だと知るとミサトは歓喜極まってより一層涙を流す。

『ま…あ、今…の所…は。肉…眼で、アイ…ツがその場…を離れ…よう

…としてい…るのは、確認…して…ます。』

途切れ途切れで今にも消えそうな声を出すシンジ。

『リツ…コキ…ん、すみま…せ…ん。アド…レナ…リ…ンって、そつち…で操…作できま…せん…か？』

「え、ええ…。出せるけど、それよりもシンジ君。今あなた、痛みが酷いんじゃないの？シンクロ率を調節して痛みを和らげられるわ。」

『それ…じゃ…あ、コイ…ツを…う…ごか…すのが…お…そく…なりま…す。いい…か…ら…は…や…く…』

今すぐ消えてしまいそうな声を聴き続けてミスアトはリツコに言う。

「リツコ!!?早く!!?」

「わかったわ、マヤ!」

「はい!」

マヤはキーボードに操作し始める。

(よし、少し…ずつ…痛みが和らげ…てきた。アイツは、コツチが動か…ないから倒し…たと思つてやがる。ちつ、…どつちも…右目が…見え…ない…な。)

幾分か痛みが和らげたシンジは、使徒を倒す為に考える。だが、気づいてしまう。負の連鎖はまだ途絶えていないと。

(なん…で!?まだ、避難して…いない人間がいる…んだよ!)

エヴァ初号機の左足の付近に、小さな女の子と4く50代の男性が余りの恐怖で座り込んでいた。

(ま…ずい!!?今、動か…いたら…この…人達を踏んでしまう。)

「ミスアト…さん!緊…急事態!!まだ、避難し…終わってない…人達…が!早…く、救出…を!!」

『なんですって!??わかったわ。早くエヴァ初号機の足元にいる民間人を救出を!!』

ミスアトの指示を飛ばす所を聞き、使徒から目を離さずに気づかれな



いように動かないようにしていた。

だか、神がいたら確実に楽しんでいるであろう。この状況を…。

エヴァ初号機が、寄っかかっているビルが崩れその瓦礫が民間人の2人に落ちて行く。

(くそつたれ!!!)

シンジはレバーを握りイメージを作る。右手をお腕を似せると言うイメージを。そして、2人に降り注ぐ瓦礫の雨から守るように右手を被せる。

瓦礫は、エヴァ初号機の右手に阻まれ2人から守った。

しかし、使徒はエヴァ初号機から背を向けていたが今の動きにより再び、こちらに向き直す。そして、仮面の両目から怪光線が放たれる。

シンジは体に鞭を打ち、体ごと2人から守る体制に入る。

ズドオオオオン

鈍い音が爆発ともにエヴァ初号機の背中から鳴り響く。

「ぐあああああああああああつ!!」

今日で何回目の悲鳴だろう。シンジは、意識を切らさないよう舌を強く噛んでいた。

ようやく2人は、ネルフの人に救出される。

「はあっ！はあっ！はあっ！」

息を切らし、エヴァ初号機の上体を起こさせる。

『シンジ君！後は使徒を倒すだけよ！好きなようにやりなさい！頑張って!!?』

ミサトは、シンジに最後になるだろう応援を送る。

(もう、コイツを倒…して。ユツクリと…寝たい…な。本当…。)

左腕をダラリと下げながら構えを取るエヴァ初号機。シンジは、幾度なる痛みと咄嗟の行動でエヴァ初号機を自然に動かせるようになっていた。

「あああああああつ！」

シンジは、雄叫びを上げてエヴァ初号機を使徒に走り始める。使徒はエヴァ初号機を、迎撃する為3度目の仮面の目から怪光線を打ってくる。

「ああああああっ!!だあっ!」

キンッ

エヴァ初号機は折れた左腕を下から上に振る行動を自分の前で行うと怪光線は左腕に弾かれ夜空に舞い上がり爆発する。

エヴァ初号機は、使徒と間合いに入り右手を拳を作り走る勢いともに使徒の右肩を殴る。

ゴッ

右肩を殴られた使徒は、右回りの様にも身体を回転する。エヴァ初号機は、逆に殴った勢いで右足で軸を取り左回転すると半回転した所に左足で後ろを向いた使徒背中の腰の部分を蹴る。

エヴァ初号機に蹴られた使徒は、海老反りの様に身体を後ろに反らす。シンジは勝機を見出し、右手を振り上げて振り下ろすイメージを作る。

エヴァ初号機は、右手を握り振り上げ力一杯に振り下ろして使徒の顔である仮面を叩きつけた。

ピシッ

使徒の仮面は斜めにヒビが入る。

叩きつけられた勢いで使徒は、エヴァ初号機に頭を向けて仰向けに盛大に倒れる。エヴァ初号機は、一瞬の猶予も使徒に与えない為に右手の人差し指と中指で仮面の目に突っ込み引っ掛けるようにする。

「だああああああっ!」

シンジは雄叫びを上げながら。

エヴァ初号機は使徒を引きずりながら走り始める。夜、静まり返る第3新東京市の街に使徒が引きずりながら音を立てながらエヴァ初号機は颯爽に走っていた。ネルフの人間達は、その光景を見つめながら勝利を願う。

『アンビリカルケーブル、残り5000!』

「ミサトさん!これから使徒を投げるから、投げた所にプラグ内のモニターに写して!」

『!?わ、わかったわ!日向君、モニター準備!』

シンジは若干敬語が抜けてミサトに指示を出した。

『残り1000!』

エヴァ初号機は休まず、使徒を引きずりながら街から離れる為に街の外に向かつて走る。引きずられている使徒は、余りにも早く走って引きずられている為動けないでいた。

『残り50!ケーブル、オーバー!』

アンビリカルケーブルに繋がれたエヴァ初号機は、ケーブルの長さの限界を迎えて走っていたエヴァ初号機はケーブルに引っ張られて急停止を起こす。

「っおらあああああああつ!」

ブン

走っていた勢いを使徒に乗せたまま、エヴァ初号機は急停止をして感性の法則を利用して右腕1本で軽々と使徒を街の外に放り投げる。

「ケーブル、パージ!」

バシユツ

エヴァ初号機の背中に接続されているアンビリカルケーブルは、勢い良く外れるがエヴァ初号機の命とも言える電気が供給が止まりプラグ内に制限時間が表示される。

『活動限界まで、あと4分52秒』

エヴァ初号機が停止するまでカウントが進む。

『シンジ君!エヴァは本来の活動限界は5分だけど、高機動で1分しか持たないわ!』

「了解!間に合わせる!」

リツコからエヴァの電源仕組みを聞き、エヴァ初号機はケーブルが無くなり身軽になっていた。素早く体を丸くしゃがみ込み使徒が落ちた山に向かつて弾けたように体を伸ばしてその場から、飛翔する。

『すいっ…!』

使徒は、襲いかかるように飛んできたエヴァ初号機を見て距離が無くなる前に、エヴァ初号機は突如現れた光壁に阻まれる。

「A・T・フィールド!?!」

「やはりもっていたのね…。」

「あれがある限り…。」

「使徒には近づけない…。」

「残り45秒！」

最後で使徒にA・T・フィールドを展開され、エヴァ初号機はA・T・フィールドを斜めの角度で乗っていた。

そしてエヴァ初号機は、使徒のA・T・フィールドに乗りながら折れた左腕を上に向けた。

それをモニターで見ているネルフの人間達は不思議に思っていた。

(きつきの感覚を…思い出せ！アイツの怪光線を弾いた時の感覚を!!  
?この壁を叩き割る為に!)

シンジは先程、使徒の怪光線を左腕で弾いた時は不思議で仕方なかった。民間人2人を助ける時に身を呈して守った時と左腕で弾いた時の、音と現象が異なっていたのだから。

シンジは勘付いたのか、その時の現状を比べると感覚が違う事に気づいた。

2人を助ける時の場合は、体を被せるだけのイメージ「だけ」だった。

しかし、左腕で使徒の怪光線から最小限で済ませる為に左腕を犠牲にして、使徒の懐に入る為だけの事が何故弾けたのか。

理由は簡単。

本来、A・T・フィールドは心の壁とも言われている。心の「壁」と言われるだけあって、相手との遮断・拒絶する為の物である。

シンジの心の拒絶と言う気持ちだが、エヴァを通して具現化される。

使徒の場合は、自我は無くとも危険感じれば拒絶する心を持ちA・T・フィールドを発生させる。

シンジがあの時、左腕を犠牲にする気持ちを持ちながら怪光線を拒絶する心がA・T・フィールドを発生させたのだ。そのおかげで左腕に着弾せず弾けたのだ。

そこにシンジは考えた。この現象は、自分で起こしていることに他の使い方があってはいないかと。

(左腕に細く鋭い刃のイメージを持って、この壁を無くせればいいんだ……。)

そんな思考を持たせたシンジは、エヴァ初号機の左腕に異変が起きる。折れ曲がった左腕は、別の力によって痛々しい音をたてながら真っ直ぐになる。

(ううううっ！痛みがっ！だが、これで！)

「オラァ！」

エヴァ初号機は使徒のA・T・フィールドに向かって左腕を振ると、見えない刃が通ったかのように切断されA・T・フィールドはズレると消滅した。

「A・T・フィールドに、あんな使い方が……。」

「これで使徒に近づけるわ！」

リツコはエヴァ初号機のやってのけた事に驚き、ミサトは喜びで声を上げる。

「残り30秒！」

使徒のA・T・フィールドが無くなり、エヴァ初号機が使徒の上に着る。落ちる。

ベキヤツ

その際、使徒の右腕をエヴァ初号機の左足で踏み折る。

「これで！ラストオオオオオ！」

馬乗りに近い状態でエヴァ初号機は右手を使徒の胸にある球を鷲掴みをする。相当な握力を持って握り潰そうとすると、使徒の球にヒビが入る。

使徒の体は痙攣を起こすと、残った左腕を使い肘から伸びる棘が光り始める。そしてエヴァ初号機の顔に狙いを定めた。だが、エヴァ初

号機は右目が潰されておりその行動が見えないのか変わった様子も無く球を握り潰そうとしていた。

「駄目！シンジ君、避けてえ！」

「無理よ！シンジ君は右目を潰されて見えてないわ。」

最後の最後で使徒の反撃の芽に、敗色が見えてしまいネルフ一同は諦めかけていた。

「残り10秒！」

そして使徒の最後とも言える渾身の一撃、光の槍がエヴァ初号機の顔に襲った。誰もが、この時人類の敗北だと思った。

しかし

光の槍がエヴァ初号機の顔に当たる直前、スツと元から「見えて」いるように交わした。

「はっ！こちとら4つの目から2つに減っただけで俺が！コイツの右目になれば死角なんてないんだよおおおお！」

『残り5秒！』

今シンジが乗るエントリープラグ内のモニターは、エヴァ初号機と使徒の戦いを写した映像になっていた。

シンジの脳に見えるエヴァ初号機の左目の視界。そしてそれを賄うシンジ本人の左目で2体の巨人の戦い写した映像で死角を無くしていた。

「いい加減……くたばれえ！」

最後の使徒の攻撃は虚しく、エヴァ初号機に当たらず握り掴まれた球は乾いた音を立てて割れた。

カッ

ドツ

ズドドオン

ゴゴゴゴゴゴゴ

球が破壊された使徒は、街から離れた山中で凄まじい爆発を起こす。そして、その爆発は天に上がり十字架の形になり使徒の墓標とも見えるようになっていた。

静まり返った発令所、その中少しづつ人の声が聞こえてくる。

「いっ………いや、っ、たー！シンジ君、使徒を倒したわ！」

最初に声を出したミサト。それが切っ掛けになり発令所に人間全員が歓喜をあげる。

この勝利で人類に希望が見えた。

使徒が爆発した所から少し離れ、エヴァ初号機は力無く倒れていた。暗いプラグの中、シンジはコックピットに一杯に使って体を伸ばしていた。

「…本当、疲れ…た。や…つと、や…す…め……る…。お疲れ…さん…。エ…ヴァ……ン…ゲ…リオ…ン……。」

そして、凄まじい痛みと疲労と緊張の糸が切れシンジは意識を闇の中落ちていった。

第3使徒との戦闘結果

第3新東京市 軽微の損害

エヴァ初号機 中破

パイロット・碓シンジ 緊急入院

これが人類と使徒との最初の戦いであった。

この先、彼らはどのような未来が待ち受けているだろう。

それは誰も知らない。

今の世界に決まった運命は無い。

これはまた違うお話。



## 新しい繋がり

「♪〜、♪〜♪〜、♪〜♪〜♪〜。」

何処からか、女性の歌が聞こえてきた。

「♪〜♪〜♪〜……あれ?……じゃない?!?ど……たのよ?いきな……泣き……めて……。」

女性は少年の様子を見て驚く。

「ホ……ラ、泣か……の。……つ……は、強……んだ……ら。は……、抱きし……あげ……か……さ。」

女性は少年に近寄り、優しく抱きしめた。抱きしめた少年はより一層、涙を流し始めた。

「ううん……。」

シンジは目を覚ます。

「………………。なんか初めて見るはずの夢が……、懐かしく感じるのは何故だ……?いったつ?!」

シンジは痛み悶え、自分の体の状態を見ると驚きベットの上で寝ていた体を起こして声を上げた。

「What!What?What!?!左腕は包帯グルグルだし、気がつけば右目が見えねえし、全身隈なく痛いし、そして此処は何処だく!!」

シンジは今自分の現状が分からなすぎて、パニックを起こす。数秒後、ピタリと止まり溜息を一つ。

「良く見て考えて見れば、此処病室だよな。あの使徒とか言う奴をエヴァで倒した後に、病院運ばれてきたって訳か……。……それにしても1人の患者に広過ぎだろ、この部屋は……。」

シンジは、痛む体に衝撃を与えないように再びベットに横になる。

「はあく、余りの事がありすぎて独り言が酷いわ。こんな広過ぎな部屋で……。あく、知らない天井だわ……。」

病室の天井を見ながらシンジは呟いた。

バババババババババ

使徒の爆発した現場にヘリコプターが一機、その場所に止まり飛び続けていた。

「これが人類の初勝利の現場ね。」

ヘリコプターの中、ミサトは窓から使徒が爆発した跡をみながら少し微笑む。

「それにしても、使徒を倒すとあの凄まじい爆発が起きると考えると街では起こしたくはないわね。爆発の威力が推定N2爆弾の半分なんですから。動く爆弾と言った所ね。」

フォルダの中に書かれているデータをみながら、リツコは語る。

「それでも、エヴァは使徒に勝てる。それだけで人類の未来に希望が持てるわ。」

ミサトはペンダントの十字架を右手で持ち、人類の未来をエヴァに託すように目を閉じ十字架を握しめる。

「それにしてもシンちゃんは何故、街の中で積極的に戦おうとしなかったのかしら？エヴァを上手く動かせていたのに……。確かに、あのまま街で戦って使徒に勝っていたら甚大なダメージを負っていたでしょうね。」

ミサトの隣に座るリツコは、クスリツと笑い始める。それを見たミサトは吃驚する。

「どうしたのよ？リツコ。いきなり笑い始めて……。吃驚するじゃない。」

「いやね、聞いた話だけど今回の戦闘で上の人達はシンジ君の評価が高いのよ。初めての戦闘に対しての能力高さ、損害も少なくて上に期

待されてるらしいわ。シンジ君。エヴァの修理費も、考えられていた街の損害と差し引いてもマイナスでは無いらしいのよ。使徒迎撃予算が。」

「確かに辛勝だったけど、シンジの力で使徒を倒したんだからその点私は作戦部長の筈が何も言えないで、彼に託すだけだったわ…。」

色々とシンジが高評価での話をリツコが話すと、ミサトはその時の事を思い出し落ち込み始める。

「これから先に出る使徒を、効率良く倒せる作戦でも考えればパイロットのシンジ君も楽になるでしょう。頑張りなさい、作戦部長さん。」

「んっ、ありがとう。リツコ。」

リツコの励ましで、ミサトの顔つきが落ち込んで険しい顔から程よく力が抜けた余裕を持った顔になる。そして、リツコの白衣から機会音がなり始めた。

ピッピッピッピッピッ

リツコは機会音なる物を白衣の中から取り出すと、小さな端末が出てくる。小さな端末の画面を見て、リツコは微笑む。

「ミサト。人類の救世主とも言えるシンジ君が、今意識を取り戻したみたい。」

暗い空間の中、6つの光が宿っており男6人が長方形のテーブルに席についていた。

「碓君、ネルフとエヴァ。上手く使えているではないか、私達には喜ばしい事だ。悪い所は、零号機の実験での失敗だが人類の敵である使徒を最小限の被害で収めた事は、褒められるものだ。」

ゲンドウが座る対面に、髪型がオールバックで目にバイザーらしき

物を付けた老人が話している。他にもゲンドウの左右に2人ずつ老人が座っていた。米、仏、英、露の人種で、ゲンドウの対面に座る人間は独であった。

この5人は「ZELE」(ゼーレ)と言った国際秘密結社である。五国の米・仏・英・露・独での代表である。

「だが使徒を殲滅する事は大事だが、肝心な事を忘れちゃ困る。」  
「君の仕事はそれだけではないだろうか？」

ゲンドウの左右に座るゼーレの一員が質問をする。

「左様！人類補完計画。我々にとつて、この計画こそがこの絶望的状況下における唯一の希望なのだ。」

バイザーの付けた老人は、ゲンドウに言い聞かせるように話す。

「承知しております。」

「いずれにせよ、使徒再来によるスケジュールの遅延は認められない。あのパイロットであれば、大きな被害は押さええてくれるであろう。そして、私達はあの子供に期待しているのだからな。」

ゼーレの1人が、再びゲンドウに質問をする。

「情報操作のほうは、どうなっている？」

「ご安心を。その件については簡単で対処済みです。」

バイザーの付けた老人は溜息をつく。

「…素晴らしいの一言だな。親子揃って優秀とも言えるな。碓君、近い内にサード・チルドレン、碓シンジを此処に連れてきたまえ。話したい事がある。」

「…了解しました…。」

「では、これにて会議を終了させる。」「」「全てはゼーレのシナリオ通りに。」「」「」

シンジはあの後、首から左腕吊るして右目が見えない為右手で転ばぬよう手摺りを持ち病院の中を歩いていった。

『正午のニュースをお伝えします。まず先日の第3新東京市で軍の訓練が行われ、街から外れた山中の中で兵器の実験を開始……。』

シンジは、病院に備え付けられたテレビを見つければニュースを見ているが疑問を持っていた。

(あれは公には出さないのか……。だが、何故?こんな大事を此処、第3新東京市に住む住人達をあれだけの事で理解させられるのであろうか。よくわからん!とりあえずは、俺は何も見えない知らない関わりがないとでも言わせられるんだろうな……。父親とあつたら、何個か所望しよ……。)

行く当ても無く病院内を歩き続け、シンジは考えをまとめていた。

「シンちゃん、何処に行く気?」

シンジは後ろから声が聞こえ、自分が呼ばれた事を理解して後ろを振り向いた。そこにはファイルを持つミサトが立っており手を振っていた。

「どうしたんですか?ミサトさん、こんな所に。」

「ちよつちね。シンジ君を2時間後にネルフ本部に連れて行かなくちゃいけないのよ……。」

ミサトの顔に影ができる。

「どうせ、ネルフとの契約やアレの事の口合わせてな事でしょ?ミサトさん。」

シンジはテレビに指を指す。完全に見抜かれてミサトは呆然としていた。ハッと意識が戻る。

「シンちゃん、貴方本当に14歳なの……?」

ミサトはシンジに近寄り、シンジとの目の高さを合わせる為にミサトは前屈みになる。

「何を言ってるんですか?正真正銘、ミサトさんの歳から9引いた14歳で中学2年生ですが?」

しれっとシンジは答えた。

(んっ?9引いて14だと……。23!この子、本当に子供?女性

との関わり方も知ってる14歳なんか世の中にいるかしら?)

本来のミサトの年齢は、三十路一步前の29歳である。だが、単純なのかミサトは内心シンジの事を疑問に思いながら若く言われ喜ぶ。

「いやね、シンちゃん！そんな事言われると恥ずかしいじゃない！シンちゃん、何か欲しい物でもある。」

(チヨロサトさん…。)

上機嫌になるミサトを見て、シンジは心の中で渾名を作っていた。

「欲しい物は無いですけど、お願いはありますね。」

「ん？どんなの？」

「いるでしょ？もう一人のエヴァパイロットが。会つときたいんですよ、顔を合わすだけでも…。」

「ああ、綾波レイの事ね。」

「綾波…レイ？」

シンジは、名前でその子の現物像を想像する。そして、ミサトは「綾波レイ」と言う子を説明する。

「そう、マルドゥック機関に最初に選ばれた適任者。ファーストチルドレン、綾波レイよ。シンジ君と同じ14歳で女の子なのよ。そう言えば、あの子もここで入院しているわね。よし、今から行きましょ。」

「えっ？大丈夫なんですか。彼女も怪我か何かで入院してるじゃないんですか？そんな急いで会いたいわけじゃないんで。」

シンジは断ろうとするがミサトは笑いながら話す。

「大丈夫よ、明日退院だそうだし。今なら面会も出来るわ。どうする？」

シンジはそう言うミサトの言葉で少し悩む。時間が少したったってからシンジは答えをだした。

「わかりました、行きましょ。」

「よし、じゃあ行きましょ。レイの病室まで案内するわ、着いてきてね。」

ミサトは綾波レイの病室に向かって歩き出すが、後ろからシンジが着いてきていないのを気づくと後ろを振り向くとシンジは下を向き2・3歩しか歩いていなかった。

「どうしたの？シンジ君。行かないの？レイの病室…。」

ミサトはシンジに聞くと、シンジは少しずつ顔を上げる。そこに顔を赤く染めて恥ずかしそうな表情をしたシンジだった。そしてシンジは、手摺りを掴んでいた右手を離しミサトの方に差し出す。

「…すみません。視界が…悪くて歩きづらいので、手を繋いでいて…もらっていいですか？」

今のシンジの視界は、左目だけだが先の戦闘でエヴァの視界も加わり4つの目で見える視界だった。そこから右目を潰され2つになるが、エヴァと自分の視界には何も変わらない。

そして、エヴァから降りたシンジは極端に視界が変わり平衡感覚が取り戻せずにいる為、手摺りを使った移動していたのだ。だが、普通の視界を持ったミサトの徒歩速さには今のシンジには困難であった。それでシンジはミサトに助けを求めるが、余りの恥ずかしさなのかシンジは顔を赤くモジモジしながら右手をミサトに差し出す姿は小柄な体で男の子には見え、髪型も今は後ろ髪を縛っておらず着ている服装は病院服で誰が見ても可愛い女の子であった。

「……………」

「ミ、ミサトさん…？」

ミサトは固まっついていて、返事の返さないミサトに声をかけると。

パキンツ

そんな音が聞こえたようにシンジは思った。次の瞬間、シンジの目の前が真っ暗になる。

「キヤアアアアア！シンちゃん、可愛すぎるわ！もうくたまらないうっ！」

ミサトは正気が無くなったのか、シンジ抱きしめ始めた。そしてそれだけでは飽き足らないのか、シンジの顔に頬ずりまでし始める始末。

□

シンジは、ミサトに抱きしめられた衝撃で痛みを我慢していた所を追い打ちをかけられ凄まじい痛みで声も出せないでいた。

その中に左腕の痛みもあり、首から吊るした左腕はミサトの体当た

りに近い抱き着きでトドメをさした。

シンジは、この後大声ではしゃいでるミサトに注意する看護師に助けられるのはここだけの話。

病院の廊下を手を繋いで歩く2人がいた。

「シンちゃん、ごごめくん。許してえ。なんでも買ってあげるから。」

ミサトは手を繋いだシンジに謝罪の言葉を送るが、被害者のシンジはミサトとは逆の方を向いていた。

「……………」

シンジはミサトの謝罪を聞かないように、無言を貫き顔を合わせないようにしていた。

今の光景が他の人が見ると、姉妹で入院している妹に謝っている姉のように見えるであろう。

それはさて置き

「…はあく、なんで使徒と戦い終わってまで痛みに襲われなくちゃいけないんだ。ミサトさん、しっかりと反省してくださいね。それなら許しますよ。」

溜息をつき、シンジはミサトの方に顔を向け先ほどの行為を許す。

「シンちゃん、太っ腹〜☒」

「ミサトさん?」

「ごめんなさい…。」

確実に立場と立ち位置がシンジが上になっていた。

そして、漸く目的の病室にたどり着く。

「ごこよ、レイの病室は。」

「わかりました、少し時間頂きますね。そこまで長くないと思いますが、時間が迫る様なら教えてください。」

「了解、わかったわ。」

シンジは繋いでいた手を離し、病室のドアをノックした。



コンコン

「入ってよろしいですか？」

「はい…。」

ドアの向こうから返答があり、シンジは静かにドアを開け部屋に入りまた静かにドアを閉めた。

「失礼します…。」

病室に入るとベッドに1人、少女がこちらを向いていた。

髪はショートで水色、目は紅く瞳には光が見えず美少女とも言える外見であった。しかし、無表情で人形に近い物を感じられる。

(…あれ？なんかデジャヴみたいな感覚に襲われたような…???)

シンジはレイを見ると、ふと何処かで見た事があるようなデジャヴにあう。

「…なんの様？」

黙っているシンジを見て、不思議に思ったかレイはシンジに問いかける。声をかけられ正気が戻るシンジ。

「ああ、ごめんなさい。初めまして、碇シンジと言います。」

自己紹介をするシンジ、作法にならってお辞儀をする。

「知っている、司令の子供…。」

「知っているなら話が早い。そう、碇ゲンドウの息子だよ。綾波レイさん。」

「……………」

レイは必要以上に反応せず会話の流れが、途切れてしまい空気が静まりかえりそうになるがシンジはレイに近づく。近くにあつた椅子をベッドの近くに起き、シンジは椅子に座り笑顔を作りレイとの視線の高さを合わせる。

「いやね、今俺が面会しにきた理由はエヴァのパイロットが俺以外にいるって言う話があったから顔合わせに来たわけ。」

シンジは、レイが大人しい子じゃ無くただ単に余り喋らない子だと理解した。

「それで来て見たら、吃驚したよ。レイさんが可愛いだもん。そして

エヴァに乗ってるの長いんでしょ？色々教えてくれると嬉しいな。」

「命令ならそうする。」

「うーん、そう言うのじゃ無くて…。俺からのお願い？ダメかな…？」  
レイみたいな人間に会話する為には、話しかけた方から少し話題を出して行き会話を長く持たせるのがレイと会話するコツである。シンジは、最初のコンタクトでレイがどんな子を判断して接していた。  
「…考えとくわ。」

「うん、気長に待つてるよ。次会うのは学校でかな？こっちの学校に転校する事になったからその時に会えると思うしね。まあ、その時にもわからない事があったらレイさんに聞くかもしれないけど良い？厚かましくてごめんね？」

「構わないわ…。」

「そっか、ありがとうね。じゃあこれから俺はネルフの本部に行かないと…。レイさん、じゃあ失礼するわ。あ！後、俺の事はシンジって読んでね。同じパイロットなんだしね、気軽に呼んでよ。俺はもう呼ばせてもらってるけどね。」

レイの知っている人がいたら驚くであろう。レイを相手に会話が一言二言で終わらず、会話が長引いているのだから。シンジのコミュニケーション力が高い事が良くわかるだろう。

「じゃあ、レイさん。今度は学校で！バイバーイ！」

シンジは座っていた椅子を片付け、病室から出て行く。

レイはシンジが出て行く姿を見送り、ポツリと呟く。

「…碓シンジ…。碓司令の息子…。あの人とは違う…。けど、悪い気はしない…。碓君…。いえ…。碓シンジ君…。シンジ君…。」

レイは1人で確認するように呟く。

その中、レイの中ではシンジの印象は良かった。そんなレイに心に変化が少しあった。

「…シンジ君。碓司令の笑う顔が似ている…。だけど、違う…。何が？わからない…。なんで？」

疑問を持つレイは、バラバラのパズルをはめるように答えを探す。

だが、今は見つからないようだ。

「…知りたい。シンジ君の事が。あの人と違う笑う顔の意味が…。」

レイは、初めて碓ゲンドウ以外の人間に興味を持った。

レイの求める答えは、いつ見つけられるかは誰もわからない。だが、そう遠い話では無いだろう。

「へっ、くしよい！わっしよい！」

クシヤミをするシンジ。

「大丈夫？シンちゃん。風邪？」

「ですかね…。」

ズズッ

## 決意

エヴァンゲリオンは、使徒を迎撃する為に作られた決戦兵器である。

人類が唯一、使徒に対して抵抗できる決戦兵器である。

少年少女だけしか操縦できる決戦兵器。

そして選ばれた適合者しか乗れない決戦兵器。

パイロットとシンクロをしないと動かない決戦兵器。

電気で動き、供給が無くなると制限時間が課せられる。

エヴァがダメージを受けるとパイロットにもフィードバックする決戦兵器。

「簡単に言うなら、こんな感じかしらね……。とりあえず、シンジ君のその怪我は高過ぎるシンクロ率によって出来た怪我よ。シンジ君とエヴァとの間が余りにも薄いんだよ。それによって、エヴァが食らったダメージの結果がパイロットにも同じものを結果が起きてしまう。言ってしまうえば、シンジ君とエヴァは一心同体と言っても過言でもない……。」

リツコはシンジと対面で椅子に座り、エヴァの簡単な説明と特性を話していた。

「そのお陰で、シンジ君はエヴァをほぼ自分に近い動きが再現できる。そして、先の戦闘でエヴァがダメージを受けた所為でパイロットであるのシンジ君が右目と左腕に負傷してしまったのよ。最後の全身の痛みは、使徒の爆発による物ね。まあ、全身の痛みと右目と左腕は一週間で完治するわ。ネルフの最新鋭治療で治せるわ。怪我の事は安心してね、シンジ君。」

「はあ……。」

リツコはシンジの反応に疑問を持った。

「あれ？嬉しく無いかしら……。怪我が治るの。それとも説明が解りづ

らかったかしら?」

シンジは首を左右に振り否定をした。

「説明は聞き取りやすく解りやすかったです。怪我の方が…。一週間は、これなんですよね?」

「ええ、そうよ。流石の最新鋭の治療でこれが限界よ。普通の治療は、半年ぐらいですもの。」

溜息一つ漏らすシンジ。

「まあ、我慢するしかないか…。わかりました。了解です。」

「どうしたの?シンジ君。普通なら喜ぶ所の筈なのに…。」

シンジはリツコとの視線を外して、部屋の隅をみながら語る。

今、二人のいる部屋は少し広く真ん中にカタカナのコの形のテーブルが置いておりその上にパソコンや書類とかが置いてある。部屋の隅には食器棚があった。ここはリツコの個人の仕事部屋だった。

「今回の怪我で、副産物の物が多くて…。一つが目の視界がおかしく普通に歩けなくて不自由だし、二つ目が左腕がこれだから何かするにもやり辛いし、三つ目が運動が出来ない事ですかね…。一週間も何も出来ないと考えたら…。あつ、すみません。愚痴なつてしまつて。」

「いいのよ、気にしないで。でも、怪我は我慢してね。これからの生活にネルフが協力してくれるから。」

元からマルドゥック期間に選ばれた適合者は、貴重なパイロットの為にネルフは護衛や監視は当たり前前に着くであろう。

「じゃあ、私からの話はこんな物ね。シンジ君はこれから碇司令の所に行くのかしらね?」

「らしいですね。ミサトさんが確か、そんな事を言っていましたね。」

リツコは椅子から立ち上がり食器棚の方に向かって歩き始める。

「シンジ君、コーヒーは飲めるかしら?これから少し動くと思うし、ここで少し休んでいきなさい。」

リツコは食器棚を開け中から、菓子が数個乗つてる皿を取り出す。

「わかりました、少し休ませて頂きます。いや、今まで動きっぱで疲れてたんで助かります…。何か手伝いましょうか?後、コーヒーは飲めます。」

折りたたみの小さなテーブルと菓子を乗せた皿を持ち、シンジが座る前にテーブルを立てその上に皿を乗せるリツコ。

「大丈夫、シンジ君は怪我人なのよ。安静にしなさい、気遣いありがとう。」

リツコは再び食器棚の方に戻り、コーヒーを作るためコップを二つ取り出す。

「リツコさん、コーヒー通の人ですか？」

「あら？どうして、そう思ったの？」

シンジは右手で一つ菓子を持つ。

「一つがお皿に乗ってるお菓子が、名店の「NICE」って所のお菓子なんですもん。知ってる人ならコーヒーと合うお菓子ですね。後、食器棚の中に数種類のコーヒーの粉が入った容器が見えたんで…。」

リツコはコーヒーを作りながら、シンジの言葉に驚いていた。

「凄いわね、シンジ君…。探偵のような観察眼あるのね。そうよ、私は中毒な位にコーヒーが好きなのよ。仕事の時にも良く飲むほどよ。後、「NICE」って良く知ってるわね。結構知られてない、マイナーなお店なの。」

「いや、単純に人から貰って美味しかったので調べたんですよ。リツコさんはコーヒーでは粉派ですか？」

リツコは、二つのコップをお盆にのせて持ってきた。シンジの目の前に一つ置き、もう一つはシンジの対面の席に置く。そして、お盆を片付けてリツコは椅子に座る。

「そうね、私は豆から作れないから粉派ね。あ、これ砂糖とミルクね。」  
リツコがシュガースティックとミルクの入った小さな箱をシンジの目の前に置く。

「お気遣いありがとうございます。自分は、基本ブラックなんで大丈夫です。」

「色々と凄いわね、シンジ君。良く知ってるし、子供がコーヒーをブラックで飲むなんて…。…本当に14歳？」

年齢を疑うリツコ。シンジは少し笑いながらコップを手にする。

「良く聞かれますよ。ただ周りの子供と比べたらそう思うでしょう。」

が、自分は正真正銘の14歳ですよ。あっ、頂きます。」

「どうぞ。なんかシンジ君と話していると、上部の会社人と話してるのと変わんなくて…。」

音を立てずにコーヒーを一口飲みコップを置くシンジ。

「周りの子供より少し知っている程度ですよ。コーヒー、美味しいです。別に俺は唯、本とか読むんでそれで学んだが大半です。あっ、今度俺が豆からコーヒーを作りましょうか？お菓子、頂きます。」

シンジは、一つ菓子をとり袋を破り口の中に入れる。

「えっ？シンジ君、作れるの？」

「ふあい…。すみまふえん…。預けられた所で淹れてたんで。」

口の中を無くし話を続けるシンジ。リツコは諦めたように椅子の背もたれに寄りかかり溜息をつく。

「もう私、シンジ君に驚かされてばかり。エヴァの戦闘に点いても、豊富な知識に人間性。でも、良かったわ。正直な話、私って子供がそんなに好きじゃなかったけどシンジ君なら大丈夫ね。子供って、無知で我儘で煩い物でしょ？」

楽しそうにシンジにリツコは話す。年上相手にも引きを取らないコミュニケーション能力を持つシンジ。リツコは、もう殆どがシンジに対して心を開いていた。シンジは、人の繋がりを大事にするタイプの人間である為のスキルとも言える。相手に合わせるのが上手く、安心させるのがシンジクオリティ。

「でも、自分も子供ですけど何も知らないのを子供はそのままにしないで好奇心があり実行や聞く体験して学習するもんです。我儘も子供にしたら、まだ世界が自分を中心で回ってる感覚なんでしょう。だけど、決まり事や嫌な事を知り学び落ち着いていくんですよ。煩くするのは自分を主張しようとしてるんですよ、子供に力も権力も無く後自分の存在アピールとも言えますね。」

「…シンジ君、私の下で助手にならない？高い給料だすわよ。」

リツコは半分本気の顔をしながら、シンジを勧誘していた。

「え、中学生相手にヘッドハンティングなんてヤダ。いやいや、俺じゃありリツコさんの助手なんかしたら足手まといですよ。確か、戦っ

てた時に聞こえてきましたがマヤさんでしたか？その人の方が適任ですよ。」

のらりくらりとリツコの言葉を躲すシンジ。

(#。皿。)

そんな顔をしながら「ぐぬぬ…」と唸っているリツコ。リツコを知る人が見たら驚くであろう。冷静沈着が似合うのは赤城リツコとも言われる人間が、こんな顔していたら吃驚するであろう。

シンジは相手の絶対見せなさそうな一面を出すのが良くある。シンジはそれを見て楽しんでた。その後も、時間が許されるまで楽しそうに話し合っていた。

暗い空間での広い部屋、床にセフィロートの樹である絵が映し出されていた。

「良く来た、シンジ。」

「呼ばれてるんですから、碇司令。」

「宜しい、職場での対応が出来ているな。」

ゲンドウは部屋の奥に置かれた机に座り、いつも通りに両肘を付き手を組み口元を隠す。

ゲンドウの後ろには冬月が後ろに手を組み立っていた。

「久しぶりだね、シンジ君。先の戦闘はお疲れ様。元気にしていたかね?」

「はい、程々に元気でいました。冬月先生。」

(本当にユイ君に似ているな…。いや、あの時よりも成長してより一層に…。)

シンジは笑顔で冬月の返答する。

だが、ゲンドウはシンジと冬月が知り合いだと知ると内心驚いていた。



「なんだ、二人は知り合っていたのか？」

「ああ、7年前にな。ユイ君がシンジ君に私の連絡先を教えたそうだ。一度会ったぐらいでその後は、手紙だがな。」

「そうか…。」

ゲンドウは二人の繋がりがわかると口を閉ざす。

「あつ、そうか。冬月先生も副司令の立場ありましたね。すみません、冬月副司令。」

シンジは畏まり、冬月に謝罪の言葉と頭を下げる。

「シンジ君、私は構わないよ。立場もあるから場所を考えてくれれば。まあ、シンジ君なら大丈夫だろう。」

「そんなに褒めても何も出せませんよ、冬月先生。」

二人が仲良く話しているとゲンドウは心の中で呟く。

（あの頃を思い出すな…。私とユイで冬月に会いにいった頃とシンジが生まれた後か…）

「そういうえば、葛城一尉が言っていたな。シンジ君、何か所望があるのかね？」

思い出した表情をした冬月は、ミサトから聞いたのかシンジの希望を聞いてきた。

「ええ、余り大きな物じゃないと思うですが…。」

「言ってみたまえ、無理な要求をするとは思えないが…。」

今の部屋にいる3人の中に1人、子供の筈であるシンジは大人顔負けの対応をしていた。

「二つ目が、階級を葛城一尉の下の階級である二尉を下さい。そして、あの人が階級上がり次第に自分も上げて欲しいのです。」

冬月は一つ疑問を持った。

「何故だい？君なら少佐ぐらいになら与えられるが。ネルフも上の人間達も、君に期待してそれぐらいの待遇はあるのだよ。葛城君の後を追いかける形にしなくても、結果を残せば楽に昇格するのだよ？」

ゲンドウも、冬月と同じ考えでいた。階級が高いほどステータスとなり、給料が高くなり権限も幅広く使えるのだから。

「いやいや、中学生に少佐とかあり得ませんよ。確かに、先の戦闘で結

果を残したでしょう。これがもし、マグレや運だけの結果で次の戦闘で駄目ならネルフとしてマズイですよ？期待していた「碓シンジ」は、マグレでの勝利で高い階級を手にしたなんて内部に広がったら組織として致命的です。ですが葛城一尉の下の階級からなら低すぎない高すぎない階級でしょう。そして葛城さんより高い階級を得てしまふと彼女の立場として自分との関わりが変わり作戦に支障を齎すからです。それだけじゃ無く、もし自分が少佐の階級を『はい、わかりました。』と受け取ってしまうと他の人が努力した昇格を軽くなってしまうからです。」

シンジの理由が、的確で尚且つ先の事まで考えておりそれを聞いていた二人は呆然としていた。それもその筈、二人の前に立ち面向かって話す相手が中学生なのだから。

「…わかった、お前は階級を二尉を与える。他にあるか…？」

「…シンジ君にはお手上げだね。普通なら甘い汁があれば、大半の間は食いつくの…。それを惜しみなく断るとは…。」

「はい、碓司令。今日から自分碓シンジは二尉として承りました。」

シンジは一度親であるゲンドウに礼儀正しい返答をすると冬月に話しかける。

「冬月先生、手の余る物は身を滅ぼしますよ。後、そして組織として子供に簡単に重すぎる権利を与えるのは余り良く無いですね。子供が追える責任じゃないです。」

冬月は脱帽物をシンジから聞かされる。

「碓司令、厚がましいですか後何個があります。」

あの後にはシンジは三つの希望が通る。

・ 葛城一尉の下の階級

・ 碓司令、冬月副司令より少し低いネルフでの権限

・錠シンジの護衛・監視の人間とのコンタクト

この三つが通った理由は、一つ目と二つ目が矛盾しているように見えるが特例としてシンジが何かネルフとしてプラスになると考えての承諾だった。エヴァの改造、ネルフを動かす為の権利なのだが本来それに従ってシンジに重い責任が降りかかる所をゲンドウがツルの一声。

「お前が失敗した時は、私と冬月で責任を持つ好きにやれ。」

シンジの人間性を見て、二人は承諾をしたのだ。それにネルフと言う武器を手にしたシンジ。

三つ目は、シンジは命懸けでの使徒との戦い以外での日常は平凡とした生活を送る為である。監視は家以外ではしないように、護衛に関しては拉致や暗殺、殺害以外は干渉しないとの事。

この三つの条件を持ってシンジはネルフに契約をした。

ネルフの施設内での通路、壁に手を這いながらシンジは歩いていった。あの後、契約し終わりゲンドウと冬月の二人と別れた。

(やっべえ、住む所どうしよう…。それも踏まえてさつき話せば良かった…。先の事ばかり考えてたら今が困る事に…。)

心の中で呟くシンジ。大人顔負けの事をやっている割には、簡単な問題に引っかけられるシンジであった。早速、特例の権限を使えば済む話だがシンジは実行に移さない。余り使わないようとシンジの中で決めていたのだ。

「はあく、とりあえず上の街に戻ってホテルでも借りて明日にでも考えますか。学校の件もあるし…。」

シンジが行動に移す為に、シンジの荷物が置かれた場所まで移動する事に決まった。その場所に向かって歩き始めると通路の先にミサトが歩いてきた。

「シンちゃん、探したわよ。」

ミサトはシンジを見つけると声をかけて来た。

「どうしたんですか？ミサトさん。なんか要件ですか？」

「そう言えば、シンちゃん。あなた、何処に住むの？まだ決まってるわよね？」

「そうですね、まだ住む場所は決まってるので今日は街のホテルで泊まって考えようとしてます。」

キュピーン

そんな音が聞こえそうな目をするミサト。

「じゃあ、シンちゃん！私の家に来なさい、一緒に住みましょう。」

軽い口調でミサトは言った。シンジは呆然として少し経ってから正気にもどる。

「……………はっ！えっ!?何言ってるんですか？俺、男ですよ！此処に来るまで、俺達は赤の他人でしたよね！何考えるんですか!？」

シンジは珍しく狼狽していた。それもその筈、いきなり一緒に住もうと言われてればこの反応は当たり前である。

「いやね、シンちゃん。男と言えど貴方は子供でしょ？保護者が必要になるわ、住む場所がまだ決まってる事はお父さんとは住まない事じゃない？それだったら、私がシンちゃんの保護者になろうと考えた訳よ。あれ、シンちゃん？もしかして、お姉さんの事を襲うの？」

ミサトは自分の体を守るようにするが、体をくねらせていた。それを見たシンジはイラツとする。そして白い目でみる。

「何言ってるんですか？この人。そんな事言ってるは無視しますよ？そして、襲うなら明日くるかもしれない使徒でも襲ってますよ。」

「なにそれ!?!酷い!」

しれっと言うシンジにショックを受けるミサト。だが、めげずにミサトはシンジに説得する。

「ええ、何でそんなに私と住むのを嫌がるの？」

「別に嫌がってるわけじゃ無く、うーん。」

今だに決まらない事にミサトは最終奥義を使った。目をすわらせて青筋を立て気迫ある顔でシンジに言う。

「上司の言う事、聞けないっての……?」

ピシリとシンジは固まる。蛇に睨まれた蛙の如く。動かなくなつたシンジをミサトはズルズルと引きずりながら片手に携帯を持ちリツコに電話をしていた。

「あ、もしもしリツコ? うん、あたし。シンちゃんねえ、あたしのマンションで一緒に住む事になったから。」

『何を言ってるのよ!? あんた!』

携帯から聞こえてくるリツコの声。オホホホホと笑いながら話すミサト。

「だーいじよぶだつてえ。子供に手え出すほど飢えてないから。じゃ、上の許可とつといてね。じゃねー。」

『ちよつとー葛城一尉!? 抜け駆けは』

ブチッ

電話を切り携帯をしまうミサト。はたから見たらドナドナされているシンジ。

♪♪♪♪♪

本当に流れていた。

「ホホホホホッ! 今日はパーッとやらなきやね!」

上機嫌で雄叫びのように叫びルノーを走らせるミサト。

「誘拐に近い形で、パーッとって何をパーッとやるんですか?」

「決まってるでしょ? 同居人の歓迎会よ。」

「その同居人が襲われたらミサトさんは、シヨタサトさんになりますね。」

「がっ!?!」

(。o。)( ) (———)

運転をしながら口をあぐり開けるミサト。気を取り直しミサト

は、シンジに聞く。

「シンちゃん、ちよつち寄り道するわよ。」

山中にルノーを止めて二人は降り、第3新東京市の街が見下ろせる場所に手を繋ぎ移動する。街は殺風景な感じを思わせるほど何も無かった。

「なんですか、ここ？告白なら歳の差を考え直してくださいね？」

「かくも〜！外見可愛いのに中身が可愛くない子ね！年上にそんな冗談言つてると痛い目みるわよ！黙って、ついてらっしゃい！」

ふつとネタに走るシンジだった。ミサトは繋いだ手を離し腕時計を見る。

「そろそろ時間ね。」

「？」

ウウウウウウウ

突如、警報機が鳴り響く。第3新東京市の街に音が鳴り響いてると各所から地面が開く。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ

そして、その穴から次々とビルがはえていく。

「すごい…、ビルが地面からはえていく…!？」

全てのビルがはえ終わると誰が見ても栄えた街並みに見えるだろう。

「対使徒迎撃要塞都市、第3新東京市。これが私達の街よ、そしてあなたを守った街でもあるわ。」

それを聞いたシンジは右手に力が入り握り拳を作り顔を下げる。

「そんな立派な物じゃないですよ、俺が使徒を倒せたのは偶然かもしれない。そんな俺に人類を救う力ありません…、なのに周りは俺に期待をしている…。」

「わかってるわ。」

ミサトの言葉でシンジの顔は上がる。

「理由はどうあれ、あなたは立派に戦ってくれた。酷い怪我をしてみても、自信を持ちなさい。」

ミサトは街を見渡す為に少し前に出ながら言う。シンジは何も声に出来なかった。ミサトは黙ってしまったシンジを見て吃驚していた。

「シンちゃん？アララ…、ちよつと。あたし、なんか悪い事言った？」

シンジは両目から涙を流していたのでミサトは近寄り聞く。

「いえ、今のミサトさんの言葉で少し心が軽くなったら…」

「よしよし、シンちゃんは皆の期待が重すぎたか。でも、あなたはそれほどに私達をエヴァに乗って守ってくれた。失敗したって誰も攻めやしないわ。なんだって、それほどシンちゃんが頑張ってくれたんだから。私達は今、生きていられたんだから…ねっ？」

優しく抱きしめるミサト、シンジは暖かな温度を感じて歯を食いしばりながらより一層涙をミサトの胸の中で流した。

シンジは結果を残し先の事を色々と考えて周りの人間から期待され言われるが、本人は周りに弱音を吐かずプレッシャーだけが積み重なっていた。

だがミサトの一言と皆の思いを思い出すと、シンジは人との繋がりがより一層大切に思った。

今シンジは、人間としてまた一つ強くなる。

皆の期待、失いたくない人々、守りたい居場所を賭けて使徒と戦う意思を高まらせる。

この先、何が起きようが彼は道がある限り歩き続けるだろう。

それが茨の道でも修羅の道でも地獄に続いている道だろうと…。

彼に幸せがいつか来ることを願う。



## 可能性の数

### 第3新東京市

夜、静まり街の中にあるマンションが一つ建っていた。マンションの下に一台のルノーが止まる。中から2人の人間が出てくる。

「シンちゃん、此処よ。私の家は。」

「へえ、中々でかいマンションですね。」

2人はマンションに入り、エレベーターで上にかかる。

「シンちゃんの荷物は、もう届いていると思うけど…。あつた、あつた。ここよ、私の家でありシンちゃんの家になるわ。実を言うと、私もこの街に引っ越してきたばつかなのよね。」

ミサトは、片手にビニール袋を持ち余った手でスカートのポケットからカードを取り出す。そしてドアノブの上にカードを読み取る機械に通す。

ピッ

ガチャン

鍵は開きミサトはドアを開く。

「さく、はいつてえ。ちよつち、散らかってるけどね。」

ミサトは先に入り、シンジは追いかけるように家の中に入るとする。

「お邪魔します。」

それを聞いたミサトは振り向き怒った顔をする。

(#、^、)

「シンちゃん？ここは「貴方」の家でもあるの…。」

ミサトにそう言われシンジは照れながら言う。

「た…ただいま…、ミサトさん…。」

「はい、よく出来ました。シンちゃん、お帰りなさい。」

( (▽) )

怒った顔が嘘のように笑顔になるミサト。だが、これからシンジが

怒ることになるとは誰も想像しないだろう。ミサトは先に奥に入っ  
ていき、シンジは玄関入ってすぐ顔を顰める。

(おいおい、靴が乱雑して脱ぐ場所無いし。靴箱は開けっ放しで、靴を  
雑に入れられて。廊下がゴミ袋で通路が狭くして…)。

シンジは玄関先の靴を少し片付けてから自分も靴を脱ぎ奥に入る  
ため、右手で壁を這わせ歩いて曲がり角を曲がり前を向くとピシリと  
シンジは固まった。

リビングは大変な事になっていた。

リビングの真ん中に置かれたテーブルは、ビールの空き缶が山のよ  
うに積み重ねられ出前やコンビニで買ってきたのか食べた後のゴミに溢れ  
かえりテーブルとしての機能していなかった。次にキッチン、流しに  
は溢れかえった洗ってない食器達。そこに食べ残しであろう生ゴミ  
は言葉では表せないほどになっている為にシンジは目を逸らす。逸  
らすゴミが、何処を見てもゴミゴミゴミゴミとリビングの空間  
だけで人が見たらゴミ屋敷と見られても仕方が無いほどだった。

この現状を作った本人は、鼻歌をしながら電子レンジに先ほど買っ  
たコンビニ弁当を温めていた。

ブチッ

そんな音がリビングに広がり、その音に気づいたのかシンジの方に  
ミサトは向く。シンジは下を向き体を震わせていた。

「どうしたの？シンちゃん、そこに立ち墓受けて。」

ミサトはシンジに声をかけるが、返答が無く不思議に思いシンジに  
近寄る。

「シンちゃん…?!」

(…)

シンジはミサトが近づくと顔をあげる。その顔には笑顔が「貼り付  
け」られていた。パツと見は唯の笑顔であったが、何処と無くシンジ  
の後ろから陽炎がミサトには見えた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

リビング内を揺られているのを錯覚がミサトを襲う。使徒が襲来  
してきた時以上の緊張がミサトに襲った。電子レンジの音正体不明

の音だけが鳴り響く。

「シ…シン…シンちゃん？」

声を辛うじて出せたミサトは再び笑顔のシンジに声をかける。すると、シンジは口を開く。

「正座。」

「はい!？」

ミサトは余りの威圧のかかった声を出したシンジに驚いていた。

「…正座。」

「いや…。ちよつち散らかつて足踏み場しかない状態じゃあ、座れないかな…。」

親に怒られてる子供のようにミサトは言い訳を言う。

「退かせばいいじゃないですか、ミサトさん？ 足の踏み場だって、退かして作つてるじゃな…い…で…す…か？」

「はい…今すぐに…」

余りの威圧に敬語になりその場のゴミを退かし、座れる空間を作り尽かさずミサトは正座をする。それを見たシンジは、中腰になりミサトの目線の高さに合わせる。

「はい、ミサトさん。質問です、何故玄関先があんなに靴が散らばっているのですか？」

「え、え、えくと、仕事とかで帰ってきた時に散らばつて…。」

ミサトはオドオドしながら、歳下であるシンジに怯えていた。

「では何故、靴箱は乱雑に靴を入れられて戸は開けっ放しなのでしょう…？」

「…すぐに取り出せるようにしてます。」

「次は玄関からリビングまでのゴミは？」

「…明日、出す為です。」

シンジはより一層、笑顔で上がっている口が上がる。

「へエ、ミサトさん？ 今、完全に嘘をつきましたね。」

体が跳ね上がると思わせるほど、ミサトの体はビクツと震わせる。

「理由は簡単です、中身が分別されておらず。中に入った生ゴミが玄関からリビングまでに置かれたゴミ袋に入った生ゴミが順おつて変

色した色が違うんですよ。これの意味がわかりますよね、ミサトさん。」

冷や汗をダラダラと流すミサト。完璧に言い当てられ、理由までが完璧であった。ミサトは逃げ道を無くしオロオロしていた。

「まだまだ、ありますよ。まさにこのリビングは……」

(まだ続くの!?)

これからシンジの説教タイムに突入。

「なぜ、片付けないんですか？その場で片付ければ、また使えるし綺麗になりますよ？」

10分後

「生ゴミなんかほっといたら、虫が湧き匂いが酷くなりますよ？若干、このリビング匂うんですから。」

20分後

「空き缶も潰せとは言いませんが、テーブルにこんなに積んで楽しいですか？楽しいからやってるんですよね。子供ですか？歳考えてください。」

30分後

「こんなにゴミに溢れかえらせて、住み心地いいですか？家庭の敵が出ますよ、黒くて早くて平べったくて渋とくて、燃やしたら燃えながら走っていくから家の中でやったら確実に火事を招く奴とミサトさんは変わらないって言ってるもんですよ。」

40分後

「ましてや、聞いた話。ネルフの仕事大変でしょ？行く時は、急いで家出る時とかゴミを踏んで怪我したらその傷が化膿して痛い思いしますよ？それと同じに帰ってきた時も仕事で疲れて注意散漫なんですから、踏む可能性が高いですよね？ミサトさんはMですか？」

50分後

「ミサトさん、作戦部長なんですよね？俺を指示を飛ばして、使徒を倒せる作戦を考えて俺に言うんでしょう？こんな生活してる人が、人類を守る作戦を考えられるとは俺は少なくとも思えませんよ？だらけ

た生活した人は、いつかどこでそのだらけた所が出ますよ？そして、俺はミサトさんを信用する事が出来なくなつてしまいますよ。」

#### 1時間後

「片付けが出来ないんじゃないですか？面倒臭くてやらないんですよ、ミサトさんは。面倒臭くじゃなくて葛城臭くなりますよ？後、保護者として自覚してます？」

ミサトは、燃え尽きた灰のように白くなっていた。

「おっと、話が長くなりましたね。とりあえず、片付けるのでミサトさん手伝ってください。」

白くなっていたミサトは、徐々に色が戻り顔が解放されたように笑顔になる。だが、ミサトは動けないでいた。

「？どうしたんですか、ミサトさん。手伝ってくれないと時間がかかってしまいますよ？」

「あの正座のし過ぎて脚が動かなくて…。」

モゾモゾと動くミサトを見て、シンジは悪魔を想像させる顔つきで笑顔を作る。それを見たミサトは恐怖を感じた。

「ミ・サ・トさ〜くん？寝室つて何処ですか〜？」

「えっ!?リビングを出て居間の隣だけど…。！シンちゃん、まさか!?」

シンジは笑顔のままミサトに近寄り、ミサトは足が動かせない為逃げる事も出来ないでいた。

「よいつしよっ！」

「きやあっ！」

シンジは姿勢を低くし座るミサトの下腹部に右肩を当て、右腕を腰に回し固定しミサトを担ぎ上げる。

「シンちゃん、やめなさい！それはいけないことよ！今なら引き返せるわ！」

「はっはっは、ナニを言っているか分かりませんね〜。」

軽々とミサトを運び寝室に入る。寝室でも散らかっており、シンジは散らかる寝室を慎重に歩き物を踏まないように歩を進める。そして、寝室の真ん中にひいて有る布団にミサトを下ろす。

「…シンちゃん、本気なの…？」

「ええ、俺は本気です。ミサトさんが嫌がってもやらせて頂きます。このマンションにはミサトさん以外いなさそうだし大声出した所で誰も助けは来ませんよ。ふっふっふっ。」

余りの本気でいるシンジを見て、ミサトは焦っていた。体を守るようにシンジから距離を取ろうとするが動けないでいた。

「では…」

「きゃあああああああつ！」

襲い掛かるシンジ、悲鳴をあげるミサト。

シンジはミサトの足を右手で突つく。そして、左手は首から吊るした帯から外し足を軽く突つく。

「いやー！あ、足がー！しび、痺れるー！」

「あく、たたたたたたたたたたたたたたあつ！」

ミサトは足の痺れで悶え、シンジは世紀末に生きる胸に七つの傷を持つ男にも似た動きをしていた。

テレーツテェ♪

10分後

着衣が乱れミサトはピクリと動かない死体化していた。何処かで売られている薄い本の1シーンにも見えなくもない。

「ふうっ、すつきりした。」

シンジはミサトにストレス発散をして、片付けを始める。

## 1 時間後

「とりあえずはこんな物かな。ゴミ袋と食器は後だな。冷蔵庫の中身が缶ビールしかないし、近くのコンビニで材料を買ってくるか…。」  
シンジは、財布を持ち外に出た。

ピ。ピ。ピ。ピッ

目覚まし時計の電子音が鳴り響いた。その音によってミサトが目  
を覚ます。

寝ぼけ眼で目覚まし時計を止める。

「う…。う…ん…。朝。…。朝!?あれ、なんで私寝てんの!?確か最後の  
記憶だと、シンちゃんを怒らせて正座して説教されて足を突つかれて  
…。」

ミサトは今自分の姿を見て驚く。

「えっ!?なんで、パジャマなの…そして、部屋が小綺麗に!」

散らかっていた寝室の布団の周りには本来、散らかっており足の踏み  
場を探すのが困難な程であった。しかし、今の寝室は物が解りやすく  
分けられており丁寧に昨日着ていた服が綺麗に畳まれていた。

「これ…全部、シンちゃんがやったの?…それにしても、何か良い匂い  
が…。」

コンコン

寝室と居間を分ける戸からノック音が鳴る。

『おはようございます、ミサトさん。入って大丈夫ですか?』

戸の向こうからシンジの声が聞こえる。

「え、ええ…。大丈夫よ。」

ガラガラ

「失礼します。ミサトさん、よく眠れました?」

制服にエプロンを身に付けたシンジが、戸を開けて寝室に入ってきて



た。

「…ええ、気が付いたら寝ててパジャマに着替えていて部屋が小綺麗になつてて吃驚してるわ…。」

「そうですね、俺が片付けてる時も一度も起きませんでしたから。寝苦しそうに寝てたんで着替えさせたら、気持ち良さそうに寝てましたからね。あつ、ご飯出来てますから。」

シンジは寝室から出て行く。ミサトは、布団から出てリビングに行く。ミサトは仰天していた。

ゴミ袋で足場を狭くしていたのが、綺麗になくつており床がピカピカになっていた。

食器と生ゴミで溢れかえって腐海のキッチン、食器は綺麗に洗われて洗い物カゴに入っており生ゴミの存在も無くキッチンは輝いていた。

空き缶やゴミに溢れていたテーブルの上には、綺麗になっており真ん中に小さなお盆があり醤油や胡椒と七味、オマケに爪楊枝の入った器まであった。

ミサトは、玄関に向かった。

リビングから玄関までの廊下に置かれていたゴミ袋は、綺麗さっぱり無くなり歩きやすくなっていた。

玄関は散らばっていたヒールやシューズなどが整頓されており、靴箱の中を見ると種類ごとに分けられて見やすく取りやすく解りやすい配置に置かれていた。

ミサトは、今だに夢を見ているのかと自分の頬を引っ張るが痛みが走り少し涙目になっていた。ミサトはリビングに戻ると、シンジは正座をしてペンギンに餌を与えていた。

「あつ、ミサトさん。綺麗になつたでしょ？そう言えば、この子の名前って「ペンペン」って言うんですね。最初、首巻かれた所に書かれた「PEN2」を見た瞬間に笑いそうになりましたよ。どんなネーミングセンスかと思って。」

少し変わったペンギンのペンペンに、秋刀魚を手渡しで口に近寄らせるシンジ。ペンペンは秋刀魚をクチバシで啜え、秋刀魚を丸呑みを

して美味しそうに食べるペンペン。

「ギャツギャツ！」

「ふふっ、可愛いなあ。ペンペンは。」

「ギユウ〜…。」

頭を優しく撫でられたペンペンは、目を閉じ気持ち良さそうにする。と突如ペンペンは目を開けシンジと目を合わせる。

「どうした？ペンペン、まだ食い足りないか？」

シンジはペンペンの様子を見てそう言うと、ペンペンはシンジに近寄りシンジの正座をした足に乗っかりシンジに小さな体でシンジに抱き着き懐いていた。ペンペンは、嬉しそうに抱き着き鳴き声を一つ。

「ギユウー！」

「よしよし、愛い奴め。家が綺麗になつて動き安いだろう、存分に動き回れるな…。」

ペンペンを左腕で優しく抱き返し右手で頭を撫でるシンジ。

「よし、ペンペン。ミサトさんに朝ごはんを食べさせるから、退いてくれるかな？後で、ブラツシングしてあげるから。」

「ギャツギャツ、ギユウ〜！」

シンジの言葉が理解をしたペンペンは、シンジから離れ自分の部屋の冷蔵庫に戻っていった。

「シンちゃん、何でも出来過ぎよ…。」

「いやいや、誰でも出来ることをしただけですよ。さあ、朝ごはんは出来てるんでどうぞ？」

シンジは立ち上がり4つの内の椅子を引き、席を座らせるように促した。ミサトは誘導されるようにシンジが引いた椅子に座ると、シンジはキッチンに向かい料理をお盆に乗せ右手だけで運びテーブルに置いていく。

「今日のメニューは、ご飯に味噌汁、御菜に納豆と漬物や卵焼きにサラダです。流石に左腕が存分に使えないんで、質素になってしまいましたけど。」

シンジは自分の分も運び終わり、ミサトと対面になるように座る。

ミサトは、自分の家でこんな普通の食事が出来るとは思っていなかったのか言葉がでないようだ。

「では、頂きます。」

「い、頂きます。」

シンジはエプロンを取り、食事を始める。ミサトは手間退いながら、ご飯を最初に口に運ぶ。するとモチツとした食感で米の美味しさが最大限に引き出されており、ミサトは口を震わせて新たに味噌汁の入ったお椀を持ち口に運ぶ。

「はあく。」

ミサトは味噌汁の味で声を漏らし、次に卵焼きを手につける。小さく切る為に箸を卵焼きに刺すとフワリと入る。四角系に切り分け、箸で持ち口に運ぶ。

「!」

ミサトは仰天する。何層にもなった卵がケーキのスポンジに近い柔らかさと卵だけの味なのだが、色々な想像がミサトの頭の中を過る。

「どうですか?美味しくないですか?。」

シンジは黙々と食べるミサトを見て、不評価と思い聞いてみるとミサトは箸を置く。

「シンちゃん:。」

「な、なんですか?」

真剣な顔でミサトはシンジの顔を見てくる為、シンジは戸惑う。

「嫁としてこない?」

「もう一回寝ます?」

2人は朝食を食べ終えて、ミサトはシンジに出された熱い焙じ茶を

飲みシンジは食器を軽く洗い食器洗い機に入れていた。

「いや、シンちゃんは凄いわね。なんでも出来る上、エヴァに乗って使徒に勝ち、コミュニケーションが高く、片付けが綺麗だし、料理も出来るし、怪我してるのに。」

「ミサトさん、片付けの事は誰でも出来ますよ？」

ミサトはシンジの直球な言葉に胸に刺さった。シンジはエプロンを外し、一つ湯呑みをテーブルに置き椅子に座りお茶を飲み始める。「それにしても、この家もシンちゃんが来たから綺麗になってペンペンも喜んでたしありがとうね。」

「どうもいたしまして、余りのゴミと散らかりで大変でしたよ。右手一本で…。」

ミサトは、ふと思った。

「あれ？シンちゃん、そう言えば何処で寝たの？確かシンちゃんの部屋に何も無い状態の筈だけ…。」

「ええ、片付けが多過ぎで昨日から寝てませんが…何か？完徹ですよ、完徹。」

口をアングリと開かせて驚くミサト。

「本当に申し訳ありません…。大人である私がやるべきである事を、子供のシンちゃんにやらせてしまい。」

余りの自分の不出来に落ち込むミサト。

「もう、俺も此処の住人です。後から来た物なんで、昨日は言い過ぎとは思いませんが元々は俺が来る前はミサトさんだけの生活から俺が入って勝手に変えただけです。気にしないでください。そ…それと、か…かぞ…家族じゃないです…か…。」

シンジは最後の言葉に、顔を赤くしながらミサトとは顔を合わせないように逸らしていた。それを見たミサトは一言。

「結婚しましょう。」

「歳の差が両手足の指じゃ、足りないなあ。」

「なんだとお！」

ミサトの言葉をシンジはしれつと言葉を返すとミサトは激怒して、テーブルから身を乗り出しシンジの頭を鷲掴み揺らす。

だが、2人は笑っていた。本当の家族の様に。

第3新東京市、第壱中学校。

シンジは、この学校に転校する。

「では、自己紹介を。」

眼鏡を掛けた白髪の老人の教師がシンジに自己紹介を促した。

「はい。今日から第壱中学校、2年A組に転校して来ました。碓シンジと言います。まだこの街に来たばかりで右も左も分かりません。なので、皆様に色々と聞くとお思いますのでこれから、よろしくお願ひ申し上げます。」

シンジは、自己紹介を終えると頭を下げる。すると、教室の生徒達が騒ぎ始めた。

「きゃー、何あの子!?!男子なのに髪長くて、可愛い顔つきは!」

「よろしくな、碓!」

「わかんない事あったら、遠慮無く聞けよ?」

「あ、私も。私も!」

第1印象が良かったのか、シンジは2年A組の生徒達に向かい入れられた。シンジはそれに応える為に笑顔で言う。

「ありがとう、皆。」

また新しい出会いの可能性、広がる世界。

シンジの道は、幾つかの道に分かれてどの道に足を向けるだろう。

彼に幸せをあらんことを……。

## 自分の命を天秤に

「……と言うわけで。人類は科学の発達と、ともに爛熟した文明を謳歌してきたわけですが……。全てが灰燼に帰す時がやってきたのであります。」

第壹中学校、熱い日差しに照らされ疎開で少ない学生が通う場所。シンジが今いる2年A組に、授業が始まっており教師が歴史を語っていた。

「20世紀最後の年、巨大隕石が南極に衝突したのは皆さんもご存知だと思いますが……。これにより氷の大陸は一瞬にして溶解し、海洋の水位は20mも上昇したわけでありませう。」

教室の中は、教師が話す言葉を聞く子がいれば友達同士で教師の目を盗みながら喋る子もいれば寝ていて聞いて無い子もいた。シンジは真面目に聞いて教師の言っている言葉をノートに写していた。

「そして干ばつや洪水、火山の噴火など。異常気象が世界中を襲い、さらに経済恐慌に民族紛争や内戦。」

生徒の中、シンジから離れている隣同士の女子が小さい声で話していた。

(ねえねえ、聞いた?)

(えっ?)

(さっき男子が話してたんだけどさ)

「僅か半年の間に、世界の人口の半分が永久に失われたのであります。」

(何よ?)

(ほら、今日きたあの転校生の碓シンジ君。)

「これが世に言う「セカンドインパクト」であります。」

(碓君、例のロボットのパイロットって噂よ。あの怪我也、そうなんじゃないかって……。)

「えっ？嘘！マジ!?」

一人の女子が授業中と言う事忘れ、声を上げてしまう。その声を聞いていた茶髪で頬にそばかすがあり眼鏡を掛けた少年がシンジを見ている。

「……………」

いきなり声を上げた為に教師は、話していた事を止めて女子2人を見ていた。女子2人は余所余所しく誤魔化す。それを見た教師は続きを話す。

「あれから15年。僅か15年で私達はここまで復興をとげることが出来ました。これは私達、人類の優秀性もさることながら…。皆さんのお父さんやお母さんの血と汗と涙の結晶。努力の賜物と言えるでしょう。」

シンジは教師の声を聞きながら窓際に席に座るレイを見る。レイは授業を聞かず窓の外を眺めていた。

「では、今日はこれまで。」

そして、授業は終わる。

休み時間、シンジは雑誌を読んでいた。読んでいる雑誌は、「WEB小説投稿サイト・H A M E L N ☆今月のランキング50位以内の作品を大習得」と書かれている雑誌を読んでいた。そこにシンジに近寄る女子2人が、シンジに話しかける。

「ねえねえ、碓君。ちよつといいかな?」

「ん?何。」

シンジは雑誌を閉じ、先程授業中に話していた女子2人に目を向ける。

「疎開始まってんのに、なんで今頃この学校に来たの?やっぱり、噂は本当なのね。」

「そうだねえ、父親がこっちで仕事をしていて一緒に住む為に引越してきただけだよ?あと、噂って?」

シンジは真実9割嘘が1割で話していた。



「とぼけないでよ、碓君があのロボットのパイロットだって噂よ！その怪我也その時に負ったんでしょ？」

「あれ本当なんですよ？」

女子2人は、シンジに真実を吐かせようと凄惨な形相でシンジを見る。が、シンジは女子に気にせず話す。

「さあ？この怪我は、この前の騒動で巻き込まれて負った怪我だし…。しかもイキナリ、俺がロボットのパイロット？この前の騒動は、ロボットの話なの？」

シンジは、しれつと本当にあつたように怪我の理由を嘘を付きしらばくれていた。

「逆に聞きたいんだけど、そんな話何処から聞いたの？確かにタイミングが重なったの転校だから、疑う気持ちもわからなくないよ。俺だって知りたいし…。」

上手く相手に自分は知らないアピールを送り、理由を上手く使い自分も知りたいアピールを送れば大半の子供には、「ああ、本当に知らないんだ」と思うだろう。そして、この噂を流した情報源を探す。シンジは、エージェントになれるんじゃないだろうか。

「えっとね、彼処に座る眼鏡を掛けた子で相田君って言うんだけど。あの子が、碓君がパイロットじゃあ無いのかって言ってたから。彼のお父さん、ネルフの人だから。」

女子が指差してその情報源であろう男子を探す。指差した先には、シンジの席の後ろでシンジは振り向くと先程シンジを情報を探るように見ていた男子だった。相田と言われる男子をシンジは見つけ、犯人を見つけると前に振り返る。

「ふーん…。確かに、彼のお父さんがネルフの人なら信頼性はあるね？だけど、残念。俺は本当に知らないんだ。」

「そっか、噂も噂って訳ね。ごめんね、碓君。いきなり変な事聞いて。完璧に凄いだシンジは笑顔で女の子に返す。

キーンコーンカーコーン

そして次の授業の鐘が鳴る。

昼休みになり、シンジはレイの方に歩を進める。

「レイさーん、一緒にご飯食べよう。」

シンジがレイに声をかけると、教室にいる全員が驚く。

（なにになに？ 碓君、綾波さんの事…。）

（誰も綾波に声もかけないし、綾波も必要以上口を開かない奴に碓が…。）

（凄いな、碓君。）

（碓の野郎、早速女に手をつける気か！ いや…、見た目が女の子っぽいから…。百合に見えるな。）

小さい声で色々と話している生徒達。

（おい！最後の奴、後で覚えてろ！）

シンジは最後の男子に怒りを心に込め、レイに近づき再び声をかける。

「どう？レイさん。屋上にでも行つて食べようよ。」

「お弁当、持ってきてない…。」

「だったら、俺の弁当で良ければ一緒に食べよう。多く作りすぎちゃったんだよ。」

「…肉、嫌い。」

「へえ、レイさん。肉嫌いなんだ、だが所がどっこい。今日の弁当はベジタブル弁当なのだ。これなら、レイさんにも食べられるよ。箸も二つあるし小皿も。」

「……。行くわ…。」

「やった！」

このやり取りを見ていた生徒達は、啞然としていた。他のクラスでは、レイの事を「動かないクールビューティー」とも言われたレイをシンジが動かした所を見て啞然としていた。

「じゃ、行こう。屋上に。」

シンジはレイを連れて屋上に移動する。

「どうぞ、レイさん。」

屋上に移動して、元から置かれたベンチに2人で座りシンジは弁当から料理をされた物を小皿に移して右手で渡し左腕は添えていてレイに渡す。

「……。」

レイは無言でシンジから箸と小皿を受け取る。

「じゃあ、頂きます。」

「……頂きます……。」

レイもシンジの後に、声を出し箸を料理に運ぶ。シンジが作ってきた弁当は、きんぴらごぼうにオカラで作ったハンバーグや肉の入っていない野菜炒めと大豆を砕いて小麦粉で固めたミートボール擬きが入っていた。レイは、小皿に乗るミートボール擬きを箸で挟み口に運ぶ。そして口を動かす。

（・・）

（。D。）

（・・）

レイの顔は、最初は目が点になりその後に見開き口を少し開けては無表情に戻った。シンジは自分の料理が、レイの口にあっけないのかと心配していた。

「どうかな？レイさん。口にあっただ？」

「…美味しい。」

「そっか！よかったあ。あ、味噌汁もあるから。」

シンジは喜び、水筒を取り出し蓋を膝に置き左腕で支え器にして味噌汁を出した。それをレイに渡す。レイは、膝に小皿を置きシンジから味噌汁を受け取り口をつけた。

「美味しい…。シンジ君…、料理が出来るのね…。」

「まあ、簡単な奴ぐらいしか作れないけどね。レイさんの口あって良かったよ…。」

笑顔で話すシンジを見てレイは、先日感じていた問題を解こうとするがレイにはまだ分からない様だった。2人は、昼休みの時間一杯に弁当を食べていた。

学校が終わりネルフ本部にレイと一緒に来ていた。だが、シンジは少しずつ左目だけの生活に慣れて来たが、まだ普通の歩きの速度では転びそうになる為レイに断って手を引かれてネルフに到着する。

「レイさん、ごめんね？こんな事頼んで。」

「構わないわ、別に。…いつかまた、食べたいわ。シンジ君のお弁当…。」

余程気に入ったのか、レイはシンジの料理に虜になっていた。それ聞いてシンジは、顔が喜びに満ち溢れていた。

「よし、レイさん。明日から君のお弁当は、俺が可能な限りに作ってこよう。リクエストがあれば何かあれば聞くけど？」

「無いわ…、シンジ君が作る物なら間違い無いわ。」

無表情でレイはシンジに言うと、シンジはワナワナと体を震わせていた。

「レイさん、可愛い！抱きしめていい!？」

「…何を言ってるの？」

2人は仲良くなっていた。

その後、レイと別れてシンジはリツコの部屋にいた。

「シンジ君、レイと仲が良さそうね。凄いわね、あの子癪が強いのに。」

「まあ、まだまだ壁は厚いですが…。そう言えば何で俺は呼ばれたんですか？リツコさん。」

椅子に座ってシンジは首を傾げていた。リツコは、机から視力を図る板を取り出し壁に貼り付けていた。

「先程、治療ポットに入ってもらったわよね？それに出たデータから見て、そろそろ治ってきたらしいのよ。その確認よ。」

リツコは壁に貼り終わると、シンジに近づき右眼にかけられた眼帯を外す。シンジの右眼は瞑っていた。

「じゃあ、シンジ君。目を開けて見て。」

リツコの指示通りに、ゆつくり右眼を開けるシンジ。すると少しボヤいている右眼の視界が広がった。

「うわー、相当に視力下がったなあ。右眼。」

「大丈夫よ、今は眼の機能が一時的に落ちてるだけだから。さあ、シンジ君。左目を閉じて、これ見える。」

リツコはシンジから離れて、先程に壁に貼り付けた視力を図る板を物差し棒で指摘する。

「うーん、リツコさんの方向に向いた○ツクマン！」

「これは見えてるわね…。後、シンジ君？真面目にやりなさい。」

元々シンジの視力は、1・5の視力があつたが今の右眼は1・0まで下がっている事にわかった。

「…これぐらいなら、シンジ君一時的に眼鏡をかけて調節しましょう。」

後で、渡すわ。」

「分かりました。」

シンジが返事すると、リツコは次にシンジの左腕に手をかける。

「こつちも大丈夫そうだから、ギプスをとってしまいましょ。」

リツコは、シンジの左腕につけられていたギプスを取り外す。

「どう、シンジ君？痛みはある？」

ギプスの取れた左腕を、少し振り左手を握ったり開く。シンジは顔が笑顔になる。

「大丈夫ですね、今の所は痛みは無いです。」

「では、完治したわね。でも、いきなり重たい物や負担がかかる事は控えてね？」

リツコはシンジに注意をする。

「シンジ君、この後時間大丈夫？また、良いお菓子が入ったのよ。」

「本当ですか？大丈夫ですよ、一時間ぐらいなら。それ位に帰らないとミサトさんのご飯とペンペンのご飯を作らないといけないんで。」

リツコは呆れた顔になる。

「ミサト、シンジ君に何をやらせているのよ。やっぱり、その為に引き取ったじゃ無いかしら？」

「本当ですよ、誘拐に近い事をされて。連れて来られた先が、ゴミ屋敷でしたから。半日近く掛かりましたよ、片付け。しかも、俺だけで…。」

「……………」

手を顔に被せる様にして何も言えないでいたリツコ。そしてリツコは気を取り直し、シンジの左手を取る。

「今から遅く無いわ、今日から私の家に来ない？ 歓迎するわ！」

「それで一緒になり、少しずつ自分の助手にする計画が…。」

(#。皿)

リツコはまだシンジを助手にする事を諦めていなかった。その後、お茶会が始まりリツコとシンジは楽しく話していたが途中でリツコのしつこいヘッドハンティングがあったのは、また此処だけのお話。

「ただいま。」

シンジは、ネルフでの用事を終わらせ家に帰ってきた。外は暗く夜になっていた。

「ギャツギャツ！」

リビングから走ってきたペンペン。もうペンペンは、家を綺麗にしてキッチンとご飯を与えそして可愛がってくれるシンジに懐いていた。玄関に立つシンジを見て、走る足を止めシンジの前に立ち見上げた後お辞儀をするペンペン。

「ギャツ！」

「ただいま、ペンペン。偉いなく、よしよし。」

礼儀正しいペンペンにシンジは靴を脱ぎ、廊下に足をつけるとペンペンの頭を優しくなでる。

「ギユウ。」

「ペンペン、これからご飯だから待っててくれるかい？」

それを聞いたペンペンは、シンジが持つカバンを掴む。

「どうした、ペンペン？カバンなんか掴んで？」

「ギヤツギヤツ、クエ〜！」

「もしかして持っててくれるの？」

「ギヤツ！」

唸づくペンペン。シンジは嬉しそうに顔を笑顔にしてお願いする。

「じゃあ、俺の部屋の机にお願い。」

シンジはペンペンにカバンを渡すと、声を上げながら家の奥に走っていくペンペン。

「クエー〜！」

「ふふつ。本当に愛い奴。」

シンジはリビングに入り長袖のYシャツを捲り、椅子にかけたエプロンを身につけご飯の用意をし始める。

20分後

「キユウ〜…。」

ご飯を食べ終えたペンペンは、居間で胡座かくシンジの足の中で仰向けになりお腹を撫でられ気持ち良さそうに寝ていた。シンジは撫でながら、居間のテレビを見ていた。

「ただいま、私の城よ〜。」

玄関から聞こえるミサトの声が聞こえてきた。シンジはペンペンを起こさないよう優しく抱き上げペンペンの部屋に入れてあげた。

「お帰りなさい、ミサトさん。待つてましたよ。」

リビングまで歩いてきたミサトに、声をかける。ミサトは嬉しそうにシンジを見ていた。シンジは不思議に思い首を傾げた。

「どうしたんです？ミサトさん。」

「やっと怪我が治ったわね、シンちゃん。これでお構い無くシンちゃんにスキンシップとれるわ〜！」

ミサトはシンジに近づき、抱きつき頬釣りをし始めた。

「はいはい、ご飯冷めますよ。せつかくミサトさんを待ってたのに…。」

「ごめんごめん、じゃあ食べましょう。」

抱きつくミサトはシンジを離れた。

「じゃあ、座って待っててください。シヨタサトさん。」

「がつ!？」

(。D。)(!〜(・・))

そして、ミサトは美味しくシンジの食べてその後は風呂に入る。先に入ろうとしているミサトは食器を洗うシンジに言う。

「シンちゃん、一緒に入らない〜。」

「入っても良いですが、加減できませんよ?。」

食器を洗いながらシンジはしれつと言う。

「シンちゃんもやっぱり男の子だからね〜、狼なってしまったら私困るな〜。」

ミサトは体をクネクネして誘惑する。それを見たシンジはイラつとする。

「何を言ってるんですか、背中を流す話してるのに。エロいですわ〜、

エロトさん。」

「がつ!？」

ミサトは一生、シンジに口で勝てる日がなさそうだ。

1日が終わり、また新しい日に向かう。

朝、5時頃にシンジは起床。

「ふあ〜…。」

シンジはベットから体を起こして、体を伸ばす。

「……………ふう。」

そして、ベットから出て机に置かれた髪を縛る輪ゴムを後ろ髪を縛る。

「よし〜。」

シンジは動物の書かれた可愛らしいパジャマから、ジャージに着替えて家を出た。マンションの前で軽く準備体操をしてから少し走り



始めたシンジ。

「今日も良い天気だなく、洗濯日和だな。」

走りながら子供のセリフでは無く、主婦のような事を呟いていた。

10分位走っているといきなりシンジは、アクロバットに途中に見つけた階段の手摺に飛び乗り足で乗り滑って行く。

「ひゃっほー！」

シンジは手摺の終わる手前で、飛び前中して地面に着地すると着地した衝撃を逃がす為に体を転がし受け身をとる。流れるように立ち、再び走り壁があれば壁走りをして塀があれば電柱を使い三角飛びで塀に乗ると、再び塀の上で走り始める。家の屋根に、音の無い走り方をしながら屋根から飛び降り電柱を一瞬掴み勢いを殺し地面に着地して受け身を取り尽かさず走り去って行く。

これを見ていた新聞の人が一言。

「忍者…?」

フリーランニングを終わらせて、マンションに帰ってきたシンジ。

「やっぱ、楽しいなく。新しい土地でのフリーは。今日は軽くしとかないとな。左腕と右眼がまだ戻ってないし。」

そんな事を言いながら、マンションの前でクールダウンしているシンジ。

シンジの護衛・監視していた諜報部員は余りのシンジの行動に口をあぐりとして驚いていた。そして、一度諜報部員の監視から逃げられしまった事はここだけの話。

家に戻り、シンジは少し汗をかいた体を流す為にシャワーを浴びた。

(見た目が女の子に近いが男の子である為に、入浴シーンカット。)

シャワーを浴び終えて、風呂場から出ると居間でペンペンが起きていて新聞を見ていた。シンジはパンツ一丁で、ペンペンに声をかける。

「おはよう、ペンペン。」

声をかけられて振り向くペンペン。

「クエー。」

ペンペンもシンジに返事を返した。そして、ペンペンは新聞を畳みシンジに渡す。

「ギャツ！」

「ありがとう、ペンペン。俺は後で読むから。さっ、ご飯にしよう。ペンペン。」

シンジは着替える為に部屋に戻り、学校に行く為に制服に着替えてリビングに戻る。

「クエー。」

戻ってきたシンジを見るとペンペンは鳴く。

「どうした、ペンペン？」

「ギャツギャツ。」

ペンペンは身を低くしたシンジに、長い爪を持った一本の爪で方向を指した。そこにはシンジがまだ準備していなかったテーブルにご飯と味噌汁のお椀を逆さまに置き、箸も箸置きに置いてあった。とてもペンギンがやったと思えない光景だった。

「これ、ペンペンがやってくれたのか？賢いなく。それとありがとう、ペンペン。」

「キュウ〜。」

シンジはペンペンを両手で持ち、クルクルと回りながら褒めるシンジ。褒められたペンペンは嬉しそうに鳴く。そして、回転を止めペンペンを下ろしてシンジはペンペンにお願いする。

「ペンペン、お願いがあるんだ。ミサトさんを起こしに行ってくれない？」

「ギャツ！」

シンジのお願いに承諾するペンペン。軍人のように短い腕を使って敬礼していた。

（ハハハハ）

そして、ペンペンはミサトの寝ている寝室に向かって歩いていった。

「よし、作るか。今日は、何しましょうか？」

シンジは、朝食とお弁当を一緒に作っていると足に突つかれる感触があり足元を見る。

「キュウー！」

長い爪を親指以外を器用に畳み、オツケーサインをしているペンペン。これは間違いなくペンギンなのだ、普通？のペンギンに出来るのかは別のお話。

「ありがとう、ペンペン。じゃあ、ご飯はもう少しで出来るから待ってね。」

「クエー。」

ペンペンは、シンジの言葉を理解して椅子を引き飛び上がり座る。今の光景を他の人に言ったら、高性能なAIを積んだペンギンロボットって言わない限り信じてくれないだろう。それ程にペンペンは凄かった。

「ふあ〜…。おはよ〜う、シン…ちゃん。」

リビングにまた一人、ミサトが寝ぼけ眼で入ってきた。

「おはようございます、ミサトさん。口を開けて上を向いて喉を閉めてください。」

シンジはキッチンで料理をしながら、ミサトにそう言う。まだ頭が回りきれてないミサトは、シンジの言う通りに口を開けて上を向いて喉を閉めた。

「ほいっー！」

シンジは何かを投げ、放物線を描くようにミサトの口の中に入る。

「シューー！超！エキサイティング！」

「!!??」

シンジは楽しそうに声を上げ、ミサトは口に入ってきた物に吃驚していた。

「…っすっぱーいー！」

「もう一度おはようございます、ミサトさん。寝ぼけた頭に梅干しはどうですか？目覚めたでしょう？」

ミサトは顔を窄めていた。ミサトの口に入れたのは梅干しだった。「…はあ、吃驚したのと酸っぱいので目覚めたわ。」  
「では、ご飯食べましょう。ペンペンも待ってくれたんだし。」  
人間2人とペンギン一匹が囲う朝の食卓だった。

### 第3新東京市、第壺中学校。

生徒が通い学ぶ中学生が、朝中学校に向かって歩いていった。シンジは少し早めに登校していた。

「おはよーロッパ連合軍ー!」

シンジは2年A組に入り変わった挨拶をしていた。

「おはよう、碓君。」

「いつも元気だな、碓。おはよう。」

何人か返事を返してもらい、シンジは自分の席に近づきカバンを置く。そして、カバンの中から一つ弁当を出しもう登校しているレイに近づくシンジ。

「おはよう、レイさん。」

「…おはよう。」

レイは控えめな返事をする。まあ、レイの場合は控えてるのでは無く口数が少ないだけだろう。

「はい、レイさん。お弁当。昨日言った通りに作ってきたよ。」

「…あ…、ありがとう。」

シンジはお弁当をレイに渡し、渡されたレイは少し顔を赤くする。来ている生徒達はヒソヒソと話していた。

(本当に出来てるじゃない?)

(もう!?手が早いわね、碓君。)

((許されずリア充!!))

最後のは男子達の声だろう。

「じゃあ、後で感想お願い。ちゃんと中身はベジタブルな物しか入ってないから。」

そう言つて、シンジは自分の席に戻る。

数分後に授業が始まる所、教室の扉が少し強く開かれた。そこに短髪でジャージを来た男子が立っていた。

「鈴原！あなた、数日無断で学校を欠席をしてー。」

1人の女子が鈴原という男子に注意をしていた。この女子は後ろ髪を二つに縛っておりそばかすを持ち素朴な女の子「洞木ヒカリ」と言う名前を持つ女子だった。このクラスの委員長をやっている。

「じゃかあしい！黙つとれ！」

そう鈴原は、洞木に言い残し席をかき分けるようにシンジに向かつて歩く。

「ちよつと、トウジ!?」

相田は鈴原を停止を求めるが、鈴原はシンジの目の前に近づくとシンジの使っている机を叩く。

バシッ

「転校生!!ちよつと、顔貸せや。」

怒った形相でシンジを睨みつけた。

「いいよ、洞木さん。少し授業遅れるのを先生に報告してくれないかな?ちよつと話がありそうだから。じゃあ、行こうか?鈴原君。」

鈴原は先に教室を出るとシンジは笑顔で洞木に頼み事をすると、鈴原の後をシンジは追った。それを見ているしか出来なかつた洞木は悲しそうだった。

体育館裏に移動した鈴原とシンジ。暑い日差しを照らし地面を熱していた。シンジの後ろから相田が困った仕草をしながら着いて来ていた。

鈴原はシンジに振り返り話し始めた。

「えーか、転校生。よう聞けや。ワシのオトンと妹はなあ、今怪我して入院してんねんぞ！オジーがおまえのおる研究所勤めで看病するん

はワシしかおらん！」

なぜ、鈴原がシンジがネルフに属しているのを知っているのか不思議に思い着いて来た相田を見ると、相田はシンジと目が合い物凄い勢いで逸らした。それでシンジは理解した。

「まあ…、ワシの事はどうでもええ…。そやけど、オトンは生活の為に働いていたのを意識が今の所戻っておらず、そして妹の顔に傷でも残ってみいっ！ぺっぴんが台無しや!!可哀想やろ?それが、誰のせいやと思う…?」

シンジは薄々勘付いていた。鈴原はシンジに近づく。

「オマエのせいや!オマエが無茶苦茶に暴れたせいで、ビルの破片がオトンと妹に当たってもうたんや。どないしてくれるんや!」

確かに、鈴原の言う通りシンジは街中でエヴァを動かし多少の街の被害は出していた。だが、それ以上の被害は出さず逃げ遅れた人まで助け使徒を街の外で倒して街を救った人物に言う言葉ではない。だが、シンジは頭を下げて謝った。

「俺の所為で鈴原君の家族に怪我をさせしまい、申し訳ない…。」

シンジの中学生とは思わせぬ態度に、一瞬鈴原は戸惑うが罵声を飛ばす。

「なめとんのか、ワレ!!謝っただけで事が済まされるかあ!」

「お、おい。トウジ…。その辺でやめとけよ…。」

殴りかかろうとする鈴原を止めようとする相田。

「鈴原君に聞くよ。俺はどうすればいい?エヴァに降りてネルフを辞めればいい?それと気が済むように俺を殴る?」

シンジの落ち着いた対応を見て、鈴原は相田の拘束から外れシンジに殴りかかった。シンジは鈴原の拳を捉えていたが敢えて動かなかった。

ガッ

鈍い音が体育館裏で響く。シンジは鈴原に殴られて体を傾ける。

「オイ!大事なパイロットに、なんてことを!」

相田は声を上げる。シンジは殴られて口の中が切れた為に、血を吐き出す。そして、鈴原に向き直す。

「おーし、やる気かな？くるんならこいや！」

「お、おい！トウジ！いい加減に…。」

鈴原は好戦的になり、相田は本気で止めようとする。そこでシンジは右手を一度上げ、少し経ってから下ろした。鈴原達はシンジの行動が理解できなかった。

「本当に申し訳ない、鈴原君の言い分もわかる。家族が傷つけられれば誰でも怒るだろう。俺も人類を守る為に、この肩に乗ったプレッシャーは重いんだよ…。だから、君に選択肢を与えるよ。後ほど、鈴原君の家族に謝罪と慰謝料と生活費を出してこれからの戦いで気をつけて戦おう。だが、それが許されないなら…。」

シンジは左ポケットから取り出す。2人はシンジの取り出した物を見ると驚愕した。シンジの手の中に小型の拳銃があった。

「俺を殺して欲しい。それで償えるなら、俺は捧げよう。」

シンジは鈴原に近づくと2人はビクツツとして恐怖のあまり、動けなかった。

「だけど、俺が死んだらエヴァに乗る人がいない。それだと、人類が滅亡してしまう。だから、鈴原君。君が乗って戦ってくれ。」

鈴原との距離が、さほど無い距離になりシンジは鈴原が殴った手を掴む。

「確かに俺には護衛・監視をしているネルフの諜報部員が近くにいるから殺すのは困難だ。」

そして鈴原の手にシンジが持つ小型の拳銃を持たせた。

「だけど今さつきその監視を外したから、簡単に俺を殺せるようになったよ？さあ、どうする？鈴原君、選んで。」

シンジは小型の拳銃の先を自分の胸に向かせて、周りに見えないようにシンジは鈴原とより一層距離を詰める。相田はその現場を見て腰を抜かしていた。小型の拳銃を持たされシンジの胸に向けトリガーを指をかけられている鈴原はそれ以上に恐怖をしていた。今自分の指には、人の命を掴んでのと変わらないのだから。鈴原の体は、恐怖の余りに震えて顔を蒼白になっていた。

鈴原はシンジに土下座をさせて謝罪をさせ慰謝料を貰えば納得

する気だった。だが、今の現状にはなるとは考えられずただ今は恐怖で体を震えさせていた。

「ああ、震えでトリガーを引かないでくれよ？俺は、君に選んで撃つか撃たないかを聞いているんだから。」

シンジはしれつと自分の命を、相手に持たせているのに冷静に鈴原に質問をしていた。そこに洞木がやってくる。

「こらあーいつ迄やってるのよ、あんた達っ！」

洞木が声を上げると、止まっていたと勘違いする程に冷たい空気が暑い日差しでの暑い空気に戻っていた。シンジはすかさず鈴原の手から小型の拳銃を取り、誰にも見えない速さで左ポケットに仕舞った。

「やれやれ、鈴原君が早く決めてくれないから…。まあ、後でもう一度聞かよ。じゃあ、教室に戻ろうか？」

シンジは、何もなかった様に話す。鈴原は、正気を取り戻し先程の勢いは無くなりながらシンジに言う。

「ええか、ドアホ…。これだけは言わせて貰う。今度戦うときや、足元をよお見てから戦えや…。わかったか。」

そう言い残し、腰を抜かした相田を立たせ肩を組み去って行った。一人残されたシンジは、携帯電話を取り出し電話をする。

「すみません、もう大丈夫です。仕事に戻ってください、ありがとうございます。」

そう言い電話を切ると、シンジはパタリとその場を倒れた。そして体に震えが走っていた。

「人類を守るのは骨が折れるなあ、自分の命を賭けなくちゃいけないんだから。ハハッ…。」

シンジは一人、体育館裏で眩き乾いた笑いを漏らす。その場を学校の廊下からレイは無表情で見下ろしていた。



その数分後、警報機が鳴り響く。

ウウウウウウウ

『ただいま、東海地方を中心とした関東中部全域に特別非常事態宣言が発令されました。速やかに指定のシェルターへ避難してください。繰り返し、住民の皆さんは速やかに指定のシェルターへ避難してください。』

東京湾の向こうから、巨大な物体が海に発生している陽炎からぼやけながら第3新東京市に向かっていた。

再び始まるエヴァと使徒との戦闘が始まろうとしていた。

#### 第4の使徒

今回はどんな事が起きるかは、誰も知らない。

## 止めない足

鳴り響く警報機、第3新東京市は使徒迎撃形態へ移行していた。

「…はあ、使徒かあ。なんかこう色々あり過ぎて、気が滅入りそうだな。」

シンジは学校にも警報が鳴っているのを聞いて少し愚痴を零した。倒した体を起こして、溜息を一つ吐き重い腰を上げた。制服に付いた砂をはたき落とすとズボンの後ろポケットから携帯電話が震えていた。

それに気づいたシンジは、携帯電話を取り出し耳に当てた。

「もしもし?」

『もしもし、シンジ君? ミサトだけど、今中学校ね? 使徒が接近中の為、急いで本部に来て!』

「了解です。諜報部員が用意してくれている車で、そっちに向かいます。」

『よろしくね!』

ブチッ

ツーツー

シンジは、携帯電話を仕舞い校門に向かう為その方向に向きを変えると少し離れた場所にレイが立っていた。不思議に思ったシンジはレイに近づく。

「あれ? どうしたの、レイさん。先に行ってたんだと思ってたけど?」

シンジはレイに聞くと、レイは紅い目でシンジを見ながら無表情で言う。

「…シンジ君、何を怯えているの?」

レイの一言で、シンジの体はピシリと固まる。そして、レイはシンジの手を持ち校門へと向かった。

(俺は怯えているのか…?)

シンジは内心で負の感情が渦巻いていた。

(人に殴られてまで、エヴァに乗るべきか…。本当に俺が人類を…、守れるのか…。)

そんな思いを持ちながらレイに手を引かれながら校門に着き車に乗った。シンジは考えが纏まらずネルフに向かった。

ネルフ本部

「波長パターン青と確認、使徒です…。」

日向は、モニターに映るデータを見てミサトに報告する。

「総員、第一種戦闘配置！」

ミサトはネルフのスタッフ達に命令をかける。すると、ネルフ本部内が戦闘配置のアナウンスに変わる。ネルフのスタッフ全員が慌ただしく動き回っていた。

「民間人の避難、無事完了しました。」

「第3新東京市は戦闘態勢に既に移行しています。」

そびえ立つ数々のビルは地下に収納されて行き、第3新東京市は使徒迎撃要塞都市になり変わる。

紅く紫が入った色に頭だと思われる部位は、丸く木の葉のような頭でデカく目があった。体は筒のように寸胴で首元にコアと呼ばれる部位があり、腕だと思われる部位はT字になっている使徒が第3新東京市に向かつて来ていた。

使徒が東京湾から陸上に入ると、凄まじい数の砲撃が使徒の全方位から飛んで来ていた。だが、凄まじい数の砲撃を当たっているに聞かず使徒の進行は止まらなかった。

「国民が出した税金を無駄遣いとは…。」

リツコはボソリと呟く。今、ネルフにはゲンドウと冬月は不在の為にミサトが指揮権を持っていた。

「セカンドインパクトから15年経ってから、一体目の使徒が襲来だったのに今回は一週間も経たないで来たんだから。せっかちな奴ね、女性にはモテないタイプね。」

腕を組み使徒相手に皮肉を言うミサト。

「まあ、先の戦闘での街の被害は無いに等しいから今回は存分にシン

ジの援護は出せるけど…。でもあの子、街中では戦おうとしないのよね…。」

「シンジ君は、「街と皆の居場所を守ります」って思ってるんじゃないかしら？あの子、ヒーロー的な気持ちで使徒と戦ってるかもね。あつ、そう言えばシンジ君にプラグスーツを渡してなかったわ。ミサト、此処は任せるわ。」

リツコは、発令所を後にした。

(シンちゃん、無茶しないでね…。)

ミサトは、シンジの事を内心で心配をしていた。

「葛城一尉！委員会からエヴァンゲリオンの出動要請が来ています！」

長髪のおペレーター、青葉が無線の受話器を持ちミサトに報告する。

「煩いやつらね、言われなくても出撃させるわよ。」

ミサトは、愚痴を零すように小声で呟いていた。

学校から本部に到着し更衣室で着替えるシンジ。

「ふう、なんか変なスーツだなあ。今からダイビングでも行けるスーツだよな、これは。」

シンジは、リツコに渡されたプラグスーツを着替えた。ツナギの様な形で、首の所から足から入れて着る。足の爪先から首まで纏い、最後にリツコに言われた通りにプラグスーツの手首にあるスイッチを押すとプラグスーツの中の空気が抜けてシンジの体にフィットする。

「おお！凄いな、このスーツ！ぴっちりするのに動き辛くないし、窮屈じゃないし暑くない。いいねえ！」

プラグスーツの性能を、体験してはしゃぐシンジ。その後、シンジは落ち着き深呼吸をする。

「すー！はー！っ、よし！行くか、使徒を倒しに。」

重く感じる足を動かし、更衣室を出るシンジ。

第334地下避難所に、非難する民間人の集団がいた。

「ちっ、ただだよー」

舌打ちをした眼鏡の少年、相田が無線テレビを見ながら愚痴を零す。隣にいた鈴原は、シート敷いた床に座り両手で後ろに突っ張りながら相田に気になり聞いた。

「何がや？」

「見ろよ、ほら…。」

相田は鈴原に無線テレビの画面を見せる。

「また文字ばつかし。僕ら民間人にはなんにも見せてくれないんだ、こんなビックイイベントだって言うのにく〜！」

「お前。ほんつまに好っきやなあ、こういうの。」

それを聞いていた鈴原は、相田の熱心さに呆れていた。両手を握りあい、祈るようにして唸る相田。

「うう〜〜〜。一度だけでいいから見たい。今度は、いつ敵が来るか分からないし〜…。……………」

先程から障しがった相田は突如静かになる。そして相田は顔下げ影が出来る眼鏡が怪しさを纏った光を放ち、相田の口の端がつり上がる。

「あのさ…、トウジ？話したい事があるんだけどさ…。」

「な、なんや？急に…、えらいな笑いをしとるが…。」

相田の怪しい顔つきに、額から冷汗を流す鈴原。相田と鈴原の付き合いは小学生から続けている為、お互いに顔つきで何を考えているのかを大まかにわかってしまう。鈴原は、相田に疑いの目を向けた。

「ケンスケエ、お前。途轍もない悪い顔しとるぞ？」

「トウジ、場所変えて話がしたいんだけど…。良いかな？…な？」

必死に相田は説得していると、鈴原はフツと笑う。

「じゃあないのお。じゃ、ケンスケ…。小便にいくか。」

鈴原は重い腰を上げるようにゆっくり立ち上がり、委員長である洞木がいる方向に体を向ける。それを見た相田も立ち上がる。二人は立ち上がり洞木の方に近づいた。

「委員長お。」

鈴原は、同じシートに座る女子と話をする洞木に後ろから声をかける。鈴原に声をかけられ、洞木は後ろから呼ばれた為後ろに振り向く。すると洞木は、問題児とも言える鈴原を見て微妙な顔になる。

「何?」

「儂等二人…便所やあ。」

洞木は鈴原の言葉で呆れた顔になり、洞木と話していた女子は不潔と思ったのか鈴原から視線を外していた。

「ちゃんと済ませなさいよね…。」

「えらいすまんなあ。」

洞木に了承を頂き、鈴原と相田の二人は避難所の便所に移動した。

場所は変わり男子便所。

「あのさ、トウジ。手伝ってくれないか?非常口の扉を開けるの。」

「はあ!?外に出たら、上のドンパチに巻き込まれるで!」

男子専用の便器で二人は並んで用を足していた。相田の言葉で、鈴原は驚き声を上げていた。

それもその筈、相田は避難所から抜け出して第3新東京市の街で戦う使徒とエヴァンゲリオンを見たいだけに危険を冒してまで外に出ようとしているのだから。

「死んでしまっでえ、外に出てもうたらあ!あかんでえ…。」

友達が危険な事を止めようとする鈴原。だが、相田は意志を曲げないで鈴原を説得し始めた。

「死ぬ前に一度でも良いから見たいんだよ。それにトウジも見に行く義務があるよ。パイロットである碇を、あんな思っ切り殴ったんだぜ

…。あいつが、「乗らない」って言い始めたら俺ら死ぬぜ？そんな事をしたんだ、トウジは。そしてあいつの意志も、今日ので良く分かってるんだろ？命がけで戦っている碓は、学校で聞かれても嘘をついて自分で自分をパイロットを隠した。普通だったら、自慢しても良い筈なのにそれさえもせず。ましてや、謝ってる碓にトウジは殴るし。それは前の戦闘で、トウジの妹と親父さんが入院したけど碓も頑張ってる戦っている所に事故で怪我したんだろ？碓だって、街を守る為に敵を街から追い出して倒したんだから…ニユースに上げられてた爆発後も敵を倒した後見たら碓が街を救った事がよく分かるよ。それでも、納得できないならトウジが実際に見てみればいいんじゃない？後、なんで怪我したのか聞いてないの？」

鈴原は、長く喋る相田に返答も出来ずにいた。そしてやっと鈴原が喋れるようになったが、相田が言う妹と父親が何故どの様な事で怪我したのか鈴原は、はっきりとは聞いていなかった事に気づいた。

「そう言えば、ウチの妹とオトンが怪我した時の状況を聞いてなかったわ…。その時、もうケンスケからあの転校生がウチの学校に転校してきたって聞いておって…。その後、妹とオトンがスーツを来た男の人から聞いてワイ…。スーツの人が話している最中に、一目散に学校に向かったんやった…。」

鈴原は相田から、第壱中学校にエヴァパイロットのシンジが転校して来たことを知らせていた。鈴原はその時にスーツの男であるネルフの諜報部員から中途半端で話を聞いた為に、妹と父親が先の戦闘で怪我したのがシンジの所為であると決めつけていた。

「それって、家族が傷ついて頭に血が昇ってスーツの人から中途半端で話を聞いて学校に来て碓を殴ったって訳かよ。…もしかして、その後二人の怪我の理由を話そうとしていたんじゃないのか？スーツの人は…。ていうか、その人ネルフ関係者だな。」

鈴原は少しずつ顔をしかめていた。シンジは、あの二人を守った上で事故で怪我をしただけでそれを自分は家族が傷ついて頭に血が昇り、詳しく理由も聞かずにシンジを殴ってしまったのでは無いかと罪悪感に襲われていた。

「もしかして、ワイ。…えらいことをしたんじゃないか?」

「そうだよ! やっぱりとウジも見に行くしかないんだよ。碇がどんな戦い方してるかを。それで確認出来るじゃないか、よし行こう!」

二人は用を足すのが終わりズボンのファスナーを上げる。

「ケンスケ、ホンマお前は欲望に素直なやつちやな。」

「へへっ。」

この二人の行動で大変な事が起きるとは、まだ二人は知らなかった。

『シンジ君! 用意は良い!』

エントリープラグ内で鳴り響くミサトの声。シンジはエヴァに乗り、出撃の待機をしてコックピットの座席で身をリラックスをさせて目を閉じていたがミサトの声でゆっくり目を開ける。

「はい…。いつでも。」

『いい? シンジ君、使徒のA.Tフィールドを中和しつつ出撃後に出すパレットライフルでの一斉射撃。先手で使徒に攻撃をして。打ち方は、相手にライフルを向けるとセンターが出るからそれに合わせる事よ。』

「はい。」

リッコに使徒との戦い方を言われてる中、シンジは聞きながら違う事を考えていた。

(はあ…。人に殴られてまでエヴァに乗っていいのだろうか? そして、悪い事したなあ。鈴原君に。俺の意志表現として、護衛用の拳銃を渡して命の選択させるなんて正気を疑う事をして…。でも、それぐらいしか俺には出来ないからな…。償い方は。)



そんな事を考えている中、シンジを乗せたエヴァ初号機は射出口に運ばれていた。

(今日のエヴァは、視点が俺本人だけだな。心無しか前回とは少し違う感覚だな…。)

シンジはエヴァとのシンクロに違和感を持っていた。すると、リツコからの通信が入る。

『シンジ君、言っとく事があるわ。今回の貴方とのエヴァのシンクロ率が、前回よりも低いから少し動きが遅くなる事を頭に入れといenne。』

今のシンジのシンクロ率は、62.1%である為に前回より低いためシンジの視界は本人だけだった。そして、リツコはその事をシンジに知らせていなければ前回との違った動きでシンジはパニックになっっていただろう。

「はい、わかりました。」

『じゃあ、頑張つてね！エヴァ初号機、発進！』

ミサトの号令が入ると、エヴァ初号機を固定したカタパルトが電流が走り地上に向かって射出された。

山の中に小さな神社があった。それに繋がった石段の階段に二人の男子が急いで息を切らせながら登っていた。二人は避難所から抜け出し、警備の薄い山中での非常口から外にでていた。

「お、おい。待ちいな、ケンスケ！早すぎるで…。」

相田の後をついて行く鈴原が、静止の言葉をかけるが相田は耳に入らず登っていく。登り切った相田は、第3新東京市の街を全体に見回せる場所を見つけ身を低くして右手にカメラを持ち撮影を始めた。後から鈴原も相田に追いつき同じ場所で街を見下ろした。

「き、来たっ！」

使徒が街に入り、有る程度進むと使徒は移動を辞めた。使徒は移動

の際に身を横にしていたが、移動を止めるとその場に身を起こすように体を立たせる。その場を見ていた相田は、歓喜極まって嬉し涙を流す。それに打って変わり鈴原は、使徒の姿を見て微妙な顔をした。

「す…すごい！苦勞して来たかいがあつた！」

(あれが使徒つちゆうやつか…。気色悪う奴やな…。)

ガシャン

バシユウウウ

ゴゴン

すると、街に建つ一つのビルの中からエヴァ初号機の姿を表した。

相田は、すかさずエヴァ初号機にカメラを向ける。

「よっ！待ってましたあ!!」

相田と鈴原は山の中で使徒とエヴァを観客気分で見ている。

地上に出た初号機は、カタパルトから外れ一旦動きを確かめる為に右手を握ったり開いていた。

「少し動作が遅くなっているな…。ラグは2秒も満たないけど、心許ないな…。しようがない！行きますか!!」

初号機は射出された場所から、すぐにパレットライフルが出されているビルから受け取り使徒からビルに隠れているようにしていた体をパレットライフルを構えながら身を使徒の前に現した。

ドドドドドドドドドド

凄まじい勢いでパレットライフルの銃口から弾が繰り出されていた。しかし、使徒に着弾すると煙が発生して使徒の姿が徐々に見えなくなつて行つた。速やかにシンジは、パレットライフルを撃つのを停止させる。

「やっべー！このライフル、性能悪いだろ！」

『シンジ君、気をつけて！何か使徒がやってくるかも知れないわ!』

シンジはパレットライフルの性能に愚痴を漏らすとミサトから通

信で使徒からの攻撃を気をつけるように言う。煙が使徒の周りに舞い上がっている最中。

突然、煙の中から2本の光る鞭上の物が上段と下段に現れ初号機に襲いかかる。

「!!?くっ!」

それを見たシンジの行動は早かった。頭の中に、右足を物を踏んづけるように左手は物が飛んでくる所をキャッチするイメージをする。すると、初号機は右足で下段から迫る光る鞭を踏んづけて左手はもう一つの鞭をキャッチした。使徒の姿を隠した煙も消えていき、その姿を見ると使徒の腕と思われるT字から触手のように光る鞭を出していた。

今の使徒は2本の触手を、初号機に受け止められ何も出来ないように見えた。それを勝機に見えたミスアトはシンジは指示を飛ばした。

『シンジ君！ナイスよ!!使徒の攻撃手段と思われる鞭を2本とも受け止めるなんて！相手は何も出来ないと思うから、思う存分ライフルで撃つて倒してしまいなさい!』

初号機の左手は、使徒の触手を持っていると身を焼くようにバチバチと音を鳴らしながら左手を焼いていた。右足で受け止めた触手は、装甲の為にそこまで被害はなかった。

そして、何も出来ないと見える使徒に初号機は右手に持つライフルを向けると誰もが勝利を確信した。だが、現実はそう甘くなかった。

ドドドドドドドドドドド

初号機はパレットライフルを一斉射撃すると、使徒は数発受けた後。誰もが驚く光景が映し出された。

パ。パ。パ。パ。パ。パ。

無防備とも思わせていた使徒は、パレットライフルから撃ち出された弾を叩き落として行く。

「はっ!!?そんなアリかよー!」

『なんてインチキ!!』

余りの事にシンジとミスアトは驚きの声上がる。

パレットライフルの弾を叩き落とした物は、使徒のT字の腕とも思

わせるもう一つの方から、もう2本触手を出していたのだから。その2本で初号機が撃つパレットライフルの弾を叩き落とした。計4本の触手を持つ使徒を前にして、シンジは困惑する事になった。

「おいおい、マジか…。どないしろと…。」

余りの光景にミサトも何も言えないでいた。そこにシンジは、見てはいけない物まで見てしまった。

シンジが困惑してる中、エントリープラグ内で映像が端の方で光がチカチカしていた。シンジは、疑問に思いそれを見ると山の中から太陽光が反射していた。その原因を見る為に、初号機の顔をそちらに向けズームさせるとそこには2人の姿が見えた。これに対してシンジは啞然した。使徒から目をそらすようにした初号機を見てミサトは通信が入る。

『シンジ君!?!何をしているの!使徒から目を離すなんて!』

ミサトの声でシンジは正気に戻ると、使徒はもう2本の触手で初号機を叩き始めた。その際にパレットライフルとアンビリカルケーブルが触手で切られ、初号機の体に無数の傷が出来る。

「ぐあああああつ!」

『アンビリカルケーブル、断線!エヴァ、活動限界まで4分55秒!』  
『なんですって!?!』

使徒からの攻撃で、初号機のフィードバックがシンジに通じて痛みが走る。その時に初号機は、よろめいてしまい左手と右足で捉えた触手を離してしまう。

『シンジ君!活動限界まで後4分50秒よ!早く倒さないとヤバイわ!』

ミサトは、そうシンジに言うが使徒は4本の触手が揃うと2本の触手を初号機の首に巻きつけると軽々と待ち上げ投げられてしまった。

「おおあああああつ!」

その時に投げられた場所が、鈴原と相田がいる山の方に投げられているとは誰も知らない。

少し時は遡り、エヴァと使徒の戦いを見ている相田と鈴原は観戦していた。

「やつぱり、すごいなあ。ああ、俺も乗りたいなあ…。あれに。」

カメラを撮影しながら相田はそんな事を言っていた。鈴原は、初号機の戦い方を見て一人眩いていた。

「あれが、転校生の戦い方…。今は街に被害は無いようやけど…。でも、あそこまで動かしておれば…。」

その時、初号機が使徒の触手を2本を拘束して勝利の光が見えたが次の光景に2人は驚く。

「あああ！折角、もう少し勝てる所にもう2本の鞭が出るなんて！」

「本当に気色悪いやつぢやな…。」

そんな2人が言っていると、初号機は2人の方に顔を向ける。戦っている最中に初号機が使徒から顔を逸らし、余りにも此方を見ているようにしか見えないので、2人は自分達の存在が見えているのか疑問に思っていた。

「おい…。ケンスケ。あれ、こつち見いてないかあ？」

「あ…ああ。どう見てもこつちを向いているね…。」

隙を見せた初号機を見て、使徒は2本の触手で初号機を攻撃した後、に投げられてしまった。

「あれ、こつちに飛んで来てないか!？」

「ほ、ほんまや！は、早よ逃げへんと！」

相田と鈴原は、自分達の方に飛んできた初号機に恐怖で体を動かさないでいた。

「ぎゃあああああああああああああああつ!!!」

2人がいる場所に、初号機が落ちてきて凄まじい音と振動がその場を揺らした。

ドオオオオオン

凄まじい音を鳴らしたから、街から外れた山に仰向けのように墜落した。その間にも初号機の活動限界時間は進んでいた。

『シンジ君!?!大丈夫!日向君、エヴァのダメージは!?!』

『大丈夫です、いけます!』

エントリープラグ内で、2人の声が聞こえ少し気を失ってが意識が戻りシンジは頭を振りながら今の状況を確認する。

「いつつつ…。いつてえ…。あの野郎、絶対に痛みの分を返してから倒してやらあ!つと、その前に今何処まで飛ばされたんだ?あの2人さえ見つけさえしなければ…。てか、あの2人はなんであんな所に居たんだ?とりあえず、ここはど…どこ…!」

シンジは、体を起こしてエントリープラグのモニターで初号機の周りを見ると左腕の付近に小さな神社があるのを確認すると、シンジは顔を青ざめる。そして、左手の方に視線をずらすと2人の姿が見えた。人差し指と中指の間に身を小さくして恐怖で染めた顔を初号機の顔に向けていた。間一髪、初号機の体に下敷きは免れていた。

「本当に!なんでこんな所にいるだよ!」

『シンジ君のクラスメート!?!』

『何故そんな場所に!?!』

『!?!シンジ君!前!』

シンジは最悪な状況の為に声を荒げて、ミサトとリツコは何故2人はそこにいるのか分からず困惑していた。だが、使徒はそんな事を御構い無しに次の行動に移っていた。いち早く、それに気づいたミサトはシンジに注意を促す。

使徒は街中で、初号機を目標にしてその場に第3新東京市に来た時のように体を横にする。すると、使徒は4本の触手を前後に地面刺して固定して一度後ろに下がった。使徒の行動を見たシンジは何か

気づく。

「まさか!?!リッコさん!俺の声を外に聞こえるようにしてください!今すぐに!!」

『わ、わかったわー!』

シンジはリッコに自分の声を外に聞こえるように言う。エントリープラグ内のマイク状況が変わるのを確認するとシンジは外にいる2人に声をかける。

「2人とも!そこを動くなよ!!」

すかさずシンジは冷や汗をかきながら、左手をお椀状にして2人を覆い被さるようになった。

準備が整った使徒は、次の瞬間に自分の体を弓矢のように初号機に向けて凄まじい速度を出し飛んでいった。初号機に目掛けて飛んでいく使徒は、頭の部位を赤紫の色から黒く変色させた。

ズドオオオオオオン

「……かはっ!」

使徒は初号機を的に、頭から初号機の胸部に刺さるように衝突した。初号機は使徒からの突進により体が山にめり込ませる。その中、シンジは息を強制的に肺から酸素を排出されながら左手は動かさないうようにしていた。

使徒は素早く触手を動かさない初号機に、4本の触手を初号機の体を突き刺して行く。

「がああああああああっ!?!」

初号機の胸に2本の触手が刺さり、残った2本は両足の太ももに刺されていた。使徒の触手は、刺してなお初号機の身を裂こうとしていた。

『シンジ君!』

『初号機、活動限界まで後3分!』

ミサトの悲鳴に近い声でシンジの名を呼び、無慈悲に進む初号機の活動限界時間。シンジは痛みに耐えながら初号機を動かす。

初号機の左手は、2人を覆い被さる状態から少し2人から離れて手の平を広げる。

「2人とも！早く乗れ！」

シンジの声が2人に届き、2人は困惑しながら初号機の左手に乗り始めた。

『シンジ君!?!』

『一体、何をするつもり?!』

シンジはミサトとリツコの声に返答せずに、初号機を動かしている。2人を乗せた左手は、初号機の首の後ろに持つて行き、エントリープラグを固定している装甲を開き一度シンジはエヴァとのシンクロを切りエントリープラグを排出させた。

「2人とも、こんな中に早く乗るんだ！」

シンジの考えは、2人が外にいる為下手に動けば潰してしまうと思今の状況で安全な場所は初号機の中だと考えた行動であった。しかし、ミサトからの通信で停止の言葉が送られた。

『ま……待ちなさい!!?許可のない民間人をエントリープラグに乗せられると思ってるの!?!やめなさい!』

「じゃあ、どうしろと言うんですか!このまま2人とも乗せずにいたら、2人を潰してしまうかもしれないじゃないですか!!処罰は後で受けます!」

シンジはミサトの言う事を聞かずに、エントリープラグに2人を招き入れる。エントリープラグに入ってきた鈴原と相田は驚愕していた。

「な、なんや!?!水やないか!」

「カ、カメラがあ!?!」

シンジは、2人がエントリープラグに入ったのを確認するともう一度初号機にエントリープラグを仕舞い再びシンクロを開始させた。だが、シンジは徐々に不快な顔になっていく。

『神経系統に異常発生!シンクロ率42.6%まで低下!』

『異物を二つも挿入したからよ!神経パルスにノイズが混じっているんだわ!!』

エントリープラグ内で声が鳴り響くが、シンジは気持ち悪い中初号機を動かし使徒の触手を足に刺さる2本を抜いていた。



『バカッ！勝手に何てことすんのよ！他にいくらでも方法があるでしょ!?!』

ミサトは声を荒げてシンジに言う。それを聞いたシンジは少しカチンと頭にきていた。

「…くそつたれ!」

初号機は使徒の体に右足を入れ、足から抜いた触手を自分の方に引き込み横に投げ捨てる。その際に胸に突き刺さる触手も抜けた。初号機に投げ捨てられた使徒は隣の山に激突していた。

『エヴァ初号機、活動限界まで後1分59秒!』

『今よ！後退して!』

ミサトの撤退命令が入り、シンジは初号機を立たせると使徒も立ち上がり4本の触手を縦横無尽に振り回していた。それを見ると使徒は初号機を逃がさないとしても言っているような行動の速さであった。

『くっ！なんて奴…!』

「なあ、転校生…。」

ミサトは使徒の行動を見て悔しがっている中、シンジは後ろから声をかけられる。その声は鈴原であった。使徒の攻撃に注意している為、シンジは顔を向けず返事をした。

「なに？鈴原君。」

「あ…いや。転校生は、こないな危ない事してるんやなと思って…。」

「言い方キツイけど、君達2人の所為とも言えるからね。何故、こんな所にいたのかは今は聞かないけど。」

シンジの言葉で、後ろにいる鈴原と相田は顔を歪める。あそこにいる理由が理由である為に。

「すまん、転校生。いや、シンジと呼ばせてくれ!ワイは勘違いをしておった!妹とオトンが怪我がしたのはシンジの所為やなく事故と言う事を。こないに頑張つて戦つて、ましてやワイらまで助けて。ホンマに、あんがとう!」

「本当にごめんな、碇。そして助けてくれてありがとう。」

シンジは2人からの感謝の言葉を聞き、少し気持ちが高まる。少し笑みも込み上がっていた。

「2人とも、礼を言うのはまだ早いんじゃない？使徒を倒さないと、俺ら死ぬかもしれないんだよ？後、鈴原君と相田君。名前で呼ばせてもらうよ。トウジ君、君は間違ってるよ。家族を思ってる事だから、トウジ君が怒るのは当たり前前の事だよ。そこまで家族を大事に思ってることは誇っていいんだよ、トウジ君。」

「シンジ…。」

トウジはシンジに責められず、逆に褒められる言葉を聞き目から涙が溢れていた。

「さあ、2人とも。エヴァに乗ってきた以上は、君達は俺に命を預けなくてはいいけません。それでも構いませんか？まあ、拒否られてもどうしようもないけど…。」

苦笑を混じりながらシンジは2人から聞く。すると、涙声のトウジと楽しそうに言うケンスケであった。

「かまへん！シンジ、ワイらの命を預けるわ！頑張れや、シンジ！」

「こんな事言うのは、恥ずかしいんだけど碓なら任せてもいいかなって。それにエヴァに乗って碓が戦う様を見られるなんて幸せだよ、俺は。シンジ、頑張れよ！」

「…トウジ君にケンスケ君…、ありがとう。後、2人に悪いけど声を潜めて何も考えないようにしてくれないかな？」

2人からの声援を聞いたシンジは、より一層に笑みが込み上がる。すると、少しずつエヴァとのシンクロが高まる感覚がシンジの中で広がっていた。

『活動限界まで後1分10秒！』

「ミサトさん！ケーブルと拳銃式の武器、こっちまで飛ばせません!？」

シンジはミサトに通信を入れる。

『出来なくは無いわね。シンジ君、何をするつもり？』

「いやあ、2人からの声援に答えないといけないうで…。ちよつくら、使徒を倒しにいきますよ。」

シンジは、もう戦闘前の迷いは無くなり気持ちが高まっていった。殴られた相手から謝りの言葉を貰い、自分のやっていることに間違いは無かったと感じて気持ちが高まりそして2人からの声援を聞くと

不思議と体の緊張も適度に解れた。

『でも、問題はあるわ。正確な渡し方が出来ない為に初号機の上に撃ち出すぐらいしか出来ないわ。』

「了解、タイミングはそっちにまかせますよ。」

『活動限界まで後48秒!』

初号機は電源の問題だけでは無くなっていった。使徒の触手に突き抜かれた4箇所傷跡から少なくとも無い血を流していた。普通の人間のようにエヴァも血を通わせて動いているのだから。

痺れを切らした使徒は、ジリジリと初号機に近寄りながら触手での攻撃をしてきた。シンジはレバーにあるスイッチを何個か押すと、初号機の右肩にある装甲が開きナイフの柄が現れる。左手で柄を持ち、ナイフを逆手に持った。

「初号機! 今日、最後の仕事だ! 力を貸してくれよ!!」

シンジがレバーを力強く握り、初号機に言い聞かせると初号機の口部から何かが割れた音が聞こえた。

バギン

グオオオオツ

『エヴァ初号機! 自ら顎部拘束具を引きちぎりました! シンクロ率、97.8%まで上昇!』

『シンジ君は、どこまで私達を驚かせてくれるのかしら…。』

口を開き雄叫びを上げる初号機。シンジの言葉に答えるようにシンジと初号機のシンクロ率は上昇した。その為、初号機の動きは滑らかになっていた。

使徒の攻撃を、左手一本でナイフを使い2本の触手を薙ぎ払う。

『活動限界まで残り15秒!』

『シンジ君! 行くわよ!』

「どうぞ!」

街のビルからアンビリカルケーブルと拳銃二丁が、初号機の上目掛け排出された。それを見たシンジは、素早くその場を跳躍する。すると、初号機がいた場所に使徒の攻撃が通りすぎていく。

空中にあるケーブルを先に取り、ナイフを使徒に投げつけてから背

中にケーブルを刺した。使徒は初号機に投げられたナイフを、A・Tフィールドで弾いていた。

『活動限界時間、ケーブルの接続により停止!』

初号機の問題は一つ無くなり、まだ空中にいる初号機はすかさず拳銃二丁をキャッチする。そして、山の上に着地する。

「よっしやあー!」

シンジは声を荒げながら、少し楽しそうにしていた。

使徒は、一段と初号機に近寄りながら触手の攻撃を放つ。

「しやらくせえ!」

シンジは無数の襲いかかる触手を、2丁の拳銃で撃ち、拳銃を触手に切られないように触手を払う。ガンマンも顔負けするほどの銃の使い方だった。

だが、使徒も負けていなかった。3本の触手で襲いかかり、残り1本は密やかに初号機の足元を忍ばせていた。それに気づかないシンジは、3本の触手を相手にしていた。

シユル

使徒の触手は初号機の左足首に巻きついた。シンジはそれに気づくが少しばかり遅かった。キツく締め上げられ使徒が、触手を引っ張り上げると初号機の左足は切断された。

「ぐっ!!」

シンジは舌を噛み切る寸前まで噛み、痛みに耐えて片足で立つ初号機を2丁の拳銃が火を吹かせる。

ズガガガガガガガガガガガガガガガ

『初号機、拳銃の残弾0!』

2丁拳銃の弾を全部使い、使徒の触手を4本とも広げるように撃っていた。シンクロ率が上がり、シンジの視界が二つになり4つの目での出来る芸当でも言える。

完全無謀の使徒を前に、初号機は拳銃を持ったまま左足は折り畳み右足を軸にして左回転をした。

「これで終了だあ!噛み殺せえ!」

回り切る初号機は、回転の勢いをつけた左足で使徒のコアに向かっ

て突き出すように蹴りを放つ。一見、無い足でコアに蹴った所で使徒は倒せないが「一つ」の行動で使徒のコアを貫いた。

シユコンツ

そんな音を立てながら、使徒のコアから聞こえた。見てみると細かい空洞が出来ていた。

『目標、完全に沈黙!』

『どう言うこと? 初号機の足は無く、ましてや届いてすらいらないのに。それで使徒のコアを破壊するなんて…。』

ミサトは疑問で一杯であった。だがよく見ると、初号機の無い左足の先からオレンジ色の刃のような物が伸びていた。シンジは前回の戦闘に使ったA・Tフィールドを使った刃を左足に展開して、使徒のコアを貫いた。使徒の動きが止まると初号機は力無くその場を倒れこんで行く。

ズズウウン

倒れた初号機の中、シンジはトウジとケンスケとで勝利の歓喜をあげていた。

「しゃーおらっ! 勝ったぞー!」

「ようやったー! シンジ!」

「凄かったな、シンジ! お疲れ!」

シンジは引つかかっていた悩みも取れ、使徒に勝利して緊張の糸が切れて疲労と痛みにより意識を闇に堕ちていった。

シンジはこの先も色々な問題にぶち当たるであろう。

だが、彼はそれを超えて一歩づつ小さくても進むであろう。

彼の進む道に何があるだろうか…。

歩を止めることは無いであろう。

第4使徒との戦闘結果

第3新東京市、軽微の損害

エヴァ初号機、小破

パイロット・碓シンジ重症

人を守護するエヴァンゲリオン。

この先も傷つきながらも人類を守って行くのであろう。  
福音の名の下に…。

変わる何か…

??月×日 晴れ

その日、学校で一悶着があった。ジャージを着た男子の鈴原トウジ君に殴られた。

理由は家族が自分の初めての戦闘に巻き込まれてしまい怪我を負ってしまったからである。自分は、出来る限りの謝罪を送ったつもりだが相手はその対応が頭にきたのか、自分の左の頬を殴った。

自分は彼に選択を与えた。最初に自分を監視と護衛の諜報部員を撤退させる。その後、彼に護衛用の拳銃を渡した。周りには見えないように自分と鈴原トウジ君で影になるように。自分を殺して鈴原トウジ君にエヴァに乗ってもらうか、それとも自分を殺さずにエヴァに乗り続けていいのかを…。

だが、選択される前にクラスメイトにきてしまった為にすかさず拳銃をしまった。それから鈴原トウジ君とその場についてきた相田ケンスケ君がその場を後にした。

誰もいなくなった体育館裏で自分は地面の上に寝っ転がった。先程、自分の命を相手に預けた恐怖に襲われた。だが、自分には他の償い方を知らない。

その後に使徒が現れた。

前回の使徒と違い、例えるならイカの出来損ないのような姿をしていた。自分はネルフに到着するとエヴァに乗った。その時のエヴァは、視界が自分だけで少し動作が遅くなっていたが使徒と戦った。

ライフルを撃ち、使徒を倒そうとしていたが使徒に当たった弾は煙になり使徒の姿を眩ませてしまった。自分は相手の攻撃に注意していると、突如煙の中から光る鞭上の物を初号機に襲いかかる。

だが、咄嗟の行動により相手の攻撃手段である光る触手を封じ込めた。これによって楽に使徒を倒せると思ったが新たな触手が増えてしまった。そんな状況に驚いていると、モニターの端からチカチカと光るものがありそちらの方に目を向けるとそこにクラスメイトの2人が山の神社の近くにいた。

それを見た自分は、使徒を相手に隙を見せてしまいエヴァを持ち上げクラスメイトのいる山に投げられた。

間一髪、2人はエヴァの下敷きにならず冷や汗をかくと使徒はエヴァに突進を仕掛けてきた。弓矢から解き放たれた矢のように使徒は、エヴァに突撃した。その際にエヴァを動かし2人を守るように手で覆いかぶせた。使徒とぶつかった時の衝撃は交通事故に似たものだった。

その後も使徒の攻撃は止まらず、胸と足に触手を指してきた。そのまま動く2人を潰してしまう為、自分は独断でエヴァの中に2人を乗せた。自分が使徒と戦っている所を鈴原トウジ君が話をかけてきた。鈴原トウジ君は自分に謝ってきた。その時の自分は、心の重みが少し軽くなった。そして、2人から応援され使徒の攻撃により左足を切断されたが使徒をギリギリで倒した。倒した後は意識を失ってしまった。

いつも思うのだが、エヴァに乗る度に自分はいつも怪我をしている。前回は、右眼と左腕に怪我を負い全身に痛みが走るものだった。今回の使徒と戦った後は、左足と左手の手の平と胸二箇所と両足の太ももと全身に触手での攻撃による内出血。

確かに使徒と戦うのは命懸けであるが、怪我しないで使徒を倒したいのが本音である。

使徒を倒した後に自分が気を失ってる間に、エヴァから降ろされ気がついた時には病院だった。その後ネルフ本部に戻り発令所に向かうと、そこに凄い形相した葛城一尉がいた。余りにも顔が怒りに染まっている為に自分は、その場を後にしたが左足が動かず松葉杖をついている為逃走は出来なかった。

その後、葛城一尉の説教が始まった。その際に説教をしながら葛城



一尉は目から涙を流していた。それを見た自分は胸が締め付けられた。

葛城一尉の説教が終わった後、鈴原トウジ君と相田ケンスケ君が発令所にやってきた。発令所にやって来る前は諜報部員の方でコツテり怒られたのか2人の表情は優れなかったが、その2人は自分に謝ってきた。今回の件は、避難所の周りに警備が少なかった事と避難所から抜け出した事は罪が重いので処置があるのが普通だが、2人は子供って事で大きく罪を軽くして説教と言うことになったらしい。

だが、自分のあの時の怒りは忘れていなかった。発令所に2人を正座させて1時間、自分が説教をしてあげた。発令所にいたネルフの人は、自分の事を見ながら苦笑して説教されてる2人は白くなっていた。前に葛城一尉にも説教した時のように。

2人の説教が終わり、自分は今回での戦闘で独断行動した為に独房を一週間入る事になった。

パタン

「ふ〜。書き終わった。」

シンジは自分の部屋で日記を書いていた。そして書き終わると日記を閉じた。シンジは、日記を書く前は独房から出て家に帰ってきた所であった。書き疲れたのか、シンジは肩と首を回してため息をついた。

「は〜、一週間の独房生活は暇だったなあ…。やること無いし飯食って治療受けての繰り返しだったからな。まあ、出来るトレーニングはしたけど本当に独房は苦痛だな…。とりあえず好きな奴はいないだろうけど。それはさて置き、ミサトさんも俺が少し居ないだけで

散らかしたなく。ペンペンが居なかったら、より一層汚かったんだろうな…。」

一週間の独房生活で治療を受けていた為に前回の戦闘での怪我は完治していた。

シンジは自分の部屋から出て、リビングに足を進めるとシンジが最初にミサトの家に来た時よりは酷くは無いが散らかっていた。

ペンペン曰く、シンジの真似をしながら片付けたらしいのだが彼には重すぎる仕事だった。

「よし、片付けますか!」

制服の袖を捲り片付けを開始するシンジ。ペンペンもシンジの後を追いつけながら手伝っていた。

「こんなもんだろ。」

「クエツ!」

リビングの片付けは、シンジが朝に帰ってきてから少し日記を書いてからのリビングの片付けで午前中を超えて午後には進んでいた。シンジは、遅い昼食を取る為に冷蔵庫を開けるが食材がなかった。

「やっぱり無いか。しょうがない、買いに行ってくるか。そういえば今日はあそこのスーパーで特売の日じゃなかったか?」

自分の部屋に戻り、制服から私服に着替えて財布を持ち出かけようとシンジは戸締りをする。

ピンポーン

突如、家にインターホンの音が鳴り響く。

「ん?誰だ。配達か?セールスならお断りくださるは、はい、はい。今、お伺いします。」

シンジは戸締りするのを中断して玄関に向かう。そして玄関のドアの鍵を開けて一言。

ガチャッ

「どちら様ですか〜?」

シンジが玄関を開くと、そこには真ん中に4〜50代の物優しそうな男性に左側に笑顔でシンジを見る少女で右側に苦笑しているトウジが立っていた。

「こんにちは。碓シンジ君で間違いありませんか?」

真ん中に立つ男性が、シンジの名前を出し確認してきた。それを聞かれたシンジは、2〜3秒間考えて答えた。

「いえいえ、私は石定・信二「いしただ・のぶじ」と申します。碓シンジは、今はもうこの世に居ないでしょう。良い奴でしたよ…。」

シンジは嘘泣きをしながら演技するとトウジがツツコミをいれてきた。

「いやいや、お前が碓シンジや!考えてみると名前の漢字を違う読み方してるだけやないか!」

「はっはっはっ、そう!トウジ君、君の言う通りに私が碓シンジだ!よく見破った!って、お二人はこういうネタは好きですか?」

シンジのお茶目な?所を見た男性と少女は、ポカーンと口開けて呆然としていた。それ見てシンジは少し笑い、トウジは溜息をついた。少し経って2人は、気を取り戻し男性が再びシンジに聞いた。

「では、間違い無く君が碓シンジ君だね?」

「はい。すみません、いきなり変な事を言ってしまった。ここで立って話すのは暑いと思いますので、上がってください。」

シンジは最初の事を忘れさすぐらいに、丁寧に家に招く。男性、少女、トウジは顔を合わせ領き合い男性が返事をした。

「子供とは思えない対応ありがとうございます。では、お邪魔させて頂きます。」

「お邪魔します。」

「お邪魔させてもらうでえ。」

三人を招き入れたシンジは、笑顔でいながら先にリビングに足を進ませた。

リビングのテーブルに、シンジは1人で対面に3人が座る形になっていた。

「私達いきなりの訪問であるのに家に上げてもらい、そして冷たい飲み物まで出して頂いて、誠にありがとうございます。」

シンジの対面に座る男性は、頭を下げシンジに礼を言った。それを見たシンジは軽く言う。

「いえいえ、たいした物も出せませんが……。そういえば、お2人は前々回の戦闘で逃げ遅れたのかあの場にいた……。」

「そうです。自己紹介が遅れました。私、息子のトウジの父親で鈴原カズキと申します。後、娘のサクラです。」

「初めまして、鈴原サクラです。」

トウジの父親であるカズキと妹のサクラが再び頭を下げる。シンジも2人が頭を下げるのを見て一緒に頭を下げる。

「もうご存知でしょうが、俺は碓シンジです。さて、今日のご用件は？」

シンジはカズキに用件を聞くと、カズキは立ち上がりシンジの横に移動する。そして、シンジの横に立つと床に正座をし始めた。突如の事にシンジは驚いていた。すると、カズキは土下座をする。

「あの時、助けて頂き誠にありがとうございます。碓君が助けて貰わなければ、私と娘は瓦礫の下敷きになっている所でした。化け物の攻撃からも私達を身を呈して守ってくれたことも聞いています。あの後、私は爆風に飲まれてしまい頭を打ち気を失ってしまい先日意識を取り戻したばかりで礼が遅くなり申し訳ありません。娘も碓君に助けてもらったのですが、運悪く瓦礫が舞い上がって娘に当たり頭と足に怪我を受けました。でも、その怪我也昨日で完治しました。本当に私と娘を助けて頂いてありがとうございます。」

「碓さん、私達を助けてくれてありがとうございます。」

カズキのお礼が終わると、サクラは立ち上がりシンジに礼を言い頭を下げる。シンジは2人に礼を言われると逆に焦っていた。

「いやいや、頭を上げてください！俺は礼を言われるほどの事をしてませんよ！本当なら、無傷で助けられたのを俺がエヴァの操縦が下手

な為に2人に傷をつけてしまったんですから…。」

「いえ、碓君。君のおかげで私と妹の命があるのです。今、生きていられるのも君が助けてくれたからだ。そして、君に謝らなくてはならないことがある。」

すると、トウジが立ち上がり父親の隣に移動してカズキと同じように土下座をし始めた。

「シンジ！すまんかった！ワシは、本当に馬鹿やった。シンジのおかげで妹とオトンが生きてこれたのに、ワシは何も知らないでシンジを殴ってもうた！本当にすまん！」

「碓君、本当に申し訳ありません。ウチの馬鹿息子が何も知らないで君を殴ってしまい、それだけでは無く前日の戦闘で御迷惑までかけてしまつて誠に申し訳ありません。」

「私のバカな兄が御迷惑をかけました。」

3人から謝罪を受け、シンジは対応に困り挙動不審になっていた。そして鈴原家の妹が兄に対して毒を吐いていたが聞こえてないようになっていた。

「碓君。どうか、私を殴ってくれ！息子が君に殴ってしまう教育してしまつた私を。それだけで済むとは思つてはいないが、ケジメとして。頼む！」

「お父さん…。」

「…オトン。」

カズキはシンジにそう言つて、頭を上げてシンジからの拳を待つように目を瞑り歯を食いしばっていた。それを見ているトウジと妹が呟く。

シンジは、そんな状態で待たれるカズキに溜息をつき椅子を引き立ち上がりカズキの前に移動する。トウジと妹は、その状況に息を飲んだ。そしてシンジの右手が動き始めた。

ボン

「カズキさん、目を開けてください。」

シンジは、軽くカズキの肩に右手を乗せて目を開けるよう催促する。カズキと目の高さを合わせるシンジは、目を開かれるのを待った。数秒経つとカズキは、ゆっくりと瞼をあけてカズキはシンジに聞いた。

「…殴らないのかね？私を。」

その言葉聞いたシンジは、溜息をついてカズキと目を合わせて話し始めた。

「殴る必要がありません。そもそも、トウジ君は家族の為に俺を殴ったんです。彼は家族を大切に思ってるから行動したんでしょう。確かに暴力はいけません…。もしこれが、違う人なら行動を起こさずに唯俺を恨む形でしたでしょう。ですが、カズキさんが育て上げてきたトウジ君は家族の事を大切に思って俺を殴ったんです。俺は、本当に家族を大切に思ってるトウジ君を責める事はできません。殴った件は、本人から謝ってもらってるので。カズキさん、誇ってください。こんなにもトウジ君は真つ直ぐな子に育ってるんですから。」

カズキはシンジの言葉で、両目から涙を流し始めた。子供3人は、この中で一番年上の大人が泣く所を見て驚いていた。

「…ええと、カズキさん…？俺何か悪い事言っちゃいましたか？それでしたら、謝りますが…」

「いいえ。子供とは思えない言葉使いで、自分の子供を褒められて少

し涙を流してしまいました…。碇君…、いやシンジさんと呼ばせてもらおう。何か私達でお礼ができないであろうか？」

シンジは、トウジの父親であり歳が3倍以上の男性から君付けじゃなくさん付けされて一瞬固まってしまったが、即座に正気に戻り焦りながらシンジはカズキに言った。

「いやいやいやいや、カズキさん!? 幾つ下の子供にさん付けしてるんですか!? 普通に君付けでいいですから! それもお子さんが見てる所で。父親の威厳が無くなりますよ? 後、お礼なんかありませんよ。もう貰ってますから…。」

「私達は、まだ何もシンジさんにお礼を…。」

フツとシンジは笑い、笑顔でカズキに言った。

「出会いです。人生一度の中で色々な人と出会うでしょ? 悪い人なら勘弁ですけど、今ここにいる3人は良い人なんで俺はそれだけで嬉しいですよ? トウジ君の妹のサクラちゃんだったよね? 彼女なんか可愛いじゃないですか。男の俺は役得だし、トウジ君は真っ直ぐな性格で根は優しい男子で誰かが傷ついていたら助けてくれそうですね。そして、2人を育ててきたカズキさんにもお会い出来たんですから。それでも納得がいけないなら仲良くしましょ?」

「…仲良く…?」

「はい。」

鈴原親子は、シンジの満面の笑みをみて後ろから後光が見えるんじゃないかと思う幻覚見ていた。人としての器の大きさを見せたシンジであった。

その後、鈴原親子は最後まで礼を言って帰って行った。

シンジは空腹と言うことを思い出し、時計を見ると少し遅くなってしまい買い出しに行けずインスタント物で空腹を誤魔化した。だが、ネルフ本部から帰ってきたミサトに材料が無いから作れないと告げると、ミサトはシンジの手料理が食べられないと言って涙を流したのは別のお話。

鈴原親子がミサトの家に礼に来て2日。

シンジは、第一中学校で昼前の体育の授業でサッカーを眺めていた。2年A組の男女で別れ、男子はサッカーで女子は水泳だった。班に分かれシンジが入っている班は先に試合をしている二つの班を見ていた。校庭とプールが隣にある為、プールの方から女子の声が聞こえていた。

「ヒカリ、負けんなあ！」

「負けたらデザートを奢らせるぞお！」

「あともう少し！」

元気良くプールで、はしゃぐ女子達の声をシンジは片耳で聞きながらサッカーを見ていた。が、両サイドに座る男子2人が暑苦しい為に溜息をついていた。他の男子も、トウジとケンスケのように女子の水着を眺めていた。

「はあく、ええのお。おなごの素肌……」

「グツツ……。授業じゃなければカメラ持ってこれんのに。ああ、でもいい。心が癒される。」

フンスフンスと鼻息を鳴らす2人に少し注意するシンジ。軽めの平手打ちで2人の顔を前に向かせる。

「2人とも、女子の肌を見たいのはわかるけど……。今は体育の授業をやってるんだからさ、あの先生に怒られたら面倒だよ？」

シンジの言葉により、トウジとケンスケはハツと思いつく。第一中学校の体育教員は、見た目がボディビルダーのような筋肉を持ち例えて言うなら体操のお兄さんをマッチョにしたような外見。その先生は生徒に慕われており気さくな性格で良い先生とも言えるのだが、罰の与え方が酷い。



それは走らせる事である。

普通なら生徒が何かして注意をして事が済むのだが、この先生は罰を与え校庭を走らせるのだ。第一中学校の校庭がグルリと回っての一周の距離が500mほどあり、それを罰として10周走らせるのだ。

単純計算で5kmは走れと言うのだから、生徒達は余り体育の授業では注意されないようにしている。中学生に5kmを走るのは苦であり、後の授業で疲れ切ってしまう大半の生徒は力尽きて居眠りをし、しまい他の先生に怒られると言う負の連鎖が起きている。

「気をつけないとこの後の授業、辛いよ?」

「せやな、気いつけんワイら走らせるなあ。」

「ああ、危ない危ない…。」

トウジとケンスケはシンジの注意によって、地獄の5kmランを回避できた。2人は安堵の溜息をしていた。その2人を見てフツと笑うシンジはプールの方に顔を向けるとプールサイドに1人でポツンと体育座りをしているレイを見つける。

レイは座るだけで何もせずにプールで泳ぐ女子達を見続けた。

シンジは視線を戻してトウジとケンスケに質問していた。

「あのさあ、2人とも?」

「なんや、シンジ?なんか用かあ。」

「シンジ、どうした?」

2人はシンジの方に顔を向ける。

「レイさん。いや、綾波さんはいつも1人なの? 大半俺が学校に来る時は、俺と話したり一緒に昼過ぎしたりしてるけど俺が来る前はどうだったの?」

シンジは自分が来る前のレイがどうだったのかを2人に聞くと、2人とも微妙な顔になっていた。それを見たシンジは2人の顔を見ながら首を傾げる。

「いやあな、シンジが来る前の綾波は大人しい超えた感じやな。誰とも喋ろうとせんし、必要最低限しか口を動かさない所やな。」

「そして、いつの間にか本来そこにいる綾波を殆どがいない感じで

扱ってるんだよ。無表情で何を考えているのかわからないからね。」  
「ふーん…。」

シンジは再びレイの方に視線を運ぶと、プールサイドに座っているレイがシンジの方を顔を向けていた。

(!?)

自分の考えが読まれた感覚に囚われたシンジは、レイの紅い目から視線を外せないでいた。

「……その男子達、女子の方に目を奪われてどうする！お前ら校庭から10周してこい！」

体育教員の怒声が、校庭に鳴り響きシンジはハッと正気に戻る。シンジの班である男子達は嫌そうな顔をして重い腰をあげようとしていた。そこにシンジは手を上げて体育教員にこう言った。

「先生！」

「なんだ、碓？何かあったか？」

「いや、そうでは無く自分の班の男子達が女子の方に向いていたのは自分の所為なんです！」

それを聞いた教師と男子達とプールサイドから聞こえていた女子達がシンジの方に目を向ける。

「自分が彼らに彼女達の良さを伝えてしまった為に、彼らが女子の方に目を向けてしまった。自分がそんな事を言わなければ、彼らはちゃんと授業を受けていたでしょう。なので、校庭10周は自分だけにしてくれませんか？自分が悪いんで…。」

そう言われた教師は難しい顔をして、女子を見ていた男子達はシンジに救われたのに気づき両手を合わせて感謝していて、プールサイドにいる数人の女子が顔をトマトのように赤く染めていた。

「…わかった。今回だけ碓の言う通りに他の男子達は走らなくいい。だが、碓。お前は校庭を20周だ。他の男子の分だ。今の時間から走って次の授業までに間に合わなければ遅刻だからな…。」

「はい、わかりました。」

「……ええっ?!」

それを聞いていた生徒達は驚いていた。本来の罰の量が二倍なれ

ば、校庭を20周も走れば10km走ることになる。次のチャイムまでの時間は後20分。一周に1分以内に継続的に走らなければ次の授業までに間に合わない計算なのだから。

そんな距離と条件を与えられたと言うのに、シンジが軽く返事をしたことについても驚きの一つでもあった。

「じゃあ、お前らは引き続きサッカーやってろ。先生は、碇の監視してるから。」

その後、シンジは校庭を走り教師の監視が始まった。

## 昼

「レイさくん、一緒に弁当食おうよ。」

昼食の時間になり、シンジは弁当を二つ持ちレイの席に向かっていった。

「…ええ。」

レイはシンジに誘われ、2人で教室出て屋上に向かって行った。その2人を見送ったトウジは呟いた。

「シンジの奴、ケロツとしてんなあ…。あんだけ走っておるのに少しの汗で終わっとるやなあ。」

「ジョギングぐらいの感覚でやってたしね、シンジ。俺らの言う全力で走ってる速さを、軽く走ってる感じで出してたしね…。体育の先生も驚きすぎて口が開きっぱなしだったし…。」

「化物か！」

トウジとケンスケの言葉に、教室にいる生徒全員が頷いた。

## 第一中学校の屋上

「そう言えば、今日はレイさんの零号機起動実験だったよね？」  
「ええ…。」

屋上で2人、シンジの作った弁当を食べながら話していた。シンジがレイの弁当を作って学校に持って来るようになってから、最近のレイは昼食をとるようになった。シンジが第一中学校に転入する前は考えられない事であった。

「レイさんは、エヴァに乗るの怖くない？」  
「なぜ？」

「うくん、俺らは「使徒」と言う訳のわからない敵と戦う訳でしょ？それと戦って傷つくのはパイロットの俺らじゃん。その考えはレイさんは、どう考えているのかなって。」

レイはシンジの言葉を聞いて、今まで無表情の顔が少し歪み始めた。

「…シンジ君は、碇指令を信じていないの？」  
「うん。」

パンツ

屋上に乾いた音が鳴り響く。レイがシンジの作った弁当を横に置

いて立ち上がり、シンジの目の前に立ち左手でシンジの頬を平手打ちを放った。

そしてシンジを叩いたレイは、その場を離れようとするがシンジに左手を掴まれる。

「…離して。」

「いやいや、レイさん？人の話を最後まで聞こうね。ほらっ、座って。」

シンジは優しくレイの左手を掴みながら、レイが座っていたベンチに座らせる。レイの顔は不満と怒りで美少女の顔が少し歪んでいる為、迫力があつた。そのような顔をしたレイの目と合わせるシンジ。

「レイさんとお父さんが仲が良く、お父さんを良く思ってる事もわかったよ。でもね、レイさん。俺達はお父さんを信じることにじゃないんだよ？」

レイはシンジの言う言葉に理解できず、不満と怒りで歪んだ顔が無表情に戻り首を傾げる。シンジはレイの表情が変わる所を見て少し微笑む。

(ちゃんと感情はあるだね…、よかつた。)

「お父さんが使徒を倒す訳じゃないでしょ？エヴァパイロットである俺達でしょ。俺達はお父さんを信じるんじゃない、お父さんの期待に応える事だよ？」

「碇指令の期待に応える？」

シンジは頷く。

「うん。ネルフのスタッフさん達と力を合わせて使徒と戦い、勝利する事でお父さんの期待に応えられるんだ。…理解できたかな？だから、俺はお父さんを信じないんだ。」

シンジはニコリと人を和ませる笑顔をレイに向けると、逆にレイは何か悪い事をした子供のように体を縮め顔を下に向かせていた。それを見たシンジは、不思議に思いレイに聞いて見た。

「どうしたの、レイさん？」

「…私はシンジ君の気持ちを理解せずに叩いてしまったわ…。…ごめんなさい。」

親に怒られてるような雰囲気を出すレイを見て、シンジは少し親の

気持ちがわかったような気がしていた。そして、シンジは笑い始めた。レイはシンジの行動がわからず、首を傾げながらシンジに聞いた。

「なぜ、笑っているの？」

「いやね？最近のレイさんは、ちゃんと表情と感情がはつきりしてきたから嬉しいんだよ。最初の頃のレイさんは、無表情で感情ありませんよって感じだったからね。笑って気分を害していたら謝るよ。ごめんね？」

ペコリと頭を下げた謝罪をするシンジ。

(…シンジ君が、私の隣で話してくれると不思議と気持ちがるになる。なぜ？どうして？私がシンジ君の話を聞かずに叩いたのに、シンジ君は怒ろうともせず私に分かりやすく説明してくれる…。そしてシンジ君の笑顔を見てると胸の奥が暖かくなる…。なぜ？碇指令の笑顔の時は嬉しいのに…。…よく分からない…。)

レイはそんな事を考えていると昼休みの終わりのチャイムが学校中に鳴り響く。

キーンコーンカーンコーン☒

「やばっ！次の授業が始まるよ。レイさん、弁当はそのままでもいいから先に行きな？」

シンジは、食べ終わっていた自分の弁当を片付けながらレイを先に行かせようと言った。だが、レイはその場を動こうとせず弁当を片付けていた。

「いい、シンジ君と一緒に行く。」

レイがシンジの言葉を聞かず、シンジと一緒に教室に戻ろうと言われたシンジは弁当を片付けながら少し顔を赤く染めていた。

(うっわ〜！レイさん、それは反則的な言葉だよ〜！美少女の顔で、尚且つ無表情で「一緒に行く」って言われたら嬉しくて恥ずかしいよ…。)

シンジはレイの言葉により照れていた。赤く染めた顔を、少しレイから見えないようにシンジは顔を下に向けた。すると、レイはシンジの行動に不思議に思ったのかシンジの顔を覗こうとする。

「シンジ君、具合が悪いの？耳が赤いけど…。」

「なんでもないよ!? 弁当も片付け終わったし、教室に戻ろうか!」

シンジは誤魔化しながら片付けを終え、立ち上がり荷物を持ち校舎のドアに近づいて開ける。そして、シンジの後から追ってきたレイを先に校舎に入れようと催促させる。

「お先どうぞ、レイさん。」

「ありがとう…。」

レイを先に校舎に入れ、シンジもレイがドアを通った後に自分も通りドアを閉めて鍵を閉める。振り返って教室に向かおうとすると、階段の手前でレイがシンジの方を見ながら佇んでいた。それを見たシンジはレイに声をかける。

「どうしたの？早く教室に戻らないと…。」

「シンジ君、私…。私は決めっ!」

「レイさん!」

レイがシンジに何かを言おうとした時、足を階段から踏み外してレイの体は階段の方に傾いていった。

その光景を目の当たりにしたシンジは、荷物を放り投げレイに向かって走り出す。重力に従って階段から落ちていくレイ。シンジは近くまで走り階段の手前で飛び、落ちていくレイに抱きついた。

「レイさん！小さく身を丸くして!」

レイはシンジの指示を聞き、瞬時に体を小さく丸まり目を瞑った。シンジはレイを抱き締める際に、胸にレイの頭を右手で抱え左手で肩を抱きしめていた。

「くっ!」

頭から落ちていく2人。

シンジは、迫り来る階段の角を右手で掴み二人分の体重をバネのようにして坂道から転がるボールのように2人の体を回転させる。

次にシンジは、体上下が逆になった所を足に力を入れて階段を蹴り階段から廊下の方にまで体を飛ばした。その時にシンジはレイの体を掴み右手をレイの両膝に回し抱えていた左手は、より一層に体を密着させる為に力を優しく込める。レイはシンジに空中でお姫様抱っ

この状態にされていた。

シンジは自分の体を下にして、レイを優しくお姫様抱っこで抱え床の衝突を待った。

ドサツ

パキンツ

廊下に落ちた2人。しかし、シンジが身を呈して下になり両肩甲骨から落ちて受け身を取り衝撃を和らげた。だが、シンジは両手を使っている為背中だけで受け身をとってしまった為に子供と言えど二人分の体重によって左右の肩甲骨の骨を折ってしまった。

（ぐうっ！いってえ！骨折れたな、これは…。だ、だけど。咄嗟だったけど、良くあの高さの階段から落ちて怪我が俺だけですね…。いっ！いっ！いっ！いっ！確か、今の落ち方は確か…。「雪雪崩」（ゆきなだれ）って奴じやなかったかな？…あ、れ？何故俺がそんな事を「知って」るんだ？ぐ！痛みが!?!?)

そんな事をシンジは痛みを我慢しながら考えていると、シンジの腕の中で小さくなっているレイが顔を上げシンジの顔に至近距離で話しかけて来た。

「…シンジ君、大丈夫?」

「俺は大丈夫だよ…、レイさんは怪我や痛い所ある…?」

レイは首を振る。それを見たシンジは痛みを耐えながらレイに冷や汗をかきながら笑顔で言った。

「…あのさ、レイさん。悪いんだけど、自分で俺の腕から出て…。」

「…何故?シンジ君が離せばいい…。」

「…ゴメン、嘘ついた。今、肩甲骨が折れてるんだろうから腕が動かせないんだ…。」

「!?!」

シンジの言葉に驚くレイ。

人間の肩甲骨は背中にある薄い三角形の骨で、全面を多くの筋肉がつながっていて、覆っている。それらの筋肉のバランスによって、肩甲骨は自由に動くことが可能なのである。その肩甲骨には、腕のつけ根にある上腕骨がつながっていて、肩甲骨は腕全体の土台の役目を果



たしている。だから肩甲骨が折れると、腕全体の運動障害起きてしま  
いシンジの腕は動かせない状態になっていた。

恐ろしい事に肩の周りの損傷は他の所と損傷を合併する確率が8  
0〜90%と高い特徴があります。近くを走る血管や神経、頭や首、  
胸部、腹部などの重要な臓器を損傷しやすいため、致死率も10〜1  
5%に上がる。

そんな肩甲骨を折ったシンジは、凄まじい痛みに襲われているにも  
関わらずにレイの前では冷や汗をかきながらも笑顔を維持していた。  
「…レイさん、この後実験でしょ？怪我がしたら出来なくなるから…。  
とりあえず、トウジ君とケンスケ君を呼んできてくれないかな…。」  
（どうして…？痛い思いをしながら…私を助けたの。わからない…。  
シンジ君の気持ちが変わらない。そして私の気持ちもわからない。  
…私の不注意で、シンジ君を怪我をさせてしまったのに助けてくれた  
のが嬉しく感じる…。…そしてシンジ君の腕の中にと暖かい。  
気持ち良い…。）

レイは前にシンジの事が分からず自分の中でジグソーパズルのよ  
うに解いていたが結局は、今回の事で最後まで聞かず叩いてたのにも  
関わらずに分かりやすく優しく教えてもらい、そして階段から落ちる  
所を助けてもらって自分の所為で傷ついたというのにシンジは笑っ  
ていた。そんな事を思いながらレイは結局はシンジの笑顔の意味が  
わからないでいた。

（…碇指令と同じ。自分が傷ついているのに相手の為に笑う所が…。  
でも、違う。何故？シンジ君…。）

その後、レイが教室に戻りトウジとケンスケを呼びシンジは2人に  
担がれ保健室に行くが肩甲骨が折れている為に保健室では対処が出  
来ないと言われ、ネルフの病院に運ばれ手術が行われた。

ネルフ本部

『これより。零号機、再起動実験を行う。』

体の色が黄色く一つ目のエヴァンゲリオンが、エヴァンゲリオン専用の実験場に壁に貼り付けられて立っている。

そしてエヴァンゲリオン零号機の実験が始まろうとしていた。エヴァ零号機には、レイが搭乗されていた。

『レイ。準備はいいか?』

「はい...。」

エントリープラグ内に響くゲンドウの声に、返事を返すレイ。まだ零号機を起動していない為にエントリープラグの中は真っ暗である。

零号機を眺めているゲンドウは、エヴァと向かい側の壁にガラスの張った部屋に立っていた。その後ろに数人のネルフスタッフや冬月とリツコもそこにいた。

『第一次接続開始。』

『主電源コンタクト。』

『稼働電圧臨界点を突破!』

『了解。フォーマットをフェイズ2に移行!』

『パイロット、零号機と接続開始。パルス及びハーモニクスは正常。』

エントリープラグ内にリツコと他のスタッフの声を聞いているレイ。プラグ内のモニターが変化を起こし起動実験は最終項目に移っていた。

『オールナーブリンク終了。中枢神経素子に異常なし。』

『1から2590までのリストクリア。絶対境界線まで、あと2.5。』

『1. 7、1. 2、1. 0、0. 6、0. 3、0. 2、0. 1。ボーダーラインクリア。』

『零号機、起動に成功。引き続き連動実験に入ります。』

零号機の起動実験に成功し次の実験に移ろうとしている中、プラグ

内にいるレイは、モニターに映るゲンドウ達がいる部屋を見ながら考えていた。

（私は決めたわ…。シンジ君の言うとおり、碇指令を信じるんでは無期待に応える。それが絆だから…。碇指令との。）

レイの中では、ゲンドウの存在は絶対と言う名の位置に示していた。だが、そんなレイに変化が起きていた。

（…前までは何も考えず、言われた事だけをやってきた。でも、シンジ君と会ってから…私は変わった気がする。私には最初は何もなかった、エヴァに乗る為に生まれてきたようなものだもの。もしエヴァのパイロットをやめてしまったら、私には何も無くなってしまう。それは、死んでいるのと変わらないわ…。）

レイの紅い瞳に力強い光が灯っていく。

（でも、私もエヴァに乗って戦えるようになったわ。シンジ君のように、人を守り使徒と戦い殲滅をする。碇指令は絆をくれて、シンジ君は優しさと温もりをくれた。そして、シンジ君は碇指令と似ている笑顔を持ちながら色々としてくれる…。お弁当を作ってきてくれて私と楽しそうに話してくれる。側にいると胸が暖かくなる。階段から落ちそうになった所も助けてくれて、優しく私を包んでくれた。…あの時は嬉しかった。私の助ける為に怪我をしたと言うのに、シンジ君は私に心配かけないように笑ってくれた。だけど、前回の戦闘を本部分で見ている時にシンジ君の苦しそうな声を聞いた時は胸が痛かった…。そして、階段から助けてくれて痛がってるシンジ君の顔を見た時も胸が痛かった。…私はシンジ君から貰ってばかり。私に返せるものは何も無いけど、あの暖かい笑顔と温もりは無くしたくない！だから…。私はこの先シンジ君を守る！）

レイの中では、本人は気がついていないが色々な感情を現していた。そんな彼女を変えたシンジをエヴァに乗り使徒から守ると決意する。感情の急激な成長を見せるレイだが、硬く決意を固めるがこの先の戦闘で碎かれるのは誰も知らない。

次の使徒と戦う日は近いかもしれない。

進んでいく…周り

エヴァ零号機の起動実験は無事に終わり、次回の使徒との戦闘が可能になる。しかし、戦闘が可能と言えど零号機には何個かの問題があった。

今現時点で使徒に戦える人間が、シンジただ一人の為に多少の問題を無視して少しでも戦力を増やす事をする。

その中、暗い空間に長方形のテーブルに光が灯っておりゼーレとゲンドウを含め6人が席に着いていた。最初に独のキール・ローレンツが口を開く。

「では、会議を始める。初めに、先日第4の使徒が襲来し見事エヴァ初号機が殲滅した。次に、その第4の使徒を姿形変えず殲滅した為に第3の使徒とは違い死骸が残った。この為、第4の使徒を解剖して解析、研究して新たに情報を得て人類の危機を遠ざけることができる。これについて意見があるものは？」

するとキール・ローレンツの左隣に座る米の代表が挙手して発言する。

「…失礼。確かに、サードチルドレンは我々の計画に大変貢献していることは認めよう…。だが、勝利はしているがサードチルドレンの戦いはどれも危ない！本来の使徒迎撃予算よりは大きく下回っているが、それ以前にエヴァがやられてしまったら意味が無い！」

米の代表の言葉を聞いた英と霧の代表が頷いていた。彼の言う通り、今のシンジは街を守りながら使徒と戦っている為にシンジの負担が大きく二回の戦闘で二回とも必ず負傷していた。

「その件について、碓君。何か対処しているかね？」

キール・ローレンツは米の代表の意見を聞き、ネルフの司令官であるゲンドウに聞いた。ゲンドウは表情を変えず淡々と答えた。

「…その件でしたら、サードチルドレン自身がネルフの開発部と話をして最新兵器の開発に足を運ばせてます。今は私生活で怪我を負ってしまい、シンクロテストや訓練が出来ない為に本部では赤木リツコ博士に同伴させてます。私も少し資料を見せてもらいましたが、面白い物が出来そうです。確かに、これが実戦に導入したらより一層に勝率が高まるでしょう。」

「そうか…。サードチルドレンには、今後とも身体には気をつけてもらいたい物だ。後ほど、その最新兵器とやらの資料を読ませてもらう。では、他に意見があるものは？」

誰も意見が無く部屋には沈黙が走る。

「よろしい。では、今回の会議はこれにて終了としよう。碓君、第4の使徒の解析はそちらに任せるぞ。」

「はい。」

「では、終了する。」「」「全てはゼーレのシナリオ通りに。」「」「」

道を歩いているだけで注目的になるという状況を、シンジはあまり経験したことがなかった。

しかし、今はただ普通に歩いているだけでも道行く人々が彼らの方を見つめ、様々な種類の視線を投げかけてくる。その原因はもちろん分かり切っていたが、彼にはどうすることも出来ないものだった。

「うーん……………」

シンジは彼の左側を黙々と歩いているレイの方に顔を向けた。愛らしい容貌と人目を引く眩い銀髪、そしていつもと変わらない生真面目な表情が、彼の目に飛び込んでくる。

(綺麗だねえ……。)

改めて見つめると、彼女の美しさはシンジの知るどの女性からかになり際立っていた。そんなことを比べるのは失礼極まりないとは思いつつも、身近な異性と比べてしまうのはどうしようもないことであろう。人間の判断基準というのは、大概の場合において相対的なものだからだ。

(でも……こう注目されてると居心地が悪いな。レイさんにとってはいつものことなんだろうけど、元から気にしてる様子もないしなあ……。)

完璧に整った横顔を眺めながら、そんなことを思ってみたりする。

真っ直ぐに前だけを見ている彼女の赤い瞳が、周囲から浴びせられる視線など一顧だにしていけないことに気付いたせいである。

(少し前までだったら、俺の存在もそこまで見えてなかったんだろうな……。)

そう思うとシンジの胸と背中がかすかに痛んだ。しかし、今では彼が呼びかければレイはしっかりと反応を返してくれる。

「……ねえ、レイさん?」

「!?」

遠慮がちに呼びかけると、レイは弾かれたように彼の方を振り向いて、期待に満ちた瞳を輝かせる。それまではやや物憂げと言っても良かった表情が鮮やかに変化する様子は、初めてシンジがそれを見たとき、思わず面食らってしまったほどに急激なものだった。

「私……役に立てる?」

勢いよく振り返ったときに、シンジが苦心惨憺して切ってやった前髪がふわりと揺れて、光の粒子を撒き散らした。

「い、いや、別に何かして欲しいことがあったわけじゃなくてね、ちよつと話でもしようかって思っただけなんだけど……。」

「……そう……。」

あからさまに残念そうに萎れてしまうレイに意味もなく罪悪感を抱いてしまう。彼女は数日前からずつとこうなのである。常にシンジの左側に影のように付き従い、彼が両腕を使うだけで別段に不自由なく処理出来るような類のことであっても、それが当然とばかりにレイはその華奢な手を伸ばしてきた。

さすがにトイレまで着いてくるような非常識なことはしなかったが、担任教師に申し出て席を替えてもらったり、昼食のときに自分の食事を後回しにして、シンジのために弁当箱を捧げ持っているくらいのは平気でやってきた。周囲の冷やかしは凄まじいものになったのだが、レイは断固とした態度でこう言っただけだ。

『先日の件で碓君は私の不注意な行動で怪我をしたわ。完全に回復するまでの間を私が補佐する。のは当然のこと。』

それは確かに生徒も教師も問わず納得させるのに充分な理由だった。

だが、現実には彼女の行動を黙認することにしたのは教師たちだけで、生徒たちの追求と冷やかしは激しさを増している。もしもレイが以前のような淡々とした口調と態度で言ったのなら、生徒たちも納得したであらうが、そのときの彼女の表情は、明らかに隠そうともししていない喜びに輝き、真摯な瞳はシンジの姿を捉えて離そうとしなかったのだ。つくづく接し方の難しい少女だと再認識させられてしまったシンジである。

「シンジ君?」

「え……。」

「会話するのではないの?」

気が付くと赤い瞳が驚くほど間近で彼の目を見つめていた。

「あつ、ぐ、ぐめんね。」

「……いい。」

口ではそう言っている、表情と仕草は逆のことを強く訴えている。かすかに唇を尖らせて、眉根が寄せられていた。実のところを言えば、レイは本当にそれほど気にしていないのだが、この仕草をみるとシンジが考えを改めてくれることが多いと、この数日間『学



習した』らしいのだ。そんな小さな誤魔化しには彼もすぐに気が付いたのだが、実際に目の前でやられると、自分で も情けなくなってくるくらいに毎回引つかかってしまい、何度か自分というものを見つめ直してしまったこともある。

「ごめんね、ちよつと考え事をしてて。それじゃあ……えつと……何を話そうかねえ……。」

「何でもいい。」

「お、おう……。」

シンジは夕食の献立はどうするかと子供に尋ねた母親のように、レイの返答に口ごもった。人付き合いはそこそこな彼で上手い話し方も持っているのだが、もう1つの理由の方がこの場合は大きな割合を占めている。彼女と1つの話題を長く続けるのは、実は極めて困難な作業なのである。しかし、成り行きとはいえ、会話をしようと言い出したのは自分の方なのだからと、彼はこの 難行に果敢な突撃をかける覚悟を決めた。

「えつと……そ、そういえばさ、ちよつと前のことなんだけど、学校で最初の頃俺がトウジ君に呼ばれたこと覚えてる?」

「覚えているわ……。その時私登校してたもの。シンジ君が鈴原君に呼ばれて体育館裏に連れていかれてたの。」

「そ、そうだね……。」

(ちやつかりと見たたのかな? あれは見えてないよな……)

脱力してしまいそうになった両脚に何とか力を込めて、シンジは首を横に振って見せた。不思議そうに小首を傾げたレイは、次の言葉を待っているようである。

「……?」

「その時にトウジ君に、色々と言われて俺が本当にエヴァに乗る権利があるのか不安になってね。その後だよ、使徒がきたの。携帯でミサトさんから、連絡が来て俺が本部に向かおうとした時にレイさんが俺を待っていてくれたよ? でも、あの時の言葉ってどう言う意味をもっていたのかなあ?」

当時とは比較にならないほど親しくなっているという自信も手

伝って、シンジは気になっていたことを口に出してみたのだが、その問いかけは最後まで言いきる前に彼自身によって打ち切られることになった。レイの頬が唐突に赤く染まり、それまで引き離そうとしても絶対に不可能なほどだった視線も逸らされてしまったためである。

「ど、どうしたの、レイさん?」

「……あれは……私……なんとなく傍に行かなくちゃと思って……だから傍に行ったら……シンジ君が……落ち込んでるように見えたから……」

彼女は俯いたままぼそぼそと呟くが、言っている事はまるで要領を得ない。しかし、それでもおおよその意味は伝わってきた。

「もしかして……、心配してくれたって事で良いのかな……?」  
「あ……」

シンジが自信なさげに問いかけてみると、レイの頬はますます赤く染まっていく。すでに耳朶やうなじの方まで紅潮させて縮こまる彼女の姿は、思わず抱き寄せてしまいそうに なったほどの可憐さである。だが、悲しいかなレイはシンジの左側を歩いており、彼の両腕は未だに思いどおりに動いてく れることはなかった。

(キヤアアアアアアアアアアアア! ナチュイイイイ!! 《造語: ナチュラル可愛いの意味》くっそ! なぜ、俺の腕はこうもアホなのだ! こんなナチュイ物がそこにいると言うのに、抱きしめられないだと……)

そんなシンジのそんな心境の中、両腕にある程度以上に力を入れてしまうと背中が痛むのでシンジがガツカリしていると、気が付かないうちに顔が力を入れていた。普段ならば人の前ではそんな表情はしないのだが、このときは少々注意力散漫にな っていたのだろう。当然、その様子を見咎めたレイは、心配そうに彼の左腕を両手で包み込んでくる。

「……シンジ君、痛むの?」

「え……いや、そんなことない……よ!!」

「でも、つらそうな顔をしたわ。」

他の部分に比べると、わずかに体温が低くなっているように感じられる彼の左腕を、自らの体温で温めようとしても言うのか、レイは大事そうに胸に抱え込んだ。

「ホ、ホントに何でもないんだよ……う、うわわっ!？」

まだ完全には治りきっていないと言っても、力仕事をしなければ支障の無いほど動かすことが出来る程度には回復しているのである。シンジはとろけるような感触に慌てふためいて身を離そうとした。否が応でも全神経が集中してしまうような行為をされれば、自然に彼女の柔らかさと温かさを感じ取ってしまうのだ。

「……どうして逃げようとするの?」

「だ、だってさーその……む、胸が……当たってるし……。」

必死に言い訳をしようとするが、レイの不満げな視線に見つめられると、声が尻窄みに小さく なっていく。何と言っても、正直なところこのままでいたいのだ。成熟したシンジと言えど大多数の少年たちと同様に、彼にとっても異性の胸というのはある種の憧れを抱く部分である。しかもそれが美少女のものとなれば、セイレーンの歌声もかくやといったところだ。

「や、やっぱり、まずいよ! みんな見てるからさー!」

一瞬、誘惑に負けてしまいそうになったシンジだが、ちょうど擦れ違っていた男子高校生の 視線で我に返ったらしい。

「他の人なんて関係ないわ。シンジ君の腕を温める方が大切なことだもの。」

「その気持ちは、とても嬉しいんだけど……。」

周囲からの視線が鋭い毒針のように突き刺さってくるのを感じたシンジは、何とかレイに思い止まってもらおうとしたが、彼女が急に寂しそうに表情を曇らせたことで言葉を途切れさせた。

「嫌なら止めるわ。でも、私はこれくらいしか出来ないから……他に碇君の役に立てることがない……。」

「う……。」

(そんな捨てられたダンボールに入った子猫みたいな顔しないでよ……。)

そう言われてしまうと、シンジは何も言えなくなってしまふ。確かにレイが彼の生活にとって助けになってくれているとは言い難かったのだ。

「私には出来ることが他にないの……。」

「レイさん……。」

洗濯などは機械が全自動でやってくれる。この一週間の中、レイはミサトの家にまで来て色々家事を手伝ってくれた。重たい物や高い所にある物を取って運んでくれた。その時のシンジは余り動かす事も出来ない為に、入浴が困難であったがミサトの悪戯心で「一緒に入ったら？」と笑った顔をしながら言ってきたがシンジは拒否。

レイは料理などはやったこともない。結果、レイが彼のために出来たことと言えば、かろうじて掃除や物を運ぶと言った手伝いくらいだったのである。買い物や細々としたことなど、彼女にも出来ることは何でもやっているのだが、やはり彼自身に何かをするという方が充足感を感じるのだろう。

「こうして温めて治してくれるのなら……私は……。」

言いながら精一杯の気持ちを入れてシンジの腕を掻き抱く。決して強い力ではないが、それを振り払うことは出来そうになかった。彼女の胸に包み込まれた腕から感じるものは、シンジに気恥ずかしさを覚えさせる柔らかな弾力だけではなく、左腕に本当に活力を吹き込んでくれそうな温もりがあるのだと気が付いたからかも知れない。

「……わかったよ。でも、このままだと歩きにくいね」

「そう……かも……。」

レイはシンジの肘から先の部分を抱いていたが、さすがにそれではまともに歩くことは出来なそうである。

「……。」

視線を自分の胸元に落として暫し考え込んだ彼女は、抱き締めていたシンジの腕を名残惜しげに解放すると、すぐに二の腕あたりに掴まる格好に体勢を変えた。自分なりに納得できる状態を選択したらしいが、これにより彼は目眩がするような幸福感と、見知らぬ同性たちからのさらに強まった嫉妬の視線に晒されることになり、もはや

まともな思考 など出来なくなったのは言うまでもない。しかし、そんなシンジを余所にレイは不思議なほど安らいだ表情で目を細めている。

「……………これ……………気持ちがいいわ……………。シンジ君を……………守れてるみたい……………」

「え？ な、なに？」

うつとりとした瞳にどぎまぎさせられながらも、シンジは何とか問いかけることが出来た。

「シンジ君の傍に居ると不思議だわ……………急に身体が変になることもあるけれど、普段はとても気分が 良くなるの……………」

レイはシンジの肩にふんわりと頭をもたれさせながら、囁きのような声で呟いた。薄く開かれた唇の隙間からは安らかな溜息が洩れ、このときの彼女がまさに快い気分していると 言うことを気付かせる。

「な、何か照れるな……………」

彼女が無意識に放っている不思議な雰囲気はシンジの心を絡め取り、周囲の視線をも感じさせ なくさせていく。もはや彼の目には、足を踏み出すたびにふわふわと揺れて肩をくすぐるレイの髪以外は、何も 映っていないかった。そのあまりの親密さには、周囲の目も諦めたように散っていった。

数日後

シンジの怪我も治りレイに礼を言うと、レイは少し悲しそうな顔で言ってきた。

「…もう良いの？」

美少女であるレイの捨てられた子猫のような表情を見たシンジは、内心は血涙が流れるほど葛藤していたが必死に顔に笑顔を浮かべて礼言い、今度何か買いに行こうと約束した。するとレイは嬉しそうな表情を浮かべた。

そして、全快になったシンジはミサト家にリツコを呼び料理をご馳走しようとしていた。影ながら本部では、彼女には世話になったのでシンジが開発部と話をして終わって偶々帰り途中でリツコと会いシンジが礼としてミサト家に招待するとリツコは必死な顔で言う。

「わかったわ！いつになるかしら？日程分かり次第、教えてもらえるかしら。その日は絶対に空けるわ！」

余りの形相で言うリツコに、シンジは若干引き気味なりながら頷いた。

「は〜い、出来ましたよ。」

シンジは出来たての料理を居間のテーブルに並べた。並べられた料理を見たリツコは、余りの出来に吃驚していた。

「本当に凄いわね、シンジ君…。なんでも出来るのは知っているつも

りだったけど、これほどとは…。」

「そうよー・シンちゃんは凄いのよー!」

何故か既に出来上がってるミサトがビール缶を片手に自慢する。

「…貴女が言う事じゃないと思うけど、ありがとうねシンジ君。招待してくれて、こんな美味しそうな物まで出してきて。」

「いえいえ、リツコさんにはお世話になってるんで。遠慮無く食べてってくださいね。あっ、カロリーも抑えられるものは抑えてるで。お酒は何がいいですか?ある程度、ミサトさんに買って来てもらいました。」

(本当に14歳とは思えないわね。でも、ギャップもあっていいかもしれないわね。見た目は女の子のように、男らしい対応…。益々、私の下で働かせたいわ!)

リツコの考えが漏れたのか、シンジの身体がブルリと震えた。リツコのワイングラスにワインが注がれ、シンジも座り準備が出来ると3人で手を合わせる。

「いただきます。」

「クエツ」

3人と1匹の声が部屋に鳴り響くと最初にリツコがシンジの作った料理に口に運ぶ。

「!!」

(言葉が出ないわ!素朴では無く味も濃くも無く薄くも無く飽きが来させない味!…これほどとは。)

リツコが料理を噛み締めながら食べ、飲み込み少し目を閉じ考えている所。シンジは、リツコの口に合わなかったのかと思い聞いて見た。

「リ…リツコさん?お口に合わなかった…ですか?」

リツコは返事を返す前に、ワイングラスを取りワインを少し口に含みゆっくりと飲み込むと口が開かれた。そして、シンジの両手を取りリツコは真剣な顔で言う。

「結婚しましょ!」

「ヘッドハンティング、超えた!?そして、この流れがテンプレ化!?」

余りの言葉にシンジは、いつものツツコミにキレが出せなかった。「ちよつとリツコ〜！目の前でプロポーズしないでよ。シンちゃん、私の嫁なのよ。」

「ミサトさんも何を言ってるんですか!？」

パクパク器用に食べながら、ミサトがリツコに張り合うように言う。ジト目をしながらリツコはミサトの方に顔を向ける。

「どうせ、貴女。シンジ君をここに住まわせたのは、家事をやらせる為でしょう。初日にでも家の片付けでもやらせたんじゃないやなくて?」

「何故それを!？」

「まあ。元から知っていたけど、本当にやらせるなんて…。」

「うぐっ!」

そんな2人の攻防を見てシンジは苦笑していた。そして、リツコは再びシンジの方に向いた。

「シンジ君、今からでも遅くないわ。私の家に来ないかしら?」

「ヘッドハンティングするな!リツコー!」

シンジにリツコがそんな誘いをしていると、それを止める為ミサトは声をあげてリツコの名を呼ぶ。その状況にシンジは心の底から笑みを浮かべる。そんな笑みを見た2人は黙ってしまった。

「いや〜、良いですね。平和で。こんなやりとりしながら、皆でワイワイ騒いでゆつくり生きていきたいですよ。その為にも早く使徒を全部倒さないと…。」

そんな事をシンジが呟くと、ミサトとリツコも笑みがこぼれる。

「そうね…、早く全ての使徒を倒して皆で宴会でもあげましょ。」

「いいわね、リツコ。美味しいお酒が飲めそうね!」

「貴女は唯単に飲めれば良いんじゃない。」

「うっ…。」

リツコに凶星をつかれたミサトは言葉を詰まらせる。そんな2人のやりとりを見ながらシンジは、心の底から世界を平和にして皆で宴会をすることを心に決意を決めた。皆が笑顔にさせる為に…。

その後も3人で、楽しく料理に箸を運びながら会話をしている。リツコが突然、ハッと表情をとる。リツコは自分の隣に置いたシヨル



ダーバッグを開き何かを探し始める。

「あつ。確か此処に有ったはず…、有ったわ。ごめんなさい、シンジ君。今日のシンクロテストの時に、渡すのを忘れて今日までなのよ…。古いネルフのIDカード。古い方だと、明日ネルフ本部に入れなくなってしまうから明日の朝にレイに渡してくれない?」

リツコはシンジにレイのIDカードを渡す。渡されたシンジは快く了承する。

「わかりました。任せてください、明日の朝にレイさんの家に行つて来ますんで。」

「ありがとう、お願いね。」

礼を言われたシンジは、リツコに頭下げお辞儀をした後リツコから渡されたレイのIDカードを見ていた。

(そう言えば俺、レイさんの家に行くの初めてだな…。まあ、ちやちやつと渡しますか。)

それを見ていたミサトは、アルコールで顔を少し紅くしながら悪戯でもしてやろうかと思う子供のような顔でシンジに問いかけた。

「あつれ、シンちゃん?うふふ、レイのカードをジツと見て何を考えているのかな?レイの家に行つて2人っきりの部屋で、あーんな事やこーんな事でも考えているの?ふふふつ…。」

ミサトは、日頃にシンジに構つては返り討ちにされ続けて今が一番からかう時だと思い孔明の様な《ミサトの中で》策でシンジを慌てふためく姿を見れると思つていたが…。

「日頃、俺にしていることをリツコに言つても良いんですね?ミ・サ・ト・さ・ん?あーんな事やこーんな事を。」

誰もが恐怖を覚える笑顔で、シンジはレイのカードを団扇のように扇ぎながら笑つた。誰が見ても、シンジをからかえる人間は存在しないと思わせる姿であつた。紅く染めていたミサトの顔は、段々青くなつていった。流石に親友に、ミサトがシンジ相手にからかい方が余りにも酷い為にこれをリツコに言われた日からは職場では白い目で見られる事に。

それは阻止する為にミサトは、プライドを捨ててシンジに向かつて

土下座をした。ペコペコと頭を下げた。それを見ていたリツコはミサトに白い目を向けながら、その光景を眺めていた。

「無様ね…。」

ボソリと呟くりツコ。

## 次の日 早朝前の深夜

コンクリートがむき出しな簡素な部屋。そこに置かれた家具調度はほとんど無く、わずかに人の手が触れているとわかるのは窓際に置かれた寝台とそのすぐ横にある小さな衣装棚くらいのものである。特にそれらが古ぼけているというわけではない。では何故そんな印象を受けるのか？その理由は強いて言うならどの家具もみな一様に新しく、人に使われることによつて必ず起こる柔らかい円みが見られないことだ。家具は未だに鋭角さを保っており、この部屋に住んでいる者が他人に対して見せることがある無意識の拒絶を象徴しているかのようにも見えた。

開け放たれた窓には白いカーテンが揺れている。それは差し込んでくる太陽の光を遮り、時には迎え入れもして、寝台の上に制服姿のまま横たわっている少女に複雑な彩りを添えていた。彼女の名前は綾波レイ——以前はこの無機的な室内の様相と同じように単色の少女であった。しかし、今の彼女にその表現は適切ではない。喻えるなら風に揺れて刻一刻と変化していく水面を照らす陽光の煌めきか、それとも今この瞬間にカーテンの揺らめきで色づけられていく彼女自

身こそが、現在のレイの心を表現するのには相応しいだろう。あまりにも幼く不安定な心を持つ少女が彼女なのである。

「……ん」

レイはベッドの上で小さく身を振ると、どうしても寝付けない自分に苛立ちを隠せない様子でゆっくり目を開ける。動悸が治まらず、精神を落ち着けることが出来ない。学校から帰宅して訓練の予定が入っていない日や何もしてない時には、出来得る限り身体を休めておくようにとリツコから言われていた。レイは自分の身体がそれほど丈夫な方ではないことも良くわかつている。激しい運動をすれば持久力に欠ける彼女は相応の休息を取らなければすぐに体調を崩してしまいがちであったし、それはこの緊迫した状況下において許されることではないと理解していた。その後、再び目を瞑り数分後には寝息を静かな部屋に鳴り響いた。

しかし、以前のレイは眠ることが出来なかった。目を閉じるとつい最近に体験した恐怖が襲いかかってくるのだ。彼女が待機している時に、使徒に腹部を貫かれた初号機の姿を発令所のスクリーンで見えたとき。通信機から響いてくるサードチルドレンの苦痛の呻きを聞いたとき。レイは自分が何故そんな思いを抱かねばならないのかと自問自答したくなるような胸の痛みを感じたのである。だから気を失った状態に陥っていた彼の病室を訪れた。そうするしかなかったのだ。

その彼が病院からネルフの独房に移ったことを知ってから最初の数日間は、今後にもこのような自体に陥ったときのために訓練を強化することで余計なことを頭から閉め出そうとしていたレイだったが、そうして自分の心を誤魔化すには限界があった。眠ろうとすれば彼の苦しい絶叫が頭に木霊して不快な寝汗をかいて目覚め、食事を摂ろうとしても猛烈な吐き気に襲われる毎日が続き、睡眠の不足と空腹のために弱っていく自分に為す術はなかったのである。しかし、彼が独房から出たことを知ると気分と体調は少し戻り学校で顔を合わせると気持ちが高まった。そして、いつも通りに昼時は一緒に食事を取り、その時に話をしていた自分が誤解をしてシンジに平手打ちをした

と言うのに怒らず、分かりやすい説明をして笑った。

その後、不注意で階段から転げ落ちる所を勇敢に助けだしレイの体には傷一つ付かなかった。その時、シンジの胸の中でレイは自分の心の違和感に気づいた。落ちる際にシンジはレイの事を抱きかかえていたが、決して抱き締める事は無かった。柔らかに優しくお姫様抱っこを維持をしていた。そのシンジの腕の中で、レイはシンジの温もりを感じて不謹慎ながら嬉しい気持ちや落ち着く気持ちに襲われていた。

元々レイ自身は、人と触れ合うことは少ない。そんな中で助けられた時に抱き締められ、シンジの温もりを知った。彼の優しい性格と人を和ませる笑顔や痩せ過ぎない肥満体では無い身体で、自分の身体を包まれた時はレイは親と言う存在はいないが親に抱き締める感覚と感じていた。

その後、シンジを救助をトウジとケンスケを呼びネルフ本部の病院に運ばれた。変わって、レイは学校が終わりネルフ本部に向かい予定にあつたエヴァ零号機起動実験を行った。その時にレイは、今後自分で出来る限り彼を守ると決意。

実験も終わりシンジの容体を聞いた後、自宅に戻ると直ぐに制服のままベッドに身を委ねる。レイは後悔をしながらシンジの笑顔と温もりを思い出し、その日は安らかな眠りに落ちることが出来た日であつた。

朝

柔らかな日差しの中で眠る美しい容貌の少女と言われれば、おおよそほとんどの者が安らかな呼吸によって上下する胸元と、そこに口付けて彼女を目覚めさせてくれるのを待つように薄く開かれた唇などといったものを想像するのではなからうか？

今、レイは眠っている。彼女の容姿だけならば、まさに童話に出てくる姫君のようだと言っても誰一人として反論する者はいないだろうが、その寝姿は目を背けたくなるほどに無惨なものであつた。暖かい午後の陽光に全身を晒しているというのに、レイは何か恐ろしい

ものから自分を守ろうとしているかのようには腕で体を掻き抱き、苦しげな呻き声を上げながら小さく縮こまって眠っていたのだ。

だが、この部屋には彼女一人だった。何故このような苦しみを味わなければならぬのかも知らぬまま、レイは自然な目覚めが訪れるか、それとも悪夢の中で彼女が死を迎えるまでいつも怯え続けている。

「あつ……う……。」

レイは自分の肩口を掴む両手の指に力を込める。柔らかい皮膚を引き裂くことで悪夢から逃れようとしているのかもしれない。夢の世界で姿の見えない恐怖に引き裂かれるよりも、現実の肉体が傷を負う方が楽だと無意識に感じているためだった。やがてレイの体が激しい痙攣の後に硬直し、暫し室内に静寂が訪れた。

「……。」

やけに古風なアナログ時計の秒針が動く音だけが響く中で、ゆつくりとレイは瞼を押し上げていく。憔悴しきった瞳が完全に見開かれると、彼女はわずかに体の緊張を緩めて周囲の光景に視線を巡らせ、深く静かに溜めていた肺の中の空気を吐き出した。

「……私の部屋……。」

自分がいる場所が悪夢の中ではなく、それまで心が彷徨い込んだ闇の中でもないことを確認したレイは、あまりにも明るくのどかな外の風景に目を向けた。

「ここは安全……居るのは私だけ。誰も来ない。だから……安全……。」

自分自身に言い聞かせるように呟く。恐らくレイは気付いていない——いや、わからないのだろう。誰も来ない閉められた空間であることが彼女の怯えをわずかながら薄れさせるが、それはレイ自身の心の内側に存在する以上、決して消えることのないものだ。その恐怖から逃れるために必要なのは誰も訪れない部屋などではなく、彼女を見守ってくれる人の温もりなのだから。しかし、今のレイは悪夢に怯え空虚な呪文だけを信じ、それを呟き続けた。

「安全……、ここは怖くない場所……。」

ようやくまだ残っていた緊張が体から完全に抜け落ちた。しかし、それとともに気付かなかった鈍い痛みを肩の付け根辺りに感じたレイはわずかに眉を顰める。

「……。」

無言のまま制服を全て脱ぎ捨てブラウスのボタンを外して雪白の上半身を露わにした。この年頃の少女としてはやや成長に難がありそうな細い肢体を備え付けの鏡に映すと、肩口に付いた幾筋かの赤い線が痛々しく腫れ上がっている。しかし、それは彼女にすればいつものことではしかない。本部の医務室に行けば手当をして貰えるのだから特に気にすることもなく、レイは今度は下半身を覆っていた下着にも手を掛けた。彼女が本当に治療を受けねばならないのは身体よりも心の方であり、そのためにはレイ自身が原因を自覚して克服する必要があるのだ。不安や恐怖の正体は彼女にそれは望むべくもないことだった。

「汗がひどい……、流さないといけない……。」

彼女自身を隠していた最後の布地をも脱ぎ捨てると、それらをまとめてバスルームの中に消えていく。両手に持った衣服類は洗濯籠に適当に放り込んだ。バスルームの奥からはすぐにシャワーから出る水音が響き始め、かすかに苦痛の呻き声も洩れ出した。両肩の傷に熱い湯がひどく染みたのだろう。

それでも何とか汗を流し終わり、一度栓を抜いた後で浴槽に十分な量の湯を貯め直したレイは、シャワーからの湯を止めてゆっくりと全体を浸していく。

「……くっ……。」

レイの喉から再び苦痛の呻きが洩れる。ユニット型のバスであるため少し湯の温度を高めにして貯めるのは普段からの習慣だったが、裂傷こそ出来ていないとは言え傷ついた肌には刺激が強すぎた。普通ならば悲鳴の1つもあげておかしくないはずだが、他に誰もいない自室であるというのに、それを押し殺してしまうあたりは彼女の性格によるものか。

しかし、出来る限り静かに身を沈めたことと、温度になれてきたお

かげでレイの身体の緊張も 少しずつ解れていく。彼女はこの薄暗い密室の中で温かい湯に浸かりながら目を閉じるのが昔から好きだった。

「ん……。」

自分の呼吸と鼓動以外には何も聞こえない静けさは常にレイの心を落ち着かせてくれた。その華奢な体にはちょうど良い浴槽に肩まで浸かっていた彼女は、背中を内壁に寄り掛からせたまま湯に頭も沈めていく。こうすれば本当に自分の内側にある音以外には聞こえなくなるのだ。

（私の中の音。私の中の声。今はそれだけしかない。落ち着く……。）

血液に含まれている酸素が減っていくにつれて少しずつ速くなつていく鼓動だけがレイの世界にある音だった。いや、普段ならばそうであるはずだった。

（……何？）

レイは突然感じた何かに彼女だけの神聖な静寂を乱された。それは外からの音ではない。

（私の中に誰かが居る。誰？ ネルフの人？ 温かい……温かくて心地よい……これは碇司令？ ……違う。同じように見守ってくれるけれど、もっと私に近い人。誰？ あなた、誰？）

彼女の心に波を立てたのは、言うなれば彼女自身であった。いつの間にか彼女の心の中に住み始めた人影。次第に大きくなっていくその存在。胸の奥底を掻き乱されるような不安を自分に与えるというのに、悪夢の恐怖に怯えているとき にはその人影に縋り付くことで不思議な安心感を得ることが出来る矛盾した存在に対して、レイが抱いている感情こそが彼女の静穏を乱したのである。レイはこれまでその人影について深く考えたことはなかったが、ついに彼女の聖域にまで影響を及ぼし始めたことで、その存在を直視するしかなかったのだらう。そしてぼやけていた人影に心を振り向けた瞬間、あまりにも容易くその正体を見極めることが出来た。

（あなた、サードチルドレン？ 碇シンジ。碇司令の息子。私の心を

乱すのは、……碇シンジ……シンジ君。」

本当はもうとつくにわかつていたのかも知れない。気になるのだ。第4使徒との戦闘中に彼の絶叫を聞いたとき、レイはその叫び声の大きさと同じかそれ以上の悲鳴が心の中で響き渡るのを感じていたのだ。だから彼の病室にも赴いた。眠っているシンジの表情に自分が喜び、怯え、安心させられたことを、何故そうなるのか理解出来ないながらも認めていたのである。

(わからない……私は……あなたは……。)

酸素の不足ばかりではない理由によって鼓動がさらに速まってきた、それ以外の何もかもがレイの中から消え去っていく。後に残るのは最近気付かないうちに見つめてしまっているシンジの色々な表情だけだ。

(私は……あの人を……。)

混乱する心が1つの結論を導き出そうとした瞬間、すでに限界近くになっていた酸素の欠乏が強制的にレイを水面に押し上げさせる。

「……。」

前髪から滴る水がぼたぼたと水面に落ちる様子をレイは茫然とした表情で眺めていた。これまでレイは命令されたことをそつなくこなし、自分の義務を過不足無く果たしてきたことを自負している。しかし今、彼女の心が命じているのは論理的な理由など全くない、単なる衝動的な欲求でしかなかったのだ。

「私は……あの人を守ると……決めた。だけど傍にも……、……居たい……。」

それは絶望的な響きを伴った眩きだった。彼の傍に居ると言い様のない恐怖に襲われ、悪くすれば碇ゲンドウに命じられていることさえも守れなくなってしまうのである。

(碇司令は言った。まずは自分の身を大事にすることを覚えろ。でも、シンジ君の……彼の傍に居ると私は胸の奥が……おかしくなる……)

シンジがこの街に来るまでのレイは考える必要など無かった。必



要がなかったから行わず、それ故に彼女はその行為に慣れていない。自分の心がシンジの傍に居たいと欲し、それと同じ心がシンジの存在を守るというジレンマに行き当たったとき、彼女にはどうすればいいのかわからなかった。薄暗いバスルームの中で次第に冷めていく湯に浸かったまま動けなくなってしまうのである。しかし、レイはそのような状態に陥ってもそれほど性急な結論は求めようとしていなかった。

(ここは私の場所。ここには誰も来ない。急ぐことはない……。)

彼女にとつての信仰とも言える呪文。これがある限り、この部屋の静けさがある限り、安全な待避所を持つているのと同じだと信じているのだから。だが、それは硝子のように脆い壁でしかなく、これまで安泰だったとしてもレイを囲む世界が激しく動いている今では、決して彼女が思っているような強固な壁ではなくなっているのだ。

(……何?)

再び目を瞑ろうとしたレイはかすかに聞こえてきた音に耳を澄ませる。落ち着きを取り戻し始めていた心臓の鼓動が激しくなってきた。この部屋の不可侵性が失われようとしている事実が全身が震えだした。洗い流したばかりだと言うのにドツと汗が噴き出してくる。

「……すみませーん。レイさん、居ないのー?」

「!?」

バスルームから出ればすぐのところの玄関があるのが一般的なワンルームマンションの造りで、あり、意図的にドアフォンの回線を切断してあるこの部屋において彼女の在室を確認するには、いま外にいる人物のように声を掛ける以外に方法はない。そしてレイは滅多なことでは返答などしなかった。しかし、彼女は迷わず浴槽から身を起こして立ち上がっていた。

「あれ?レイさん、居ないのかな……。」

どのような心の動きが自分をこれほどまでに急き立てるのか今ではもう理解できていた。レイはたとえどんなにつらく苦しい思いをしようとも、あの碇シンジという少年の傍に居続けたいと思ってい

たのである。これほどまでに自分が求めるものがこの世界に存在しているなど思いも寄らなかつた。もはやレイは何も考えずにバスルームを飛び出すと、すぐ外に掛けておいた大きなタオルだけを身体に巻き付けて玄関に駆け寄る。

「困ったなあ……。まあ、とりあえず郵便受けに入れておけばいいかな？」

慌ただしくタオルを巻いている最中にシンジの諦め混ざりな呟きと、広告のチラシがいつぱいに詰まった郵便受けがガサガサと鳴る音が聞こえ、レイの混乱に拍車を掛ける。

『待つて欲しい』と声を掛けるだけでいいはずだった。しかし、彼女を縛る恐怖の鎖は完全に解けたわけではなく、その言葉を発することは出来そうにない。だからレイはとにかくドアを開けることだけを考えたのだ。

「しよがない……。留守ならIDカードも分かりやすく郵便受けに刺したし……。よし、帰るか……。」

「!?だ、駄目……。まだ行つては駄目……。」

麻痺していた喉から掠れた声が洩れ、レイは自分の明確な意志を彼女自身の耳で確認する。シンジがそう呟いて踵を返す靴の擦過音がしたその直後、ついにレイはドアの電子ロックを解除してドアを引き開けた。

「……うん?……え?……ちよ、ちよつと、レイさん!? 駄目だよ、そんな格好で外に出たら!!」

背後で音がしたことに気付いたシンジは怪訝な表情で振り向き、次の瞬間には顔を真っ赤にして俯きながら大声で叫んだ。彼の視線の先にはサンダルすら履かず、しかも身に着けているのはカナリア色のバスタオルだけという格好のレイが立っていたのだから無理はない。

「レイさん!?早く中に戻る!お願いだから……。見られちゃうだろ!!」

必死の思いでシンジが絶叫する。顔をあさつての方向に向かせレイのあられもない姿を見ようとしなかつたのは賞賛に値したが、その

ためにレイの予期せぬ次の行動に全く対処することができなかつた。

「…行つては駄目……。」

囁きよりもか細い声は風の音にすら掻き消されそうだった。しかし、シンジの耳に彼女の意志を伝えるという重要な役割をかるうじてではあるが果たしていた。思い掛けない言葉に驚いたシンジが顔を正面に向けたとき、その視界を蒼銀色のヴェールが覆い隠し、次いで甘い香りを伴った温かくて柔らかなものが彼の首に巻き付けられた。

「え?」

「行かないで…、ここに居て……。」

「レイさん……。」

シンジは自分の目を至近距離から覗き込んでくる赤い瞳の魔力に捕らわれ、指先さえも動かす事も出来ずに凍りつくのだった。

## 番外

西暦2000年、セカンドインパクトが起きてから早15年。季節は無くなり、1年中が夏に等しい気温が続いていた。

そんな季節の中、人類は暑さには免疫はあった。あったのだが…。

「……暑いわね…。」

ネルフ本部の食堂に1人、ミサトがテーブルにぐでくと身体を預けていた。彼女の顔から大きくないが汗の雫が出来ては、重力に従ってテーブルの上に落ちていく。

食堂でだらけているミサトがいる中、ネルフスタッフが何人か入ってきてはカウンターに向かい水筒を出した。

「すみませくん、氷をください。」

「はい。」

そう水筒をカウンターを起き食堂の人に頼むスタッフが、その後ろから彼のように水筒を持ち順番を守る為に列を作るほどの人数が食堂に集まってきていた。それを見ていたミサトは、ボソリと呟く。

「なんで特務機関ネルフと言われた組織が、節電して暑い思いをしなきゃいけないのよ…。」

最近になって、外の気温は暑くなり夏に暑いのは当然と言った所だが猛暑日が続く為に世界中での電気不足が発生。その為、原子力、風力、水力、火力発電所の電気供給が間に合わず出来る限りの節電を世界中が行う事になった。特務機関ネルフも例外にはならなかった。

地下の本部と云えど、空調は必要最低限でクーラーは起動はしているが熱中症になる一歩前ほど微々たる物しか下げられないでいた。それを対処する為に、水分補給は細かく取らせる為にネルフが水筒をネルフスタッフ全員に提供する。飲み物は、自動販売機で買えるのだ

が冷たさを欲する人は食堂まで足を運び氷を手に入れようとスタッフ  
フが数が少しばかり多い為に食堂に行列が出来てしまう結果に。

「…早く猛暑が終わってくれないかしら…？暑い…。」

そう呟いてだれているミサトに、近づくと人影一つ。

「ミサトさん…。溶けるんじゃないんですか？そのままでしたら。」

シンジは、学校の後にネルフ本部にきて訓練が終わり食堂に水を飲  
もうと足を運ぶとテーブルにだれているミサトに声をかけた。ネル  
フスタッフやミサトは、暑い暑いと言ってる中でシンジを見てみると  
そこまで暑くなそうにしていた。その証拠に、長袖長ズボンのジャ  
ジを着ているのだから。

「なんでシンちゃん…。そんな恰好で暑くないのよ。それも訓練もや  
り終わった後でしょ…？」

「ええ、今さっき終わって少し喉乾いたんで食堂に来て水でも飲もう  
と足を運んだんですよ。俺は余り暑がらない体質なんで。」

不思議な体質に羨ましく思うミサトは、願わくば冷たいビールでも  
飲みたいと思う。だが、今は勤務中である為に飲めず逆に悔しい思  
いをするミサト。

「ねえ、シンちゃん。なんか涼しくなるような事ないかしら？」

「ミサトさん、無茶ぶりですよ？いきなり言われて、出来たら苦労しま  
…せん…よ。」

ミサトの要望を聞きながら、ミサトの対面に座ろうとするとシンジ  
が何か思いつく。

「ミサト？じゃあ、こんなんでしょうか。」

ミサトは、シンジの言う何かに可能性を感じたのか顔をシンジに向  
ける。

「どんなの？動いて逆に汗かいてとかはイヤよ。」

「いえ、自分の話を聞いてくれればいいですよ。…これは、俺の知り  
合いが言ってた話なんです。Ｙさんって人が体験した奴なんです  
がね…。」

その話は、セカンドインパクトが起きる前の時代。

季節もあり、人が生まれ普通な生活を送ってきたYさん。その人は高校卒業後、ある土木の会社に入社をして1・2年は仕事を覚える為にも生活の為に色々教わりながら仕事をしていった。

ちよくちよくと出張もありながらも仕事をやり続けていたYさん。だが、ある日の仕事上がりに上司に言われる。

「おつ、Y。仕事、お疲れ。悪いんだけど明日、出張お願いね？」

「は…はあ、わかりました。また新潟ですか？東京から新潟なら高速道路使って2〜3時間ですね。一度行ったことあるんで道は分かりますよ？」

Yは、そう上司に聞くと帰ってきた言葉は違った。

「いや、関西の神戸だよ。あそこにもウチの会社とは違うけど、名前は同じ会社から応援頼まれたんだ。東京が俺らで、大阪にもあるんだよ。期間は、まだ決まっていな。」

Yは、一瞬思考が止まり上司の言葉がすぐには理解出来ていなかった。

「え…、マジですか…？明日…。」

「おう、明日で神戸だ。」

Yは目眩した。

翌日

前日に報告されて、すぐ自宅に帰り出張の為に荷造りをして朝5時

に会社前で他の人を待つ。すると、50代の男性と30代前の男性が会社の前にやってきた。50代の男性はKさん、30代の男性はTさん。

Yは、やってきたKさんとTさんに挨拶をする。

「おはようございます。Kさん、Tさん。」

「ああ、おはよう。」

「おはよう。」

3人が集まると、荷台に機材を積み込まれた2トントラックとホンダのハイエースに乗り込み、神戸に向かった。

出発朝6時で、到着が14時だった。途中休憩やご飯を済ませての焦らずの走行をしていたら、東京から神戸までの時間が8時間近くだった。

無事3人は神戸に着くと、最初にビジネスホテルに向かった。会社から出たお金で泊まる場所をいち早く決めると、各自に渡される鍵を受け取られ仕事が夜勤の為に少し時間があつたのでYはホテルの部屋で休んでいた。

時間は過ぎ、現場に3人が向かい近くの事務所に入る。

「すみませくん、東京の〇〇のモンですがこちらで良かったですか？」

「おおー東京さん、待ってましたわ。もうすぐで夜の朝礼が始まるんで、そこらへんに座っててください。」

そう言われたY達は、大阪の同じ会社の人に出してくれたパイプイスに座り待機をした。数分後、朝礼が始まり現場の状況や今後の作業内容を言われ朝礼が終わる。

「改めて東京さん、よく遠くまで応援としてくれてありがとうございます。じゃあ、3人とも。新規をお願いします。」

この新規と言う物は、大まかに説明をするならY達が現場で働く際に登録が必要なのである。新規を終わらせて3人は現場に入り、大阪の人にY達が作業する場所まで案内される。

「東京さん、今日からよろしくお願い申し上げます。では、簡単にこの現場の説明します。そこにある三宮駅の地下鉄を大きくする為の作業です。まあ、やつてもらおう期間は一年近くでしょうね。」

出張期間を大阪の人に、軽く言われるYは溜め息を他の人に見えないように溢した。その後、Y達は作業場に色々な準備をする。だが、やっている場所が地下で通気性が悪くその時の季節は夏と言ったものである。Yは、汗みどろになりながらも仕事をしていた。地下の作業場は室温が40度近くまであがっていたらしい。

終わったのは朝4時過ぎであった。今回の作業場では線閉作業の為に、地下鉄の電車が走る前に作業を止めるものだった。そして、1日目の仕事が終わりにビジネスホテルに戻り疲れた身体を癒す為にベッドに身を任せるとYは、数秒後寝息を鳴らしていた。

その後日、人数を増やす為東京から1人応援を追加した。Yより歳が4つほどしか離れていない20代の男性、Sさんが東京から関西の三宮まで新幹線で来てもらった。東京からの応援が全部で4人で行うようになり、一週間。

会社の方から一言。

「悪いんだけど、ビジネスホテルじゃなくて民宿とか安い場所に移ってくれないか？ビジネスホテルだと、4人分の金がバカにならないからさ。」

そう言われた4人は、他に安く泊まれる場所を探す。すると、一件会社が納得する民宿を見つける。そうして、ビジネスホテルを離れて民宿に向かった。

Yは、その民宿に着くと少し違和感を感じた。近くに六甲山と言う山がある為に坂が出来ている所に建てていた。その民宿は《三和荘》と看板に書かれていた。Y達は三和荘の中に入ると入ってすぐ左手側に受付口があり、前を向くとスリッパが入った少し大きめの靴入れが置いてあった。右手側には、階段がありその管理人と話をし期間が未確定で泊まることが決まった。そして、4人が泊まる部屋に管理人に案内された。Y達が泊まるのは、三和荘の《三階》で個室を四つ用意されTさんが301号室、Kさんが302号室、Sさんが303号室でYが305号室だった。

不思議な事に、SさんとYが使う部屋の間にはそこまで幅は無く普通な間だったのだが、何故Yが使う部屋が304号室では無く305



号室だったのか。三和荘自体が五階建ての民宿だったのだが、B1階、1階、2階、3階、屋上と区切られていた。Yは不審に思い他の階の部屋に見に行くと1階と2階の所は、ちゃんと104号室や204号室があったのだ。しかし、3階だけが304号室がなかったのだ。1・2・3階には計6部屋あった。それに1階だけにしか風呂場がなく、便所はどの階にもあった。

Yは深く考えるのはやめた。とりあえず荷物を305号室に運び、長く滞在できるように部屋に物を配置してからYは少し寝ることにした。夜21時に起床して、仕事に行く準備をしようとするYは頭痛に襲われていた。大した熱は無く、吐き気も無いのだがやたら頭痛が酷く止むをえなく、そのまま仕事に向かった。そして、頭痛に悩まされ暑さにやられながらその日の仕事は終え4人は三和荘に戻り、朝食と夕食が出る為朝早くに帰ってくる為に食堂は空いていない。

その為、食堂が空く前に風呂に入ろうとYは風呂場に向かう前に他の人を誘ったのだが『飯食い終わったら入る』と言われ1人で入ること。Yは風呂場に着き、脱衣所で服を脱ぎ風呂場に入ると身に視線を感じた。最初は、誰か入っていると思っていたのだが3人は入らないと言っている訳がない。そして、民宿にはY達だけしか利用していなかった。その為に、誰もいない風呂場からYは複数の誰かに見られるような視線を感じた。

でも、Yは自分の疲れで出た勘違いだと思つて最初に頭と身体を洗う為にシャワーが配置してある所に腰をイスに下ろす。そして、身体中を洗っている中シャワーの対面に風呂が配置しており、Yはずっと背中に視線を感じていたが疲れの余りに無視。身体を洗い終わり、風呂に入ると目の前で見えない誰かに見られる感覚に襲われていた。しかし、Yは目を閉じ無視。

その後、風呂から出て丁度よく食堂が開きYは食堂のテーブルに配置された料理の前に座る。他の3人もやってきて、4人全員が食事を始める。突然、食事をしている中KさんがYに話しかける。

「そう言えば、Y。今日、具合でも悪いのか？慣れない環境や暑い現場だから、身体でも壊したか？」

「いえ、唯頭痛が酷くて……。」

Kさんの心配する気遣いが、Yは少し心が軽くなる。そして、Tさんが発言する。

「Y、後で俺の部屋に来いよ。頭痛薬持ってきてあるからやるよ。」

色々心配してくれたYは、今だに頭痛に悩まされてる心は解れていく。そして、食事にTさんの部屋に行き薬を貰い水と一緒に飲み込んだ。それから特に何もせずYは布団に身をいれ、睡魔に意識を委ねた。

その日の21時の起床で、頭痛の様子を見ると薬のお陰か痛みは和らぎ食堂に食事をとってから仕事に向かった。

その日の仕事も終わり、三和荘に車で戻ってる中KさんがYに聞いてきた。

「Y、今日は頭痛は大丈夫か？」

「ええ、まだ完全とは言えませんが……。」

「早う治せよ?。」

そんな気遣いな言葉を聞きながら、三和荘に4人は戻りその日は日曜日の為、現場が休みだった。他の3人は、出かけると言って車を使い昼から三和荘から居なくなった。Yは、誘われたのだが頭痛を早く治す為に辞退した。日曜日の為、管理人も余り三和荘にいることは少なかった。

そんな三和荘に1人、クーラーを効かせた部屋で布団に寝転びながらテレビでNHKを見ていた。

「…暇だな。」

そんな事をつぶやくY。すると大きい方がしたくなり、便所に向かった。便所は男子用が三つに洗面台が二つ、洗濯機もあり大使用の和式トイレが二つ配置されていた。Yは、和式に跨り用を済ませようとすると和式を閉ざすドアにノックが鳴り響く。

コンコン

そんな誰かが、入りたい為にノックするような音が鳴り響く。Yは不思議に思いながら声を出す。

「入ってますよ。」

そんな一言だけを言った後、トイレには静寂になった。

(あれ?でも、今三和荘にいるの俺だけじゃないか?3人は出かけてるし、管理人もいない時間帯だし:気の所為か?)

Yは不思議に思い、用を済ませた後3人の部屋に確認をしに行く。だが、まだ帰ってきてはおらず。管理人もいなかった。Yは、その時は空耳だろうと思っていた。その後、数時間後に3人が帰ってきて夕食と一緒に食べてる中Yは3人に尋ねた。

「あの上、KさんにTさんにSさん。最近この風呂場で何かありませんでした?」

そう聞かれた3人は、口の中が無くなり次第喋り始める。

「いや、別に:。」

サラツと答えたSさん。

「ゴキブリでも現れたか?」

虫嫌いなTさんの返答。

「逆になんかあったか?Y。」

逆に聞き返すKさん。

それらを聞いたYは、やっぱり気の所為だと思っていた。

それから次の日曜日に、また3人が出かけてYだけは残り三和荘で寛いでいた。漫画読みながら菓子類を口に運びなら寛いでいると腹痛が襲い漫画を置き、トイレに急いで入り和式をYがNHKで放送されていた戦国時代ぐらいの昔の事を流れているのを見て真似をして見た。

簡単に言えば和式の使い方を、逆に向き丸みがある所に尾骨ら辺を当て少し寄りかかれるように用をしていた。昔では浴衣と同じ服装で女性が用をたす時、服が和式の底につかせないように後ろ側にかける場所があったそうだ。それをYは和式では長く用をしている時は丸みに寄りかかり楽に用が出来た。

腹痛の為に、少し長く用をしているとドアにノックが鳴り響く。

コンコンコン

Yは確実にノック音が聞こえ、3人が帰ってきてTさんがノックをしているもんだと思っていた。2日前に、Tさんが悪戯で無闇にノック

をすると言う事をしている為Yはその時はTさんの悪戯と思つていた。

「おかえりなさい、Tさん。でも、また悪戯つすか？」

Yはそんな事を言うとドアが強く何かがぶつかった音が鳴り響く。

ドンツ

余りの音にYは驚き、恰好悪い姿ではあるが真剣に焦っていた。いきなりのノック音の後に、ドアが強く何かぶつかった音がなれば入ってる人間は誰でも驚くだろう。今のYは、和式を逆に使っている為に普通はドアが背になる所が顔の前がドアの為、囲っている壁の向こう側をドアの隙間から見えた。Yは、怖がりながらも壁の向こう側を見る。

だが、誰もいないでいた。

Yは、少し考えるとTさんが悪戯でドアを壊れかねないほどの事を

やるとは思えない。そして、ドアの隙間から見えないなら足元の方から少し身を低くして誰かの足が見えるんじゃないかと見て見るが……、誰も居なかった。それを見たYは、恐怖が襲ってきた。誰もいない三和荘で用をたして居る時に、ドアの向こう側で誰もいない状態でノックをされる怪奇現象が起きたのだから。そんなYを追い打ちをかけるように、ドアにノック音になる。

コンコン

コンコンコンコン

コンコンコンコンコンコン

ゴンゴンゴンゴンゴンゴン

鳴り響くノック音、再びYはドアの隙間からドアの向こう側、足元を見るが誰も居なかった。誰もいないのに今確実にノックが鳴り響くトイレでYは恐怖に襲われていた。余りの恐怖に、Yは右手でドアを殴ってしまった。自分でも、何故そんな行動が出たのかは分からないでいた。

だが、その一撃でノックが止まった。その瞬間、Yはトイレトペーパーでケツを吹きトランクすとズボン上げ行き良いよくドアを開ける。

バンツ

ドアの前には誰もいない静かな空間に、行き良いよく開けたドアが鳴り響く。そして、Yは恐怖に駆られたながら洗面所で手を洗う。但し洗面所にある鏡は見れなかった。見て居てはいけない物を見たら自分は発狂してしまうと思っただからだ。手を洗い終わると自分が使ってる部屋に急いで戻り、ドアが引き戸の為力一杯に開かせた為に再び大きな音が鳴り響く。しかし、Yはなりふり構わずに部屋に入りドア閉め鍵をかけて素早く布団の中に入り込んだ。Yは身を震わせていた。すると、廊下から何か走っている音が聞こえてきた。

ダダダダダダダダダダダダダダ

音の始まった場所は、Tさんの使ってる301号室からYの305号室に向かって走る《何か》が廊下をかけ走っていた。Yは身をより小さくして布団に縮みこまる。走る音が305号室に近寄るとYは

緊張感が走る。

ダダダダダダッ………

その足音は、305号室を通りすぎ307号室の方に消えて行つた。307号室の隣には非常階段がある。Yは、そんな事を考えていると静かな三和荘に戻りYは布団出たため息をつく。その一瞬の気の緩みに…。

ダンツダンツダンツダンツダンツ

305号室のドアを壊しかね無いほど、叩く音が鳴り響く。ビクツと震わせYは、恐怖の余りに何かが切れる音が聞こえた。

プ……ツ……

今だに鳴り響くドアに、ゆっくりYは立ち上がりドアの方に向かい震えるドアの鍵を開けてドアの取っ手に手をかけた。

バンツ

パリン

「いい加減にーしろおおおお!!」

Yは余りの恐怖にキレて大声を出した。ドアを力強く開けた為にドアについていた窓ガラスは割れた。だが、Yは気にせずドアの前には誰も存在せずYはなんとなく307号室に気をかけた。裸足のまま、廊下を歩き307号室の前に立つと再び301号室から走ってくる音が鳴り響いて307号室に向かつてくるが、音は確実になっているが姿は見えない。

「やーかーまーしーい!!」

Yは、そんな怪奇現象の前に廊下に大声が鳴り響く。すると、306号室の前で足音は消えた。もうYは恐怖を通り過ぎて怒りになっていた。

それから数時間後、3人が帰ってきてYは信じては貰えないの覚悟

で話した。すると、色々と聞いていたKさん曰く三和荘は元産婦人科をやっていたらしく、最初に風呂場で視線を感じたのは《水子》と言われるものじゃないのかとKさんが言った。

「水子」は本来「すいじ」と読み、戒名の下に付ける位号の一つで、死産や乳児の頃に夭折した者に対して付けられるものであった。

水子とはこのように、もともとは死亡した胎児だけでなく乳児期、幼児期に死亡した子供を含む概念であったが、戦後の日本で人工妊娠中絶が爆発的に増加したことを受け、1970年代頃から中絶で死んだ胎児の霊を弔う水子供養の習慣が広まっていくとともに、現在の意味が定着していった。その背景には、壇家制度が破綻し経営が苦しくなった多くの寺院が大手墓石業者とタイアップし水子供養を大々的に宣伝し始めたことが大きく影響しているらしい。

Kさんが聞く話、阪神大震災の際にここでも被害が酷く三和荘を新しく立て直したが経営がキツイと言うことで土地と建物を売り、新しく民宿として経営してるのが今のオーナーらしい。では、その阪神大震災でここで亡くなった人達なのかとYはKさんに聞くと半分此処で半分は六甲山からでは無いかと言った。

噂によると六甲山では、そう言った類物があるらしい。その近くである神戸市灘区岩屋中町に建てられた三和荘も、何かあってもおかしくないようだ。

「Y、悪いが今から麻雀一式買って来てくれ。」

「え？わ、わかりました。」

そう言われたYは、車を使い三宮の近くのデパートで麻雀一式を購入。そして、三和荘に戻った。

「よし、お前ら。麻雀するぞ。」

「何故？」

「とりあえずやりながら、説明するから。あつ、負けた奴は朝飯を全員に奢りな。」

ちやつかりとKさんが、罰ゲームを言いKさんの使う部屋で麻雀することにした。買って間も無い麻雀牌は開けられ、麻雀マツトをテーブルにひいて牌をその上に撒いた。そして麻雀牌を混ぜた。

「俺も聞いた話だが、本来は麻雀は葬式にやるのが良いらしい。」

「えっ？賭博とかに使われる麻雀がですか？」

「麻雀自体は、元々は運を用いるゲームとも言われててよく賭博に使われているが、本来は麻雀牌は地獄の数とも言われてるらしい。花牌を抜いて136個、地獄の数も136あるらしいんだが亡くなった人を罪や魂を洗う為に麻雀牌を洗牌《牌を混ぜる事》をしていると魂は136の地獄を巡って新しい魂になり六道輪廻に戻るって話らしい。本当は清く正しい物だったが今は賭博としてのゲームになってはいるけど。」

「「へえ〜。」」

そんな麻雀の話をされ聞いていたYを含めた3人はハモる。結局は、ビリはYに決まってしまったがその日以来は風呂場での視線は無くなり、便所からの怪奇現象もなくなった。

Yは、1年近く神戸で働き三和荘から東京に戻る時がきた。最後ら辺は、YとKさんだけしか残っておらず荷物を乗せたハイエースに乗り込んだ。

「じゃあ、1年近くお世話になりました。」

「いえいえ、機会があったら寄ってください。」



「はい。」

そして、Yは神戸から東京に帰る途中で車から見えたお地藏さんに少し頭を下げた。そんなYの出張先での不思議なお話だとさ…。

「どうですか？ミサトさん。涼しくなりました？んっ、うおっ!!？」

シンジは、話を終えてミサトに聞こうとしていたらシンジとミサトの周りはネルフスタッフが集まっていた。そして、少し体を震わせていた。

「…シンちゃん、これって作り話よね？」

「えっ？本当の話ですよ。その人、色々な体験してる人ですから…。他には、そのYさんのお婆さんが亡くなられて北海道で葬式あげて夜、お爺さんとお婆さんの家でYさんと従兄弟と兄で留守番してる中で、従兄弟と兄が寝てしまってYさんが偶々トイレに起きたらお婆さんを亡くした後寝かせていた部屋からラップ音が鳴ったとか。東京に戻って仰向けで膝を立てて寝ながら漫画を読んでいたら膝に何が当たったと思ったたらお弾きで、Yさんの家には本来お弾きは無いらしいんですよ。それでよく見るとそのお弾きがYさんが幼い頃に北海道の家で見たことある物だったそうです。その頃がYさんは高校生三年で怖くなり、曲を流しながら布団に入って寝ようとしたら曲を流れたスピーカーが○ルノグラフィティのアゲハ○のサビに入った瞬間に雑音になりサビが終わる所で普通になり始めたらしいですよ?。」

シンジが話終わるとネルフスタッフ全員とミサトは、顔を青く身を震わせていた。何人かは『うわあ…。』と言ったり『ええ…。』と呟いていた。その後、シンジの話を聞いた人々は1日は猛暑の中、暑いとは思えなかったらしい。

別の話でネルフの食堂では、シンジが話している時は室温が下がっ

ていたとか…。

食堂にレイが入ると誰もいない空間に。

「あなた、誰？」

そう言ったそうだ。

## 秘めた可能性

シンジは自分の首に絡められた細い腕の温かさと、胸に押し付けられた柔らかな肢体の感触に体の自由ばかりでなく思考能力さえも奪い取られていた。いったい何故、突然にレイがこのような行動に出たのかもわからない。ただ1つだけハッキリしていることは、裸も同然の格好の彼女をこんなところで抱き締めている場合ではないということだけであり、シンジはこのままで居たいという半ば本能的な欲求を無理矢理抑えつけた。

緩く巻かれたバスタオルの胸元から覗く控えめな起伏に引き寄せられそうになる目線を背けるが、このままではどこまで我慢してられるか極めて心許なかったためである。

「レ……レイさん、とにかく部屋に戻ろう？ね？」

なるべく下を見ないようにしながらレイの背中を軽く叩いて注意を引こうとする。いかにこのマンションがネルフの完全な管理下にあって一般人の入居や侵入が皆無であるとしても、人の目と言うのはどこにあるのかわからないのだ。

「あつ、でも離れないでね。は、離れると……み、見えちゃうからさ。このまま行くよ。」

「……」

シンジは彼なりに気を使っ言葉を選んだつもりだったが、レイは返事もしなければ頷きもしようとしない。ただ何かを訴えかけるような瞳を一心に彼に向けてくるだけだった。

「い、行くよ……レイさん……」

もう一度シンジは同じ事を言った。このままではレイが風邪を引いてしまうかも知れないという配慮もあったが、何よりも彼女のこんな姿を他の誰にも見せたくないというのが本音だったのかもしれない

い。

「……部屋……。」

「え？」

「私の部屋……、そこ……。」

「あ……ああ、おう。それじゃ行くう」

レイは絡めていた両腕のうち片方を外すと、視線はシンジの顔から逸らさないまま背後にあるドアの1つを指差した。開いているドアがそれ1つだけというだけでなく、シンジはつい先ほど彼女の部屋に呼びかけていたのだからどの部屋に住んでいるのか知っている。しかし、あまりにも当然のことを真剣な口調で言うレイを笑おうとは思わなかった。どんな心境の変化があったのかは不明でも、レイは確実に彼のことを受け入れようとしているのである。それに対してシンジは心の中は、テンパっていた。裸の美少女に抱きつかれ、甘い匂いに柔らかい体を押し付けられているのだから。そんな心境のシンジは、喉から声を絞り出しながら優しい笑顔でレイに言う。

「でも駄目だよ、レイさん。こんな格好で外に出たりしちや。レイさんは……その……き、綺麗なんだから。」

「……綺麗？」

「そ、そうだよ！レイさんとはとっても綺麗で可愛いんだからさ！みんなが注目するくらいにさ。」

きよとんとした表情で小首を傾げる。その仕草は14歳になろうとしている少女のものと言うよりは、親に何で？と言う表現に近い。レイはそのシンジの表情を不思議そうに見上げて、やはり幼子の口調で問い掛けた。

「……何故？」

「え？ 綺麗だって言ったことかな？」

「違う……、今の表情が……。」

レイは少し柳眉を顰めて言葉を詰まらせると、文字の書かれた積み木で文章を組み立てるように辿々しく言葉を紡いだ。

「今の表情が……、私には出来ない……。だから、温かかったから

……。」

「レイさん……。」

もしも彼女の言葉だけを事情を知らぬ者に聞かせたなら、良くて子供の声と解し、悪ければ障害を持つているとまで思うかも知れない。しかし、シンジには彼女が言いたいことがはつきりと伝わってきた。

「たぶんね……、俺だけじゃなくて、お父さんも、ミサトさんも、リツコさんも、その他たくさんの人たちが、今の俺と同じような表情でレイさんのことを見ていると思うよ？　でも、今まではそれが見えなかったのかもしれないね……。」

「……。」

彼が言うことを理解しようと再び眉根を寄せるレイだったが、数秒の沈黙の後に口に出したのは一言だけだった。

「……わからないわ。」

「うん……、別に深く考えなくてもいいんだ。そういうものじゃないし、急ぐ必要だつてないんだからさ。ほら、もうこんなに身体が冷え切ってる。早く部屋に行かないとね！」

「ええ……。」

やや戸惑いの色を浮かべたレイは背中を押されるままに部屋に向かつて歩き出す。裸足の彼女が歩くときにするぺたぺたという音を聞きながら、シンジは逸る心を抑えつけるのに必死だった。

(レイさんはまだ何も変われてないな。でも、それでいいんだ……。焦らず少しずつでも、ゆっくり……。)

心の中で言葉を噛み締め、シンジはレイと始めて出会い話した時に少しづつ変えようとする考えを再確認する。自分自身がとてつもなく傲慢で許し難い怪物に変わろうとしていることに、心の底から恐怖を覚えたのだ。それは、あまりにも頼りない華奢な肩を見てしまったから。シンジはレイに色々と学習させて人の触れ合いや、レイが持っている素直さを維持して普通に笑える女の子になって欲しいと思っていた。だが、レイの心はシンジを欲する心が強くなっている事はシンジは知らない。

(もちろん、俺だけじゃ無く他の人にも利用させてもらおうけどな…。俺は、唯単にレイさんが笑顔を持つて欲しいだけなんだ。俺以外の人でも…笑えるように。それがエゴだとは知っている。別に俺はレイさんの親や神様になる気は無い。ただ俺が優しく背中を押して、そうなったら良いなあ…。)

そんなシンジの想いは叶うのだろうか…。

人の住んでいる気配が室内のほんの一部分からしか感じられない——レイの部屋に足を踏み入れたシンジが最初に抱いたのはそんな感想だった。同年代の少女の部屋に入ったことがないシンジには、比較する対象がなかったためにどうとも言いがなかったが、それでもこの部屋からはどこかくすんだ印象を受ける。まるで長い間使用されずにいたような感じがあったのだ。

「ここが……、レイさんの部屋……。」

本来であれば不躰に他人の部屋を見回すなどしないシンジも、このときばかりは自分を抑えることが出来なかった。レイはいま脱衣場で服を着ている最中であり、室内には彼しかないせいもあつただろう。シンジが少し緊張していたのは間違いない。開けっ放しのドアを先にくぐったレイの踵を追つて——シンジにはそれよりも上の部分に目を向け続ける度胸がなかった——部屋に入ろうとしたとき、急に振り返った彼女の瞳にかすかな怯えが走つたのは気になったが、それ以外には異性を自室に迎え入れるということへの抵抗は無さそうだったレイとは大違いである。

「ここがレイさんの部屋……か。」

もう一度同じ言葉を呟くが、先ほどのように胸の高鳴りを示す響きは感じられず、哀しい響きを伴つたそれだった。居室に入る途中に

あつた流し台には埃が積もり、水が流れた跡が溝のようになっていた。家具類はごく普通の物ばかりだったが使用した形跡は極めて乏しい様子だった。生活に必要な最低限度の物は全て整えられていたが、どれもこれもレイが省みもしていないことが明白にわかる。だからシンジは哀しかったのだ。

「……あれ？」

零れ落ちそうになる涙を震える下唇を噛み締めることで耐えていたシンジは、そこだけは生活感があるベッドに目を向けたとき、ベッド脇の小棚に部屋の雰囲気にはそぐわない物が2つだけ置かれていることに気が付いた。どうやら衣装棚らしいそれはいくつか引き出しが開いたままになっており、シンジは真っ赤になってその中身から目を引き離れたがやはり気になって仕方がない。

「何だ……？」

怪訝そうな呟きを洩らしながらシンジはそれらに手を触れた。1つは熱を加えられたのか、形が崩れてしまっているレンズが割れた眼鏡。

「これってお父さんの眼鏡かな？」

手に取った眼鏡はフレームがひしゃげているためにレンズがひび割れて原型を留めていなかったが、赤い色付きレンズからはそれがゲンドウの持ち物であることを類推できた。何故レイがこんな物を持っているのかはわからなかったが、シンジは自分がまだこの街に来ていない頃に起こった何かに関係しているのだろうと納得する。

「レイさんらしいや、お父さんの壊れた眼鏡を持つてるって…。そう言えばレイさんって、お父さんには普通に話せるんだよね…。」

思えば出会ってからレイとの数少ない会話の中には、彼女のゲンドウへの信頼を感じ取れる言動が端々に見られた。そして、最近シンジがネルフ本部の施設を歩き回ってる時にレイとゲンドウが笑顔で話し合っていたのを見かけていた。

「こっちは……？」

手に取っていた眼鏡を元の位置に丁寧に戻すと、シンジは次に子供の弁当箱大の小綺麗な装飾が施された箱に目を向けた。箱根細工



というのだろうか。セカンドインパクト後の荒れた時代のせいでもう作り手がなくなってしまったという伝統工芸の1つだと言うことくらいはシンジの知識にもあった。複雑な課程を踏まないと開けることが出来ない不思議な細工箱である。

「綺麗だな……。でも、レイさんがこう言うの持つてるの珍しく思えるな。」

素直な感想と思い出を懐かしむ言葉が口を突いて出た。シンジはその箱を慎重に持ち上げると、もつとよく見ようと開け放たれた窓の方を向いて顔の前まで運ぼうとする。しかし、それは唐突に室内に響き渡った音によって中断させられる。

「レイさん? えっ?! ちよつと?!」

シンジは物音がした方を振り返ったが、すぐにそれに倍する速度で顔を背けた。脱衣場のドアを開けて彼の方に躊躇なく歩み寄ってくるのは、未だ布きれ一枚身に着けていな いレイであり、先ほどまではバスタオルを身体に巻き付けていたというのに、今はそれを首から下げただけの全裸だったのである。

「ど、どうして服を着てくれないのよ?! レイさん?!」

シンジが叫んだのも無理はなかったがレイにも事情があった。服を着るようにと言われて脱衣場に入った彼女だったが、考えてみれば所持している数少ない衣服の全ては、今まさにシンジが立っている横にある衣装棚の中だったのだ。結局わずかな逡巡の後に取りに行くことを決めた彼女は、薄く開いたドアの向こうで小箱を持ち上げようとするシンジを見たのだ。

「返して。」

「えっ?」

「それを返して。」

「こ、これ? この箱?」

全く自分の裸体を隠そうともせずにシンジの手から小箱を奪い返そうとするレイは、部屋に入る前の彼女よりもさらに感情を露わにした表情だった。妖精が自分の命を封じ込めた宝箱を奪われて泣きながら取り返そうとしている。シンジは彼女の表情にそんな印象を覚

えた。

「か、返すよ？勝手に触ったりしてごめんね…？」

「……。」

「だから…は、早く服を…あ。」

彼が箱を持つていた力を緩めると、レイは誰にも奪られるものかとはばかりに胸の中にそれを掻き抱いてその場にしゃがみ込む。

「レイさん…、…ごめん。」

まるで幼い子供が大切にしている物を知らずに取り上げてしまったような後味の悪さが残る。確かにレイはこの綺麗な箱を大切そうに置いてはいたが、それでもここまで過敏に反応するとは思っても寄らなかつたのである。

「ごめんね…？」

「……。」

シンジはもう一度繰り返して言ったが、白い背中をかすかに震わせているレイは、自分の子供を身を挺して守る母親の如くに動こうとしなかつた。何事にも動じる素振りを見せなかつたレイはもうどこかに消えてしまっていたのかもしれない。そのことはシンジに希望と不安を等量に与える

「その箱根細工だっけ？すごく大事な物なんだね……。」

申し訳なさそうに呟いてベッドの上に丸まっていた毛布を裸の背中に掛けてやった。優しい口調で話しかけられたレイは怯えていた小動物が思わぬ優しさを与えられたときに見せる上目遣いに相手を窺う仕草でシンジを見上げる。

「今日は、…：帰らせてもらおうよ。本当にごめんね、レイさん…。」

せっかく迎え入れてもらえたというのに話もせず去るのはつかつたが、何一つ収穫らしいことが無かつたというわけではないとシンジは自分に言い聞かせた。レイ自身が理解しているのかどうかは不明でも、とにかく彼女は幼い頃に大切にしていた物を本能的に守ろうとしているのだ。それはシンジにとって希望という遠い山頂への鏡になるかもしれないのである。それがレイを変えられる物なのかは分からないでいるが。

「あ、本部に入るためのIDカードなんだけど、さつき郵便受けの中に入れておいたからね。それじゃあ……、またね……。」

相変わらず無言で見上げてくるだけのレイに寂しげな笑顔を向けた後、シンジは踵を返して玄関に戻ろうとした。だが、そんな彼の脚に何か引つかかったような抵抗があつた。シンジは訝しげに足下を見て、すぐにその原因を知ることになる。彼のズボンの裾を意外な強さでしっかりと掴む白く華奢な指が目に入ってきたためだった。

「……。」

暫しレイは見上げている視線でシンジの目を見つめ続けていたが、やがて彼の視線の先を追いかけて、それが自分の手に注がれていることを悟ると後ろめたそうに手を離れた。まるで粗相をしてしまった動物のような印象がある。自分が採った行動が相手にどのような受け取られたのかを窺う様子は、まさしく野生に生きていた動物が急に人間の庇護の元に連れてこられた状態とも言つて良かった。

「……レイさん。」

警戒心の強い動物や子供と接するときには気を付けなければならぬことがある。決して見下ろした状態で相対し続けてはいけけないのだ。彼らの世界においては見下ろすという行為それ自体が相手に対して敵意を持っている証明にも繋がる。だからシンジはレイを驚かせないように注意しながら、ゆっくりと膝を折り曲げて彼女の目線に自分の目の高さを合わせてから言った。

「……どうに、居ればいいのか?」

戸惑いがありありと浮かべた少女は磨かれた鏡のようなシンジの黒瞳に映る自分の表情に動揺しながらも、彼女の心が強く命じている言葉を途切れ途切れながら口に出した。

「……居て……、欲しいわ……。」

このときレイは気付いていなかった。一度は手離れたシンジのズボンの裾を無意識のうちに今度はしっかりと両手で握り締める自分があることに……。

ベッド脇にある窓からやや斜めに射し込んでいる南西に傾きかけたオレンジ色の陽光が、レイの肢体を完成された美術品を照らす、計算され尽くして配置された照明であるかのようにシンジには思われた。感嘆の溜息が洩れてしまいそうだった。陰影を与えられた能の人形は無機物にも関わらず生命を宿すが、封じ込められていた感情を表に出しているレイがその身で体現するものは、仮初めの生命を得ただけの人形などとは比べ物にならない。

しかし、それでもレイは本来持つているはずの魅力を半分も発揮できていないのだ。彼女の明るい笑顔を浮かべることが出来たとき、自分はいったいどうなってしまうのだろうかとまでシンジは思う。きつと心臓など止まってしまおうとさえ思う。妖精として生まれ、寶石を編んだ繭に眠り、そして氷の棺の中で永い眠りについた少女。

その彼女が目覚めて最初に浮かべる笑顔を想像したシンジは、自分でも抑えきれないほどに胸が高鳴っていくのを感じる。見たいという純粹な願いが心に湧き起こった。そして他の誰にも見せずに独り占めにしたと思う。醜い独占欲だとは自分でも思っていたが、目の前の少女が浮かべる笑顔を見るためなら命すら惜しくないと彼は考えていたのだ。

(本当にすごく綺麗だ……。そして、少し壊してみたい気持ちもあるな……)

完璧に整ったレイの顔を見つめていたシンジは、この年頃の少女とは思えないほど完成された美しさに話しかけようにもどうしても声が出てこない。こういうときは会話の相手に口火を切って貰おうとするのが普通なのだろうが、それをレイに期待するのはまだ酷というものだろう。結局はシンジが何とか勇気を振り絞るしかないのだ。用意して貰ったパイプ椅子に座って、ちょうど真正面——レイはベッドに腰掛けている——のレイを見れば、彼女もまたやや落ち着かない様子でシンジの顔を見つめており、出会ったばかりの頃には期待することも出来なかった表情を浮かべていた。戸惑いともどかしさが

緋い交ぜになった表情というのが一番近い。

(綺麗だけど……でも、何だか可愛いな……)

幼い頃の内気さが自然な感じで表面に浮き上がってきているとシンジは突然感じた。何をするにも、会話を始めるにも、いつもシンジが口火を切ってやらなければいけなかったこと、とが思い出された。

(なんだ……、唯レイさんは人との繋がりや触れ合いが少ないから話さないだけで。俺が先導するようにすれば、自然とレイさんも話をかけるようになるな……)

そう考えると不思議と心が落ち着きを取り戻し、心臓の鼓動もレイと2人つきりだということに対する緊張の分を除けば整ってきた。

「ねえ、レイさん？」

「!?」

シンジがなるべく自然な口調で話しかけると、レイはそれでも身体をビクリと強張らせて大きな目をさらに見開いた。そんな仕草も考えてみれば見慣れたものだと思つた。今はもう部屋着と思われゆるったりとした白いシャツと、窓に揺れるカーテンの色よりもやや濃い萌葱色の膝丈まであるスカートを穿いているレイの美しさに圧倒されすぎていたのかも知れない。

「あんまりゆっくり話す機会が持てなかったけど、これからは少しでもいいからこうやって静かに話せる時間が有ると思うんだ。まあ、学校で殆ど昼食時だけ。あ、もちろん、レイさんが構わなければだ。ど。」

「……話す？」

「そう。訊きたいこととかもあつたし、もつとレイさんのこと知りたいて思つてたしね……?ただ話をするだけでも随分色んなことがわかるかもしれないし。……駄目かな?」

「話す……シンジ君と、話す……。」

「お、おう。」

このときシンジは一度は収まりかけた動悸が急激に激しくなるの

を感じた。透き通った可憐な声で自分の名前を呼ばれるだけで、これほどの高揚感を得られる自分が少し恥ずかしかったせいもあったが。

「話すわ。今の気分……嫌じゃない。とても気持ちがいい。不思議だわ……シンジ君と話をしていると、いつも身体がおかしくなったのに今は平気……。」

「……。」

少し遠くを見る視線でレイが歌いあげるように言うが、シンジは言葉を挟もうとはせずに無言で頷いただけだった。余計なことを言うて彼女の心を乱したくなかったのだ。

「訊きたいことって……？」

「あ、ああ。そんなに大したことじゃないんだけど……あ、いや、俺にとっては大したことどころか凄く嬉しかったことだったんだけどね……。レイさんは前回の戦闘で気を失った後俺が病院に運ばれて、俺の病室に来てくれたんでしょ？」

「……行っただわ。」

思い掛けない質問だったのだろう、レイは少し間を置いてから頷く。

「その時の俺らってそんな話もしたこと無かったし、殆ど俺だけが喋ってる感じだったから。……どうして来てくれたのかなって思ってたから……。」

「……。」

「来てくれたのは凄く嬉しかったよ……でも……、何でかなあと。」

「わからないわ。」

「え？」

レイは真剣な表情ではつきりと言った。特にその理由を考えようとして苦悩している様子もなく、事実を事実として受け止めての発言のようである。彼女は自分の採った理解しがたい行動に関して彼女なりの結論を出していたのかもしれない。

「胸が苦しかった……、それを直す方法を考えたわ。落ち着かなかつ

た。だから、シンジ君の病室に行 ったわ。」

「そ、そうなんだ。」

(ええい！何でこんなになチュイイんだ!?)

「訊きたいことは……それだけ？ もう話は終わり……？」

シンジが嬉しさを今一つ実感しきれずに、しかし納得して頷くと、レイはかすかに眉を寄せて問い掛ける。

「あ……。」

我知らず声が洩れた。あまりにも簡単に得られた回答は期待以上のものであったが、淡々と語られたために喜びを爆発させること暇が出来なかったのだ。今のレイの表情を見たことで、彼の心は思いも寄らなかつたほどの嬉しさに満たされることになった。

(レイさんが……、不満そうにして……。話が終わりだと思って拗ねてるの……？よし！少し押ししてみよう。)

レイ自身は全く意識してのことではないのだろうか、かすかに眉根に皺が寄せられ、艶やかな唇が尖らされていたのである。明らかに会話の終了を歓迎していない表情だった。

「もちろんまだ終わりなんかじゃないよ。だって俺は訊きたいことがあるって言ったけどレイさんの事をもっと知りたいって言ったじゃないか。どうやって過ごしてたのかとか、食べ物はどうな物が一番好きなのかとか……、知りたいことはいくらでもあるんだから。」

シンジは自分が思っていることを並べ立てる。彼女が自分との会話を歓迎しているのだとすれば、シンジにはそれを拒む意志など存在するはずがないのだ。

「そう……、それならいいわ……。」

彼の言葉を聞いてもレイの表情は不満な様子を取り払われただけで大きな変化は見られなかつ たが、次に彼女が採った行動はシンジの予想にはないことだった。レイは二度三度と口を開け閉めして躊躇した後、突然不思議なことを言いだしたのである。

「……何故、シンジ君は私や他の人に優しいの？」

「え？」

「シンジ君は、笑ってる顔が多い……。」

またレイが柳眉を顰める。その表情を彼女にされるたびにシンジは、ずつと年下の少女にした覚えのない約束を破ったと文句を言われているような気分させられた。少女の機嫌をそれ以上損ねないためには一刻も早く彼女が主張しているところの約束とやらを思い出さねばならないのだ。そして幸運にも彼はすぐにレイが言っていることを理解することが出来た。

「うくん、そうだねえ。俺が優しいかく。」  
「そう。」

レイの口調が幾分素っ気ないように聞こえたのはシンジ自身の思い込みのせいだろうか。

「確かに俺は、人前では気を使うタイプだね。でも、それには意味があるんだけど…。他の人からしたら、そんな事？って言われる事だけどそれでもいい？」

「それでもいい。知りたいわ。」

レイの瞳にはシンジがたじろいしてしまうほど真剣な光がある。少しやりにくさと気恥ずかしさを感じながらも、シンジはその瞳の輝きに誘われるように話し始めた。

「えっと……、俺って幼い頃から色々な夢を見てきたんだ。その夢を見てきた数は、覚えてないけど俺なりに多いし記憶に残るものばかりでね。」

「……。」

レイは相変わらず真剣な表情でシンジの話を聞いている。相槌を打ってくれないのは少し話しくかったが、それでも彼は自分の誰にも言えなかつた事を話すことの心地よさに言葉を続けた。

「……それで、その色々な夢に出てくる俺が面白くてね？使徒のいな世界で、遊んでたり、悲しんでたり、泣いてたり、笑あったり、嬉しがったりしてね。でも、どれも違う姿の俺だったんだ…。」

「え……？」

「だけど、不思議と違和感が無かつたんだ…。その夢の中でやっていった事が出来るし。夢の中で、出てきた人達も色んな出会いもあって別れ方もあった。それで知つたんだ。」



シンジは戸惑うレイの瞳を真つ正面から自分の瞳に捉えて言った。

「出会いには可能性があるって。その人が善人か悪人かは、その時は分からなくても得る物あるんじゃないかってね。」

「あ……………」

いつもならば見つめられている者が目を逸らしたくなるほど真つ直ぐな視線を向けるのはレイの方だったが、今は完全に立場が逆転して動揺を隠せずに目線の向け先を探すのは彼女だった。厳しい視線に晒されているわけでもなく、どちらかと言えば優しく包み込まれるような感じを受けているレイだったが、この種の温かさを与えてくれる碓ゲンドウや赤木リツコなどと対するときとは違い、体の機能に奇妙な変調を覚えたのがその理由だった。

(何…………… また体が…………… 心臓がおかしい……………)

耳の奥で聞こえる心臓の鼓動が彼女の戸惑いをさらに助長している。もしもそれが体調不良によるものに近ければレイがこれほど動揺することもなかったのだろう。しかし、レイが感じているのは記憶のどこを探っても存在しない高揚感だったのである。

「どうしたの、レイさん？」

「何でも…………… ないわ……………」

「でも、顔が真つ赤になってるし……………」

「赤く……………？ 顔……………？」

「うん。ほら……………」

シンジは少し心配そうな表情で、明らかに赤みが差していることがわかるレイの頬に手を伸ばそうとする。しかし、彼の指先が白磁の頬に触れる直前でレイが身を退いた。

「あつ。……ごめんね……………。いきなり触られるの嫌だったよね？」

「いい……………」

自分が何をしようとしたのかを悟ったシンジは、それこそレイと同じかそれ以上に顔を真つ赤に染めて謝ったが、レイは引っ込められた彼の手を見つめたまま上の空で呟くだけだった。レイは後悔していたのだ。なぜ自分は身を退いてしまったのかということ、である。

(私……、どうして……？ 触れて欲しかった……、私は確かに今そう思ってる……。)

彼女は先日屋上でシンジの手が与えてくれた温かさを思い出し、下唇を震わせて自分の行動を悔いていた。シンジの手は彼女の心を間違ひなく温めてくれるはずだった。ゲンドウやリツコが彼女の髪に触れるときに感じられるものと同じ温かさ。それを与えて貰えることは自分にとって最も大切なことだといつも思っていたレイは、あろう ことかその機会を拒絶してしまったのだ。

(もう触れて貰えない……。)

レイはシンジの顔を見ることが出来なかった。拒絶されたことへの怒りと、彼女への興味が薄れていく様子を見たくなかったのだ。このときレイは初めて気が付いた。すでにこの碇シンジという少年のもたらす温かさは、彼女にとって欠くべからざる大切な温もりになってしまっていたということに。

(私……拒絶してしまった……。)

先ほどシンジの話にあったようにレイは夢の事で色々な可能性あるんじゃないかと言う話に、彼女の心を内側から温めてくれていた何かにほっかりと空虚な穴が空いてしまっているのを茫然と見つめていた。

(心が……凍る……。)

自分の内側にある温もりのおかげでレイは他人との接点の少ない生き方を続けることが出来ていたが、今は目の前にシンジが居るにも関わらず、内側からの寒さにその身を震わせ始める。しかし、涙を流す術を持たない彼女はこうすることも出来ずにじっとしているしかなかった。

「レイさん……。」

「!？」

冷たい恐怖の槍がレイの心を刺し貫く。第壱中学校に通うようになって以来、数え切れないほどの少年たちが彼女の元を訪れて自分の想いを伝え、当然の如くにレイはそれを拒絶した。そう言った申し

出でなくても、レイは友達という関係すらも煩わしく拒絶してきたのだ。自分が拒絶すればやがては他人の方も拒絶する。彼女にとつてそれはあまりにも分かり切った結末にすぎなかった。しかし今、拒絶すべきでない者をそうしてしまったレイは、これから自分に向かって振り下ろされる言葉の刃に恐怖していた。

(私は拒絶してしまった……。だから拒絶される……。)

彼女の名前を呼んだ後には訣別の言葉が発せられる——レイはそう思ったのだ。

「レイさん、大丈夫？　すごい汗だよ？　今日の訓練は休むってリツコさんに言おうか？」

「え……。」

シンジの手だけを凝視していたレイは、氷の刃の代わりに彼女の頭上に降り注いだ温かい慰撫するような声に恐る恐る目線を上げる。

無論、そこには拒絶される以前と全く変わらない優しい少年の顔があった。

「具合が悪いんなら休まないよね。リツコさんには俺が電話しておくから寝てなよ。食事とかは出来そうな感じかな？」

シンジは震えているレイの両肩に手を置くと、そつと力を込めて彼女をベッドの上に横たわらせようとした。その行動にかすかな躊躇いが感じられるのは仕方がないことだろう。しかし、今度は抗おうとはせずに彼に身を任せたレイは、優しく髪を撫でてくれているシンジの手に自分の手を重ねてゆっくりと首を横に振る。

「どうしたの、レイさん？　やって欲しい事があるなら、俺で良ければ。」

シンジがこれまで見たことがないほど安らいだ表情のレイを見て嬉しそうに問い掛けると、彼女は目を閉じながら夢うつつな様子で頼りなげな呟きを洩らした。

「…触れてて…欲しい。」

「ん？　なに？」

彼の慰撫を心地よく感じ、眠りに落ちそうになっているらしいレイにそつと囁きかける。

「シンジ君の感触…、体温が心地良い…。私を…。温めてくれる。……だから、触れてて欲しい…。だから…。お願い、シ…ンジ…。……」

その言葉は最後まで発せられることなく途切れる。シンジの慰撫に恐怖の檻から解き放たれたことで、レイはある時を境にして味わうことが出来なくなっていた深い眠りに落ちていった。安らぎに満たされたレイの表情は、夢の向こう側で自分を待つ誰かの夢でも見ているためなのだろうか？もちろんレイが目覚めますまでシンジは彼女の髪を撫でてやるのを止めることはなかった。優しい笑顔で彼女の目から流れる涙が止まることがないのと同じように。

「お休みなさい。良い夢を…。レイさん。」

シンジは、そう呟きながらレイの少し変化に喜びを持った……。

そんな日常…

シンジがレイの部屋に足を運ばせてから三日過ぎ。レイは、その日からシンジに懐くようになった。学校では、男女全員で恋愛の話で盛り上がるほどレイはシンジにベツタリと側にいるようになっていた。シンジ自身は、一度その事について否定して以来は何も言わなかった。レイはレイで周りの視線や噂話をされても我関せずだった。それ以来、シンジとレイが一緒にいるのが当たり前と言う学校での生徒は思う様になっていた。

★★★☆☆

日曜日の朝、2人と1匹は朝食を食べていた。

「ご馳走様です」

「クエツ」

「ご馳走様〜。ねえ、シンちゃん。明日、何か予定ある?」

ミサトは食器を片付けてるシンジに問いかけた。ミサトに聞かれた質問に、シンジは食器を流しに全部運び終えてから考える。そんな考えているシンジの足元で、ペンペンがシンジの足に懐いていた。

「うーん、今の所は何も無いですね…。どうしました、ミサトさん? そんな事聞くなんて」

「あのね、明日面白い物が見れるかもしれないのよ」

シンジはミサトの勿体ぶる言い方に不思議に思いながら、疑問をぶつける。

「でも、俺明日学校ですよ？ 夕方ぐらいになりますけど」

ミサトはニヤニヤしながら答える。

「それはネルフの仕事としてだから、学校は休ませてもらうから」

「…ミサトさん、その言い方だと最初から俺に拒否権はなかったんじゃない？」

ジトと目を細めシンジはミサトの目と合わせる。しかし、ミサトはシンジの視線から逃げる為に目を明後日の方向に向けた。それも目を泳がせて。そんなミサトを見てシンジは溜め息をつき、渋々と了承する。

「その件は了承しますよ、葛城一尉。 はあ、どうせ前日に言われた事を今日まで忘れててそれを誤魔化す為に今遠回しに聞いてきたんでしようね…」

ビクリと身体を震わせるミサト。 それを見逃さないシンジは、悪い顔しながら残念そうに言う。

「ああ、折角ミサトさんが頑張って仕事してるからお酒のツマミを考えて下準備して今晚にでも出そうとしているのに…。 本人は悪気は無く、反省と言う言葉もなさそうだし…。 よし！ トウジ君の家にもお裾分けしよう。 カズキさんも飲む人って聞いてるし、後で感想も聞かせて貰わなければ…」

シンジが独り言のように言うと、それを聞いたミサトは顔を青ざめていた。

(ま…まずい。 シンちゃんの作ったツマミが食べれないのは…。 私の明日への活力とも言える物ががががが)

今のミサトは、好きな物がビールに引きも取らないシンジの作るツマミが食べれないと考えると絶望に駆られていた。 ある日仕事から家に帰ると、夜遅くにシンジがリビングで起きていた。 最初は子供が起きててはいけない時間帯だったので寝かせようとしていた。 だが、シンジはシラつと答える。

「眠りが浅くて、この時間に起きてしまうですよ…。この後も寝ますけど、何か動いた後じゃないと寝付けられないんで。…そうだ、ミサトさん。この後アルコール入れて寝るんですよね？だったらツمامミ作りましょうか」

それからミサトは、仕事終わりに命の元とも言えるビールと毎回変わるシンジのお手製であるツمامミが楽しみとなる。事前にミサトの好みや嫌いな物を聞いているシンジは、酒に合うツمامミを色々作り上げた。どのツمامミもミサトが好評の物で、ミサトの中ではシンジの作るツمامミは好物になっていた。しかも、夜遅く帰ってくる場合は余り量を多くせず胃に負担掛かりにくい物を用意をして、仕事が早く終わりに一緒に晩飯を食べれる時はミサトの食べる量を調節して風呂上がりにはビールとツمامミを食べれるようにまで気遣いするほど。「残念だなく、俺が作った自家製腸詰めをミサトさんに食べて欲しかったけど…」

シンジはユラユと座るミサトの後ろに回り込み肩を柔らかく揉み始める。肩を揉まれ始めたミサトは、日々仕事の疲れである肩コリをほぐされながらツمامミが食べられなくなる焦りと肩コリがほぐされていく気持ち良さで彼女は、感情がグチャグチャだった。少しの間、シンジは肩を揉みミサトの反応を見ながら煽る。

「しようがない。トウジ君の所に電話して、夕方に届けますか…」  
余りミサトの反応が見られないのを肩揉みを止め、電話がある場所に移動しようとする。

ガタタツ

ガシツ

「なっ!？」

シンジは後ろから、突如と身体を抱きしめられて驚く。シンジとミサトの身長に少し差がある為、脇から腕を通し彼の胸元で手を固定してシンジの左肩にミサトの顔を乗せてきた。流石のシンジも、普段ミサトのスキンシップで慣れてるとは言え明らかにスキンシップを超えた体の密着度と薄着でシンジの顔が紅くなっていた。そんな状態を見ていないミサトは、シンジ抱きしめながらすがる様に謝り

始めた。

「ごめんなさい！ 私のミスを誤魔化す為に、シンちゃんに遠回しに言い訳を言いました！ だから！ だから!!？ シンちゃんが納得するまで謝るから、ツمامミを~~~~」

（下手したら、今日からシンちゃんを作るツمامミが食べれなくなる可能性が…。それだけは阻止しなくては！）

「わ、わか、わかった…。 わかり、わかりましたから…。 離れましょ…？ …ねえ」

（ぐあああああああつ!! やめろおお！ 今、そんな女性の体を密着させたらー!!）

外見は焦り、内心で叫ぶシンジ。 中身は成熟してるシンジと見えど、彼もまた男子と言った所か。 そんな内心の言葉に意味が滲み出していた。 だが、そんなシンジの状況は知らずより一層に抱きしめながら謝るミサト。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ 許してー！」

「わ…わ…かり…ました…から…。 だ…だか…ら離し…て…」  
そんな状態は数十分続いた。

☆☆☆☆

あれから謝り倒したミサトもシンジから離れ、顔を紅く染めて恥ずかしそうにしているシンジを見たミサトは不意に胸がキュンとなる。（や…やばいわ！ いつものスキンシップでは、見せない照れ方…。 そんなシンちゃんを見たら、より一層に抱きしめたい！ いやいや、私はシヨタじゃない！ 彼とは15も離れてるじゃない…でも…、ハッ！ 違う…。 違う！ 違くう!!）



ミサトは椅子に座りそんな煩惱に駆られながら、シンジがキッチンで食器を洗う後ろ姿を見ていた。横顔から少しまだ紅くなっているシンジの顔を見てミサトは思い返す。

(でも、私がシンちゃんに惹かれてる理由はわかる気がするわ。男の子なのに外見が女の子に近くて、何でも出来る男の子で人の気遣いも接し方も知ってる。笑った顔も困った顔や照れる顔……。どれも可愛く14歳とは思えない《男》としての顔をしている。最近、レイがシンちゃんに懐いているのも頷けるわね。彼は周りを変えられる力がある。どうしたら、あんな子に育つのか……。でも……そんな事より、私がシンちゃんに好意を超えた物に近い感情を持ってしまった事よ……。……よくよく考えてみると、私はシンちゃんに支えられてるんだ……。あの子が来る前は、こんなに楽しく思える生活はしなかったわ……)



ミサトがネルフに入る頃、第3新東京市に引っ越してからは愛想笑いが多かった。職場には大学時代の友人であるリツコがいたのは喜んだがミサトの心を軽くするほどではなかった。だが、彼の存在が現れてからミサトの笑みが変わった。

シンジが第3新東京市に来て、ミサトの家で同居してから生活がガラリと変わった。シンジが来る前は、食事はコンビニ弁当にツマミとビールが当たり前。その為、食費が嵩む始末。キッチンやリビングは散らかし放題。足場無くし使える場所の制限。独身女性で、ネルフと言う厳しい仕事場では少なからず家事をする気力は余り出せ

ないと言える言い訳は出てくるであろう。

やはり、仕事でのストレスはミサト曰く命の元とも言えるビールで発散させていた。とはいえ、仕事場から家に帰って1人しか居ない空間でビールとコンビニで買ったツマミを口に運ぶがミサトは内心寂しい気持ちになり好きなビールも味気が無く感じていた。ペットのペンペンがいるが、彼はミサトの帰ってくる時間帯が殆どが深夜の為にその時には自分の寝床である。日々人類を守る為にネルフで働く中、ミサトの中では使徒殲滅の決意が孤独と言う感情に薄まりかけていた。

そんな弱りかけたミサトの所に司令室からお呼びがかかる。ミサトは不思議に思いながら、司令室に向かいゲンドウの前に立つとある特別命令が下される。

「葛城一尉。サード・チルドレン、碇シンジを本部まで連れてくること。如何なる手段を使っても本部まで連れてくるのが君の仕事だ」

ゲンドウに言われ渡された資料をミサトは見ていると、驚愕して目を見開いていた。写真に写るシンジを見て、最初は女の子としか見えず性別の欄を見ると《男》と書かれておりミサトは驚く。しかし、ミサトの中ではそれぐらいしかシンジの印象が無く本人は早く終わらせて帰りたいと言う思いだった。そしてシンジの事を使徒を倒すだけの存在としか思えなかった。一例にレイが上がるのだが、ミサトは人類の為にと言えば良くは聞こえるがネルフの入った理由でもある父の仇をとる道具とも思っていた。

実際シンジと出会い、ミサトの荒みかけた心を変える物だった。

彼の初対面は、使徒が踏んづけた戦闘機から爆風から車で守った所からだ。早速車に乗って貰うとした所、シンジの判断力と身体能力にはミサトは驚きを隠せなかった。瞬時に考えられる頭脳、常人には真似が出来ないであろう曲芸に近い動き。この二つだけでも、普通の子供が出来るわけが無いと言うのに彼に話しかければ無理のない言葉遣いで話す。そして、国連軍が放ったN2爆弾の爆風で車のルノーが動かなくなりミサトは意気消沈してる中、シンジは独自に動き

無事に車を動かせるほどの応急措置で本部に向かった。

その前にミスアトがある行動で、本部に送り届けなくてはいけないシンジを失神させてしまった。無事シンジの意識も戻るが、彼は激怒とは言わないが怒っていた。ミスアトも自分の行動で気を失わせた事は悪く思い、謝ると子供とは思えない許し方をされて咄嗟に軽口を出すと見た目には想像出来ない雰囲気を出され再び謝罪。

無事に本部着き目的地向かう中ミスアトは、この時まだ本部の構造が把握し切つて無かった。その為に、迷い困っている所に彼から救いの手を差し伸べてきた。ミスアトは猫の手も借りたいと言うほど、気持ちが説破詰まっていたので彼に頼んだ。逆に案内しているシンジの後を追いながら、後ろ姿を見てみると頼りになると感じたミスアトは一層彼を見る目が変わる。

さて、彼が本部に呼び寄せた理由であるエヴァの前に連れて行く事である。最初はエヴァを見て、驚きふためくと思っていたがシンジは何か感じている様に見えた。そんな所に彼の父親であるネルフの司令官であるゲンドウが姿をシンジの前に現せた。そして、彼をエヴァに乗せると言う話があがる。ミスアトとリツコが言い合いが終わると親子で話している。そんな2人を見てミスアトは思った。

(やっぱり親子なんだなあ…)

2人が会話してる中、突如の揺れでミスアトやリツコはその場に座り込んでしまうが親子2人は微動だにせずにはいた。それに驚くミスアトだが、シンジの上から揺れにより蛍光灯が落ちてきた。彼女は揺れに耐える為に、その場に座り込んでいてシンジを助けに行けなかった。本人のシンジは一步も動かずその場に立っていた。

誰もが最悪な光景を浮かべた。しかし、最悪な光景では無く驚く光景だった。

ザツパア

拘束具を引きちぎり、エヴァはシンジを落ちてくる蛍光灯から守つた。リツコはあり得ないと言ったが、ミスアトの中では希望が見えていた。シンジは自分の身を守ってくれたエヴァを見て乗る決断をした。その後、リツコとミスアトに手を貸し座り込んでいるの優しく立

たせた。ミサトは、もうシンジの歳は誤魔化しているのでは無いか  
と思っていた。

けれど、彼にも弱い所はあった。シンジはミサトに胸を貸して欲  
しいと言ってくる。最初は、何を言っているのか解らずミサトは焦っ  
ていたが彼の状態を見て理解した。

ミサトから見てシンジは、歳に似合わないほど人間性を持ち完璧に  
近い人間に思えたが、それは間違いだった。彼にも弱い所はあるの  
だ。いきなりの父親から呼び出し、使徒の脅威、そして初めて見る  
エヴァで戦場に出るとの事。そんな物が彼を襲い、心に負担を持た  
せていた。その中、シンジは自分の言葉で戦うと言い切った。

誰もが彼を英雄視するが、ミサトだけは違っていた。彼も立派な  
人間であり、そして《子供》であると。そんな彼をミサトは向かい  
入れ、近寄り優しく抱きしめるとシンジの体温は以上に低かった。

恐怖で血の気が引いているのが分かるがシンジの表情から、そんな風  
には見えないほど隠していた。

（私は、彼を道具として見ていた。でも、シンジ君も人間。普通の  
子供なら、泣き叫ぶか逃げると言うのが当たり前なのに…。それが  
普通で誰もそれに責める権利も無い。大人は、子供と使徒を戦って  
いるのを見ているだけ。それと言うのにシンジ君……）

そんな思いがミサトの中で渦巻いていると、シンジはミサトから離  
れ礼を言う。その顔には、誰もが安心させる笑顔だった。その  
後、シンジはエヴァに乗り使徒を倒した。ネルフスタッフ全員が、  
人類の敗北と感じさせるほどの勝利だった。

しかし、この勝利が人類に希望を持たせる。

その後ミサトは、今後の事を色々と考えながらもシンジの事を考え  
ていた。これからも人類の脅威である使徒が襲いかかる中、使徒を  
倒せるエヴァを操るパイロットの碇シンジ。彼の精神やコンディ  
ションで、エヴァの動きが変わるものだ。作戦部長とも言えるミサト  
は思いつく。ならば、彼の側に入れば管理や監視もできるでは無い  
かと。その中に少しミサトのシンジを知りたい気持ちもあった。

そして、彼女の行動は早かった。いち早く病院に行きシンジを見

つけ出し、本部に連れて行こうとしたが彼の要望でレイに顔合わせがしたいと言うので病室を案内しようとする、シンジは着いて来れず男の子とは思えない可愛らしさにミサトは暴走させた。無事、シンジのやらなくては成らない事が終わるのを見てミサトは住む場所はどうするのかと彼に聞くと予定が無く、ミサトの中ではガッツポーズ。パワハラに近い荒技でミサトの家でシンジが同居する話が始まった。最初は、余りの汚さにシンジの逆鱗に触れたが朝に目を覚ますとリビングやキッチンと玄関etc…が綺麗になっていた。

それからシンジが家の事をやることに。ミサト自身は、元々が家事が出来る方では無かったので何も言わず。まだ短い時間だが、彼との生活は楽しく思えているミサト。血も繋がっておらず、つい最近まで他人だと言うのに本当の家族とも言えるほど暖かく思えていた。シンジにちよつかいを出せば倍に返され、スキンシップをした所でやった方が恥ずかしくさせられて、ミサトは何も隠さずに本当の自分に近い物出せていた。少しずつシンジの表情も色々な顔をするようにもなっていて、ミサトは嬉しかった。

前日、シンジがミサトの部屋の掃除をしている所にミサトの机の上に一冊のノートを発見される。タイトルに書かれていたものは。

『サード・チルドレン監視日記』

その晩に、リビングのテーブルに対面になるように座りシンジはミサトに問いかけた。

「ミサトさん、俺を監視し易くする為に同居させたんですか？」

ノートをミサトの前に出されて聞かれたミサトは、心に刃が斬りかかったような感覚に囚われていた。返事を返せないでいたミサトの表情を見て、シンジは溜め息をつく。ミサトは、シンジの一つ一つの行動に怯えていた。

私と一緒に暮らそう。

私達は家族だ。

そんな言葉を言ったのミサトである。その言葉を裏切ると変わらぬ事をしていいるのだから。工作上、断れないのだがミサト的には本当は断りたかった。それが出来ない為、ミサトはシンジに日記

を隠していた。今の生活に充実して寂しい思いも無く毎日が楽しい生活と言うのに、また1人に戻るかも知れない事やシンジに信用されなくなるやらミスアトの中で負の感情が沸き起こっていた。

「ミスアトさん…」

突如、シンジから名を呼ばれ身を強張らせる。ミスアトの中では、次にシンジの口から出る言葉を想像していた。テーブルに手を重ね震わせながら。

（俺、この家出ます。かな…？ ミスアトさんは同情でこの家に？ かな。

それとも、裏切ったな！ かな…。 あくあ、シンちゃんとの暮らしは良かったのになあ…。 …また、1人なるんだ…。 でも、当然だよな。 私が言った言葉を裏切るような事してるんだから…）

そんなネガティブな考えが、ミスアトの目元に涙が溢れそうになっていた。しかし、自分が悪いのだから泣く訳にはいかないと思いミスアトは目を瞑り我慢する。

ポンツ

そんな時に、ミスアトの重ねていた手に柔らかく暖かい物が乗せられた。ミスアトは驚き涙目になりながら目を開けると自分の手の上に、シンジの両手が乗せられていた。訳が解らなくなるミスアトは、シンジの方に視線を運ぶとミスアトは驚く。

シンジの表情が、困り果てた顔に笑顔を混ぜた様な表情だった。

予想外の出来事に、ミスアトは混乱してる所にシンジの口が開く。

「ミスアトさん…。 別に俺は怒ってるじゃないんですよ？ 俺は本人の意思を聞きたいから、今こうして聞いているんです。 ミスアトさんが俺の父親との事で同情して、一緒に暮らそうって言った訳じゃ無いことは知ってるつもりです。」

シンジの言葉に、ミスアトは返事をしようとするが口をパクパクさせるだけで声を出せていなかった。そんなミスアトを見て、シンジは軽く笑う。

「まあ、仕事上の事で言えなかったんでしようね。 でも、俺もね…。 疑うって事はありますよ、人間なんですから。 どんなに親しくても。 だから、これを見てミスアトさんの事を疑ったままでは気持ち

ちが悪かったです。」

シンジは目を瞑りながらミサトに語る。

「初めてミサトさんと会ってから、今まで少しだけですが色々なミサトさんを見てきました。最初の方は、只の明るい女性とと思ってました。だけど、ミサトさんは人に元気をわせるような笑顔を持って楽しくさせてくれて気さくな人なんだと最近思うようになりましたね…。感じた事は、ミサトさんは一度幸せを得て手放したのか無かった経験した雰囲気ですね。だから1人になるのが、怖く感じるでしょう…。でも、それを別にして俺をこの家に招き入れてくれたミサトさんに感謝してんですよ?」

ミサトは、シンジの言葉の前に堪える事が出来ずに数滴の涙をテーブルに落とす。

「家族と言えど、言わなくちゃいけないと言うつもりは俺はありませんからね? 人間なんですから。でも、家族であるミサトさんにはこれだけ言わせてもらいます。どうなんですか?」

ミサトは感情が制御出来ず、ダムが決壊したように目から涙を流れ顔の表情は崩しながら口を開く。

「わ…。私…。…ひっ。最初…は、断るつもり…だった…。シン…ちゃんを…。監視…ひっ、なんてする…。つもりなんか…。な…。かった。使徒…と戦…。う…。シンちゃんが、日々の…。生…。活、ひっ…。だけでも…。楽しく…。くして…。貰う…。為に、…。誘ったのよ…。」

泣きながら喋る所為か、ミサトの言葉は途切れ途切れになっていたがシンジは笑顔でうなづきながらミサトの手を優しく力を入れる。ミサトは、シンジから伝わる温もりに彼女の心は開いていき頬に流れる涙は増えていく。

「…でも! シンちゃんは! 逆に…。私に温もりをくれた! ひっ。だから! そんなシンちゃんに! 私は感謝してる! 監視なんかするつもりもないわ! シンちゃんに疑われたく無い! 唯、楽しく一緒に生活がしたいだけなの!」

最早、最後の方は叫ぶミサトだが心から言葉だった。言い終えたミサトは下を向きながら泣いているとシンジはミサトの手を離す。

ミサトは突如無くなる温もりに驚き、顔を上げる。

ポフツ

いきなり横からミサトの頭と肩が包まれる。ミサトが包まれた方向に顔を向けるとシンジの笑顔が近くにあった。今、ミサトはシンジに抱き締められるような状態だった。

「ありがとうございます。ミサトさんの本音を聞かせてもらえて…。」

身体は小柄で子供な筈の彼から、ミサトは14年しか生きていない彼に優しく大きな存在と思わせる雰囲気を感じながら、ミサトをシンジの胸に抱きしめられた。血も繋がらない最近まで赤の他人だった2人であったが、ミサトは人の優しさをシンジから伝わり声を出して彼の胸で泣いた。

「うああああああああああっ!」

☆☆☆☆

(……考えてみると私って、年下相手に胸借りて泣き叫んだのよね?!? でも、プライドより大切な物は貰えたし良いか…。ふっふっふっ。シンちゃん、今まで私をお熱にさせた責任で今日はスキップを多めにするからね!)



ミサトは、内心でスキンシップをシンジにすると意気込んでいたが大半は諦めていた。色々と彼にスキンシップをしようとするミサトだが、成功率が殆ど0に等しかった。ひらりひらりと躲してスキンシップを拒むシンジだが、本の稀に普通にスキンシップをとらせて貰えた時もあった。その稀を賭けて日曜日の朝からミサトは決意した。

その後、シンジが食器を洗い終え洗面台の方に行き歯を磨いている所にミサトは近づく。忍び足で近づくミサトは、シンジは目を瞑りながら歯を磨いている為に鏡を見ていなかった。距離が殆ど無い状態まで近寄り後ろから抱きしめようと構えるとシンジが振り返らずミサトに声をかけられた。

「どおひまひた？ミヒヤトひゃん…」

ビクリと身体が震えるミサト。だが、後に引くことはせず返答しながら歯を磨く作業を邪魔にならないように優しく抱きしめた。

「う〜ん、なんでも無いわよ？」

抱きしめられたシンジは、一度磨く手が止まるが再び動かす。それを見たミサトは賭けに勝った。

(やったあああああ！…はあ、やっぱりシンちゃんを抱き心地がいいわ。よし！今日はネルフの仕事は無く一日中、シンちゃんといれるわ！)

シンジを抱きしめながら、ミサトは彼の頭に顔を押し付け和んでいた。第三者視点から見た場合、姉弟の姉のブラコン状態に見えるであろう。その後も、家事を午前中に終わらせ昼飯は素麺を食べて一通り終わったシンジは、居間でテレビを見ていた。

ミサトは、テレビよりシンジを観察していると彼の身体がユラユラと揺れていた。窓辺に座るシンジは、窓が開いており程よく風と太陽の光を浴びて睡魔に襲われて船を漕いでいた。それを見たミサトは、何かを思いつくと座椅子から立ち上がりシンジの近くまでを持って行き、ある程度距離に座椅子を起きミサトはシンジの脇に手を入れて引きずりながら座椅子の方まで運んだ。

「…うお…う…」

殆ど睡魔にやられて意識の無いシンジは、無抵抗のまま声だけをあげていた。そして、後ろ向きのままシンジを引きずり先にミサトが座椅子に座り足を開いて、その間にシンジを入れて彼の身体をミサトに預ける体制にした。

完成した体制がミサトは座椅子に座り、シンジは彼女の身体を預ける姿勢になり頭がミサトの胸に少し挟まり手足は引きずられた状態でだらくと伸ばしていた。思い浮かべていたものが完成したミサトは心の中で歓喜極まっていた。

(きやあああああ！ 何これ!? 可愛すぎ！ 本当に男の子!? いやああああ!! もう、幸せよ!)

はしやぎたい自分を抑えながら、シンジの頭を撫でて一時の幸せに浸っていた。風でカーテンが揺れ、テレビから音が流れて寝ているシンジの顔を見てミサトは時間がゆっくりに感じていた。その時、リビングからペンペンが現れ2人を見つけると側に寄りシンジを起こさないように静かに彼の下腹部に乗り、ペンペンはシンジの上で横になった。

「ペンペンもシンちゃんの事、好きだもんね。」

「…クエ〜☒」

そんな会話をしているとぐっすり寝ているシンジは、上にいるペンを優しく抱き上げた。ペンペンもシンジに抱かれ、満悦になり、ミサトは引き続き彼の頭を撫でて和んでそんな時間はゆっくりと過ぎて行った。

☆☆☆☆

数時間後

夕方になる前ぐらいから、シンジは起きるとミサトに寄り掛かりながら寝ていることに気づく。ミサトは、シンジにつられたのか寝ていた。そんな彼女を見てシンジは微笑み、シンジの上で寝ているペ

ンペンを抱きしめたまま起き上がる。ペンペンは寢床に入れて、買物の準備するシンジ。準備が終わるとシンジはミサトを優しく揺らし起こす。

「ミサトさん。俺、買い物に行ってくださいね？」

「…うん、私も行くわ…」

寝ぼけた声でシンジと一緒に買い物に行くと言うミサト。

（大きな子供か…）

そんな思いがシンジに過る。数分後、完全に覚醒したミサトは準備している中シンジは戸締りをしてから玄関で待っていた。

第3新東京市にある商店街に向かう2人。横に歩く2人は姉弟に見えてもおかしく無いほどだった。その理由は2人は手を繋ぎながら歩いていたので。最初、ミサトが思い切つてシンジの左手に右手で掴むとシンジは何も言わずに笑うだけだった。

（…私はシンちゃんとの関係は、こんな感じが一番幸せに思うな…）

恋人とかじゃなく家族のように一緒にいれるだけでも…）

そんな思いをミサトは持ちながら、シンジに手を引かれていた。商店街に入るとシンジを知る人達は、声をかけて色々話をして冷やかされながらも笑いが常にあった。1人や2人だけでは無く、商店街にある店大半がシンジを知っていた。誰もがシンジと話す時は笑顔だった。

（やっぱりシンちゃんは、人の繋がりを大事にするタイプだわ…。でも、それが長所とも言えるわね。後、誰もが彼に惹かれているのがわかるわ）

老若男女問わず、人気があるシンジは上手いやり取りしながら安く買い食材を買い集めていた。無事、買い物が終わるミサトの家に帰る2人。

「ミサトさん」

帰り道、突如シンジからの問いかけに驚くミサト。

「何？」

「今日は休めました？俺と一緒に寝て」

ニヤリと笑うシンジの顔を見て、ミサトは顔を赤くしていた。声

に出さず頷くミサト。 それを見て笑顔でシンジは言う。

「それは良かったですね…」

(駄目だわ…。 一生彼に敵わないわ、私)

その後、無事にミサトの家まで着き晩飯を食べ風呂も入り晩酌も終わり居間で柔軟しているシンジは寝ようと自分の部屋に戻ろうとしたがミサトが少し顔を赤くしながらモジモジして口を開く。

「…シンちゃん、今晚だけ一緒に寝ない…?」

それを聞いたシンジは、溜め息を吐いた後笑顔でミサトの部屋に足を向けた。



## 次の日

朝、2人とも艶やかな顔になっていた。

2人でお互いの温まりを感じながら寝れたお陰かもしれない。  
そんな彼らの日常もあった。

(欲求に勝ったぞおおおお！)  
そんな彼も男だった。

## 嵐の前：

カーンカーンカーン

規則正しく鳴り響く作業音。その音を出している作業場は、近くに人型の後がついた山が近くにありエヴァと同じぐらいの大きさのシートで囲われた建物があった。外部からは様子は窺うことは出来ない。

ブウウウウウン

キキイイイ

その作業場の近く数台止まる駐車場に、物凄いスピードでパワードリフトを咬ましタイヤ痕を残し決められた定位置に止まるルノーが1台。中から満面の笑顔のミサトと顔を青くしたシンジが出てくる。

「いやー！ 無事、完璧に直りローンも無くなったルノーで走るのは最高ね！ ありがとうね、シンちゃん！」

「そりゃ…どうも。 ……なんで、エヴァに乗って使徒と戦っていた時より…恐怖があるんだ…」

ミサトのルノーは、2体の使徒を倒してネルフで作ったカードに振り込まれていた金でシンジがルノーの修理費とローンを支払った。

最初、シンジはカードの中にくら振り込まれているのだろうと軽い気持ちで見ると驚愕した。シンジの中ではネルフに働くようになってから、エヴァに乗り自分から書類や開発部の手伝いなどをやって一ヶ月で5〜60万と冬月から聞いていた。早速、給料日にシンジは初給料で普通のサラリーマンより高い給料を拝もうとATMにカードを入れ見てみると、確かに60万が振り込まれていた。だが、60万の6の前に3つの0と2と書かれていた。シンジのカー

ドには、20億60万円が入っており彼は最初は目を擦り頬を引つ張り痛みを感じると離して尽かさず携帯を取り出しダイヤル。

『もしもし。　なんだね、シンジ君？　何かあったのかね…』

「冬月先生！　なんすか、この金額!?　中学生に与えていい額じゃありませんよ！　確か5く60万って言ってましたよね!」

シンジは、携帯で冬月に電話してテンパリながら話す。　すると、

電話の向こうから冬月の笑い声が聞こえてきた。

『はっはっはっ。　そうだ、言い忘れていたが使徒を倒すと1体に付きエヴァパイロットには特別手当で1千万と言う話。　の筈が、委員会でのシンジ君の評価が高くてね。　使徒の死骸にエヴァの最新武器、国連軍との交渉、そして第3新東京市の少ない被害があつて委員会でのシンジ君の評価がうなぎ登りでね。　特例でシンジ君には使徒を1体倒すと10億が委員会から振り込まれるんだ。　そう言う事なんだ、シンジ君。　おや？　もしもし』

それを聞いたシンジはフリーズしていた。　確かに、シンジは本部にいる時は訓練やシンクロテストよりも開発部の件や国連軍との交渉をしていた。　開発部では自分がエヴァに乗っている時に扱いやすい武器を考えて、国連軍との交渉ではシンジの子供とは思えない対応をしていた。

例えば

☆☆☆☆

『我々はネルフの駒では無い！　民間人を助ける為の国連軍だ！　それにこの場に子供を、私と交渉させると言う事態があり得ない!』  
『そうですね…。　確かに自分の立場が逆なら、貴方と同じ事を言うでしょう。　ですが、自分には貴方達が必要の為にこの場に立たせて貰っています』

『…何?』

『今は使徒を倒す為には、エヴァを無くして国連軍の貴方達では倒せません』

『喧嘩を売っているのか!!』

『いいえ、言い方が悪いのは謝ります。ですが、ネルフでは出来ないことをやってくれているのが国連軍です。例えば、民間人の避難、使徒発見の通達、そして使徒の足止めとその他諸々。これらがある為に今の状態が保っているのです。エヴァを発進させるにも、どうしても時間がかかってしまいます。これらが無くなればネルフは第3新東京市に甚大な被害を与え、人類は敗北に導いているでしょう』

『……………』

『自分は、実際にエヴァに乗り使徒を倒していて誰もが自分に目を向けています。ですが、裏には貴方達が誇りある仕事があるからこそ自分は尊敬してます。民間人の方々は、気づかないでしょうけど自分は《一緒に》戦ってくれる国連軍の人達には感謝してます』

『……………い……………』

『そして、自分自身は貴方達を必要としてます。ネルフとしての立場は二尉ですが、ネルフの権限も特例で持っています。必要あれば自分は、国連軍に出来ることをしましょう。どうか自分とネルフ、一緒に使徒を倒す為に手を組んでくれませんか!? お願いします!!』

『もういい……………』

『えっ……………』

『君の気持ち、しかと受け止めた! 気にいったぞ! 子供と言うのに気持ち良い事を言うなんて。確かに我々は、ネルフに嫉妬していた…。国連軍は人々を助けるのが仕事だ。実際に被害の無いように人々を避難させて、使徒を発見し報告しているのは我々だ。だが、誰もがネルフのお陰と言うのだ…。しかし君は我々をしっかりと見ている、理解している。だから、我々は君に手を貸そう! 碓シンジ君!』

『あ、ありがとうございます!』

『今の話は、我が軍の施設全体に放送して流している。』

『……………えっ?』



『今頃、軍の全員は君の言葉が心に響いているだろう。』  
『えーーーーー!?!』

☆☆☆☆

その後は、軍全員がシンジの前に集まり敬礼されるほど国連軍は彼の言葉が届いていた。だが、その為ネルフとは言わず国連軍はシンジにだけ手を貸そうと言ってきた。それでは、ネルフの本題が解決しない為に彼は説得して何とかネルフと国連軍とのパイプを繋げた。そして余りに大きな金額のお金を、感謝の意味でミサトの車を全額支払ったお話。

#### 閑話休題

シンジの気分も良くなり、ミサトと一緒に作業場の施設入り口に向かう。入り口に着くと中から守衛が出てきた。

「作戦部の葛城一尉よ。 サード・チルドレン、碇二尉と一緒に見学に来ました。」

「伺っております。 では、中に入る前にヘルメットを。」

「どうもありがとうございます。」

守衛から渡されたヘルメットを2人は受け取って被り、守衛の後を追うように2人は作業場に入る。すると、足を踏み出し一步目からシンジは目の前に広がる光景に驚きを隠せないでいた。

「わ…わあお…」

「どう? ビックリした?」

シンジの驚く顔を見てミサトは、ニヤリとイタズラを成功させた子供のような笑顔になっていた。

「これが使徒なんです…。」

人より遥かに大きな存在の使徒を目の前にして、シンジは身体をブルツと震わせた。一体目の使徒も肉眼で見ているが、改めて使徒を見ると動かない筈であるのに恐怖が混み上がりそうになっていた。

シンジの顔が少し暗くなるのを見ていたミサトは、その場を移動する為にシンジの手を繋ぎ歩き始めた。

そんな手を繋ぎ作業場を歩く2人を第三者視点で見ている作業員からは姉弟の関係にしか見えていないのは別の話。

シートに囲われた作業場を歩いて数分。使徒の足元に近い場所まで移動してミサトは周りを見渡す。

「あつれく、おかしいなあ？確か、此処にいるって聞いたんだけど…。

おっ！ いたいた、リツコく」

ミサトは地上から数mほど上に組まれた鉄の通路に向かって叫ぶ。そこに白衣にヘルメットと言う奇妙な恰好したリツコがいた。

それを見たシンジは余りのチョイスに苦笑。

「ミサト？ 来たわね、丁度良かったわ。じゃあ、これ解析お願いね」

「了解です、赤木博士」

リツコが作業員に指示をした後、2人がいる場所に向かう為に階段を降りる。

「お待たせ、2人とも。今日はシンジ君も見に来たのね？」

「そうよ、実際に戦うのはシンちゃんなんだし。こんな機会は滅多に無いから」

シンジは2人の会話が聞こえておらず、周りをキョロキョロしながら観察していた。そんな仕草にリツコはシンジを子供らしいと思いい、少し笑う。すると、シンジは気がつきリツコに挨拶をする。

「おはようございます、リツコさん」

「おはよう、シンジ君。 さて、2人とも私について来て見せたい物があるの」

☆☆☆☆

リツコに案内され2人は、シートの間にある解析室へと立ち入っ

た。複数台のパソコンが設置されているそこでは、調査で得られた膨大なデータの分析と解析が行われている。

「本当に理想的なサンプルね。殆ど傷が無くコアだけを貫いたお陰ね、見事よシンジ君」

「殆ど無我夢中でやっての結果ですよ…。まあ、喜んでいただけなら」

科学者のリツコは、この先現れる使徒も良い状態のサンプルにして欲しいのが本音だが彼の戦闘を見ると彼が悪いわけでは無いが辛勝の為に言えないでいた。もし、そんな事を言えばシンジはやってはくれるだろうが彼の危険が高まるだけでリツコは決して言えなかった。

「それで何か分かったの？使徒の事」

するとリツコは無言で端末を操作して、パソコンの画面を2人に見やすいように動かし画面に指差す。

そこにはただ一行。『601』とだけ数字が表示されていた。

「何よ、この数字？」

「コード601、解析不能って事」

「結局使徒の事について、何も分からなかったのね」

「あら、何もじゃ無いわ」

落胆した様子のミサトに、リツコは心外だと反論する。

「例えばこれ、使徒独自の固有波形パターンね。構成素材の違いはあれど、その信号の配置と座標は人間の遺伝子と酷似してるわ。9

9.89%ね」

「それって…、エヴァと」

リツコの言葉を聞いて、シンジは頭の中でジグソーパズルのように使徒の事を考えていく。

（それって…。簡単に言えば使徒は人間に近い…、それと同じサイズのエヴァ。今の所は、現れた使徒とエヴァを比べれば左程サイズは変わらない。……………！もしかして、エヴァと使徒は同一の存在!?!）

今、ミサトさんも呟いていたし。エヴァも人間の遺伝子と99.89%は人造人間だから解るけど…。調べなくちゃいけな

いな、これは…)

シンジが考えている中、彼の後ろから話し声が聞こえてきたので振り返る。ミサトとリツコは、専門的な話し合っている為にシンジの様子を見ていなかった。振り返ったシンジの視界には作業服姿の人達の中、ネルフの制服にヘルメットと一際目立つ二人。司令のゲンドウと、副司令の冬月だった。

「冬つ……」

呼びかけようとして、シンジはふと声を引つ込める。ここで声を掛ければ、仕事を邪魔になると考えたシンジは2人の動きをその場で眺めていた。ゲンドウと冬月は、作業服の男性から熱心に説明を聞いていた。そして頭上から降りてきた真ん中に空洞になっているコアを、興味深そうに手で触れながら調べている。

(おろ？お父さん……火傷しとる?)

コアに素手で触れるゲンドウ。普段白い手袋に隠された両手には、真新しい火傷痕が痛々しく残っていた。

(まあ、何かあつてああなったんでしょ。深く考え無くても…)

「シンちゃん!」

ポント

「うおっ!魚!?!」

ゲンドウの方に気を取られていたシンジは、不意に背後から肩を叩かれ驚きをあげる。

「…なんて、驚き方してるのよ。どうしたの、シンちゃん? 碇司令を見てたでしょ」

「え、ええ…。父親の手に火傷があつたんで、どうしたのかなって」

ミサトはシンジが言ったゲンドウの手を遠目で見て確認した。

「あらま、本当。リツコ何か知ってる?」

「ええ、知ってるわ」

話をかけられたリツコは面白くなさそうに話す。

「以前零号機が起動試験中に暴走したのを知ってるかしら?」

「はい、ミサトさんから聞きましたし前にレイさんが入院した理由ですわね」

「その時、オートエジクションが……エントリープラグを強制的に排出する装置の事ね。それが作動してしまって、レイの乗ったプラグが実験室の壁や天井に激突してしまったの」

本来パイロットを救い出す為の強制射出機能だが、屋内で作動してしまえば逆効果となる。勢いよく排出されたプラグは、無防備で障害物にぶつかる事になるからだ。

「だからレイさんは怪我をしたんですね」

何故起動を失敗したただけであれ程の怪我をしたのか。シンジは以前から疑問だったが、リツコの話で納得できた。

「その後、床に落下したプラグに司令が駆け寄って、手でハッチを開けたわ。当然排出されたばかりのプラグは高熱を帯びているから、その時に手を火傷したの」

「へえ、あの碓司令がね。正直信じられないわ」

（ふくん、そう言うことね。あの人も、ちゃんと人を助けられるんだな……。ちよつと安心した。）

シンジは、心の中で安堵の溜め息をついているとミサトは彼の様子を見て話しかける。

「どうしたの、シンちゃん？もしかしてレイに嫉妬してる？」

ニヤニヤしながらミサトは、シンジにちよつかいのつもりで言うがシンジはヘラツと笑いながら答える。

「いやいや、俺の父親にそんな一面があつて良かったと思つただけですよ。火傷と引き換えに、レイさんを助け出した事は立派だなんて」

シンジは笑顔で言うが、2人には彼の笑顔には影を感じていた。彼もまた中身は成熟していても子供らしく、父親に甘えたい歳頃と言った所なのだろう。

☆☆☆☆

シンジは使徒の死骸を見終わり、本部に向かっていった。 リッコ曰く。

「シンジ君は、今までエヴァの訓練とシンクロテストやってないのよ。だから今時間ある時にもやっとかないと、いつになることやら」  
確かにシンジは色々タイミングが悪いと言えるのか、一体目の使徒を倒してから碌に訓練もシンクロテストもやっていなかった。

そんな訳でシンジは本部に着き、私服からプラグスーツに着替えてエントリープラグに搭乗する。

「いや、考えてみれば戦闘以外にエヴァに乗るのは初めてだな」

シンジは力を抜きながら、マッサージチェアに似た椅子に身を任せ、エントリープラグは、エヴァの後ろ首に近い穴に挿入される。

『では、シンジ君。今から シンクロテストを始めるわ』  
「了解」

するとエントリープラグ内に、LCLが流れ出しプラグ内を満たす。LCLが満たされたプラグ内を見て、シンジは肺にある酸素を吐き出し顔を歪める。

「うえっ…、いつもながら慣れないな。この味は」  
『シンクロテスト、開始！』

リッコの号令が入ると、シンジとエヴァはシンクロを始める。

その中、シンジはプラグ内で違和感を感じていた。プラグ内では彼一人の筈なのに、違う存在が自分の近くにいる感覚に襲われていた。

「…んっ？　なんか見られてる？　違うな…、懐かしい感覚がプラグ内に漂ってる雰囲気を感じるな。　まあ、悪意とかも無いし別にいいか」

シンジは余り深く考えず、シンクロテストの為にプラグ内は何も表示されておらず目を閉じていた。　しかし、何か違和感があり気になったシンジは誰もいない空間に話しかける。

「今プラグの中にいるのって俺だけじゃ無く、他にいるんだな？」

すると、声や音では無くシンジの感覚に反応があった。　姿形は無くとも目を瞑り話しかけると、すぐそこに誰かが彼に話しかけようと

している感覚が感じられた。そんなシンジは不気味さが2で好奇心が8と言う割合で目を閉じ頭の中でエヴァに話しかけてみる。

(…初めましてかな? 色々振り回されて、俺が初号機に乗って痛い目を合わせてゴメン…。 謝って済むことじゃないが分かっている。)

だけど、この先に現れる使徒を俺と一緒に戦って欲しい! 頼む!!) そんな事を頭の中で念じると、エントリープラグ内が暖かい雰囲気だ。最初不信に思っ、エントリープラグ内を見渡すが何も確認できずにシンジは考える。そしてハツとシンジはこの現象がエヴァからの返答と勘づく。

(悪い、先に決めとけば良かった。肯定が暖かい雰囲気です否定なら冷たい雰囲気を出してくれ。 じゃあ、一つ質問な? お前はエヴァである)

するとシンジの周りは暖かい雰囲気にも包まれる。

(…お前はエヴァではない)

否定するようにプラグ内は冷たい雰囲気が漂う。シンジはエヴァと意思疎通に近い物を見つけると意気揚々と、昨日の休日での話を心の中でエヴァに告げる。シンジがエヴァに話しかける間に、彼の座るエンテリアがプラグの前に引き寄せられるように移動していた。その間も暖かい雰囲気はシンジを包んでいた。エヴァがシンジの話に興味を持っているかのように。

☆☆☆☆

エヴァのテストルームと隣接した場所に管制室が設置されていた。

プラグ深度、限界値ギリギリです」

管制室に設置されているモニターを見ながらマヤが、状況報告を行っている。エヴァのエントリープラグは、構造上はパイロットが座るエンテリアが前に進めば進むほどエヴァとの繋がりは強くなる。

逆に後ろに行けばエヴァとの繋がりは弱くなる。だが、繋がりが強まり過ぎるとパイロットは精神汚染の危険性が高まってしまう。

今のシンジは精神汚染が起こってしまう瀬戸際の所まで、エヴァに近かった。

「プラグを固定して。それ以上の進行は決して行かせちゃ駄目よ…」

「了解です、先輩」

シンジを精神汚染から守る為にリッコは素早く指示をマヤに言い、エントリープラグのインターアの進行を止める。ひとまず最悪の状況は免れてリッコは溜め息を漏らす。

「…毎度ながら、シンジ君には驚かせられるわね。シンクロテストで、シンジ君を引き寄せようとするエヴァ。意思があるのが分かるわね…」

「えっ？ エヴァに心があるの」

リッコの言葉に、反応するミスア。テーブルに置かれているタブレットをリッコが持ち上げ、少し操作した後ミスアに渡す。渡されたミスアは、タブレットの画面に映し出している情報を見て顔が驚きに変わる。

「なんで、人造人間であるエヴァ初号機のスペックが最初の頃より上がってるのよ!?!」

現時点のエヴァ初号機は、シンジが乗る前のスペックが比較的上がっていた。改造などは一切していない初号機は、2体の使徒を倒してからはパイロットとエヴァとのラグが短くなった。当初は、パイロットの思考からエヴァとのラグは0.82秒と言った所が0.59秒と短縮され、パイロットが思考を発生させれば自分の身体とほぼ同じ感覚でエヴァを動かせる事が可能になった。

もう一つエヴァの上がったスペックは、最初のエヴァと今のエヴァは動ける可動域が広がっていた。

本来、装甲で曲げれない角度などが関節部分がある程度の伸縮性を持ち、今は開脚ができるほど。リッコは推測で、エヴァがシンジの想像する動きを対応する為にスペックが変化したと見ている。そ



うなれば、エヴァ初号機に心があると見ても不思議ではない。

「私は、自信持って科学者と誇りを持っていたけど…。この初号機の変化を見ると自信を失うわ」

リツコの中では、初号機の事を完璧に把握してるつもりが実際そうでは無かった事に落ち込んでいた。それを見たマヤはフオローする。

「先輩！ そんな事ないですよ、実際にエヴァを知っているのは先輩じゃないですか」

「ふふつ、ありがとう。マヤ」

「良い先輩、持ってるじゃないの。リツコ」

フオローするマヤを見て、リツコは微笑みミサトは羨ましそうにしてその場の雰囲気は和んでいたがマヤの顔には曇っていた。その時、誰もマヤの顔は見えていなかった。

★★★☆☆

シンクロテストが終わり本部に用は無く家に帰る為、シンジはプラグスーツから私服に着替えミサトがいる駐車場に向かう為、通路を歩いていた。すると、十字路に差し掛かる所に右側からマヤが突如現れる。

「きゃっ!?!」

(やべっ!?!)

シンジは、少し気づくのが遅くマヤとぶつかってしまふ。シンジは咄嗟に後ろに飛び、マヤに衝撃を無くそうとしたが最悪の事にぶつかった時に彼の足はマヤに踏まれており、シンジは後ろに体重移動している為に倒れる。それに追いかけるように、マヤも倒れてきた。シンジの上に覆い被さるように。

ドサッ

「いたたたっ」

マヤがシンジを押し倒したような格好になり、下敷きになっているシンジはマヤの胸で顔を覆い被さり息が出来ないでいた。

「ん〜!? ん〜〜〜!!」

「きやつ!? ゴメンなさい、シンジ君…」

「ぶはっ!」

謝りながらマヤは上体を起こすと、シンジは顔の前に何も無くなり再び呼吸を開始する。ゼーハーゼーハーと息を切らしながら、呼吸を整えシンジはマヤに話しかける。

「大丈夫でしたか? 伊吹さん」

「ええ、本当にゴメンなさい。私、ボーとして前を碌に見てなくて」

「まあ、自分も注意力が無かったんで…。そして、伊吹さん…。とりあえず、退いてくれますか?」

「えっ?」

今の2人は、通路でマヤがシンジを押し倒して跨っている状態であった。第3者から見た光景なら、兎に角凄い状態では見えないのであろう。やがてそれに気づくマヤは、少しずつ顔が赤くなっている素早くシンジの上から退いた。

「ゴメンなさい、ゴメンなさい! 本当にゴメンなさい!」

「いや、良いんですよ。怪我無かったですから、自分は気にしてませんよ? 事故なんですから」

「うう、私ったら本当に駄目…。これじゃあ、見てくれないわ…」

落ち込むマヤを見て、シンジは立ち上がり声をかけようとしたが右足首に痛みが走りよろめいた。先ほど2人が倒れる際にマヤが彼の足を踏んだまま倒れた為に捻挫した可能性が。それを見てマヤはシンジに近寄る。

「大丈夫!? シンジ君! 何処か怪我した!」

「ははっ、右足首を捻挫したかもしれませんがね。まあ、家帰ってシツプでも貼れば治りますよ。気にしないでください…」

「駄目よ! 早く医務室に行きましょう!」

「は、はい…」

余りの気迫でシンジは、マヤの言葉に空返事に近い物を返すとマヤ

の背に担がれシンジは医務室に運ばれる途中、通路ですれ違うスタッフ達からその姿に驚かれていた。マヤはシンジを医務室に運ぶと意思が強く周りが見えておらず、マヤの背に担がれているシンジは少し恥ずかしい気持ちに駆られていた。

☆☆☆☆

#### 医務室

シンジは医務室に運ばれるが、その時はタイミングが悪いのか担当の者が不在だった。その為に、マヤがシンジの怪我を治療する事になった。シンジをベッドに座らせて床に膝をつき、足首にシップを貼り包帯を巻いていた。

「へえ、伊吹さんはこういうの慣れてるんですね」

「違うの、ネルフに入る前に医学系の事を少し覚えなくちゃいけないから出来るだけよ。…シンジ君、本当にゴメンなさい。私の不注意で怪我させて…」

包帯を巻き終わり真剣に落ち込んで顔を下に向けるマヤ。それ見てシンジは彼女が、何処か悩み事があるよう見えた。そう思ったシンジは、笑顔でマヤに聞いてみた。

「伊吹さん、何か悩み事があるんなら自分で良ければ聞きますよ？」

マヤは、シンジの言葉で顔を上げると彼の笑顔を見て少し暗い顔が明るくなる。人は暗い気持ちの中、誰かに暖かく接してもらおうと気持ちはその人に頼ろうとする場合がある。マヤの心境は、それに近くシンジを年下と言う事を忘れて彼の隣に座る。

「…じゃあ、聞いてくれる？」

「是非」

笑顔でシンジは答える。見た目は子供なのに、大人の対応で少し可笑しくマヤの顔はより一層明るくなっていった。

「あのね、私赤木博士の同じ大学での後輩なの。最初、ネルフに入っ

た時先輩がいるのを知らなかったの…。でも、ある日私は先輩の部下になったの。その時は嬉しかったの。私が大学時代の尊敬する人が先輩だった。そんな尊敬する先輩の下で働いて、期待してゐるって言われたけど最近思うの…。私は本当に先輩の期待されるほどののかって…」

マヤが一通り告げた後、再び顔に明るさが消えていく。その中、シンジは静かに聞いていた。

「そして、私はシンジ君に嫉妬してるのよ？」

「…えっ!？」

「シンジ君は知らないだろうけど、最近ネルフで働いて休憩中の時に先輩の口からシンジ君の事を話すのよ。『いつか私の下で働かせてやるわ』って、結構の頻度で…。確かにシンジ君は、歳に似合わない態度や色々な気遣い出来るし開発部で話していたり、書類だって書ける。なんでも出来るシンジ君とパツとしない私…。だから、最近自分に自信が無くて先輩が期待してる事出来てるかなって思うの。

そして、先輩の心にはシンジ君を部下に欲しいと思ってる事に嫉妬してる…」

(…あの人は)

シンジは笑顔のまま、マヤの話を聞いていたが後半から自分の事が含まれている事に内心、冷や汗をかいていたが表に出していないのはフラインプレーと言える。とりあえず、マヤの悩み事を聞いてシンジは口を開く。

「年下の子供が言う事じゃないと思いますが、そんな事無いですよ。

リツコさんは伊吹さんを信用してるから何も言わないだけで、本当に期待に答えてない仕事を伊吹さんがしていたら部下から外してると思います。俺なんか簡単な物しかやってませんし。確かに、仕事関係で言われなくなったら不安になるでしょう…。でも、マヤさん。自信持ってください、俺はリツコさんの口から伊吹さんの事を評価してたんですから…」

「本当!？」

「…は、は、は」

マヤは希望が持てる言葉を聞いて、シンジの顔近くまで迫る。シンジはマヤとの顔の距離が、拳一つ分しか無く焦っていた。

「…いい、伊吹さん？　嬉しいのは分かりますけど、第3者視点からだとマズイぐらい…近いですよ」

最初、マヤはキョトンとしてから少しずつ顔が赤くなっていき最後にはトマトのようになっていた。それからおずおずと元の場所に戻る。マヤが恥ずかしそうに体を小さくしてるのを、シンジは見て可愛いと思った。

(真面目な人なんだな…)

「まあ、そんな事なんで…。伊吹さんは自信持って今の仕事をやってればいいと思いますよ。それでも不安なら、ちよくちよくリツコさんから聞きますよ」

「…本当にありがとう、シンジ君。貴方と話して気持ちが悪くなったわ、今まで自分に自信が無かったから…。でも、今日から自信持って先輩の下で働いていくわ！」

憑き物が取れたように、最初の自信無さげなマヤから自信に溢れたマヤに変わっていた。それを見てシンジは柔らかく笑う。

「それは良かった。じゃあ、この後の仕事頑張ってくださいね？」  
「ええ。…シンジ君、何かお礼したいんだけど」

「気にしないでくださいよ、俺は話をしただけですから。…まあ、それでも引き下がれないなら…。伊吹さん、特技や趣味って何ですか？」

「？　趣味ならお菓子やスイーツ作りかな。」

「じゃあ、一つ作ってきてください。それが良いです」

「わかったわ、気合入れて作らせて貰うわ！　でも、期待しないでね？　あ、あと！　シンジ君、私の事名前と呼んでくれると嬉しいな…」

今日何回目の赤面するマヤだが、今日一番可愛らしい顔でシンジに照れながら言う。彼女は、余り男性との関係が無く苦手と言ってもいいぐらいものだったが、今日シンジと話していると少し…慣れたのかマヤの中で彼と言う男性が惹かれたのか名前と呼んで欲しいと彼女は変わり始めていた。今の彼女は、大人の女性とは違い初めて異

性に意識を向けた少女にも見える反応だった。そんな変わり始めたマヤを見て、嬉しそうに頷くシンジ。

「わかりました、マヤさん。手作り、期待します」

そうして、2人は約束をした後医務室を後にした。この後、仕事に戻ったマヤは今まで以上の仕事ぶりにリツコから褒められより一層彼女はリツコの下で働いていた。

そして、その日から3日後。第3新東京市に新たな使徒が襲来する。今までとは違う姿を持った使徒が…

そして、彼は…

## 彼の敗北… 上

「目標は芦ノ湖に到達しようとしています。速度は変わらず。確実に第3新東京市に向かっていきます。目標近影をメインスクリーンに表示」

「……まるで巨大なプリズムね」

眉根を寄せたりツコが呟いた。それがマヤの言葉と共に発令所の壁の一面を占めているスクリーンに映し出された正八面体に、近い形状の不可思議な物体を見ての第一声である。

「今までの使徒は生物に近いものでしたけど、今回はどちらかというところの結晶体みたいに見えるすね、先輩」

「そうね……とすると攻撃方法にも変化があるかもしれないわ」

「はい。バルーン、出しますか？」

「……ええ、そうして頂戴。ミサト、いいかしら？」

「オツケー。どうせ使徒はATフィールドを何とかしない限り倒せないんだし、近接戦に入る前にやることはやっときましょ。少しでもシンちゃんの負担をやわらげないと…、と言っても日向君？」

腕組みして何やら思案顔だったミサトは提案を受けて彼女の方を振り返ったが、すぐに視線を彼女の傍で忙しく作業をしている腹心の部下に戻したて声を掛ける。

「はい。準備出来てます」

「そういうことみたいだから安心して」

再びリツコたちを振り返り笑顔を見せた。決して速いとは言えない第5使徒の姿を見つめながら、ミサトはすでに幾つかの作戦案を頭の中で構築し始めていたらしく、リツコの提案がなくとも攻撃方法を知るためのダミーは打ち出す準備を整えていたのだ。

「だそうよ」

「は、はい」

ミサトの返答を受けたリツコは肩を竦めながらマヤに微笑を向けた。差し出たことを言ってしまったと思っっているのか少し顔を赤らめて縮こまるマヤだったが、リツコが軽くその肩を叩くと気を取り直して本部各所に矢継ぎ早の命令を飛ばし始めた。

「エヴァ初号機はエントリープラグ挿入後待機。初号機パイロットは至急格納庫に向かって下さい。兵装担当部署は葛城一尉の指示ですぐにでも換装できるように準備を。……先輩、MAGIの割り振りをお願いします」

生来の童顔のせいでやや頼りない感じを受けることが多い伊吹マヤであったが、本来はリツコが天才だと認めるほどの人材なのである。技術部ではリツコのみが権限を持っているMAGIの扱い以外の、自分の職分内にある事項について瞬く間に処理し終わってしまう。

「……貴女が居てくれて助かってるわ」

「はい？」

スクリーンに集中していてリツコの呟きが聞こえていなかったマヤは、キョトンとした表情で小首を傾げた。リツコはその大学時代と変わらない後輩の仕草に優しい微笑を浮かべた。

「いいのよ、気にしないで。何でもないわ。バルタザールは第3新東京市の維持と市民の戦闘からの隔離」

「はいー」

和らいでいた表情を引き締めたりツコの指示にマヤも緊張感を取り戻す。使徒の来ない日などにはネルフ本部の施設内とは言え、食事に誘ってもくれるリツコであったが、技術部長としての顔が前面に出ているときには厳しい上司なのである。

「監視及び情報分析はメルキオールで……いえ、カスパーにして頂戴。」

メルキオールには初号機のバックアップを担当させて」

「……はい」

「あら、どうかして？」



「い、いえ、何でもありません！ あ……あの、ただ分析能力なら先輩が最初に仰ったとおりメ ルキオールの方が高度なのではと思っただけで……」

返答に一瞬の間があったことに対してリツコはマヤの方に問うような視線を向けた。マヤはまた自分が余計なことをしてしまったのを悔やんで疑問などないと否定しようとするが、つい先ほどにも気付いたことがあれば必ず申し出るようにと言われていたのを思い出して、恐る恐る自分の考えを口にした。

「確かにそうかも知れないわね。cでも、メルキオールは既知の事柄を分析する能力には優れているけど、未知の事態に対する予測能力ならカスパーの方がいいときがあるの。これはまだ貴女には話していなかったわ。MAGIの特性の1つなんだけど、説明する機会を持つ暇がなかったのは私のミスね。ごめんなさい」

「い、いえ、そんなことないです！ 私がもつと先輩の力になれば時間の空くこともあったと 思いますし！」

マヤが激しく首を横に振った。自分のことを実際以上に高く評価しすぎている後輩にリツコは少し困ったような表情を見せる。

「あのMAGIシステムには基本設計をした人の構想が色濃く反映されているのよ。3つの人格 は鬨ぎ合いながら1つの問題を解決していく。もちろん3基のコンピューターにはそれぞれ意味がある……これは近いうちに話さないね」

リツコはスクリーンの1つで初号機の準備が整ったのを目視してマヤとの会話を打ち切った。使徒はもう目前なのである。

「バルーンの方はどう、ミサト!？」

「いま射出するわ！ 初号機の出撃ルート計算よろしく！」

「第5使徒の攻撃方法を確認してからよ！」

「わかってる！ 日向君、急いで！」

きびきびした口調と動きでエヴァの射出までの準備を整えていくリツコの姿を、マヤは尊敬の 眼差しで追いかける。そして彼女は我が目を疑うような光景を見た。緊急時にはその原因となるものに全てを集中し尽くすリツコが、ほんの一瞬だけそびえ立つMAGI

に目を向けたそのとき、いついかなる時にも落ち着いた姿勢を崩さない彼女の崇拜する対象は、下唇を噛み締めて、かすかに頬を戦慄かせていたのだ。まるで激しすぎる感情の嵐——それは間違いなく哀しみだった——に襲われ、必死に涙を堪えようとする少女のようだったと全てを知った後にマヤは思い返すことになる。 見ている者の胸が締め付けられる、そんな哀しそうな表情だったと。

☆☆☆☆

いつそ悠然として見えるほどのゆったりした速度で浮遊している使徒をスクリーン上に見つめていたミサトは、第3新東京市の最終防衛ラインに到達する寸前で作戦開始を決断した。 芦ノ湖に浮かべられた無人艇は8隻。 それぞれが第3新東京市と使徒を結ぶ一直線上で等間隔に距離をとっている。 甲板に設置された装置から初号機を象ったバルーン・ダミーを遠隔操作で射出できるようにされており、使徒に隣接するものから順次それを行っていくのである。

「それと日向君、列車砲台の準備はいい？」

「はい。 葛城さんの指示どおり、ほぼ全方位から攻撃できるようにしてあります。 死角なんてのがあるのかどうかはちよつと疑わしい形をしますけどね」

「ありがと。 とりあえず砲撃の時間差は……そうね、初めは同時でいいわ。 もしもあの菱形のお化けが何かやってくるようだったら、その後は5秒間隔で各方位からランダムにぶつぱなしちやつて頂戴」

「了解しました！」

日向が作業を開始するのを確認したミサトは、内心の苛立ちを隠せない視線をスクリーンの方に戻した。 彼女はそれなりの訓練も

受けてきたし、この若さでネルフという巨大組織の中核近くにいるのだから優秀な人間であることは確かだった。だが、それはあくまでも対人戦闘のノウハウに長けているというだけなのである。攻撃方法は一切不明で形状すらもそれぞれ違う。しかも実際に戦場に赴くのはわずか14歳の子供たちであり、ミサトに出来ることはせめて少くとも戦いやすくなるように条件を整備することだけなのだ。こんな状況では溜息の1つも吐きたくなるが、彼女の立場はそんな甘えを許してくれない。込み上げてくる不安と焦燥を無理矢理押し戻しながらリツコに話しかけようとする。しかし、その言葉は最後まで言い終えることが出来なかった。

「リツコ、そろそろ初号機の準備を……」

ミサトが、初号機の準備を催促させようとする、突如使徒は8面体の内4面が開かれた。余りの光景に誰もが絶句していた。そして、使徒の中から水晶のような物が6個現れた。6個の水晶は、陣形を取り使徒と同じ形になると開いた使徒は行動を起こす。

「目標の中心で高エネルギー反応!! 使徒の中から現れた水晶体に連動させつつ……収束します!!」

カスパーによる分析情報を見つめていた青葉が絶叫した。

「何ですって!?! まさか……加粒子砲!?!」

ミサトとリツコが異口同音に驚愕の声を上げた瞬間、スクリーンを白い光が満たし、凄まじい爆発と共にダミー・バルーンが蒸発した。発令所内を重い沈黙が支配する。

「……何て化け物なのよ」

このミサトの眩きがバルーン蒸発の瞬間を目の当たりにした者たち全ての内心を代弁したものだ。だったのは疑いようがない。あまりにも凄まじい攻撃を放った使徒はさすがに攻撃中は動きを止めていたが、やがて緩慢な侵攻を再開した。

「葛城一尉」

茫然とスクリーンを見つめていたミサトの背後、斜め上方から使徒の能力の一端を見せつけられても、なお冷静さを失わない声が沈黙を破った。その声にミサトの全身を縛り付けていた畏怖という鉛

の鎖が断ち切れた。

「!? も、申し訳ありません！ 日向君、すぐに残りのバルーンを射出してー！」

「残り7つとも全部ですか!？」

「そうよ！ 射出したらすぐに無人艇は散開。 攻撃範囲を計るのよ！ 各砲台からの射撃は当初案どおりで頼むわね！ あんなもので撃たれたらエヴァだってどうなるかわかんないわ。 同時に攻撃できる方向はたぶん1つだと思うけど念には念を入りたいの！」

「わかりました！」

日向は自分の上司がこのような状況下でこそ能力を十全に発揮できる人物だと言うことをよく 知っていたが、それでもこの矢継ぎ早の指示には感嘆の念を禁じ得なかった。 その間にもミスアトは技術部長を振り向いてまた違う指示を飛ばしている。

「それとリツコ、エヴァの出撃は1時凍結にして！ ただし、状況が変化すれば即座に凍結解除になるだろうからシンジ君は控え室で待機よ！」

「ええ、もうやってるわ」

「サンキューー！」

一通りの指示を終えたミスアトはくるりと踵を返して、この組織で唯一の上司を振り仰いだ。 碓ゲンドウは腹心の部下である冬月コウゾウを横に従えて、いつもとまったく変わらない姿勢のまま指揮卓に座している。

「重ねてお詫び申し上げます。 先ほどは醜態をお見せしてしまいました」

「……構わん。 君は君に出来ることをやってくれ」

「はい」

敬礼したミスアトが発した言葉が消え入るのとほぼ同時に、再びメインスクリーン全体が白い光 を放った。 直視していると目を灼かれかねないその凄まじい光量は間違いなく使徒の加粒子砲である。

やや神妙な表情になっていたミスアトもすぐに冷静な指揮官の顔に戻ってその場から大声で確認 の声を発する。

「青葉君、今度はどれが狙われたの!？」

「ダミーです! あ、いや……し、使徒の内部に再度エネルギー反応を確認! だ、第2射が来ます!! 全ての水晶体も連動!」

その報告にはミスアトよりもリツコの方が目を剥いた。

「冗談じゃないわ! いくら何でも早過ぎる! 第1射からたったの11秒ですって!？」

信じたくない事実ではあったがスクリーンは発光して太い光の槍がダミーを貫く。無論、人類とてやられているだけではなく、あらかじめ定めてある間隔をおいて苛烈な砲撃で返礼していたが、いずれも真紅の防壁によって効果を与えることが出来ないのだ。

「相転移空間が目視できるほどのATフィールドなんて……それに水晶体の数で防御している。今まで襲来した使徒とは明らかに能力が違うよね……」

リツコが震える声で呟く間にも使徒は次々にダミーを蒸発させ、稼働砲台を白光の中で塵へと変えた。今回の使徒は、あれだけの高火力である加粒子砲持っているものにも関わらず一度使徒は開いていた4面を閉じ、使徒の周りで浮かぶ水晶体が全方位に設置したバルーンや砲台を次々と破壊していく。

「独12式自走白砲3台とも、消滅! ダミー・バルーンの残りがあと1体です!」

時間が経つにつれて悲鳴に近くなっていくマヤの声が、状況の悪化を視覚だけでなく聴覚によってもミスアトたちに知らしめる。このままではジリ貧であることは誰の目にも明らかだった。ネルフの切り札であり、人類全ての切り札のエヴァが使えない状況なのだから当然だ。近接戦闘によって使徒を葬り去るのが特徴であるエヴァでは、攻撃可能範囲に射出した瞬間にあの強烈極まりない加粒子砲と水晶体の方位攻撃の洗礼を浴びせかけられ、悪くすればパイロットの命すら失われる可能性がある。自然、スタッフの視線は作戦部長たる葛城ミスアトの元へと集中した。

「……碇司令、よろしいでしょうか?」

決断を迫られる形になったミスアトであったが、そのこと自体が迷い

を振り切れずにいた彼女を　後押ししてくれると考えれば感謝したいくらいの心境だった。　いかに敗北が確実な状況下にあつたとしても、これから彼女が具申しようとしている作戦案は大きすぎるリスクを秘めていたのである。

「言ってみたまえ」

「はい……私は……これ以上の時間稼ぎは無駄だと考えます。資材の無駄遣いは止めて、使徒を　第3新東京市まで導くことを提案します」

「!？」

声にこそなっていないが発令所内の空気が大きく揺れたように見えた。　しかし、その言葉に驚愕という常識的な反応を示したのは、碓ゲンドウ、赤木リツコ、冬月コウゾウを除いたオペレーターたちだけで、むしろ組織の中枢にいる者たちは納得したことを首肯で示す。

「それしかない、ということになるだろうな」

ゲンドウの重々しい口調にミサトも頷いて自らの考えを説明し始める。

「残念ながら私にはその方法以外には思いつきませんでした。　使徒が第3新東京市を破壊しようとしているのなら、最初からもつと違つたアプローチを仕掛けてくるはずです。　彼らが実際に何を目的としているのかまでは不明でも、目標がジオフロントにあることくらいは予測できます。　ですから、この施設自体を囿にして遠距離から狙い撃ちにするのが良策ではないでしょうか」

「許可しよう。　詳細は冬月と詰めてくれ。　技術的な問題は赤木博士に頼みたい」

冬月とリツコは有無もなく頷いた。　碓ゲンドウが許可するといふのならば、その決定を覆すだけの問題点がない限りは彼らが是非を言うことはない。　駆け寄ってきたスタッフの1人から受け取った資料を見ながら冬月がまず口を開いた。

「使徒が現在の速度を維持し続けるなら本部施設の直上に到達するのは約40分後という計算が　出ている。　さすがに知能があるため

にダミー・バルーンには見向きもしなくなってきたようだ。無人機と言ってもタダではないから戦略自衛隊の師団長閣下から苦情も来ているしな、これ以上の足止めは無理だと考えてくれ」

「はい、わかっています」

「技術部からも言わせて貰うわ。本部から地表までの間には特殊装甲が22枚あるけど、もしも使徒があのか粒子砲クラスの攻撃方法を使ってくるなら耐えられる回数はそう多くはないわ」

「淡々と事実を述べていくリツコの言葉にミサトは何とも情けない表情でぼやく。

「……白旗を挙げたい気分よ」

「ただし、分析に抛れば加粒子砲を撃つ瞬間にはATフィールドを解除しなければいけないらしいのよ。そして次に撃てるようになるまでは約11秒かかる……これで少しはやる気と希望を持てるんじゃないかって?」

リツコは澄まして言葉を続けた。

「へえ……」

それを聞いた瞬間、ミサトの口元に不敵な笑みが浮かぶ。リツコから渡されたピースによって、彼女の頭の中にある作戦案というパズルが完成した証拠だろう。

「それじゃあ、お客様を出迎える準備にかかるとしますか。ぶぶ漬でも召し上がって頂きたいタイプの来客だけど、出来れば玄関先に長居して欲しいもんだわね」

もう一度ゲンドウに敬礼したミサトは勢い良く踵を返すと、彼女自身の言うところの準備に取りかかるため、律動的な歩調で部下たちの元へと戻っていった。

☆☆☆☆

シンジはなかなか出撃命令が下らないまま緊張を持続させ続けることに疲れ始めていた。すでに二度の実戦を経験し、そのどちらにも勝利してきたという実績はあったが、それでも自分がやられるかも知れないという恐怖には慣れることなど出来はしない。不安で潰れそうな心臓を必死に落ち着かせようとしながら、この苦痛以外の何物でもない生殺しの状態に孤独な戦いを挑み続けるしかないのである。これを乗り越えなければ人類を守るなど鼻先で笑い飛ばされても文句は言えないのだから。

(そう言えば……夢に出てきた人も言ってたっけ……)

シンジは陰々滅々としてしまいそうな気分を何とか奮い立たせようととして、幼き頃に見た夢をもう懐かしくなりかけていたがふと思いついて出していた。

『いいかね、……………？ 人間というのは凄い生物なんだよ。 心の中に飼っている恐怖という怪物の存在だけでどんなことでも出来てしまうんだ。 隣人に対する恐怖で、そこを引っ越してしまったり、隣人そのものを殺してしまったり、もつと悪くすれば自分自身を殺してしまうことだってあるんだ』

『ふうん……………』

『その怪物に抵抗できずに食われてしまった人間は、周りにも大きな迷惑を掛けることがある。 だからこそ、みんな色々な方法でそれを抑え込もうとするんだ』

『でも、怖いものは怖いよ、……………』

夢に現れる人物や自分の姿は余り見えないが、自分の姿は今とは違う幼い姿で相手に遠慮がちに言ったものだった。

『それは当然だ。 よく怖いもの知らずなどと言うが、それは逃げているとしか思えんよ。 本当の恐怖と向き合って、それでも乗り越えていける人は勇気があると思うだろう？ お前はもう恐怖というものを知っている。 それを不幸なことだと言う者も居るだろうが、頑張って逆に考えられるようになってくれると嬉しい』

『……………逆？』

『ああ、そうだ。 お前は今、一生懸命に恐怖を乗り越えようとしてい



る。しかも一度は負けそうになっていた状態から、今ではもう少しで乗り越えられるところまで来ているんだぞ？ それだけのことが出来た自分を誇ってもいいくらいなんだ。お前はそう簡単には他の恐怖に負けることなんてないさ……』

目を瞑って思い出そうとすれば夢の内容がすぐに甦ってきた。

シンジにとっては夢に現れる彼の言葉そのものが暗示のように心を落ち着かせてくれる妙薬であり、恐怖という暴風に晒されているときに支えてくれる頼り甲斐のある大樹だったのかも知れない。心の水面が平らになっていくのを感じたシンジはゆっくりと目を開いていく。

「俺も、あの人のようになれなかねえ……」

ポツリと呟いたシンジはようやく緊張の抜けてきた体を椅子の背に寄り掛かせて深い溜息を吐いた。ちょうどそのとき、回線が発令所のマヤと繋がる。

『シンジ君、聞こえてるかしら？』

「え!?! あ、はい! 聞こえてますよ」

ともすればそれほど歳の離れていない姉とも思ってしまうマヤの童顔が急にサブスクリーンに現れたために、シンジは驚きながら返事をした。あと数秒、回線が繋がるのが早ければ独り言を聞かれていたかも知れないせいもあったが。そんな彼の様子をマヤはやや別な意味合いに受け取ったらしく、口元に片手を当ててクスツと笑った。

『どうしたの、慌てちゃって？ 出撃だって言われるのが怖かったかしら?』

「い、いえ、そんなことないですよ。それよりも、どうしたんですか?」

『あつ、ごめんなさい。ずっと待機してもらっていたのに悪いんだけど、出撃はだいたい先のことになりそうだから、とりあえず控え室に戻っていて欲しいの』

顔の前で手を合わせたマヤが申し訳なさそうに眉をハの字にして片目を瞑る。先日の事とお互いの歳が近いせいもあり、シンジと彼

女はそれなりに親しい話し方を出来るようになっていた。

「わかりました。でも急に攻撃が延びるなんてどうかしちゃったんですか？ もう使徒はすぐ近　くまで来てるんですよ？」

『ええ、そうなんだけど……うん、それは控え室で説明するわ。　ずっとエントリープラグに居て　も仕方がないし、待機の時間がどれくらいになるのかも未定だから』

「了解」

確かにこんな密閉空間に数時間に渡って放置されたらおかしくなってしまうだろうと常々思っ　ていたシンジは、控え室での待機というのは歓迎したいくらいだった。　マヤが回線を切るのと同時にプラグ外に出る。　そして彼は少し離れたところにある零号機の格納位置に、純白の妖精がひっそりと佇んでいるのを見た。

「お……」

美しい容貌を明らかかな苦惱で曇らせてエントリープラグの搭乗口を見つめているのはレイに他　ならない。

「どうしたんやろ、あんなに思い詰めた顔をして。　起動実験も成功したって言うのにな……」

憂いに満ちたその横顔はシンジの頬を上気させるのに充分なものであったが、彼女の表情にある種の迷いを見て取った彼は、いつもレイの助けになろうと足を踏み出した。　しかし、シンジが声を掛けようとする直前、レイは遠目にもわかるくらいに体を緊張させて零号機の内部に入り込む。

「え？　what?　what!　what!?　……レイさんはまだ　　攻撃する予定なんてないはずでしょ!？」

シンジの言うとおりである。　起動させることに成功したレイであったが、零号機を本当に彼女と連動させるための処置が終わっていない今、彼女を攻撃させる予定は無いとミサトから連絡を受けていたのだ。　無論、控え室での待機は命じられているのだろうが、それさえも連動実験のための待機であるとはつきり明言されていたのである。

「何かあったのかな……行ってみるか」

先ほどレイが浮かべていた真剣な表情と、何かに思い悩んでいるような仕草がシンジの少し不安を煽る。知らず足の運びも早くなっ  
ていき、ついには完全に駆け出していた。

「レイさーん。どうかしたの?」

零号機の開け放たれた搭乗口まで辿り着くと、慌てて内部に上半身  
を突っ込んでレイに呼びかけた。軽い言い方だがシンジなりに本  
気で心配していた。

「あ、あれ……?」

そこでシンジが見たのは、コックピット位置に着いてしっかりとコ  
ントロールレバーを握り締めたレイの姿であり、目を瞑っている彼  
女はシンジの声にも気付かないほど集中してそれを操作していた  
のである。もちろん外部電源も接続されておらず、神経接続も行っ  
ていないのだからエヴァは沈黙したままだ。

「レ、レイさん…何をしてるの?」  
「!?」

声を掛けていいものか少し悩んだ末にシンジが決断すると、初めて  
彼の存在に気付いたらしい。レイは驚愕と共に目を見開いた。滑  
らかな頬が羞恥でサツと赤く染まった。見ようによつてはイメー  
ジトレーニングとも受け取れたが、それはレイの真剣そのものの表情  
が感じさせた錯覚で、実際のところはエンジンがかかっていない車の  
ハンドルを一生懸命に動かそうとしている子供のようなだというのが  
正しい表現だろう。彼女が頬を染めたのもむしろ当然の反応だっ  
たのかも知れない。しかし、それは彼女という三人称が指すのが綾  
波レイでなければの話だ。

「あのさ、レイさんはパイロット控え室で待機になってると思つてた  
から、まだ格納庫に居るの。を見かけて、それでどうしたのかなって  
思っただけなんだ。べ、別に邪魔するつもりなんかじゃなくて。」

「……ごめんね?」

レイの見慣れない反応に少し動転したシンジはとにかく彼女を恥  
ずかしがらせてしまったことを弁解しようとするが、身の置き所がな  
いという様子のレイに結局は謝るしか出来なかった。考えてみれ

ばレイの今の反応こそ普通の少女がするようなものなのだが、元からそのような知識と経験に乏しいシンジにはとっさに対処のしようもなかったのである。

「ごめんよ……」

「……………いい……」

お互いの顔をまともに見ることも出来ずに俯いた2人の姿は、相手を意識し始めたばかりの若　すぎる恋人たちの風情を漂わせていた。もしもこの状況をミサトたち大人が見ていたなら、固まってしまっているシンジを齒痒く思いながらも微笑が浮かぶのを禁じ得なかったことだろう。　大人ならば誰にでも遠く過ぎ去ってしまった甘い季節の思い出というものがあるのだから。　今の2人はそれを思い出させる。

「えーっと……ねえ、控え室に一緒に行かない？　この前も言ったけど、機会があればたくさんレイさんと話したいんだ。　今ならちょうどいいと思うんだけど」

「……………」

「行くらう？」

まだ自分の方を向いてくれないレイにもう一度優しく声をかけたシンジは、紳士的にも見えて親が子供に差し伸べるように見える自然な動作で彼女に片手を差し出した。　俯いたままではあったがシンジの方にちらちらと視線だけは向けていたレイは、伏せがちにした睫毛を戸惑いと驚きによって見開く。

「……………行く」

レイの頬の赤みが増したように思えたのは、シンジの気のせいだっただろうか。　差し出されたシンジの手をおずおずと伸ばされた彼女の手が包み込み、華奢な指先がいつかのときのように慎重にそれを探り始めた。　感触を確かめるように、温もりを味わおうとするように、レイの指先はゆっくりとシンジの手の輪郭をなぞっていく。

（これ……………この手だわ……………この手が私に温もりをくれる……………）

宗教を信じている者が神聖な物に触れるときの恭しさでシンジの手を扱う。

(ナ、ナナ、ナチユイイイイイイ!!)

そんな可愛い物を目に入れるといつもどおりのシンジだったが、このままではいつまで経っても控え室に行けないと判断して、彼女の好きなようにさせたまま歩き始めた。レイはそれでも彼の手を決して離すまいとしている。ちょうどシンジがレイの手を引いて導いているようにも見える微笑ましい光景だった。

「なんか良いね」

レイの掌の温かくて柔らかい感触に頬を和ませながら、シンジはふと懐かしい感じを覚えて口を開いた。

「……え？」

「こうやって人と手を繋ぐのは。自分以外の体温って安心しない？俺は、本当に人間って面白い存在だと思う。自分だけだと孤独と感じて、他の人がいると気持ちが高まるよね？俺なんか臆病だし弱いし？レイさんと一緒にいると嬉しいもん。……はっ」

あどけない、と言ってもいいほどの赤い瞳に見つめられたシンジは、少し気分が高揚するのを、感じながら話し続けていたが、自分が何を言っているのを思い出し恥ずかしそうにしていた。

(……ぐあああああっ!! 何恥ずかしい事を言ってるんだ！俺は――！)

猛烈な後悔が襲いかかり、シンジは内心で羞恥心が込み上げ心底から自分を責める。

「あ、あの……ぐめんね……変な事言って」

「……」

恐る恐るレイを見るが、彼女には特にこれといった変化は感じられず、やや虚ろな目でシンジを見つめ返してくるだけだった。しかし、その状態は何か彼の怖れていたものに思えた。とにかくレイを正気に戻すのが先決だと考えたシンジは、必死に話しかけることでそれを成そうとするが、彼の言葉は途中で途切れさせられることになった。

「レイさんってば。だ、大丈夫？何処が悪いなら……」

「……ううん」

「えっ？」

相変わらず握った手だけは離さないレイは、少し感情を表に出しているのか言葉に力が入っていた。普段の彼女からは見られないほど雰囲気を出して。

「シンジ君は私や周りの人を助けてくれる。碓司令は私に優しくしてくれるけど温もりは無かったのに、だけどシンジ君は私に温もりをくれた。嬉しかった、私には何も持っていなかったのに温もりをくれて…」

ハキハキと話す今の彼女は、普段無口と言われているのだがシンジもここまでレイがハッキリと話す彼女は初めて見るため唖然していた。そんな唖然しているシンジを見て、不思議そうにレイは彼に尋ねる。

「…どうしたの？」

(はっ！)

レイの雰囲気は戻り、声をかけられたシンジは気がつき彼の中に嬉しさが混み上がる。彼女は変わり始めていると、シンジは実感していた。最初は途切れ途切れに近い会話だったが、一時的とは言え普通に感情を表に出して話したのだから。

「いや。なんでも無いよ…」

(よっしゃー!!!)

少しでもレイに感情の揺らぎを作ろうとしていたシンジは、ここにその片鱗が見え心の中で叫んでいた。この先も少しずつ変えて見せようと考えていると、通路のスピーカーから知らないオペレーターの機械的な声が響く。

『パイロット両名は至急第6会議室まで来られたし。繰り返す、パイロット両名は……』

放送を聞いた2人は一度顔を合わせ頷く。

「行こうか、レイさん？」

「ええ」

手を繋いだまま、目的地に足を向け歩き始めた。

☆☆☆☆

「目標を第3新東京市内の中心部まで誘い込んで、固定砲座と稼働砲座を総動員して十字砲火を 加える。 もちろんそれは罠で、初号機が二子山山頂から大出力のライフルで使徒のコアを狙撃するのが今回の作戦のメインになってるわ」

照明が落とされた第6会議室にミサトの声が響く。 意外に旧式な映写機から光が伸びて、壁に掛けられたシルクスクリン上に都市近郊の地図を 浮かび上がらせていた。

「もちろん第5使徒はA.Tフィールドを持っていてるけど、あの使徒には面白い習性があることに 気が付いたの。 ある範囲内に入った敵意に向かつて、使徒が危険だと感じる物に加粒子砲の一撃を加えるのよ。そして加粒子砲の再攻撃が可能になるまでに要するのが11秒間。 それ以外にも、水晶体での攻撃もあるけど個々には余り火力はないわ……。 でも、それでも中々の威力を持ったビームを持っている。 そして、あの使徒の水晶体は補佐に近い存在ね。 加粒子砲を打つには全部の水晶体を使い、A.Tフィールドを張るにも水晶体が動いているわ。 それを利用してやろうと言うのが今回の作戦……ヤシマ作戦ってわけ。 あの強力なフィールドを撃ち抜くためには、生半可な攻撃力では無理だけど、ちょうど戦自研にいい物があつたから借りることにしたわ」

ニンマリと笑ったミサトはとびきり意地悪く見えた。 同じ国連傘下の組織でありながら何かと特権の多いネルフである。 だが、殆どは前のシンジと国連軍との交渉がありネルフには負の感情は向けられないで済んでいた。

「ポジトロン・スナイパーライフル。 まさに今回の作戦には打つつけの玩具よ。 ここに日本中から掻き集めた電力を流し込んで一

点集中の狙撃。今回は初号機が砲手で、零号機が初号機に向けられる攻撃からの防御よ」

シンジは、ミサトの作戦に耳を傾けるが内容を聞いているとレイが盾役と聞くと良い顔はしなかった。そして、暗い会議室の中に何人かスタッフもいる中シンジは手を上げる。すると全員がシンジに視線が集められるが、シンジは微動だにしなかった。説明途中、手を上げたシンジを見てミサトは聞く。

「どうかした？ シンジ君。何かわからない事あったかしら？」

「二つ聞きたい事があって、使徒は挟み撃ちする形で威嚇攻撃しました？」

シンジの言葉に会議室にいるスタッフ達は疑問に思う。何故、そんな事を聞くのだと。ミサトは、シンジの言葉を聞き日向に問いかける。

「どう、日向君。その形でのデータはあるかしら？」

「え、ええ。同時に仕掛けた攻撃砲台は、水晶体は半分に分かれ同時に加粒子砲を撃たれ消滅してます…」

日向の言う結果を聞き、シンジは右手を顔の近くまで運び親指を額につけて考え込む。そんな姿を見てミサトはシンジに質問する。

「どうしたの、シンジ君？ 何かあったかしら」

シンジの中で、今回の使徒の攻撃方法について考えていた。

「日向さん、その時の加粒子砲って最大火力でした？ 自分は実際最初から見てないので推測なんですけど、一点集中型と複数型の火力違いませんか？ そして、A. T. フィールドも数が違いありませんでしたか？ 威嚇攻撃の威力によって」

日向はシンジの言葉で尽かさずデータを見る。そして、シンジの予想が当たる。

「そ、そうだね…。それぞれの威力は違いはある。A. T. フィールドの方も数が多く使われていれば、強い物が張られている…」

「…やっぱり」

「何か分かった事でもあるの、シンジ君？」



シンジは、ミサトと顔を合わせて真剣な表情で言う。

「すみません、ミサトさん……。その作戦、俺は反対です」

会議室にいるミサトとリツコ以外の人間は、驚きを隠せないでいた。それもその筈、作戦部長とも言われるミサトが考えた作戦を14歳の少年が反対したのだから。スタッフ達は、ミサトの考えた作戦が今回の使徒を倒すには絶対に必要だと思っていた。だが、作戦を否定されたミサトは反応なく彼に理由を聞く。

「何故、反対なの……。理由をお願い」

ミサトの言葉に頷き、席を立ち日向の近くまで歩きシンジは日向に指示どおりにシルクスクリーンの映像を動かしてくれとお願いする。そして、日向は頷くとシンジは理由を説明する。

「今回の使徒は、8面体の体を持ち自身の一部と思われる水晶体を6個の水晶体を操り攻撃にも防御にも使っています。先ほど自分が聞いた、この使徒の要である水晶体と本体の周りを把握する能力を聞いてから葛城一尉の考えた作戦を反対させてもらいました。」

会議室にいる人間は、今話してるのが本当に14の少年なのかと思わせるほど言ってる事が外見にあっていないのだから。その中、ミサトとリツコは静かにシンジの説明を聞いている。

「今回、使徒を倒す為に葛城一尉が用意してくれた兵器。赤木博士、この兵器は必ずしもエヴァが必要ですか？」

「そんな事は無いわ、弾道予測をMAGIに計算させれば固定砲台でも構わないわ」

「ありがとうございます。なので、ポジトロンスナイパーライフルは固定砲台で肝心のエヴァは……。使徒との近接戦闘をするのが最適だと」

シンジの言葉で、ざわつく会議室。あのような使徒相手にエヴァを近接戦闘をさせれば、一瞬でやられてしまうでは無いか。そんな考えを持った人間は大半。シンジの話は続く。

「皆さんは、自分が何を言っているのだと考えでしょうが今回の使徒の特徴でエヴァを同じ場所に設置するのは余り得策ではないと思います。先に葛城一尉が考えた作戦だと、使徒はフリーになってしま

い万が一狙われたら零号機が盾役にした所、完全に守れますか？守れない場合、初号機が無事でも精密機械であろうポジットロンがやられてしまえば自分達の負けです」

一息をつけてシンジは日向に指示を送りスクリーンの映像を半分使徒の映像と地図の映像を流してもらおう。

「なので、ポジットロンは固定砲台でエヴァは近接戦闘を行います。

この使徒は、攻撃も防御も水晶体の数で威力が変わるのは全員はお分かりですよ？　なので、初号機・碓シンジと零号機・綾波レイは使徒を挟み撃ちの形で戦闘を行います。あの使徒は近くにエヴァがいれば、遠くにあるポジットロンスナイパーライフルに気づいてもエヴァを無視する事は出来ません。そして、攻撃の際威力が強くなればラグがあり、変わりにラグを無くそうとすれば威力は落ちます。度々すみません、赤木博士。ポジットロンは最大何発撃てますか？

後、先程の作戦での盾役に何か持たせますよね？　それを零号機に持たせます」

「2発よ。　：1発目が外れた場合、2発目は冷却含めて17秒ね。

使おうとしていた盾、急造仕様だけど元はSSTO（スペースシャトル）の底部で超電磁コーティングされている機種だし、使徒の最大火力を15秒で個々での水晶体のビームなら数発は耐えるわ」

リツコの話聞いて頷くシンジ。その後、彼はミサトの方に向く。

「何かしら？」

「1発目を撃ち、もし倒せない場合はエヴァを使徒の近くに射出して使徒を翻弄。その間にも葛城一尉が自分と綾波レイの指示をお願いします。ポジットロンが撃てる様になれば自分達は、その射線状から回避しなくてはなりませんので。他の人は何故1発目からエヴァを出さないのか不思議でいるでしょう。すみません、これについては1発目で使徒を倒せば、自分達が出なくて済むかもしれないからです。2体の使徒を倒したと言えど使徒相手は怖いので…」

ミサトはシンジの言われた役目に頷いた。会議室にスタッフ達は理解する。シンジは勝率を上げるだけでは無く、やはり2体の使

徒を倒したが怖い為にこの作戦にしたのだと。誰も彼を臆病者とは言えない、大人は考えて子供を戦場に送り出すだけなのだから。今の話も、ただ否定するだけでは無く改善して自分とレイの安全を考えた作戦なのだ。こうしてシンジの上げた作戦は採用される。そして、作戦開始時間は0時となった。

☆☆☆☆

格納庫に向かう通路はチルドレン以外にはほとんど使用する者もおらず、そこを歩くシンジは自分の足音がやけに大きく響いているように思えた。そして彼の足音よりもやや間隔が短い足音がそれに続く。シンジは緊張のせいか少し早くなりがちな歩調を意識して緩めると、彼の後に着いてくる少女を振り返った。

「……レイさん、本当に大丈夫？」

すでに何度目かもわからない問いかけ。もちろん彼はレイがどのような反応をして、何と言って答えるのかも承知していたのだが、それでも問わずにはいられなかつたのである。

「……ええ、体には問題ないわ」

わずか100mほどの通路を歩く間にシンジの問いかけは数回近くにもなっていたが、そのたびに彼女は同じ答えを返している。素っ気ないが彼女は嫌な顔をするでもなく、どちらかと言えば穏やかさを内包した口調だった。レイは自分を見つめているシンジの目に視線を合わせると、これだけはいつも変わらない生真面目な表情の

まま何度か口を開け閉めする。しかし、それも数瞬のことで彼女の喉から愛らしい声が滑り出た。

「使徒はもう本部の直上に到達しているのね」

「あ……お、おう、そうみたいだね。ミサトさんたちが慌ててきたし……」

それはシンジがこの街にやってきて初めてあつた時の聞いたレイの声の中ではもつとも親密な感じを与えるものであったため、思わず彼女の顔をまじまじと見つめてしまったほど彼は戸惑ってしまった。

レイはいつも真つ直ぐに見つめてくる、と彼は思う。彼女の心と同様に澄み切った瞳を大きく見開いて、まるで世界の全てを焼き付けようとでもしているような視線を向けてくるのだ。自分の内面までも彼女の瞳にさらけ出される感覚に人々は戸惑い怯える。

(だからレイさんは孤立しちゃうんだな……)

その純粹さゆえにレイが誰にも受け入れてもらえないなど彼には耐えられなかった。今までの彼女であればそんなことを気に留めなかつただろうが、シンジとの出会いをきっかけにして彼女は明らかに変わり始めているのだから。その証拠につい最近までの彼女しか知らぬ者には信じられないことだが、レイはまだ自発的に始めた会話を打ち切っていない。

「特殊装甲板が全て破られる直前まで準備に時間がかかるらしいわ。

それまでは休むようにと指示が出ているから……」

「うん、そうみたいだね。今回の使徒は、要が水晶体の為かエネルギーで作ったグラインドブレードで掘って本部に攻めようとしてるね」

「少し眠るにしても時間が余るほどだね……」

もちろん彼女が話していることは、一緒に先程ミサトの指示を聞いていたシンジも知っている内容ばかりだった。しかし、レイがこれほどまでに饒舌になってきていること自体が貴重であり、しかも彼女なりの極めて遠回しな方法ではあつたが、或る好ましい申し出をしていることに気が付いたシンジは憂いがちだった表情をようやく綻ばせることが出来た。

「少し眠って……起きたら展望室に来てくれないかな？」

「……行くわ」

「うん、そこで待ってるから。あそこなら直通エレベーターで格納庫まで降りられるし、急な呼 び出しがあっても平気だと思うから。今日は満月だから、どうせならレイさんと一緒に見たいな」

「ええ……」

ごく自然な口調でシンジは誘い、レイも静かに頷いた。彼女はうまく言葉で表現することが出来なかったのだが、作戦開始までの時間をシンジと会話することで過ごしたいと暗に申し出たのである。

それを察したシンジが世慣れない少女のために助け船を出した――言葉にすれば、たったこれだけのことに過ぎない。しかし、それは貴重な一歩を踏み出したということでもあった。

「それじゃあ、そろそろ行こうか」

「……」

レイは自分に差し出されたシンジの手を暫し無言で見つめたあと、そつと手を伸ばして握り締 める。 感触を確かめるように数回握り直したレイは、ようやく自分の思いどおりに落ち着くことが出来たのか安堵の息を吐き出した。

「レイさんは手を繋ぐのって好き？」

「……気持ちいいから……」

「そうだよ。お互いがちゃんと握り合っていないと繋いでるって感じもしないし、片方が嫌だつ たらいつでも離せちゃうんだもんね」

そう言われるとレイはしつかりとシンジの手を握っている自分の手を見つめて少し顔を俯けた。

「あ……う……」

別に後ろめたいことなど何もないと言うのに、まるで叱られた子供のような仕草をするレイが 愛らしくも可笑しく、シンジは込み上げてくる笑いを抑えることが出来なかった。

「ぶっ……く……あははは！ いいんだよ、レイさん！ 自分のしたようにすればいいんだよ。レイさんはもつと自分勝手でもいいん

だからね……あはははっ!!」

シンジはこのときは本当に腹の底から笑っていた。もしも今、彼らが歩いている通路を偶然にも通りかかった者が居たとしたなら、このネルフ本部においては久しく聞かれていなかった明るい響きを耳にして驚きに目を見開いたことだろう。この基地には以前から子供が居たというのに、だがシンジが来てから変わり始めている。

「そんなに……笑わ……ないで……」

「あ……ごめんよ。でも、そんなに悲しそうな顔をしなくてもいいんだってば。俺はレイさんと一緒に居られて楽しいから笑ってるんだよ。こうやって話をしていて、楽しい気分になったからなんだ」

「私と一緒に居て……楽しい……?」

彼女は明らかな戸惑いを瞳に浮かべていた。シンジが突然笑い出したことで、自分の行動がおかしかったのかと思うといたたまれないほど悲しく、彼がそのことにすぐに気が付いて慰めてくれて、しかもこんな自分と一緒に居ることが楽しいと言われた。その言葉を聞いただけで胸が軽くなり、頬が熱くなるのを感じる。

(どうしてしまったの……シンジ君の表情が変わるだけで私も……)

シンジが笑っているのを見れると嬉しかった。悲しんでいたたり、苦しんでいたたりすると胸が痛んだ。彼が傍にいるといつの間にか話しかけてもらえることを期待している自分が存在するのを自覚したレイは、それからと言うもの彼の一挙一動が気になり、視界の片隅に捉えていないときには、ついその姿を探し求めるようにまでなっていたのである。

(今までは眺めるだけで満足だった。でも……今は私もエヴァを動かすことが出来る……シンジ君の傍にもっと近付けるような存在になれた……)

最近、シンジがよく話しかけてくれるようになったと彼女は思う。

しかし、レイはそれを自分もエヴァのパイロットであるという事実に結びつけているところがあり、未だシンジの決意や本当の想いには

心を飛ばすことは出来ていなかった。だからこそ、先日の起動実験が成功したことを喜んでいたし、これでシンジはもつと話しかけてくれるようになるはずだとも考えていたのだ。

(今回もそう……眠った後に会話をしようと言われた……)

哀しいほどに純粋な少女であった。その心の内を語ることの少ないレイであったが、もしも彼女が感じている寂しさを素直に口に出すことが出来ていたなら、それを聞いた誰もが彼女を守ってやりたいと思ったことだろう。しかし、現実にはレイを理解しようとした者などおらず、シンジが第3新東京市にやってくるその日まで、彼女の理解者は碓ゲンドウただ1人であるに過ぎなかった。

(嬉しい……これが私の心……シンジ君の傍に居たい……もつと近付きたい……)

レイの心が歓喜の声をあげている。そして、そんな彼女の心を知ってか知らずかシンジは少し恥ずかしそうに言った。

「もちろん楽しいよ。だってさ……俺はね……レイさんのことが好きなんだから……」

「あ……」

彼女がその言葉を正しいかたちで受け止め切れたのかはまだわからない。しかし1つだけ確実なことがあるとすれば、このあとレイが眠りにつくためには相当な時間を要するということだろう。ジオフロントから唯一地上にまで到達している施設。その展望室からシンジと眺める月を思い浮かべ、そしてたった今、彼が囁いた言葉を胸に抱き締めてベッドに向かうのだから……。



暗い通路を1つの人影が走り抜けていく。いかにも急いでいるという事がわかる乱れた呼吸だったが、その薄明かりにも体格の華奢な様子がわかる人影は決して止まろうとはしなかった。

時折、わずかながらに走る速度が弛むのは、通路の壁などに設置されている電光掲示板の時計を確認するときだけで、そこに表示された時刻を見るたびに再び速度を上げていく。表示された数字は『21:03』となっている。焦る思いを胸に抱え込みながら必死にエレベーターホールを目指すのは、身体のラインがくつきりと浮き出る薄いスーツを身に着けている少女である。もちろん肩からジャケットのようなものを引っかけてはいるが、一見すると裸の上にそれだけを着ているとも思えてしまうほど、その少女の肌とスーツの白は似通っていた。

「はあ、はあ、はあ……着いた……早く……行かなければいけない……」

同年代の少女たちと比べるとやや低い耳に快い声が、彼女の内心の焦りと共に静寂に包まれ た空間に反響する。よろよるとエレベーターに近付き、正三角形のボタンを掌で叩いた。

「……」

何ブロックか上で停止していたエレベーターが呼び出しに従って彼女の居る最下層まで降りてくるが、幾つかあるうちの1つが最上層で停止しているのを見た少女は超高速のエレベーターですらも遅すぎるように感じる。彼女はそこを目指しているのだ。

「シンジ君……」

祈るように胸の前で両手を組んだレイは、そつと睫毛を伏せて少年の名を呟いた。本来ならばもっと早く仮眠を終わらせて展望室に出ようとしていた彼女だったが、めくるめく幸福感と胸の鼓動を抑えるには、それ相応の時間を必要としてしまったのだ。待っていると、言ってくれたシンジが、一体いつからいつまで待っていてくれるのか



など、悲しいかなレイには想像もできなかつた。

「まだ居てくれる……居て欲しい……」

エレベーターが到着したことを告げる澄んだチャイムの音に目を開けたレイは、普段の彼女からでは考えられない慌て方で中に飛び込む。後はもうじつと待つだけだ。しかし、レイにしてみればまだ一生懸命にエレベーターホールを目指して走っていたときの方が気分が楽だと言えた。つらくても自分が急げば到着までの時間を短縮できた先ほどまでとは違い、今は何をやっても遅くなることはあるが早く着くことだけは有り得ないのである。だから彼女に出来ることは、エレベーターが一刻も早く自分を最上層まで運んでくれますようにと静かに祈ることだけだった。数秒後、レイは閉じていた瞳をゆつくりと開いた。

「……」

それと同時にドアが音もなく横にスライドし、まだ開かれたばかりの赤い瞳が月光に照らされ、た影を捉える。展望室に設置されたベンチの1つに座り、シンジはじつと空を眺めていた。

「シンジ君……」

シンジが見つめているのは天に浮かぶ孤高の姫君たる満月である。うが、その視線は同時に月光を受けて青く輝く第5使徒の姿をも捉えているように見えた。人類に——いや、それよりも先にネルフ本部の親しい人々に確実な死を運んでくる使徒であったが、月を背にしてビル群の中に浮かぶその光景は幻想的な美しさを醸し出しているせいだ。しかし、レイにはその遠い光景よりも、冴え冴えとした月光に照らされた少年に目を奪われた。その場にいるだけで彼女を優しい雰囲気で包み込んでしまう不思議な少女のような少年に、である。シンジは透明感のある青さに包まれながらゆつくりと立ち上がり、胸を高鳴らせた少女に微笑みと共に話しかける。

「……レイさん、来てくれたんだね」

「え、ええ……」

「良かった、作戦までに間に合ってくれて。こっちのベンチに来るといいよ。とっても綺麗に月が見えるからさ」

言いながら手を差し伸べてくるシンジを見つめたまま、レイは少し頼りない足取りで電灯の点 いていない展望室を彼に向かって横切っていく。シンジは相変わらずその様子を愛おしげに見守っており、自分の指先にレイの手が触れると、それを柔らかく握ってベンチへと誘った。

「ほら、ここに座って」

「あ……」

塵など無いというのに軽くベンチの上を手で払うと、少しぼんやりとして見えるレイの両肩に 手を置いて、少しだけ下に向かって力を込めて彼女を座らせる。別に抵抗するわけでもなく腰を下ろしたレイは、暫しの間まだ経ったままのシンジの顔を見上げていたが、やがて空いている自分の隣に視線を移して少し考え込んだ後に、先ほどシンジがしたように有りもしない塵を払った。そしてもう一度シンジをあの手真面目な表情で見上げて口を開く。

「……座って」

「あ、うん、ありがとう」

ちよつとした彼女の仕草にもシンジは優しい微笑で応える。それがレイの心を波打たせるのだ。

(不思議な気分……だけど、気持ちいい……)

少年の横顔に視線を走らせながらレイはそんなことを思う。シンジは彼女の隣に腰掛けたが別に何かを話しかけようとせず無言のまま月を見上げていた。話しかけてきてくれないことが少しだけ残念にも感じられたレイだが、彼女もまた同じように 空を見上げた。それが自然だと思っただからであるし、彼と同じ物を見てみたくなったのだろう。もちろん、そんな彼女の様子をシンジは肌で感じ取っていた。

「レイさんはよく空を見ているけど、夜の月とかも見たりするの？」

シンジは快い気分にも包まれながら話しかける。

「そうね……あるかもしれないわ」

「人と一緒に見るのは初めて？」

「ずっと前に……まだ今よりも小さかった頃に碇司令と見たわ。花火というものを見せてくれた後、だっと思った……」

「そっか、お父さんと見たんだ。楽しかった？」

「たぶん……」

レイはどこか遠くを見つめる視線になって呟く。自分の心に沸き上がってきている感情を完全には理解し切れていないのだろうか、彼女のその表情を見れば今の気分など容易に想像することができる。

「……今度さ、花火見に行こうよ」

「え……」

「今回の作戦が終わって、他にも色んなことが片づいたら見に行こう？　綺麗な浴衣とか着たら　きっと似合うと思うよ」

「似合う？　浴衣……？」

レイは彼の言っている言葉の意味がわからないのか、何とも頼りないイントネーションで繰り返した。知識としてそのような衣服があることはもちろん知っているのだろうが、それを自分が身に着けて何かをするなどということは彼女の意識には無かったのだろう。

「そう、浴衣だよ。濃い藍色のなんていいと思うな。月明かりの下で見たら、きつと紫陽花みた　いに綺麗だと思うんだけど」

「……」

「ど、どうしたの？　い、嫌な喩えだった!？」

シンジは自分でも少し気障な言い方をしてしまったとは思っていたが、レイが突然口を噤んで、しかもわずかに眉根を寄せたことに驚いた。自分の知らない彼女の心の傷に触れてしまったのかと焦る。

「……別に……嫌じゃない」

「そ、そうなんだ、良かったあ……」

「……けど……」

「え？　な、なに？」

ぼそぼそと聞き取れないほど小さな声でレイは早口に理由を言う

が、当然のことながらシンジは何を言ったのか判別できずに聞き返す。心なしかレイの頬は赤らんだように見えたが、それはシンジの言葉を嬉しく思ったためではなく、もつと別な理由によつてそうなっているだけだった。

「……あんまり難しい比喻を使わないで……私、そんな風に物を見たことがあまりないから、よ　くわからない……」

消え入るような声でそれだけを言つてレイは俯いた。シンジの視線から身を隠してしまいたいと言っても言いたいように、彼女は自分のことを深く恥じ入つていたのである。

(レイさん……)

その姿を見たシンジの表情がこの日初めて曇る。純粹すぎるということがどれだけ美しく哀しいものなのかということを目の当たりにさせられた彼の目にはうつすらと涙さえ浮かんでいた。レイのためになら何でもしてやりたいという想いが浮かべさせた涙だった。しかし、それすらも少女はそうと受け取ることが出来ない。

「あ……嫌……悲しい顔をしないで……私が悪いのね？　何でもするから……話しかけるのを止　めないで……」

哀れなほどに狼狽したレイは、ようやくその存在を感じ取ることが出来るようになった細く途　切れやすい絆の糸の端を離すまいと、自分に提供できるたった一つのものを差しだそうとする。何でもあげるから、とは彼女は決して言わない。自分が何も持っていないと思ひこんでいるからだ。レイの持ち物の中で本当に彼女が自分だけの物だと言ひ切れるのは、その純粹すぎる心を内包　する美しい身体以外には思ひ浮かばなかった。だからレイはそれを差し出し、奉仕することを申し出たのだろう。彼女が大切にしてある壊れた眼鏡は碇ゲンドウのものだ。そしてもう一つ、レイ自身が開け方を忘れてしまった箱根細工の綺麗な小箱は、間違いなく彼女だけの物だったが、それを失くしてしまうことだけは彼女の心が許そうとしなかったのである。……哀しい少女だった。

「レイさんー」

「うあ……」

シンジは隣に座る少女を抱き寄せた。もちろんレイはその力のベクトルに逆らおうとなどはせず、訳も分からないままに彼の望むままにしようとしても言うのか、自分からシンジの腕の中に身を擦り寄せることさえしてみせる。意識してはいなかったが、そこには少女の芳純な媚態があった。

「どうしてそう言うこと言うのさ……」

「あ……」

シンジの声が涙で揺れていることにレイの心がますます混乱する。

「俺は怒ってなんていないし、レイさんのことはどんなときだって好きだよ?」

「好……好き……?」

「そうだよ。それにね、女の子はそんな簡単に『何でもする』なんて言葉は言っちゃいけないんだ。俺はいつだってレイさんの傍に居たいって思ってるんだから……話をしたいって思ってるんだからね」

「……」

「それにその言葉は俺の台詞なんだしき。『レイさんの傍に居させてくれるなら何でもする』って。『何も惜しい物なんてない』ってね」

レイの顔が見る間に赤く染まっていく。耳元で囁かれる言葉の中に自分の想いと同様の何かを感じ取ったせいだろう。このとき彼女はシンジがしているように自分も彼の背中に腕を廻して良いものかと迷っていたが、やがて意を決したように、脇に垂らしていた両手を上げてシンジの背中に添えた。

「少しずつ色んなことを覚えていけばいいんだよ。そんなに難しいことじゃないんだ。これからは何かを見たときに少しでもだけ時間を使ってあげよう? そうすれば気付かなかった色々なものが見えてくるよ、きつと」

レイの行動を嬉しく思いながらも彼女を驚かせないように平静な口調のまま言葉を続ける。案の定、拒まれなかったことに安堵したレイはシンジの背に廻した両手の力を少しだけ強めてきた。

「……やってみる……シンジ君がそう言うなら……やってみる……」

「うん、レイさんはいつも何も持っていないみたいにしてるけど、本当は何だって持つてるはずなんだ。見守ってくれる人だって、大切な物だって、全部持つてるんだからね」

「ええ……そうね。 そうかもしれないわ……きつと、そう……」

その言葉を聞いたとき、レイの両手が狂おしい力でシンジを抱きしめた。シンジが言う全てはいま自分の手の中に存在しているのだと主張しているかのようだった。

「……ねえ、レイさん？」

もはや絶対に離さないと言わなければかりに彼にしがみついている少女にシンジは優しく囁きかけながら、しかし彼女の肩に手を掛けて身を離させた。レイの表情が見る者の胸を引き裂く悲痛なものに変わる。そこにあるのは失うべからざるものと分かたれた恐怖と、その存在から拒絶されることへの怯えだった。

「お願いがあるんだけど……聞いてくれる？」

1つになろうとするような抱擁は解かれたがシンジは変わらない優しさでレイを見つめている。それを見て明らかにレイの全身から緊張が抜け落ちた。

「……願う？」

「そう、俺からのお願いだよ。言ってもいいかな？」

「……ええ」

先ほどとは違う緊張にレイの体が強張る。いつもどおりの生真面目な表情で彼の言葉を待つレイにシンジは優しく微笑みかけた。

「笑って」

ただ一言に込められた幾千もの想いがレイの心に澄んだ鐘の音を鳴り響かせる。

「これが俺からのお願いだ。今すぐにじゃないんだ。嬉しかったり、楽しかったりしたときに 笑って欲しいんだ」

「あ……」

少女の中で反響するのは、ずっと眠り続けていた彼女の心を目覚めさせる黎明の響きに他ならない。レイはまだシンジの体に添えたままだった両手をゆつくりと上に滑らせていくと、その柔らかい掌で彼の両頬を包み込む。

「……レイさん？」

「……」

思わず問いかけたシンジにも応えることなく、彼女の小造りで美しい顔がわずかに傾けられて シンジに近付いた。

「レイさ……」

「……ん……」

それは極めて自然な成り行きによって始められた口付けに見えた。月明かりの中で2つの唇が合わせられ、時間というものが意味を無くした世界に彼らを誘っていった。展望室に満ちた青く神秘的な光は、月光を透過させた使徒によるものであったとしても、もはやそんなことは彼らには関係ない。お互いの温もりを感じ取ることにだけ全てを捧げ尽くしていたのだから。しかし、無限に続くかのような時間にも終わりは来る。

「……」

「……」

まださらに深く温もりを確かめあう術を知らない彼女には、お互いの心に楔のように想いを残して離れるしかなかったのである。しかし、無言で瞳を見つめ合う2人のうち未だ幼すぎる心を成長した肉体に留めおく少女に変化が訪れ、蕾が咲きこぼれるように桜色の唇が和らいだ。シンジの目が驚きに見開かれ、次いで愛おしさに細められる。

「うん……そうだよ、レイさん。そうやって笑っている方がずっといいよ。すごく綺麗で、すごく優しそうに笑うんだね……。後、男の俺が言うことじゃあないけど。……今のがファーストキスになるね」

そう言った彼は、性別が分からなくさせるほど男性と女性が混じった魅力を出していた。先ほどシンジが驚いたのはレイが微笑んだこ

とに對してではない。汚れを知らない微笑というものを初めて目の当たりにし、そのあまりの美しさに驚いたに過ぎなかつたのである。



重苦しい沈黙が発令所内を包まれていた。スクリーンに映し出された青く輝く使徒の脅威はすでに第17特殊装甲にまで到達し、本部を守る隔壁は残りわずから5枚に過ぎない。急ピッチで進められている作戦準備の経過報告を聞きながら、ミサトは焦る心を抑えて親指の爪を噛んでいた。

「……変わらないわね、その癖」

「何よ、リツコ」

「その苛々しているときに親指の爪を噛る癖よ。何回も加持君に窘められておいて、まだ治つてないなんて相当な頑固さね」

言いながらリツコは肩を竦めて見せた。

「あのねえ。あの馬鹿の話はしないでくれる？ あいつとはもう別れてから何年も経つ。今更どこで何をしているのかわかんない男の思い出に浸りたくもないわ。それに今はシンちゃんがいるもの！」

「あら。思い出したくないのは未練の証拠よ？ ドイツ支部にいるってことくらい貴女だって当然知っていることだと思っけど」

「……性格悪う」



過去知りのうえに性格まで知り尽くされている友人にミサトは思いつきり渋面を作って見せた。

「私の緊張を解そうってのはありがたいけど、もう少し話題を選んでくれると助かるんですけど　ね、赤木博士？　これじゃ晒し者じゃないのよ」

周囲を見回したミサトは大きく深い溜息を吐く。特にリツコの愛弟子であるマヤと、どこか複雑な表情を上司に向けている日向の視線を痛いほど感じたせいであろう。

「緊張が解れて良かったわね」

「はいはい……ったく……」

感謝半分、憎たらしさは上限オーバーという感じの視線をリツコに向けた後、ミサトは再び真　顔に戻ってスクリーンの1つを見つめた。片隅に表示された時刻は『22:55』となっている。

「……そろそろ時間のようね。マヤちゃん、パイロット両名の呼び出しをよろしく」

少しずれかけていたベレー帽の位置を直したミサトは、一瞬だけ親指を見つめて顔を顰めると、次の瞬間からは葛城一尉として行動を始めた。

## 彼の敗北… 下

頬を薔薇色に染めたレイは、同様に顔を赤らめているシンジの腕に縫り付いたまま静かに目を瞑っている。数十階層ある地上と本部施設をわずか数十秒で結んでしまう高速エレベーターの中、大切に思っている少女と寄り添っているのだから、作戦開始前の一時の過ごし方としてはこれ以上望めないほどだとシンジは思う。ただ、上着を羽織っているとは言え薄いプラグスーツ姿での密着は些か困るとは考えていたが。

(レイさん……もう少しだけ離れて欲しいんだけど……)

手を繋ぐのも腕を組むのも全く問題なく嬉しいのだが、今のよう抱え込まれてしまつては、まだ幼いながらも確かな存在を主張している彼女の乳房の感触が肘のあたりに感じられてしまうのだ。そんなものは意識するなど言つても無理な話だろう。年頃の少年とは成熟したシンジとは言え嬉しさと気恥ずかしさ、そして少しだけ困ってしまう肉体的な変化を起こさせるのに充分だった。

(せっかく気持ちよさそうにしているのに離してくれなんて言えるわけないしな……それに……)

理性では離れて欲しいと思つていても、本当のところは離れて欲しくない。シンジとしても複雑なのである。

「ね、ねえ、レイさん?」

「……」

意を決して話しかけるがレイは目を開けようともせずシンジの腕からの温もりにだけ集中しきっている。

「お、おーい……」

もう一度、挑戦してみた。今度は彼女の気を引くことが出来たらしく、レイは伏せていた睫毛をわずかに持ち上げて、うつすらとだが瞳を見せる。

「……なにっ?」

擦り寄せていた頬を離してレイは顔を上げた。その赤い瞳は展望室での会話の前よりもどこか深みを増したように見えて、シンジはその中に吸い込まれてしまうような感覚を覚える。見つめられると喉まで出かかっていた言葉が自分の中で雲散霧消していつてしまふのをどうすることも出来なくなった。

「お、おう……い、いや……何でもないんだ……」  
「……う？　そう……」

結局、何も言えなくなってしまったシンジの顔を暫し見つめた後、レイは再び目を瞑って心地よさそうな表情でかすかに喉を鳴らした。あどけない表情がシンジの口元を自然に綻ばせる。

(ナ、ナチュイ……。……子猫みたいだな)

一瞬シンジは彼女が魅力的な肢体を持つ同年代の少女だということとを忘れて、その柔らかかそうな髪を撫でてやりたい衝動に駆られた。もちろん実際にそうしてやればレイは喜ぶだろうと思ったし、彼はあと少しというところまで無意識のうちに手を伸ばしていた。しかし、残念ながらその手は寸前のところで止まる。無情なエレベーターが澄んだ鐘の音を響かせて最下層の格納庫フロアに到着したことを告げたのである。

「……なにっ？」

「あ……」

ドアが開くのとはほぼ同時に目を開けたレイは、ちょうど彼女の頭のあたりに翳されたシンジの手を見て不思議そうに小首を傾げた。

その仕草の愛らしさと、自分の間抜けさにシンジの顔が真っ赤に染まっっていく。

「お、おお……い、いや……何でもないんだ……」  
「……う？　そう……」

先ほどとまったく同じ台詞を繰り返す羽目になったシンジは、やはり同様の受け答えをしてくるレイに引きつった笑いを浮かべて見せた。そんな笑顔であってもレイは嬉しくて堪らないのか、エヴァが駐機されている施設まで向かう間中、シンジはぶら下がるように縋り付いている彼女のせいでひどく歩きにくい思いをする羽目になって

しまった。

(まあ、いいか……レイさんが喜んでくれてるんだから……)

恐らくこのままの状態で格納庫まで行かなければいけないだろうと考えると少しばかり憂鬱な気分にもなるが、他人の目にはほとんど変化が感じられないとは言え、彼だけには輝いて見えるレイの表情がそんな気分も吹き払ってくれる。そう考えれば引きつっていた笑顔も自然な柔らかさを取り戻し、足取りや口調も弾んだものになってくるというものだ。

「そうだ！ レイさん、花火はいつ頃がいい？」

「……使徒が来なければ……いつでもいい……」

このときすでにレイは歩くに際して目を開けてすらもいなかった。シンジが進もうとしている方向に合わせて足を前に踏み出しているだけで、完全に彼の目を自分の視界代わりに使っている。

(今は俺がレイさんの目だけど、少しずつ自分の目で色んなものを見るようになっていくんだよな……)

これから戦いに赴くのが信じられないくらいに穏やかな気分だった。彼の願いはこの世界のあらゆるものを驚きに目を見開きながら見つめ、それをきっかけにして自分の心の中に新たな発見をしていくであろうレイの後ろから、彼女の視点でそれらを眺めて、そつと助言をしていくことだった。

(レイさんが見ていくものをいつか一緒に見て行きたい……。だけど今だけは、レイさんが転んだりしないように、俺がしっかりしていないといけないんだ……)

シンジの表情が重大な責任を任せられた者の緊張に引き締まる。まだ盲目のまま歩き続けている少女は、それでも新たな一步を踏み出したことに喜び、美しい容貌を輝かせているように彼には思えた。

すでに起動が終了した2体のエヴァンゲリオンがアンビリカルブリッジによって地表へと続く射出口に移動していく。カタパルトは第3新東京市各所に設置されたゲートへエヴァを数秒で到達させることが出来る。それはすなわち、2人を死と隣り合わせの戦場で一瞬で運ぶと言うことに他ならず、それを見るたびにシンジは冷たい恐怖が胸の奥から迫り上がってくるのを感じるのだ。もしもレイの身に何かあったらと思うと今でも彼女の出撃に反対したいくらいなのである。しかし、そんなシンジの思いを知らながらも、通信機から流れてくるミサトの声は15分後の作戦開始を伝達してきた。

『いい、2人とも？ 最後の確認をしておくわよ？ 作戦開始は24時ちょうど。あと15分後に迫ってるわ。これからもう一度だけ作戦の流れを説明するので良く聞いて頂戴』

「はい」

「……はい」

ミサトの声に2人が順番に返事をしたが、シンジは思いがけないことに気が付いて疑問の声をあげる。

「あれ……？」

『どうしたの、シンジ君!? システムに何か異常でも出たの!？』

「あ……いえ、そういうのじゃないんですよ。すみません、続けてください」

『もう、びっくりさせないでよね。この段階に来て初号機が故障じゃ私たちは一巻の終わりなんだから。それじゃ続けるわよ?』

「はい、お願いします」

シンジはそう答えながらもまだ内心では膨れ上がった疑問を抑え込みきってはいなかった。同様に通信回線を通じた会話だということに、ミサトの声はごく普通の距離を感じさせたのに対して、レイの声だけはそれこそすぐ隣に居るかのような鮮明さを保っていたとい

うのがその理由である。その思いは説明の続きを始めたミサトの  
声が再び耳に入ってきてさらに深まったが、そのことばかりを考えて  
いるわけにもいかず、シンジはいったん説明の声以外のものを全て締  
め出す。

『本日24時から各砲座で一斉射撃を開始。使徒がそれらの攻撃に対  
応するしないに関わらず、二子山山頂で自走式陽電子砲にエネル  
ギーを充填して使徒のコアを狙撃。ここからがエヴァの出番になる  
かも知れないところよ』

ミサトはここで少し息を継いだ。

『陽電子砲が命中しなかった場合には、通常のゲートではなく射出式  
カタパルトを利用して出撃することになるからそのつもりでね。  
別々のゲートから出て二方向から敵のATフィールドを中和したい  
所なんだけど零号機はまだ張れないのでそのまま牽制、可能ならコア  
を破壊すること。ただし、その間にも通常弾による砲火は続いている  
し、使徒の第2射さえ回避すれば陽電子砲で再度攻撃できるわ。』

くれぐれも無理は禁物よ。　いいわね、2人とも?』

ようやく言うべきことを全て言い終わったらしいミサトが確認を  
求めると、2人は完璧に一致したタイミングで頷いた。それまでシ  
ンジの状態をモニターしているスクリーンに目を走らせていたリッ  
コが、その2人の様子に納得したように微笑を浮かべる。

『どうやら作戦の勝算を訂正する必要があるそうよ、ミサト?　五分  
五分だったのをこっちが6くらいには設定し直せそうね。パイ  
ロットがお互いをよく知っているのは大事なことだわ。　もちろん  
付き合っていくうえでさらには大事なことでしょうけど』

『何よ、それ?』

『あら、珍しいわね。2人のセルフ心理グラフの波を見ればすぐにわ  
かるはずよ。　元からやや似通っていたのは確かだけど、今は本当に  
瓜二つになってるでしょう?』

『……へえ』

通信回線から聞こえてくるミサトとリッコの会話に顔を赤らめて  
いるのはシンジだ。　すでに目前に使徒が迫り、しかもそれを迎撃す

る作戦が開始されるまであとわずかしか時間が無いというのに、彼女たちの凶太さには呆れるよりも凄いと思ってしまうほどである。

「勘弁してくださいよ、もう……」

うんざりしたような声で呟いたが、実のところはそれほど気分を害しているわけでもない。自分とレイの精神の波長や向きが似ているというのは、さすがに緊張していたシンジの頬を緩ませるのに充分すぎることだったからだ。サブスクリーンに目を移せば何やら頬を赤らめているレイの姿が見られる。彼女がいま何を思っているのかまで全てはわからなくとも、シンジは常に彼女のことを考えているのだから、それと似た波長を発しているというレイの心は見当がついた。

（そうか……もしかして俺とレイさんの心の波長が近かったから、さっきの通信の時、あんなにすぐ傍に居るように感じられたのかも知れないな）

ふと思いついただけのことであつたが、それが意外に的を射ているような気がして、シンジは暫し物思いに耽る。自分たちが乗っているエヴァンゲリオンというものが何なのかなどわかるはずもなかったが、神経と言うよりも精神を接続して動かすと言う印象を以前から強く受けていた。そしてこれは今日初めて認識したことであつたが、エヴァに乗っていると不思議な視界を得ることが出来るのだ。もちろん現実には目が良くなると言うのではなく、もっと違った見方が出来るようになるということだが。

（どうしてだろう……エヴァに乗っていると人との距離がよくわかるんだ？ 同じ回線を使っているも鮮明な声と、そうじゃない声の2種類がある。お父さんやミサトさんたちの声は近いけど、青葉さんたちの声は少し聞き取りづらい……）

まさに不思議という言葉が相応しい感覚だったのである。シンジはあと少しで何か大切なことを掴み取れそうなものかのような気分を味わいながら、さらに心を奥深いところまで沈ませていこうとした。しかし、自分の内面に旅立つには今の状況はいささか似つかわしく

ない。

『……ん。……ジ君！……どうしたの！』

「え……あつ、はい!!」

先ほどから何度も呼んでいたのだろう、レイが不安そうに彼を見つめているサブスクリーンとの画面でミサトが心配そうな表情で問いかけてきた。

『いったい今日はどうしちゃったの?』

「あ……いえ……何でもありません。ただ少しエヴァンゲリオンのもので気になることがあったので……。大丈夫です、心配はいりませんよ」

『……わかったわ。信じる。でも、今回のヤツは手強いから気を付けて。あなたたちの役割を勘違いしないように。あなた達が牽制して敵の水晶体をバラバラにしてATフィールドを薄くして通常弾の砲火に直接さらすのがエヴァの分担なんだから。それだけ注意して、後は気を楽にして出撃しなくていいように祈って頂戴ね』

「わかってます。無理はしない、ですよね?」

シンジが落ち着いた表情で頷くのを見てミサトもようやく安心したのか頷き返して見せた。

『そういうことよ。待機はどっちにしてもすぐ終わるから、出来たらレイをリラックスさせてやってね。初陣だし、女の子なんだから。ちよつと数値に緊張や気負いが見えるの。私たちよりシンジ君の方が適任だわ。それじゃよろしく』

「了解」

スクリーンからミサトの顔が消えると、LCL溶液に満たされたエントリープラグ内は奇妙に静かになってしまったように思える。空気の振動が存在するはずもないのだから当然だが、シンジはこの場所は意外に考え事に適しているのではないかとシンククロテストなどにも考えたことがあった。

(不思議だな……何でこんなに落ち着けるんだろ……)

彼は今年の6月6日で14歳になったばかりだ。自分が他人よりも精神的に強いなどと思ったことはなかったし、実は彼の幼少期に



自分の殻に閉じこもってしまったという経歴すら持っているのだ。

(だけど……そんな俺がもう2回も戦場に出て、どうにかこうにかつて感じだけど勝って、今はレイさんの緊張を解してあげることまで頼まれて……)

自分はそんなに強くないんだと叫びだしたかった。しかし、同時に強くならなければいけないと誓ったことも思い出す。少しずつ心を開いてくれるようになってきたレイや皆と一緒に生きていくためには、どんなに苦しくともそうするしかないのかも知れない。

相反する想いがジレンマを引き起こし、やがては自分が引き裂かれてしまうのではないだろうかという恐怖にシンジは背筋に走る悪寒を感じた。震え出しそうになる自分の体を抑え込むために掌に爪が食い込むほど強く拳を握ったり、歯を食いしばったりする者もいるが、今の状況においてシンジはそんなことすらも自分に禁じている。

自分の部屋で独りきりのときならばそうしたかもしれない。父である碓ゲンドウや同居人である葛城ミサト、事情を知っている赤木リツコの元でなら、もう少し自由に感情を表現することが出来ただろう。しかし、今だけは駄目なのだ。奇しくも彼はレイと同じように深く吸い込んだ息をゆっくりと吐き出して心を落ち着けようとしてみたが、当然のことながらLCL溶液の中に在っては吐息とともに悩みをも排することは叶わない。

(くそつたれ……)

何ともやるせない気分には彼はコックピットシートに背を預けて目を瞑った。それでもしなければ言葉にも出すことが出来ない想いで自分自身が押し潰されてしまいそうな気がしたのだ。

「碓君、どうしたの？ 苦しいの？ 胸が痛いわ……」

「え……あつー！」

シンジは突然すぐ耳元で聞こえてきたレイの声に驚いて目を開いた。零号機と繋がっている映像に慌てて目を向けると、そこには不安に満ちた表情のレイの姿が映っている。

「悲しそうな顔……苦しそうな顔……」

彼女はぽつりぽつりと呟いた。彼女の瞳には確かに彼を気遣う色が見られたが、まだ余裕のないレイはどうすればいいのかわからずに自分自身の不安をも募らせているように見える。

「……レイさん、大丈夫だよ。別に何ともないんだ。ちよつと疲れてるだけだよ」

「そう……なの？」

「おう」

即答して見せたシンジだったが、それは彼女を安心させるための優しい嘘と言うよりは、彼自身がそうだと信じたかったためかも知れない。それにレイが不安そうな表情をしているよりも、先刻のように笑顔を見せてくれる方がシンジも勇気を持つことが出来るのだ。

暫しシンジの目をあの全てを見透かしてしまうような瞳で見つめていたレイは、やがて少しは安心できたという感じで寄せていた眉根を緩めた。

「……そう……ならいい。でも、碓君が私と同じことをしたから……吐く息と一緒に外に出そうとしたから……だから……」

レイは適当な言葉を探そうとして口ごもり、結局見つからなかったのか下を向いてしまった。その様子にシンジの目も和らぐ。まさかこんな彼女を見られるとは思ってもみなかったのである。

「……心配、してくれたの？」

「あ……」

「レイさんは優しいから俺のことを心配してくれたんだね」

「……そう……だと思う……」

レイが素直な感謝の目をシンジに向ける。恐らくは自分が上手く表現できなかった感情をあつと言う間に適切な言葉で補ってくれたことへのものだろうが、シンジは何ともくすぐったい気分させられた。嬉しそうなレイの顔を見ていると沈んでいた心がすつと軽くなるのを感じるのだ。

「ありがとう、レイさん」

「え……」

「ありがとうって言ったんだよ。心配してくれて嬉しかった。もう

平気になったし、それはレイさんのおかげなんだ。そういうときはちゃんとお礼を言うものなんだよ?」

「お礼……私に……」

レイは戸惑いを覚えながらも胸に広がっていく温かい感覚に目を細める。彼女が覚えている限りにおいては、このような形で面と向かって礼を言われたことなど無かったのだ。もちろん学校やネルフ本部などで他人の手伝いをしたときなどには言われるときもあったが、今回ほど彼女の心を揺さぶる口調と表情で感謝されたことはなく、レイはいつまでも心に響き続 けるシンジの声を大切そうに胸の奥にしまい込む。レイは心のどこかに置き忘れてしまった大切な何か澄んだ音を立てて彼女を呼んだような気がしていた。誰が付けてくれたのかわからない銀の鈴がそれには巻き付けられており、碇シンジという少年の存在にのみ反応して可愛らしい音を鳴らすことがある。ちょうど今がそうだったのだろうか。

「シンジ君……私も……」

『2人とも、邪魔してごめんなさい! 第1射が外れたわ! 出撃よ!!』

「あ……」

「ちつ、了解! ……レイさん、ごめん。後でゆっくり話そうね」

通信機から聞こえてきたミサトの声が切迫したものであったことから状況が芳しくないというのを読み取ったシンジは、今にも言葉を発しようとしていた少女に優しく慰めの言葉をかける。

「本当にごめんな。この戦いが終わったら一緒にいっぱい話をできるよ」

「……ええ」

心が命じるままにレイは言葉を紡ごうとしていた。シンジが話しかけてくれると言いたいようがないほど嬉しく、彼の温もりを感じていると心も体も暖かくなる。それらに対して言うべき言葉をシンジが教えてくれたのだ。

（『ありがとう』……感謝の言葉。 私がシンジ君に言うべき言葉……

言えなかった……)

レイは教えられているとおりの対ショック姿勢を無意識のうちにとりながら、悲しそうに下唇を噛み締めた。しかし、それでも彼女は自分がシンジの立つ戦場に出られるようになったこと、この戦いさえ終われば彼ともつと話が出来ると言うことを支えにして、今だけは自分の気持ちを抑制することを選ぶ。

(必ず伝えなくてはいけないのは言葉ではない。伝えなければいけないのは……。そして……。シンジ君は私が守る)

レイの思考はここで途切れる。凄まじいGがレイの全身を襲ったからであった。エヴァが無慈悲な事件の待つ戦場へと射出されたのだ。彼女の大切な想いをシンジに伝えられるまでに、かなりの時間を必要とするなどは、このときのレイには想像することも出来なかった。

☆☆☆☆

「時刻午前零時。ヤシマ作戦スタートします!」

発令所中央に佇むミサトが宣言した瞬間、室内に一気に緊張の糸が漲る。源平合戦において弓矢の名手たる那須与一が、源氏方を挑発するように小舟に立てた小さな扇の的を鏑矢で見事に射抜いたという故事に習った名がこの作戦には与えられた。与一の弓の腕前は神業という言葉が相応しいものだったと伝えられている。そして今この時代に、大地に突き立てられた使徒という的に向かって現代の那須与一たらんとするのはMAGIということになる。風速、気象条件、地球の自転速度など全ての条件を計算して難業に挑むのだ。

「南無八幡大菩薩。願わくば、この矢を的に当て給うことを……。か。まさに祈って当たるくらいならって気持ち、わかるわ」

「弱気ね、ミサト」

「そりやそうよ。　当たらなければ第2射までの時間を稼ぐのは子供達なんだから」

彼女は顔を顰めてエントリープラグ内を映すモニターに目を向けた。そこではシンジとレイが何やら会話をしているのか、お互いにわずかな身振りを混しえながら　口を動かしていた。映像のみで声がカットされているのはリツコがマヤに命じて相手側からの音声を切っておくようにさせた結果である。　ミサトの視線を追ったりツコは深い溜息を吐いた。

「……ごめんなさい、失言だったわ」

「いいのよ。　要は当てりやいいの。　MAGIに任せておけば弾道の確定だけは完璧のはずよね」

「ええ。　私たちに出来るのはそれこそ祈るくらいだわ」

言いながら視線を二子山山頂の映像に移したリツコは、急造りのシステムがまともに稼動してくれることをまずは祈っていた。

「第1次接続開始します。　第1から第803まで送電開始。　電圧上昇、圧力限界へ到達しました」

淡々と報告を続けるマヤにしても祈りたい気分ではなかった。サブスクリーンに映っている少女は、恐らくはシンジとの会話の時にしか見せないのだろうが、初々しい恥じらいとシンジへの信頼を全身で表現していたのだ。

（こんな子だったなんて……私にはわからなかった……）

あの少女のことを綺麗だけど冷たそうな感じがすると思っていたマヤは、シンジによって生命　を吹き込まれたあとのレイを見て激しく自分を責めていたのだ。　一瞬、報告が滞ってしまったのもそんな自責の念がまた沸き上がってきたためだった。

「マヤ、今は集中して。　レイは怒ってなんていないわ。　不器用だけど優しい子よ」

「え……あ、すみません！　全冷却システム、出力最大！」

リツコが特に声を荒らげるでもなく言うと、彼女は真っ赤になって報告を再開した。

「大丈夫よ、マヤちゃん。 どうせ私を含めてレイに謝らないといけない人間ばかりなんだから。 まあ、例外と言えどももちろんシンジ君。 それに碇司令……ああ、そう言えばリツコも最初からレイには優しかったじゃない」

慰めの言葉をマヤにかけながらミサトは発令所内を見渡すと、その言葉に首を引っ込める者が何人も見られた。 彼女の直属の部下である日向もその1人である。

「きついですよ、葛城さん……まあ、謝らないといけないのは事実ですね。 おつと陽電子流入、 極めて順調です。 第2次接続開始します。 加速器、 運転開始いいですね？」

「いいわ。 どうせ時間がないんだからリツコを信じてどんどん繋いじゃって」

「……光栄だわ」

報告の中に冗談口を混ぜながらも誰1人それを禁止しようとはしない。 それはネルフという組織が純粹な軍隊ではないことから極度の緊張状態を維持し続けるためにはどこかで圧力を抜いてやる必要があったためと、口頭報告はあくまでも慣例であって作業状況 自体は内容を把握している指揮官たちにとってはスクリーンを見つめていれば充分にわかるというためだ。

「第3次接続完了。 全電力最終ラインに向かいました。 葛城さん、各砲座に指示をお願いします」

日向の要請にミサトは片目を瞑って頷くと、インカムのマイクに指示を乗せる。

「各稼動砲座に伝達。 絶対に陽電子砲からの攻撃ラインに入らないで。 それだけ気を付けてくれ れば後は自由に撃ってよし。 固定砲座については万が一にも外れた場合、出撃するエヴァンゲリオン両機を援護するために温存よろしくー」

ある方法をミサトは考えていた。 エヴァによってATフィールドの中和さえ出来れば、通常弾でも充分に使徒にダメージを与えることが可能だと言うことである。 しかし、それも現状ではA.T.フィールドを張れるのは初号機しかおらず今回の使徒は水晶体を対

処できれば通常弾でもダメージを与えられる可能性が。しかし闇雲に撃ちまくって使徒に破壊されては不可能になるばかりか、エヴァの射出を隠蔽するための役にも立たなくなる。それでは意味が無いということ踏まえた指示だ。

「電圧、発射点に向けて上昇していきます。あと15秒で臨界に到達です。カウンント開始」

日向がMAGIが表示するカウンントを声に出して読み上げる。

「14、13、12、11、10、9、8……も、目標に高エネルギー反応発生！」

「何ですってー！」

ミサトが驚愕に目を見開き、リツコは青ざめて口元を押さええたが、むろん驚いたのは彼女たち だけではなくオペレーターたちも同様であった。絶叫に近い声で矢継ぎ早に報告をし始める。

「周縁部をエネルギー体が回転！ 水晶体、陣形をとり収束します！」

「加粒子砲、来ます！ 狙いは二子山の自走式陽電子砲のようです！」

あ……しゅ、出力、前回攻撃の25%!？」

「えっ!？」

その日向の報告にこそリツコが驚いた声をあげた。マヤも同様に隣に座る彼を振り向く。MAGIによる弾道計算の概要を理解している2人の女性には、使徒が行おうとしていることを正確に理解することが出来た故である

「まずいわ、ミサト！ 陽電子砲の弾道が狂う！」

「ちよつと、それって!？」

オペレーターたちの席に駆け寄ったミサトが、彼女たちの手元にある戦況分析用のスクリーンに目を落とすと、そこには2つのエネルギー流がそのまま進んだ場合の弾道が予測に従って描き 出されており、そのコンピュータグラフィックは絡まり合って湖に落ちる様子を示していた。

「どつちにしろ撃たなかったら破壊されるだけじゃないの！ 日向君、撃って！ 早く!!」

「は、はい！ 陽電子砲発射!!」

上司の切羽詰った声での指示に気圧された様子の日向は、慌てて彼女の言葉どおり二子山の司令部に向かって叫んだ。一瞬の遅れの後に山頂から眩い光のラインが放たれ、MAGIの予想が正しいことを証明した。

「さ、最悪だわ！ マヤちゃん、エヴァを緊急射出して！」

「はい！ エヴァ両機、射出カタパルト作動します！」

メインスクリーン上ではようやく溜め込まれていたエネルギーを収束点から全て放出しきった使徒がまた新たなエネルギーを充填するべく沈黙を開始していた。わずか数秒間の空白時間に人類側は全てを終わらせなければならぬのだ。

「ミサト！ 恐らく使徒に強力なATフィールドを使用させれば少しだけで再充填までの時間を稼げるはずよ！」

「えっ!? サンキュー、リッコ！ 全稼動砲座及び固定砲座、一斉攻撃開始！ 通常砲火でも一点に集中すれば、いくらあの化け物使徒でもATフィールドの強化くらいするはずだわ！ それでどれだけ稼げるかはわかんないけど、今の私たちには1秒でもほしいのよ!! 撃ちまくって!!」

リッコの言葉に起死回生の機会を得られたとばかりにミサトが櫂を飛ばす。そして彼女はインカムの回線を切り替えて、それまでは双方向回線を閉じていたエントリープラグに向かって叫んだ。

「2人とも、邪魔してごめんささい！ 第1射が外れたわ！ 出撃よ!!」

万策破れるかたちになったネルフには、もう頼るべきものがエヴァンゲリオンとそれを動かす ことが出来る子供たちだけになっていた。ミサトは血が吹き出るほどきつく唇を噛み締めて不甲斐ない自分を責めるが、そんなことは生き残った後で2人に土下座でも何でもすればいいのだ。

「二子山司令部に到達！ 砲撃までの時間を1秒でも縮めて頂戴！」

それが出来ればボーナスでも休暇でもこの私が司令に直接交渉するわ！ お願い!!」



ミサトの咆哮が発令所の空気を震わせる。燃えるような瞳でスクリーンの向こうの使徒を睨み付ける彼女の姿は、見る者に畏怖すら感じさせるほどの迫力を備えていた。

☆☆☆☆

わずか数秒とは言え、押し潰されてしまいそうな凄まじい圧迫に耐えきると、2体のエヴァンゲリオンは一瞬だけ無防備な姿を空中にさらしてしまいが、すぐに射出の勢いと重力が相殺しあつて自由落下へと移行する。もちろんこの瞬間を狙い撃たれば一溜まりもなかっただろうが、ミサトはエヴァが地表に出るまでの所要時間を計算させ、それに合わせて集中した火力を使徒に叩き付けている。これによって使徒に水晶体を陣形をとらせATフィールドの展開を促し、再充填を少しでも遅らせると同時に無防備なエヴァを狙撃されることを防ごうと言うのである。どうせ同じだけの弾薬を消費するのだ。それならば散発的な攻撃を繰り返すよりも可能な限り効率よく、タイミングを計った攻撃を考えた結果だろう。人類側の思惑は見事にはまり、エヴァは地表に降り立つまでの恐怖に満ちた数秒間を被害無く凌ぐことに成功する。加粒子砲の再充填が始められてからここまでが約4秒。この区画に設置された固定砲座と、第5使徒の予期せぬ襲来に備えるために残された警戒用の稼働砲座を除いた全ての迎撃用設備が攻撃を仕掛けても、使徒の再攻撃を延ばせるのはリツコの計算によると約3秒でしかなかった。つまり当初から予測していた所要時間の1.1秒と、決死の覚悟で稼ぎ出す3秒を足した1.4秒がシンジたちに与えられる時間なのだ。そのうちの4秒間はすでに消費され、残る1.0秒間で使徒のコアを破壊できなければ、陽電子砲の第2射が発射されてから使徒のコアを撃ち抜くまでの数秒間は自力で耐えるしかない。死の宣告を受けた者は必死に足

搔くしかないのである。

「レイさん！ 牽制！ 早く!!」

「くっ……!!」

初号機は2丁パレットライフルで牽制しつつ狙撃されないように使徒の周りを移動し零号機盾を構えながらガトリング砲で牽制、それまでは壁に阻まれていた通常弾が挟み撃ちの形でエヴァ2体の攻撃でA・T・フィールドに隙間が出来て使徒に直撃し始める。そんな隙間に凄まじい集中砲火を浴びせかけられた第5使徒は地面に突き立てた楔のためだけでなく、元より回避運動を得意とする形状ではない。剥がれ落ちた青く輝く結晶体の欠片が、周囲の爆発光を反射して幻想的な空間を作り出したが、それを愛するには状況が切迫しすぎていた——使徒が攻撃方法を切り替えたのである。

『シンジ君！ レイ！ 避けて!!』

「え!? うわっ!?」

「くっ!!」

ミサトの絶叫とともにシンジたちに襲いかかったのは、使徒の水晶体6個の内一つはエネルギーグラインドブレードを形成しつつ残り5個の水晶体が2体のエヴァに極めて放射時間の短い加粒子砲の閃光を放つ。彼女の指示に咄嗟に反応することが出来たシンジは、間一髪でそれを回避することが出来たが、いかに本来の機体に乗っているからと言っても、未だ実戦慣れしていないうえに機体との連動にもやや不安の残るレイは、渡されていた盾でかろうじて防ぐしかなかった。

「レイさん！ 大丈夫?!」

「……な、何ともない……平気……」

唐突な攻撃のために大きくバランスを崩された零号機だったが、S・T・Oと呼ばれる大気圏内外両用輸送機の基部にも使われている特殊合金に、超電磁による被覆加工を施した盾は、出力の弱い加粒子砲を見事に防いでいた。彼女が言うように怪我などはしていないと確認できたシンジがホッと胸を撫で下ろすが、そこへすぐにまた数発の閃光が降り注ぐが、シンジはコントロールレバーを力強く握る。

すると初号機の目は光る。

「レイさんはもう少し下がって!! 初号機、前に出ます!」

『ちよっ!? シンジ君!』

シンジは、高いシンク口率とエヴァとの繋がりやの強さによる4つの目でコックピットのモニターで武器収納ビルの位置を把握しエヴァの目で、使徒との戦闘を行う。元々初号機の動きは、シンジの送る思考で動かしていると云うが殆ど自分の体を動かすのと変わらないほどの動きだった。そして、もう一つ。彼は今のエヴァパイロットの中でA・T・フィールドを発生出来るのだ。しかも、彼が想像する形に変えられる異質な特技がある。それがあれば、シンジの思い通りにA・T・フィールドを使えるのだ。

「よつとー!」

キンツ

使徒の水晶体から撃たれるビームを左手で払うように、左手にA・T・フィールドを纏う形を作り出してビームを空高くに弾く。使徒の周りで初号機に纏わりつかれ次々と攻撃されるのが嫌なのか、使徒は零号機に一つだけ水晶体を残し4つの水晶体で初号機を迎撃をし始める。手数が増えながらも、初号機は街に被害ない様に曲芸師のように空高くに跳躍しつつ躲し攻撃を弾いている。

『シンジ君! その調子よ!!』

使徒は学習しているのか、初号機の着地寸前に砲撃を行う動きや街を守ろうとしている初号機を逆手を取るように避けられないように攻撃をしてくるようになった。

「しゃらくせえ!!」

その攻撃に初号機は、足を止め4つの全方位の砲撃を手足を総動員させ弾いていく。時折、水晶体4つの加粒子砲を放つがエヴァのA・T・フィールドを正面で受けず斜めに張り弾く。

「What!?! どうしたんですか、ミサトさん!?! 早く撃ってくださいよ!?! もうレイさんは保たないんですよ!?!」

雨霰と降り注ぐ光の矢は、激しく動き回って牽制を続ける初号機に擦過傷を与えながら街を守りながら、それでも不安と焦りの暗雲を貫

いてくれるはずの陽電子砲の閃光は訪れなかった。零号機は、水晶体一つと言えどシンジと比べエヴァを動かさず防戦一方だった。

『2人とも！一旦、下がって！』

「でも止まったら強い攻撃が来ますよ!？」

『大丈夫よ、そいつは思ったよりも頭がいいらしいの！もしも今以上に攻撃方法を変えたら自分がやられるってことくらい気付いてるはずよ。早く後退しなさい!』

「了解！レイさん、戻るよ！合図したら走るんだ、OK!？」

厳しい声で命令するミサトに気圧されたのもあったが、彼女なりの作戦を自分が意地を張って潰すのは愚の骨頂と悟ったシンジは、盾による防御とライフルの牽制をマニュアルとおりに繰り返しているレイに声をかける。

『2人で同時に後ろを見せるのは危険よ。レイには可能な限り最短距離を走らせて、シンジ君はそれを援護。レイは防衛装甲に到達次第そこに射出するバズーカでシンジ君を援護すること。いいわね、

レイ?』

常に命令には躊躇なく従ってきた彼女に対するものとは思えないミサトの言葉だったが、その判断は完璧に正しかった。

「……わかりました……」

無論、指揮官であるミサトの言葉に首を縦に振ったレイだったが、それはかつての彼女がしていたような即答ではなく、本来であれば意見しようとしたであろう所に機先を制されて言葉を呑み込まされたという方が近い。レイの声がかすかに震えているのは初陣の恐怖か、それとも別の感情によるものか？

「気を付けてね、レイさん！ちゃんと援護するからさー!」

「あ……え、ええ」

「GO!」

「……わかった……先に行くから……」

去りがたい様子の彼女もシンジに一括されたことで零号機の方を変えが、このときレイの表情は極めて複雑なものになっていた。心の中を様々な種類と属性を持った感情が交錯し、それらが一体と

なつた奇妙な何かが彼女のまだ幼い心を支配していく。 どうして葛城一尉は自分をシンジの傍に居させてくれないのか？ シンジを危険な場所に置いたまま自分が撤退しても良いのか？ 彼にとっては自分が傍に居るか居ないかなどはどうでも良いことなのか？ それらはとてつもなく不条理な疑問でありながらも、レイにとつては極めて重大で無視し得ないものばかりだった。

「……シンジ君……」

零号機を操りながら彼の名を呟く。 特に最後の疑問はレイの心を大きく掻き乱し、さらなる混乱へと彼女を向かわせるべく拍車をかけるのだ。

「……怖い……シンジ君……私、怖い……」

新たな感情がレイの中に芽吹いた瞬間であつた。 あちこちが欠落していた彼女の心のパズルに組み込まれたその新たなピースの名前は、『恐怖』という厄介でもあるが大切な心の欠片の1つだった。使徒によって命を奪われれば二度とシンジの温もりに触れることが出来なくなると思うと、レイは氷の刃を心臓に差し込まれたような気分になる。そしてそれ以上に恐ろしかったのは、彼にとって必要な、役に立たない存在になつてしまうことであつた。今の彼女にとって、シンジの傍に居ることで与えられる喜びは、生きることそのものの喜びにも等しい。

(駄目……私……やっぱり……)

レイの中にほんの小さな躊躇いが芽吹き、それは彼女の心を満たしているシンジの温もりへの渴望を肥料にして爆発的な勢いで膨れ上がった。

「レイさん、止まっちゃ駄目だ!! 危ない!!!」

「え……あ……」

シンジが感じたように心を繋いで動かすのに近いエヴァのメカニズムは、搭乗者の本当の心を読み取つてそのとおりに行動していた。彼女が自分でも気が付かないうちに歩みを止め、初号機の背中を見つめていたのである。

「危ねえ!!! 避ける!!!」

「!?」

「レイさああああん!!!」

レイは目を見開いて自分に迫ってくる閃光を見つめていた。それは初号機を狙った流れ弾のようなもの。しかし、それが到達すればATフィールドを展開していないエヴァの装甲など易々と貫き、自分の命を一瞬で奪ってしまうと言うことを確かに感じた。

(死ぬ……? 嫌……私……まだ……)

絶望がレイの心を塗りつぶしていく。しかし、その閃光が彼女の元まで到達することはなかった。

「ああああああああああっ!!!」

耳を塞ぎたくなるような苦痛の叫びが通信回線を通して零号機にも届き、左腕を根こそぎ失った初号機は最後の仕事と言うが如く。初号機の右腕にA・T・フィールドを剣状に纏い、5つの水晶体を横一線に振り破壊に成功するが、その前に5つの水晶体は陣形をとり加粒子砲をエヴァ初号機に向かって放っていた。その砲撃は、もう満身創痍のシンジは初号機を動かせず真面に喰らい初号機の胸と腹部の間を貫いた。初号機の左手だけ残り、茫然と立ち尽くす零号機の足元で跳ねた。

「シン……シンジ……くん……?」

レイの呼びかけにはいつも暖かい笑顔と優しい声音で応えてくれた少年が返事をしない。その間にも標的を彼女に変えてエネルギーグラインドブレードを形成していた水晶体を零号機に向け閃光を放つ第5使徒に対する以上の恐怖と絶望感をレイに与えることとなった。

「……」

使徒の水晶体が輝きを発し、そこから放たれた無数の光が動こうともしない零号機に迫る。その瞬間、彼女の中で何かが弾けた。

「い……い、嫌あああああああ!!!」

これが彼の敗北……  
この先世界は……  
人類は……  
それは誰も知らない……

## 彼女の心…

「……驚くべき事は零号機の——いえ、レイが放った『声』です。あれが無ければ陽電子砲は意味を為さなかったでしょうし、あの子自身も、シンジ君も命を奪われていたでしょう。そして移送中の式号機とそのパイロットの到着を待たずして人類は終わっていました……」

「……」

「使徒はあの戦いの中で水晶体に連動させ加粒子砲を非常に短い間隔で自分の周囲に放つことで、小刻みに大気の状態などを変化させて、こちらの陽電子砲から身を守っていたと考えられます。現にMAGIによる弾道計算は刻々と数値を変えていましたし、無理に撃てばエヴァに命中してしまう可能性もあったくらいでした」

ミサトは部屋の中央に直立したままの姿勢で、執務机に座す碇ゲンドウに報告を続ける。

「予想外だったのはファーストチルドレンの行動でした。ですが彼女が情緒不安定になっていたことは搭乗直前のデータからも明らかだったため、今回の事態に対する直接の責任は無いものと考えています」

「………続けたまえ」

「はい。 サードチルドレンに關しましては命に別状ありません。

ですがフィードバックが強すぎる為か身体に負担がかかりすぎた為



により昏睡中ですが、MAGIの診断では数時間内には目覚めるとのこと。ファーストチルドレンも外傷などはありません。ですが恐慌状態に陥っていたために、今は鎮静剤を投与して眠らせています」

あの戦闘では一番疑問に思える事があった。それはレイの『声』とともに零号機からA・T・フィールドが瞬間的に発生したのだ。

データ上、零号機にはパイロットとのシンクロ率では展開させる事は不可能と出ていた。だが、そのA・T・フィールドのお陰で使徒のA・T・フィールドは中和され陽電子砲の砲撃を使徒に当てる事が出来たのだ。報告を終えて彼女はゲンドウの言葉を待った。執務机に両肘を置いたままの彼はすぐ脇に立っている冬月コウゾウに目配せをすると、すぐに差し出された何枚かの書類を受け取って目を走らせる。

「戦闘の結末については君が提出した書類を読ませてもらった。その上で口頭報告に来たという事は……やはりレイのことについてだろうか」

「……はい」

「ミサトの疑問は当然のものであったが、まだ中学生でしかない少女に抱くには重すぎるものでもあった。綾波レイという少女の存在についての疑問など本当ならば考えたくもないことだ。もしもゲンドウが彼女の疑問を一笑に付してくれたならどんなにか気が楽だろうとミサトは思うのだ。同時に現実はそのような世界では有り得ないことも知っているのだが。

「……結論から言おう。それにはまだ答えることはできません」

「っ!! それは私の疑問を肯定しているのにも近い発言かと思われませんが」

「肯定する気は毛頭ない。レイは幼い頃に心を傷つけられた見た目どりの子供でしかないのだ。しかし、これからあの娘がどう育つていくのか、どんな考えを持ち、何を為そうとしていくのかがはつきりするまでは何とも言えん」

ゲンドウは書類に落としていた視線をいつの間にかミサトの顔に

向けていた。その目の中に宿っている意志の強さには、厳しい軍隊式の訓練を受けてきた彼女ですらも気圧されるほどの何かを感じさせられる。無論、それは彼女を脅かすような類のものではない。しかし、彼が守ろうとしている何かを傷つける者が居るならば、断固とした態度で望むだろうということだけはその目が明白に語っていた。

「レイはあらゆるものの中心にいる。本人は……何も知らないことだ」

「……」

一瞬の間を置いた部分にこそ、数多くの謎や疑問に対する解答が隠れているだろうことくらいミサトには容易く察することが出来た。それを知りつつも口に出したのはゲンドウ自身が意識してのことである。

「……あの娘は過去に記憶のほとんどを失くしてしまった。しかし、今はその記憶を共有していた者が傍に居る」

「……シンジ君……でしょうか？」

眼前の男が何を語ろうとしているのか計りかねる思いのミサトだったが、今はじつと耳を傾ける時期だと判断して口を閉ざした。ゲンドウは静かに言葉を続ける。

「そうだ。シンジはある事が原因で幼い頃に記憶を封じ込めている。その引き金となったのはレイだ。その逆にレイが記憶を捨てたのはシンジのためだった。2人が子供の頃に出会っていた記憶を取り戻そうとするならばそれもよい。だが、他人がそこに介入することだけは認めるつもりはない」

シンジが第3の使徒を殲滅した後、病院でレイと『初めて』会ったのにデジャヴを感じたのは彼が幼き頃に彼女と会っていたのにその記憶がない為、デジャヴに感じたのであろう。レイも彼と同じく、記憶は無いが最初にシンジを興味を持ったのは忘れてはいるはずが彼を見て何かを感じた可能性があった。

「ですが碇司令！ 私は……あ……」

断定口調で言い切られたミスアトはさすがに異論を挟もうと口を開こうとするが、そんな彼女の喉を麻痺させたのは、またもやゲンドウの目の中にある金剛石の意志だった。凄まじい抑制によって押し固められたそれは、いかなる衝撃にも耐えうる硬さを誇る。

「これから何が起こるにせよ、君には必要以上には干渉しないことを望む……以上だ」

「……了解……しました……」

再び机の上に置かれている書類に目を落としたゲンドウの姿を見つめながら、ミスアトはどうしようもない無力感に苛まれる。シンジに出来る限り力になると決意したミスアトは、少し……少しでも彼の為に何か無いかと考えた。しかし、自分にはこの程度しか力が無かったのかと実感させられると、少女の頃のように両手で顔を覆ってしまいたくなる。

「……報告は……以上です。退室します……」

重い足を引きずりながらミスアトはのろのろと執務室の出口へと向かった。この部屋の空気に晒し続けるには彼女の心はいささか繊細に過ぎたせいかもしれない。だが、その一回りも小さくなってしまうような彼女の背中を追いかけて、ゲンドウの声がかけられる。

「ただし、葛城一尉」

ミスアトは幽鬼の如く力無い視線を肩越しに振り向けた。

「……はい」

「君が本当にあの2人を救ってやりたいと考えているなら……私や冬月、そして赤木博士と同じ地獄への門扉を用意しないわけでもない」

「え……？」

生気を失っていたミスアトの目に再び輝きが戻り始める。

「ある事件の発端と顛末を知るだけのことだ。ただ黙って聞いてくれるだけでいい。しかし、聞いてしまえばもう後戻りの出来ない所に踏み込んだのと同じ事になる」

「碓……いいのか？」

「それは葛城一尉が決めることだ。与えられただけでは意味がない。葛城一尉が自分で選ぶことに意味がある。それでも地獄を選ぶというのなら我々には止める権利などない」  
「む……」

ゲンドウの決断にはほとんど口を挟んだことがない冬月は珍しく否定の意志を感じさせる口調で問いかけたが、返ってきた答えに一理あることを認めたのか再び口を噤んだ。かつては大学で碓夫妻を教えていたこともあるという前歴を持つ彼だが、今では身分的な上下関係は逆転している。それでも冬月の意見には耳を傾けることが多いゲンドウではあったが。ゲンドウは再びミサトの方に視線を戻す。

「どちらを選ぶのも君の自由だ。つまらん意地を張って選んでもらっては困る。あくまでもよく考えた上での結論を聞きたい。即答は不要だ」

「はい。お心遣い感謝いたします。即答したいところですが、一晩だけ考えてこようと思います。失礼しました」

自分が退室を促されたことに気付いたミサトは、彼女らしい勢いのある敬礼を1つ残して執務室の外へと出た。そしてすぐに廊下の壁に体を寄り掛からせる。

「……ふう……」

全身からすべての力が抜け落ちていき、思わず倒れ込みそうになったのを何とか支えた彼女は、つい今ほどゲンドウに言われた言葉を思い返す。同居人であり、自分の孤独で荒んだ心を救い周りに優しく明るい光を照らす碓シンジという少年のこと。そのシンジの過去に關係がある綾波レイという不思議な少女のこと。

「……いったい何があるって言うのよ、あんな子供たちに……まだ私の半分も生きてないはずでしょ……」

やるせない気持ちばかりが込み上げてきた。あの2人の過去に隠された件を知るだけのことか、何ゆえに碓ゲンドウをして『地獄』と言わしめるのか、彼女の限られた視野では想像もつかないことだ。

しかし、現実には間違いなくゲンドウたちは苦悩している。

「私だけが知らないまままで太平楽にやっていくなんて出来るわけないじゃないのよ。つまらない意地は張るなっていうけど、私からそれを取ったら何も残らない……心中するつもりで意地っぱりで結構だわ。あの子たちを助けるつもりなら歯を食いしばって笑顔で居続けて見せるしかないんじゃないの……？」

そう呟いた彼女の脳裏には、つい数時間前の光景が鮮明に浮かんでいた。使徒のコアを陽電子砲の閃光が貫いたのをスクリーンで確認した後、溢れかえる残務の処理を怒濤の勢いで終わらせたミストはシンジたちが収容された施設へと走った。そして、そこで彼女が見せられたのは信じがたいほどの『想い』の強さに他ならなかった。

一時的に意識が回復したというシンジの病室を見舞ったミストに彼は縋り付いてきたのである。いつも優しくひたむきな意志の光を宿している黒瞳はまだそのとき混濁しており、明らかにシンジは正常な状態とは言えなかった。しかし、彼はベッドの上から落ちそうになりながらミストの腰に縋って問いかけてきたのだ。

『レイさんは？ レイさんは?! つ！ げほっ!! げほっ！ おえ…』

激しいショック症状のために昏睡中だったシンジの鼻には酸素吸入器が差し込まれたままであったし、左腕にはいくつものコードがテープで貼り付けられていた。そんな状態でもなお彼はチューブやコードを引きちぎらなければならなかったのだ。その中、戦闘の最後に使徒のビームを食らった攻撃によりフィードバックで内蔵に酷いダメージを受けて彼の身体はボロボロの為に吐血する状態になっていた。血を吐きながら彼女を心配するシンジは鬼気迫る光景だったとミストは思う。だが、そのシンジの行動が彼女の心の琴線に触れるものであったことは間違いのない事実だった。

「結局は屁理屈こねてるよりも、誰かのために意地張って、痛くても苦しくても我慢して頑張ってる子のためになることなら何でもやってやるって方が私には合ってる……それでいいわ」

自分の決定を口に出すことで確認した彼女は、ほんの先刻退室してきたばかりの司令執務室に視線を向けた。同時にローヒールの爪

先もそちらの方向に向いている。

「一晩も要らなかつたわね……よくリツコにも言われるけど、どうせ短絡思考の直情性格女なんだしさ……これでも悩んだ方よ」

やや自嘲気味ではあつたが彼女らしい笑顔を浮かべてミサトは左足を一步前に進めた。目の前にあるドアに威圧されることもない。

心を決めた彼女は大きく深呼吸を1つすると、まるで友人宅のインターフォンのボタンを押すような気軽さでそれを押した。

「葛城一尉、入りま……」

「ミサト!! レイが病室から消えたわ!!」

「え……」

開いたドアの奥に向かつて声をかけようとしたミサトは、背後からヒールの音高く走り寄ってくるリツコの声に啞然として振り返る。

その言葉の示す事態が頭に浸透するまで数瞬の間があつた。

「レイがいなくなった……? ちょっと待って……な、何ですって!!?」

まだ鎮静剤が切れるまでには時間があるはずでしょ!!?」

「そうよ! だから驚いてるんじゃないの! 私は碓司令たちに報告してくるからミサトは一足先に心当たりを当たってみて頂戴!」

「わかつたわ!」

普段は冷静なりツコでさえもレイの動向ということになると途端に我を忘れることがしばしば だった。その事実をミサトはこのとき初めて実感したような気がする。

(何が隠れてるのかわかんないけど……知らずに通っていけるような安易な道は歩いていないっ もりよ。シンジ君たちの過去に何があつたのか。全てはそこにあるのかも知れないわ……)

廊下を走り抜けていく彼女が目指す場所はただ1つしかなかった。

あの少女が向かう場所……そこには間違いなくシンジが眠っている場所しかないのだ。

「レイ、まだ行つては駄目よ。いま行つてもあなたはつらい思いをするだけなの。お願いだからもう少しだけ待って……お願い!!」

祈りを捧げる神様などいないミサトではあつたが、この願いを聞き

届けてくれるならどんな神 様にでも祈るつもりだった。 次第に激しくなっていく胸の動悸は、彼女が全力で走っているせいばかりではない確かな痛みを伴うものであった。

★★★☆☆

レイは必死に走っていた。 他人から見ればとてもそうは見えない速度でしかなかったが、彼女はいま自分に出来る精一杯の速さでただひたすらに病院の廊下を進み続ける。 客観的な視点に立てば患者用のパジャマ姿の少女が壁に身を寄せて倒れ込まないようにながらのろのろと歩いているだけに過ぎなかったが、まだ体から鎮静剤の効果が抜けきっていないレイにはそれが限界だったのである。

それでも行かなければいけないところがあった。 無意識のうちだったとは言え、彼女が命令違反などということをしなければシンジは怪我などしなかったはずなのだ。 そのことを思うとレイの心は引き裂かれそうなほどに痛みを訴える。

「はあ、はあ……シンジ君……どこ……?」

もし、この病院がネルフという組織の高度に機械化された場所であれば彼女はとつくと発見されて病室に連れ戻されてしまっただろう。 しかし、奇しくもレイは以前にシンジが彼女の病室を求めて歩き回った道筋と同じ廊下を歩いており、そしてその廊下は非常に人通りが少ない場所だったのである。 ちょうど今回2人が運び込まれた病室は、第3使徒襲来後に入院させられたときと場所を入れ替えたかたちになっていたのだ。 以前はレイが集中治療室でシンジの方が一般病棟だった。 彼女は一縷の望みを託して自分が寝かされていた棟の病室すべてを見て回ったが、どの部屋も空室になっている

か、あるいは違う名前が部屋脇に掛けてあるネームプレートに表示されてきた。それを確認し終えたとき、レイは全身に冷たい汗が一気に吹き出るのを感じたものだ。シンジが居るのが集中治療室であるなら、彼の容態は単純な検査や治療だけで済まない状態にあるということを示しているからだ。だからこそ彼女は急いでいるのである。

「……………、じゃない……………ここも違う……………」

喜んでいいのか悪いのか、彼女は一般病棟よりはこちらの棟の方に詳しい。シンジがそうしていたように、1つ1つの部屋が何のためか、そこには誰の姿も見えなかった。そのことにはホッと安堵の溜息を吐いたが、彼女はすぐに他の部屋を探しにまだ痺れの抜けきらない足を向ける。

「シンジ君……………シンジ君……………寒い……………私、寒い……………」

1つ部屋を覗いてそこにシンジの姿が見当たらないことを確認するたびに、レイは無惨な姿で横たわる彼を見なくて済んだことに安堵し、同時にどうしても見付けられないシンジを想って下唇を噛み締める。彼の温もりが欲しかった。もう寒さに震えるのは嫌だった。ずっとひとりぼっちだったレイにとっては、碇シンジという少年の傍こそが自分の居場所であると思えることは喜びなのである。それを自分のミスで損なってしまうようになった。もしもシンジが『もう君の顔など見たくもない』と宣言したならば、彼女は存在の居場所を失って死を選ぶことすらしただろう。しかし、それも彼が無事であることを確認してからの話だ。何を言われるにせよ、何をされるにせよ、シンジが無事で居てくれるならば彼女自身はどうなっても構わなかったのだ。はつきりと謝ったうえでまた温もりを与えてくれるように頼むつもりだった。

「……………あ……………ここ……………？」

思い詰めた表情で、それでも1つずつ部屋を覗いていったレイは、もう病室がある廊下も終わりになりかけたあたりで、ついに目的の名



前をネームプレートに見付けることが出来た。

「シンジ君……」

急いで飛び込もうとするがどうしても足が動かない。無理に動かそうとしても力を込めた証拠に足が震えるだけで全く前に進めなかった。その震えが全身に広がっていく感覚以外には光も音も消え去っていき、彼女はどうにもならない不安と無力感に苛まれた。

(怯えてる……私……怯えてるのね……)

ごくりと生唾を呑み込むと、彼女は自分が自分に嘘を吐いていたことを認めた。レイは彼が許してくれなくとも謝りたいと思っていたつもりであったが、本当の彼女は自分の全てを捧げ尽くしてでもシンジに慈悲を請い願おうとしていたのである。だが、この場所に留まったままではどうすることも出来ない。

「謝らなければいけない……たとえ見捨てられても……」

心に刺さった鋭い棘の痛みを感じながらもレイはそう口に出して言った。その強がりや嘘だと自分でわかっていても、言葉にしなればいつまでもこの場所で動けないままになってしまうと思ったからだ。

「あ……っ！」

ドアの開閉スイッチに指を当てると、目を瞑って一気に押し込む。彼女の決意の重さに比べるとあまりにも軽すぎる音を立ててドアはあっさり横にスライドした。レイは暫しの間そのままの状態動きを止めていたが、やがて自分への叱責の音がかららないことに安堵して、ゆっくりと閉じていた目を開いていく。

「あ……」

このとき初めてレイの心に光明が差し込んだ。最悪の場合、彼女はこの病室の中に包帯と点滴でベッドに縛り付けられたシンジの姿を見ることになると思像していたが、彼女の視線の先には恐らく鎮痛剤の類で眠っているせいだろうが、意外にも安らかな表情の少年が横たわっていたのである。外傷も見られず、大袈裟な医療機器も室内には置かれていなかった。

「あ……う……」

ふらふらと頼りない足取りで部屋の中に足を踏み入れたレイは、迷子の子供が親を見付けたときのような仕草で彼の眠るベッドの脇に跪く。間近に顔を寄せてシンジが確かに健やかな呼吸を繰り返していることを確認すると、レイの表情がまだ覚えたばかりの愛らしい微笑に彩られる。

「良かった……」

胸を暖かい気持ちで満たしていき、レイは自然な動作で彼の額にかかっている髪の毛の一房を摘む。そのままそつと掌でシンジの髪を撫でていた彼女は、ふと思いついたように彼の体かけられ、ている毛布を少しだけずらした。

「……」

見つめる赤い瞳には少年のものにしては繊細な手が映っている。いつも彼女に温もりと安心感、そして自分は常に彼の優しい視線によって見守られているという不思議な感覚を与えてくれるシンジの手だった。

「シンジ君……」

もう何度目かもわからない彼の名前を呟くという行為をもう一度繰り返すと、レイはそつとシンジの手を捧げ持とうとする。愛おしくてたまらないとでも言うような仕草だったが、その彼女の表情が唐突に凍り付いた。

「あ……うあ……嫌……嫌あ……」

普段から大理石の白さを持つ彼女の肌が、今はあまりにも不健康な蠟の白さに変わっていた。レイの両手に包まれたシンジの左手の冷たさが彼女の体温を一瞬で奪い去ってしまう邪悪な魔法の氷であったかのようにだった。シンジの左手は冷たかった——まるで血が通っていないかのように冷たくなっていたのである。彼女の求める温もりはそこからは伝わってこなかった。

「うっ……あぐっ……シンジく……」

このときレイの脳裏に浮かび上がってきたのは、無防備に攻撃に晒されようとしていた彼女を守るために使徒の加粒子砲の弾道に零号機を守ろうとした初号機の姿だった。無惨にも片腕を一瞬のう

ちに融解させられながら反撃をした初号機は水晶体のビームを撃たれてその場に倒れ伏し、レイの足元に吹き飛ばされてきた初号機の左手だけが転がる音が彼女の心に冷たい恐怖の風を吹き込む。初号機の左腕は『失くなつて』しまつていたのだ。

「うあああああああつ!!!」

ドアが開いたままの病室から放たれた絹を引き裂くような絶叫は誰もいない廊下中に響き渡り、やがて再び静寂が訪れた。

苦しんでいる間にも…

カツカツカツカツ

ネルフ本部の施設内での誰もいない廊下に足音が鳴り響く。その足音は、急いでいるのが解るほど音の間隔が狭い。

カツ

突如、足音は止まり鳴らしていた人物はスライドドアの前に立つと足を止めた。

プツシユー

空気が抜けた音に近い音を出しスライドドアは開き、立ち止まっていた人間は発令所に入る。

「日向君、シンちゃんの容体はどう?」

ミストは、発令所に入るなりオペレーターの日向にシンジの容体を聞く。その前にはレイの散策をされていてミストの顔には疲労が溜まっているのか、表情に余裕が無かった。

日向は椅子を回転させミストの方に体を向けるが、ミストの言葉に顔を歪めてしまう。それを見たミストは悪い予感を感じてしまい、日向に近づき両肩を掴み必死な顔でミストは日向に聞き出そうとした。その状況を見た周りの人間は驚いていた。

「ねえ!! どうしたの、シンちゃんは!?なんかあったの!?!」

「か：葛城さん、落ち着いてください! シンジ君は命に別状はありません。ただ…」

「ただ、何よ!?!」

ミサトの声は発令所内を響かせる程に大きく、彼女の感情は不安定になっていた。エヴァパイロット2人共がどちらも動けない状態であり、1人は肉体的に動けず、2人目は精神的に動けずネルフとして今使徒に襲来されると手詰まりになってしまうからだ。

それにミサトは今余裕が無くパイロットとしてでは無く人として大切に思うシンジが何かあったとなれば彼女行動は当然とも言えるだろう。日向はミサトの手を肩から優しく下ろし、体をキーボードの方に向き操作をすると液晶画面にシンジがいる病室の映像が流れ始めた。それを見たミサトは、その映像を覗き込むように見始めた。すると、ミサトの顔は驚愕した後歪めてしまうほどの映像が流れていた。そして、日向の席の隣であるマヤは苦い顔で遠目から映像を見ていた。

☆☆☆☆

ネルフ管轄内のある病院。

シンジが使徒の戦いの後に運ばれた病院である。その病院で特別にエヴァパイロットだけに用意した部屋があった。その部屋がある一般病棟にシンジは送られていた。

今は、その病院には余り患者は居らずシンジと数人ぐらいしか居なかった。しかし、病棟から人が聞いたら気が滅入りそうな声が鳴り

響いていた。

「ぐっあああああああああつあああああああああ  
あああああつ！」

その声は、シンジがいる病室から響いていた。断末魔のような声を、彼はベッドの上で悶え苦しみながら叫んでいた。動かない左腕は、悶え苦しむシンジの体に連動して人形のように操られるように動いていた。そして、ベッドの上に寝かされているシンジは悶えながらベッドの周りに血を撒くように吐血していた。

「ゲホッ！　ゲホッゲホッゲホッ！！　…おえつ。　…あああああああああああああ…　あうっ！」

この状態を他の人間が見れば、目を背けたくなるほどの光景である。激痛とも言える痛みに襲われシンジは無我夢中にベッドの上で暴れながら血を吐き、痛みに耐えようにも余りにも酷い痛みにはベッドに置かれていたであろう枕にかぶりついていた。

今のシンジは、鎮静剤が切れており先の戦闘で負ったダメージが内臓に行き渡り動かない左腕のように、胸部と腹部の間を使徒の攻撃で貫かれたダメージがシンジの身体の中では内臓破裂に近いダメージを負っていた。先の戦闘後、初号機から降ろされたシンジの状態は非常に危ない物だった。

真つ先に病院に運ばれ、手術を行われて無事に終わり命に別状は無くなるが麻酔が切れた所にシンジは目を覚めた。そして、シンジの状態を見に来たミサトを見つけた彼は尽かさずレイの心配をした。自分の姿が余りにも酷い姿になっていたのも構わずに。その後、鎮静剤で寝かされていたが時間が過ぎれば薬の効果は無くなり始め、再び目を覚ませば未だに内臓のダメージは響いており凄まじい痛みに襲われる事に。普通の人間では、命を賭けた戦いの中に極限な集

中力を出し途中で意識を失い、意識が戻ると大切な人を心配をした後鎮静剤で寝かされて、薬が切れて起きてみれば凄まじい痛みに襲われれば気が狂ったとしても不思議では無いだろう。

「ぐうううっ！ あああああああああああああ!!」

彼が痛みを少しでも紛らせようと身体を動かすが、何も変わらざしンジが動けば彼の口から吐血した血は周辺に飛び散りベッドや医療機器、床まで血に塗られている悲惨な光景になっていた。

（痛い痛み!!!）

痛みで意識は発狂手前まで来ていたが、シンジは悶えながらも点滴されている右腕は動かさないようにしていた。こんな状態のシンジを医者は何もしてない訳はないのだが、本来なら麻酔や鎮静剤を彼にえば楽にさせられる。しかし、既に薬の投与できる量が限界ギリギリに達していた。一般の人間で効く量では、何故かシンジには足りなかった為に多く投与していた。これ以上の投与は、副作用が大きく出てしまい痛みが引いたとしても副作用の症状が出てしまう悪循環になってしまうからだ。愚策で痛みを少しでも耐えてもらう為に、医者はベッドの上で悶え苦しむ彼をベッドに縛り付けはしなかった。まだ意思が残っているのか、ベッドの上で暴れながらも点滴されている右腕を動かさない所を見て必要無いと判断された。

その後シンジは丸一日、痛みに苦しみながら病棟内を鳴り響かせていた。

「ゲホッゲホッゲホッゲホッ！ ぐうううううううっ!! ぎやああああああああああああああああああっ！」

☆☆☆☆☆

病室内の映像を見ていたミスアトは、悲惨な光景を見て顔を青くして両手は口を抑えていた。そんなミスアトの様子を見ていた日向は、ミスアトから視界を外すように顔を背けていた。今ネルフに働く人間達が見れば誰もが、ミスアトと同じリアクションを取るであろう。大人達は使徒を子供に戦わせ、戦闘で受けた傷に苦しむ子供を見れば大人達は申し訳無くなっていった。それに、苦しみ子供がシンジだよりも一層だった。彼は、誰に対しても嫌な顔せずには笑顔で接する少年である。だが、普通は命懸けで戦い続けなくてはならないエヴァパイロットの事を愚痴に漏らしても不思議でも無いのだが、シンジは一言も誰にも言っていないのだ。そんな彼が死に物狂いでベッドの上で悶え苦しんでいけば、そんなリアクションは当たり前前だった。

「…レイの事は、シンちゃんには黙つといて…」

「葛城さん？ それはどういう事ですか？」

日向は、単純にミスアトの言葉に疑問を持つが日向の方に顔を向けたミスアトは悲しみに塗られていた。

「シンちゃんの心を壊さない為よ…。守った女の子が、あんな状態になった事を知れば彼は2度とエヴァには乗れないでしょうね…」

泣きそうになるミスアトを見て、日向は驚きレイの身に何があったのか不思議に思っていた。

「嫌になるわね…この仕事」

☆☆☆☆☆



内臓の激痛による悶え苦しんでいたシンジは、第5使徒襲来からちょうど丸一日が経過した夜に、やっとの思い出体から痛みが落ち着いてきた。痛みは引き始めたが悶え苦しみ続けた所為ではつきりしない頭に浮かんできたのはもちろんレイのことであったが、起きあがろうとしたがシンジは自分の体に違和感を感じて、もう一度身体をベッドに横たえる。

「いててっ……やっぱり左腕は動かないか……」

そこに在るはずなのに無いような不思議な感覚に囚われていた。突発的な事故によって四肢のどれかを失った人間というのは、その場所はまだ欠損した部分があるように感じ続けるといふのを彼は聞いたことがあったが、ちょうどそれと逆の感覚を味わっているように感じる。恐らくは、ほぼ一体化しているエヴァの腕が失われたことによつて精神が大きな衝撃を受け、まるで彼自身の腕が失くなってしまったと脳が記憶してしまったのだろう。

「でも……俺がここに寝かされているってことは……使徒は倒せたってことか……」

戦闘で受けた衝撃のせいなのか、それとも激痛に悶え苦しんでいたからなのかはわからなかったが、どうも記憶がはつきりしてこない。うっすらと覚えているのは、血相を変えて病室に飛んできたミサトに縋り付いて、レイの安否を尋ねたことだけだ。

「それにレイさんは無事だったみたいだな……良かった……。それだったら、これも名誉の負傷だな……はは……」

何とも不自由な生活をする事になりそうだったが、シンジは笑みを浮かべられるだけの余裕を戻していた。

「左手がどうなっちゃったのかはまだわからないが、何はともあれ俺もレイさんも無事に生き残ることが出来たじゃないか。今はそれでいいと思うけどな……」

右手で動かない方の腕に触れてみると、それがほとんど体温すらも感じさせないほど冷え切つてしまっていることに初めて気が付い

た。確かにあまり良い状態とは言えない。

「血が…通つてないみたいだ…」

さすがに背筋に薄ら寒いものを感じたシンジはそつとその左腕をさすってみる。暫しの間そうしていると、じんわりとではあったが感覚が戻ってくるのを感じた。

「…大丈夫…か？ そんなに酷くはないと思いたいが」

結局は脳が一時的に混乱してしまっているに過ぎないのだから、なるべく常にその部分を意識するように心がけていけば、やがては現状を認識した脳が、記憶と現実の誤差を修正していくはずである。心と体の関係については幼い頃に見た夢で理解していた。普通ならばはもつと不安を覚えてもいいというのに、意外なほど苦しんでいた時とは変わって落ち着いてベッドの周りを見渡していた。

「左腕が動かない事は、後にリツコさんに聞くとして…。自分の事ながら酷く汚したなく、第三者から見たら殺人現場と言っても信じてもらえるぞ。…これは」

数時間前まで苦しんでいた人物とは思えない発言するシンジ。拷問とも言える痛みを、丸一日も堪えてから痛みが引いて少し余裕を持ったとしても常人とは思えない精神をシンジは持っていた。普通なら、あの後では二度とエヴァに乗りたくないと思うのとトラウマになつても不思議でもないのだがシンジは微塵の思いも無く他の人間からは《異常》と思わせるだろう。

「とりあえずは、明日の朝にでもミサトさんにレイさんの事を聞こう。」

もう一眠りする前に病室をどうにかしよう…。」

彼は今さっきの苦しみを忘れたかのようにしていた。そしてナースコールをして看護師を呼び病室を綺麗にしてもらい、苦しみを続けた身体を休める為にベッドに身体を預け就寝する。

だが、シンジは少し嫌な予感を感じてしまった。何か自分が知らない所で、大変な事があるじゃないかと。誰かが何かあったんではないかと。この時は彼も痛みが引いて、やっとの思いで休めると思うと気持ちは寝る事だけを優先していた。

しかし、それが後に猛烈な後悔を彼に抱かせる結果になる。もし

も彼が病室を綺麗にする前に目を凝らしてレイの髪の毛が落ちていたのを見ていたなら、ベッドの一部に血と一緒に点々と黒ずんだ染みを見つけることが出来たかも知れない。自責と絶望の念に駆られた少女が噛み締めた唇から流れ落ちた血の痕であることまでは、さすがに彼も、そんな事になつているとは想像もしないだろう。

☆☆☆☆

翌朝。シンジは起床して、携帯でミサトに連絡を入れる。レイの状態を聞くために電話をしたのだが…

『レイの事は気にせずに、自分の体調を早く万全にしなさい』  
その一言だけを言われ電話を切られた。余りの事にシンジは不思議に思い、リツコやマヤの方にも電話をするも返ってくる言葉は殆ど同じセリフ。流石の彼も、少し苛立ちに駆られるが動くと痛む身体を休ませる為に大人しくして身体を横にして休ませていた。

シンジは焦った。退院が許されるまでの3日間、彼はレイの携帯にそれこそ数え切れないほどの回数の電話をかけていたというのに、一度としてレイが電話に出ることがなかったせいだ。繋がらない回数が明らかな異常を感じ、次第に胸を満たしていく嫌な予感的中してるんじゃないかと身悶えしそうになっていた。もちろん彼はミサトたちに、何回か確認の電話をかけている。しかし、誰に訊いても今は自分の身体を治すことを第一にするように、レイは別に怪我をしたわけではないというように諭されるだけだ。それだけで納得して安心できるくらいなら、初めから忙しい人間の時間を奪おうとはしない。シンジは自分がその程度なら配慮できる人間だと自覚はしているつもりだった。

(結局誰も答えてくれなかった……くそつ、レイさんの身に何が起

こつてるのか…)

レイの事に関して遠ざけようとする大人達に気が付いたシンジは、病院服から学生服に着替え無理矢理病院を飛び出した。内蔵を痛めた身体は重い鉛でも付けたかような状態で身体に鞭をうちながら昼前に病院を出て家に寄ったときにも、一度レイの携帯に電話したが、やはり彼女は電話に出なかった。彼女に何も無くても学校の授業が終わっていないければ電話に出れる訳無いと思いつくとするが少しづつ不安が胸を締め付ける。そんな彼は学生の姿は見えない通学路を、第壹中学校目指して重い身体を運ばせた。

「学校には居るよな……どうしてレイさんのことを俺から遠ざけようとしているだ……」

静まりかえった校門前を通り抜けて生徒玄関に飛び込む。重い身体と片腕がまったたく反応してくれないために走りにくいことこの上なかったが、今はそんなことを気にしていられる心境ではなかった。授業中と言うこともあって、さすがに廊下を靴音も高く駆けていくことはしなかったが、それでも自然に足は早まっていく。

(レイさん、来てるよな？ もし来てなかったら……)

無論、レイの姿が教室に見えなかったなら、せつかく登校してきたところではあるが、このまま彼女の家に行ってみようと考えてみた。教室前に着いたときには、もうこの時限も終わりそうな時間になっている。

「頼むから……居ないなんてことないでくれよ……」

願うような気持ちで身を屈め彼は教室の後ろの方のドアをそつと音を立てないように少しだけ横に引いた。ちょうどその時、授業終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

「……くそ……居ねえ」

教室内ではクラス委員長である洞木ヒカリの号令がかかり、生徒たちは最後のお勤めとばかりに起立して頭を下げると、次の瞬間にはまだ教室内にいる教師のことなど完全に忘れ去って、仲の良い友人たちと喋り始めた。

「どうして……レイさん……そっか。 今日だけってこともあるじゃ

ないか。 トウジ君たちに訊いてみればいいや」

今やるべきことが決まると、わずかとは言えども気が楽になるのは人間の習性だろう。 彼は普段の落ち着きようからは想像も出来ない、弱った動作で体に力を入れて、教室の中に入る。

「トウジ君、ケンスケ君。 教えて欲しいことがあるんだ」

「おお、シンジやないか。 ようやつと退院できたんやな。 まだ本調子じゃないやな、ホンマに心配したんやで」

「大丈夫なのか？ 今にも倒れそうな感じだぞ、シンジ？」

顔色が優れず弱々しく教室に入るシンジに少し怪訝そうな顔をしているが、2人は素直に彼の無事を喜んでいるようだった。 シンジは、そんな2人の優しさを感じとっていた。

「ありがとう。 内蔵を痛めて左手がまだ動かないけど、とりあえずは平気だよ。 でも、そんな事よりレイさんは学校にきてないかな？」

「そんな事って……お前の体やろが……で、綾波やったな。 あいつならシンジと同じで全然来とらんで。 まあ、綾波は前から休みがちやったから、誰もあんまり気にもせんかったんやけどな」

それこそ自分の体のことなど大した問題ではないというシンジの様子に呆れた口調を隠そうともしないが、トウジは肩を竦めつつも彼の質問には答える。

「来てないだと……？」

シンジの顔がにわかに青ざめていく。 彼が前から感じていた嫌な予感が現実になっていくかと思わせる。

「な、何や、どないしたんや、シンジ？ ワ、ワシが悪いこと言っしてしもうたんか？」

まさか自分の何気ない言葉がシンジにこれほどまでの変化を起こさせてしまうとは、思っても見なかったのだろう。 やや乱暴そうに見えても、トウジは他人を傷つけるのは嫌いだったのだ。 何しろ、彼が倫理の授業で書かされた自分の性格分析という作文でも、考えが足りないせいで知らぬ間に他人を傷つけるのが、自分の中で特に嫌っている部分だとしているくらいである。

「……ごめんよ、トウジ君のせいじゃないんだ。ただ、ずっと入院してたせいでレイさんと会ってなかったし……今回は一緒に出撃したんだ。誰も教えてくれないんだ……」

「そうなんか……仲間のパイロットの状態もわからんっちゅうのは難儀やお……。あないなオナゴに戦わせておいて申し訳ないっちゅう気はあるんやで？ そやけどワシらは何もできんからのお……」

トウジはもしも自分に出来ることなら替わってやりたいという真情を素直に露わにした口調で嘆いて見せる。彼が本気でそう思っているのがよく理解できたシンジは、それで少し心と体が軽くなった気がしていた。

「そう言ってもらえるだけで嬉しいよ、トウジ君……。ありがとう」

シンジと彼とは感情のすれ違いもあったわけだが、それが解決してみれば本当に気持ちよく話せるタイプの少年だった。そういった友人を持つシンジには、彼の存在は大切に思えていた。

「……なあ、シンジ。俺、ちよつと思っただけどき……」  
「え？」

2人の会話が一段落したのを見計らって、それまでは黙って何かを考え込んでいたケンスケが口を開く。トウジとは逆に物事を熟考してから口に出すところのあるケンスケは、ともすればその場においても一時的に会話の流れから抜け落ちてしまうときがあったため、このときもシンジは唐突に声をかけられてような気がして少し驚いてしまった。

「どうしたのさ、ケンスケ君？」

「いやさ……トウジも言っただけど……いや、替わるってわけじゃないんだけどな。エヴァのパイロットって……お、俺にも出来ないか!?」

最初こそ口ごもっていたケンスケだったが、核心の部分の口に出してしまっただ後は、もうシンジが口を挟む暇もないほどの勢いで話し始めた。

「前にも言ってただろ？ なりたいんだよ、俺！ どうせならやる気があるヤツの方がいいと思うんだ。推薦とかですぐつてのは無理でも、せめてテストとか受けさせてくれるように紹介してくれないか！？」  
頼むよ、シンジ!!」

「き、訊いてはみるけど……そんなにいいもんじゃないぞ……？ エヴァパイロットは……」

「それは感じ方の違いってやつだろ？ 俺はずっとそういうのに憧れてきたんだし、それなりに知識とかだつてあるつもりなんだ。それじゃ、よろしく頼むな！」

「お、おう……それじゃ俺は今日のところは帰るから……」

なぜ彼がそんなにもエヴァのパイロットになりたがるのかを相変わらず計りかねながらも、今は一刻も早くレイの家を訪ねなければならぬ焦りに任せて頷く。 ケンスケ自身のたつての願いではあるが、シンジの心にはこれでも自分以外のエヴァパイロットがいなくなれば誰も傷つかないと自己犠牲で思っていた。

「明日は朝から来れると思うよ。 それじゃ……」

「ちよつと待てや、シンジ。 綾波のところに行くんやろ？」

「お、おう、そうだけど」

「本調子じゃないのはわかつとるけど、そう気怠そうな顔せんでくれや、な？」

「え……あつ、う、ごめん……」

重い身体を教室から出るために身体を動かしたドアの前まで行くと、背後からトウジの声に呼び止められてシンジは我知らず気怠そうな表情になっていたらしい。 そのことにまったく気が付いていなかったシンジは本当に申し訳ないように謝罪したが、トウジは特に気にした風もなく片手をひらひらと振る。

「ええて。 ワシの方が悪いんや。 ちと頼みがあつてな」

「頼み？ 俺に出来ることなら構わないけど」

「シンジにも関係あることやしな。 お前に頼むんが一番だと思つたんやが、なにせシンジは学校に出てこんし、しゃあないから待つとつたんやわ。 それで頼みつちゆうのはやな……」

「ここでトウジは急に言いにくそうに口ごもった。

「うん？」

「そのな……まあ、なんや……つまり……つまりな、ワシはシンジと綾波に礼を言わなあかんと思つとつてな」

「え……お、お礼……う？」

照れ臭くてたまらないという様子のトウジはそっぽを向きながらモゴモゴと言ったが、その不器用だが真っ直ぐな気持ちはしつかりと伝わってくる。

「…ワイの早とちりでシンジを殴つたと言うのに、あの時ワイとケンスケを助けてもらうた。そして綾波も戦うようになったんやろ？ けどな、シンジには謝つたが綾波にはまだ礼を言つたらんのや。ワシらを、守ってくれてありがとうさんつて…」

ようやく自分の伝えたいことを全部言い切ることが出来た彼は、身に余る大仕事を何とか片付けたとでも言うような表情で溜めていた息を吐き出す。その姿を見つめていたシンジは、幼い頃に夢で現れたあの人に魅了された微笑みを浮かべて力強く頷いた。

「……きつとレイさんも喜ぶと思うよ。必ず伝えるからよ」

「頼みたいんはそれだけや。急いどるところ悪かったな」

「ううん、いいんだ。それじゃ、今度こそ行くよ。また明日な、トウジ君、ケンスケ君」

そう言つてシンジは踵を返した。ずっと学校を休んでいた彼に大丈夫なのかと声をかけてくるクラスメートたちに出来るだけ笑顔で応えながら教室の外に出ていく。そんなシンジの後ろ姿を見送っていたトウジは、彼の左腕が体の動きに振り回されているだけで、意志を持った動きを全くしていないことに初めて気が付いた。

とりあえずは平気だとシンジは言っていたが、どう見ても、どう考えても平気なはずがない。

「今にも壊れそうに痛々しい感じやな、あいつは……」

「ん？ 何か言つたか、トウジ？」

「いや、別に何でもあらへんわい。ワシは早弁でもして、さつき使った体力と気力でも充填することにするわ」



普段は彼などよりも遙かに目端が利くというのに、何故あれに気が付かないのだろうかと内心　で溜息を吐きながら、トウジはその言葉どおりに鞆から弁当箱を取り出していた。

★★★☆☆

ネルフによつて管理されている地域であるために、レイのマンションがある場所はいつもながら閑散としていた。学校からは近くも遠くもなく、ネルフ本部の地下施設まで繋がるエレベータードームにだけは、目と鼻の先というのがレイの住居の特徴である。外には特に何も無い地域なのだ。シンジは片腕が動かないためにバランスを取るのに苦労しながらも、咳き込みながらも学校からこの場所までをどうにか転ばずに歩いてくれた。

「げほっ。……居る、かな？」

レイの部屋を訪ねるのこれで2度目になるが、どうせ来るのならばもつと落ち着いた時に来たい所だがそうも言つてられない。しかし、現実には前回来たときよりも更に酷い状況になっている可能性もある。このまま彼女の部屋まで行つてみて、もしもレイが不在であれば、もうどこを探していいものやら見当も付かない。だが、それでもレイが部屋にいてなお彼の電話に出ようとしないということよりは、まだその方が数段いいとも思えるのだ。ファーストチルドレンという重要人物であるレイが行方不明になっているなどは有り得ず、自宅に居ないということは即ちネルフ本部に出頭しているか、それとも最低限ミサトたちが居所を掴んでいるはずなのである。

「居るはず……きつと部屋に居る。レイさんに何か起こつてるに違いない……」

どうしてミサトたちがそのことを教えてくれないのかは気になつ

だが、彼は結局我慢しきれず病院を飛び出したのが現状。今すぐに連絡を取ろうとすれば、たちまちあの何もない病室に逆戻りという可能性が高い。

「お父さんやミサトさんたちが俺に言えない事なんだ。そんな気の遣い方をされたくない。俺はレイさんのために出来る事なら何だってする」

事実、病院を脱走してきているのだからその言葉には真実味がある。そう口に出すことで意を決したシンジは、マンシヨンの入り口へと向かって足を踏み出した。しかし、マンシヨンの行く手にシンジの監視をしている諜報部員達が立ちあがるように立っていた。シンジは彼らが自分の目の前にいることに不思議に思っていた。本来、彼らはシンジの視野に入らないように監視しなくてはならない筈が目の前に立っていた。

「…碓シンジ君、速やかに病院に戻ってください」

「…げほげほっ。 ははっ、やっぱりレイさんに何かあったんだ…。申し訳ないですが、その言葉には従えませぬね」

7人の諜報部員とシンジの周りには、緊迫の空気が漂って来た。

「碓司令と葛城一尉の命令により、碓君。君をあそこには行かせる訳にはいきませぬ。どうか、その身体を病院で休めてください」

7人の中に真ん中に立つ鈴木は、他の6人に指示を出してシンジを連行しようと近寄ろうとすると、シンジは動かない左腕を右手で動かす。左手は鎖骨の方まで持っていていき左肩と首で少し挟み固定し、右手で左肘を持ち左腕を固定した。

「すみませぬね…。ゴホッ。俺はレイさんの心配で来て痛い身体を鞭を打って此処まで来たのに、『はい、わかりました』って言えないですぬ、ゴホゴホッ…。誰もレイさんの事を教えてくれないなら、自分で行くしか無いでしょ?」

1人の諜報部員が、シンジの身体に触れようとするスルリと彼はその手から躲した。その諜報部員は、驚いていたが他の諜報部員達がシンジに群がるように捕まえにかかった。

しかし、どの諜報部員にはシンジを捕まえることが出来ないでい

た。彼らにとつては、確かに捕まえる瞬間までは彼はそこにいるのだが気がつけば手は空を掴むだけ。シンジは、顔を青くしながらも汗をかきつつ諜報部員の手から避けていた。四方から囲うような形で、シンジを捕まえようとするが1人タツクル気味にシンジの腰に目掛けて捕らえようとするが。

くるっ

シンジは諜報部員の背中に自分の身体を浮かせて左肩から乗り、前転するようにして躲し尽かさず次の諜報部員2人が左右から迫るがバスケで言うならダックインと言う技に近いしやがむ体制に近い行動で躲していく。

数十分の攻防の中、大人7人の中学生1人で大人達は1人の子供を捕らえる事が出来なideいた。流石のシンジも、身体にハンデを持ちながらも7人の大人達から逃げ切れているのは凄いことだが最早時間の問題だった。既に彼の足は震え、逃げながらも吐血を吐き、顔は青から白く息をきらしていた。そんなシンジを見て、1人の諜報部員は彼に話しかける。

「何故!? 君は、そんな体で辛い思いしながらも彼女に会いに行こうとする! 彼女は我々大人達がなんとかする! だから、君はそんなに頑張らなくていいんだ!」

スーツでサングラスを掛けた姿で1人の諜報部員は、感情を表すように言う。彼らは、目的や命令に忠実に動き感情を表さないのが彼らだった。しかし、彼らの目の前に立つ少年を見てみると感情を表に出してしまっていた。余りに見られてられないほどの状態で立っているシンジの目は変わっていなかった。

「……ハッ……ハッ……ハッ。 まあ、これは俺の我儘見たいなもんですよ……誰もレイさんの事を俺に教えないって事は何かあったに違いないじゃないですか……」

一度、深呼吸をして息を整えようとするシンジ。そして、彼らを力強く見た。

「俺だって、こんな体で貴方達と鬼ごっこしたくありませんよ……。普通に家に帰って飯作ってミサトさんと話してペンペンを愛でて、身

体を休ませる為にゆっくり寝たいですよ……だけどね！　彼女が泣いてるかもしれないのに、自分だけが楽な思いなんて出来るわけないんですよ！　彼女が助けを求めていなくても、その涙を止めてやるのが男つてもんでしようが！」

シンジは両足に力を入れて、肺に酸素を限界まで取り込むと次の瞬間。

ワッ

凄まじい音量のシンジの大声が、周りに鳴り響く。　周りの音を聞き消すほどの大音量で、近場にいた諜報部員達は一瞬だけ目を閉じてしまう。　その瞬間を狙ってシンジは、両足の力を極限まで抜きしやがむ体制になると素早く力を込めると諜報部員の間をすり抜けるように跳躍する。

諜報部員の視点だと、いきなりの大声に驚き目を閉じてしまい目を開けた時には、その場に彼の姿は消えていた。

「ゲホッ…ゲホッ…」

諜報部員の後ろから咳が聞こえ、振り返るとシンジが後ろ姿で立っていた。　咳が止まり、シンジは口から血を吐き出すと口一杯の量が地面を染める。

「…ゲホッ、これは俺の我儘なんで処罰は覚悟の上なんで…。　ここで逃したとしても、貴方達には何も責任は課せられないと…思いますが。　そうだ…今度どっかに食事行きませんか？　俺はアルコールは無理ですが、楽しく騒ぎましょうよ…。　まあ、その前に女の子の涙を止めてきますね…」

シンジは、レイのマンションに向けて弱々しく歩き始める。　その後ろ姿を見ながら、諜報部員達は誰一人動かず一人の諜報部員は懐から携帯を取り出す。

「すみません、対象は捕らえられず見失ってしまいました」  
諜報部員の携帯から、相手側からの声が他の諜報部員にも聞こえるほどだった。　だが、諜報部員は顔一つ変えずに一言。

「我々がやるよりも、彼なら彼女の心を癒す事が出来ると思います」  
彼はそれだけ言うと、電話越しから声が聞こえているが途中で停止

のボタンを押した。そして、サングラスを外しシンジに向けて言葉を送る。

「碓シンジ君…どうか、彼女を」

諜報部員達は、本来の監視位置に戻っていった。

## 最悪な…結果

今にも倒れそうな歩き方でフラフラと歩き続けて、シンジはレイが住むマンションにやっとの思いで辿り着いた。

「ゲホツゲホツ…。とりあえず着いたが…いるのは確実なんだよな」

遅い足取りでマンションの入り口に入り、エレベーターの前に立つと横にはキーロックの端末があり彼は解除する為にシンジのIDカードをスリットに差し込む。彼のIDカードが吸い込まれ、カード情報を確認するためにセキュリティコンピューターが稼動した瞬間。

ブウン

エレベーターと端末の電源がカットされる。

「…ちっ。 やっぱり簡単には行かないか…」

シンジはわかっていたように呟く。前に彼はリツコに聞かされていた話を思い出す。第3新東京市の街全てを管理をしているのは、ネルフ本部にあるスーパーコンピューター《MAGI》である。そんなコンピューターが管轄下である、このマンションでネルフ関連の施設に於いて彼のIDカードを使えば情報はネルフの頭脳と言われる赤木リツコの元に知られる。

即ち未だ彼はネルフと言う壁に道を阻まれていた。シンジは、溜息をしながらズボンの右ポケットから携帯を取り出す。すると、今までサイレントモードしていた為に気が付かなかったのか履歴がミサトの名前で埋め尽くしていた。それを見てシンジは苦笑しながら、ミサトの携帯番号を入力し耳に当てると数回のコール音の後に回線が繋がり、慌てた様子の声がスピーカーの向こう側から聞こえる。

『シンちゃん！ どうして勝手に病院を抜け出したりしたの！ 心配

するでしよ！　電話してるのに出ないし！』

案の定の剣幕であるミサト。　しかし、彼は落ち着いた声でミサトに言う。

「ミサトさん…、それは大人達が俺に真実を言わないから独断でこうして動いているですよ？　レイさんが無事なのはわかりましたが、何があつて俺に知られてはマズイと思つて、知らさなかつたじゃあ無いんですか？」

少し声に怒りが混じり、電話の向こう先にいるミサトとは先程とは変わつて無言になつてしまった。　今回のシンジが独断で動いた件に関して自分だけの非では無いと思つて、現時点彼にレイの事を知らせなかつた為に起きたのだ。　シンジの中では、ある程度は秘密や何かを隠されても文句は言うつもりもないのだが、今回のレイの件では話は別だつた。　無事なのは理解したが、彼女の身に何があつたのかを大人達が隠していたのが彼には腹を立てていた。

『……ごめんなさい。　だけど、今のレイを貴方に見せたら心が持たないと思つて言わなかつたのよ…』

覇気のない声が電話の向こう先から聞こえてくる。　シンジは、そんな覇気のない声を聞き肺にある酸素を全部吐いているでは無いかと思わせる溜息を吐く。

「…あのねえ、ミサトさん。　俺がそんな柔な精神持つてたら、今俺ネルフにいませんよ？　ましてや、最初の使徒を倒した所でトラウマを作つてエヴァに乗るのを拒んでいたでしょうよ…」

確かに彼は普通の精神ではあり得ないほど《異常》だ。　14の少年をいきなり、戦場に出され怪物である使徒と戦わせられ傷を負い苦しんでいたのに、恐怖に負けず逃げず周りの人間達に不安にさせない笑顔を振りまく事が普通の子供に出来るであろうか。

否

そんな人間はいない。　大人であろうと逃げ出すであろう諸行なのだから。　しかし、シンジは使徒にも心にも負けずに戦っている。

そんな彼にも、何処か歪んだ所もある筈だが表に出していない狂者かもしれない。

「だから、電源を入れてくださいよ。 ミサトさん」

シンジは声のトーンを戻してミサトに言うと、返ってくる声には否定だった。

『ごめんなさい……出来ないわ、今のあの子には、シンジ君と会わせることは逆効果になるって私は思うのよ……』

「はあっ!？」

『落ち着いて聞いて頂戴ね。 確かにレイは怪我はしてなかったのよ。 でもね……作戦でのミスを相当に思い悩んでいるみたいで……その後にシンちゃんの病室に行ったらしく、貴方の事を見て心の方に深刻なダメージを負っちゃったみたいで、今はちようどりツコがレイの部屋に行っているはずよ』

シンジは、ミサトの言葉に頭の中で自問自答していた。

(…俺が苦しんでいる時に、レイさんは来てくれて苦しんでいた俺と動かない左腕を見て心に傷を負った……違うな。 悶えてる時には、来てないのは覚えている……医者や看護師が病室に入ってきていたのは覚えているが、レイさんの姿は無かった……。 そうなると俺が、まだ薬で寝ている時に来て左腕を見てしまつて……)

自分の中である程度の確証を持つと、彼はより一層に気持ち駆られミサトを説得する。

「それだったら、俺が行つて無事な事なのを知らせればレイさんだつて……」

『もうすぐリツコから連絡が入ると思うから、悪いけどもう少しだけ待っていて欲しいの。 かなり興奮してるらしくて手間取っているらしいけど、もうすぐ終わると思うから』

「…何がですか?」

今の彼には表情は無く、氷のように冷たく人として恐怖させる貌だった。 ミサトの言葉に、再び声のトーンは下げながら問いかけた。

『治療よ……そう言ってもいいなら』

「…何をしたんですか?」

少しずつ彼の口調は変わり始めていく。



『鎮静剤を与えているの。　　そうでもしないとまともに会話することさえ出来ないらしいわ。　　作戦が終わってエヴァを降りたときにも興奮状態だったけど、今と違ってまだちゃんと会話は出来ていたのに……』

ミサトは、あの時のレイの姿を思い出したのか言葉に感情が現れるように弱々しかった。　　すると、シンジは第3新東京市に来て、本気で電話の向こうにいるミサトに怒鳴った。

「だったら尚更、俺を行かせてレイさんに会ってやれば幾分か落ち着くだろう！　　なんで、こんな回りくどい事するかな!?　　確かに、俺はレイさんを助けて怪我をして激痛に悶えてたよ！　　それがどうした!!　　助けた人間がレイさんの心配しちやいけないのか!?　　現時点でレイさんは俺に罪悪感でも感じているんだろ!?　　折角助けた人間を放つたらかきに俺にさせるのかよ!?　　だったら、ミサト!!　　俺は、今の俺は何なんだ!?!」

今までの彼からは到底想像できないほどに、敬語も抜けミサトに吼えるように叫んでいた。　　余りの豹変にミサトは驚き、怯えるように返事をする。

『エ……エヴァのパイロットで………す』

「その役目は!!」

最早、歳の関係は意味を成さず歳下のシンジに敬語で話すミサト、歳下の彼は歳上の彼女に敬語すら無かった。

『使徒と……戦い、人類を………守る事です……』

「そうだろうが！　　確かに俺は神でも無い、単なる一人の人間だ!!　　全人類を助けることなんて無理な話だ！　　だけど、身近の人間も助ける事も出来なければ人類もクソもないだろ!!　　目の前で手を伸ばしているかも知れない。　　助けを求めているか知れない……些細な事でもしてあげればその人は報われるじゃあないですか？　　ミサトさん………」

最初の怒鳴り声から少しずつ落ち着いてシンジの声も言葉も戻っていく。　　そんな中ミサトは無言のまま、シンジの言葉を聞いていた。　　確かに彼の言う事も彼女の中では理解はしているつもりだ。

しかし、今の彼女に会わせれば彼の身に何かあってしまうのでは無いかと葛藤していた。

『……わかったわ。でも、一つだけ約束して……リツコの邪魔はしないで。それだけ今のレイは何をするか分からないほど危ないのよ……』

やっと、ミサトから許可が下りシンジはホッと息を吐く。少し笑顔になるシンジは軽口を言う。

「もしレイさんがヒステリーになっていたとしても、俺はそれを受け止めるだけですよ。良い男になるためにもね」

シンジの中では、まだまだ小童として精進を積み重ねようとするが周りの人間から見たらほぼ完璧超人に近かった。そんなシンジの軽い言葉で、少しミサトの気持ちも軽くなる。

『じゃあ……動かすわ』

ミサトの返答とほぼ同時のタイミングでエレベーター脇の停止していた端末とエレベーターに再び電気が流れ始め、飲み込まれたままだったシンジのIDカードが認識されて排出されてくる。カードを取る前に、電話をまだ切っておらずシンジはミサトに一言。

「……そうだ、ミサトさん。どんな理由であれ怒鳴ってしまいゴメンなさい……。帰ったら、取って置き物の物を振る舞うんで……」

しかし、ミサトは無言のまま電話も切らなかつた。シンジは、ミサトに怒鳴った事は後悔はしていないが少し寂しい気持ちになり通話終了ボタンを押そうとした時。

『……期待してるわ』

そんな一言が聞こえた後、ツーツーと鳴り電話が切られた。

「はい」

シンジは、そう呟き携帯を仕舞いカードも取りエレベーターに乗り込む。レイの部屋の階にボタンを押して、エレベーターは動き出すとシンジはエレベーターの壁に寄りかかった。

「はあ……なんだかなあ……。もっと上手く出来ないもんかねえ……。ミサトさんは俺を心配してくれてるのを分かっているのに。そう簡単に世の中、上手く行かないなあ……」

右手で頭をガシガシと搔き、先程の自分に後悔していた。そして、何回目か判らない溜息を吐いてから深呼吸をした。

「…よしっ！今はレイさんに会って安心させないとな！今は左腕は動かなくても、大丈夫って教えれば！」

シンジは壁から離れ、気持ちに気合を入れるとエレベーターはレイの部屋がある階に止まり扉が開かれる。

「さあ、行きますか。今度は大切な女の子の心を助けに！」

茨の道に裸足で行くかのように、これから始まる出来事にシンジは逃げず諦めず立ち向かおうと決心してエレベーターから降りた。

☆☆☆☆

暗い部屋の中、床にセフィロートの木が書かれている司令室にゲンドウと冬月が話していた。

「…いいのか、碓？」

「何がだ…」

冬月はゲンドウの言葉に溜息を吐いていた。諜報部員からの連絡は、ゲンドウの方にまで届いておりシンジがレイのマンションまで辿り着いていたことは知っている。それについて冬月はゲンドウに聞いたと言うのに知らないフリしている為、心底不器用だなと冬月は内心想っていた。実際、諜報部員にシンジを捕獲命令出したのはゲンドウであった。彼はシンジの事を心配し、諜報部員に命令を出したと言うのに失敗の連絡が送られてもゲンドウの表情は変わらずに一言。

「そうか…」

この一言だけで、諜報部員は何もお咎め無しに終わっていた。その後ミサトからも連絡が入り、シンジを止められなかったとゲンドウに報告するもミサトにも処罰を与えなかった。

「シンジは自分の意思で、レイに会いに行っているんだ。私達がこれ以上手を出すこともないだろう。諜報部員に捕まればそこ迄の意思。葛城一尉に止められていたならそこ迄の意思。だが、シンジはそれすら超えて行ったのだ。好きにさせるさ…」

「とことん不器用な男だ、碓。しかし、あそこまで似ているとはな。

ユイ君も一見、マイペースで他人の意思を尊重しているが自分の考えに決心すると、貫き通そうとする強さを彼女は持っていたな。それが息子のシンジ君も似るとはな…」

少し表情を変えたゲンドウは、何時もテーブルに両肘を置き口元を隠す姿勢を辞め、椅子の背もたれに体重をかける。

「…そうだな。私にとってはユイは光を差し込んでくれた人間だ。闇の底に転がり落ちていた私を、拾い上げ愛してくれた。そこにシンジが産まれた。赤子の時から不思議な子だった：ユイが育児に励んでいて、私は赤ん坊であるシンジに嫉妬をしていた。ユイからの愛をシンジに目一杯注がれていたのを。それと言うのに、シンジは私に近寄りユイを連れてくるのだ…」

余りゲンドウは、人に昔の話をしない人間だと冬月は知っていたが本人の口から聞いて、冬月は驚いていた。ゲンドウの後ろに立つ冬月の顔は見えず、彼は話を続けた。

「これが一回や二回では無い…。必ずしも私がユイの近くにいるとシンジは気付き近寄ってくる。そして、シンジが私に抱かれるとユイが笑い私は心に余裕が出来ていた。そんな私を見たシンジは本当に幸せそうに笑った：シンジを嫉妬した実の父親に。私は元々人との関わりが苦手な人間だったのだが、2人が私を少しずつ変えてくれた」

ゲンドウは少し俯き、声のトーンも下げながら語り続ける。

「そんなある日、ユイは私の目の前から消えた。その日から私の心

は荒れて身はボロボロだった。なぜ、神は私にユイを与えては奪つたのだと…。 そんな時、あの話を委員会から言われてユイを取り戻す為に、シンジを親戚に預けてこっちに来ようとしてシンジと別れようとするといいつは言ったんだ…」

「何と言ったのかね、シンジ君は…」

フツと笑いながら、あの時に言ったシンジの言葉をゲンドウが話す。

「シンジはユイの声に似せて言ったんだ。『お父さん、お母さんから伝言。』シンジから聞いてるって事は、私はこの世にはいないでしょう。 貴方、何も言わず居なくなってしまうってゴメンなさい。 だけど、私はいつも貴方の側にいるわ。 最後に…シンジをお願いします」って、言ってたよ』私にはシンジの後ろにユイが見えた気がした。

シンジがその伝言を言い終わると、あいつは泣き始めたんだ。

『…お父さん、ゴメンなさい。 あの時、お母さんを止めれなくて…僕が気づいていたら止めれてかもしれないのに…』私にはシンジの事がよく分からなかった。 子供と言うのに、自分の所為で母親を無くしてしまったんだと私に謝ったんだ。 そして、私はその場を後にしようとする大声で泣きながら笑って一言…『いつてらっしやい』と、私の背中に言ってきたんだ」

ゲンドウの話聞いていた冬月は、若干涙目になりながらも耐えていた。

「だから、私は思ったんだ。 シンジは確かに私とユイの子供だと。

ユイが居なくなり別れるまで、私を励まして幼いながら家事もしたのもシンジ。 しかし、あの子には私は何も言わず何もしてあげなかった。 そして、あの事件だ。 今の私には立場がある為、ある程度はシンジの助けや妨げになるだろう。 それしか私には出来ないからな…」

昔話は終え、ゲンドウは少しスッキリしたのか表情が笑みに近く再び何時もの姿勢に戻った。

「シンジは私の自慢の息子だからな、レイの件も最良の行動を取るだろう」



エレベーターから降り、おぼつかない足取りでゆっくりレイの部屋に向かうシンジは何となく嫌な感覚に囚われていた。

「……？　なんだこれ……何か拒絶しているのか、空気が重い感じがする……」

例えると一つの部屋に、2人の人間を配置する。その2人は仲が悪く、お互いが相手の事が嫌いであり拒絶しあっている関係である。その中に第三者の人間が入れば一目瞭然。第三者の人間は、その部屋の空気が重いと感じるだろう。シンジは、それに近い感覚を感じていたがそれ以上にピリピリと背筋を冷やすほどの何かを身に捉えていた。外は暑く、汗を流すほどだが今は汗が止まり少し肌寒いとシンジは思った。

(これって、レイさんが……?)

そう思いながら、足を止めずレイの部屋に続く廊下に出ると彼は予想外の光景を見てしまい絶句してしまう。

ちやうどレイの部屋の前で額を押さえて蹲っているリツコの姿を見つけた。

「リ、リツコさん……」

余りのことに、シンジはリツコの名を呼び近寄る事しか出来なかった。

「シンジ君、駄目よ……まだレイは落ち着いていないわ……」

疲れた様子でふらふらと立ち上がったリツコは、何か固い物がぶつ

かっいたらしい内出血と、わずかにそこから滲んだ血をハンカチで覆い隠す。

「リッコさん…大丈夫ですか？ それにしても、レイさんが人を…リッコさんを傷つけるなんて」

「平気よ…悪いんだけどもう少しだけ時間を頂戴。何とか部屋のドアを開くことが出来たから、後は刺激しないように近づけばいいだけよ……」

「すみません…それは出来ません」

シンジの断る言葉に驚くリッコ。

「シンジ君？ 貴方にはわからないかもしれないけど、女の子ってヒステリーを起こすと手近にある物を投げるわ、殴るわ、蹴るわ。本人の意思とは違った行動を起こしてしまう物なのよ。私だって気が優れなければなる行動だし。だから、今シンジ君が部屋に入れば彼女から何をされてもおかしくないのよ…」

リッコは、子供に分かりやすいように説明をしてシンジをレイの部屋に入れるのを阻止しようとする。そんな話を聞いて尚、気持ちを变えないシンジであった。

「確かに今の俺じゃあ、レイさんに負けるでしょうね…でも彼女が救われない。何も解決しない。だったら、行動を起こして先に進むのが早くないですか？」

「…シンジ君の言う事もわかるわ」

先程からリッコは、傷を負ったのにも関わらず余裕ある態度を崩さずにいた。年齢を重ねただけで今の彼女のような落ち着きや包容力を持つことは難しいであろう。

「だけど、言わせてもらおうわ。焦るのと急ぐのは違うわ。時には人の心は、時の流れによって落ち着くものでもあるわ。シンジ君がやろうとしているのは、自殺行為であり一層にレイの心に傷を深くするだけだわ」

確かに、人間は時間と言う流れによって心は変わるものである。

幼い頃に嫌な体験をして、心に傷を負ったとして数年後には何も無かったようになるケースもある。しかし、変わらないケースもある。

る。ある出来事でトラウマになってしまった人間が、数年後にトラウマを克服できるかと言われると否である。だが、時間では無い他のやり方でトラウマを克服する事も出来る。

「リツコさん？」

「何？」

シンジは、体調が優れず顔色は悪いがリツコに向かって優しい笑顔を向ける。

「好きな人はいますか？」

「!?」

いきなりのシンジの質問に驚くリツコ。驚いているリツコを少し笑いながら、シンジはゆっくりと話し始める。

「俺はレイさんが好きです」

リツコの脳内では、シンジの言うことが理解出来ずに混乱していた。

「それにリツコさんも好きです。ミサトさんも、マヤさんも、学校にいる友達も、お父さんも、お母さんも…」

笑っていた顔から苦笑した顔に変わっていく。リツコは少しずつ正気に戻りながらもシンジの話を聞いていた。

「俺は、全人類が好きかと言われたら違いますね。嫌な人、嫌いな人、見たくも無い人もいるでしょう。俺だって人間です。醜い所もありますよ…だけど、好きな人が直ぐそこで苦しんでるかもしれない。助けを求めているかもしれない。全部に手を差し伸べる事は出来ません…ですが、この2本の腕で数少ない人達を助けて行きたいと思います」

リツコに向かって頭を下げるシンジ。

「レイさんは、俺に会いたくないかもしれない。助けを求めているいかもしれない。ですが、俺はそんなレイさんの苦しむ姿を見るぐらいなら嫌われても敵わない。彼女の笑顔が戻るのであれば…だから行かせてもらいます」

シンジは、そう言うリツコの横を通りレイの部屋に向かった。

シンジが彼女から通りすぎると、リツコは振り向きシンジの後ろ姿を



眺めていた。

(…強い子ね。そして、弱い。何が彼を支えているかは、解らないけどそれが崩れた時は大変な事になるわね…シンジ君は。まあ、今は彼に任せるのが得策ね。そんなシンジ君を壊れないようにするのが私達大人の仕事ね)

リツコはシンジの後ろ姿から視界から外し、その場を後にした。

☆☆☆☆

シンジはレイの部屋の前まで辿り着いた。深呼吸を3回して、ドアノブに手をかけると突如背筋が先程以上に冷たく感じていた。

(なんか人を立ち入れさせないための壁を触ってるような……A. T. フィールド?)

シンジの感じているのは、レイから発している拒絶する気持ち שהוא人間にも感じるほどの重い空気とも言える。A. T. フィールドとは、絶対領域と言われ使徒やエヴァにも使われているがレイが放つ重く冷たい空気もA. T. フィールドとも言える。人間の感情は、負の感情の方が強く今の彼女は最大に周りに出し自分に近寄せないテリトリーのような物を作り上げていた。

(レイさん…今行くよ)

しかし、そのテリトリーを越えようとシンジは踏み出す。一度ドアノブから手を離し、二度ノックする。

「レイさん…入るよ」

すると、より一層重い空気が濃くなっていく。シンジは気にせず

にドアノブを回して部屋に入る。

そのドアの向こう側は、異世界と勘違いさせるほどの空間だった。野生動物が傷つき身体を治す為に身を潜めている巣穴に入り込んだ気分が陥っていた。

部屋の中は薄暗く不思議な緊張感が走り、その巣穴に住む美しいと思える獣は他者の存在を頑なに拒絶していた。だが、彼は進み始めようとする。敵意は見せず傷つけないと意思表示するように体に必要な力は抜き廊下に足を乗せ歩を進ませる。その中、怯えきつた獣による容赦の無い攻撃をされてたとしても彼は微動だにしないであろう。彼女がそれで気が済むのであれば、淡い良く引き受けるであろう。

「レイさん……」

声は小さく、彼女を驚かせないように少し聞こえるぐらいの音量で声をかける。しかし、彼女からの返答は無くシンジは静かに部屋の奥に進む。

「俺は大丈夫だよ？　元気になったんだよ。　また学校で一緒に登校して、お弁当食べよ？　左腕なら時間おけば治ると思うし、レイさんが思うほどの物じゃないよ」

気軽に彼女に話しかけるように、色々と話しかけるが返答は先程のよう返ってこない。玄関から台所まで足を進ませて、部屋に入る瞬間に室内の空気が怯えの色に変わる。カーテンは締め切っていたが所々が破れており、締め切った重苦しい雰囲気な部屋。　今ここはレイの心中とも言えるであろう光景が広がっていた。　部屋は乱雑に物が散らばり、冷蔵庫は倒れ戸は開き中から物が飛び出していた。　タンスは中身を放り出されて下着がそこら辺に散らばっているが大半は、引きちぎったのか破れている下着だった。椅子も倒れており、本来の役目を果たしていなかった。

シンジは部屋の状態を見渡すと、部屋の隅に置かれたベットの布団で包まった存在を見つける。顔があると思われる穴が見られるが、部屋は薄暗く彼女の顔はシンジの目からは見えなかった。よく見ると布団で包まったレイは震えていた。　余りに痛々しい姿にシ

ンジの心に痛みが走る。

「レイさん…」

「……帰って……」

呼びかけようとしたシンジを途中で遮るレイの声は酷かった。

本来、銀の鈴を打ち振るような可憐と言えた声とはまるで他の物にしたような声だった。シンジも数時間前まで悶え苦しんでいた為に少し声が嗄れていたが、レイの声はそれ以上だった。

無惨に潰れてしまったのか、目の前の少女は老婆と錯覚させてしまうほどだった。

「来ては駄目……帰って……私……会えない……会話できない……」

普通に喋るだけでも痛みを感じているのだろうか、レイは苦しげな呼吸と一緒にかろうじて聞き取れる程度の音量しか出すことが出来ないようだった。シンジの心に、何か鋭い凶器を押し付けられている気分になっていた。

「もう何もしない……余計なことも考えない……使徒とは戦うから、それ以外は近付かない……」

「…レイさん」

彼女の哀しい純粹さが、より一層にシンジの心に凶器が刺さり始める。シンジは、ブンブンと頭を振り自分を取り戻す。

恐らくはレイは病院からこの部屋に逃げ込み籠もり始めて以来、喉が潰れるほどずっと嘆いていたのだろう。何もせずにじっとしていれば気が狂ってしまいそうな自責の念に囚われたまま、彼女は嘆き、叫び続けて喉を潰してしまっただろうと。

「……レイさん、喋りたくないならそのまま聞いててくれ……。俺はレイさんに負の感情なんか持っていないよ？　ちよつと来るの遅くなちゃったけど、レイさんに会いたくて此処まで来たんだ。嫌いになっただら来てないよ」

レイに今のシンジが部屋まで来た気持ち伝えようと話す。

「レイさん……今君は俺の事を思って、この部屋の状態になるほど嘆いていたんでしょ？　俺はレイさんに逆に謝らなくちゃいけないんだ

…」

(このまま、レイさんの気持ちを換えられれば…)

今の彼女は、自分の所為でシンジを傷つけてしまったと思っ  
ていて、自分に自分を責めている。ならば、少しでも自分の責任から離そうと  
考えたシンジはレイに言う。

「あの時、どっちも傷つかない方法に移らなかつた俺が悪いんだよ。  
それなら、今頃俺達は無傷でいられたんだ。それなのに俺つて  
ば、馬鹿すぎてこの状態を引き起こした訳だし…だから、レイさんは  
悪くないんだよ?」

すると、ピクリとレイは動き始めた。それを見たシンジは内心で  
はガッツポーズをしていた。そして、少し…少しずつベットに近  
寄っていく。

「……私…の、……所為じゃ……ない?」

ポツリとレイは呟く。それを聞いたシンジは、レイの正面に移動  
し人一人分の距離を置き彼女の目線に合わせるように身を低くする。

「そう…レイさんの所為じゃないんだよ」

シンジがそう言うと、レイは下を俯いていたのか顔を上げる。する  
と、シンジから布団の中からレイの顔が見えるようになった。しか  
し、レイの顔は寝れており髪がボサボサだった。シンジはレイの酷  
い状態の顔を見ると安心する。これで一件落着と思ひ、シンジはレ  
イに近寄ろうとするが。

「いや……いや……あああー!」

突如、レイは極限状態から感情が噴き出したのか布団を剥ぎ近くに  
置いていた果物ナイフを持ち始める。突然の事に驚くシンジだつ  
た。

「あああああ! ……やっぱり……私が…シンジ……君を…傷つけた!

だから……私に…寄らないで!」

ブンブンと果物ナイフを振り回して、シンジとの距離を離そうとす  
るレイ。

レイから見た見たシンジの顔は、顔は青白く唇が紫に近い物で暗い部屋  
で見れば死人に近い顔つきにレイには見えてしまった。 実際、レイ

の部屋までに諜報部員からの逃走で血を吐きすぎ体を酷使した為、顔に出てしまいレイには先の戦闘を思い出させる切っ掛けになってしまった。

「帰ってえええ！……ああああああ！ 私は…シン…ジ君……を傷つけて……しまう！」

逃げ場も無く自分が何をしているのかも理解していないレイは、無我夢中でナイフを振り回す。シンジは何を思ったか、立ち上がりナイフを振り回すレイに近寄ろうとする。シンジが近寄ろうとする度、レイは後ろに下がるが壁にぶつかり逃げ場を失いながらナイフを振り回す。しかし、シンジは気にせずレイに近寄るとナイフはシンジの身を刻み始めた。一箇所、二箇所、三箇所と次々と傷が増えていくがシンジは止まらなかった。それを見たレイは、シンジを傷つけてしまったと言う感情が振り切られ理性が無くなってしまった。レイは、両手に持ったナイフをシンジの顔に目掛けて刺しにいった。

「あああああああああああああ!!」

慟哭に近い声をあげると、窓が開けられており風が吹き込みカーテンが舞い上がる。

外から差し込む太陽の光が、レイの部屋に照らす。

そこにはシンジの頭がレイにナイフで貫かれた影が写し出されていた。

## 疑惑、救い、そして新たな子供

「う〜ん…」

発令所で青葉、日向、伊吹の座る後ろで、ミサトがウロウロしながら唸っていた。それを見ている三人は苦笑する。すると、スライドドアが開かれリツコが発令所に入って来る。頭には包帯が巻かれており痛々しい姿だった。リツコはシンジと別れた後、本部に戻り医療室に向かい治療してから発令所に足を運ばせていた。

「…ん？ リツコ！ 大丈夫!？」

今まで唸っていたミサトは、リツコの姿を見ると驚き慌てながら側に寄り心配する。そんな姿を見てリツコは苦笑する。

「ええ、大丈夫よ。ちょっと痛むぐらいだから…」

実際はレイが投げた物が少し重이었다ために、リツコの額には針を縫うほどの傷を負ってしまった。不幸中の幸いに髪で隠せる位置であった為に目立つ心配は無かった。

「とりあえず報告ね。シンジ君はあの状態でのレイとの接触。事が終わり次第で、シンジ君から連絡がくると思うわ」

リツコが、そう言う聞いていたミサトが苦い表情を浮かべる。

それを見たリツコは、ミサトはシンジの事を本気で心配しているのに気づく。

「大丈夫よ、ミサト。彼は必ずレイの心を癒してくれるわ」

「…まあ、その事も考えてたけど。最近思うのが、私達大人は子供に辛い思いしかさせてないように思えて…。ましてや、シンジ君には色々動いてもらってるのに…」

苦い表情から辛そうな表情に変わるミサトから出た言葉により、聞いていた三人は顔を下に向ける。使徒との戦いでは、エヴァパイロットが命懸けで倒すのが使命でネルフで働く大人はサポートしか

出来ないでいる。最初に襲来してきた使徒から前回の使徒までの三体はシンジの活躍で、勝利し街に被害は少なくネルフスタッフ達の仕事も多く増える事は無かった。しかし、当の本人であるシンジに対しては戦闘だけでは無く人間関係までも関わっていた。

戦闘での第3新東京市の被害の少なさで街の人間からの苦情は少なく、噂では逃げ遅れた人間を助ける為に身を呈してまで守ったとの話が広がっていた。それが良い方に転がり、ネルフは民間人を守るためなら手段を選ばない組織と思われるようになっていた。実際は、最初の使徒との戦闘で助けた鈴原二人を助けたのが尾ひれがついて噂になったらしい。

次に国連軍との話について。元々、国連軍とネルフとの間では仲が悪く（実際は、国連軍がネルフの事を良く思っていないだけ）、ネルフが国連軍に仕事を頼むが余り良い返事を返さないほどだった。しかし、国連軍の代表とシンジで話し合いの結果ネルフとのパイプを繋げる事に成功。そのお陰か、民間人の避難の速さに使徒発見の連絡、そして国連軍との連携も早くなり二つの組織の溝は浅くなっていた。

それについてネルフから、シンジに礼を送ろうとするが本人は断った。ネルフも、命懸けで戦い勝利し人間関係までも改善したシンジに何もしないと云う選択肢は無かったが彼からの一言によって、ネルフにとってシンジの存在は大きく感じていただろう。

『自分は特別な事はしてません。ただ、やらなくちゃいけない事を自分がやっているだけです』

そんな一言を言われ、その時はネルフ代表であるゲンドウはいつもの姿勢で口元を手で隠しながらも笑みを浮かべ、ゲンドウの後ろで立つ冬月は涙目になっていた。

それらがあり、今のネルフにはシンジが必要不可欠な存在になっていた。

「でも…シンジ君。 気になる事があるわね」

突如、ミサトの話を聞いて気持ちが悪んでいた人間はリツコの呟きで下げていた顔を上げる。そして、リツコの呟きにミサトは尋ね

る。

「何よ…気になることって」

「…あの子は、14歳の男の子。本来、その歳の子は感情は不安定な筈なのよ…それなのに、早熟された性格。大人顔負けの対応の仕方。何よりも、一番不思議なのは逃げない事」

リツコはシンジと出会ってから、色々と彼とは話したり一緒にいる時もある。最初は、礼儀正しく心が強い少年だと感じていた。しかし、今回の件でリツコの胸の奥に引っかけかき出される。

「例えば…ミサト。10m先に目的を果たす為に必要なものがあつたらどうする？」

「そりゃあ、歩くか走るかで取りに行くわね…」

「それが当然ね。だけど、通る道に針や棘、凶器が転がっていたら？」

「それも裸足で…」

ミサトはリツコの言う条件を言われた瞬間、嫌な顔をする。

「何それ、嫌がらせ？ そりゃあ…諦めるか何か別の行き方をするわ。でもそれがシンちゃんとは何が関係するの？」

ミサトは不思議そうな顔して、リツコに聞くと彼女の顔は真剣な表情になりミサトは、余りに真剣な表情に身震いする。周りの人間も、リツコから発される雰囲気を感じ空気が張り詰められる。

「普通の人間は痛みを感じれば痛み、もし痛みの原因があれば取り除くか避けようとする。だけどそんな危険な道であろうと、シンジ君は歩いていく。本来は人間感情で左右される。痛みを感じれば、気持ちちは落ち不安定になるのが当たり前。痛みから避ける事も」

人間が感情の動物と言われる由縁は、感情が人間の行動の最大の動機となる。喜怒哀楽の激しい感情を「情動」と言う。感情は、情動(情緒)、気分、情熱、情操の総称。元々は英語で、Feeling比較的短時間で過ぎて行く感情。Emotion心動きを伴う感情で、主に情動と呼ばれる。Affection何かに対する(向かう)感情と分けられている。感性は、主に美的な感じ方の表現で、この場合の感情とは関係がならず。



多くの場合、喜怒哀楽の感情が直接的に人間を動かしている。理性ではわかっているつもりで感情を抑えても、感情は理性よりも強く湧き起こってくる。人間は理性でわかっていること、正しいことでもそこに「快」の感情が伴わない限り、続けることが出来ない。実例で言うと多くのダイエツトしていた人間や、禁煙の失敗例が良い例だろう。

多くの人間は、外界を直接感じて、感情が起こると、感じているが臨床心理（の解釈）では、自分達は、外界を直接感じる訳ではない。外界（世界）を、解釈（性格や考え方）し、解釈した状況（世界）について、感情が沸き起こります。

人間関係の良好さやトラブルは、大抵の場合この感情によって生じて来るもの。

そんな事を踏まえても、彼の人間性は異常と言えるだろう。人間は、凄まじい痛みを感じれば当たり前のように大声で叫ぶであろう。そして、普通の人間は余りの痛みに脳の中で一瞬にして負の感情が吹き出る。そして自分を守る為に気絶するか、最悪の場合は廃人か気のふれた狂人になるだろう。痛みを感じた人間は、本来その痛みに恐怖して痛みから遠ざけて身を守ろうと行動する。例であげるなら、車での交通事故で運転していたドライバーが重症を負い、それ以来から車が苦手になればトラウマと言える。もしくは、今までの運転より安全運転になるかもしれない。もう一度、あの痛みを感じたく無いために。

誰もが、痛みからは逃げる動作がある。シンジは、その逃避が無い。恐怖は感じているが、痛みに対しては我関せず。痛みは、身体からの危険と知らせる信号と言うのに。

「彼は、本来持っている感情に鍵をかけたように逃げる事をやめている。だから、エヴァに乗り続けられるのかもしれない。自分の事よりも相手を優先して、自分の身を削っているようにも見えるわ：まあ、予想だけだ」

「……………」

周りの人間は、今まで彼の事は唯心が強い少年だと思っていたがリ

ツコの話で印象が変わり始めていた。

「そして、一番重要なのがシンジ君の中で作っていた何かが崩れた場合ね……」

「……どうして？」

恐る恐るミサトはリツコに聞く。

「幼い頃からなのか、今のシンジ君には暗示らしき物が見られるわ。

確かにシンジ君の過去にある事件が関係しているかも……滅多に崩れる事は無いでしょうけど、崩れた時は彼は彼じゃあ無くなるかも知れないわね」

絶句するミサト。 マヤ、日向、青葉は驚く。 リツコは、言い終えると少し微笑む。

「だからこそ、いつも私達を守ってくれてるシンジ君を私達が支えていけば良いのよ」

女性特有の柔らかい笑みを浮かべたリツコに、ミサトは身に入った力が抜け日向、青葉は笑い、マヤは見惚れていた。

「じゃあ信じて待ちますか、彼を」

少し気持ちが落ち着いたのかミサトは首から下げている十字架を握り締めながら、シンジの帰りを待った。



セカンド・インパクトから15年が過ぎ、日本の季節は無くなり一年中夏のような暑さが続くようになっていた。 日中は日射しは強く、道路には陽炎が見えるがそこに程よい風が吹き込まれる。 その風

は今の暑さには、有難いほどの涼しさを齎す風は道路から出る陽炎を消してその場の温度を少し下げた。

レイが住むマンションにも、その風は流れていき窓が開かれているレイの部屋に吹き込む。千切られて破れたカーテンを舞い上げ、その部屋の温度は少し蒸し暑かったのが人があるには適温になるほど温度を優しく下げた。

ポタ、ポタ、ポタ

「はあっ、はあっ、はあっ」

レイの持つ刃物の先から液体が滴り落ちる。無残に物が散らばる床に、赤い血が点々と染められていく。両手で持った刃物を突き出したままレイは息を切らしながら、身体を震わせていた。

「大丈夫だよ」

その声はレイ以外の者だった。

レイの身体に抱きしめている形に近い状態のシンジからの物だった。彼は、レイの右脇腹に顔を寄せ右手は反対側の脇腹から通して背中を優しくポンポンとリズム良く叩いていた。

しかし、シンジの顔には右頬に深く切り傷を負っていた。そして、後ろ髪を縛っていたヘアゴムも切られ髪は広がる。レイに顔を目掛け刃物を突き出された時、シンジは万全なコンディションでは無い為に完全に避ける事が出来なかった。

今だにシンジは、レイの背中を優しく叩きながら話しかける。

「怖かったんだよね……ごめんね。今まで人の心配をしてこなかったんでしょ？ だから、初めて俺に心配して気持ちが悪くがらがつてしまったんだよ。でも、大丈夫。だって俺は生きてる、今レイさんの側にいるんだから。ねえ？」

シンジの言葉が通じたのか彼女は少しずつ身体の震えは収まり、息も落ち着いていく。すると、両手で持っていた刃物はレイの手から

離れて床に落ちた。

ギャツリン

刃物は床に落ちレイの身体から力が抜かれていく。それに気づいたシンジは、右腕で彼女の体を抱きしめてゆっくりと床に座らせるようにする。女の子座りしたレイは、顔を下げて座りながら黙ってしまった。彼はレイの頭の位置に合わせるように中腰になり話しかける。

「レイさん」

すると、レイはシンジから問いかけに吃驚したのか身を震わせた。シンジはレイの頭に右手を乗せて優しく撫で始める。

「ありがとうね、心配してくれて。レイさんは優しいから、自分を責めて俺を傷つけないとを考えて離れようと考えたんでしょ？ でも：そんなのは俺が嫌だ。折角、仲良くなったのに離れるなんて：。レイさんは、俺が嫌うと思ったんだらうけどそんなこと無いから。だって、好きなんだから」

突如、レイの顔は上げ彼と目と目が合う。今のレイの顔には色々な思いが混ざり合ったのか無表情とは違う顔つきになっていた。レイの中では、シンジの顔を見て色々な感情が舞い上がる。罪悪感、高揚感、悲しみ、怒り、嬉しさ、自分の所為で彼を傷つけてしまった罪悪感やシンジからの言葉による高揚感など彼から離れてしまいかもしれなかった悲しみ、自分がしてしまった事の怒り、そしてシンジの気持ちをもった笑顔による嬉しさ。

今、彼女の心に変化が起きる。今まで生きてる間に、感情を表に出すのは数えられるほどだったが彼と出会ってから増えていく。彼女の中では不思議で仕方なかったが、感情を出しているときは何時も彼が側にいた。彼が使徒と戦ってる時は心配して、ゲンドウの話でシンジを叩いた時の罪悪感、彼と一緒にいる時がレイの感情が出す機会が多かった。

レイの心は今まで殻に入ったヒヨコのように、卵の殻にヒビが入る。そして、少しずつヒビから感情漏れ出されるのをレイは実感していた。母から生まれる赤ん坊のように、卵から孵るヒヨコのように

に、それが芋虫からサナギ、サナギから蝶になるようにレイの心に変化していく。

最初は猛暑である砂漠だった場所に、降らないはずの雨が降り始めていき砂に水が染み渡る。その雨は適度に降り、その砂漠の温度を下げていく。すると、その砂漠の近くにあった森が少しずつ砂漠に侵食していった。少しずつ砂漠は森に侵食されて、当初の暑さは無くなっていき動物も住める環境になっていく。砂漠の中にあるオアシスとは違い、そこは猛暑で生き物が住むには過酷な環境では無く既に生き物が普通に生きていくに適した森になっていた。

砂漠のような何も寄せ付けない心を持つレイに、雨を降らせ誰もが寄れる場所に、心を変えたシンジ。

レイは目から涙を流し始め、両手をシンジの顔に持って行き触り始める。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「大丈夫だよ、謝らなくても」

彼の右頬についた傷を触れないように、レイは謝るがシンジは優しく柔らかな笑顔で返事する。今のシンジには、男とも女とも見える姿で父親のような大きく見せる偉大さと母親のような優しく包み込む柔らかさを感じさせていた。

「あああああああああああああああつ!!」

すると、レイはダムの水が決壊したように目から涙を流しながらシンジの顔に抱き着き泣き始めた。シンジはレイの左脇から手を通して、彼女の頭を撫でていた。

「よっよっ」

彼女は泣きながら、シンジを抱きしていたが自分より少し小さな身体とは思えない包まれた感覚に囚われていたレイだった。そして、レイは何かが確かに変わり始めていた。

レイが泣き始めてから数分。　気持ちが悪く落ち着いたのか、彼を抱きしめた両手を離し、シンジと離れる。

「…シンジ君」

「良かった、落ち着いたようだね」

レイは頷く。　シンジは、安心したのか少し力が抜け顔を上に上げ深く息を吐く。　すると、シンジは服を引っ張られるのを感じてレイの方に向くとレイの表情は柔らかい笑顔をしていた。

「シンジ君…ありがとう」

誰もが見惚れてしまいそうな笑顔を浮かべて、シンジはレイの中にある花が咲き始めたことに嬉しさが立ち込めていた。　先の戦闘前に浮かべた笑顔より、人間らしく女性ならではの向けられた人間を安心させる笑顔を今レイが浮かべていた。

「どうもいたしまして」

シンジも柔らかく笑顔で返す。

それからは、シンジはレイに風呂に入るように言う。　流石に先の戦闘から入ってないせいかわレイの髪は少しベタベタしてその事が分かれば、一目散に入れさせようとした。　レイが脱衣所に向かったのを見て、シンジは頬の傷の治療してから散らばる部屋の物を片手で片付け始めた。　すると数分が立ち、ある程度片付くと脱衣所の方からカーテンが開かれる音が聞こえ、シンジはその方向に顔を向けると固まる。

「…シンジ君、一緒に入って」

（二人は…寂しい。　シンジ君と少しでも一緒に…いたい）

今のレイの姿は、髪は水分を吸っていて裸にバスタオルだけを巻いただけの姿であった。　彼は数日前にあった光景がデジャヴしていた。　シンジは素早くレイと逆方向に顔を向けた。

「だ、駄目だよ！ 男女が一緒に風呂に入るのは！」

（あわわわわわわわわっ）

流石のシンジも慌ててしまい、内心驚きすぎていた。

ペタペタペタ

そんな足跡が部屋に鳴り響き、レイはシンジに近寄り背中から抱きしめた。彼は視界と感触に驚きが凄まじかった。目で美少女の裸に近い姿を見て、今背中には薄いバスタオル一枚での彼女の感触を感じていた。羞恥心が薄いレイには余り気にしていなかったが、シンジは心臓を激しく鼓動させる。後ろから抱きしめたレイは、シンジの顔を右手で自分の顔に向かせるようにする。

（きゃああああああああああああああっ！ 近い近い！）

普通逆の立場であり、シンジは可愛く綺麗なレイの顔が自分の顔から拳一個無い距離に心の中で悲鳴を上げていた。

「お願い…！」

少し寂しそうな顔をして、悲願するようにレイはシンジに頼み込む。そんな顔をしているレイを見て、彼は少し溜め息は吐き了承する。

「わかりました…でも、髪ぐらいしか洗ってあげられないよ？」

「構わない」

（かあく、押しに弱いなあ）

そして、風呂に向かう前にシンジは携帯である人に電話かけていた。

☆☆☆☆

シヤカシヤカシヤカ

男女が風呂場に入っていた。シンジは服を着たままで、レイは裸である。シンジは右手でレイの頭を優しく洗っていた。レイは浴槽に腰を掛け、彼とは反対側に向いて座っていた。しかし、シンジはその姿を見ないように上を向きながら右手を動かしていた。

「レイさん、痒い所あるかな？」

「無いわ」

「痛かったりしたら言ってね」

「ええ」

シンジは、首が痛くなりながら決して下を向かないように上を向いていた。少し無言の時間が流れると彼は洗っている右手が違和感を感じると、レイから話しかけられる。

「？ シンジ君、何故上を向いているの」

彼女にそう言われシンジは、顔を赤くなりつつ答える。

「い、いやさ。レイさんの裸を見ないようにしているんだよ…」

動揺しつつレイに答えるシンジだったが、次のレイの発言にシンジは驚いた。

「？ 別に見ても構わない」

(きやああああああああああああああああ!!)

本日二度目の心の悲鳴をあげるシンジだった。しかし、それでも下を向かずシンジは今の話から逸らす為に彼の方から話しかける。

「あ…あのさ、レイさん？」

「何？」

「人間って、お互い何かで絶対傷をつけてしまう生き物なんだよ。

言葉による心の傷や、何か行動している時に相手に傷をつけてしまったり、ましてや暴力で傷を付けあいしてしまうんだ。そこに善悪はあるよ？ でも、わざとじゃ無い場合は謝ればそれで終了。その時にやった事を気をつけばいい。まあ、確かに大きな傷をつけてしまえば謝るだけじゃすまないけどね。レイさん。だからね、必要以上には怯えなくてもいいんだよ」

人間は、争いがあつて進化できると昔の人が言ったそうさ。人を



効率良く殺せる武器を考えて作り上げ、敵対する相手から攻撃されない為の兵器や、国での戦いの場合は核兵器も誕生させるほど。しかし、争いだけが人間を進化させるものには無い。争いだけで進化する生き物が人間であれば地球上からいなくなるだろう。争いがありながら人間が生きていけるのは、優しい心だ。お互いを支え助け合い平和に暮らせるのも人間だ。その事を、シンジは何となく知っていた。人間は競い合うのが当たり前。それが争いの一つと言えるが、人間に必要な物と言える。シンジは、レイにある一つの事を理解して欲しかった。

「だから、レイさんには人を思いやる気持ちを知って欲しいんだ。レイさん、目を瞑って」

頭を洗っていた右手を一度止め、シャワーを取りお湯を出し彼女の頭にかける。泡を全部洗い流すと、レイは顔だけをシンジの方に向ける。

「思いやる気持ち？」

「そう、その気持ちを持って俺以外の人で接していると人はレイさんを助けてくれるようになる。俺も思いやる気持ちのお陰で、今周りの人は俺を助けてくれるんだ」

レイは少し考え込んでいるのか顔の表情が変わる。それ見て少し笑いそうになるシンジ。

「いきなりレイさんに思いやる気持ちを理解しろなんて言わないよ？」

少しずつでいいんだ。わかるようになったら、実行してくれれば。じゃあ、後は自分で身体を洗ってね。俺、飯作ってくるから」

そう言い残して、シンジは風呂場を後にした。残されたレイは、シンジが言っていた相手を思いやる気持ちの事を考えた。少し時間経ったのか、身体に震えが走り身を冷やした事に気付いたレイはとりあえず身体を洗い始めた。

(思いやる気持ち…碓司令が私にその気持ちで接していたのかしら？)

なんとなく…違う。わからない、でもシンジ君は少しずつでいいって言った。だから、私はシンジ君と少しずつ分かっていけばいい)

始めてレイが今まで相手には無関心だったが思いやる気持ちを知ろうとした瞬間だった。

★★★☆☆

風呂場を後にしたシンジは、あらかじめ電話しておいたネルフスタッフに買い物頼み風呂場から出たタイミングで、玄関のドアにノックされた。ネルフスタッフに、礼を言い食材とある程度の家具を貰いキッチンで料理をし始めた。

料理している間に、レイが風呂場から出てきたので着替えて待つてくれと彼は言う。レイは自分の部屋の真ん中にカーペットが敷かれて卓袱台がある事に驚く。とりあえずレイは着替え、いつも着ている制服に着替えて卓袱台の前で正座をして座って待つことにした。待つ事数分、キッチンから流れてきた匂いが部屋に充満し始める。

「出来たよ、レイさん」

シンジは出来た料理をお盆に乗せて片手で持ってきた。卓袱台に乗せられたのは、おじやだった。

「レイさんは、どうせ今まで何も食べてないでしょ？ だから、消化に良いものになりました。どうぞ召し上がれ」

レイは目の前にあるおじやを蓮華を持ち掬い、口に運び食べる。

(暖かい…)

「食べやすくする為に少し冷やしてあるけど、大丈夫？」

「ええ。美味しい」

「よかった」

満面の笑みでシンジが喜ぶと、連れてなのかレイも少し微笑む。

その後は、レイは余程空腹だったのかシンジが作った料理を全部完食した。

食べ終えたレイは、ウトウトとして瞼が下がり始めていた。それをキッチンで洗い物しながら見ていたシンジは寝るように言うがレイは拒否。不思議に思いシンジは聞いた。

「レイさん、どうしたの？ 眠いじゃないの？」

「…シンジ君が帰ってしまう」

その一言に嬉しい気持ちが入り上がるシンジであつたが顔は苦笑していた。既に船を漕いでいるレイは、洗い物が終わって卓袱台に座っているシンジにノソノソと近寄り左腕に抱きつく。

「一緒に寝て」

(qあwせdrftgyふじこーp)

最早、シンジの心の中では言語がおかしくなっていた。

「お願い…シンジ君」

眠気でトローンとした目で、レイはシンジにお願いすると顔は笑顔でも内心の顔では百面相していた。そして、折れたシンジはレイと一緒に寝る事に。

レイの部屋にあるベットにシンジとレイが横になっていた。もう既にヤケクソなシンジは、寝る前にミサトに連絡を取り一休みしてからネルフに戻ると告げる。

ベットの左側にシンジ、右側にレイで動かないシンジの左腕を抱きしめ余程眠かったのか横になり左腕を抱いた時には寝ていた。

(…絵になるなあ)

憑き物がとれたようなレイの寝顔に、シンジは見惚れていた。

整った顔のレイは、今の寝顔は芸術品とも言える程だった。シンジは数分レイの寝顔を見ていると、彼にも眠気が襲いフツと笑いながらレイの頭を撫でる。

「お休みなさい、レイさん。 良い夢を…」

瞼を下ろしシンジも寝息を立てて寝始めた。



数時間後、レイは一度目が覚める。周りは暗く夜になっていた。目が少しずつ暗闇になれると、目の前にはシンジの寝顔があり少し驚くがすぐに微笑みが変わる。今のレイは、シンジに抱きしめられておりレイは動けない状態だった。それでもレイは嬉しそうにしていた。

（暖かい…嬉しい。シンジ君、ありがとう。私に温もりをくれて…）

レイは少しずつ彼の顔に近づく。そして、二人の唇は接触する。レイは無意識で自分がした事に驚き、顔を赤くしていくが表情は笑顔だった。再び眠気に襲われたレイは、抱かれているシンジの胸元に頭を運びより一層に密着する。

（お休みなさい、シンジ君…）

またレイの部屋には二つの寝息が鳴り響く。

同時刻、ドイツでは。

「待つてなさい、ファーストとサード」

黄色のワンピースを着た長髪の金髪で髪留めに紅いインターフェ

イスを付けた美少女は、日本に向かってる戦艦の甲板で威勢良く  
言っていた。海風で髪を揺らしながら…

忍び寄る影の中に…

白

それは色。

世界

それは場所。

色が無い、温度もない、何も無い世界。上下左右すら確認が取れない世界。まるで、何も書かれてないキャンパスのような白い世界。そんな世界に変化が…。

ツ―

突如、世界に黒い線が紙に書くように白い世界の彼方まで続いている。そこに、白い空間にシミのような黒い物が浮き出てくる。シミは少しずつ人の形に浮き出て、黒い線に立つように黒い『何か』が世界に現れる。しかし、『何か』は動かず時だけが過ぎていった。

時間の流れすら感じさせない世界の中、『何か』は突然歩きだした。黒い線になぞるように歩いていくが、世界は白い空間だけしか無く『何か』がどれだけ歩いていても白いままだった。

トコトコトコトコトコ

時間の概念が無いのか、世界に変化が見られないが『何か』だけは線の上を歩き時に止まりその場を立ち尽くすだけの繰り返しをしていた。

すう

世界に異変が起き始める。白い世界に、突然色が変わり始めた。

最初に赤、青・黄・橙・緑・金・栗・紫・灰色と変わっていく。

少しすると色達が混ざり合い、新たな色を作り出していく。しかし、『何か』だけは何も変わらずに奇妙な行動を繰り返し世界の果てに向かつて突き進んでいた。

すると、世界に『何か』以外に物が現れ始めた。それは丸い物体や、四角い物、ましてや三角な物までが『何か』の周りに置かれた。

だが、『何か』は見えていないのか興味が無いのかそれらを見ても無視をしてそ

の場を離れた。

また世界に変化が起き始める。『何か』以外の《何か》が現れる。姿形は『何か』に似ているが《何か》は、最初の『何か』のようにその場を立っているだけの存在だった。また『何か』は《何か》を気づいていないのか、歩き続け《何か》とは離れていく。

『何か』が歩いていると、『何か』が歩く先に何体かの《何か》がいた。しかし、先程の《何か》とは違いがあった。一体の《何か》は、円を描くように走っている。一体の《何か》は、丸い物体を持ち上げたり下ろしたり運んだりしている。一体の《何か》は、もう一体の《何か》に意思表示をしているのか色々な行動をとっていた。歩き続ける『何か』は、そのまま《何か》達から通り過ぎて行く。

新たな変化が世界に訪れる。物に色が入っていく。丸い物体や四角い物、三角な物までも色が入り《何か》にも色々な色に染まっていく。世界に書かれた黒い線には下は緑が入り上には青に染まる。その中に例外もいた。『何か』だけは変わらず黒いままだった。

変わりに変わる世界に、色々な形の物体や色々な行動をしている《何か》が溢れていく。しかし、その中に変わらずにいる『何か』がいた。突如、世界に異変が起き始める。世界に生き物が誕生する。植物が世界に現れ、続いて温度が出てきた。『何か』が立っていた線は土に変わり草が生え、地面は草原に変わっていった。青いだけの空間には空が現れ、暑い寒いといった概念の温度も現れ『何か』に襲いかかるが『何か』は、気にせず歩き続け止まったりする行動を繰り返す。

世界に新たな変化が起きる。カメラテープのように世界が場面が変わっていく1シーンが写し出されいく。

ある1シーンには、歩く『何か』と周りに木や草が生える場所を写す1シーン。

ある1シーンには、歩く『何か』と《何か》では無い生物が写し出された1シーン。

ある1シーンには、歩く『何か』と《何か》が《人》に変わってい

く1シーン。

映画の1シーン1シーンのように世界が変わる映像が写すが、やはり『何か』だけは変わらなかった。

ある1シーンには、歩いていく『何か』の先にビルがそびえ立つ場所があった。

ある1シーンには、歩く『何か』の周りに《人》がいた。《人》は服を着て個々に名前をつけ呼び合っていた。他に《人》達には、別々に色んな行動をしていた。

変わる世界、変わらない『何か』。《人》が世界に現れて、『何か』に変化が起きる。奇妙な行動するだけの『何か』は、《人》に初めて興味を持ったのか今までの行動を止め《人》を観察し始める。最初に服を着るようになった。次に《人》の行動を真似するようになった。

また再び世界はパラパラマンガのように、場面場面が写し出されていく。

ある1シーンには、『何か』を《人》が作った社会の中に入れようとする《人》が写し出される。

ある1シーンには、『何か』と笑い合っている《人》達の中にいるシーン。

ある1シーンには、『何か』と涙を流す《人》が写すシーン。

ある1シーンには、傷ついた『何か』と血を流す《人》が写し出された1シーン。

色んな場面を写されるが、1シーン1シーンに出てくる《人》は違っていったが『何か』だけは、何も変わっていなかった。

変わりに変わる世界に、姿形変わらない『何か』。変わったのは行動だけであり、『何か』は『何か』だった。《人》からは「……………」と呼ばれるのだが、変わる映像には『何か』の名前は違っていた。

最後に写し出された1シーンには、『何か』の姿は小柄な子供の姿で髪は長く制服姿であった。だが、その『何か』には顔が黒く塗りつぶされていた。

「俺は…『何か』？」



そう『何か』が言い残すと世界は、電源を落としたテレビのように突然暗くなった。

★★★☆☆

暗い部屋に床にセフィロートの木が書かれた司令室に、部屋の主であるゲンドウが椅子に座り通信機器を耳にあて、誰かと通信をしていた。

「また君に借りが出来たな…」

『どうせ、返すつもりは無いんでしょ?』

「ふっ」

通信機器から聞こえてくる声は若い男であった。若い男からの言葉にゲンドウは口元を歪めた。その行動は、男の言葉が正しかったと言わんばかりにゲンドウは椅子の背もたれに寄りかかる。

『例の件ですが、ダミーを混ぜて適当な情報で誤魔化しました』

「ああ、問題ない…」

机に置かれた資料を、ゲンドウは空いてる右手で持ち資料を流し読みしていた。それには本来部外秘である筈の、ネルフの極秘事項が記されていた。しかし、その資料には本当に重要な機密は隠され他の情報も本当の事とは違って記載されていた。

『え、情報公開法でしたか? また面白い事を考えつきましたね…』

「我々に対して少しでも優位に立とうとする、悪足掻きに過ぎんよ」

『……あちらの方はどうします? こちらで処理を?』

「いや、君の送ってくれた資料を見る限りは問題ないだろう」

『それでは…シナリオ通りに』

ブツ

ツーツー

通信が切れた通信機器を机に置き、ゲンドウは持っていた資料を机にばら撒くように放り投げる。

「戦自に対しての牽制くらいには役に立って貰おう。 国連軍とは違って、戦自は勢力が弱いからな…」

ばら撒かれた資料の中に、極秘情報と人型のロボットのような物が写し出された写真があった。

★★★☆☆☆

ピピピピッ

早朝、シンジが使っている部屋から目覚まし時計の音が鳴り響く。部屋の主であるシンジは、ベッドで寝ており音に気付いたのか布団の中でモゾモゾと動き始める。 少しすると、枕元に置かれた目覚まし時計に向けて布団の中から右手を伸ばす。

ピピピピピピッ

ピッ

ばしっ

目覚まし時計のスイッチを押し、音を止めると掛け布団を壁側に剥ぎ彼は壁側と逆の方向に体を転がす。 段差の所まで身体を転がし、横回転で先に足を床につけて身体を起こす。

「…ん、変な夢見たな」

まだ寝足りないのか、少し瞼が低かった。

「…………ふあ〜」

パキパキツ

欠伸をしながら右肩や首を回し骨を鳴らすと、可愛らしい絵が書かれたパジャマを脱ぎ制服に着替える。

「よしっ」

着替え終わるシンジは、居間に行き柔軟しているとキッチンの方からペンペンが現れる。お互い、軽い挨拶をして彼は柔軟を終えると洗面台に向かう。歯ブラシに歯磨き粉を器用に片手で乗せ、歯を磨いていると自分の姿を鏡に写し出されている。レイの件から早2日が立っており、シンジの右頬には縫い跡が残っていた。あの後に、ネルフで治療したのだがネルフの治療技術でも消す事が出来ないほど深く切られていた。だが、シンジはその傷に気にせず歯を磨き終える。

動かない左腕の方は、リツコ提案の左腕に電流を流す治療方で近い内に日常生活には支障を残さず、普通に動かせる日が近いと言われていた。最初の治療では、電流を左腕に流されても何も感じ無かったが二回目の治療で違和感を感じさせるほどだった。これにはシンジも希望が見えた。

歯磨きを終えたシンジは、台所に向かいエプロンを付け朝食の準備に掛かる。数十分過ぎて、ある程度作るとシンジはペンペンを呼びミサトを起こしに行くよう頼む。

「ペンペン、ミサトさんを起こしてきて〜」

「クエツ」

元気よく返事をするペンペン。ミサトの事はペンペンに任せ、テーブルに片手で料理を置いていく。すると、ミサトがキッチンにやってくる。

「…………ふあ〜、おはよう〜」

女性で大きく口を開けて欠伸をするミサトを見て、彼は苦笑しながら返事をする。

「おはようございます、ミサトさん。それにしても、女性を棄てた欠伸はやめましょうよ…。後、今の姿は余りに…」

「気にしない、気にしない。シンちゃんしか見て無いんだし…それ・と・もく？ 気になっちゃうかな〜」

ミサトの姿は、タンクトップのTシャツに短く切られたGパンと言う姿で自分の胸を両腕で上げ強調させて、モデルのように腰をクネらせ女性の魅惑をシンジに見せつける。すると、シンジは料理を運んでいた手を止め顔を下に向ける。ミサトはシンジの行動に不思議になり問いかけた。

「…あれ？ シンちゃん、どうしたの？」

ミサトに呼ばれたシンジは、顔を上げると赤面しており恥ずかしそうに右腕で顔を隠すようにしてミサトから目を逸らしていた。そんな表情している彼を見たミサトは驚く。

「そりゃあ…ミサトさんは、綺麗でズボラなのにスタイル良いのに服装がそんなだと…魅力あり過ぎなんですよ。俺だって欲情するんですよ？ 仕事から帰ってきて、アルコール入れてる時なんか…もう。寝ている時なんか無防備だし…」

シンジは子供の顔付きに一見女の子のような表情で恥ずかしそうにしながら、ミサトの女性らしさを褒める。本人は彼を揶揄い慌てふためく姿を見て、今までの分を返せば納得するつもりだったが、シンジの姿と言葉に揶揄ったミサト本人は恥ずかしそうに照れてしまう。

「……えっと。 あ、駄目よ！ これでも保護者としての立場が私にあつて！ 歳の差もあるし！ 確かにシンちゃんは良い男の子よ！ でも…そんなにシンちゃんが興奮すると思つてなかつたから…」

シンちゃんから迫られたら…私」  
ミサトは慌てて弁解しようとするが、自分で言つてて恥ずかしくなったのか顔を赤くしながらモジモジと人差し指同士を突つき合う。今の彼女には、予想外の恥ずかしさに頭の中はてんこ舞いになっていた。

（あわわわわわわ〜！ シンちゃんが、私の事をそんな風に見てたなんて！ 私は知らずにシンちゃんとあんなシキンシップしていたなんて…。 でも、シンちゃんなら…！ 小さい身体なのに、私を包

んで頼り甲斐あるリードなんかしそ……いやいやいや！ 何考えてるのよ、私！)

若干煩惱に駆られながらも理性を持ち直すミサト。脳内での彼とミサトでの妄想した光景は大変な事になっていた。本気で顔を両手で隠し、頭をブンブンと振っていた。朝早くから煩惱に駆られる三十路間近、恥ずかしさに悶える葛城ミサト(29歳)であった。

「ぷっー！」

そんな声が聞こえ、ミサトは気付いたのか隠していた両手を顔から離して音源であるシンジの方を見る。

「あっはははははははははははははははっ！ ゲツホ、ゲツホ！ ミ、ミサトさん？ 朝からナクニを想像しちゃったんですか？ あははははははははっ！ 腹いてっ！」

爆笑するシンジを見たミサトは、数秒間何も考えられず我に戻ると自分が揶揄われた事に気づく。顔を赤くしたまま何も言い返せない自分に腹立てているとシンジは笑いながらミサトの後ろに回り込み、彼女の背中を押し席に座らせる為に優しく誘導させる。

「クツクツクツ。見事に引っかかってくれましたね？ ミサトさん」

ミサトを席に座らせるが、彼女の顔は両頬を膨らませ不満顔させているのを見てシンジは笑い、後ろからミサトの耳の側で一言。

「魅力があるのと、欲情するのは本当ですからね？ ミ・サ・トさん」

そう言い残し、シンジは残りの料理をテーブルに運び終わらせ朝食を食べ始める。だが、この時のミサトは朝食で何を食べたのかすら覚えていなかったそうだ。

朝食を食べ終え、洗い物も済ませたシンジは梅昆布茶を飲みながら寛いでいた。首から輪っかを作った布を垂らし動かない左腕をかけていた。

「そういうえば、今日ミサトさん学校にくるんですよね？」

シンジがミサトに質問すると、彼女はハッと我に返り答える。

「ええっ…、進路相談ですもの。保護者の私が行くのは当然よ」

「了解です。まあ、ミサトさんはプライベートと仕事との切り替えが出来る人だと分かっているんで安心です」

ピンポーン

突如、玄関のチャイムが鳴り響きシンジはテーブルの脚の近くに置いておいたカバンを持つ。

「では、行ってきます。ミサトさん」

「気をつけてね、後でね」

シンジは玄関に向かい、靴を履き扉を開くと玄関の前にはレイの姿があった。最近、レイは学校に登校する前にミサトの家まできてシンジと登校するようになった。

「…おはよう、シンジ君」

「おはよう、レイさん」

挨拶をする二人。そして、足を学校に向けて運ばせる。今の2人の姿を学校の人間達が見ても、余り驚かなくなっていた。前の件で、レイとシンジが一緒にいたのがあったのか学校の生徒と教師は違和感を感じなくなっていた。

あの件から、レイはより一層にシンジの近くにいるようにしていた。彼が何か片手でやるのに困っているのを見ると、すかさずレイ

が手助けをする。他には学校の昼休みは、いつも通りに2人で屋上で昼食を食べて終わるとあのレイがシンジの背に寄りかかるように身体を預け目を閉じて彼の存在を確かめていた。最初はシンジもその行動に驚いたが、レイの行動に理解したのか自分の背を黙って貸した。

後、シンジの頬の傷を他の生徒が聞くと近くにいたレイの身体がビクツと震わせる。彼女の中では、頬の傷は罪悪感の塊になっていた。

そんな反応するレイを見たのか、シンジは彼女に近づき頭を撫でながら優しい笑顔で一言。

「気にしなくていいから…レイさん。謝ったんだからさ、俺は気にしてないよ?」

レイは彼の言葉を聞いて、身体の余計な力が抜け自然と顔に笑顔を浮かべた。その笑顔を見た他の生徒は、レイに見惚れていた。普段、レイは表情を変えないので他の生徒からは余り良い印象では無かったがあの笑顔でクラス中の人間は、少しずつレイの印象が変わり始めていた。

二年A組は進路相談の話で盛り上がっていた。正確には、シンジの保護者であるミサトの話であった。

「シンジの保護者って、美人だって!」  
「マジで!」

教室の真ん中でシンジ以外の男子が集まり、自然と男子生徒だけの輪が出来ていた。その輪の中心には、トウジとケンスケの姿があった。彼らがミサトの魅力を語ると男子生徒達が驚愕の声をあげていた。

そんな彼らから離れて見ているシンジは、頬杖を立てながら苦笑していた。

(まあ、彼らも健全な男子の反応しているな。女子からの目から訴えかける何かは気付かずに…ね)

そんな事を思いながら彼らを見ている所に、何人かの女子がシンジに近寄ってくる。

「碓君、貴方はあの輪に入らないの？」  
「ん？ うーん、あまり興味無いんだ」

ポニーテールの女子が、シンジに話しかけると返ってきた言葉に驚く。他に洞木ヒカリやツインテールの女子もおり、その二人も驚く。

「え〜！ シンジ君、異性に興味無いの？」

「いやいや、ありますよ？ 同性愛は…あまり…ね。こんな姿だけで」

ツインテールの女子から、同性愛か？と聞かれたシンジは否定し顔に影を作る。それを見たヒカリは、再び問いかける。

「じゃあ、何故？」

「女子って、そういう話好きだねえ。 まあ、家族の話だし実際にプライベートの話をして夢を壊すのも可哀想だなって」

トウジとケンスケは、二体目の使徒襲来の時に会っているがその時の姿しか見ていない所為で仕事の時の彼女とプライベートの彼女の違いを知らないだけ。

「洞木さんの所は、誰が来るんだい？」

「私の所はお姉ちゃんよ、お父さんは仕事で忙しいらしくて…」

「私はお父さんが来てくれる〜」

「ウチはお兄ちゃんかな」

シンジは3人から告げられた言葉に違和感を感じた。何故、母親の話が出ないのか。少し周りの生徒から聞き耳していると、学校に家族が来るのを渋る生徒が多数で愚痴ばかりだった。しかし、クラス全員が『母親』がいないとの事が発覚。シンジの経験上では、こういう行事は母親が来るものだ。そんな母親のいない生徒がクラスに纏まるとは偶然にしては出来過ぎている。

（こりゃあ、ネルフの管轄内である学校にも息がかかっているのかもな…）

彼は心の隅に、ネルフの情報を近い内に入手を試みる事を考える。

外からエンジン音が鳴り響き、少しずつ学校に近づいている事にシンジは気づく。



「いつらしゃったぞ!!」

すると、窓際で身体を乗り出しながら二人の男子生徒が叫んでいる。

ウオオオオオン

キキキキツ

凄まじい速さで青いルノーが駐車場に入ると、ドリフトをしながら停車位置に完璧に止める。荒々しく見られる運転だが、最後の止め方を見れば見事な運転技術と認めざるおえないだろう。その一部始終を見ていた男子生徒は、尊敬の眼差しでルノーへ視線を向ける。すると、運転席のドアが開き中から、スーツ姿のミサトが現れる。  
「「「「「うおおおおおっ!!」「「「「「

クラスの窓から身を乗り出し、男子生徒が一齐に歓声をあげる。

紺色のスーツに身を包んだミサトは、窓にいる生徒達に手を人差し指と中指を立て敬礼のように額の近くに運び、満面の笑みを見せる。大人の女性ながら少女のような振る舞いに、男子生徒全員の心はミサトの魅力に囚われたのかアイドルを声援するように叫ぶ。それを見ていた女子達は白い目で、シンジは諦めたように遠い目をしていった。

★★★☆☆

昼休み、今回はレイとシンジだけでは無くトウジとケンスケも一緒に昼食を屋上で食べる事になっていた。

「いや、ミサトさんはええ女性やなあ」

「本当本当、作戦部長で一尉ながらシンジの保護者やってるんだから

な」

二人はミサトの話で盛り上がっているが、レイは気にせずシンジが作った弁当の中を黙々と食べていた。シンジは苦笑しながら、二人の返事をする。

「確かに、ミサトさんの所にお世話になつて迷惑かけてるよ。でも、余りミサトさんの想像を美化しない事をお勧めするよ…」

彼は顔に影を作りながら遠い目をする。そんなシンジを見ても二人は変わらなかつた。トウジはミサトの見た目を褒め、ケンスケは仕事関係を褒められ家族であるシンジは悪い気はしなかつた。

「そう言えば、シンジ。ミサトさんって、明日にある戦自が企画した奴に出るのか？」

最初、シンジはクエスチョンマークを頭の上に浮かべ首を傾げる。ミサトからは、その話は聞かされておらずシンジは知らなかつた。そんな行動を見たケンスケは察した。一方、レイは食べ終えており屋上の床にシートを敷き四人で座りながら食べている中でシンジの後ろに移動して背にレイの頭を寄せ寄りかかる。それを見た二人は驚く。

「お…おい、シンジ…」

「お前ら…」

そんな二人の反応にシンジは笑いながら話す。

「今のレイさんは少し心に余裕が無いから、俺の存在を確かめて心を落ち着かせてるんだよ。あつ、付き合つてはいないから。詳しい事は言えないけど、一つだけ。この頬の傷はレイさんが付けた物だよ」

衝撃の事実を聞いた二人は、驚きの余りに口を開けたまま固まってしまう。レイは、外の音を気にせずシンジの背に寄りかかっていた。

「だけど、レイさんは謝つたし彼女なりに変わろうとしているから俺から何も言う事もこれ以上無いね」

二人はシンジの人間性に唯驚く事しか出来なかつた。人間は痛みに弱く、仲の良かった二人組がいたとしても何かの切っ掛けで片方

が片方に傷をつけてしまうと仲が悪くなるか疎遠してしまうものだ。大小とあるが、顔に刃物で切られたとすれば被害者は加害者に怯えるか憎しみを持つだろう。しかし、シンジはレイにそんな感情を持たずに逆に受け入れていた。そんな彼を見て、二人は一言ずつ言う。

「…シンジは強いな。心が…」

「一度殴った身であるワシも言うのもなんじゃが…器が大きいわ」

そんな二人の言葉に、シンジは顔を上に向けて空を眺める。

「唯俺は…出会ってきた《人》達と仲良く笑っていただけだよ。争いはお互いに受け入れないから起きるもの。少しでも受け入れる気持ちを持てば、お互いに分かち合うかもしれない。トウジ君の時もそうだろう？ 君は俺に矛を向けた。だけど、俺は原因がどうであれ君に傷を付けること一切してないだろう？ 最終的には、トウジ君も分かってくれて謝ってくれたろ」

トウジは恥ずかしそうに頬をかきながら照れていた。

「だから、俺だけでも…。相手を受け入れる人間で居たいんだ。

まあ、相手が話無しに矛を向けるなら俺はその時は…」

再び顔を二人に向け、シンジは笑顔で言う。

「な〜んてね。平和が一番だよ、皆でバカやって笑っていれば何もいらぬさ」

心の底から告げたシンジに、二人もつられて笑顔になる。

「そうだな、平和一番だよな」

「せやせや、楽しく生きてなんぼじゃ」

少し強い日差しの中、彼らに程よい風が吹く。気持ち良さそうに寄りかかるレイ、ワイワイと話す三人。彼らには、今の世界に少ない平和な一時を過ごしていた。

少しずつ迫る事件が迫っているには気付かず…

## 人の手から作り出されたもの 上

ブーン

精密機械が並び起動音が鳴り響く部屋。 部屋は緑の光に照らされ、機械に囲まれた部屋の真ん中に画面とキーボードが搭載された台が一つ。 その画面には、《異常なし》と書かれていた。

プシュー

すると、スライドドアが開き部屋に1人の男が入ってくる。 男は防護服を着ており部屋に入ると真ん中にある台に向かい、手に持っていた端末を台に乗せる。

カチツ

ピー

画面の横にあるUSBケーブルを繋げる穴に、男が持っていた端末から繋げたコードを差し込むと画面が大量のプログラムされた文字が上から下に流れていく。 少し時間が過ぎると、画面にはプログラムされた文字は消えていき男は端末を操作し始める。

カタカタカタ

男が端末を操作して行く内に、画面にはパスワードが書かれており男はその文字を読むと防護服の中で顔を歪ませる。 再び、端末を操作すると画面に書かれた《希望》と言う文字は消されていき新たに文字が入力されていく。 すると、画面には再びプログラムが書き換えられ最後にパスワードの文字が浮かび上がる。 それを見た男は、役目を果たしたのかケーブルを抜き取り部屋を出て行く。 部屋から出た男は、廊下で歩きながら防護服の中での顔は悪意を持った微笑みを浮かべてその場から居なくなる。

男が去っていた部屋には、台の画面にはパスワードが《絶望》と書かれ少し時間が過ぎると画面が変わり最初に書かれた《異常なし》と言う文字に変わった。 そして部屋は再び起動音を鳴り響き始めた。

平日の午前中、ネルフ本部に設置された畳が敷かれた道場にシンジとミサトが、道着を着ており二人はある程度の間合いを取り構えていた。お互い、相手の様子を伺っていると先にミサトが動き始めた。ミサトの右手には、ゴム製のナイフを逆手に持ちシンジと距離を縮めて彼の首元にかけてナイフを振る。

シンジは、左手で逸らし紙一重で躲すも止まらずに攻撃してくる彼女から避け続けた。ナイフだけでは無く、拳・脚・肘・膝と言った物をミサトは混ぜながらシンジに放つがどれ一つ掠る事なく左手だけで逸らし躲されていく。

攻め続けた彼女は、息を切らし始めシンジから距離を取ろうとすると彼が攻めに入る。

トツ

軽い音を立てると、畳擦れ擦れで低く飛びながらシンジはミサトの距離を詰めた。ミサトは、彼の距離の取り方に驚愕する。右自然体で構えのシンジは、その構えのまま動かず両膝から下のバネを利用した移動法をした。

格闘技をやっている者なら理解できるであろう。最初、試合が始まると相手との距離があり様子を見ながら近づき攻防を繰り返すのが一般的であろう。剣道で言うなら、相手の気を感じ取りながら相手に近づき有効な部位に竹刀を叩くのが当たり前。しかし、シンジのやった事は一般常識を覆す近づき方をしていた。

本来は相手の動きや目、空気である程度は感じ取り相手の行動を予想出来るもの。彼が行った移動には、不意打ちに近い動きであり例で言うならば自分から1メートル2メートルと離れた場所から相手

が体を動かさずにホバリングしたように近づかれたら恐怖と言えるだろう。

無拍子とは違い、両足は爪先立ちでカカトはつけずに足首と爪先だけの力だけでの移動は体を動かさず、相手に不意打ちに向いている移動方法である。しかし、人は普段カカトをつけて歩くのが普通だが彼は普段から軽くカカトを上げて他の人間から気づかれない爪先立ちで過ごしており、常に爪先と足首が鍛えていられているから出来る技でもあった。

重力に囚われていないような移動に、シンジはミサトと距離を詰めると右足を軸に取り左回し蹴りを放つ。

バスツ

幸い訓練の為、オープンフィンガーグローブとクツシヨンが入ったサポーターの為ミサトは難なくガードが出来た。しかし、ミサトはこの後の彼の行動に驚きばなっしになる事に。シンジはニツと笑うと右腕でガードされた左回し蹴りは、下ろさずに伸ばしていた爪先を反らし彼女の右脇に後ろから引つ掛ける。

トツ

再び軽い音を立て、軸脚を畳から離すと左脚を引き寄せ自分の体を移動させる。彼の体は宙で右回転させながらミサトの右側に回り込む形になる。彼女は、シンジの左脚で体を引つ張られ体制を崩され彼に背を向ける形になってしまった。シンジは既に畳に足を着けており、横にいるミサトの腰に左脚の裏を軽く当てると押し出した。腰を押されたミサトは、驚きながらも倒れないように前乗りになりながらも持ち堪えた。

スツ

しかし、ミサトの顔の前には既に彼の右足の甲があった。シンジはミサトの目の前で寸止めする。ミサトは、寸止めされたが右脚から放たれた風が顔に当たり恐怖で鳥肌になっていた。そして、ミサトの口から降参の言葉が出る。

「ま…まいりました…」

ミサトの言葉を聞いたシンジは、脚を下ろし2人は最初に立ってい

た所まで戻りお互いに礼をして本日の訓練が終了した。

道場の端で、ミサトは訓練でかいた汗をタオルで拭きながらシンジに話しかけていた。その時のシンジは柔軟をしていた。

「いや、これでも軍の訓練を受けた人間だけ…。シンちゃんは、また私の常識を覆すわね。色々な場面を想定しての訓練って事で、数種類の武器を持った私がシンちゃんから有効打が一度も取れないなんて…。落ち込むわ」

ミサトの言う通りに、今回の訓練では彼女が色々な武器を持ちそれを無効化するのが主体だった。彼女の中では、彼はなんでも出来るが対人戦闘に対しては下に見ていた。しかし、何回かの模擬戦をやってみたがミサトはシンジにまともな攻撃を当てる事が出来なかった。それも、彼は余裕を持った動きで右腕は使わずに治った左腕だけで捌きついていたのだ。本人は、リハビリ感覚でやっていたがミサトからにしては悔しい気持ちだった。

「ははっ…」

シンジはミサトの言葉を聞いて、苦笑しながら柔軟をし続ける。

そんな彼の表情を見て、ミサトはふと思いつく。

（そう言えば、この子。諜報部員から傷ついた身体で逃げ切ったんだっけ…。内蔵を痛めて左腕は動かせない身体で、7人の諜報部員から）

そう、シンジはハンデを持ちながらも男7人の手から逃げ切っている。それとは違い、模擬戦では相手は1人である状態でハンデが無いシンジにとっては楽な事であろう。

それに対して使徒での戦いでは苦戦であった。今までの戦闘をミサトから見ると分析するが、彼の戦い方は悪いとは思わないのだが今の所必ずと言っていいほどに、辛勝で重傷を負っている。彼とは違い、街の被害は小さく第3新東京市の住民達からの批判の声も少ない。だからと言って、街の被害を抑えずに彼が戦ったとしても怪我を負わないと確証も無い。やはり、使徒が手強い為の代償なのかと

ミサトは考えた。

そんな考えをしている所に、シンジの方から話し掛けられる。

「そう言えば、ミサトさん。今日のお昼過ぎに旧東京に行くんですよね?」

「ええ、正しくは「第28放置区域」ね。本重化学工業共同体が主催するJA完成披露記念会にリッコと行かなきゃいけないのよ。だから、今日は帰れないと思うから戸締りをお願いね」

柔軟を終えたシンジは立ち上がり道場の扉に向かいながら、手を振りその場を後にした。それを見送ったミサトはボソリと独り言を漏らす。

「とりあえず、彼には彼しか出来ない役目を任せて…私は他の事をやるだけよ」

パチンツ

頬に手で叩き、自分に気合を入れたミサトは着替える為に更衣室に脚を運ばせる。

☆☆☆☆

着替え終えたシンジは、本部内の通路を歩いていると向かい側からリッコとマヤが歩いてくる。最初にシンジが気づくと、2人もシンジの存在に気づいた。

「あら? シンジ君、おはよう」

「おはようございます。リッコさん、マヤさん」

「おはよう、シンジ君」

軽い挨拶を交わす3人。その中、シンジはリッコの服装に目を向



ける。シンジとリツコがネルフで対面する時は、殆どが白衣なのだが今は紺色のスーツ姿だった。いつもの白衣姿のリツコだと科学者として見えて彼女ならではの大人の魅力があるが、スーツ姿のリツコでは女性らしさを引き立てて「仕事が出来る女」と思わせるほど凛々しい佇まいだった。

「リツコさんって、いつも白衣姿ですけど…あれはあれでカッコ良いですけど。スーツ姿を初めて見ましたが、凛々しくて綺麗です」  
「えっ!？」

シンジは笑顔で心からの褒め言葉を告げると、リツコは顔を紅潮させる。

彼の場合、お世辞は余り言わない為に人に褒め言葉が少ない。その為、相手からはシンジの褒め言葉を聞かされると心の底から言われていると感じる。褒められた本人は、嬉し恥ずかしそうにしているとマヤからも彼を後を追うようにリツコを褒め始めた。

「そうですよ！シンジ君が言ったように、普段カッコ良いのに今は綺麗ですよ！」

はしゃぐ様にマヤも褒めると、リツコは恥ずかしさの余りに腕時計を見てその場を離れたいが為に、言い訳をして逃げ出した。

「あ!?! もうこんな時間。もう私行がなくちゃいけないから…マヤ。後の仕事は任せたわ！」

すたこらさつさとその場から逃げたリツコを見て、残された2人は吹き出すように笑い始めた。

「あははははっ！リツコさんてば、余り人から褒める事に慣れてないんじゃないですか？」

「うふふ… まあ、確かに先輩って褒められる立場じゃあないから。逆に褒める立場が多いから、慣れてないだと思っわ」

通路の真ん中で楽しそうに笑いあう2人。  
「あのリツコさんだと、綺麗よりも可愛らしい感じでしたね」

「確かに。今まで先輩の側で仕事してて、あんな先輩を見たのは初めてよ？それほどシンジ君の褒め言葉が良かったのよ。 あっ！

そうだ…シンジ君。この後、時間ある？」

彼はマヤの言葉で腕を組みながら顔を上に向けて、正に考えていると言うポーズをする。数秒考え込むとシンジは答える。

「うくん、そうですね。今の所は予定無いんで、大丈夫ですよ…はっ！もしかして、デートウのお誘いですか!？」

ボンツ

シンジの発言に、マヤは顔から煙を上げて顔を真っ赤に染める。

「なななななななななっ!? 何言ってるの、シンジ君!」

元々異性との接触が少ないマヤに、シンジの言葉は刺激が強かった。ここだけの話だが、マヤは潔癖症の為か余り男性との関わりを遠ざけていた節があった所為か、異性との関わりが少ないマヤにはシンジの言葉は20代前半とは言えない乙女のような反応を見せた。

ワタワタしているマヤを見て笑いながら謝る。

「はははっ！マヤさんもリツコさんの事、いえないじゃないですか。

まあ、変な冗談はすみませんでした」

「むうう…。シンジ君って、意地悪ね」

(あつ、可愛い…)

マヤは冗談とわかると頬を膨らませ、「怒ってます」と表情をマヤは行動に取るが童顔の所為か可愛らしい顔になっていた。それを見て素直な感想を内心で呟きながら微笑んで、彼はもう一度謝る。

「すみません。話を拗らせたのは自分ですが、要件はなんですか?」

「もく…まあいいわ。シンジ君に渡したい物があるの。自動販売機コーナーで渡すから、行きましょ」

「了解しました、お嬢様」

シンジの姿に似合わない言葉に、クスツと笑いマヤとシンジは目的地に向けて脚を運ばせた。

☆☆☆☆

ブオオオン

地球の気圏外に一機、UNの航空機がエンジン音を鳴らしながら地球の周りを飛んでいた。その航空機内には、ゲンドウだけが座席に座っていた。

プシュー

すると、航空機内でゲンドウが1人である所にスライドドアが開き男が入ってきた。

「隣…失礼」

その男は、ゲンドウに近づき隣の席に座ると資料が入ったファイルがゲンドウに渡す。渡されたゲンドウは無言のまま中身を見始めると、男はゲンドウに話しかける。

「資料を読みながらいいので…。前回と前々回の使徒から撮取されたサンプル回収により、委員会はネルフに追加予算が入れるそうです。サンプルが良い状態だったのでしょ。後、6号機の件は米国以外は承認したそうです。続いて8号機建造も開始されましたがパイロットは、まだ見つからないそうです。まあ、今の所はそちらにドイツから2号機が近日に送られますから戦力には困らないでしょう」

「ああ…」

ゲンドウは男の話を聞きながら、資料を読み終えると航空機の窓から見える地球を眺めていた。地球の一部分だけは赤く染まった海が広がっていた。赤く染まった海の場合は15年前に起きた「セカンド・インパクト」の地、南極だった。それを見るゲンドウは、反応は無く無表情のままだった

ババババババババババ

「これがあの大都市と言われた場所、東京：今では水の都市になってるなんてね」

旧東京に向かうヘリの中、ミサトは窓から景色を眺めながら独り言を漏らす。ミサト眺める場所には、海しか無く所々に背の高いビルだけが海から頭を出していた。「セカンド・インパクト」、これにより南極の氷が溶け海の水位が上がってしまい日本内で一番人口が多く栄えていた場所は、今では水の底に沈んでしまった。

「ミサト、そろそろ着くわ」

窓の外を眺めるミサトに、目的地が迫っている事を知らせるリツコ。眺めるのをやめたミサトはリツコの方に顔を向けると一言。

「了解：それにしても、リツコ。あんたのスーツ姿を見るの久しぶりね」

「え…ええ」

スーツ姿の事を指摘されたリツコは戸惑い、それに不審に思うミサト。

「どうしたのよ？ 戸惑いを隠せてない反応しちゃって…あっ！もしかして、シンちゃんに何か言われたんでしょう？」

見事当てられたリツコは、シンジの言葉を思い出したのかりツコの顔は薄く化粧したにも関わらず少しずつ赤く染めていく。恥ずかしそうにしているリツコを見て、ミサトはニヤけた表情になる。

「リツコも可愛い所あるじゃない」

「ミ…サ…ト」

そんな2人を乗せたヘリは、目的地であるJA完成披露記念会の会場に到着した。

ヘリから降りて2人が会場に入ると、大ホールの中に何個か大きな

テーブルが並び大勢の人の姿があった。しかし、ネルフに用意された席には大きなテーブルにはミスアトとリツコの2人だけであった。これは、日本重化学工業協同体側からネルフの人間を2人しか招待していないのでは無く、ネルフ側から2人しか出さなかったのかもしれない。

少し時間が過ぎると、壇上にあるマイクに近づく男の姿が見えた。《あく、あく。大変お待たせしました。これより、JA完成披露記念会を始めたいと思います。自己紹介をさせていただきます。私、JA開発責任者の時田シロウと申します。よろしくお願いします》パチパチパチパチパチパチ

彼の自己紹介が終わると、会場内には拍手が鳴り響く。

《ありがとうございます。では、説明に入らせてもらいます。最初にJAはリアクターが積みおれり、無人で動き目標対象物を撃破します。主に格闘戦を用いて、状況に合わせて武器を空に待機させた戦闘機から射出しJAにドッキングさせます。お手元にある資料に書かれておりますが、武器の種類は豊富で近・中・遠距離の武器を搭載させる事が可能です。しかも、JAは150日間の連続で作戦行動が出来ます。他には…》

時田の説明にミスアトは、両手で頬杖を立て暇そうに聞いていた。すると、隣に座るリツコが手を挙げる。それを見た時田はリツコに指名する。

《おー、これはこれは。ネルフの赤木リツコ博士ではありませんか》「質問よろしいですか？」

《ええ、どうぞ》「最初にJAにはリアクターが搭載されていると仰っていますが、万が一の大破により原子炉の融解の危険性があります」

《そうですね。誰もが気づくと思いますが、JAは無人であり遠隔操作が出来ます。万が一の大破には、尽かさずJAの停止信号を送り制御棒でリアクターを完全に停止させる事が出来ます。それにリアクター部分には、対ショック性の装甲に守られておりますので危険性は皆無でしょう》

時田の説明が長い為か、ミストは既に飲み物と食べ物とを飲食しながらリツコを止めようと声をかける。

「リツコ、やめなさいよ。大人気ない…」

それを聞いて少し対抗心を駆り立ててしまったのか、リツコは止まらなかった。

「他にも使徒には、通常兵器は通じません」

リツコの言葉に時田はニヤリと笑う。

《A・Tフィールドですか？》

リツコと食べていたミストは驚愕の表情を浮かべる。

本来、使徒の特殊能力である「A・Tフィールド」は極秘情報であった。そんな表情を見て時田は、良い顔で説明に戻る。

《まさか、科学と人の心で化け物相手に勝てると思いで？ そちらの決戦兵器でしたか？エヴァンゲリオン。操縦者に負担をかけて、しまいには精神汚染まで危険性があるじゃないですか。ヒステリシスな女性を扱うのと同じですよ、手に負えません》

ドツ

呆れ顔で笑う時田に、会場の人間も笑い始める。既に、会場内はネルフの 아우어地になっていた。だが、時田は止まらずネルフへの挑戦状に近い言葉を言う。

《それにエヴァンゲリオンのパイロットが、14歳の少年少女じゃ無いですか…。そんなエヴァンゲリオンに乗せるなんて、ネルフは鬼畜外道しか思えません。しかも、今の所は第3新東京市に襲来した3体の使徒に対して初号機でしたか？ 殆どが辛勝ではありませんか？ 確かパイロットは碇シンジ君と言いましたか。彼はパイロットに向いていませんね、戦い方がなっていない。あんな少年に乗せるぐらいなら…訓練された小学生にでも乗せた方が良くないと私は思います》

その言葉にミストは、感情を黒く染まり行き良いよく立ち上がり口を開こうとすると…隣のリツコに手を肩に置かれミストを止める。

シンジの事を知り、あの優しい彼を馬鹿にされて納得行かないミストは、感情の一部をリツコにぶつける。

「リツコ!? 彼処まで言われて、言い返さないの!」

「やめなさい、ミサト」

「でも…あつ」

喰い下がらないミサトは、ある場所見て気づく。リツコは表情を変えてはいなかったが、マイクを持つ手が力強く握られ震えていた。彼女もシンジの事を言われた事に腹を立てていたが抑え、内心では感情は酷い事になっているかもしれない。ミサトは、悔しそうにリツコの言葉を聞き再び座る。リツコは、その後時田の質問を止め席に座ると再び時田が説明が始まりネルフを批判が混じった言葉を語りながら時間が過ぎていった。



ガンガンガンガン

「あー!! ムカつくー! よりにも寄って、シンちゃんの事を…キー! あの俗物共が! どうせ! 内の利権にあぶれた連中の腹癒せでしようが!」

ガンガンガンガン

時田の説明が終わり、一旦団体にはJA起動準備の為に控え室に待機させられていた。その中、ネルフに与えられた控え室にはミサトは怒髪天になりながら設置されたロッカーをサンドバックのように殴る蹴ると破壊作業に駆り立てていた。余程、怒りを貯めていたのかロッカーはベコベコになっていた。

「やめなさい、ミサト」

「ふうー! ふうー! それにウチの情報管理部、仕事して無いん

じゃないの！ A・Tフィールドの事まで知ってるし…あー！ あの男のドヤ顔が腹立つー！」

再びロツカーを殴る蹴る行動に移るミサトを余所に、リツコは配布された資料をライターの火で炙り燃やしていた。

「自分を自慢し褒めてもらいたがっている、大した男じゃないわ」

リツコの顔は、資料が燃える炎の光に照らされながら歪んだ笑顔を浮かべていた。

☆☆☆☆

ネルフ施設内の自動販売機コーナー。その場所に設置されたベンチにマヤが座り、シンジは自動販売機の前に立っていた。

「マヤさん、何飲みます？」

「ありがとうね。本来なら歳上の私が出さなきゃいけないのに…お財布を発令所に忘れるなんて」

少し落ち込むマヤ。それを見てフオローしながら笑うシンジ。

「ははっ…人にはミスはありますよ、マヤさん。次に持ち越さない事を心掛ければ良いんですよ…それに、余りに余ってるお金貰ってるんで。これぐらい男の俺が出さないとダサいんで」

「ふふっ…ありがとう。じゃあ…シンジ君のセンスで」

「これはこれは、難易度が高い注文で…」

シンジは懐から小銭入れを取り出し、現金を自動販売機に入れ二本の飲み物を購入する。

ピッ

ガラン



ピツ

ガラン

取り出し口から二本の缶を取り出し、マヤの隣に座るシンジ。

「では、マヤさん。 妥当にお茶で…」

「ありがとうね、シンジ君」

シンジは一つの缶をマヤに渡すと、残りの缶を開けると少し飲む。すると、マヤはショルダーバックから何かを取り出そうとしていた。彼は何が出てくるのか楽しみにしながら待っていた。マヤのショルダーバックから取り出された物は、ラッピングされた箱だった。そして、マヤはシンジに渡す。

「はい…シンジ君。 この前に約束していたお菓子よ、食べて」

「ありがとうございます」

（あく、そんな約束してたなく）

マヤからラッピングされた箱を受け取る彼は、前日にマヤに押し倒され相談した時の事を思い出す。 本人は、軽い考えでその場の流れでマヤを納得させる為の発言だった。

パン

「では、頂きます」

手を合わせて作法を行うと、ラッピングされた箱を丁寧に開ける。すると、中には店に販売しているかのような物が現れた。 だが、何処か手作り感のあるお菓子が何個か入っていた。

「マヤさん…これって、手作りですか？」

「ええ！ 私が一番自信ある物よ」

誇らしげに胸を張り言うながらマヤ。 それを微笑ましく見ながら、箱から一つお菓子を取り出し包まれた袋を取り口に入れる。

(…！)

お菓子を口に入れた彼の反応を伺うマヤ。

「ど…どうかな？ 美味しくなかったかしら…」

すると、シンジはユックリ噛み飲み込むと購入した飲み物であるブラックコーヒーを飲む。 一旦、息を漏らすとマヤは不安に駆られていた。 そして、彼はマヤの方に向くと口を開く。

「…なんすか、これ？ 美味すぎじゃないですか！ このチョコ、甘過ぎず少し柑橘系が入って凄く合ってますよ。 飽きが来ないですよ、これ。 どうやって、作ったんですか？」

その間にも、彼は何個か袋から取り出しチョコを食べていた。 それを聞いて安心したのか、胸の奥から暖かな気持ちになりながらマヤは返答する。

「良かった…それね。 意外にも作る手順は、余り拘ってなくて材料の方に工夫してるの」

マヤがチョコの作り方を簡単に教え、シンジは食べながら聞き楽しそうな雰囲気を見ながら自動販売機コーナーに漂わせていた。 そんな所に、彼は一つのチョコをマヤに食べさせるように口元に持っていく。

「はい、マヤさん…あーん」

「シ…シンジ君？」

余りのシチュエーションに、マヤは驚く。 第三者視点からだとなら、マヤが作ったチョコのように甘酸っぱい光景になっているだろう。 ワタワタしているマヤを見て、彼は軽く笑う。

「ははっ…どうせなら一緒に食べましょう、マヤさん。 美味しい物は1人だけじゃなく、皆で食べるとより一層美味しいんで…ね？」

本来男の子であり外見が女の子に近いシンジが、人が作ったチョコを美味しく食べ満面の笑みで、そのチョコを人に食べさせようとする姿はマヤにとっては可愛く何処か胸の奥にキュンとする感覚に囚われていた。 一先ず、マヤは魅力のある笑顔に惹かれるように彼が出すチョコを啜り食す。

（なんか良いかも…）

それを見てシンジは、笑顔で再び自分もチョコを食べ始めようとする。 その時、マヤは気付いた。 先程、シンジに出されたチョコを啜る時にマヤの唇が彼の指に接触している事に。 しかし、シンジはそれに気づかなかったのか…新たにチョコを持った際に体温で少し溶けてしまい自分の指を舐めとった。

（あうあう…）

最早、マヤは自分の作ったチョコの味など分からないでいた。 2

0代過ぎて、青春のような場面にマヤは顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしていた。少しして、シンジはマヤの状態に気づくと彼にとつて彼女は「あーん」と言う行動が恥ずかしかったのかと思い、少し可笑しくなってしまう軽く笑ってしまった。

もうマヤにとつて、彼に恥ずかしくさせられ今の男の子や女の子のような可愛らしさを持つ微笑みに抱きしめたい衝動に駆られていた。

(ずるいなあ、シンジ君って)

そんな事を思いながら、その後も2人は楽しく自動販売機コーナーで話していた。その時、ある視線に気づかないままで…。

★★★☆☆

検査が終わり、私はネルフ施設内の通路を歩いていった。何時ものように、第一中学校の制服を着用し訓練が終わっていると聞いたのでシンジ君を探す私。

(シンジ君…どこ)

最初、葛城一尉と道場で訓練していると聞いたので行ってみたが終わってしまったのか無人だった。その後、とりあえずウロウロと探し続けると歩く先にT時の突き当たりにある自動販売機コーナーでベンチに座るシンジ君を見つける。

(…いた)

彼を見つけた嬉しさで、胸が暖かくなる感覚になる。この後、シンジ君と一緒に帰ろうと考えた。最近思う。シンジ君が来る前までは、必要無いものは考えず与えられた命令だけを聞いて行動して

きた私。誰も相手にせず、誰からも相手にされない日々。私、綾波レイの存在はそんな物だと思っていた。

だけど、シンジ君が第3新東京市に来てから私は変わり始めた。

最初は碓司令の息子と言う存在しか思わず、彼がネルフ本部に来た時は病室で待機していたが私には出撃命令は出なかった。

その後シンジ君から会いにきた。第一印象は、ただ明るい子だと思っていたけど違った。ただ明るいだけでは無く、シンジ君の笑顔は親子の事あって似ていた。私が実験でエントリープラグに閉じ込められた時、碓司令が火傷を負いながらも私を助けに来てくれた時は身体中が痛みを襲われていたが心は嬉しきでいっぱいだった。

その時に見せた碓司令の笑顔は、私の安否を確認し安心した時の顔にシンジ君の笑顔と良く似ていた。普段、碓司令は私と同じに表情を表に出さない人だ。それとは変わり、シンジ君は表情がコロコロと変わる。喜怒哀楽の怒りの感情は、見た事は今の所は無いけど他の感情は多く見たことがある。そして、シンジ君の表情を見ていると私の心は変化する。

嬉しそうな表情だと私も嬉しくなり、悲しむ表情すれば私も悲しくなる。シンジ君と会う前の私では考えられないほど変わり様。

例えるなら、彼に会う前の私は森の中に佇む動物。木々に囲まれ、自分だけの縄張りを作りその場に籠る動物。他の生き物には接触せず、何も無い日々を過ごすだけの動物。本当は怖かったのかもしれない。

周りの生き物は、私を傷つけるんでは無いかと怯え大人しくその場所身を潜めていたのかもしれない。そんなある日、身を潜めていた私を見つけ出した彼が私の縄張りから動かし、私の事を変えた。

彼は敵意が一切無い雰囲気私に触れ、暖かみを教えてくれて私を縄張りから出して森の中を先導するように手を引き歩いていく。

彼が歩く後には、いつも暮らして知っていると知っていた森は未知に溢れていた。彼にとっては、普通の光景なのだろうが私にとっては未知の光景だった。森から出ると彼は私を優しく向かい入れてく

れた。それから、彼は色々な事を私に教えてくれた。嬉しい時は笑い、悲しい時は泣けと…。そして、何もかも彼に色んな道を切り開いてくれる。そんな彼を私は碓司令と同じく好意を持つようになった。

だけど、その好意は碓司令とシンジ君は感じ方が私の中では少し違った。碓司令と一緒にいる時は嬉しい感情なのだが、何故かシンジ君は側にいると落ち着き楽しく暖かな気持ちになる。後は、彼を見てみると幸せな気持ちになり私の中が変化する。

この気持ちが言葉に変えることは私には出来ず、わからないでいる。でも、嫌な気持ちでは無い事は確かだ。私を変えた彼は、第3新東京市に来て初めてであったと言うのに何故か少し懐かしい気持ちになるのは何故だろう。

それはさておき、シンジ君を誘い一緒に帰ろうと近寄ろうと私は足を進ませる。

その時、私の中に新しい感覚に囚われた。

少し進むと、シンジ君の隣には伊吹二尉の姿が…。2人は楽しそうに笑い、話し合ってる所を私は足を止めてしまい静かに遠くから見ている。そして、シンジ君が伊吹二尉に何かを口元に持って行き食べさせた。その時の伊吹二尉の表情と2人の雰囲気を見ていたら、私の胸に痛みが走った。実験や訓練で経験した痛みでは無く、何処かあの2人を見るのが嫌になる痛みだった。

そして、その痛みの原因が分からないまま私はその場を後にした。

…何故？



テクテクテク

シンジはジオフロント内の敷地を歩いていた。その後、マヤに礼を言いその場で別れ時間を微妙に持て余してしまい探検がてらに敷地内を歩いていた。

「いや、ジオフロントって改めて見ると広いな」

ジオフロント内はネルフ本部を中心に半径3kmで、高さは0.9kmである。そして、天井に生えるビルの収納区画は1.5kmの物だった。

ネルフ本部の象徴であるピラミッドの周りは、ある程度の人口であるが緑があった。それを眺めながら歩いていると、シンジはある場所を見つける。

「あら、こんな所に畑がある…。誰が耕したのかな？ あっ…スイカ」

畑に近寄りシンジは屈みながらスイカを見ていた。

「でも、まだ身が小さいや。でも、土が柔らかいし早い内に大きく実るだろうな…そうだ。こここの世話って誰がやってるのか、リツコさんにでも聞けばわかるだろうなあ」

シンジは畑の土をいじりながら、ほのぼのとしていると後ろから声をかけられた。

「シンジ君…」

「ん？」

彼が振り返ると其処にはレイの姿が。それを見てシンジは立ち上がり、レイに話しかける。

「おっ…レイさん。どうしたの？ こんな所で」

「…遠くから、シンジ君を見つけたから追いかけてきた…」

何処かレイのテンションの低さに不思議そうにするシンジ。本来、レイは周りからは気持ちの波が読めないでいるがシンジは何と無くわかってしまう。そんな彼女に、心配するようにレイに近づくと少しずつレイの表情が他の人では分からないが、彼には柔らかくなっている事に気づく。

「レイさん、何かあったなら相談にのるからね? …あつ、そうだ。レイさん、其処の畑って誰が管理してるか知ってる?」

「…それは加持一尉が管理していた物。今はドイツに行つて違う人が代わりにやっているけど…」

「そつか…まあ、後で誰かに聞いて畑の管理させて貰おう」

不思議そうに彼を見るレイ。

「…どうして? シンジ君はスイカが好きなの?」

「うゝん、俺って何かを育てるのって好きだからかな…。何か育てるって、新しい物が見つけれそうだからかな。それを求めているのかもしれないね、俺は」

何処か遠く見るようなシンジに、レイは彼が遠くに行つてしまうと錯覚に囚われ無意識にシンジの服を掴んでしまった。

「えっ?」

「…あつ」

いきなり服を掴まれたシンジは驚き、咄嗟に行動に起こってしまった。レイは自分の行動に気づく。そんな2人に沈黙が走る。

ピピピピピピピッ

すると、突如シンジのズボンにある左ポケットから携帯の着信音が鳴り響く。

これが、事件の始まりとは知らずにシンジは携帯を取り出した…。

## 人の手から作り出されたもの 下

第28放置区域でJAの起動実験が始まろうとしていた。

『では、これよりJA起動実験を行いたいと思います。管制室に居られる皆様、お手元にある双眼鏡でご覧ください』

時田の指示により、来客達はホールの隣に設置された管制室の窓から双眼鏡で前にあるビルを見始める。時田はホール内の奥に設置されたジェット・アローンを操作する機械の後ろにいた。時田の指示を受けた2人の人間は機械に設置されたキーボードに入力する。すると、ビルは真つ二つに割れ左右に移動すると中からロボットの姿が現れる。見た目は首が無く、胴体はエヴァに似せているのシャープで肩は丸く腕は頑丈そうな装甲で太く肘にブースターが付けられていた。脚は細く見えるが膝の後ろにサスペンションだと思われる部分があり、上半身の重みにも耐え縦横無尽に動ける仕組みになっていた。

「へえ、なんかエヴァのモチーフにしたようなロボットね。それに腕や脚は換装できるようにも見えるわ」

ミサトは双眼鏡でJAの事を喋っているが、リツコは双眼鏡を持たずミサトの後ろで壁に寄りかかり立っていた。再び放送が入り、JAの行使運転のやり取りが流れた。

『ジェット・アローン起動用オペレーティングシステムVer. 2.2.1cを開始させる』

『了解』

JAに起動プログラムが発動され、本来首があると思われる場所には六角形の赤い装甲に下の部分が白く光り始める。するとJA内のOSが読み込みが開始すると途中で《DELET》と書かれた表示が現れ、突然読み込まれていたOSが消えていき新たなOSに書き換



えられていく。

ジェット・アローンは起動しバックパックから制御棒を4本立てて右足を出し歩き出す。

おおお

管制室にいる来客達は歓声を上げる。観客と一緒に見ていたミサトはある程度は驚く。

「動いてる動いてる、これが本当に実戦配備されればシンちゃん達の負担が軽減できるんだけどね」

「……」

そんな中、リツコは何も言わず黙ってその場に立っていた。

ビービービービー

すると、突如警報機がホール内に鳴り響く。その音を聞き来客達は驚き、ミサトは眉間に皺を寄せた。

『どうした？』

『突然リアクターの内圧が上昇を始め、1次冷却水の温度も上昇しました』

『馬鹿な…早く減速材を！』

『了解！』

慌ただしく放送で聞こえる時田の声。だが、プログラムを受け付けないジェット・アローンは減速材が注入のための仕組みが働かず歩きの止めない。それを見た時田は最終手段に移った。

『緊急停止させろ！』

『駄目です！受け付けません！』

『…ありえん』

もはやジェット・アローンは、制御不能に陥り足を止めず歩き続け来客達とミサト達がいる所にまで来ていた。時田は迫り来るジェット・アローンをモニター越しで見ながら唾然していた。

うわああああ

きやああああ

迫り来るジェット・アローンに恐怖し、来客達は悲鳴を上げる。

しかし、そんな事を御構い無しにジェット・アローンは歩き続けた。

ズドンッ

ホールの天井を踏み抜き、目の前に何があるうが関係無しに歩いていくジェット・アローン。ホール内に身を小さくしていたミサトは身体を起こし、一つ咳をして皮肉を言う。

「ゲホッ。なんとまあ…作つた人間に似ているのか礼儀を知らないロボットね〜」

ビービービービー

再び警報機がホール内に鳴り響いた。その音に我に帰る時田が前にいる人間に聞いた。

『次は何だ！』

『ジェット・アローン、制御棒が作動せずリアクター内の温度が上昇を続けています！ このままだと炉心融解の危険性が！』

核に用いた物は、凄まじいエネルギーを生み出し確実な安全性を持ちければ大変便利な物だ。核は原子炉内で底濃縮ウランなどの核燃料を臨界状態にすることにより、核分裂で発生させて熱を生み出しエネルギーに変える。

通常時は核分裂の連鎖反応で安定的かつ持続的に発電するが、定期点検や緊急の際には核分裂反応を中断させ原子炉を停止する必要がある。しかしながら一度運転を開始した燃料には核分裂により発生した核分裂生成物が多量に含まれており、これらが核分裂停止後も放射性崩壊によりしばらく崩壊熱を出し続ける。したがって、しばらくの間は炉心を冷却し続けなければならない。だが、今のジェット・アローンには本来制御棒でリアクターを冷やす役目を果たしておらず炉心融解の危機に迫っていた。

ジェット・アローンを開発際に、あらゆるミスを想定して全てに対処すべくプログラムを組んでいたのだが誰かによって変えられ、今の事態に陥っていた。時田は落ち込みながら驚いていた。

『ありえない事態だ…』

「だけど、現時点に起きてるじゃない！ 他に手段ないの!？」

ミサトは時田の側にいる人間に大声で叫び聞き出す。しかし、青ざめた顔で答えた物は絶望だった。

『今のジェット・アローンが自動で停止される確率は…僅か0.0002%です。まさに奇跡です』

「奇跡を待つより捨て身の努力よ！ まだ手段がある筈よ…答えなさい！」

『全ての手段は試した…』

「いや、まだある筈よ！ 全てを白紙にする手段が…貴方にその手段の権限が無いなら他から取りなさい！ 今すぐ！」

時田はミサトの気迫に押されたのか、顔を下に下げ近くにある受話器を取り何処かに連絡をし始める。

★★★☆☆

パッカーン

「ええ？ その話なら斎藤君の方にしてくれるかなあ」

ゴルフをしながら電話している人間はジェット・アローン関係者だった。

「そうそう、僕の方では管轄外なんだ…」

「あー、それは工藤さんの方に聞いてくれるかな。 それを通さない  
と、こつちも何も出来ないんだよ…」

ある高級ビルの最上階にある社長室。

☆☆☆☆☆☆

「……では、岸浪さんの方に。 ええ、わかりました」

何回も受話器を置いては、他の所に電話かける時田。 もはや、ジェット・アローン関係者内でお互いに責任のなすり付け合いをしているのか時田の電話はたらい回しにされていた。 ようやく話がついたのか、時田は受話器を置きミサトの方に向く。

「今から命令書が届く筈だ」

その言葉に驚愕したミサト。

「そんなの待ってられないわ！ 爆発してからじゃあ遅いのよ！」

今も尚、ジェット・アローンは歩き続けて厚木方面に向かっていた。

ミサトは命令書待つ気は無く、独断で動こうとする。

「今から私独断で動きます…悪しからず」

時田は、最早何も言えず下を向いていた。

☆☆☆☆☆☆

ミサトは先ほどの控え室に戻っていた。

「あつ、日向君？ 厚木に足つけといたから、シンジ君と初号機をこっちに寄越して…そつ、F装備で。 緊急次第…」

ミサトが電話先でネルフにいる日向と話している所にリツコが静止をかける。

「無駄よ、お止しなさい。 葛城一尉…どうやって止めるつもりなの？」

ミサトは着替えながら、リツコの言葉にニヤツと笑いながらCAUTIONと書かれた所を前に立つと上下に開き中から放射線防護服が出てくる。

「人間の手で…直接よ。 まあ、シンちゃんと私で止めればあの時田の奴に一発言えるじゃない？」

それを聞いたリツコは驚き、その後少し微笑みミサトに近寄り背中をポンと叩き一言言うのと控え室を後にした。

「死ぬんじゃないわよ…」

「当たり前よ…シンちゃんのツマミが待つてるもの」

リツコには聞こえていなかったが、なんとも彼女らしい言葉で返していた。



エヴァを輸送する戦闘機が第28放置区域に向かってる中、防護服に着替えたミサトは時田と話していた。

「本気ですか!？」

「ええ」

「既に内部では汚染物質が充満している…危険すぎる!」

「上手く行けば…みんな助かります」

ガツシヤーン

突然斧で機械を叩き割る音が鳴り、その元に向く2人は一人の時田の下に働く社員が機械を壊していた。その後ろにもミサトの手助けをしているのかケーブルも切っていた。

「ここを壊せば手動で内部に入れます」

「バックパックから侵入出来ます」

それに対してミサトは静かに頷くと、ボソリと時田呟く声が聞こえミサトは時田の方に向くと時田は後ろにむきながら一言。

「希望…それがプログラムを白紙にするパスワードだ」

「ありがとう」

ミサトは時田に礼を言うと言ったエヴァを搭載した戦闘機に乗り込みに行く。

☆☆☆☆

シンジとミサトを乗せた戦闘機はジェット・アロンの後を追って飛んでいた。戦闘機内で、ミサトとシンジは対面に座りブリーディングをしていた。

「目標はJ.A。 通称《ジェット・アロン》。あと30分後に炉心融解の危険性があります。ですから、これ以上人口が集まる場所に近寄らせる訳にはいきません。日向君」

「はい」

「エヴァを切り離れた後は…速やかに離脱。安全高度まで上昇して待機」

「了解」

既にジェット・アローンは残り30分で炉心融解の危険があり、そのままほっとけば人が集まる場所にまで被害が届く場所まで移動される場合に。シンジはプラグスーツに着替えており、ミサトの話を漏らさないように耳を傾けていた。

「シンジ君」

「はい」

「エヴァに乗り私を持って、ジェット・アローンと並走し掴まえてバックパックに私を乗せて。後は、中に乗り込みジェット・アローンを止める為にプログラムを白紙にしてジェット・アローンを止めれば作戦成功よ」

「……」

シンジはミサトの言葉に驚かず、無言で少しずつ下に顔を下げる。彼の中で、ミサトに危険な事をして欲しくないと考えるが今ジェット・アローンを止めに行けるのは自分とミサトだけと考えると、より一層にシンジは暗い気持ちになる。彼は子供ながらも言葉には出さずに内心で彼女がやる役目を他の人と交代させたかったが、誰がやるにしても一つの命だとシンジは考えた。ミサトは彼にとって、女性であり上司であり家族であった。掛け替えのない人にわざわざ危ない所に連れて行く人間はまず居ないであろう。

そんなシンジを見てミサトは微笑みながら、両手で優しくシンジの頬を包み顔を上げさせ目を合わせる。

「シンちゃん…貴方の気持ちは良く分かるわ。私を危険な事をして欲しくないと。その気持ちは有り難いけど、今…誰かがやらないと人が死ぬかもしれない。だから、その1人が私。後、シンちゃんね。2人で力を合わせれば、絶対成功するわ!」

ミサトは今出来る笑顔でシンジを励ます。ミサトらしい人の気持ちを楽しくさせる笑顔に、シンジは内心泣きそうになるがミサトの言葉で気持ちを固める。

「…そうですね。ちゃちゃと片付けて帰って晩飯食べましょうか、今日は俺の取って置きメニューを作りますよ」

「良いわね、成功祝いね。後、ツマミもお願いね」

「はい！」

2人の顔は、今から作戦に不安を持つ事の無い笑顔で笑い合っていた。そして、戦闘機は走るジェット・アローンに追いつき後ろに並走するように飛ぶ。

「葛城一尉、ジェット・アローンの後ろに着きました。発進はいつでも……」

「わかったわ、日向君。じゃあ、行くわよ……シンちゃん！」

「ええ！」

シンジはエントリープラグに乗り込み、起動させシンクロしたのちミサトを左手の手の平に乗せて準備する。戦闘機はジェット・アローンの頭上に配置され、搭載されたエヴァ初号機を下ろす体制に入る。

「さあ行こうかしら……シンちゃん、OK？」

『いつでも』

「なら結構……パージー！」

ミサトの合図によりエヴァ初号機の肩の装甲に固定されたレールが外れ、脚から落ちていく。切り離れた戦闘機はその場を離脱。

落ちていく初号機は、落ちている際にミサトを乗せた左手に右手で覆うように包み両手を頭の上に乗せた。

ズブーン

無事、初号機は後ろに引きずられながら着地する。そして、着地した瞬間に手の中にいるミサトに衝撃を通さない為に、両手を下げて衝撃を緩和させた。

『ミサトさん、大丈夫ですか?』

「ナイスよ、シンちゃん！ 助かったわ」

シンジの行動によりミサトは振り落とされず、ミサトがシンジを褒めると初号機の顔は前を向き左手を腰の近くに添えて走り出す。

既にこの時には、ジェット・アローン炉心融解の予定時間は残り20分過ぎていた。初号機は左手を動かさず、ジェット・アローンを追いかける。



「シンちゃん、残り20分も無いわ！ 急いで！」

『了解！ ミサトさんも、しつかりしがみ付いてくださいね…行くぞ、初号機！』

シンジの問いかけに初号機のツインアイが光りだし、追いかける初号機の速度が上がり始める。

見る見るうちにジェット・アローンと初号機の距離が縮まり、ある程度の距離になると初号機はジェット・アローンのバックパックにある取っ手を掴むと後ろに体制を傾ける。すると、ジェット・アローンは初号機の力に引かれ脚が止まる。だが、止めている間に踏ん張る初号機の脚は地面が耐えられないのか引きずられ始めた。

「シンちゃん、このまま乗せてー」

ミサトの指示により、初号機はジェット・アローンのバックパックの上に左手を持っていく。ミサトはバックパックの上に差し掛かると、ジェット・アローンに乗り移る。

この時、シンジは肝を冷やす事に。ミサトが乗り移った瞬間、再び初号機の脚が引きずられてしまいジェット・アローンが一步踏み出す。その為にジェット・アローンは揺れ、乗っていたミサトは振り落とされたしまった。ジェット・アローンから離れ、空中に投げ出されたミサトを初号機のモニターで見えていたシンジは思考と息が止まる。その間にもミサトは落ちていき、地面との衝突が待ち構えていた。

そんな軽い音を鳴らしながら、ジェット・アローンから落ちたミサトは初号機の左手で受け止められた。シンジの無意識なのか初号機の意味なのかは定かでは無いが、最悪の事態は免れた。シンジはミサトが助かった事が分かると、今まで止まっていた呼吸を再び開始する。今の彼の心臓は、激しい動悸に襲われていた。

そんな彼とは逆に落ちた本人は、シンジの事を信じていたのか初号機の顔に向けて親指を立てて先程の起きた事に対しての恐怖を感じさせない笑顔でいた。それを見て彼は少し気持ちが落ち着いた。

『ミサトさん、気をつけて』

再びジェット・アローンのバックパックに乗り移り、ミサトは外部に設置されたレバーを引くと内部に入れる扉が開かれる。すると、内部の熱が排出されジェット・アローン内の熱が籠っているのか内部は紅くなっていた。

「こりゃあ、不味いわね…急がないと」

ミサトはジェット・アローンの内部に乗り込み、時田から貰ったデータを当てにコントロールルームを探す。

コントロールルームの前に着いたミサトは、扉の横にあるキーボードに暗証番号を12桁の数字を入力するとコントロールルームの扉が開かれた。ミサトはコントロールルームに入り込み、真ん中に設置された機械に近づき手順を踏んでプログラムの消去を行う画面になる。そして、パスワードの《希望》と打ち込むと…。

ビービー

機械から誤ったパスワードを入力された音が鳴り響き、画面には《error》と書かれていた。それに驚くミサト。その後も何回かパスワードで《希望》と入力するが返ってくるのは《error》と言う文字。

「間違いないわ…パスワードが書き換えられてる」

グラッ

ミサトがそう呟くとジェット・アローン内部が揺れ始める。揺れに耐える為、咄嗟に機械にしがみ付き倒れるのを阻止するミサト。だが、いきなり揺れに驚く。

「外で何があったの!？」

ミサトがしがみ付いている機械の画面は、先程《error》と書かれた画面から《JA 戦闘モード》と変わっていた。

★★★☆☆

「ほら、大人しくしてな」

初号機はジェット・アロンの前に立ち、両手でジェット・アロンの肩を抑え進行を阻止していた。

「…早く、ミサトさん」

初号機は余計な力を入れずジェット・アロンに負担かけないように抑えていたが、突如進路方向に阻まれたジェット・アロンは歩く体制から一歩下がり自然体になる。

それを見たシンジは、ミサトが作戦を成功させたと思い初号機を自然体にする。すると、ジェット・アロンの腕に搭載された右肘のブースターが点火する。少し右に身体を捻り左脚を一歩前に出す。その行動にシンジは緊張の糸が切れていて訳がわからなかった。

ボツ

ブースターが最高潮に達し、凄まじい推進力を生み出し右腕の速度は今のシンジには目で捉えない速さだった。ジェット・アロンの右手は握り拳になっており、加速が乗った右ストレートは綺麗に初号機の顔左側に入る。

ドゴオツ

ピシッ

「ぐはっ!？」

ジェット・アローンに初号機は殴り飛ばされ顔の装甲に亀裂が入る。そして進路方向に初号機が居なくなるのをジェット・アローンが認識すると、再び脚を進ませるが歩くのでは無く走り出した。

ガシヨングシヨングシヨングシヨングシヨング

膝のサスペンションをフルに使い、ジェット・アローンは内部にミサトを乗せたまま走り去っていく。殴り飛ばされた初号機は、ジェット・アローンから少し離れた場所で仰向けに倒れていた。

「…いつてえ。くっそお、騙された…早く追いかけてねえと。炉心融解まで残り時間は10分弱…初号機の内部電源は残り2分も無い」

シンジは初号機をフラつかせながら、立ち上がり状況を把握して初号機をジェット・アローンを追いかける為に走らせる。シンジは血が口の端から漏れるとプラグスーツで拭い、レバーのスイッチを押し、いき外部との通信を行う。

「…こちら、初号機！ 日向さん、応答お願いします！」

『こちら、日向。どうしたんだい、シンジ君？』

「予想外な事になって…とりあえず、そっちから外部バッテリーを下ろしてくれません。今の残り残量だと足りないんで…後、ジェット・アローンの開発責任者との通信出来るようにお願いします」

喋りながらも初号機の走る速度を下げないシンジ。

『了解、これから高度を下げて初号機にバッテリーを目掛けて落とす。』

後、少ししたら第28放置区域との通信出来るようになる』

「了解です。バッテリーを下ろすタイミングは、そちらに任せます」一度外部との通信を切り、シンジは初号機の残り活動時間を調節するように初号機を走らせる。今、初号機の限界速度を出してしまうと外部バッテリーが下される前に活動限界になってしまう。その為、ある一定の速さで走らせ外部バッテリーの投下を待つ。

1分ほど初号機が走っている所に、プラグ内のモニターに《NON ame》と書かれた通信が入る。それを見たシンジは通信を繋げた。

『こちら、時田シロウ』

「エヴァ初号機パイロット、碓シンジです。　JA開発責任者でお間違いないですね？」

シンジが時田と通信し始めた時、走る初号機の頭上には戦闘機が飛んでいた。　戦闘機は、少しずつ初号機の前方に飛んでいく。　そして、日向からの通信が入る。

『外部バッテリー降下まで、4・3・2・1：投下！』

戦闘機から落とされた2つの外部バッテリー。　初号機に目掛けて落ちてくる所、走りながら両手でキャッチし尽かさず2つのバッテリーを両肩の装甲に付ける。　肩の装甲の後ろに連結されたバッテリーは、初号機の内部電源に供給を始まり一時的に活動限界時間の数字が止まる。

『そうだ、私がJA開発責任者だ』

「では…申し訳ありませんが、ジェット・アロンの設計図が入ったデータを初号機に送ってくれませんか？」

『なっ!?!』

シンジの要求は、ジェット・アロンの全部と言ってもいいほどの情報だった。　設計図には、装甲に何を使っているか能力など様々な物が載っている物だ。　細かいOSなどは載っていないにしても、設計図は8割ほどの情報が載っている物を子供と言ってもネルフの人間に渡すなど、時田には考えられなかったのだ。

『馬鹿な事を言うな！　君が子供と言えどネルフの人間じゃあないか！　渡せる訳がない!』

時田は拒否の一点張り、シンジの返事を待たず通信を切ろうとした。　しかし、通信が切られる前にシンジは話し始める。

「だったら…貴方はジェット・アロンの何の為に作ったんですか？　ネルフと張り合う為？　使徒を倒す為？　どんな理由があったとしても、時田さんはジェット・アロンを作り上げるのに何を考えていたんですか！」

多少の電源の余裕ができた初号機はジェット・アロンを追う速度を上げる。

「夢じゃあないんですか!?　あそこまで作り上げるのに、長い時間を

使って工夫して試行錯誤を繰り返して：それも貴方だけじゃない。

一緒に考えて作り、何百人：何千人の思いがジェット・アローンを作り上げたんじゃないんですか？ それが今日動かして、その日に炉心融解でぶっ壊れても構わないですか!? それも今は人を乗せて、人々が住む場所に脚を向けてるんですよ！ 今止めなかつたら、作り上げた何人の人間や炉心融解に巻き込まれる人々が不幸になります。無事に止めれば、ジェット・アローンに希望はあります！ だから、止める為にも設計図のデータが必要なんです！ それも今、ジェット・アローンの中に俺の大切な人が乗っているんです。助けたいんです：お願いします！」

シンジは時田を説得する。本人の時田は、シンジの言葉と自分の立場が内心で揉みくちやになっていた。

「時田さん！ 俺にはネルフでは特例で一番上に近い立場の権利を持っています。その為にジェット・アローンの情報は、ネルフに報告する必要は無いんです。誓いましょう：なんなら契約書を後で書きます！ 今人に助けられるのは：恥でも何でもない。次に活かせばいいんです。だから、データを！」

『：わかった、データを送る。君、今すぐデータを彼に』  
「！、ありがとうございます!!」

漸く時田もシンジの説得に応じて、ジェット・アローンのデータが初号機に転送される。彼は、残り少ない時間の中で大まかに情報を読み取っていく。そんな所に、再び時田がシンジに話しかけてきた。

『：碓君と言ったね。先程、ジェット・アローンが戦闘モードに入っているのを確認された。今のジェット・アローンには武器を搭載されてない為に、徒手空拳で自分の障害になる物を攻撃するようになっている。色々な格闘技術をデータに入れてある：気をつけて。そしてジェット・アローンを：止めてくれ』

初号機とジェット・アローンの距離が僅かになり、シンジは先程送られた情報を読み終わって時田の言葉に少し笑う。

「ええ、無事に止めてジェット・アローンを時田さんにお返しします

よ。そして終わり次第、良ければ後でお話しましょう。俺、巨大ロボット好きなんで」

『!? ああ、わかった。後、すまない…私は君に無礼な事を記念会の時に発言してしまった。ネルフから来られたお二人にも後で謝罪する』

「まあ、俺の事でしたら別に。どんな事を言われたのかは分かりませんが…大方間違っていないとおもいますよ。毎回、使徒との戦闘ではギリギリでの勝利なんで。では、もう少しでジェット・アローンに接触するので通信切らせてもらいます」

『…健闘を祈る』

通信を終わらせて、初号機はジェット・アローンに追いつきバックパックに手をかける。すると、ジェット・アローンは裏拳を初号機に放つ。難なく初号機は躲すが、ジェット・アローンはボクシングのような戦い方で初号機を襲う。炉心融解まで残り5分。

「ミサトさん、聞こえますか!?!」

『ええ…聞こえるわ。今の状況は絶望的ね、パスワードが書き換えられているのかプログラムは消去は出来ない。困ったわ…でも、やれる事はやるわ』

「ミサトさん…どうせ俺が逃げまじょうって言っても、諦めずジェット・アローンから降りる気無いでしょ?」

『やれる事はやっておきたいのよ』

初号機はジェット・アローンの攻撃を捌き躲すと、懐に潜り込みジェット・アローンの両腕を外側から初号機の両腕で抱き抱えられ拘束される。初号機に拘束され、対抗するジェット・アローンだが動けないでいた。

「だったら…その命俺に託してもらえませんか?」

『…何か策でもあるの、シンちゃん』

「先程、JA開発責任者の時田さんからジェット・アローンの情報を貰いました。それで読んだんですが、今ミサトさんがいると思われるコントロールルームに制御棒を強制に動かす物があるんです」

ジェット・アローンには、あらゆるミスに対応出来るように手段を

残していた。

「それをある一定に押し込むと制御棒が強制的に動きます。ですが、問題があつてその制御棒を一人が動かすには今の残り時間では間に合いません」

『シンちゃん：私は貴方に命を託すわ。 どうすればいいの、私は』  
「ミサトさん、俺を信じて：。 今から初号機の操縦をAUTOにして、ジェット・アローンを動かさない為に拘束。 そして：今から俺はコントロールルームにA・Tフィールドを張ります。 それで制御棒を押すんですが、力加減を間違えると破壊しかねます。 なので、ミサトさんにA・Tフィールドを通して制御棒を押し込んでください。 それにそつて、俺も力を入れていくので：」

彼の言う方法は、余りにも現実的では無く例えるならマジックハンドを持った両手で針に糸を通すほどの芸当なのだ。 シンジはジェット・アローンの設計図を当てに、その空間に小さなA・Tフィールドを張り制御棒を押すのはエヴァの操縦として前代未聞の物であつた。 しかし、今の状況ではこれ以外に打開策が無かつた。

『わかつたわ、シンちゃん。 じゃあやりましょうか』

「はい、絶対に成功させます」

シンジはレバーのスイッチを押していき、初号機を一時的にAUTOにしてジェット・アローンを拘束させる。 彼はレバーを離し、両手を祈る様にして額につけ身体を前に倒し集中する。

コントロールルームに小さな壁を作り出すイメージするシンジ。 少しすると、コントロールルームの制御棒の前に一人分ぐらいな小さなA・Tフィールドが展開された。 それを見たミサトはゆつくりと近寄り、そつとA・Tフィールドに防護服を通して触る。

『暖かくて柔らかい：後、力強く感じる』

そんなミサトの感想はシンジの耳には入らなかつた。 そして、残り時間2分を切る。 ミサトは力を入れ、A・Tフィールドを全体重かけて押し始める。 すると、A・Tフィールドは動きだし制御棒に触れ少しずつ内側に押し込められていく。

初号機内で集中するシンジは、展開するA・Tフィールドから押さ



れる感覚に従ってその方向に移動させる。今の方法は、ミサトがシンジを心の底から彼の事を信頼出来ていなければ今頃ミサトがA・Tフィールドに弾かれていただろう。本来、A・Tフィールドとは拒絶する心の壁と言うものだが2人の間には拒絶する物は無く信頼しあつて出来る芸当でもあつた。

制御棒を発動させる為に必要なラインまで残り僅かだが、残された時間も僅かだった。しかし、今の状態で押していくには数秒足りなかった。それに2人は気づいたのか、奇跡なのか偶然に思考が一致した。

『動けえっ!!』

するとジェット・アローンを拘束していた初号機に異変が起きる。

顎部ジョイントが強制に外れ、初号機の口が開き始めた。すると、コントロールルームに展開されたA・Tフィールドは押し込む方向にそつて何重にも展開されていき制御棒は難なく、必要ラインまで押し込まれ制御棒が働き始める。コントロールルームでは紅く灯していたのが緑になり、ジェット・アローンのバックパックにある制御棒はゆっくりと収納され抵抗を止め自然体で止まる。それに応じて、初号機もジェット・アローンを離し自然体になる。

無事、ジェット・アローンを止める事に成功する。

『疲れた〜』

「…お疲れ様です」

ミサトはコントロールルームで床に座り壁に寄りかかり休み、シンジはプラグ内でグデ〜と横たわっていた。2人とも極限に近い緊張感で疲れ切っていた。その後、初号機とジェット・アローンは無事回収され事件は解決した。

(だけど…今回の件。誰かが仕組んだ事だわ、後で調べてみるか…)

ミサトはそんな思いを持って、ネルフに戻っていった。

ジェット・アローン暴走の事件は、誰かの手によって起きた物だと判明したが犯人は見つからず真相は闇の中に。事件から次の日、ネルフに時田が来て会議室でシンジ・時田がテーブルを挟み椅子に座って話していた。

「こうやって、顔を合わせるのは初めてだね。改めて自己紹介させてもらおう…私はJ A開発責任者、時田シロウ。よろしく」

「じゃあ、こちらにも…ネルフ直属エヴァ初号機パイロット兼階級は二尉の、碓シンジです。よろしくお願いします」

お互いに自己紹介を終わらせて頭を下げる。

「昨日も言ったが…私は碓君を記念会で侮辱してしまった。申し訳ない。そして、ジェット・アローンを無事に止めてくれて…ありがとう」

2つの意味で時田は、謝罪と礼を込めてシンジに向けて頭を下げる。

「時田さん…頭を上げてください。俺に対する侮辱は怒ってもいいし、ジェット・アローンだって仕事の一環です。ただ言える事は…『同じ事をするな』です。それよりもジェット・アローンはどうなるですか？ この先…」

「あの事件により、一時的に計画は凍結。しかし、事件で起きた問題を解決させれば再び開発が出来るだろうね」

シンジは彼の言葉を聞いて、椅子の背もたれに寄りかかり大きく息を吐く。

「良かった…折角、あのロボットを凍結のまま処分されるのは勿体無いですから。それにしても、あのジェット・アローンの拳は効きましたよ」

2人の会話で会議室の空気は、少しずつ軽くなっていく。

「それは使徒のA・Tフィールドを突破した時に使える攻撃手段だからね。理論上で使徒にダメージを与えられるほどだよ。他に色々な武器を搭載させて、戦わせる事も可能なのだ」

「なんすか、それ!? もしかして…換装とか出来るですか?」

シンジの目はキラキラと輝かせて、時田に質問する。質問される時田も、熱が入って語り始める。

「ああ、その通りだよ。ジェット・アローンが戦っている頭上に武器やパッケージを乗せた戦闘機を配置させて、状況に合わせて物を落としてジェット・アローンを換装させるんだ」

「それは! 夢の合体シーン!」

シンジは立ち上がり、両手をテーブルについて前乗りになる。案外彼も子供らしい所もあったのか、そういう話は好きだったらしい。そんな反応を見た時田は、より一層語る。

「そうなのだよ…大型装備はタンク型の下半身に。中距離装備なら逆関節。近距離なら二足。長距離なら四脚。ジェット・アローンには様々な戦いがあるんだ!」

「ならなら! 自分の意見言わせてもらおうと、必殺武器を作るべきです!」

もはや、会議室は男2人のジェット・アローンでの浪漫を語り始める。

「ほう? どんな物だい、それは」

「片腕に六連のチェンソーを装備させて、リアクターを限界ギリギリまでエネルギーを生み出させて…六連チェンソーを高速で片腕を中心に回転させます! それを使徒に突きたてれば、相手は消し炭になるに違いない!」

「おお!! それは一回しか出来ない技じゃないか! 一度しか撃てない…だか、当たれば相手を倒せる。碓君、君は浪漫をわかっている!」

「でしょ! でしょ! 他にも案あるんですよ、これが…初めてジェット・アローンを見た時に自分の中でビビッと来てたんで…」  
「詳しく教えてもらおうか…その案を使わせて貰うかも知れない」

「どうぞどうぞ、自分の考えで良ければ」

既に歳も関係が無くなった男の熱い浪漫の話をしていた。シンジと時田は、会議室で二人仲良く話し合っていた。そんな2人のやり取りを見ていた監視カメラが一台、天井の端に設置されていた。

☆☆☆☆

会議室の中を監視カメラで映す映像を、会議室から離れた部屋でモニターでミサトとリツコは見ていた。

「あらあら、シンちゃんたら：時田の奴と仲良く話し合って。まあ、シンちゃんなら誰でも仲良くなれそうね」

「：シンジ君、言ってくれば可能な物なら作り上げるのに」「リツコ、今シンちゃんが言った物って作れるの？」

「六連チェンソーの物なら、エヴァの片腕を犠牲にすれば出来なくは無いわ。でも、確実にパイロットのフィードバックは凄まじいけど」

リツコの言葉に、ミサトは啞然となる。この後もシンジと時田の話は続き、半日も語り合っていた。そして、時田は謝罪の為に一時ネルフの管轄に入りエヴァの武器開発に関わる事に。

これにより、ネルフとシンジに新たなパイプが繋がる事になった。

## セカンド・チルドレン

「会いたいから〜あ〜♪ 恋〜しくて〜☒ 貴方を〜思うほど〜♪」

そんな唄を口ずさみながら、シンジは学校が終わり共に歩くレイと一緒にネルフに向けて歩いていった。今の時代、『セカンド・インパクト』により季節は無くなり一年中が夏に等しい暑さをもたらしている為に午後16時過ぎと言えど外はまだ明るかった。シンジの隣で、横に並ぶようにレイも歩いているが彼のテンションの高さに疑問を持ったのか、少し顔に出ていた。レイは余り話す事が無い少女であったが、彼との出会いから今に至るまでに少しづつ他人に話しかけるようになっていた。

「……シンジ君、何か嬉しそう。何かあったの？」

「寒い夜を〜、ん？ そうだね〜、これからネルフに行くでしょ？ その時にリツコさんに会いに行くんだ〜」

モヤ

(…? …? …? 何故?)

レイはシンジの言葉を聞き、前にマヤと彼が話してる時に感じた胸の奥の違和感を感じた。そんな違和感に惑わされているレイを余所に、シンジは話を続ける。

「この前、ジオフロントに畑があったでしょ？ あれの管理人が今はリツコさんらしくてね、今日それを聞いて承諾してくれば明日からでも世話しに行くんだ。丁度よく明日は、学校も訓練も休みだしね」

楽しそうにシンジは話す中、レイは彼がリツコに会う理由に納得したのか…少し安堵したような表情になっていた。

(何故…私はシンジ君が、他の女性に会う事を聞くと…胸に。　こう  
…モヤモヤするのかしら？　…わからない、どうして)  
「そう」

少しずつ少しずつと彼と触れ合い、話し合いをして行くうちに彼女の中に生み出された一つの感情が現れ始めていた。　彼女には、まだ理解出来ない感情に手間取っているがいつかその感情に気づく時が来る日があるだろう。

その後2人は、ネルフに到着するとシンジとレイはシンクロテストを受ける。　そして、シンクロテストが終わりシンジは素早くリッコに近づき話しかける。　その際、リッコは自分より背が低く男の子とは思えない顔付きの所為で彼の事が懐いて近寄ってくる猫に思えて仕事中と言えど、猫好きの彼女としては少しホッコリと癒されていたのは別の話。

シンジは、自分の要件をリッコに話す彼女からOKと承諾。　それを聞いてルンルン気分になったシンジは、更衣室に向かい鼻唄をしながらプラグスーツから私服に着替え帰る仕度をする。

彼はネルフから出ようとゲートの前に立つと、後ろからレイが小走りで彼に近寄る。　彼はそんな彼女の存在に気付き振り返る。　レイはシンクロテストの後、着替えて彼と途中まで一緒に帰ろうと考えてシンジを探すが途中ですれ違うネルフ職員から教えてもらい追いかけてきたようだ。　今のレイは、ネルフの職員達からは前とは違い話しかけられるようになっていた。　これも一つ、彼女の変化の一つかもしれないかった。

「ねえ…シンジくん。　私も明日…一緒に畑。　手伝う…」

ネルフから出て地下鉄の電車に乗り、座席に座り彼の隣に座る彼女が突如そんな事を言い出した。　彼女は彼女なりに言葉を選び、彼に話すようになっていた。　それを聞いたシンジは、少し遠慮した態度で断ろうとする。

「えっ…でも、明日朝早くだよ？　悪いよ、それに俺の本当の目的ってあの畑の近くに自分の畑を作ろうとしてるんだよ？　だから西瓜畑だけの作業じゃなく、新しく作る為に色々な事もやるんだよ？　折角

の休みの日に…」

「構わない…私は明日何もする事が無いから。それに…私は色んな事してみたいわ。お願いシンジ君…」

彼の横に座る少女は、言葉では感じられないが彼女の必死になる顔見て彼は折れる。シンジは集合時間と集合場所をレイに言うのと、嬉しそうに笑う為にその笑顔に見惚れたシンジ。その後、別れ際にレイが一言。

「じゃあ…明日。お休みなさい、シンジ君…」

自分の家に向けて足を進ませ、遠くなる彼女の後ろ姿を見ながら彼はシミジミと良かったと思っていた。最初の頃の彼女では想像出来ないほどに、彼女は少しずつだが変わり始めていた。その結果に満足する彼は、家に帰るなり次の日の為に弁当作りの前準備と夕食を上機嫌で豪勢に作りネルフから帰ってきたミサトを驚かせる。その後、風呂上がりのミサトに全身マッサージをやるとミサトは全身がグナングنانになるほどに解され、ミサトの中に溜まっていた疲労は見事無くなっていた。しかし、ミサトは仰向けで頭の上にシンジが座り膝枕をして顔のマッサージしている最中に寝てしまう。そんな中シンジは起こすのが可哀想に思ったのか、仕方なくペンペンを呼びミサトの部屋から掛け布団と自分の羽織る物を持ってきてもらい彼女にかける。

ペンペンに礼を言い、ペンペンは自分の部屋に戻るのを見送るとシンジは膝の上にあるミサトの寝顔を見ている内に自分も眠くなり無意識に正座から女の子座りに変え前屈むようになりながら寝てしまった。

朝4時、ミサトは目が覚め意識を覚醒させると朝早いながら外は少し明るくなるうとしていた為に居間は薄暗かった。そして、自分がいつ寝てしまったのか思い出そうと考えていると少しずつ夜目が効くようになったのか目の前が見え始めた。すると目の前にシンジの寝顔があり、彼女は内心で驚く。

(くぁwせdrftgyふじこlp;@:~)

余りの光景に叫びそうになるが何とか抑え、再び自分が寝る前の事を思い出すと少しずつミサトの顔は紅くなっていく。歳下の少年に、普通は逆の立場であろう状況にミサトは恥ずかしくなっていた。それに気を遣って起こさずに、四季が無くなったとは言え夜は少し肌寒いぐらいだが掛け布団も掛けてくれた事に彼女は嬉しく感じた。ふとミサトは自分の顔に柔らかく暖かい物がある事に気づく。その正体はシンジが寝息を立てながら、彼女の両頬を優しく挟むように彼の手が顔を包んでいた。

人の手には治癒を齎すとも言われている。人間、怪我した時や痛みを感じた所を手で抑える習慣を持つ。不思議な話で、植物人間になった眠る人の手を他の人の手を掴ませて目が覚めて欲しいと願いを込めて祈ると、数ヶ月後に植物人間になった人間は意識を取り戻すと言うケースを生み出していた。シンジと言う少年は、余程がない限りは人を差別しない人間である。出来る限り他人に優しさを与える彼の手には、自然と他人に暖かみを与える手を持たされていた。そんな彼の手に挟まれたミサトには安心感が立ち込める。実際の家族から渡される筈の温もりが、歳が半分離れた彼から貰いミサトはシンジに自然と心が開かれていく。そして、ミサトは人生の中でこんなに人に心を開かせる事があつただろうかと悩む前に答えが出た。

答えは『NO』だ。

彼女の過去では、父親は科学者で家庭に余り干渉しない男性の為に母親の女性が泣く姿をよく見る記憶ばかりだった。『セカンド・インパクト』の時、父親は調査隊で派遣されて南極にミサトと共に来ていた。そして、事件が起き大爆発の際生き残ったのはミサトと父親の男性だけだった。

その時、脱出装置が一機しかなく父親は迷う事なく彼女を乗せて本人は爆風に飲み込まれてしまった。無事に彼女は助かるが身体に傷を負い、ミサトの中では自分の父親が分からないでいた。母親を悲しませるだけの男と思っていれば、あの事件で自分の命を差し出し娘を助けた事に困惑する。

今では、私情で父の仇である使徒を殲滅する為にネルフに所属す



る。

その前にもミサトには、出会いがあり男と付き合う事もあったが完全に心を開く事は無かった。

だが、彼と出会い触れ合い話し合う中で自分も周りの人間も変わっていくのが見て感じ取れるほどだった。

(…前にリツコが言っていたように、シンちゃんは私達の救世主なのかもしれないわね…。 そんな彼を私達が支えて使徒と戦い…来るはずの平和と私の父の仇を取らせてもらおうわ)

ミサトは、そう心の中で思い自分の顔を挟む両手をその上から被せて少し力を入れた。 そんな思いが届いたのか、それとも力を込められた所為なのかは定かでは無いがゆっくりとシンジの意識が覚醒し始める。 少しずつ目を開き、シンジの目とミサトの目が合う。 それにお互いに笑い合う2人。

「おはようございます、ミサトさん」

「おはよう、シンちゃん」

その後、早めの朝食を取りミサトに今日のスケジュールを伝えてレイに言った集合場所に向かう為に家を出る。 そんなシンジの姿を見送り、ミサトはまだペンペンも起きておらず1人居間で座りながら一言。

「行ってらっしゃい…気をつけてね」

★★★☆☆

朝6時、シンジは自分の体だと少し大きいリュックや小さめのクラーボックスを担ぎネルフに入る手前のゲート前でレイとの待ち合

わせをしていた。

「レイさん、寝坊とかしなさそうだけど大丈夫かな。そろそろ待ち合わせの時間だけど…」

今の彼の姿は、動き易い服装での薄い長袖のシャツとニツカポツカに長靴、頭には麦わら帽子と首に手ぬぐいタオルと言った姿だった。先程、近くのトイレで着替えてレイを待っている中で通勤してきたネルフ職員が通りがけると一度、彼を見て場の空間と服装が合っていないとシンジを見た職員達は驚く。しかし、ネルフ職員達はそんな服装の人物が彼だと分かる何故か納得して軽く彼と挨拶してから、その場を後にする。

そんな感じで、30分ほど時間過ぎ約束の時間になるとレイが集合場所にやってくる。

「おはよう、レイさん」

「おはよう…シンジ君」

待ち合わせの約束の時間にキッチリと来たレイに挨拶するシンジ。それに答えるレイ。しかし、レイの姿はいつも通りと言った所か制服姿だった。だが、彼は彼女に集合場所と時間しか言っていないので当然とも言えるかも知れない。そして、シンジはリュックを開けて中からある袋を取り出す。

「はい、レイさん。これ…」

「?…何それ？」

「レイさんの着替え。流石に制服で畑仕事はさせられないよ。動き易いて汚れても構わない服だから、後で更衣室にでも着替えてきて」

「…ありがとう」

「どういたしまして」

レイにシンジは自分と同じ服の一式が入った袋を渡す。そして、彼女と彼はゲートを潜りネルフ内に入る。レイは更衣室に向かわせて、シンジは先にジオフロントに向かう。

畑に着いた彼は、荷物を畑の近くに置き作業に取り掛かった。

数分後、作業している彼の後ろから声をかけられる。シンジは振

り向くと、そこにはシンジと同じ服装でのレイが立っていた。

「シンジ君…待った？」

「いや、別に？　ははっ、なんかレイさんの今の姿は新鮮だなあ。いつもは制服姿だから」

畑の周りに生えていた雑草を抜いていたシンジは、しゃがみこんでいた状態から立ち上がりレイに近づく。そして、彼は自分が被っていた麦わら帽子を取りレイの頭に優しく被せた。

「どうぞ、レイさん。これ被って作業して…意外にもジオフロント内って気温調節の為に太陽に似せた光が差し込むからね。無茶はしないでね？」

レイに麦わら帽子を被せた自分は、首に巻いていた手ぬぐいタオルを頭に巻いた。麦わら帽子を被せられたレイは、彼の優しさと彼が被っていた麦わら帽子を貰い表情に喜びの色が現れ両手で麦わら帽子の底を両サイドを摘み、少し下に引っ張りながら照れた顔で礼を言う。

「ありがとう…シンジ君」

「……どういたしまして、レイさん」

そんな照れたレイを見たシンジは、少し見惚れてしまい返事を返すのが遅くなってしまった。何はともあれ、2人は作業に入りレイは軍手を着けて雑草抜きをしてもらいシンジは手入れをしていた。

レイは元々余り話すタイプでは無いので静かに雑草を抜き、シンジは時々レイに気を使って休憩のタイミングを取る為に話しかける程度で自分の作業はテキパキとやっていた。

☆☆☆☆

部屋は暗く床にセフィロートの木が書かれた司令室。そこには、朝早くと言えどゲンドウと冬月はいた。ゲンドウは席に着きシンジとレイが畑で働く姿を映したモニターを見て、冬月はそれを覗くようにゲンドウの斜め後ろに立っていた。

「…変わったな、レイ」

「ああ…」

「やはりシンジ君は…どんな相手でも優しく関わり、その相手を良い方に変えていくな。流石あのユイ君の子供と言える性格の持ち主」  
冬月はモニターに移された映像を見て嬉しそうに言う。変わったゲンドウは、表情を一つ変えずにモニターを見続ける。

「だが、碇？ 委員会の計画進行は大丈夫なのか…」

「問題無い、シンジがいる限り支障は無い。それに近い内に2号機も届く。より計画は進む」

「なら、心配は無いのだが…。しかし、碇…何故シンジ君が計画の關係に繋がるのだ？ 確かに、使徒を倒す為であるエヴァパイロットではあるが…」

ゲンドウの言葉に何か引つ掛かる冬月。ゼーレの計画内容は冬月も知っていたが、何故そこにシンジが関係に繋がるのか疑問を持った。そんな冬月に対して、ゲンドウは静かに語り始める。

「シンジが幼い時にレイと、あの事件は冬月は覚えてるな？」

「ああ」

「その時に…シンジは、計画の為に必要となる『欠片』を身体に宿した。赤木博士にも上にも知らせてはいないが…その『欠片』のお陰でシンジはエヴァとのシンクロ率が高いと見られる。…それ無しでも、アイツはエヴァとの繋がりは強いだろうが…」

ゲンドウの言う『欠片』のワードに、冬月は思考走らせる。冬月もシンジとレイの幼い頃での事件はある程度は知らせてはいたが、ゲンドウはそれ以上に内密の情報を持っていた。冬月はレイの関する情報を思い出すと、完全では無いが答えに近い物にたどり着く。

「もしや…碇。シンジ君の中に…」

「そうだ、冬月。 シンジは計画の鍵であり…トリガーとも言える存在だ。 初号機以上のな…」

冬月はモニターに映る彼の姿を見て、少し表情が力が込められた。「…なんと言う運命を持たされたんだろうな、シンジ君は…」

悲しそうにそんな冬月の一言が、司令室に鳴り響き再び沈黙になっていく。

☆☆☆☆

時間帯は昼なり、一度作業を止めて近くに設置されたベンチに移動する2人。 シンジはリュックサックの中から三段式の弁当箱と水筒、消毒ウエットタオルを取り出す。

「レイさん、はい。 ウエットタオル…軍手してたとは言え、食事する前には手を洗わないとね」  
「ええ」

彼から受け取ったウエットタオルを使い手を消毒するレイ。 シンジも手を洗い、ベンチの上に弁当を広げて紙皿を使って弁当の中のを盛り付けて彼女に渡す。 水筒の中には味噌汁が入れられており、紙コップを先程と同じようにレイに渡す。

準備が出来る、シンジは両手を合わせて食事前の決まり事である挨拶をする。

「いただきますっ」

「……いただきます」

彼の動作を真似するようにレイも食事の挨拶をする。 そして、レイはシンジから渡された紙皿の上にある御菜に箸で挟み口に運ぶ。

「…美味しい、シンジ君」

未だレイの表情の変化には、おぼつかない所はあるが少しずつ感情で自然と変えられるようになっていた。その所為か、彼女の笑顔も本来持っている美が際立つようになっていた。そんな笑顔を見たシンジは、弁当を作った甲斐もあり嬉しく感じた。

「良かった良かった、喜んでもらえて作り甲斐あるよ。今日の為に昨日から弁当を前準備してまで作ったんだ。今回ののは、俺ん中で自信ある物だからね」

弁当箱の中には小さく食べ易く握られたおにぎりが何個もあり、出汁巻き玉子や切り干し大根にオカラで作ったハンバーグなどなど。彩りが良くバランスも考えられた弁当であった。

その後、2人はジオフロントの光景を見ながら食事を続ける。すると、レイが突然箸を止めジオフロントを眺めながら珍しく彼女の方から話し始めた。

「…私、今日初めて雑草を抜いたわ。今まで本部にすれば訓練やリンクロテストぐらいしかやった事がなかった…」

レイは、本部に来てからは決められた行動ばかりだった。指示され決められた時間に集合など、決められたメニューをこなすなど性格の所為もあるが友達もいない学校にも、指示された為に登校。今までが人に命令され、自分で考えて行動する事が無かった。その為に知識あるが実行する事は以前の彼女では考える事も無かったであろう。

「だけど…今日雑草を抜いて初めて土の匂いを嗅いだわ。独特で嫌じゃない…匂いだった。知識では知っていたけど雑草が他の植物の栄養を取っていると、直に触って確かにと思ったわ。生き物が『生きてる』って…」

「…そっか」

シンジも箸を止め、彼女の言葉を聞き相槌をする。

「シンジ君…私は知ってるようで知らない。だから……」

何か困った様子になるレイにシンジは、黙って彼女の言葉を待った。少し時が流れ彼女の中で言葉が出たのか、彼の方に顔を向けて

話す。

「教えて…色々な事を。 シンジ君は知っている…色々な事」

「うん…構わないよ？ 俺が知っている事で良ければね。 レイさんが知りたい事があれば聞いてくれれば、知っている事なら答えるよ…でもレイさん」

「……？」

2人は顔を合わせて話してる中、彼の顔に少し影出来る。 それを見たレイは不思議そうに見ていた。

「例え俺が教えたとしても…それが完全に正解では無いんだ。 だから、信じられないで。 俺は神じゃないからね…間違ってる所もあるから。 正解はレイさん自身で探して導きだして、俺はヒントとしてしか言えないから」

「わかったわ…」

その後再び2人は昼食を食べ、午後も畑に戻り作業を開始する。

作業を続けて午後17時になり、2人は作業を止め片付けを行い本部に入り1日作業して身体中から出した汗を更衣室に設置されたシャワー室で汗を流した。

2人は着替え終わると本部から出て、上の街第3新東京市で買い物に向かった。 シンジは、彼女に今日のお礼に何着か服をプレゼントをしようと考えた。 レイは今までは学校に行くにも本部に行くにも、制服だった為に彼が少なくとも私服があってもいいだろうと考える。

早速、服屋に着くなり一度彼はレイに聞いた。

「レイさんって何か欲しい服ってある？」

「無いわ」

レイのキツパリとした一言にシンジは、苦笑するしか無かった。

レイも女子であるから、彼は何か欲しがる物でもと聞いたが先程の言葉。 ならば、自分が選んでプレゼントするしか無いと思った。

取り敢えず、持っている物を店の端っこに置かせて貰いレイと一緒に服を選び始める。

「うくん…レイさんって何の服が似合うかなあ」

「シンジ君が選んだ服なら何でも良いわ」

レイは彼の眩きを聞いて素直な事を言うと、シンジは顔を少しずつ紅くなつていく。不意打ちに近いレイの言葉に、恥ずかしい反面に嬉しかったと言う気持ちが溢れた。

何着かシンジが選び、レイに試着室で着替えて貰う。

シャー

着替え終えたのか試着室のカーテンが開くと、中から水色が薄く入ったワンピースを着たレイが現れる。肩を出した物で、彼女の持った可愛らしいさと幼さで今着ているワンピースで麦わら帽子を被り海辺にいたら良く似合った光景だろうとシンジの中で思考を走らせる。見惚れているシンジに、似合っていないと勘違いしたレイは不安そうな顔で彼に聞く。

「駄目…かしら？」

レイは一度、その場でゆっくりとターンして回ると膝上のスカートが少し舞い上がり狙ったかのような一場面にシンジは何も言わず首を横に振るだけだった。それを見て安心したのか、彼女は最近出せる笑顔で一言。

「…良かった」

そう言つて、頬を染めてまた新たな服に着替える為かカーテンを閉め着替え始める。

そんな中シンジは、自分の中でワンピース姿のレイを思い出し元々可愛い物に目が無い彼は抱き締めたい欲望と理性が激闘していた。

何着かレイに似合った服が決まり彼は、レジに持って行き会計する。それを彼女にプレゼントだと言い、渡すとレイは紙袋を抱きしめ彼にレイを言う。

「ありがとう、シンジ君。大事に着させてもらうわ」

彼から貰つて嬉しいのか、頬を染めて紙袋を抱きしめて上目遣いのレイの姿にシンジは純粹に嬉しかったのと目の前の少女を抱きしめたいと訴えかける身体に力を入れて顔に笑顔を浮かばせる。

「良かった…喜んで貰えて」

その後、2人は別れ各自に自宅に帰る。シンジは家に着くなり、



今日自分のとレイが使った服を洗濯機の中に放り投げ洗濯し始める。

ゴウンゴウン

洗濯機が起動している音が鳴り響く中で、彼はその場に座り込み洗濯機に寄りかかり呟く。

「レイさん…少しずつ変わってきたなあ。それにしても今日は楽しかった…もう使徒来なければ最高なのになあ」

彼なりに也使徒との戦闘は恐怖しているが、今日のような日常を守る為に自分に喝を入れて心の中に恐怖を押し込める。そんな所にペンペンがリビングから姿を現して嬉しそうにシンジに近寄る。そんな姿を見てシンジは少し笑う。

「ただいま、ペンペン。ご飯にしようか？」

「クエ〜」

返事するペンペンに、シンジは立ち上がりペンペンを抱き上げてキッチンに向かった。

「さて、何を作ろうかなあ？」

☆☆☆☆

「…ありがとう、感謝の言葉。まだ司令に言った事が無い言葉…でも、シンジ君には何度も言っている」

自宅に帰ってきたレイは、ベットの所で仰向けになりシンジから貰ったプレゼントを抱きしめながら呟く。そして今日やった事を思い出していると、外から雲が退き差し込む月の光がカーテンの間か

ら入り込む。その光が電気もつけていない部屋の中、レイの顔を照らした。

「私は知らない事ばかり…だけどシンジ君から教えてもらえると嬉しい。何故？ 分からない…どうして。シンジ君の側にいると落ち着く…不思議。碓司令の時は普通なのに…」

自分の中で整理していく中、差し込む月の光に気付きカーテンの間から彼女の部屋を覗くような月をレイは見る。

「私は…月と同じかもしれない。夜に現れて只々地球を眺めるだけで何も無い星…私のように。シンジ君は太陽…優しい太陽。周りを照らして暖める…優しい光をくれる存在」

今の彼女の無表情だが前の彼女のような能面とした顔とは違い、人らしい心の変化で表情がすぐに変わる表情だった。詩人のような事を言っていたレイは、徐々に瞼が下りていく。今日の作業での疲労所為か、彼女にとって早めの就寝になった。



ドイツのヴェルヘルムスハーフェンから出航して、半月過ぎUN軍の艦隊の一つに空母オーバーザ・レインボーが海を渡っていた。

夜22時、甲板にマットを1枚敷いて1人の少女がタブレットを持ちながら寝転がっていた。

「…初めてエヴァに搭乗でシンクロ率90%弱。15年ぶりに襲来した使徒を第3新東京市の被害を少なくエヴァを上手く操縦し撃破。

その後の第4使徒は…奇怪なA.Tフィールドを使いコアを貫き

撃破。　続く第5使徒は凍結解除されたエヴァプロトタイプである零号機との共同作戦により撃破：か。　しかも、サード・チルドレンは訓練の回数は数回：」

海風で長い髪が舞うが少女は気にせず、タブレットの画面を真剣の顔で見っていた。　その後、身体を起こし右手でタブレットを持ち空いた左手で自分の紅茶色の長い髪の一房を指先でクルクルと弄りながら、資料を読み続ける。

そして、戦績の所を読み終えてチルドレンの健康状態についての報告を画面に表示されて少女は読んでいくと徐々に顔を顰めていく。

「何これ：：毎度の戦闘で絶対入院してるじゃない。　これじゃあ、このパイロットいつか死ぬわね：：」

少女が資料を読み終え、最後にサード・チルドレンであるシンジの顔写真を見ていた。　彼女の顔は、シンジの顔写真を見て何かライバル視に近い目になっていた。　そんな所に、いつの間にか少女の近くに男性が近寄り声をかけられる。

「おいおい、アスカちゃん？　もう寝る時間だろ」

「…えっ？　か、加持さん!？」

声をかけられて振り返る少女は、男性の姿を見て驚く。　加持と呼ばれた男は肩を竦めながら笑った。　そして、加持がアスカと呼んだ少女はエヴァパイロットであるセカンド・チルドレン、惣流・アスカ・ラングレー。　エヴァ二号機専属パイロットである。　外見、艶やかな髪と明るい蒼の瞳を持ち自他共に認める美少女だった。

「夜更かしは不健康になって、アスカちゃんの綺麗な肌を台無しになる。　まあ、今は若さに頼るのもアリかな？」

何処か皮肉な印象を人に与える微笑だが、この男にはそれが似合っで見える。　男性の中では平均より高い長身で少し痩せ過ぎな感じが見られるが、長めに伸ばした後ろ髪と無精髭に飾られた顔立ちはそれなりに端正であった。　その為、歳上の男に憧れる年代の少女達からは多くの人気を得られるタイプの男であった。

そんな男に声をかけられ近寄られた少女は、髪と近い色に頬を染めるアスカも例外ではなさそうだ。

「あ、あの…加持さん？　いつの間に来てたんですか、全然気が付かなかったんで…」

「それはいかなあ、年頃の乙女が男の接近により気づかないなんて。男は狼だぞ、少し危機感持たないと大いに問題だ」

いけしやあしやあと加持が言うが、この男はアスカに近寄る前に気配を絶ち近寄ったのにも関わらずの発言だった。　　凶太い神経だからこそ出来る技でもあった。

「それにアスカちゃんは美人だ。　俺のような飢えた狼には気を付けないとなあ」

右手は腰に当て、左手で顎の無精髭を触りながら言葉を続ける加持。　やや物騒な事を言っているが、その瞳には汚れた情欲は無く柔らかな表情だった。　そんな加持の為、アスカは安心して警戒する事はなかった。　だが、彼女には問題があった。

「…私は加持さん以外の『男』だったら、すぐに気がつくわ。　そしてあんな思いは二度と味わいたくないわ…」

過去に彼女が負った心の傷が、今だに彼女を蝕む。　過去の事を思い出したのか顔を歪める少女を見て、加持は少し罪悪感に襲われた。　彼は悪戯に少女にトラウマを思い出させる人間では無く、少しの注意で済ませようとしていただけだった。

「すまない…辛い事を思い出させて」

それを見たアスカは苦笑する。　加持が軽い気持ちでトラウマを掘り出すような男では無いと、知っているアスカは笑顔で加持に言う。

「じゃあ、日本に着いたらデートしてくださいよ。　それでチャラにします」

「ははっ、そんな事で良ければお安い御用だ。　だが、こんなオジさん相手にデートしても面白くないと思うぞ？　そんな事を言ってくれる女の子なんてアスカちゃんだけだぞ」

「そんな事無いですよ。　加持さんに色目を使っている子なんて、両手の指じゃ足りないの知ってるんですよ？」

アスカは近づき加持の顔を下から覗き込むようにしながら、年齢に

比して豊満と言つて良い胸の下から腕で持ち上げて組む。不思議と子供っぽい仕草をみせた時のアスカのほうが、背伸びした時よりも可愛らしい綺麗な女性に見える。

「取り敢えず礼を言わせてもらうよ。おじさんにとって若い女の子からそう言つた言葉は最高級の讃辞だしな。ましてやアスカちゃん言われるとより一層だ、だが夜更かし良くないから寝なさい」  
「うくん…わかりました」

冗談めかした口調の最後だけは真剣な声で言い加持の掌はポンつとアスカの頭に乗せる。アスカは、少し残念そうな顔をしながらも素直に同意する。まだ14歳にもならない内に大学を卒業してしまっている天才少女がこんなにも素直な姿を見せるのは、加持の前だけだった。加持はアスカの返事を聞くとその場を後にして、彼女はマットを丸めて片付ける。

「あくあ、まだ睡魔すらこない時間なのに…」

そんな事を言いながら、船の中に入り自室に戻る。近くに置いたテーブルにタブレットを置き、ベットにうつ伏せになるように倒れる。ボスツと音を鳴らして、布団が彼女を包み少し時間が過ぎると横に向いて側にあつたサルのヌイグルミを手取る。

ずっと昔に誕生日プレゼントで買つてくれた物は、アスカにとってお守りであり大切な物であつた。彼女は自分の顔の近くにヌイグルミを持つてくると、徐々に綺麗に輝く湖の蒼が瞳から失われていく。それとは代わり奈落の底を浮かばせたような狂おしい焦りの色が。

「……後、何体いるか分からない使徒をアタシが全部倒すわ。それでエヴァの中に取り込まれたママを救つてみせる…絶対に」

目の前にあつたヌイグルミを抱きしめて、部屋の電気はつけられない為には暗い部屋の中で身体を小さくする。ドイツにあるネルフ支部の中心とも言える存在である、幼い時のアスカには常に憧れだつた母『惣流・キョウコ・ツェツペリン』は実験により失い彼女が使命とも言える物だつた。

今日本に向けて搬送しているエヴァ2号機の中に大切な人を助け

る為に、生来の美貌と優秀な頭脳を用いて凄まじいまでの努力によって磨きあげた惣流・アスカ・ラングレーという少女の突き動かす原動力だった。

「ママ…私頑張ってるから。だから、待ってて大好きなママ…」

母親から最後に貰ったナイグルミをより一層に強く抱き締めて、込み上げてくる感情を必死に堪える。自分は一人で…強くなくてはいけない。泣いても誰も救ってはくれない。

そう信じ続けた哀しい13歳の少女は、ある少年と出会い一筋の希望を持たされる事に。しかし、まだそんな事を知らない彼女は安かなどとは言い難い眠りに落ちるまでに涙を流す事は無かった。まだ浅い眠りの中で見る夢の映像に、向日葵畑の向こうに笑顔でアスカを待つ女性の姿。

「…ママ。寂しいわ…ママ」

その場にはいない存在に語りかける眠り姫。大切な人を救う為、彼女はまた1日が過ぎていった。

☆☆☆☆

「来週？」

学校に登校して時間が過ぎ、昼休みに4人で屋上に向かい一緒に食べる時にシンジの言葉にトウジとケンスケの声がハモる。その中、いつも通りと言ったようにレイは彼が作ってきた弁当を食べ終えてシンジの背に寄り掛かり目を閉じていた。

「そう来週、昨日ミサトさんから言われたんだけど。なんかエヴァ2号機がドイツから搬送されてるんだって、そして一足早くネルフが

出向いて挨拶に行くんだって。俺ってエヴァパイロットじゃない？  
だから、同伴なんだけどミサトさんが2人ぐらいなら友達呼んでも  
構わないって…」

「なんだって!?!」

シンジが話している最中に、突然ケンスケが声をあげる。その際  
にレイはケンスケの声で一度目を開けるが再び閉じる。シンジと  
トウジは、突然に声を荒げるケンスケに吃驚していた。

「どないしたちゆうねん、ケンスケ…」

「シンジ！ その2号機を搬送している船の名前って分かるか!?!」

「い…いや。確か2号機を乗せた船じゃないけど、『オーバー・ザ・  
レインボー』って船に俺らが乗るって…」

再びシンジが話している最中に、ケンスケは凄まじい速さでシンジ  
の手を取り涙を流しながら礼をする。

「ありがとう…シンジ！ 持つべきものは友達だよ！ ひゃっほうっ  
!!」

礼を言い終えたケンスケは、シンジの手を離して嬉しそうに屋上内  
を走り回る。

「ケンスケ君…そんなに嬉しかったんだ」

「まあ、あいつは相当な軍事マニアだからなあ…」

「トウジ君は大丈夫か？ 予定は」

「…あ、ああ。大丈夫やで」

そうしてケンスケがはしゃいでる中、昼休みの時間が終わり4人は  
屋上を後にした。

☆☆☆☆

日曜日の朝、シンジとケンスケとトウジの3人はミサトの運転するルノーに乗り街の中を走っていく。

「悪いわね、2人とも。折角の休日につき合わせちゃって」

「いえいえ、ええんですよ。シンジのお誘いですから、あとミサトさんにもお会い出来ましたし」

「あはは、お世辞ありがとうね。良い友達を作ったわね、シンちゃん」

「ええ、2人は良い友人です」

シンジの言葉に、トウジは照れて恥ずかしくなったのか頬をかく。

もう1人の友人であるケンスケは、持参したカメラをチェックする為に自分の世界に入り3人の会話は聞いていないでいた。

「フィルム：OK。バッテリーも予備バッテリーも準備完了。これで心置きなく撮れるぞ〜」

「大丈夫ですか？ 撮影とかは…」

「大丈夫よ、別に機密関係も無いし」

シンジの質問に軽く答えるミサト。

「それで今から向かってると?」

「そう豪華なお船で、太平洋をクルージングよっ」

「それにしても…久々の海だなあ」

これから向かう太平洋に、シンジは心に期待が溢れていく。そんな中、トウジが疑問に思ったのかミサトに質問した。

「そう言えば…綾波はこないんやな」

「ああ、レイは本部で待機。万が一にシンちゃんが本部から離れても良いように、レイにはお留守番よ」





バババババババババ

「Mi155D輸送ヘリ。こんな機会なきや、一生乗る事はないね！ うっひょ〜！」

4人を乗せた輸送ヘリの中、1人ケンスケだけはカメラを片手にテシヨンうなぎ登りで大はしやぎしていた。軍事マニアである彼には至福の時なのであろう。そんな中、他3人で話していた。

「でも、今の時代に艦隊なんかあったんですね」

「あの事件に巻き込まれなかったただけの物じゃないかしら。あんな物、今の時代で製造してられないと思うわ」

「世の中、難しい物になりましたなあ…。ホンマ」

そんな会話の中、ずっと窓から見える光景を見ていたケンスケが歓声を上げた。その場所には空母5隻、戦艦4隻、巡洋艦7隻、駆逐艦18隻、輸送船6隻の40隻の大艦隊。

「い〜やー！ 空母が5戦艦4、大艦隊だ！ ゴージャクス、さすがは国連軍が誇る正規空母、オーバー・ザ・レインボー！」

「へえ〜、あれって国連軍の人達なんだ。挨拶に行かないと…」  
その言葉にケンスケは不思議に思い、シンジにその言葉の意味を聞く。

「どういう事だ？ シンジ」

「ああ、俺ってネルフに国連軍とのパイプを繋げるために話し合った所為なのか：国連軍から好意的なんだよ。最近なんか、国連軍の人から非常の時には私達を使ってくれて言われるほど」

シンジの言葉にケンスケは口をあんぐりと開けてしまう。前日に白兵訓練で、銃を使った訓練の時にタイミング良く国連軍が本部に来ておりその1人の軍人が所持していた銃にシンジが気になる様子を見て無償で貸すぐらいであった。

本来、軍事の物は軍の中でしか使用するのが当たり前。そんな規則があると言うのに、特例での『碇シンジ』には貸し出しや使用さ

せる事を許可されている。最早、彼のバックにはネルフと国連軍と  
言う巨大な力があつた。

だが、シンジはその力に溺れず本当に必要な時にと備えていた。  
その為、彼は国連軍の人と出会えば礼儀正しく人の気持ちを明るくさ  
せる彼の人望で国連軍は、シンジの所望には出来る限り答えていた。  
その所望もネルフの関係であり、本当の彼が望んだ所望を待ってい  
る国連軍であるのは別の話。

輸送へりは船に着艦すると4人が降りて、潮の香りと油の臭いが入  
り混じった風に吹かれながらシンジは座り続けた所為か体を伸ばし、  
トウジは甲板に戦闘機や軍人の姿に「ほえ〜」と一言。 ケンスケは  
より一層にテンションが上がり甲板を走り回りながらも、カメラの撮  
影は抜かりなく撮っていた。最後にそんな少年達を微笑ましく見  
る軍人達に囲まれ、非常に居た堪れ気持ちに駆られ海風に煽られない  
ように後ろ髪を抑えながら3人の後を歩くミサト。

すると、先頭で歩き欠伸をしていたシンジの前に突如少女が現れそ  
れを見た彼は足を止める。

「ハロ〜、ミサト。 元気してたあ?」

黄色のワンピースを身に纏い勝ち気な少女はミサトに声をかけた。  
顔見知りなのか、ミサトは警戒する事なく笑顔で話しかける。

「ええ、貴女も元気そうね。 随分背が伸びたんじゃない?」

「背だけじゃなく、他の所も…ちやくんと女らしくなってるわよ」

潮風に紅茶色の髪が舞い上がるのと一緒にかきあげ、少女は自慢気  
に答える。 そんな親しげそうな2人を見て、シンジは顔を見比べな  
がら会話を割って入る。

「あの…ミサトさん? 彼女は…」

「あ〜、そうね。 紹介するわ、彼女は惣流・アスカ・ラングレー。  
プロダクシヨンモデルであるエヴァンゲリオン2号機パイロットよ」

ミサトの紹介が終わる同時にアスカが一步前に出てシンジの方に  
指を指しながら気迫持つて言い放たれた。 その言葉にシンジは唾  
然となる事に。

「そう私がエヴァ2号機パイロット、惣流・アスカ・ラングレーよ。」

サード・チルドレン、碇シンジ。 私は貴方を超えてみせる！」

セカンド・チルドレン 惣流・アスカ・ラングレー。

そして、エヴァンゲリオン2号機。

この瞬間、3人目のパイロットと3体目のエヴァが揃う。

話の物語は…まだ始まったばかりであった。

## 戦いの前…

「おやおや、ボーイスカウト引率のお姉さんかと思っていたが……こちらの勘違いだったようだ」

「ご理解頂けて…ありがとうございます。艦長」

ミサトは自分の身分証（歳、3サイズ、挙句果てには生年月日を記された場所を油性ペンで徹底的に黒く塗りつぶしていた）を、老年の艦長に渡していた。それを見て、艦長は皮肉を込めた言葉を送る。

しかし、ミサトは返されたカードを受け取りながら外向き用の笑顔で…あくまで穏やかな対応をした。

アスカのシンジに対するライバル宣言をした後、アスカを加えた一行は空母のブリッジに移動して艦長との対面を行っていた。

「凄い！ 凄い!! 凄くいい!! 凄すぎる!!!」

ミサトと艦長が話している中、軍事マニアのケンスケには喜ばしい環境でカメラを片手にブリッジ内をひたすら撮影していた。それを見た軍人の1人が、心良くケンスケをブリッジ内を案内した。実際は、今の時代に軍事に興味を持つ子供が少なくなっている為に少しでも興味を膨らませようと催促する軍人。後、シリアスな空気でも2人が話す所をケンスケの所為でカオスな場面を避けようとしてる軍人が彼だったのは別の話。

「この度はエヴァ2号機及び搭乗者の輸送援助、ありがとうございます。す」

「いやいや…こちらこそ久しぶりに孫と近い子供のお守りが出来て光栄だよ?」

艦長とミサトの間には見えない火花が散り激しいやりとりの攻防

を行われていた。シンジはそれを見て少し溜息を吐く。彼も大人の事情に関しては、理解はしていたが今の時代協力しなければ生き抜けないでは無いと思っっている。

「ミサトさん、かつこええ〜。シンジ…どないした？溜息なんか吐きおつて」

ミサトの対応を見て、トウジにはカッコ良い女性に見えುತ್ತりしていたがシンジの後ろに立っていた為、シンジの様子が分かった。

今のシンジは、少し落ち込んだように顔の表情は暗く肩を下げていた。

「うーん…うん。今の時代、人同士が大人のプライドを捨てきれずにいるのがね〜？確かに認めたくない所はあるだろうけど…その間に人類滅亡したら、チャンチャンじゃあない？少しでも妥協して生きてけば、人間誰もが仲良く出来るのに…難しいよ」

「ワイは、シンジの考えた理想郷を作り上げんのは…難しいと思うわ」  
そんな男子2人が話している間にも、目の前の大人2人は自分の所属してる所を甘く見られないようにと言葉の駆け引きをしていた。

「では、こちらが非常用の電源ソケットの仕様書です」

「はっ…海の上であの人形を動かすつもりか？」

ミサトは、脇に抱えていたファイルから非常用電源ソケットの仕様書を取り出し艦長の前に出す。しかし艦長は、それに目も向けず受け取らないでいた。その対応にミサトは額に力が入る。

「万が一に備えてとご理解頂きたいと思いますが…」

「その万が一に備えて、我々太平洋艦隊が護衛に付いているんだ。」

大体…海の上では私達の管轄内だ！勝手は許さん！」

艦長が大見得切つての言葉に、ミサトは先程の胸に潜めていた怒りを鎮め一度艦長の前に出した仕様書を、再びファイルの中に仕舞った。彼女は、相手が引かぬ状態でこれ以上言い合っても得が無いと考え一度身を引いた。

「では…餅は餅屋と言う事で。ただ…有事の際は我々ネルフの指揮権が最優先となります。それだけはおご理解お願いいたします」

ミサトは艦長の前で頭を下げる。今さつきまで、お互いが張り

合った者同士だった筈が相手がすんなりと頭を下げてきた事に艦長は少し動揺する。 それを見た艦長は少し溜息を吐き、昂ぶっていた感情を鎮めた。 彼はミサトが上からの命令で動いてるだけで、我々とは悪い関係には喜ばしく思わないとの行動と艦長は感じた。 他にも艦長の隣に立つ副官やブリッジにいた海兵達も、彼女の対応に動揺はあった。 すると、艦長はミサトの対応に答える。  
「……では、非常時にブリッジへの立ち入りを許可しよう。 それで構わないな？」

ぷいっと艦長はそつぽを向きながら譲歩する中、ミサトは頭を上げ敬礼しながら感謝するミサト。

「はい、大変ありがとうございます」

そんなミサトを見てシンジは心の中で喜んでいた。

(…そう。 誰もが引きずらい所の中で、自分から身を引くのは勇氣が必要な事。 ミサトさん、尊敬します)

そう人間は意地やプライドを持って生きる生き物。 例によっては国に対するプライドや、部族、個人、伝統、所属など色々な物がある。 それを人同士が主張し始め、お互いに引かねばそれが争いの引き金になり兼ねない。 誰もが、一度身を引く事や自分を抑える事が出来れば争いは生み出されないであろう。 しかし、それが出来る人間は少なく簡単に世界から争いを無くす事が出来ないのが人間とも言えた。

「それにしても、我々太平洋艦隊はいつから配達屋になったのかね？」  
少し話の話題を変えようと艦隊は隣に立つ副官に話しかける。

『セカンド・インパクト』の事件後だと思えます」  
「時代の流れを感じるな…、我々軍人がそういった仕事を回されるとは」

艦長は少し悔しそうに言うと、ミサトの後ろに立つシンジは前に出て艦長に挨拶する。

「いきなり済みません、艦長」

「ん？ 何かね、君は」

「紹介遅れました。 国際連合直属非公開組織特務機関ネルフ所属、

碓シンジ二尉であります。少し発言宜しいですか？」

所属と名前や階級、それを艦長に言うのと今時の子供が取れる行動とは思えず彼に驚く。ミサトやトウジは、彼の事は知っている為に驚いてはいなかったがミサトを挟んで彼の逆側に立っていたアスカは驚きの表情を表していた。そう艦長の言質を貰ったシンジは、真剣な表情から笑顔に変える。

「艦長、確かに今の時代では軍人は余り活躍出来ないのが現実です。ですが：自分は貴方達軍人は誇りある人達だと思います。自分は今所属しているネルフでは、特例で最高責任者と変わらない権限を持たせてもらっております」

今日の前に立つ子供が、今の時代で大きな組織ネルフで子供が一番上と変わらない権限を持つている事にブリッジにいる軍人達は驚愕していた。それに続き艦長や副官、アスカにトウジまで驚愕した表情に。トウジの場合は、シンジが特別な待遇されているとは知っていたがその予想を上回る話に驚いていた。

「前日、日本の国連軍とお話させてもらいましたが：やはり今ネルフが組織として大きいのは貴方達のお陰でもあります。ネルフである自分達は迫り来る脅威な存在である使徒と人類存亡を賭けた戦いをしていきます。ですが、ネルフ：いや自分はエヴァパイロットであり使徒と同等に戦えるのは、貴方達の働きのお陰だと俺は知っています」

ブリッジ内は静まり返り、シンジの声と機械音しかなかった。シンジを除いた人間達は、彼の言葉を静かに聞いていた。

「民間人を非難してくれるのは軍隊の人達、使徒が襲来した時に報告してくれるのも貴方達。今こうして新たな戦力である2号機を運んでくれるのも貴方方です。見えない所で働きのお陰で、自分達は使徒と戦い合えるのです。こんな子供の戯言だと思われるでしょうが：俺は貴方達軍人に感謝しております。どうか今後、ご協力：お願いします！」

静まりかえったブリッジ内でシンジは艦長に向けて、頭をゆつくりと下げた。すると、艦長は頭を下げる彼を見て一言。

「君が噂の少年か…」

すると、艦長は椅子に座っていた腰を上げシンジに近寄る。彼は艦長の足が見えると、一度頭を上げ艦長と目を合わせる。数秒2人が見合っていると、突如艦長は笑い始める。それを見た周りの人間は驚く。

「はっはっはっ！ これは面白い少年だ！ 確かに噂で聞いた通り、気持ちいい事を言ってくる奴だ」

「…艦長、噂とは？」

シンジは艦長の言う噂が気になり聞いてみた。

「日本にいる我々と同じ国連軍の一人が、前日ネルフに面白く漢気ある少年がいると聞いていたのだ。それに噂は見た目少女のような少年で、子供とは思えぬ発言で周りを味方につけると言った所か。はっはっはっ！ 確かに、これは認めざる追えんな」

艦長の言う噂を聞いてシンジは、何か大事になっていると焦る。そんな少年の気持ちを知らずに、艦長はシンジの肩をバンバンと笑いながら叩き再びミスアトの方に目を向ける。

「葛城君と言ったね？」

「はい、艦長」

「先程は済まなかった…我々軍人である為に誇りがあつた。しかし、彼のような子供がいるのであれば私達は喜んで協力させてもらう。済まないが、さっきの仕様書も書かせて貰えるか？」

艦長は脱帽しミスアトに謝罪を入れる。それを見てミスアトは、笑顔で答え再び仕様書をファイルから取り出し、艦長に渡した。ブリッジ内は最早、重い空気から変わり穏やかな空気になった。

ネルフと国連軍が協力的な空気の中、シンジの姿を見続けるアスカ。何か観察に近い瞳で。



ミサトは艦長に一礼してブリッジを後にした一行は、一休みする為に食堂に向けて歩いていった。すると、通路の反対側から一人の男性が歩いてきた。その男性は、ミサト達を見つけると声をかけてきた。

「よう、葛城」

「げっ!？」

ミサトは、会いたくない人間に会ったような反応をして思わず手に持ったファイルを落としてしまう。それとは逆に、アスカはその男性を見ると喜びの声を上げる。

「加持さくん☒」

「おう、アスカちゃん。それにしても…葛城。その反応は酷いんじゃないか？」

加持は、ミサトの反応を見て苦笑する。だが、ミサトは加持とは目を合わせないように横を向いていた。

「それが答えよ」

「酷いなあ、とりあえず食堂に行かないか？ その子達も、この船に来てから歩き続けて疲れているだろうし…」

そんな加持の提案で、一同は食堂に向かう。

「そう言えば、今誰かと付き合ってる？」

「あんたに関係ないでしょ…」

「あれえ…つれないなあ」

一同は食堂に着き、長方形のテーブルに席につく。ミサトと加持は、対面になるように座り会話の最中にテーブルの下で脚の攻防が繰

り広げられていた。席順は、ミサトの方から横にシンジとトウジ。逆は加持に続きアスカとケンスケとなっている。そんな所加持は、ミサトに相手にされない演技がましい困った顔をしながらコーヒーを一口。

「予想だけど…今君の隣に座る彼が今の彼氏？」

バンツ

「…な、な、な、何言つてのよ！」

いきなりの加持の言葉にミサトはテーブルを叩き、顔を赤くしながら抗議する。そんなミサトを見て、加持は面白そうに見ながら視線をシンジに向ける。

「どうなんだい？ 碇シンジ君」

顔を赤くしたままミサトはシンジの方に顔を向ける。それを見ていたシンジは、悪戯心がくすぐられたのか加持とアイコンタクトを取り合わせる。

「えっ？ ミサトさん…俺との付き合いは違っていたんですね！ 酷い…あんなに愛していたのに。そして、愛情こもったご飯をあんなに美味しい美味しいって言ってくれたのに」

シンジは顔を両手で覆い、上を向くようにして涙声で言う。その両手で覆う顔の端から液体が流れていた。それを見たミサトはシンジの突然の変わり様にオロオロする。

「えっ？ えっ？ シンちゃん、どうしたのよ!? だっ大丈夫よ！ 私はシンちゃんを愛してるから！ だから、泣かないで〜！」

慌てふためくミサトの中、残り3人の子供は突然の展開に啞然としていた。

「ぷっ…」

突如、何かが吹き出す様な音が食堂に鳴り響く。

「あはははははっ」

そしてシンジと加持は同時に笑い始める。

「葛城…中々面白い子と住んでいるんだな？」

「ミサトさん、引つかかりましたね？ どうでした、名演技は？」

シンジはネタバレの為に両手から2つの目薬をミサトに見せる。

それを見たミサトは、からかわれた事に気付くとみるみる内に顔を赤くしていく。悔しさと恥ずかしさの余りにミサトは、隣に座るシンジの頭を右腕で抱えて左手は拳骨を作りグリグリと押し当てた。

「この、シンちゃんは一！」

「「あははははははっ」」

トウジとケンスケも、ミサトの姿が面白かったのかシンジと加持に合わせるように笑い始める。しかし、シンジの対面に座るアスカは静かに加持の笑う姿を見た後、彼の方に顔を向けて無表情のまま見ていた。

「そう言えば、自己紹介まだだったね。俺は加持リョウジ、ネルフのドイツ第3支部に所属している」

加持は大人の余裕を漂わせながらシンジに微笑みかける。シンジの中で一番に感じた事は、加持に纏った独特な雰囲気や暗部に近い物を感じた。しかし、初対面の人間を疑うのは余り宜しく無いと思っただけは表に出さなかった。

「どうも、同じネルフとして二尉の碇シンジです。後気になってはいたんですけど、ミサトさんと加持さんは知り合いなんですか？」

「……腐れ縁よ」

未だに先程の悪戯に根に持っているのか、ミサトは頬を膨らませていた。そんなミサトを見てシンジは苦笑しながら、膨らませた頬を指で押し空気を抜く。

「ミサトさくん、謝ったじゃないですか。プリプリしない。帰ったら一品増やしますから」

「…漬物で」

ミサトの扱いを見ていた加持は、面白そうに見ていた。

「ハハッ、どうした葛城？ シンジ君に手綱持たれてるじゃないか」「うっさいー」

加持の意味深な言葉にミサトは噛み付くように叫ぶ。 それを見た加持は、ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべて加持は、シンジに聞く。「シンジ君は今、葛城と同居してるんだったね？」

「ええ、お世話になってます」

「彼女の寝相……直ってるかい？」

「「ええええええええええええ!!」」

突然の加持が放つ爆弾発言にシンジを除く子供達は、全員がシヨツクを受けた表情で固まる。 遠回しな言い方ではあったが、秘められた言葉の意味に気づいたらしい。 だが、一番に反応が大きかったのは話の話題であるミサト本人であった。

「…な、な、なななななな…何言ってるのよ!!! あんた!! 今度は子供達の前で!」

本日2回目のテーブルを思いっきり叩き、顔を真っ赤にして立ち上がる。 動揺しているのがバレバレな彼女の反応に、加持は面白そうにため息を吐き視線をシンジに変える。

「それでどうなんだい、シンジ君?」

加持の言葉にミサトはシンジの方に向ける。 今、ミサトの表情は情けなく「余計な事言わないで」と言わんばかりの顔であった。

「まあ、直ってはいないですね。 しょっちゅう布団をはだけちゃってますし。 そんな所、俺が直してあげるんですけど」

「葛城く? お前、歳下の少年に何をさせてるんだ…」

流石の加持もシンジの言葉に、頭を抱えるミサトに呆れていた。

だが、シンジの言葉は終わっていなかった。

「でも、そんなだらし無い所はありますが…。 俺には…ありがたいですね。 本当の家族の様に、安心してそんな姿を出してるんだなあって。 やる時はやる人で、プライベートの時はダラけて…そんなミサトさんが好きなんです」

嘘やお世辞一つ無いシンジの言葉にミサトを除く、全員が唾然としていた。 見た目は少年なのに何処か大きな懐を持った大人の様な雰囲気驚いていた。 トウジとケンスケはシンジの性格を知っている為に、いち早く我に戻る。 しかし、加持はシンジの事を異常な

子供だと思っていた。

(世の中に成就した子供はいるだろう：しかし、彼は異常だ。優しく成就した子供でも、彼の様な雰囲気を作り出すのは不可能だ。あ  
あ言った雰囲気を作り出すのは、長く生きてきた人間しか出来ない  
筈。 それなのに彼は生まれて14年でなつたとは思えない。少  
し彼の事を調べるか：)

そんな思考に走らせる加持の顔を横目で見ていたアスカ。

そんなセリフを隣で聞いていたミサトは、最早恥ずかしさの余り  
テーブルに顔をつけて一言。

「…もういつそ殺して」

話題を変える様に加持は言う。

「そうだ、シンジ君は有名人だな」

「えっ？ なんすか、その話」

シンジは加持の言葉に疑問に思った。すると加持は指を3本立  
てる。

「何の訓練も無しに実戦にエヴァに搭乗して、既に2体の使徒を単騎  
で撃破。 共同作戦で1体の使徒も倒したサード・チルドレン。こ  
れが一つ。 そして、今の世界で一番権力を持った組織ネルフでの最  
年少でありながらも最高責任者と変わらない権限。 これで二つで  
：最後に、国連軍をシンジ君本人が説得してネルフとのパイプを繋げ  
彼等から特別な扱いを受ける少年。 最早、『普通』からかけ離れた子  
供とも言える。 そんなのが有名にならない筈が無い。 それこそ  
：知らない奴はモグリ扱いさ」

「まあ、せやろうな。 シンジはワイらの最高なダチやさかい」

「本当本当、シンジが有名だと俺らも鼻高いよな？」

加持の言葉の後に、トウジとケンスケもシンジの事を讚える。そ  
んな友達から讚えられたシンジは、照れて恥ずかしそうに顔を紅く染

める。本人であるシンジは人から褒められる為だけにやっている意識は無く、誰かの為や自分が出来た事をやっているつもりであった。

「…照れるなあ。ただ俺は周りの人達が頑張ってくれるから出来るだけなんです…」

視線を下に向けて右手で頭をかきながらシンジが言う。

「なら人から助力を得られるのはシンジ君の人徳があつてこそ。それも良い所であり才能だ、君のね」

ここまで露骨に持ち上げられた事が無いシンジには、慣れていなく少ずつ顔の色の染まりが濃くなっていく。その時、アスカは他の人間達は違い話の話題であるシンジに敵意に近い眼差しで彼を見ていた。

ミサト一同は、一度食堂を後にして加持とアスカとは別れて自由行動を取っていた。ミサトは用意された部屋に戻り書類の整理を行い、子供達はケンスケの希望により甲板にある戦闘機を見る為に足を運ばせる。

「いやっほー！ 本当に色々な物がある！ まさに宝物ばかりだよ！」

「ケンスケの奴にとって、天国に近い場所やなあ。ここは」

「まあ、わかんなく無いよ。好きな物が目の前にあれば、嬉しいのは当たり前だから」

甲板をはしやぎ回りながらカメラを撮影するケンスケと、それを見て遠くから眺める二人。そんな中で、ふとシンジは近くにいた軍人に話しかける。だが、その軍人は日本語は分からず首を傾げてしまう。それを見たトウジはシンジに聞く。

「あかんわ、ワイ英語できへんわ。どないする、シンジ？」

「ん？ 大丈夫だよ」

『すみません、ちよつと機内に搭乗する事つて出来ませんか？』

『あ、ああ。 大丈夫だよ、ただ乗る分なら。 それにしても君、英語上手いね。 日本人とは思えない発音だ』

シンジに話しかけられた軍人は、最初に日本語で話しかれるが突如軍人に合わす為にシンジが英語に変えると本場の人間とも思わせる発音により、軍人は一度驚いてしまった。 それつられる様にトウジも驚く。 シンジ本人は意外にも、4カ国の日本語、英語、ドイツ語、フランス語は話せるのだ。

『ありがとうございます。 では、あそこにいる子に乗せてあげてください』

『了解、任せてくれ』

「ケンスケくくん！」

ケンスケに向けてシンジは呼ぶと、少し離れた所にある彼はシンジの方に振り向き近寄つて来た。

「どうした？ シンジ」

「あのね、この人がケンスケ君を戦闘機のどれかに乗せてくれるつて」その言葉にケンスケの瞳は輝き始め、はしやぎ始める。

「いゝ！ やつたー!!？ 憧れの38改に乗れるなんて！ 幸せすぎるゝ！」

嬉しさが天元突破したのか、ケンスケは目から涙を流し始めた。

そんなケンスケに驚きながら、軍人は本人が希望する戦闘機に案内されていく。

「それにしてもホンマ、シンジスゴイわあ。 普通に英語を話せるやなあ」

「まあ：色々な国の本で興味惹かれる物があつたから覚えたんだ。

どう、トウジ君も？ 最初は単語単語で覚えていけば、意外に話せる様になるよ」

「あかんわ、日本語だけでもイツパイイツパイや」

戦闘機に乗つたケンスケの姿を眺めて、話している2人に後ろから声をかけられる。

「サード・チルドレン！」

そんな言葉を後ろから言われた2人は、同時に振り向くとそこには腕を組みながら足を横に少し広げ胸を張り彼女自身を大きくみせようとしているアスカがいた。　そんな彼女を見た2人は、はて？と首を傾げる。　しかし、2人の反応を気にせずアスカの一言。

「ちよつと、付き合って」

☆☆☆☆

『あれ、アスカの奴。　アイツ以外で一緒に歩いてるぞ』

『本当だ。　あのアスカが』

『あれだろ？　あのボーイが、ガールに近いからだろ』

シンジはトウジにケンスケの事を頼み、アスカに付いて来いと言われ後ろから追うように歩いているとすれ違う軍人からそんな会話が聞こえていた。　本人であるアスカは、聞こえているのかそれとも聞こえていないのかは分からないが気にせず歩き続けた。

(はて？　惣流さんは、俺を何処に連れて行くつもりなんだ？)

シンジはそんな思いをしながら、アスカの後を追う。　今の所、彼女に呼ばれ共に歩いてる中一言も会話が無い為にシンジは困っていた。　前に歩く彼女から、何故か威圧感を感じ話しかけるにも話しかけ辛い為に無言で船の中を歩き続ける2人。　そんな所に何人か、アスカに話しかける軍人がいた。

『よう、アスカ。　珍しいなあ、お前が加持以外と歩いてるなんて』

『本当本当』

『…ほつといて、あんた達に関係ないわ』



『あく、怖い怖い』

話しかけた軍人にアスカは素っ気ない言葉を返す。そして、彼女からそんな彼らに冷たい眼を送りながら。そんな所、アスカの後ろにいたシンジにも話しかけられる。

『おう坊主、気をつける』

『? なんですか?』

『だってよく、彼女は加持以外の男は…』

『黙って!!』

突如、軍人とシンジが会話してる中でアスカが足を止め大きく叫ぶ。艦内の通路に鳴り響き、軍人達とすれ違い様の所に突然の叫び声にその場にいた人間は止まってしまう。

『余計な事、言わないで』

アスカは軍人に睨みを効かせると、止めていた足を再び進ませる。

先に進む彼女に置いてかれたシンジは、一先ずその軍人達に頭を下げて彼女を追いかけた。

「あんだ…日本語以外に喋れるのね」

軍人達の件から数分。艦内を無言のまま歩き続ける2人だったが、意外にもアスカの方から声をかけられたシンジ。突然話しかけたシンジは、少し驚いてから口を開く。

「お…おう。日本語以外では、英語、ドイツ語、フランス語はある程度は話せるよ」

「そっ」

話を持ちかけたアスカは軽く会話を切った。余りにも会話のキヤチボールが酷い為、シンジの表情は困っていた。

「おっと…」

そんな所に、外で大きな波があつたのか船が少し傾く。先に歩く彼女は船が日本近くまで乗り続けた為にさほど揺れに感じないで歩

いていたが、シンジの方は突然の揺れに足がもつれて蹴躓いてしま  
う。前に蹴躓いてシンジは倒れまいと、前に進むアスカの肩に触れ  
る。すると、アスカの中でトラウマの一部が蘇った。

「ひっ!?!」

アスカの口から、そんな声を出すと彼女はシンジの方に振り返り一  
撃。

パアアン

乾いた音が通路内に鳴り響く。

シンジはアスカに平手打ちを食らい、強制的に顔を横に向けられ唾  
然とする。彼の頬には紅葉の形がくつきりと浮かび上がる。そ  
して、アスカはシンジを叩いた後に距離をとる。

「触らないでー」

自分の身体を守るように両腕で包みながら、身体を震わせてシンジ  
に怒鳴るように叫ぶアスカ。

彼女から何か周りが信じられなく味方も居らず、いつ自分に襲いか  
かる脅威から逃れようとする怯えた動物のような印象を持たせられた。

それを見たシンジは、何か察したのか叩かれた事に何も思わず頭を  
下げて彼女に謝る。

「ごめん、惣流さん。蹴躓いてしまった為に、君に触ってしまって。

今度から気をつけるよ、他の2人にも言っとくよ」

頭を下げるシンジを見て、アスカは固まってしまう。彼女にはこ  
う言う状態になるのが何回もあり、その度に問題になっていた。男  
の方は彼女の事を知らず、触ってしまい先程のような状況になり言い  
争いが始まる。アスカは、その状況になると身構えていたのに予想  
が斜めいく状況に固まってしまった。

彼女の返事を待っているのか、シンジは頭を下げたままの所をアス  
カはハッと我に戻る。そして、彼女にも罪悪感を感じたのか口を  
ゆっくりと開かせる。

「……こっちも、いきなり叩いて……ごめん」

先程の彼女からは感じられない声に、シンジは頭を上げて眼を合わ  
せる。彼はアスカに向けて軽い笑顔を見せる。

「大丈夫だよ、気にしないで。惣流さんにも何か事情があったんでしょ？　なら、俺は気にしない」  
そんな言葉にアスカは唾然としてしまった。何故彼はそんなにも軽く許せるのか。彼女が今まで会ってきた男は、当然叩かれると怒鳴るように怒るのが当たり前だった。だが、目の前の彼は自分の何かに察したのか逆に謝った。彼女の中で、彼は加持と同様に他の男と違うのかと思い始めた。

☆☆☆☆

惣流・アスカ・ラングレーは幼い頃に母親を失い、残った父親と住んでいた。父親は彼女の母親の事を心底愛していたのか、母親を失った時は荒れてしまい酒に手を伸ばして現実から逃げた。

そんな父親と一緒に暮らす彼女は、大好きな母親の事もあったが父親も好きであった為に毎日父親を幼いながら慰めていた。酒に身を任せて浴びるように飲み続ける父親に、めげずに側に寄り添いながら慰め続けた。それが何日か過ぎ、母親を失い一ヶ月迎える所に父親が少しずつ壊れ始めていた。

最初は、家に籠り続ける父親は彼女の方に気を向ける。彼女の親戚からは施設に入れるのを提案したが、父親が拒否。しかしながら、最低限にも幼児施設に行かせるのが条件で父親は現状を維持させた。

朝から夕方の間は、彼女は幼児施設に行ってる中で父親は変わらず家で酒を飲み続けていた。そして彼女が家に帰ると、帰ってきた娘に抱き締める。母親が残した娘に縋るように、父親は彼女に依存した。しかし、父親は彼女に暴行を行う。泣き叫ぶ幼い彼女、暴れ狂う父親。そして、少し時間が過ぎると父親は泣きながら娘に縋るように謝った。

そんな父親を見て彼女は、いつの日か父親は戻ってくると信じて

我慢する事を覚えた。日に日に彼女は苦痛を覚えながらも、父親の暴行に我慢する。少しすれば父親は止まってくれと。他の人間からはバレにくい所に傷作りながら。

そんな日常を一ヶ月過ぎた頃、父親は娘を見る目が変わる。

何時も通りに自宅に帰る彼女は、日々に父親から受ける暴行際に気を紛らわせる為に母親から誕生日プレゼントで貰ったヌイグルミを見つけて、胸に納めて両腕で抱き締める。少し時間が過ぎると、何時も通りと言った所か父親は彼女に暴行を向ける。

暴行を受ける中、彼女は願ひ続ける。父親が早く元に戻ってくれようと。

しかし、そんな儂い思いは砕け散る。

いつもなら数分なのだが、今日に限って父親は長く彼女に暴行を続けた。始まってから一時間が過ぎた頃に、やっと父親の手は止まる。だが、暴行を受け続けた彼女は弱り身体中から感じる痛みに耐えていた。それを見た父親は…

ビリイツ

彼女の衣服を力一杯に引っ張り引き裂いていく。突然の事に彼女は思考が止まるが、父親は止まらず娘の服を破いていく。それに我にかえる彼女は、父親に止めるように言うが止まらなかった。そして、彼女は父親の顔を見て恐怖する。

今の父親は、瞳は酷く濁っており表情は醜いものだった。実の娘である彼女に欲望をぶつけようとする鬼畜非道な男に成り下がっていた。

彼女は、泣き叫び助けを求め声を上げる。それを止める為に父親は、力づくで口を手で押さえつける。最早、彼女に父親に抵抗する手段は無く少しずつ衣服を脱がされていく。彼女は目から涙を流しながら、心の中で助けを求めた。

そんな所に父親から性的暴力を受ける後一步と言った所で、彼女の家に警察が入ってきた。そして、父親は捕まり彼女は助かるが心に深く傷を負ってしまう。前々から幼児施設の方から、彼女の身体に傷が増えて怪しいと感じた保育士が警察に連絡。そのお陰で彼女

は、父親からの暴力は無くなるが心に負った傷は残ってしまった。保護者が不在となってしまい彼女は施設に入り日々を暮らしていた。しかし、心の傷が深い為に他の人間とは余り会話する事は無かった。

そんな所に彼加持と出会う。

彼女が施設の庭に一人でポツンといる所に、加持が他の子とは違う雰囲気気が付いたのか近寄った。しかし、加持が彼女に近寄ると悲鳴を上げて身体を震わせてしまった。今の彼女は、極度な男性恐怖症に陥ってしまった。幸い自分と同じぐらいの年齢の男子の場合では、そこまで酷い状態にはならなかった。だが、加持は諦めず彼女と関わりトラウマと男性恐怖症を克服させようとしていた。

幾度無く加持は、彼女に日々と距離を保ちながら声もかける。最初は、近寄るだけでも駄目であったが加持の努力と根気により少しずつ彼女と加持の距離は近くなっていった。出会ってから、二ヶ月が過ぎた頃に彼女は加持にある質問をした。

何故、私に構うのか？

そんな質問を彼女がすると、加持は答える。

俺の近くにいた奴で、アスカちゃんと同じ様に父親関係で苦勞した奴がいたんだ。そいつの父親の場合は、最後は自分の命をかけてそいつを助けたんだがな…。

加持は少し何処か遠い場所を眺めている様な顔付きになっていた。アスカちゃんの場合とは少し違うけど…手助けしたいと思ったんだ。アイツは自力で自分の事を解決させたけど、俺は目の前にいる君に手を貸してあげたいんだ。見過ごすのは…余り良い気分じゃないからね。

そんな話をしている加持の顔は、何処か昔に背負った罪を贖罪する

罪人のような雰囲気を出していた。そんな彼を見て、彼女は自分だけが不幸な訳では無いと感じる。そして少しずつ彼女は加持に心を開き始め接する事が出来るようになるが、知らない男相手には触れてしまうとトラウマが蘇ってしまう体質になってしまった。

☆☆☆☆

そんな彼女の過去を知らないシンジであったが、細かく相手の感情を読み取れる彼はなんと無く彼女を察していた。誰もが苦い過去を持つて生きてる中、彼は人一倍に感じ取り相手から嫌な印象を持たせないように生きて来ていたからこそ出来る芸当だった。

氣をとり直してアスカは、シンジを連れて違う船に乗り換えた。輸送艦に乗り換えた2人は後部の格納庫に入ると、そこには赤くコーティングされた巨人がうつ伏せの状態で紫の冷却水に沈ませていた。

「どう？ サード・チルドレン、これがエヴァンゲリオン2号機よ」

アスカは、2号機に乗り背中に登って高い場所からシンジを見下ろしながら言い放つ。

「この2号機が世界初の、本物のエヴァンゲリオンなのよ。正式タイプだね」

「へえ、2号機って赤いんだね」

自信満々で言い放つアスカに対して、シンジはエヴァ各機でそれぞれと色が違うんだなあとしみじみと思っていた。そんな彼を見て氣が抜けたのか、少しワンピースがズレる。

「張り合いの無い奴…」

ドオオン

アスカがポツリと独り言を呟くと、突然外で爆発音が聞こえ艦内にもまで衝撃が突如やってきた。

「きやつ!?」

2号機の背中にいたアスカは、先程の衝撃で脚を滑らせてしまい2号機の頭の方に滑り落ちる。エヴァのサイズでは、人間ではうつ伏せ状態であるエヴァの頭から背中の間でも結構な高さになっていた。そして、彼女も体制を戻そうとするが途中で宙に投げ出されてしまい無慈悲にも頭から落ちていく。

「きゃあああああ!」

悲鳴を上げながら落ちていくアスカを見て、シンジは素早くしゃがみ込み両手の人差し指を両足の靴下に入れた。そして、シンジは2号機の顔に向けて一言。

「ちよつと失礼」

すると、シンジはしゃがんだ身体を2号機に向けて跳躍する。その際に靴下と靴を脱ぎ捨てた。裸足になり、彼は2号機の頭に乗るアスカの落下地点に移動してアスカの左側に立つ。シンジは落ちてくる彼女の頭が自分の手が届く高さまで待ち構え、アスカの頭が彼の手が届く高さになってくると最初に右手の甲で彼女の首の後ろに当てて左から右に半球を描いた。

すると、アスカの身体は頭を移動され真っ逆さまの状態から横になる。そして後からやってくる両足は左手を両膝の裏に持っていく。

最後はシンジの持つ筋力を最大限に使い、腕から肩、肩から腰、腰から脚の爪先までにバネにして彼がアスカに触れた高さからシンジの腰の高さまでに落下の力を分散させ裸足になった足で2号機の装甲をしつかりと掴んでいた。これが靴だった場合は、彼が履く靴の底が2号機の装甲で滑ってしまう可能性がある為、彼は地肌でなら滑らないと考慮しての行動であった。

結果、アスカはシンジにお姫様抱っこで抱えられて助けられた。

「大丈夫? 立てる?」

シンジが腕の中にいるアスカに聞く。しかし、彼女は先程の事と

今の状態に混乱していた。数十mからの落下の恐怖、シンジの救出方法、そして今男に触られているのに何故か安心感。とりあえずシンジの言葉に返事するように頷く。それを見たシンジは、安心した顔を見せる。

「良かった…」

(あれ…？　なんでママの思い出が)

アスカは彼の顔を見て突如母親の思い出が蘇った。そんな心境を知らず、シンジはアスカを降ろす。

「ごめんね、触って…非常事態だったから。　後、外で何があったのか見に行かなくない」と

シンジはそう言い残して、裸足のままで2号機から降りてアスカを置いて走って格納庫を後にした。　1人残されたアスカは、呆然となりながら思い返していた。

(最初、触られた時はあの時の事を思い出した。　でも、助けて貰った時は安心感。　そして、サードが安心した時の顔を見たらママの記憶が…。　何なのよ…あいつ。　訳がわからない…)

そんな思いがアスカの中でグルグルとなりながら、彼女も外の状態を確認する為にシンジの後を追うように格納庫を後にした。



## 壊れかけた歯車

シユボツ

シユボツ

シユボツ

ドーン

ドーン

ドーン

戦艦から打ち出された魚雷は、海面から水飛沫をあげる正体不明な物に追尾して直撃するが対象物は変わらず、海を駆け抜ける。そして、無情にも対象物はミサト達が乗る戦艦とは違う戦艦に突撃する。攻撃された戦艦は、為すすべなく沈没していく。

「何故落ちん!!」

何発も攻撃したにも関わらず、対象物の動きは一向に変わらず落とされていく戦艦を見て声を荒げる艦長。その間にも、魚雷やミサイルが対象物に襲いかかる。しかし、結果は変わらないでいた。

そんな所にミサト達が、ブリッジに姿を現わす。

「ちわく、こちらネルフになります。これは使徒の攻撃ですな」

「煩い！ 意地でも落とす！」

ミサトの言葉に艦長は切り捨てる。それをミサトは呆れた顔になり、一言小さく呟く。

「…無駄な事を」



2号機を乗せた輸送艦の甲板からシンジは、柵に手をかけ今の現状を見渡し把握する。すると、後ろからアスカがやってきてシンジと同様に柵に手をかけて身を乗り出し水飛沫を上げる対象物を見つける。アスカは、初めて使徒との遭遇に驚く。だが、自分が何の為にエヴァに乗っているのかを理解している為にそれほど驚いてはいなかった。

「やくばいな…早くミサトさん達と合流しないと」

アスカの横でシンジが呟くと、ハツと彼女はなり名案を思いついたのかニヤリと笑う。今の彼女の顔は、目の前に面白そうな玩具を見つけた子供のような表情であった。彼女は、その顔を彼に見えない方に向けて一言。

「チャ～ンス☒」

シンジが今に必要な行動を考えていると、横にいる彼女から声をかけられる。

「サード、ちよつと着いてきて」

するとアスカは、その場を後にするように再び船の中に向けて走り出す。そんな彼女の姿を見て、シンジは彼女に何か良い案があるだろうと感じ彼もアスカの後を追いかけた。

カンカンカンカン

カンカンカンカン

2つの走る音が館内の通路に鳴り響く。今彼女の手にはバックがあり、一度そのバックがある部屋まで行き再び目的地に向けて走り出す。今の所、シンジは彼女の行動に疑問に思っていなかったが現状が芳しくない為に早くミサト達の乗る船に向かいたかった。突

如、走っているアスカは一度通り過ぎた階段に戻る。その場所で構わないと思ったのか、後ろにいる彼に振り返る。

「サード、ここで待ってなさい。絶対によー！」

「…お、おう」

アスカはシンジに凄い迫力を持った顔付きで言った為に、彼は力無く返事を返してしまう。彼女はシンジの返事を聞くと、素早く階段を駆け下がり彼が見えない場所で着替え始める。そんな事を知らない彼は、焦る気持ちを抑えながらアスカの言う通りに壁に寄りかかりながらその場で待った。

数分立ってアスカは、プラグスーツに着替え最後に手首にあるスイッチを押してスーツ内の空気が外に吐き出された。そして、彼女は何かを決心したのか呟いた。

「行くわよ…アスカ」

バサッ

☒

アスカと共に2号機がいる格納庫まで着いてきたシンジに、彼女は彼に自分のプラグスーツをシンジに投げ渡す。しかし、当の本人はなんだこれは？と言ったような顔で彼女の顔を見る。

「着替えて」

「はっ?」

「サードも！来るのよー！」

シンジに指を差しながら、力強く言うアスカ。余りに突然の事を言われた彼は、プラグスーツとアスカを何回か見て疑問に思った事を彼女に聞いた。

「…なんで、惣流さんのプラグスーツを来て2号機に乗らなくちゃいけないんだ？それにこれ…女物やん！」

そう今シンジが持つプラグスーツは、本来アスカが着るプラグスーツの為に女物だった。確かに、本人も自分の外見が女子よりだと理解はしていたが女物のプラグスーツに着る事に納得が出来なかった。その為に最後に関西弁が混じってしまった。そんな彼を見て、アスカは挑発するようにシンジに言った。

「あれ〜？ エヴァパイロットであるお方が、非常事態な今を些細な事でエヴァに乗る事に躊躇されるとは…。パイロットとして失格じゃないかしら？」

そんな彼女の言葉に、シンジはぐぬぬと顔を歪めてしまう。確かに彼も非常事態である為に、着なくちやいけないのは分かる。しかし、シンジの中では昔実家にいた時に祖母が彼に女物の服を着せた為にちよつとした事件があった為に彼は躊躇していた。

ゲンドウと別れ、母親の実家である京都にいる老夫婦に預けられて数年。祖母がある日、シンジに着て欲しい物があると言われて出された物が女物であった。彼の母親である碓ユイが幼い頃の服を家の整理中に見つけたのか、祖母が中性的でユイに似ている為に着て欲しいと頼む。だが、彼も男であった為に着るのを拒むと祖母が必死にせがんだ。そんなせがむ祖母の姿を見て、その時お世話になってる事もあつて泣く泣く彼は女物に着替えた。

すると老夫婦は女物を着たシンジを見て、幼きユイの姿を思い出したのか無言のまま抱きしめていた。その後も、シンジは一日だけ外見を女子になった。そして夕飯の買い出しの時に事件が起きた。

買い出し中に祖母がお手洗いに行っている間、店のトイレの前で祖母を待つ彼に何人かの男達が近寄ってきた。最初シンジは『何だろう…この人達』と言うぐらゐの事しか思っていなかったが、少しずつ彼らはシンジを見る目が疑問に思えた。何処か幼い子供が好きなの大人のような雰囲気があった。そして、彼らの中でシンジの事を持ち帰りを考える輩や連れ出そうとする輩だと感じた彼は、自分の事を男だと発言。そんな彼らは最初は驚くが、数秒立った後の彼らは『男の子でも構わない！』と叫ぶ。

それを聞いたシンジは、身を震わせてその場を逃走すると彼らはシンジの事を追いかけ始めた。追いかけてきた彼らの顔を見たシンジは、恐怖に駆られ全力疾走で交番に逃げ込んだ。その後シンジを追いかけた彼らは捕まるが、シンジの中で女装は恐怖しかなかった。その為、祖母はその日から彼に女物を着せる事はなかった。

#### 閑話休題

そんな過去があり彼は渋るが、背に腹変えられない状態の為着替える事を決心。

「わくたよ！ 着れば良いんだろう！ 着れば！」

最早、シンジはヤケクソな気持ちになりながら着替える為に場所を移動してから着替え始めた。

彼女が着ている物と同じプラグスーツに着替えたシンジは、彼女がエヴァの外部から操作しているのを見ていた。

#### バシユツ

2号機の背中からエントリープラグが排出され、アスカはシンジを見下ろしながら言う。

「さあ、私の華麗な操縦を間近で見せてあげるわ！ だけど…邪魔だけはしないよね？ …それにしても違和感ないわね…」

最後ら辺の彼女は小さく呟いていた為に、シンジには聞こえていなかったが彼女が言う通りに今の彼の姿は違和感の無い物だった。彼女の予備のプラグスーツは、女物である為に胸の部分が女性の物を収める形を再現している為に今の彼は誰が見ても女子にしか見えな資格好であった。当の本人は、開き直ったのか羞恥心を投げ捨てたのか普通になっていた。

そんな事を考えながらも2人はエントリープラグに乗り込む。

(初めてだなあ…初号機以外のエヴァに乗るなんて)

そんな事を思いながらもシンジは彼女の後ろ側で、インテリアに掴

み衝撃に耐える体制になる。そして、電気供給がされていない為に彼女は2号機の内蔵電源で起動シーケンスを行う。アスカが2号機を起動する為に手順を踏んでいる中、シンジは不思議な感覚に襲われていた。

(…なんだろう？ 不思議な雰囲気プラグ内から………い…意識………が)

シンジは少しずつ意識が無くなっていく中、プラグ内はerrorの文字が大量に表示されアスカが彼に問題があるのだらうとシンジに話しかけるが、彼は既に意識を無くしていた。

☆☆☆☆

2号機に乗った筈の俺は、何故か向日葵畑にいた。

「はて？ 何処此処……」

摩訶不思議な現象に囚われ周りを見回す俺。しかし周りには自分より背の高い向日葵しか存在せず、上を向けば気持ちが良いほどの晴天の空があった。ただ今の俺の姿は惣流さんのプラグスーツであつた。

そんな場所で俺は困り果てていると、何処からか声が聞こえてくる。

『…ら、可愛……しい…ね。 …イに似……わ』

「誰かいるんですか？」

途切れ途切れであるが、女性の声が聞こえた俺は探しながら女性に声をかける。だが、少しその場を離れて女性を探すが見つからない。

『貴…………、ア…………ちや…を。さつき…、…りが……。…けて…  
て』

俺は女性何が言いたいのか全くもってわからないでいた。彼女が俺に対して何を言いたいのか…だけど、何処か彼女が俺に何かをお願いするような雰囲気だけは何と無くわかった。少し向日葵畑で向日葵を分けながら歩いていると目の前に小さな広場があった。

『…………子は、寂し…………から。お…い…ス…ちやんを、…………あげて』

その広場の真ん中に1人の女性が、此方に向きながら俺に何かを言っていた。見た目は外国人で、髪は長く金髪でハッキリと顔は見えないでいたが何処か申し訳なさそうな顔に見えた気がした。そんな女性の顔を見た俺は、彼女が今まで言った言葉を思い出しながら一言。

「すみません…貴女が俺に何を話しているかはわかりません。でも貴女は惣流さんの事を心配しているのが、何と無くわかりました。

絶対とは言えませんが…俺が出来る限りで彼女を手助けていきま  
す」

俺は笑顔を彼女に向けて言うと、女性の姿は少しずつ見えなくなっ  
ていくが何故か声はハッキリと聞こえるようになった。

『じゃあお願いね、ユイの子…シンジ君』

その言葉を最後に女性は、姿が消える瞬間に俺に笑顔を見せた。

暖かく子を見守れる強い母親のような笑顔を見せられた俺は、胸に少し暖かい感覚と痛みに襲われながら再び意識が無くなっていった。



「サード？ サード！ サードったら!!」

「はっ!？」

アスカの呼びかけに意識を取り戻したシンジ。

「なんなのよ、あんたに合わせて思考言語を日本語に合わせたのに errorが発生するから声かけてるのに」

今の彼女は、シンジに無視されたかと思ったのか不満気な顔を彼に向けていた。 それを見てシンジは謝る。

「あく…ごめんごめん、人のエヴァに乗ったからなのか緊張して何も聞こえないでいたよ。 ごめんなさい、惣流さん」

素直に謝るシンジを見て、アスカは不満気な顔で溜息を一つ漏らすと呆れた表情に変わる。

「もう邪魔しないでって言ったじゃない、もう一度やり直さないと…」

前に向き直して再び起動させる彼女。 そんな中、シンジは不思議な感覚に手間取っていた。 意識を無くしていた時に何かを見ていた感覚があるのに覚えておらず、もう一つ彼は胸に暖かい感覚と痛みがあった。 そして不思議と2号機が起動していく中、普段初号機と変わらない感覚を捉えるシンジであった。

そして無事に2号機は起動を始め、アスカは力強い言葉を放つ。

「エヴァンゲリオン…2号機、起動！」

彼女の言葉に連動するように、2号機の4つの瞳に光が宿った。

☆☆☆☆

ザッパーン



凄まじい音を立て、使徒に攻撃された船は次々と海に沈んでいく。海中にいる使徒の勢いは衰えず、また次に目標を見つけるとその船に向けて突撃していく。

『護衛艦3隻撃沈！ 未だ目標を捕捉できず！』

「くそっ！ 何がどうなってる…」

オーバー・ザ・レインボウのブリッジから水飛沫を上げながら、無力に落ちていく船を見ながら悪態をつく艦長。非常事態に騒然とした空気がブリッジ内に漂う中、ブリッジに設置されたスピーカーからは他の船が沈む状況報告が無情にも鳴り響く。

「艦長！ これは使徒の攻撃による物です。直ちに権限をネルフに譲渡してください。これ以上の通常兵器での目標の攻撃は無意味です…。無駄な犠牲は抑える事をお勧めします、艦長」

ミサトは窓際に立つ艦長に、後ろから話しかける。しかし、艦長は後ろに立つミサトの方には振り返らず体を震わせていた。それもその筈、戦闘の為に学び鍛え軍に入り敵対する物は排除するスペシャリストとも呼ばれる彼等軍人は目の前の使徒相手に手も足も出せず、ミサトの言葉にオブラートに包まれた意味に艦長は悔しさに駆られていた。言った本人であるミサトも、先程の発言も言いたくて言ってる訳では無い。このまま被害を大きくなる前に、使徒に抵抗できる唯一の存在であるエヴァを使い殲滅するのがネルフの仕事だと解ってもらうために…。そして、少ししてから艦長は溜め息を吐きミサトの方に向いた。

「すまない…頼んだ」

艦長はミサトと目を合わせてから一言呟くと、顔を下に下げた。

ミサトも彼等にプライドと言う物があるにも関わらず他の組織に頼るのは悔しい気持ちを痛いほど感じとっていた。それを見た彼女は艦長に言う。

「いえ…艦長。貴方方にも手伝って貰います。使徒相手にはエヴァは必要ですが、今貴方方の力も必要なんです。どうか、協力お願いします」

ミサトは艦長に頭を下げ、彼等にも協力を申し出る。今の彼女

は自分のプライドより、少しでも勝率を高める為にも彼等の協力を求めた。そんなミサトを見てブリッジ内にいる軍人達の心に少しずつ熱い気持ちが入み上がってきた。

「…そうか、では私達は君達に助力させて貰おう」

艦長は一言呟き帽子のツバを片手で掴み深く被り直すと、彼はブリッジ内に響くほどに声を上げて言う。

「おまえらー！ 今から私達は、ネルフに…いや彼女達を助ける為に動くぞ！ 疑問や不満持つ奴は動くな！ 居なければ直ちに動け！

以上！」

「「「「サー・イエツサー！！」「」」」」

ブリッジ内にいた軍人達は、艦長の叫びに火がついたのか彼等の動きが速まった。

「ありがとうございます…艦長。 …後はあの子達ね」

そう言っつてミサトは、近くにいる軍人に非常用のソケットを用意するよう指示を飛ばした。

☆☆☆☆

「やはり…あの程度の物じゃ、A.T.フィールドは破れないか。それにしても話が違いますか？」

『問題無い、予備がそっちにいる限り』

オーバー・ザ・レインボーの船室で、加持は椅子に座りながら部屋の窓からオペラグラスを使って使徒の動きを眺めていた。無数の

魚雷やミサイルを撃ち込まれた使徒だったが、全く衰えずに船に対しての攻撃の手を休めなかった。加持は通信機器を使い、ネルフ本部にいるゲンドウと話をしていた。

「それは彼。碓シンジ君を信用しているからこそそのお言葉ですか？」

『ああ、アイツは人の為ならどんな状況でも切り開く力を持っているからな』

通信先にいるゲンドウの言葉に加持は驚く。彼の中では、ゲンドウは冷たく目的の為なら非情な人間と覚えていたが通信機器から聞こえたゲンドウの思わぬ言葉に驚いていた。しかし、加持は表に出さずに通話を続ける。

(碓司令も人の親…か)

「それにしても司令も人が悪い。こちらのシナリオとは違う展開ですよ」

『この世はイレギュラーに満ち溢れている。万が一…君だけでも脱出したまえ』

パタン

加持はオペラグラスを畳み立ち上がる。

「ええ、わかっています」

通話が終えた加持は、通信機器を仕舞い足元にあるトランクを持ち上げる。だが、そのトランクは嚴重に封印された対核仕様の特種トランクであった。その中身には重要さを雄弁を語っていた。

「アスカちゃんとシンジ君の戦いぶりを見たかったが…まっ、背に腹は変えられ無いか」

そして加持はトランクを片手に部屋を後にした。



「それにしても…周りは海。　今2号機はB型装備…落ちたら最悪だな」

「落ちなければいいのよ」

プラグ内で喋る2人。　今2号機は内部電源で起動させて格納庫から体を、ゆつくりと立ち上がらせる。　すると、通信が入る。

『誰が乗っているの!?!』

「はい、ミサト。　私と…」

「俺こと…シンジと一緒に乗ってまーす」

2号機は輸送機オセロウの甲板上に、2号機の上に被せられていた保護シートを身に纏い紅い巨人が其処にいた。　オーバー・ザ・レインボーに居るミサトは予想外の事に驚いていた。　前回の戦闘に民間人を搭乗させた事はあったが、2人とも選ばれた子供の為エヴァにどんな作用されるかはミサトは想像も出来ないでいた。

「とりあえずミサト、使徒の迎撃に移るわ」

『ええ、大丈夫よ。　思う存分やっちゃって』

『子供が2人…いや待て、確か2号機はB型装備の筈だ』

エヴァには色々な兵装装備がある。　今2号機のB型装備は、特殊な装備や武装も無くエヴァの一般装備であった。　周囲は海に囲まれて、使徒自体が海中に居る現状には適してはいなかった。

「ミサトさん、今は最初の問題である電源の確保。　なのでソケットの準備を…」

『それは大丈夫。　もう用意出来てるわ』

既にオーバー・ザ・レインボーの甲板には、非常用のソケットが置かれていた。　ミサト達が乗ってきたヘリに積まれた物だった。　ミサトは念のために準備が良い方向に結果になっていた。

「流石…」

シンジが喜びをあげると船の上に立つエヴァを見つけたのか、使徒は方向をエヴァに向けた。

『目標、エヴァに急速接近！』

そんな人間の彼等をあざ笑うかの様に、使徒は2号機がいるオセロウに突進していく。それを見たシンジは、アスカに話しかける。

「惣流さん！ 被害をなるべく出さない為にも、早くここから離脱を！」

彼の言葉にアスカが返そうとすると、使徒は身体を海面に出した。それに彼等は、海面から見えてるだけの使徒の大きさに驚きを隠せなかった。シンジは幾多の使徒に対しても大き過ぎると驚き、初めて見る使徒で予想以上に驚くアスカ。しかし、使徒は彼等にそれ以上の驚きをプレゼントした。

一度使徒は海中に身体を沈めたと思った矢先、海面から身体を突き出し魚のトビウオのように2号機に向かって飛んでいく。

『「うっそー!!」』

余りの光景に、それを見た人間達は驚きを隠せないでいた。だが、彼は一早くに正気に戻り彼女に指示を飛ばす。

「惣流さん！」

「はっ!？」

2号機は素早くしゃがみ、オセロウを踏み台してその場を跳躍する。使徒は2号機が居なくなったオセロウを飛び越えて、再び海に着水して2号機にいる方向に旋回し始める。

使徒の攻撃を避けた2号機は、付近にいた護衛艦に強引だが着艦する。

「惣流さん、残り1分切った！」

「ちっ、アイツら充電疎かにしたわね。早くあの船に行かないと…」

そして2号機は再びしゃがんで、力強く甲板を蹴り跳躍し始める。護衛艦や戦艦を次々と足場に飛んでいく中、使徒は再び海から飛び出して2号機を襲う。最悪な事に使徒は、2号機が乗り移る最中の為避けようが無かった。

『ヤバイー!』

ミサトの焦る声がプラグ内に鳴り響くが、アスカはその状況を打破する。

「あら…よつとー！」

2号機は身に纏っていたマントを上には振り上げ、左側からすぐ其処まで襲いかかる使徒に被せると上手い具合にシートは使徒の身体に引っかかる。そして、2号機はシートをより一層に下に引っ張ると使徒は海中に落とされ2号機は少し浮き上がりシートを捨て難を逃れた。

今の操縦技術に、一緒に乗る彼は感激して声を荒げる。

「すっげー!!」

「ざつとこんな物よー！」

『お見事、アスカ!』

そんな彼を見てアスカは良い気分になる。無事オーバー・ザ・レインボーまでたどり着いた2号機は、非常用のソケットを背中に挿して電源の問題を解消させる。しかし、そんな2人に休む暇を与えずに使徒はオーバー・ザ・レインボーに向けて海面を駆ける。

「惣流さん、目標左九 時方向!」

「了解、武装がプログナイフしかないけど…魚相手なら十分ね!」

2号機は右肩の装甲からプログナイフを展開し、使徒の方向に向きながらプログナイフを抜く。そして両手を前に出して、高周波を出したプログナイフを左手で持ち右手はナイフを添える構えになる。

それを見た使徒は、望む所だと言わんばかりに2号機に向けて海面から身体を浮かせて突撃していく。その間に2号機は船の端に出来る限りに前に寄った。

ズウウウウン

飛んで襲いかかる使徒を相手に、ぶつかる瞬間に2号機は突き出したプログナイフを使徒の先端に横に刺してそれを取っ手して、大質量の使徒に体当たりされ甲板に金属音を鳴らし後ろに下がりながら受け止めた。だが、オーバー・ザ・レインボーの甲板上での事により甲板にあった戦闘機達は無残にも破壊されたり海に落とされていった。それをブリッジから見ていたケンスケは一言。

『勿体無い…!』

見事オーバー・ザ・レインボーの甲板に使徒を捉える事を成功する。

『流石、アスカ！ 良く止めたわ！』

しかし、問題な事に余りにも使徒が大質量の為に少しずつオーバー・ザ・レインボーが沈んでいく。それに一早く気づいたシンジは、アスカに指示を出す。

「早くこの船から離れて、惣流さん！」

「何ですよ？ まさに日本で言う使徒はまな板の上の鯛じゃない……」

「良いから早く！」

シンジの余りに焦る表情を見たアスカは、一先ず2号機を他の船に乗り移る。すると、オーバー・ザ・レインボーはエヴァが居なくなつて少しずつ浮き始める。それを見たアスカは、シンジの発言に納得した。

しかし、問題が発生する。

「だけど……使徒を倒す為に海から引きずり出して難なく倒すのに、船が使徒とエヴァの総重量に耐えられないなんて」

そうアスカが言った通り、今の2号機には水中戦闘が出来ない為に使徒を海から出さなくてはいけなかった。だが、非常にも使徒のサイズが余りにも大き過ぎる為にエヴァも乗せると船がその重さを耐えられるようには造られてはいなかった。

そんな所に、使徒は奇妙な行動をし始めた。甲板には陸に引き上げられた魚のように、悶えているかと思うと使徒の身体の後ろに続く3本の触手と思われる物を使い始める。2本の触手は自分の身体の下に潜り込ませ、残りの1本は後ろにバランスを取るようになると使徒はオーバー・ザ・レインボーの甲板上で身体を起き始める。余りに奇妙な光景に、プラグ内の2人は唾然としていた。

それをあざ笑うように使徒は、甲板の上を3本の触手を上手く使い2号機の方に向き始める。すると口が大きく開かれ口内にコアだと思われる物が見えると、次の瞬間に口内から凄まじい光が放つ。

シン

使徒の口から放たれたビームは、2号機が乗る戦艦を通過する。

使徒に攻撃された戦艦は爆発してしまい、足場になっていた2号機は無

情にも海に投げ出されてしまった。

「うわっ!？」

「きゃあっ!？」

海に沈む2号機を見て、使徒は追いかけるように3本の触手を使い跳躍すると再び海に潜り込んだ。

海に投げされた2号機は、海中でアンビリカルケーブルに繋がれている為に漂っていた。

「いたたっ…なんとも最悪な状況だな」

「なくに呑気に言ってるのよ、サード！ それにしても…本当に最悪ね」

プラグ内で話す2人だが、既に使徒は2号機の周りを回るように泳いでいた。何か警戒しているのか、何処と無く観察されてるように見えた。

少しすると、使徒は2号機に危険では無いと感じたのか身を2号機に向けて突撃していく。それを見たアスカは、自信満々に言う。

「しようがないわね、陸が駄目なら水中で仕留めてやるわ」

そんな自信に満ち合われた言葉を言うアスカは、2号機を使徒に対して構えを取るように操作するがピクリとも動かなかつた。それにアスカは、さつきとはうって変わって焦りが身を駆ける。

「な…何よ!？ 動かないじゃ無い!」

「だからくB型装備なんだって、今の2号機はく」

「なんとかなん無いの!？」

「なんとかって…」

「もうく！ 頼りにならないのね、サード・チルドレン癖に!」

「酷い言われようでござる…」

そんな会話をしている間にも、使徒はすぐそこ迄に接近していた。身を動かせない2号機に、容赦無い体当たりをする使徒。 凄まじ



い衝撃がプラグ内を襲い掛かり、シンジはインテリアにしがみ付いて耐えるが2号機とシンクロが繋がっている彼女には激突された痛みを襲われていた。

「くぅ〜!!」

「大丈夫!? 惣流さん!」

「なんて事…無いわよ」

強がりを見せるアスカだったが、隠しきれて無い発言に彼は顔を顰める。

「惣流さん、君は2号機でA.T.フィールドは張れる?」

「無理よ…訓練の時にすら発現しなかったわ」

(不味い…動けないのに、防御すら出来ないとは。…最悪だな)

そんな思考している間にも、使徒は再び2号機を攻撃し始める。

何度も何度も甚振るように、使徒は2号機に突撃していく。その際、少しずつ2号機の装甲が剥けていく。それほどの衝撃が今の2号機に襲いかかっていた。

何度も攻撃を食らい、フィードバックで痛みを目を瞑りながら耐えるアスカの横で彼女は彼女が持つレバーを操作して、2号機とのシンクロを彼女が7でシンジを3にと操作していた。流星に今の状況を覆すのは苦難の為に、少しでも彼女の痛みを和らげる為にシンジがカバーする。

そんな時に、彼は胸から突如に痛み始める。

(な、なんだ!? この痛みは! 後…嫌な予感がする!)

いきなりの使徒からの攻撃以外での痛みに焦るシンジ。だが、その痛みは何処か違和感を強めたような痛みなのかシンジは困惑していた。



「よし…脱出するなら今だな」

艦内に収納された戦闘機の前にヘルメットを被り加持は呟く。

戦闘機には、既に1人は操縦席に座っていた。

『加持、準備出来たぞ。何時でも発進可能だ』

「了解」

そのパイロットの言葉に、加持はトランクを持ちながらパイロットが搭乗する後ろの席に座る。それを見たパイロットは、操縦席にあるパネルを操作すると戦闘機は持ち上げられていき甲板の上に姿を現わす。

(大人の事情で子供を振り回すのは…良い気分には慣れないな)

戦闘機の後部座席でトランクを自分の身体に固定しながら、加持はそんな事を思っていた。そんな所に、戦闘機に無線が入る。

『あー！ 38改！』

『加〜持〜！』

加持は戦闘機の中からブリッジの方に見てみると、そこにミサトの姿を確認する。彼女の顔は期待したような表情だった為に、加持は今から逃げる自分に罪悪感に襲われながらブリッジと無線を繋げる。

「葛城、俺ちよつと用事があるから…先に行くわ」

加持の言葉にミサトは少しずつ表情が引き攣り始める。そんな

彼女の表情を見ながらパイロットに指示する。

「じゃあ、頑張つてな。葛城一尉〜」

戦闘機は浮き始め、その場を離れようとする無線からミサトの叫ぶ声が鳴り響く。

『加持！ 避けて!!』

すると、戦闘機の下から使徒が口を開き迫る姿があった。戦闘機は船から離れてそこまで高度を上げていかなかった為に、海面から飛び出した使徒から避ける事は不可能であった。加持も突然の光景に思考が止まっていた。彼は今の光景はゆっくりと時間が流れていく

ような感覚に捉われていた。走馬灯が過ぎり、死が迫ってくる中加持は左程驚いていなかった。

(此処までか…)

少しずつ迫る使徒に彼は最後脳裏に浮かび上がったのは、自分が殺してしまったと思っっている弟の姿だった。

『間に合えー！』

だが、そんな所は無線から少年の声が鳴り響き使徒が迫る前に赤い巨人の大きな手が戦闘機を包んだ。

☆☆☆☆

「何かおかしいな…」

先程から攻撃されていた2号機は、突然使徒から距離を取られ何故か海面の様子見るように泳いでいた。

「あいつ…なんか探しているのか?」

未だに彼は胸に走る痛みを堪えながら、使徒の様子を見ていた。

そんな彼の横にいるアスカは、使徒からしこたま攻撃された事に腹を立てているのかドイツ語で怒鳴り散らしていた。

『あの野郎! 絶対に殺してやる! グチャグチャにして魚の餌にしてやるわ!!』

物騒な事をドイツ語で言ってる彼女に、少し距離を取るシンジ。

そんな中、突然使徒は2号機を無視して何処かに泳いでいく。

「あいつ、逃げるわ」

「…いや、違う」

シンジはより一層に違和感が胸を襲いかかられ、使徒の行動を観察

する。すると、使徒が泳いでいく方向は2号機が繋がれたアンビリカルケーブルの先にあるオーバー・ザ・レインボーの方向だった。それを確信したシンジは、彼女の上に覆い被さるように2つのレバーを持った。しかし、突然の事に彼女は男であるシンジに防御本能で暴行をふるう。

「いやー！ー！！」

何発も後頭部や背中を殴られ、膝で顔を蹴られながらもシンジは苦痛の表情を浮かべながら操作を続ける。

「イタツ!? つく…ケーブルリバーズ！」

シンジの操作によって、2号機はオーバー・ザ・レインボーにケーブルを巻き上げられて水中を引っ張られていく。その間にも彼はアスカの暴行を受け続けた。

「なんなのよ！あんた！ 触らないでよ、私に!! そして勝手に2号機を動かさないでよ!!!」

容赦無い彼女の攻撃にシンジは傷ついていくが、彼はケーブルを引っ張られている2号機を操作を続ける。

「…シンクロを全カット。再起動…メインパイロットを惣流・アスカ・ラングレーから碇シンジに変更…」

ドコッ

アスカの膝が彼の左目に直撃する。そして、彼女の右フックがシンジのテンプルに入りプラグ内の壁に打ち付けられる。やっこの思いで自分の上から男を退かしたことに、安堵するがつかの間。再び彼は戻ってきた。ボロボロになりながらも自分に迫る様に見える彼女は、シンジに向けて足蹴りを放つ。プラグ内に彼が流血した血が漂う中、アスカに何度も何度も蹴られるが彼は彼女の蹴り続ける片足を掴む。

掴まれたアスカはより一層に、残った足でシンジを蹴るが彼は暴行受けながら話し始める。

「…ぐっ。 悪い…けど、ゲツ…嫌な予感が…ガッ！ 少しでも、ガハッ…2号機…使わせて貰いたい。 グハッ」

彼に暴行を続けた彼女は疲れ始めて、少し気持ちが落ち着いたのかアスカは彼の目を見る。シンジの左目は酷く腫れあがるが残った右目からは、何か強い思いを乗せた眼差しだった。それを見たアスカは、トラウマである男の姿を思い出すがその時の目とは違うとわかると蹴つていた足を止める。

それを見たシンジは腫れあがる顔で少し微笑み、すぐさま2号機とオーバー・ザ・レインボーとの距離を確認する。

「…ゴメン、惣流さん。許可無く2号機を操作する事も、君に触った事は謝る。ゲホツ、だけど嫌な予感があるんだ。何も無ければ良いんだけど、後の後悔はしなくないんだ。だから、今だけ2号機を貸してくれ！」

2号機は引つ張られながらも、使徒を追い越していった。船との距離は残り少ない中、シンジは彼女を説得する。そんな真剣に言う彼にアスカは一言。

「……い、今だけよ……」

「！ ありがとう！」

彼女の言葉にシンジは再び彼女の上に乗リレバーを掴む。乗らされたアスカは少し身を強張らせて我慢していた。

そして、シンジは船に巻き上げられ水面から2号機が出るとケーブルをフリーにする。そんな所に使徒は海面から飛び出していた。

その向かう所には一機の戦闘機がいた。

それを見たシンジは、2号機を操り右手で甲板を掴まり勢いをつけて海から出て甲板に乗り上げて戦闘機の方に跳躍し始める。

「間に合えー！ー！」

2号機は左手を戦闘機に伸ばして優しく掴み使徒の攻撃から守った。が、後から来た使徒に右足を噛まれてしまい重力に従って再び海に引きづり込まれそうになる。

「!? くそっ！ お……らあっ!!」

掛け声とうって変わって、戦闘機を右手に瞬時に持ち替えて紙飛行機を飛ばす様に軽く平行に投げる。この時、この繊細で正解なシンジの行動が無ければ戦闘機は墜落してしまっている。

元々、戦闘機は敵対する航空機との空対空戦闘を主にした兵器である。他の軍用航空機の多くがセミモノコック構造で胴体部が構成され中央翼構造を備えているのに対して、ほとんどの戦闘機は剛性の高い削出／溶接フレーム構造で構成され、外板は内部保護と空力特性向上を担う要素が大きい。一般に1―4名程度の乗務員は狭い操縦室に着座したまま飛行する。与圧の有無は任務によるが、ジェット戦闘機の場合はほとんど例外なく操縦室を与圧している。

そして戦闘機は、超音速飛行が出来る。マッハと言う言葉があり、気圧や気温で変化はあるが大まかに言えば時速1200km/h以上の物である。それを達すると飛行速度が音速に近づくにつれて、空気の圧縮性の影響から生ずる造波抗力の急増、翼表面に生じる衝撃波の後流における流れの剥離、その他空力変化や空力弾性的な問題が生ずる事となる。

それに生半可な機体では、空中分解の可能性も出てきてしまう。もう一つ問題があり、戦闘機の運動が0の時に外から突如力を凄まじいほど加えられるとどうなるか？

答えは、その戦闘機に乗っている人間は間違いなく死亡してしまうであろう。慣性の法則と言った言葉があるように、例えば電車に乗った人間が突如止まっていた筈の電車が発進すれば進行とは逆の方向に身体が持つてかれるであろう。それと同じで、その力を強ければ強いほど中にいる人間にかかるGは大きくなる。

それを見越したのか、機体や中に搭乗された人間の事を考えての行動なのかはわかるのはシンジ本人だけである。

無事戦闘機を使徒の攻撃を回避させた2号機は、足を啜えられながら水中を縦横無尽に泳ぎ始めた。その中、シンジは精神面と肉体的に疲労が来てしまいアスカの上でグツタリしていた。

「ちよつと…：サード！　大丈夫!？」

流星のアスカも今の彼の姿を見て、彼女の方からシンジに触り揺さぶり意識の確認をとっていた。

「……うん。　大丈夫よ…：惣流さん……」

途切れ途切れではあるが、言葉を発するシンジに安心するアスカ。

そんな時、オーバー・ザ・レインボーから無線が入る。

『アスカ！ アスカ!? 聞こえる?』

ミサトの声がプラグ内に鳴り響く。アスカはシンジの上半身を自分の腹部の上に誘導して、彼の状態を楽な姿勢にさせながらミサトの返答する。

「聞こえるわ、ミサト。 どうしたの?」

『アスカ…本当にありがとう。 加持を助けてくれて…』

「えっ?」

『今さっき使徒の攻撃から守った戦闘機に加持が乗っていたの』

ミサトの言葉に、アスカは思わず自分の上にいるシンジを見る。

偶然とも言い切れない事が、先程シンジは行っていた。彼女の手加減無しの暴力に堪えながら、実際に加持が乗っているとはわからない戦闘機を救い出した。もしあの時に彼が、あのまま彼女の暴力に屈していたら加持は確実に死んでいたであろう。今の彼女に心の支えとなっている加持が居なくなれば、もしかしたら心が壊れてしまっていたかもしれない。

そんな事をアスカは思うと身震いを起こした。

『さっき加持の方から無線で、「助けてくれてありがとう、アスカちゃん」だって言ってたわ』

「ち…ちが」

アスカがミサトに否定の言葉を送ろうと、口を開こうとすると自分の下からシンジの手によって止められる。

「……とりあえず、引き続き使徒殲滅を行います。 ミサトさん」

『お願いね。 2人とも』

そうして無線が途切れ、プラグ内には使徒に引きづられる水中の音が鳴り響いた。

「なんで自分がやりましたって言わないのよ…」

アスカは腹部にあるシンジの頭に手をのせる。今彼女自身では、無意識に男性である彼に触っていたが嫌な感覚は無かった。

「ははっ……俺はそんな事よりも、今やらなくちゃいけない事が…あるから」

「……私はサードに酷い事を、傷つけたのよ……」

彼女は自分が彼にトラウマだと言え暴行してしまった事に、罪悪感に襲われ顔を下げる。すると、自分の上に乗っていた重みが消えてしまい不思議に思い顔を上げると、横に彼の傷ついた顔で笑みを浮かべていた。

「だったら……手を貸して。今使徒を倒せるのは、惣流さんだけだから」

シンジは彼女に向けて右手を差し出す。アスカは一瞬彼の行動が理解できず、手間取ってしまうが彼の顔を見ていく内に彼に対して加持と同様に嫌悪感が湧かなくなっていた。

何処と無く彼からは、自分に向けられるのは卑しきや醜い感情は無く逆に支えて助けてくれる暖かい光に思えたアスカ。今までがトラウマの所為で周りの男が敵に思えるほど嫌い、気の休まる事のない日々。だけど、彼となら気を休める事が出来るかもしれないと一筋の希望の光が見えるように思えた。自分の直感を信じ決意して、自分に差し出す彼の手を両手で柔らかく掴む。

「任せなさい！ こんな魚に負けてたまるもんですか！」

力強く言い放つアスカを見て、シンジは彼女に両手で包まれた手を優しく握り返す。そして、彼は前を向き2号機の視点に写る使徒の姿を見る。

「じゃあ……漁といきますか。惣流さん！」

「……アスカ」

「うん？」

シンジは力強く使徒殲滅に移ろうと彼女を呼ぶと、アスカからは自分の名前を言い出したので不思議に思い彼女の方に顔を向けると、そこには可愛らしく照れながら彼と目を合わせないように顔を背ける女の子がいた。

「これから一緒に戦う仲間だから……名前呼びなさい。『シンジ』  
後、ゴメン」

照れ臭いのかフンツと言う彼女に、少しでも心が開いた事に嬉しさを感じるシンジ。彼女の要望に応える為に、シンジは彼女の名前を



呼ぶ。

「改めて宜しくね、『アスカ』ちゃん。　いいよ、許してあげる」

再びシンジは前を向くと、後を追う様にアスカも前を向く。

「でも、どうするのよ。　シンジ。　この状況から覆すのは苦難よ」

「……一っだけ策はあるよ」

「……それって、出来るの?」

「てか、これしか無いよ。　今の2号機はB型装備だから、水中では戦えないよ」

アスカはシンジの提案に溜め息を吐くが、彼に賛同する。

「確かに。　私は何も案を出せないし、やるしか無いわね」

一度シンジは彼女の邪魔にならないように、再びインテリアの横に移動する。

2号機は、片足を啜えた使徒に刺さっているナイフを取る為に泳ぎ周る為に水の抵抗を逆らいながら身体を動かす。　そして、2号機はナイフを掴むと力強く引き抜くともう一度、使徒にナイフを突き立てる。　すると使徒は痛み悶え、口が開き2号機の足は解放された。

「ミサト、使徒相手に有りっ丈の魚雷を！　そして、その後ケーブルをリバース！」

『わ……わかったわ』

アスカの指示通りに、生き残った戦艦での魚雷の集中砲火が始まる。　使徒に降り注ぐ魚雷が爆発の連続により目眩ましになる。

その間に2号機は、ケーブルを巻き取られオーバー・ザ・レインボーに戻っていく。

「でも大丈夫なんでしょうね?」

「大丈夫、アスカちゃんが俺を…2号機を信じてくれるなら」

2号機は船に辿りつくくと、甲板によじ登り使徒がいる方向に身体を

向かせる。しかし、問題が発生する。

「やっぱり片足が駄目になってるわね」

2号機の片足は使徒に噛まれた為に、損傷してしまい片足立ちしか出来ないでいた。だが、シンジはその状況を打破する。

「ちよつとゴメンね、触るよ」

シンジは彼女に断りを入れてから、右手でアスカの左手に乗せて目を閉じ集中し始める。

バキツバキ

折れ曲がった2号機の右足は、不自然に動き始めるが両足で立てるようになる。折れ曲がった箇所には、A.T.フィールドが覆うように展開されていた。それを見たアスカは驚く。

「何よ、シンジ。張れるじゃない」

「いやいや、最初は張れなかったんだよ？でも、今は張れるようになったんだ」

今の2号機は、メインにシンクロしているのはアスカだが追加にシンジとも両立にシンクロをしていた。何処か彼女がシンジに対して、心を開いた為か2号機も応えるように一つのエヴァに2人の子供とのシンクロを可能にさせていた。

「まあ、細かい事はほつといて…捌きますか！」

アスカは2号機を右自然体の体制に動かし、片手に持っていたナイフを両手で持ち頭の上に持っていく。見た目は剣道の上段の構えであった。

全艦の魚雷が打ち終わったのか、海から音が無くなり代わりに使徒が海面に水しぶきをあげていた。そして、使徒は2号機を見つけたのかオーバー・ザ・レインボーに向けて突撃し始める。

「アスカちゃん、イメージして。今持っているものがナイフじゃないくて、巨大な剣って」

「わかってるわよ」

カシャン

アスカはシンジの言葉に返事しながら、レバーのロックを外して高起動モードに切り替える。高起動モードは、より高い精度に操作を

エヴァに伝達させる為のシステムだった。

迫り来る使徒を見て、アスカは緊張が高まり手が震え始める。

が、彼の手が再びアスカの左手に乗せられて少しずつ収まっていく。

そして彼女は2号機とのシンクロが上昇し始め一体感が身体全体に広がっていく。

使徒は海面から飛び出し、2号機に向けて大口を開いて飛んでくる。 それを見てシンジはアスカに叫ぶ。

「いつけえー!!」

「アアアアアアアア!!」

目の前まで迫る使徒に、2号機は4つの目が光り輝き頭上に構えたナイフを力強く振り下げた。 ナイフの先からオレンジに輝く薄い刃が使徒に向けられた。 すると、使徒は何かにつかつたように空中で減速し始める。

「ぐぐぐぐぐぐぐつー」

だが、使徒の勢いは止まらず逆に2号機の身体が少しずつ後ろに下がりはじめた。 アスカは負けじとレバーを押すが途中から前に進まないでいた。 それをブリッジで見ていた人間達は、誰もが敗色の色しか見えなかった。 だが、諦めでいなかった人間は一人いた。

『アスカちゃん！ 負けるな!!』

シンジは彼女に対して声援を送ると、胸に感じていた痛みが無くなり何処か自分が消える様な感覚に捉われる。 それに対して彼の声援とかぶる様に懐かしい誰かの声により、アスカの心に火が灯り目に力が入る。

パイロットの心に応えるように、2号機は彼女とのシンクロ率を大幅に上昇させ顔の装甲が開き中から新たな4つの複眼が輝く。

次の瞬間、2号機の両腕がバンプアップしたように太くなり徐々に使徒の身体にナイフの先に展開されたA.T.フィールドが食い込んでいく。

ズバツ

2号機が両手を下げ終わると、使徒の身体は2つに裂かれ2号機の両脇を通り過ぎて海に落ちていった。

『……や、やったわ！ アスカ、シンちゃん！ 使徒を倒したわ!!』  
プラグ内にミサトの声が鳴り響き、その言葉にアスカは安堵してインテリアに深く寄りかかる。だが、シンジは彼女の声は聞こえてはいなかった。

『……どうね。 シン……ん、あ……子を……長く……くね』

今の彼は向日葵畑にいる女性の何処か嬉しそうな顔を眺め、ゆつくりと意識を闇に沈んでいった。

☆☆☆☆

使徒の撃退後、無事艦隊は日本に到着して新横須賀で船を止めていた。そこにネルフからリツコを始めとする技術班が来ていた。

オーバー・ザ・レインボウの甲板に横たわる2号機を回収作業が行われていく。

「よく被害をここまで小さく出来たわね」

リツコは残った艦隊を見て呟く。

今回の戦闘で、元々2号機を輸送している時に護衛艦は30隻が配置されていたが10隻も破壊されていなかった。

「まあね、2号機が出る前に数隻で…出撃の後は1隻ぐらいしか落ちなかったんだから」

船から降りたミサトがリツコの横で状況の説明をしていた。そんなミサトが説明をしている中、リツコは今回の戦闘記録を眺めていた。

「でも、今回の戦闘で貴重なデータ取れたんでしょ？ 初エヴァに適格者の子供2人を乗せた記録」

「…ええ、物凄く貴重なデータよ」

束になつているデータが書かれた紙を、早めな速度でリツコは読み上げていく。徐々にリツコは、データを見ていく内に顔に力が入っていく。隣にいるミサトは、疲れが溜まっているのか身体を伸ばす際に顔を上に向けている為にリツコの表情は見えていなかった。

（これは…一度碇司令に報告しないと。思った以上に事が進んでるわ…早くあの『システム』を完成させないと、シンジ君の身が）  
険しい顔でリツコは思い耽る。

（今回の戦闘でわかつた事は、戦闘中でシンジ君は2号機とのシンクロに問題無く接続できた事。本来は適格者に適したエヴァしか乗れない常識だった。だけど…シンジ君はそれを覆した。データ上では一時的にシンクロ出来た結果になっているけど…もはや『同化』とも言つていい。シンジ君は2号機と『同化』して動かしていた。そのお陰か、戦闘の最後にアスカのシンクロ率を手助けして過去最大の96.8%まで上昇させた…。彼はアスカと2号機の中継を補い、人とエヴァとの間を繋ぎ合わせた。だけど本来…人がエヴァと『同化』してしまえばエヴァに取り込まれる。でも、結果はシンジ君は無事…。これは早急に『システム』以外の対処と細かい事を調べないと）

一度読み終えたデータをリツコは、ペラペラと読み返していた。  
ふと、リツコは疑問に思った。

「ミサト、そう言えばシンジ君は？ もう降りている筈よね」

「…あゝ、シンちゃんなら一足先に本部に行かせたわ。治療の為に…」

ミサトからのハッキリしない言い方にリツコは疑問符を浮かべる。  
リツコの目から2号機の損傷は、第3新東京市に襲来してきた使徒との戦いの中では小さい物だった。それに『同化』の為にフィードバックが大きくても、たかが擦り傷程度の筈なのだから。

「えっとね…私も聞いて驚いたんだけど。戦闘中でシンちゃんがアスカに触れちゃって……。ほら、アスカってトラウマ持ちでしょ？」

「……そういう事ね」

リツコもデータでアスカの過去を知っている為に、ミサトの言葉に察した。毎度の事ながらシンジが戦闘に出る度に負傷している事を思い出したのか、ミサトとリツコは顔を顰めてしまう。

「シンちゃんって、いつも怪我してるわね……」

「そうね…殆どが要らぬ怪我だけど」

その場に2人の声は周りの人間には聞こえずに静かに消えていった。

☆☆☆☆

「いやはや…人生初で走馬灯を見た船旅でしたよ。でも使徒は無事殲滅、届け物も何も無くお渡しできました」

ネルフ本部の司令室では2号機に助けられながらも、一足先に脱出した加持はゲンドウと冬月の前に立っていた。この司令室入室許可を彼は貰っている時点で、加持は一介の職員で無い事が分かる。

そして、加持は手に持っているトランクを執務机の上に置く。

ピッピッピッピッピッ

ピー

カチャツン

トランクには指紋認証と暗証番号を入力する機械が備えられており、加持は6桁の暗証番号を入れて指紋をスキャンさせると鍵が開けられた。加持はゲンドウと冬月に見せる為に、トランクを開け2人の方に向ける。トランクの中身を見た冬月は驚く。

「ほう、ここまで復元出来たのか」

「ええ…硬化ベークライトで固めていますが。生きてます、間違いない…。 いや、こんな物を持って運ぶのは心臓に悪いですよ。金輪際はこう言う仕事は遠慮しますよ。 碇司令…これが人類補完計画の一つなんですね？」

「ああ、そうだ。これが最初の人間である…アダムだよ。我ら人類の悲願を果たす為の一つである存在だ」

ゲンドウは目の前にある物を眺めながら、サングラス越しからでも分かるほどに彼の目には何処か怪しい光を灯っていた。ふと加持は、ゲンドウの言葉に疑問に思った事を聞く。

「碇司令。では、これ以外にも計画に必要な物は多数あるって事ですか？」

「…計画に必要な物は合計で5つ。これら全部を揃えば計画を発動できる」

それを聞いた加持は、自分の中で計画の正体を暴く為に考えながらその場を後にしようとする。

「そうですか…では、碇司令。 また後ほど」

プシュー

加持は司令室から退出する。そんな加持の後ろ姿を見送った2人は、執務机の上に置かれた物に目を向ける。

「碇、後は時と残りの物だけだな…」

「ああ、計画の時は…もうすぐだ。 老人達も知らない方法で、私が計画を実行させる…ユイ。 待っていてくれ」

ゲンドウは、硬化ベークライトに固められたアダムを眺めながら暗く静かな司令室に一言呟いた。

新たな動き…

朝、場所は第3新東京市。この街に住む人間達は、学生であれば学校に社会人なら仕事場に通勤しているだろう。今現代は季節は無く、常に夏の日差しが通勤している人間達の頭の上で照りつける。

ミーオンミツミツミンミン

第3新東京市にある木に蝉が止まっており、忙しなく鳴き続けている。

ガラツ

「おはようん」

第一中学校に登校し、自分のクラスに入るシンジはドアを開けてクラスメイト達に挨拶を送る。

「おお、おはようさん。シンジ」

「シンジ、おはよう」

「あつ、碓君。おはよう」

上からトウジ、ケンスケ、洞木の挨拶が返ってくる。他にも何人かのクラスメイトからの挨拶も返ってきていた。

「…おはよう」

シンジが教室に入る後に続き、レイも教室に入る手前で挨拶をする。最初、シンジとレイと一緒に登校する際に彼の後に追うように入る彼女は今までしなかった挨拶を彼を真似るようにし始めると、その場にいたクラスメイト達は驚愕していた。

それもその筈、彼女はシンジが来るまでは口も最低限しか開かず人を寄せぬ雰囲気を漂わせる少女だった。それが今では、普通に挨拶が出来て少ないながら他のクラスメイトから話しかけられても返すほどに改善されていた。

「綾波も、おはようさん」



「おはよう、綾波」

「綾波さん、おはよう」

そんなクラスに少しずつ馴染み始めている彼女を見て、シンジは心の底から微笑んだ。

今のシンジは、2日前の戦闘で負った傷により左の瞼が腫れ上がってしまい今だ眼帯をして生活を送っていた。身体に負った傷は、制服に隠れて見えないが最初に彼を見たクラスメイト達は顔の傷に驚いていた。偶に歩いてる最中、距離感が取れず物にぶつかったり蹴躓いたりする。そんな中、彼を手助けする者がいた。

それが綾波レイ、彼女だ。以前にも、このような事があった為にそれを見たクラスメイトからは何も言わないでいた。他にもシンジが困っていたり、彼女がその時に近くにいなかった場合はクラスメイトが手助けしてくれていた。

今のシンジがいるクラス全員は、日々彼に色々と手伝ってくれたり手助けしてもらったり相談してくれる為にクラス一同が恩を返すように助けていた。

「はあく、早く怪我治ってほしいよ」

自分の席に座るなり、彼は愚痴てしまう。シンジ的には、助けられるよりも助ける方が好んでいる為に今の状況が好ましくなかった。「仕方あらへんで、シンジ。とりあえずは、ゆつくり怪我を治すのを専念しときや」

「そうそう、無理して何かあった時は俺らも悲しいからさ」「うぐ…」

トウジとケンスケの言葉に、シンジは言葉を詰まらせる。

その後、授業が始まるのを知らせる始業のチャイムが学校全体に鳴り響き教室に教師が入ってくる。それを見た洞木は号令をかける。

「起立…礼! 着席!」

その号令に従い、クラス全員が立ち上がり教師に向かいお辞儀をして再び座る。それを見た教師は、授業を始める前にクラス全員に告げる。

「あく、授業を始める前に。このクラスに新しい生徒が転入してき

た」

ざわざわ

教師の言葉にクラス全員が騒ぎ始める。それを見たクラス委員長である洞木が注意を入れるが余り効果は無く、クラス内は賑やかになる。

「なあ、シンジ。どんな奴がやってきたのかなあ」

「センスは男女、どっちやと思う？」

シンジの席に近いトウジとケンスケが、周りの空気に紛れるように彼に話しかける。そんな二人の言葉に、彼は少し考える。

「うくん…わからないな。まあ、どっちでも構わないからどうでもいいかな？」

彼のセリフに聞いた二人は、シンジの性格を思い出したのか愚問だと思つた。

「確かにセンスは、誰でも仲良く出来るから変わらへんな」

「本当本当。シンジの長所だよな」

シンジは余り人を選ばない性格で、余程悪い性格を持った人間以外は簡単に交流を深めるのが彼の一つの特技でもあった。そんな話をしていく間にも、教師は廊下に待たせた転校生を教室に入るように指示を出していた。

「では、惣流。入って来なさい」

（ん？ どっかで聞いたような…）

シンジは教師の口から出た名前に心当たりがあり、その名前を何処で聞いたのかを思い出そうする。彼は視線を机の方に下げて、右手を顎に持つて行き頭を悩ませた。そんな彼を置いていくように、周りは動いており一度クラス全員は静かになると教室のドアがスライドして転校生の姿を現わす。

それを見たシンジとレイ以外のクラス一同は、転校生の姿に驚いていた。

その転校生の性別は女子で、髪は長く色は紅茶色で頭には2つのインターフェイスが付けており明るい蒼の瞳を持っていた。顔は整っており、抜群のプロポーションで自他共に認めるほどの美少女が

教室に入ってくる。少女は教卓の横まで歩き、そしてクラス全員と面を合わせるように向きを変えた。

「今日から、この第一中学校に転入した…惣流・アスカ・ラングレーです。よろしく」

アスカの自己紹介が終わった瞬間に、クラスは再び賑やかになる。

「きた！ 美少女！」

「髪綺麗！」

「スタイル抜群！」

「モデルみたい！」

クラスの男子と女子で、アスカを見て思った事を述べていく。そんな中、レイは我関せず<sup>1</sup>に外を眺めていた。トウジとケンスケは、オーバー・ザ・レインボーであつた少女がここにいる事に驚きの余りに声も出せないでいた。洞木は、クラスを静かにしようと必死に声を出していた。そんな周りの音に、吃驚したシンジは悩ませた思考を中断して顔を前に向かせた。

すると、そこにアスカの姿を見て驚いた。

(なんでアスカちゃんか???)

驚いたシンジは思考が止まっている所に、アスカに見つかり驚いている顔を見て可笑しかったのか少し笑うとそれを見た男子達は心を奪われ、女子はそんなアスカの美貌を羨ましそうに見ていた。

☆☆☆☆

カタカタカタカタ

パソコンのキーボードを叩く音が鳴り響く部屋に1人、リツコはネルフ本部の一角にある研究室でパソコンに前回の戦闘データを入力していた。自分で用意したコーヒーの匂いが部屋一面に広がり、リツコはそんな空間の中で黙々とデータを整理していた。

(とりあえずは今日シンジ君に来てもらって、テスト序でに調整出来れば…)

キーボードを叩く手は凄まじいスピードで動き、ミス一つ無い入力画面には高速で打ち込まれた数字が流れていた。そんな常人離れした事が平然とやってのける女性、赤木リツコだった。作業がひと段落ついたのか、手を止めテーブルに置いたコーヒーに手を伸ばし口元に持っていく。少し口に含み味と風味を楽しみながら気持ちを落ち着かせる。

「ふうっ」

(そうかわ…テスト終わったら、彼をまた誘いましょ。この前頼んだ物があるから、それでも摘んで…)

と、リツコがそんな考えをしてる所に後ろから男性の姿が近寄ってくる。彼女に近寄る男性は、気配を消している為にリツコは気づかないでいた。

そして、触れられるほどの距離まで接近すると男性はリツコの肩の両サイドから両手を伸ばして、優しく抱きしめ男性は顔をリツコの左肩に乗せる。

「少し痩せたかな?」

リツコは突然の事に身体を硬くして驚くが、今自分を抱きしめている男性の正体がわかるとふっと力を抜いた。

「…もう、加持君たら。吃驚させないで。それにハズレよ、1250gプラスよ」

やれやれと言いたげな顔を下げるリツコに、加持は彼女の顔を右手で自分の方に向かせる。今の彼は、男性として女性に口説くように優しく声をかけて時に強引な行動で自分の存在をアピールしているように見える。何処と無く映画のワンシーンのような状況の中、加持は真剣な表情をしながら一言。

「それは…実際に目で確認をしたいな」

普通の女性であれば、加持のような男性に口説かれると大半は赤面したり照れたりする女性が多い。彼は身長も高く身体付きも良く、後ろ髪が長く少し顔も良く無精髭を似合わせる男性だ。

そんな彼にリツコは口説かれていたが、彼女は加持のアピールに対して何も感じないのか最初から軽く笑った顔から変わらないでいた。

自分のアピールに反応が薄いリツコを見て、加持は不思議に思い彼女の目を見つめる。すると、彼女の視線は自分から少しずれた所に向けられており、丁度自分の後ろを見ていた。それを追うように加持はその方向に顔を向けようとする。

ガシツ

しかし、加持の顔は第三者の手によりリツコが向けて方向には向けなかった。

「加~~~~~持~~~~~?」

なんとも女性のトーンとは思えぬ低い声が室内に鳴り響く。今加持の頭を鷲掴みしている正体は、満面な笑顔を彼女の顔にただ貼り付けたようなミサトの姿が。

「あたたたつ、降参だ。葛城」

少しずつ加持の頭を掴むミサトの右手に力が込められ、その痛みにすぐ様に加持はリツコを離して両手を上に上げた。それを見たミサトは素直に手を離れた。離された加持は、頭を摩りながらリツコから離れた。

「相変わらずね、加持君は。自分の気配を消せても、ミサトの存在に気づけないなんて…」

「こいつは、女に構ってる時が一番油断するのよ。全く…変わっていないんだから」

ミサトは溜息を吐く。そんな中、ミサトのアイアンクローから解かれた加持は先程の事を無かったように2人に話しかける。

「いや、ここうやって3人で集まるのは何年ぶりかな? また一緒に連めるな」

「そうやって、自分が悪い状況になると誤魔化そうとする所も変わら

ないわね…」

ミサトは、核心を突かれ苦笑する加持の横を通りリツコに近寄る。そして、左脇に抱えられた書類をテーブルの上に邪魔にならない所に置いた。

「これ、頼まれてた奴。ドイツから送ってもらった二号機のデータ。じゃあ、後任せたわ」

自分の要件を言い終えると、身体の向きを変えて場を離れようとするミサト。それを見たリツコは後ろ姿のミサトに頼み事を言う。

「ああそうだわ、ミサト。午後にシンジ君を本部に来るように言つて。シンクロテストをさせたいのよ」

「了く解」

リツコの言葉に軽い返事を返すミサト。そのまま、部屋を出るために扉に向けて足を進ませると進路方向に加持がいて、横を通り過ぎようとするが彼の横に着くとミサトは止まった。

「まあ…でも。なんだかんだで別れたけど、あの時加持君が無事で良かったわ。お帰りなさい、加持君。また今度…飲みにいきましょ。3人でね…じゃあ」

ミサトは優しい顔で加持に言いたい事を言った後、肩をポンと叩きその場を後にした。それに変わって加持は、彼なりにミサトの事を解っていたつもりでいたがそれが間違いだと気づく。それに気付いた加持は、少し溜息を吐きテカイ魚を逃したと言わんばかりの表情をした。そんな加持を見てリツコはクスクスと笑っていた。

「加持君ったら、後悔してる?」

「…うーん、そうだな。付き合ってた時より、今の方が輝いているな。実際にさっき通り過ぎようとした時にあんな言葉を言われるなんて、前の彼女からは思えないからね。葛城…変わった? りっちゃん」

「まあね…。女が変わる時は、いつも男が関係してるわ」

加持はリツコの言葉に興味を持ったのか、再びリツコに近寄りテーブルに少し寄りかかる。

「あれ? 今は葛城って誰かと付き合ってる?」

リツコはクスツと笑い、コーヒ―を少し飲むと彼女は少し上を向く。何処か愛焦がれたような表情になるリツコの横顔に、少し真剣な顔つきになる加持。彼も何処と無く、彼女達が変わった要因が予想はついていた。

「ミサトが変わった理由は…シンジ君ね。彼女、シンジ君と一緒に暮らし始めてから変わり始めたもの」

リツコの中では、シンジが来る前のミサトは仮面を被っているようにしか見えなかった。最初、少し彼女とプライベートで飲んでいる時に一瞬寂しきで塗られた表情が浮き出ていた所をリツコは見ていた。確かに、彼女は比較的明るい女性であるとリツコも理解していた。

だが、そんな明るい他人に思わせる所が無理しているじゃないかとリツコは感じていた。ネルフでのミサトの立ち位置的に、仕事が多く日々夜遅くなるのはリツコは知っていた。ミサトの家にはペットがいるのも知ってはいるが、彼女が過去の出来事を考えれば孤独感を紛らわせるのは無理に決まっている。

少しずつミサトが、何処か磨り減っているように見えた所でのシンジとの出会い。そして同居。そんな彼との生活にミサトは変わり始めた。本来の明るさに無理無く、彼女の魅力も溢れ出るようになっていた。

そんな彼女を見て、リツコは羨ましかった。

リツコは天才と言われてきた。彼女の母もまた天才の科学者の為か、娘も科学者になり周りから天才だと言われ始めた。その為か、周りは彼女から距離を取り始める。名の高い科学者の娘で天才と言われる為、周りの人間は彼女の事を違う次元の人間と認識してしまった為に距離を取った。彼女本人は、確かに他の人間より少し出来るだけでリツコも普通の人間のように人との触れ合いを望んでいた。そんな所にミサトと出会い、次に後輩のマヤと出会って最後にシンジとも出会う。彼らに会う前に他にも色々な人間と会ってはいるが、ゲンドウと冬月以外は殆どは人との距離が遠かった。

リツコの初恋は遅く、彼女が母親に呼ばれネルフに来た時にゲンド

ウと出会って一目惚れ。しかし、既婚者と知ってはリツコの恋は消えていった。そんなこんなで時は流れてシンジが第3新東京市に来ては出会い、そして使徒と戦っては人との繋がりを広く持ち生活してる中で、シンジと彼女が関わる事は少なからず存在した。

最初リツコは、彼の事を賢いだけの子供と見ていた。自分では子供は好かない性格と自覚してるつもりだったが、彼と接触して会話をして行くうちにリツコはシンジを他の子供と同じでは無いと理解した。シンジの行動や思考、色々な面を見てある種の完璧超人に見えたから。性格は悪くなく、家事が出来て人を気を使い思いやる心を持った優しい少年に彼女は歳が離れていると言えど最近は少し異性として見るようになってしまった。父親からは思わせない人柄に、自分でも彼に興味を持つ事に驚いていた。

その為に彼をどうにか自分の下に働かせて、いつも側に居させようと考えた。しかし、その考えにシンジは内なる意味に気づいてはいないが彼女が何度も勧誘するが断られる。そして、ミサトがシンジとの同居の話を先に越され悔しい気持ちになるが自分だったら断られていただろうと予測し自分なりに納得した。

だから、リツコは少ない合間にシンジとのお茶会が楽しみで仕方なかった。数少ない彼との時間を過ごすのが。

「女が変わるのは…いつも男よ。そして私もその一人なのよ?」

リツコは優しい微笑みで言う。今の彼女は科学者としての顔では無く、女として自分が出せる表情だった。そんな表情を見た加持は、内心で少し心に衝撃が走る。加持がリツコと知り合ってから、彼女の表情を今まで見た事無く余りにも女性として魅力が溢れていた。

「…あゝ、なんと言うか…凄いな彼は」

加持は彼女らと少しばかり会っていないだけで、ここまで変わっているとは思わず素直に驚いていた。

「ええ、彼は凄い男の子よ…だから失う訳にはいかないわ」

ガラッ

パサッ



リッコはテーブルの引き出しから書類を取り出す。彼女が出した書類に興味を惹かれたのか、加持はテーブルに置かれた書類を手に取り中身を読んでいく。書類に書かれた内容に加持は、書類から目を離してリッコの方に向く。

「りっちゃん…これって」

「そうまだ完成はしてないけど、雛型である《ダミーシステム》よ」

☆☆☆☆

カシャツ

一枚の写真に他の女子と話している横顔のアスカの様子が写し出される。

カシャツ

また一枚と体育の授業を行っているアスカの姿が写し出される。

カシャツ

そしてまた一枚と盗撮で色々なアスカが写し出された写真は、その実行犯であるケンスケはすぐ様に現像して放課後に体育館裏でコソリとトウジとケンスケで第一中学校の男子生徒達に売っていた。

「猫も杓子もアスカ…アスカかあ。毎度あり！」

「外面だけなら普通に整ってるからのお」

「まあ、そのお陰で俺は稼げるんだけどね」

客足が収まったのか、地面に敷かれたシートには幾つかのアスカの写真が並べられていたが残り数枚しかなかった。

「シンジの方も…最初の方は女子に人気あったからな」

「でも、その事をセンセに説明したら拒否られたしな」

「だけど…シンジは後々に自分の写真が出回ってる事を知っても、俺らに言わないしな」

「シンジの事さかい、条件と限度を弁えれば何もいわんし。今のアスカの写真だつて、そうやしな。流石にシンジも一度、ワイらに注意はするがコッチの事情を知ってるからかそれ以上は口を開く事はないし…」

粗方アスカの写真を売れたのか、2人は後片付けをする。そう彼らは少ない小遣いを、こういった事をして少しでも稼いでいた。その事をシンジがやって来る前やっていた。その時の被写体はレイで、意外にもその時の彼女の写真を少なからず買う生徒はいた。そして、シンジが第一中学校にやってきて和解し連むようになると少ない機会ではあるが2人はシンジから奢ってもらう事が少々。その事については2人も感謝しているが、ただ奢ってもらうだけでは何かが違うと感じたのか、2人は後々にシンジからの好意を止めさせた。

そのまま、彼にただ奢ってもらっては2人は友達としての何かが失ってしまうと感じた。その為、彼らは彼らなりの稼ぎ方で少ないながらシンジと色々な所に行つては買つて遊んではしゃいでいた。

そして、そんな2人からの気持ちにシンジも盗撮と売買の事を強く言えないでいた。しかし、流石に友達が警察沙汰になる事は望んでいない為にしっかりと条件を言い渡した。

ひとつ・卑猥な所は撮らない。

ふたつ・言い逃れが出来ない盗撮の為に限度を考える。

みつつ・売った男子が他の女子に見つかつてしまつても余り追求させない写真を撮る事と高額なやり取りは禁止。

この条件をシンジは2人に言った。盗撮自体が犯罪の為に、本当に見つかつてしまつても子供がやる範囲として更衣室内の盗撮は厳禁。そして、盗撮をやっているからには限度をわきまえる事。最後に、その事を余りバレ辛くする為に高額なやり取りはせず自然なアングルでの撮影をする事。

この三つを持って、2人の盗撮を見逃すシンジだった。

「アイツも少し甘い所があるから、色んな人間に好かれんちゃう？」

「確かに」

「今度、シンジを誘ってゲーセンいかへんか？」

「いいね。 そうだ、最新作のアイアンフィスト6出たんだった。意外にシンジって格ゲー上手いからな」

「せやな、センチの王様はクセが強いさかい倒し甲斐あるしな」

「ハハハハハッ」

片付け終わった2人は、今回のアスカの転校により財布の中身が暖かくなり上機嫌で校舎に戻っていった。

☆☆☆☆

ゴポツ

エントリープラグ内のLCLがシンジの肺に満たしたのか、残っていた酸素が口から排出された。 その様子を別の部屋でモニターを通して見ていたリツコは、エントリープラグ内にいるシンジに報告する。

「それではシンジ君。 これからシンクロテストを始めます」  
『了解です』

始まったシンクロテストに、他のスタッフに仕事を任せてリツコはエヴァとシンジの動きを手に行っているタブレットを持って途中経過を眺めていた。 リツコは立っている中、彼女の前に後輩であるマヤが椅子に座り端末に設置されたキーボードを操作していた。

「そう言えば、先輩？ このシンクロテストって、前のと違いますね。今まではエヴァとのシンクロ率を図る物が、今回は逆に制限をかけ

ていくなんて」

そう今行っているシンクロテストは、エヴァとのシンクロ率を図る物では無くシンジと初号機とのシンクロ率の上限を設定するテストだった。

「それは、まだあの《システム》が完成してないからよ…マヤ。気休めだけだ」

「それにしても、何故シンジ君のシンクロ率に制限をかけるんですか？パイロットとエヴァでシンクロ率が高ければ、より使徒に勝てる勝率が上がるのに」

本来、エヴァとのシンクロは選ばれた子供である訓練を重ねてやると乗れる物。それに変わり、シンジは何も訓練無しに初めての起動にシンクロ率は90%オーバー。最早、エヴァに乗る為に生まれてきたと言われても過言ではなかった。

しかし、前の海での戦闘データをリツコは気を付けないといけないデータを見てしまった為に今回のシンクロテストで彼とエヴァのシンクロ率に上限を設定させる。

「最悪な状態を避ける為よ…」

リツコの真剣な表情での姿に、マヤは彼女に何も言えなくなった。

その後、シンクロテストが終わった後はシンジとマヤとリツコの三人でお茶会を開き先程のテストには無い柔らかい空気が、その場所に充満していた。

☆☆☆☆

お茶会が終わり、シンジはネルフを出てミサトの家に向けて帰宅し

ていた。

(なんだろ…今日のシンクロテスト、なんか初号機との会話し辛ったな。もしかしてシンクロ率…落ちた? でも、リツコさんは前と変わらないって言ってたけど)

ブロロロロッ

シンジが歩く歩道の横に、道路の上に走るトラックがすれ違う。

そんなトラックの存在にも、気づかずにシンジは足を進ませていた。

そのトラックがミサトの家であるマンションの方向から来た事を知らずに。

ガチャッ

「ただいま〜って言ってもいるのは、寝ているペンペンぐらいだけど…」

帰宅したシンジは、玄関で靴を脱いでる際に廊下に並べられた段ボール達を見つける。

「えっ? なにこれ…。 ミサトさん、なんか買ったの?」

シンジは何個か積まれた段ボールを見ながら、自分の部屋に向かう。そして、自分の部屋に荷物を置いたら夕飯の用意をするかと考えながら襖を開けるとそこには大量の段ボールが部屋一面に並べられていた。そんな部屋を見たシンジは、思考すら止まってしまったのか固まってしまった。 数秒過ぎると我を取り戻したのか一言。

「なん…これえ?」

そんな一言を呟くとリビングの方から歩いてきた、頭にタオルを被せたアスカが現れる。

「失礼ね、私の荷物よ」

「あれ? アスカちゃんか、なんで此処に?」

冷蔵庫から拝借したのか、片手に持っていた缶ジュースのプルトップを使って開けて一飲み。

「シンジ…あんたお払い箱よ」

「ワッツ?」

「本当は加持さんの所に行きたいんだけど、加持さんと会えなかったからしょうがなくミサトの家に住む訳になったのよ」

取り敢えず彼女の言葉に理解したのか、シンジは元自分の部屋にあった荷物を探す。その姿を見たアスカは察したのか、シンジに声をかける。

「ああ、荷物なら居間の端に置いたわ。 さっさと出て行きなさいよ、シンジ。 男女7歳にして同衾せずよ」

アスカは自分の後ろにあるシンジの荷物に指を指す。彼女の言葉に部屋の中を探していたシンジは、部屋から出てきて居間に向かった。

（まあ、確かにアスカちゃんが此処に住むなら俺が出ないとな…。アスカちゃんは男性嫌いだし、俺がいたらより一層だな）

「でもまあ…私も鬼じゃないわ。 アンタがどうしても言うなら私は我慢するわ」

黙々と自分の荷物を確認していたシンジは、彼女の言葉を聞いていなかった。そして、確認し終わったシンジはポストンバッグを肩に背負い玄関に向かう。流れるような彼の動きに、アスカは何も言えず見ていた。彼女は、元々ミサトの家にシンジが同居している事は知っていた。それを悪戯心でアスカは本気で無い言葉をシンジに言った。

しかし、その行為が完璧に悪い方に進んでしまった。リビングを出る前に、シンジはアスカの方に振り返る。

「じゃあ、アスカちゃん。 また会う時はネルフで。 あっ、後ミサトさんには…お邪魔しましたって言っというて」

伝言を彼女に頼むと彼はリビングを出て玄関に向かった。安心していたアスカは我に帰る。そして彼女はシンジを追う。

「ちよっ！ 冗談よ、シン…」

キー

ガチャッ

だが、彼女の言葉は間に合わずシンジはミサトの家を出ていた。

自分が起こしてしまった事に罪悪感が襲い、外に出たシンジを追いかける事が出来ずに廊下で静かにドアを眺めながら佇んでいた。



夜の第3新東京市、街の中央部分は店の看板や街灯などの光が灯り  
人気は多く賑やかになっていた。 そんな所に一人の少年が歩いて  
いた。

「さて：：どうするかな。 取り敢えずは今晚だけでも寝る場所探さな  
いとな。 明日にでも新しく住む場所を見つけないと：：」

シンジはカプセルホテルやビジネスホテルの値段を眺めながら、安  
いホテルを探していた。 彼は莫大の給料を貰っているのにも関わ  
らずに、節約精神が凄かった。 現にミサトの家に生活してる中、  
使ったのはミサトの車のローンと少し友達と遊ぶお金と生活に必要  
な下着や必要最低限の服しか使っていないかった。 その為にポスト  
ンバッグ一つで済んでいた。

「うーん、此処なら街の中で一番安いな」

そうしてシンジは妥協できる値段のホテルを見つけると、足を動か  
そうとするが彼の後ろから声をかけられる。

「シンジ君？」

シンジは後ろに振り返ると、そこには制服姿のレイがいた。

「あれ。 レイさん、今帰り？」

レイはシンジの言葉に返事するように頷く。 今のシンジの姿

にレイは不思議に思ったのか、彼に質問する。

「：：何故、ホテルに入ろうとしてるの？」

「あく、俺ミサトさんの家から出てきたんだ。 アスカちゃんが：  
あつ、レイさんはまだ会ってないか。 二号機パイロットの女の子  
が、男性嫌いだから男である俺がミサトさん家から出なくちゃいけな

くなくて…取り敢えずは今晚だけでも寝る場所を探してたんだ。

そして、このホテルなら安いから入ろうと…」

そうシンジが話してる最中にレイは、彼に近寄りポストンバッグを  
持っている逆の手を掴んだ。

「なら…私の部屋に来ればいい」

「えっ…？」

突如、レイの言葉に今日で3回目の本気の驚きに彼は固まってし  
まった。

第3新東京市の夜は、まだ始まったばかり…



刀…自分を収める鞘を探して

第3新東京市の街は、夜の暗闇に包まれている所とそうでは無い場所があった。少し街から外れた所に、静かに建ち並ぶマンションの廊下に2人の子供が歩いていた。

スタスタスタスタ

ガチャ

「…さあ、入って」

「お…おう」

レイは自分の部屋に、快く入る事を勧めようとしていた。何処と無く今は無表情だが、身体の動きが喜びに満ちている事が何と無く見えそうである。そんな彼女の姿にシンジは、完全に引き返せないと察してしまった。

☆☆☆☆

シンジがレイのマンションに到達する数分前。

彼がレイに爆弾発言に近い言葉を言われ、シンジは数秒間固まってしまうが我に帰った彼は凄く慌てながら彼女に言う。

「ちよつ！ ちよつと待つて！ レイさん!? 自分が何を言っているのか…理解してる!?!」

そんな慌てるシンジに、レイは何故シンジが慌てているのかが理解できないのか彼の手を握りしめたまま首を軽く傾げる。

(…くっ!!)

今の彼の心境は、今まで使徒と戦ってきた時の顔とは違い立ちほだかる巨大な怪物を目の前にした勇者のような顔になっていた。彼女が持つ見た目、ショートで水色の髪に幼く整った顔付きで殆どの日常では無表情なレイに何処と無くあざとさを感じる動作によって、これを見た人間は骨抜きされていて不思議では無いだろう。

そんな芸当を狙ってやれる彼女では無いを知っているシンジ。しかし、最近になって彼女は少しずつ表情を表に出し自分で何かを理由に動くようになり、シンジが来る前の彼女とは打って変わって人間らしさが出てきていた。その為か、今のレイに女性としての可愛いらしさが出されていた。今に至るまで彼女は、無気力で何をするにしても命令が無ければ動かない少女だった。それが変わっていき、何事も彼女自身から学び吸収して少しずつと成長し未だに無表情がデフォルトではあるが故に変わる表情は、見る男性には威力が高かった。

#### 閑話休題

そんな彼女の仕草に、彼の中で凄まじい理性と欲望が争っていた。頑なに断ろうとする理性と身に任せようとする欲望。彼は内心での2つの自分が戦争して固まって所に、レイの口が開く。

「? ホテルで寝るのも…私の部屋で寝るのも変わらない。なら、シンジ君は私の部屋に来ればいい…嫌…なの?」

少し目尻が下がり表情が悲しそうな顔になりながら、彼の手を握った手に若干力が入っていた。そんなレイの表情を見たシンジは、奥歯を噛みしめながら未だに争いが続くシンジの中の自分達。

(ぐあゝゝゝ!! 止めてくれ! そんな顔で見ないでくれー! 良心が!!!)

少しずつ欲望を持った自分が理性を追い詰めていった。今のレイの表情により、理性を持ったシンジは力を緩ませられ逆に欲望の方に力が注がれていく。そして、トドメと言わんばかりにレイは黙っているシンジに少し不満そうな顔でこう言った。

「…何故、葛城一尉の家が良くて私の部屋は駄目なの…。私の事…嫌い?」

その言葉がトドメとなったのか、シンジは内なる理性を謝りながら押さえ込み彼女の提案を呑むことにした。

「…はい、お邪魔させてもらいます」

「良かった…」

彼が自分の提案に乗った事が嬉しかったのか、レイの表情は軽く口の端が上がり微笑んだ。そんな顔を見てしまったシンジは、心の中で白旗を上げていた。

(勝てないなあ…)

☆☆☆☆

プカー

ミサトの家で風呂に仰向けで浮くペンペン。 ゆっくりと風呂の湯に浸かる所に大声が居間の方から鳴り響く。 それに驚き身を固くするペンペン。

「何ですって!?! シンちゃんが出てった!」

ミサトの前に身を小さくしたアスカが立っていた。 何処と無く悪さをした子供が大人にバレて怒られているような状況に近かった。

「……………私が、少し嫌な言い方したらシンジの奴…さっさと出てって行っちゃったのよ……………」

「……………」

アスカは素直にミサトに白状して罪悪感の所為か顔を下に向ける。 そんな彼女を見て、ミサトは腕を組みながら過程を組み立てる。

(…シンちゃんが、アスカの言った事に拒絶としての意味を持って言ってるとは受け取ってない筈。 彼、人の気持ちを読みとるのが上

手い方だから。そうすると…シンちゃんはアスカの男性を嫌う面を知ってるから、自分から大人しく出てったのが妥当か…ふむ)

ミサトの過程は殆どが当たっており、彼はアスカが言った言葉にそのまま解釈はしていなかった。彼なりに、アスカがミサトの家に住むようになるので男性が苦手な彼女の為に自分が身を引けば、簡単に収まるだろうと思つての事だった。

「…ゴメン、ミサト。私が余計な事したから、シンジ…出てつて行っちゃった。本当なら後から来た私が引くべきな…の…に」

下に俯きながら、ラフな姿であるアスカは両手でシャツの端を掴み震えていた。彼女も自分がやらかした事に、ミサトに謝罪の言葉を言う。彼女なりにシンジは、男性でありながら同年代で自分の事を分かつてくれるかも知れない存在と見ていた。それが少し素直になれず、今の状況を生み出した自分に苛立ちと悲しみが同時に混み上がり彼女の目に少し涙が溜まる。

「…今から探しに行つて呼び戻してから、私が出て行…く…」  
フワツ

アスカは柔らかく自分を包む感覚に、最後まで言葉を出せなかった。今アスカは、ミサトに抱きしめられていた。彼女の顔をミサトは胸に、自分の体を包むようにミサトは自分より小さいアスカの体を大きく抱きしめて、背中に回した両手をポンポンと優しく叩く。

「大丈夫よ、アスカ。貴女は出て行かなくてもいいの。シンちゃんなら、貴女の事を思つて行動に移しただけよ。だから、シンちゃんはアスカの事を嫌いになつたり恨むような事は無いわ」

アスカは少しずつ涙をミサトの胸を濡らしていく。自分を思つての行動だと分かった事と、優しく許してくれたミサトにアスカは無言のままミサトに黙つて抱きしめられていた。

「明日にでも、学校で会うようだから謝つちやいなさい。シンちゃんなら許してくれるわよ。まあ、彼の場合…悪い事されたとは思つてないか最初驚くだろうけど」

ミサトの言葉に、胸の中で黙つて頷くアスカ。そんな彼女の反応に、満足したミサトはアスカを離して自分の懐から携帯を取り出す。

「何はともあれ：お腹空いたしご飯にしましよ。出前になるけどね」

ミサトの言葉に、涙を拭き泣き顔を直すアスカ。その後、出前を頼みんで食事する2人だったがミサトの内心はシンジの料理とツマミが食べれない事にショックでいたが表に出さずに心の中で泣くミサトであった。

☆☆☆☆

トントントントン  
シャー

シンジはレイの部屋にあるキッチンで、食材を食べやすい大きさに切っていた。予めレイの部屋に来る前に、深夜でも営業しているスーパーに寄って食材を購入していた。しかし彼の後ろには風呂場が設置されておりシンジが料理してる中、レイは入浴中であった。今彼の中で、自分を見失わない様に円周率を思い出していた。

(3. 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3 2  
7 9 5 0 2 8 8 4 1 9 7 1 6 9 3 9 9 3 7 5 1 0 5 8 2 0 9 7 4 9  
4 4 5 9 2 3 0 7 8 1 6 4 0 6 2 8 6 2 0 8 9 9 8 6 2 8 0 3 4 8  
2 5 3 4 2 1 1 7 0 6 7 9 8 2 1 4 8 0 8 6 5 1 3 2 8 2 3 0 6 6  
4 7 0 9 3 8 4 4 6 0 9 5 5 0 5 8 2 2 3 1 7 2 5 3 5 9 4 0 8 1  
2 8 4 8 1 1 1 7 4 5 0 2 8 4 1 0 2 7 0 1 9 3 8 5 2 1 1 0 5 5  
5 9 6 4 4 6 2 2 9 4 8 9 5 4 9 3 0 3 8 1 9 6 4 4 2 8 8 1 0 9  
7 5 6 6 5 9 3 3 4 4 6 1 2 8 4 7 5 6 4 8 2 3 3 7 8 6 7 8 3 1  
6 5 2 7 1 2 0 1 9 0 9 1 4 5 6 4 8 5 6 6 9 2 3 4 6 0 3 4 8 8 6

1 0 4 5 4 3 2 6 6 4 8 2 1 3 3 9 3 6 0 7 2 6 0 2 4 9 1 4 1 2  
7 3 7 2 4 5 8 7 0 0 6 6 0 6 3 1 5 5 8 8 1 7 4 8 8 1 5 2 0 9  
2 0 9 6 2 8 2 9 2 5 4 0 9 1 7 1 5 3 6 4 3 6 7 8 9 2 5 9 0 3  
6 0 0 1 1 3 3 0 5 3 0 5 4 8 8 2 0 4 6 6 5 2 1 3 8 4 1 4 6 9  
5 1 9 4 1 5 1 1 6 0 9 4 3 3 0 5 7 2 7 0 3 6 5 7 5 9 5 9 1 9  
5 3 0 9 2 1 8 6 1 1 7 3 8 1 9 3 2 6 1 1 7 9 3 1 0 5 1 1 8 5  
4 8 0 7 4 4 6 2 3 7 9 9 6 2 7 4 9 5 6 7 3 5 1 8 8 5 7 5 2 7  
2 4 8 9 1 2 2 7 9 3 8 1 8 3 0 1 1 9 4 9 1 2 9 8 3 3 6 7 3 3  
6 2 4 4 0 6 5 6 6 4 3 0 8 6 0 2 1 3 9 4 9 4 6 3 9 5 2 2 4 7  
3 7 1 9 0 7 0 2 1 7 9 8 6 0 9 4 3 7 0 2 7 7 0 5 3 9 2 1 7 1  
7 6 2 9 3 1 7 6 7 5 2 3 8 4 6 7 4 8 1 8 4 6 7 6 6 9 4 0 5 1  
3 2 …)

凄まじい数字の数を頭の中で思い浮かべながら、手を止めず調理を進めていく。今、シンジが作っているのはカレーであった。しかし普通のカレーは、レイの苦手である肉が入っている為に代わりに高野豆腐を入れたカレーを作っていた。

最初に高野豆腐を水に浸けて、その間に玉ねぎと人参や豆をみじん切りしておく。他にもニンニクやショウガをすりおろしていた。野菜を切り終わった後に、フライパンにオリーブ油を熱してすりおろしたニンニクとショウガを入れて炒めていく。炒めていく内にフライパンから香りがたったら、玉ねぎを入れて再び炒めていく。玉ねぎに火が通ったのをシンジが見極めると、切っておいた野菜達をフライパンの中に投入していく。ある程度、野菜達が火が通るとフライパンに水を入れてトマト缶の中の物を入れて煮詰ませる。その間に、最初に用意しておいた高野豆腐を水から上げて水を切り食べやすい大きさに切り分けて、その高野豆腐もフライパンに入れる。ガラムマサラも忘れずに。この料理を作る際に、予めに底が深いフライパンを使うのをオススメとする。今回は食べる人間が2人の為にフライパンであるが、4人以上であれば寸胴をご用意を。

### 閑話休題

そしてフライパンの中が煮立ったら、一度火を止め市販のカレーの

ルーを溶かして入れていく。再び火にかけてある程度水分がとんで、とろみが出てくれば完成。カレー以外にも生野菜を皿に盛り合わせておく。

シンジの作業が終わるのを測るように、風呂場から上がYシャツ一枚で下には下着のみの姿で現れる少女。上から3段目のボタンを止めたYシャツの少し肌蹴た隙間から見える肌が色気を滲み出し、下に下がって若干見えてしまう下着。我に羞恥心など無いわ!と言いたげな格好に、シンジは少し溜息を吐く。

(はあく…なんだろう。俺も歳頃の男の言うのに、彼女は羞恥心など無いと言いたげな姿。一人で悩む自分がアホらしく思えるわ…) 彼もレイの無頓着な所を見て、先程の荒ぶる自分が鎮火していくのを感じていた。そんな彼の心境を知らず、頭をバスタオルで拭きながら出てきた彼女は、部屋中に広がる香りを可愛らしくスンスンと鳴らし嗅いでいた。

「…美味しそうな香り」

「ちようど良く出来たから、食べよつか。その前にもう少し何か着込んでくれる? 目のやり場に困るから…」

なんだかんだ思いながらも、シンジは今のレイの姿に目に入れるのは良く思わず彼はレイが視界に入らない様に目を逸らす。だが、返ってくる言葉が酷かった。

「…私、制服とシンジが買ってくれた服しか無い。だから何時も部屋では、この姿」

「……………」

最早、シンジは言葉が出なかった。流石に寝巻きなどあるだろうと踏んでの言葉が、帰ってきた返答は爆弾だった。しかし、彼は内心で泣きながら自分のバックからいつも朝のトレーニングで着ている通気性が良い黒いスポーツウエアを取り出す。

「…じゃあ、とりあえずはコレを着て。Yシャツのボタンも全部とめてね…暑くは無いはずだから」

「わかったわ」

シンジはしよすがなくと思いつつながら、レイに自分のスポーツウエア

を貸し出す。それを素直に聞くレイは、長袖長ズボンのスポーツウイアを着てボタンもとめていく。応急処置として着せたレイの姿は、下は普通に履き上はスポーツウイアの下にYシャツで羽織る様に来ていた。上のスポーツウイアは、前にジッパーが付いている為に羽織れていた。Yシャツの上にスポーツウイアで羽織る姿は、ミスマッチであったが彼なりに落ち着ける姿になっていた。

しかし、それだけでは終わらなかった。

スポーツウイアを着たレイは、おもむろに上のスポーツウイアの袖を自分の顔に近づける。

「……シンジ君の匂いがする。安心する……」

そんな彼女の言葉にシンジはダウン寸前であった。しかし、彼女からの攻撃は止まらないでいた。

両袖を顔に持つて行き、スンスンと匂いを嗅いでは安心するのか目を瞑り口元が緩むのか頬が上がり微笑んでいた。そんな事をしてるレイを見て、シンジは最早TKO寸前であった。凄まじい羞恥心に駆られ顔を真っ赤にして両手で顔を覆いながら、口を開き声を小さく一言。

「(っ)飯…食べよ」

レイの部屋の真ん中に卓袱台を置き、両側に座布団を敷き正座で座る二人。卓袱台の上には、カレーと生野菜を盛り付けた皿が一つ。

パンツ

スツ

「頂きます」

「いただきます……ます」

シンジは音を鳴らしながら両手を合わせ、変わってレイは静かに合わせてお辞儀する。そして、レイは目の前にあるカレーに持ったス



プーンですくつて口に運ぶ。するとちゃんと噛みながらも、彼女の動きは少し早かった。レイは食べ出いく内に、少しずつと汗をかいていく。時たまに生野菜に手を出しながらも食べる姿を眺めながら微笑みながら食べるシンジ。

皿の上にカレーが無くなるとレイは一言。

「美味しい…」

「良かった、お気に召せて」

作った人間が一番嬉しい言葉を聞く彼は笑う。料理を作った人間は、やはり作った料理を褒められれば嬉しいもの。その後、レイはお代りするほどに絶賛なカレーだったらしい。

カチャカチャカチャカチャ

食事を済ませた2人は、再びレイはカレーで発汗した汗を流しにシャワーを浴びにシンジは洗い物をしていた。ひと段落したシンジは、部屋にある椅子に座って改めてレイの部屋を観察する。

(やっぱり寂しいな、この部屋。なんだか前のレイさんの心みたいだ…。明日にでも何か買ってあげようかな)

今のレイの部屋は、ベット一つに冷蔵庫、小さなタンスに卓袱台しか無く壁に掛けられた前にシンジがプレゼントした服がハンガーにかけられていた。歳頃の女の子の部屋とは思えない部屋に彼は何を買うかを頭を悩ませる。馬鹿正直にレイに聞いたとしても、彼女は必要無いと言うのは分かりきっている為にシンジが何か必要か考えていく。

そんな所にシャワーを浴び終わったレイが現れる。

「シンジ君…空いた」

「うん、わかった。じゃあ…借りるね」

とりあえずシンジは後ほど考えようと決め、彼も入浴する為に風呂





深夜、私はふと目が覚めてしまった。いつも私だけしかいない部屋は、その静寂な空間に私を招き入れる。外からは昆虫の鳴き声と風の音、内側からは私の呼吸と心臓の音だけ。そんな空間に私は、何処からが私で

何処までが私なのかを曖昧にさせる。

今私は窓側に向きながら寝ていたが、いつもなら知っている音しか鳴らない部屋に一つ違う音を鳴らす存在がいた。私はその音がなる方に、身体を向かせると椅子に座りながら腕を組み寝息をたてながら眠る彼がいた。男の子の筈なのに、私でも女の子のような可愛らしく思える顔つき。窓から溢れる月の光が彼を照らすと、その姿が少し綺麗に見えた。そんな彼はいつも私を変化させる。

いつも私を暖かな気持ちにさせる彼。いつも私の気持ちを変え  
る彼。いつも居て欲しいと思わせる彼。

私の中では、最早碇司令より大きな存在である彼。今彼が私の部屋にいる事に幸せに思っていた。昨日、彼がホテルの前に立っておりタイミング良く私が本部からの帰りに見つけたのは奇跡だったかもしれない。聞いてみれば、本来彼が住んでいた葛城一尉の家に二号機パイロットがきた為に代わりに彼が出て行かないといけなかったと聞いた時は、私の中で嫌な気持ちに満ちていた。

何故、彼が出て行かなくてはならないのか。出て行かなくてはならないのは、二号機パイロットの方でないかと。

そんな思いが立ち込められていくが、ふと私は思った。なら、彼を私の部屋に呼べばいいでは無いかと。そんな考えが出ると私は

行動に移るのが速かった。　なんだかんだと言いながらも、彼は私の部屋に来てくれた。　そして、彼はスーパーで買ってきた食材を調理してる中私は先にシャワーを浴びに。　私がお風呂場から出ると彼が作った料理の匂いが私の鼻を刺激した。　元々、私は余り食に関して興味が無かった。　だけど彼にあつてから、彼が作るご飯が美味しく感じた。　最初は、学校でお弁当を食べて。　その後は色々な所で食べさせてくれた。　そして今回、彼はカレーと言う物を食べさせてくれた。

私が肉が嫌いだと知って、肉無しのカレーを作ってくれて食べてみたら美味しかった。　辛くて身体が熱くなるのに：気持ちは暖かった。　いつも一人である部屋に、彼の笑顔を見ながら食べたカレーはより美味しく感じた。

私がそんな考えをしてる所、突如寝ている彼は魘されているのか苦しそうな顔になる。　何かを怯えているのか、それとも耐えているのかは私には分からない。　人は夢を見ると言っていたが：私は見た事が無い。　どんな物なのかはわからないが、目の前の彼を見ていて私は嫌な気持ちになる。

いつも笑顔な彼。　私の中では太陽な存在、変わって私は月。　彼が照らす光のお陰で私は輝ける。　だから：そんな彼が辛そうで苦しそうな顔を見ると私は悲しい。　使徒がくれば彼は、何も言わずに戦ってくれる。　私を守って、心から助けてくれた男の子。　そんな彼に、私はどうすれば返せるのか：いつも思う。

私は身体を起こし、ベットから下りて彼に近づく。　そして、彼の頬に右手を伸ばす。　乱暴に扱えば、簡単に壊れそうな彼に。

私の手が彼に触れると一瞬固まるが、彼は先程よりは魘されなくなつた。

だつたら、もつと私が触れれば落ち着くのでは無いかと思つて両手で彼の顔を包むようにすると、彼は少しずつ柔らかな寝顔になつていく。　私はそんな彼の変化に、心が暖かくなる。　私を必要としてくれるみたいで。

一度手を離して、彼を見ると再び魘されていく。　それを見て私は

考えた。私と一緒に寝れば解決するでは無いかと。

考えが纏まった私は、彼の組む両手を解くと力なく下がる両手を見て私は彼に近づき両脇に腕を通して正面で抱きしめる形になる。その際に彼の顔が近くになり、少し心臓の鼓動が早まるのが自分でも分かってしまった。そして彼の身体は、私の身体に密着する形になっていく為に彼が貸してくれたスポーツウェアとは比較にならないほどの彼の匂いが私の鼻を刺激した。

私は：もう幸せな気持ちだった。いつも側に居て欲しい彼が、こんなに近く私の好きな匂いがいっぱいだったから。とりあえず、余韻に浸るのは後にする為に彼を椅子から離す為に抱きしめながら持ち上げる。男の子である彼は、私でも左程苦にならない体重の為に持ち上げるが出来た。

しかし、無理に運ぼうとした為か彼は魘されて起きそうになる。

そんな彼を見て私は固まる。今彼に起きられると非常にマズイ。この状態が彼に知れたら、もしかしたら彼は私の前で眠る事が無くなってしまうと私は思った。それは避けなくてはならない。彼と一緒に入れる可能性がなくなるかもしれないからだ。

少しその体制を維持して、彼の様子を見る事にした。

少し時間が過ぎると再び彼は寝息を立て始める。それを確認した私はユツクリとベットに運び始める。彼は私より身体が小さい為に引きずる事は無かった。そして、彼を一度ベットの端に座らせてから横にさせる。ここまで来れば、後は私が彼の横で寝るだけだ。

彼を私の方に向かせて、私の右腕を枕にして顔を胸に持つていく。余った左手で彼を包むように被せ、足はお互いの足の間に片足を入れて絡ませてより身体を密着させた。

いつも誰かを守って生きてる彼。だから眠って魘されている彼は私が守る。だけど守るって言っても、今私は幸せに満ちていた。今この瞬間から時が止まって欲しいと、私は心から思っていた。

何故だろう：こんなにも愛おしく思えるのは。前の私には考えられない感情だった。だけど、目の前の彼を見てる内に些細な事だ

と思うようになった。

可愛らしい顔で私より小さな身体で、強く逞しい彼をより抱きしめる力を込める。

そんな不思議な彼の温もりを感じていく内に私は徐々にと睡魔に襲われていく。そして彼の寝息が私の子守唄の役割を果たしているのか、少しずつ意識が優しく途切れていった。

「シンジく……ん、す……すう」

☆☆☆☆

タツタツタツタツ

第3新東京市の早朝に少年が走る姿が見えた。

白く長袖長ズボンのスポーツウエアを来て、顔からは大量の汗を流し走り続けた。彼の表情からは、誰も引き寄せない真剣な表情だったが早朝の為に周りには誰もいなかった。走ってる最中に彼は、手頃な物を見つければフリーランニングを行い身体を縦横無尽に飛び跳ねていく。そして、彼は芦ノ湖に着くと目的地だったのか少しづつ歩き呼吸を整え始める。その際に上のスポーツウエアとTシャツを脱ぎ、それを近くに投げ捨てる。

呼吸が整ったのか、シンジは半裸のままその場に足を止めて緩やかに身体を動かしていく。その動きは速さは無かった。唯ユツクリと右腕を斬り払う動きにも、左足を地面を捉える動作にも四肢と胴体や頭部を一定の速さを保ちながら身体を回転させ何処か舞のよきな動きだった。少しずつ芦ノ湖の周りにある山から朝日が顔を出していく。

朝日が芦ノ湖を照らししていくと、水に光が反射して湖の周りを照らしていく。そんな中、湖の前で舞っているシンジは幻想な光景が広がっていた。

彼の周りに身体から出た汗が一つ一つの動きにより宙に舞い、何故か人の目で確認が出来てしまう時の流れに変わってしまったのか芦ノ湖から朝日の光が、宙に舞う汗を照らし出されていた。今彼は飛び散る光る滴の中心で、何を思っているのか眼を瞑りながら舞い続けていた。そんな光景を他の人間が見れば、芸術に見えたに違いないだろう。

闇雲に動いてるにも見える動作に、何処か規則性が含まれているのか無駄な動きには見られない。そして時の流れを置いていつていたのか、彼が止まると周りの時間が戻るように宙に舞っていた滴は速やかに地面に落ちた。

「…すー、は〜」

彼は深呼吸しながら顔を上に向ける。一度、二度、三度と深呼吸をした後に顔を再び前に向ける。今の彼の身体には汗一つ無く、先程の行動により全部吹き飛ばしていた。しかし、そんな彼は少しずつ表情が暗くなっていきその場に座り込んでしまった。

「はあく〜…」

（何で俺…レイさんと寝てたんだ？ いつもなら途中で起きる筈…なのに。 ヤバイ…ヤバイぞ！ そんな緩んだ事をしていれば…いつか絶対に過ちを起こすに違いない）

シンジは今朝、時間通りに起床すると何故か横になっている事に驚き自分が丸くなって寝ていた為に誰かが包む正体を知った時は二度も驚いていた。顔を少し上げれば、あどけない寝顔でまだ起きていないレイが目の前に広がっていた。彼も一緒、悲鳴を上げそうなるが抑える事が出来て寝ていながらもシンジを抱きしめて眠る彼女からの拘束を逃れた。その時に彼が離れた時のレイの寝顔は何処と無く残念そうだった。

とりあえず、置き手紙を書き残してトレーニングに向かうが彼の頭の中にはレイの寝顔が鮮明に残ってしまい離れなかった。その為

に彼は無心になろうと必死になり、トレーニング中では人を引き寄せない表情になっていた。

(……俺が寝ぼけてレイさんのベットに行っただとは思えない。だったら……彼女が俺を運んだのか……？　でも何故……レイさんが寂しくて一緒に寝ると言う行動に移すか？　否、無いな。確かに、彼女は最初に一緒に寝ようと言ったが俺はちゃんと断ったから無いしな。

……うっくん、わ・か・ら・ん！)

「ウガー!!」

分からない事に苛立つシンジは、頭を掻きながら地面に横になった。彼はいつも夜に寝ると一度深夜に起きてしまうのが、彼の習慣だった。その原因が寝ている最中に、突如魘されて少し経ってから起きてしまうのが彼の夜中に起きてしまう原因だった。しかし、本人は寝ている時に魘されているとは気づいてはいない。

「はあ……仕方ない。今回は俺の所為だ。俺が気をつけていれば起きなかった事だし……午後に不動産行かないとな。何時迄もレイさんの部屋に居るわけにはいかないし」

自分の中で気持ちを整理して、今回の事はとりあえず自分の疎かな気持ちでの事故を反省していた。実際はレイが彼をベットに運んだのだが、彼の性格上で疑いかけれる事はしなかった。

草で生い茂る地面から起き上がり、投げ捨てたTシャツを拾い上げて芦ノ湖の水で洗い流す。

パンツ　パンツ　パンツ　パンツ

洗い終わったTシャツを、宙で切りつけるように振ると鞭と同じ原理でその場に音が鳴り響く。何度か振るとTシャツはある程度水気が飛び、再びシンジはまだ少し湿ったTシャツを着込んだ。そして、スポーツウェアも拾ってはTシャツの上に着る。

「よし、帰るか」

シンジは来た道に戻るように、再び走っていく。帰りは芦ノ湖の冷たい水で洗ったお陰か、Tシャツがヒンヤリとして彼の身体を優しく冷やした。そのお陰か、帰りは少し楽に走れたシンジだった。





ガラツ

「おはヨーロッパ連合」

シンジは2年A組のドアを開けるなり、少し可笑しな挨拶をクラスメイトに届けた。芦ノ湖を後にしたシンジは、レイの部屋に戻ると彼女は起きており一度シャワーを浴びてから朝食を作った。2人一緒に朝食を摂った時に、彼は一度もレイには一緒に寝ていた話を持ち込まなかった。確認取るまでも無いと考えのシンジであったが、変わってレイは何故聞かれないのか不思議であった。

そんなこんなでレイの部屋から、学校へ一緒に登校するが日頃一緒に登校している為に誰も彼がレイの部屋から登校したなど予想していなかった。

その後続くレイも教室に入り、挨拶を済ませると2人は自分の席に座る。そして、時は流れて始業チャイムが鳴る数分前であるにも関わらず唯一人まだ来ていなかった。

ガラツ

すると、チャイムが鳴る寸前に教室のドアが開かれた。其処に立っていたのはアスカであった。

キーンコーンカーンコーン

タッチの差でアスカは遅刻にはならず、彼女の後ろから教師も入ってきた。そんな彼女の様子にシンジは、席に向かうアスカを眺めていた。

(あら…朝起きれなかったのかな？ 少し目の下に隈が…)

「起立！ 礼！ 着席！」

そんな事を思いながら、委員長である洞木の号令に従っていた。

時は昼休み、午前の授業が終わり生徒達は昼食を食べる時間になるとそれぞれで食べ始めていた。そんな中、シンジは午前中の間アスカの事を気にかけていた。授業中の彼女は、起きてはいたが教師の話聞いていないのか黒板を眺めているだけでノートを取らずボクとしていた。

時々シンジは、そんな彼女を見ていた為に心配していた。

(どうしたんだろ…ミサトさんと何かあったのかな？ そうすると俺がしやしやり出るのはなあ〜)

悩みながらカバンの中から、朝作った2人分の弁当を取り出す。シンジとレイの分である弁当箱を、机の上に置き彼女に話しかけるべきかそつとするべきか悩んでいると、レイの方から彼に近寄った。

「シンジ君？ どうしたの…屋上行かないの？」

「あ…うん、行こうか」

レイの言葉に彼は一度、アスカの事は置いて彼女と屋上に向かおうとすると2人の会話が聞こえたのかアスカが席を立ち暗い顔しながら2人に近寄り彼に声をかける。そんな2人を見ていたレイは、彼の後ろでアスカをレイなりに睨みつける表情になっていたが当の本人であるアスカは気づいてはいなかった。

「…ちよつと、シンジ」

「あつ、アスカちゃん。 なんだい？ それにしても、今日ギリギリだったね…」

「…話があるの。 少し付き合って」

「了解、じゃあ屋上で良い？ レイさんも一緒にいるけど」

「わかったわ…」

3人は屋上に向かう際に先頭にシンジ、真ん中にアスカ、そして最後にレイと言う順番で歩いていた。その時も、レイはアスカを睨み

つけていた。

屋上に着くと3人はベンチに座った。真ん中にシンジが座り、両サイドに彼女達が座った。そしてレイはシンジに弁当を渡され食べていた。そんなレイを余所に、同じベンチに座りシンジはアスカに用件を聞く。

「で…アスカちゃん。用件は？」

「……………」

アスカは昨日ミサトに言われた通りに、彼に謝ろうと口を開こうとするが何故か声が出ずに小さく口を開けたり閉めたりしていた。

そんな彼女を見て、一旦少し話を換えようとするシンジ。

「あ…そう言えば、2人って初対面だったよね？ レイさん、こちらがドイツから来たセカンド・チルドレンの二号機パイロットの惣流・アスカ・ラングレー」

彼がアスカの事を紹介した為に、箸を止めレイはシンジの隣に座るアスカに無表情な顔を向ける。

「……………よろしく」

「で、今挨拶したのがファースト・チルドレンで零号機パイロットの綾波レイさん」

「よ…よろしく、零号機パイロット」

アスカはレイの無表情を見て、何処かレイから感じる雰囲気になんか戸惑いながらも挨拶するアスカ。

「これからは、3人で使徒と戦う仲間って事で宜しく。まあ…挨拶も終わったし、アスカちゃん？ 朝ギリギリだけど…ご飯食べてきた？ 後、昼飯は？」

「わ…私、ギリギリまで寝てて食べてないけど錠剤は飲んだわ。昼ご飯は…用意してない」

明るい紅茶色の髪とは逆に、本人は暗くシンジの質問に答えるだけ

だった。そんな彼女の様子に、シンジは疑問しか無かった。何故こんなにも彼女が落ち込んでいるのか。

とりあえず彼は、自分の弁当をアスカに渡す。

「じゃあ、この弁当をあげるよ。俺、そんな腹減ってないし」

「い…良いわよ。 気を使わなく…」

キュルルルルツ

アスカは気を使うシンジに、渡された弁当を返そうとするが身体は正直なのか彼女の腹部から可愛らしい腹の音を鳴らしていた。余りにもタイミングの良さに、アスカは顔を真っ赤にして下を俯いていた。 それを見たシンジは、笑いを堪えながらも勧めた。

「く…ほ、ほら。 た、食べなよ。 口に合うかは分からないけどさ」

そんな彼を見て、羞恥心が振り切ったのかヤケになりシンジから渡された弁当を食べ始めた。 最初に御菜を口に運ぶとアスカの顔に驚きが浮かび上がった。 その後は少しずつ食べる速度が上がって、アスカは無言のまま食べ続けていた。

そんな姿に彼は、微笑んでアスカを見ていた。 彼の視線に気づいたのか、アスカはシンジの方に目を向けると微笑む彼を見て顔を赤くして恥ずかしそうにしていた。

「シンジって、料理出来るのね。 意外ね」

シンジの弁当を平らげたアスカは、腹を満たして気分が落ち着いたので先程の落ち込んでいた様子は無くなっていった。

「そう？ ミサトさんの家にいた時は、毎度作ってたし幼い頃に興味があったから作れるようになったよ」

ふとシンジがミサトの家の話を出すと、再びアスカは表情に影が差し込み顔を向かせてしまう。 そして、彼女は決意して顔を上げてシンジに言おうとした。

「あ…あのね、シンジ。 昨日、私が行った事は冗だ…」

しかし、そんな彼女の言葉を遮るようにレイがシンジに話しかける。

「シンジ君、もう少して休み時間が終わってしまうわ」

「あ、そうだね。 あれ？ アスカちゃん、ごめん。 途中で切っ

ちやつて、もう一回良いかな？」

シンジは申し訳なさそうに、アスカにもう一度言ってもらおうとしていた。しかし、彼女は決意した炎が鎮火してしまったのか再び落ち込んでしまった。

「いや、何でも無いわ。弁当、ご馳走様」

空になった弁当をシンジに返したアスカは、その場を後にした。

そんな彼女の後ろ姿を見た彼は首を傾げるが、その横にいたレイは少し微笑んでいた。

☆☆☆☆

放課後、シンジはカバンに必要な物だけを入れて一度レイの部屋に戻ろうとしていた。

「シンジ君、帰りましょう」

「そうだね、一度レイさんの部屋に行って荷物取りに行かないと…」

教室には、残り彼等しか居らずレイはシンジと帰る為に声をかける。だが、彼の言葉にレイは違和感を感じた。

「…どうして荷物を取りに行くの？」

帰る準備が出来たシンジは、教室のドアに向かって歩き出しレイもそれに着いて行くように歩き出す。

「これから不動産に行くからさ、それで部屋が決まり次第でそこで生活するから手っ取り早くと思ってさ」

レイは彼の言葉に少しショックを受けていた。この先も、彼は自分の部屋に居るものだと思っていたのが1日だけだと分かれば彼女は落ち込んだ。しかし、レイは彼の後を追いかけてながらも諦めな

かった。

「その必要は…無いわ。 これからも私の部屋に居ればいいわ」

「いやいや、そこまでお世話になる訳にはいかないよ。 レイさんだって、元々一人暮らしでしょ？ 落ち着けないでしょうよ、他の人間がいたら。 それに男だし」

それでもシンジは、レイの為の事を思つての言葉だった。 彼女に今までの生活にいち早くでも戻ってもらおうと。 しかし、レイは食いやがる。 彼女はシンジがカバンを持っていない左手を後ろから両手で掴み、一度彼の歩きを止めた。 その行動にシンジは、レイの方に振り返る。

「私は…シンジ君に居て欲しい。 1人は…寂しいの。 だから、もう少しでも良いの。 居て…」

悲願するようなレイにシンジは戸惑っていた。 確かにシンジも彼女から好意を向けられているのは自覚していたが、彼女にこの様な表情をさせるほど居て欲しいと分かれば彼もこれ以上に悲しい顔をさせたく無いと妥協する。

「はあ…なら、条件。 一週間だけお世話になるよ。 それ以上は譲れ無いよ、レイさん？」

彼の妥協案にレイは納得したのか、悲しそうな表情から嬉しそうな表情に変わっていった。 それを見たシンジは内心で溜息を吐いていた。 何処までも甘い自分に。 だけど、彼女の嬉しそうな表情を見て少し良いかと思っていた彼がいた。



「なあゝにいゝ！ 謝れないイゝ!？」

その日の夜、ミサトの家でアスカの報告にミサトが絶叫していた。  
「ナアンデエツ!？」

最早、日本語が怪しくなっているミサトだったがテーブルの向こう側に座るアスカは俯いていた。彼女も自分の中で、もう少し勇気を出していれば言えたものを弱い自分に負けてしまった事に悔やんでいた。彼女は、人生の中で男性に謝る事が無かった所為か同年代と言えど躊躇してしまった。

そんな弱ったアスカの姿に、我に返ったミサトは溜息を吐きながら彼女を応援した。

「まあ…アスカ、とりあえず頑張りなさい。貴女にも、事情は有るのは理解してる。だけど時間置く度に言えなくなってしまうから：早くね」

ミサトの言葉に頷くアスカ。しかし、ミサトの内心では血涙を流していた。

(…くそ、延長戦か。ぐっ…私の活力がゝ!!)

ミサトはミサトで一切ブレてはいなかった。

☆☆☆☆

その後もレイの部屋にお世話になっているシンジは、ホームセンターなどにより色々と買い込んでいた。あの部屋に明るさを取り入れる為に。

床に絨毯を引く為に、その下にクッションとしてスポンジ製のパズ

ルを何セットか購入。壁には剥き出しのコンクリートを見えない様に、白のウォールステツカーも購入していく。その他にも色々を買って、その日にレイの部屋を改造していくシンジ。

「終わった〜」

完成したのか、彼は床に敷いた絨毯に横になり身体を伸ばしていた。

今のレイの部屋は、剥き出しにされたコンクリートが見えない様に床にクツションと絨毯を弾き壁と天井にはウォールステツカーを貼っただけでも、前の部屋とは思えない程に明るい部屋になっていた。

「これが…私の部屋」

レイは変わった自分の部屋に驚いているのか、キョロキョロと見渡していた。そんな彼女を見て彼はクスリと笑う。

「手軽くやったけど、この部屋に明るさが出たでしょ？ 前の部屋だと寂しく思えるほど何も無かったからね」

「ありがとう、シンジ君」

今まで自分は暗い世界だと思っていたレイだったが、彼の手によって今の部屋に明るさが灯り暖かい気持ちを抱くレイだった。

その後は、いつも通りにシンジが料理して風呂に入り就寝するが今の部屋になったお陰で床で寝れる様になって彼は購入しておいた寝袋に身を包んでいた。

「じゃあ、お休みなさい…レイさん」

「お休み…なさい、シンジ君」

この後、計画的犯行のレイは床に眠るシンジをお姫様抱っこして自分のベットに運んでは再びと一緒に寝る事となっていた。

そんな彼と彼女の生活は続いた。時にレイの我儘と一緒に風呂に入ろうなど（結局、シンジは服着たままでレイの頭を洗ってあげただけ）、一緒に寝て欲しいなど（彼が断ったとしても、結局シンジが寝た後にベットに運ばれていた）と言った事があった。レイは心から安心して信用している彼が、いつも自分の部屋にいると思うと彼に甘えたいと言う衝動に従っていた。



しかし、そんな幸せに感じていた時間も刻一刻と過ぎていきラスト1日になっていた。

「あく、明日で終わりだね」

「……そうね」

残り明日までしか居ない彼と、明日になれば彼が居なくなることを拒む彼女。 そんな2人は、レイの部屋での最後の夕食を食べていた。 予め、彼はレイの部屋を出た後に直ぐ部屋に有り付ける為を用意していた。 彼も彼で、レイとの生活は楽しい物と感じていた。

色々と男としての威厳などが失ってしまったが、色んな彼女を見て良かったと思っていた。

逆に彼が部屋に来るまでは孤独しかなかったレイは、シンジと生活して寂しさが無くなり彼女なりに楽しかった日々だった。 そんな其々の思いに浸りながら夕食を食べていると、玄関から来訪者だと思われるノック音がレイの部屋に鳴り響く。

ガンガンガン

彼女の部屋のインターホンは、壊れている為に玄関をノックする方法でしか無かった。

「誰だろ？ 俺……出てくるね」

「ん……」

レイは彼の料理を黙々と食べながら返事をして、シンジは箸を置き玄関に向かった。 ドアには覗き穴が無い為に、防犯の為にチェーンをしてドアを開けて来訪者が誰なのか確認しようとした。

ガチャッ

「どなた様……」

バキヤッ

「……はっ？」

すると、ドアを開けて向こうを覗こうとしたシンジだったが開かれたドアを掴み凄まじい力でドアを引っ張った所為でチェーンは引きちぎられた。 そんな光景に唾然となる彼。 そして、全開に開かれたドアの向こうから2つの影が彼を襲った。

「シンちやくくん!!」

「シンジーーーー！」

ガバツ ガシツ

ドンツ ガシツ

上からミサト、アスカがシンジに抱きついてた。ミサトは彼を正面から抱きしめ、左手は脇を通し右手は彼の頭を自分の顔に寄せるように抱いた。アスカは彼の腹部に自分の胸を押し付ける形で、ハグするように抱きしめていた。

「はしゃみわなやたらっさこねたはあこてたのっ?!?!?!」

ミサトに顔を近づけられ自分の右側には、彼女の顔の温もりを感じていた。次に腹部には、女性の象徴と言える物が柔らかく意外にもサイズが大きかったのか彼の腹部に押し付けられて形を変えていた。そんな男には幸せな体験を彼は送っていたが脳の処理が追いつかなかった。最早、彼の言語は崩壊していた。

「お願い、シンちゃん！ 帰ってきて！ もう貴方がいないと駄目なの！」

「シンジ！ 素直になれなくて…ゴメン！ 許して！ そして帰ってきて、アンタがいないと駄目なのよ！」

そんな2人は彼に悲願するように頼むが、未だに処理が追いついていないのかアワアワとなっていた。側から見れば、男であれば羨ましく思える言葉を美女と美少女の2人からシンジは言われていた。そして、騒ぎに駆けつけて部屋からやってきたレイはそんな光景を目にして危機感に襲われたのか彼の右手を取り、2人から奪い返すように引っ張る。

「駄目…シンジ君は私の部屋で住むの」

「レイさん!!? なたやにしきてなはひまつ!!?」

未だ言語が戻らないのか、彼は3人の女性に引っ張りだこになっていた。ミサトとアスカも負けられないと、彼を部屋から出そうと引っ張る。

「レイ！ シンちゃんがお世話になったわ、ありがとう！ でも、今からウチに戻ってもらうから！」

「そうよ、ファースト！ シンジには帰ってきてもらうわ！」

「イヤ。許されない、シンジ君はこれから先私と一緒に住む」

「イタタタツ」

両方から引つ張られて、痛む右肩を見て少し冷静になったシンジは騒ぐ女性3人の中で呟いた。

「なんだ……これ」

そんな言葉を呟いた彼は、玄関で争う3人に巻き込まれていた。

人には意思がある。

人は一つの体に一つの意思をもたせている。

例外が存在するが、人類の9割9部9厘は一つだけの意思。

だが…人に近い存在である人造人間には意思は無かった。

人から人が生まれる際には、その赤ん坊には意思が宿る。

しかし、人が人に近い物を作り上げても…意思は宿らない。

オカルトなどで人には、《魂》と言う物が宿っている為に死んでしま  
うと身体から離れるとも言われている。

しかし、人が生きたまま《魂》《意思》が離れてしまったらどうなっ  
てしまうのだろうか？

そして…離れたその物は他の器に入れる事が出来るのか。

人が人に近い物を作り上げ、人の《魂》を人に近い物に入れる事が  
可能か…。

もし…それが可能となったら人に近い物に入った人の《魂》はどう  
なってしまうのか…。

…それは誰も知らない。

バキッ

ドカツ

メキヤッ

ゴシヤッ

4体の使徒に四方から凄まじい数の攻撃が、容赦無く襲いかかる。一体一体の使徒の動きが早く、使徒からの猛攻の中で反撃をするが初号機の攻撃は空を切るだけだった。

『シンちゃん!! 逃げて! お願い!!』

エントリープラグ内に、ミサトの必死の声が鳴り響く。だが、彼の耳には届いておらず…今の状況を覆す為の事を考えていた。

(どうする!?! 今のままじゃ、やられてしまう! どうにかコイツらを止めないと…。 だけど、分裂してからの使徒の動きが早過ぎてエヴァが追いつけない! ヤバイヤバイヤバイヤバイ!! 考える考える考える!! 絶対に何かある筈だ!)

少しでも使徒の攻撃に耐えて、突破口を見つける為に初号機を身を小さくして防御体制になっていた。だが、それを見た使徒は4体から2体になり使徒の攻撃を重くしてきた。そして、2体になった使徒は幾分か動きが遅くなるが初号機が反撃に移ると再び4体に分裂してヒラリと初号機の攻撃は躲された。

(駄目だ駄目だ駄目だ!!! 油断も隙もなく反撃する暇も与えてくれない! 残り内部電源も心許ない…このままだと負ける!)

……負ける? あれ……今俺が負けたらどうなる……? 使徒が第3新東京市を襲い、ネルフ本部まで攻め込まれたら……人類全員が死ぬ? 皆…ミサトさん、アスカちゃん、レイさん、リツコさん、加持さん、マヤさん、トウジ君、ケンスケ君、冬月先生、お…父さん。全員が死ぬ…?)

彼の心の中は少しずつ、絶望の感情に満たされていく。そして、初号機の内部電源は呆気なく時間が来てしまいエントリープラグ内は暗くなり、最後の使徒の攻撃により初号機は横たえてしまう。

ガチャガチャガチャガチャ



光が灯る。だが、不思議な事に普通は起動された初号機の眼は白なのだが紅く灯っていた。

ガキヤツ

顎のジョイントが初号機によって自力で破壊され、立ち上がり歯を剥き出して海全体を震わせるほどの雄叫びを空に向かって吠えた。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

そんな初号機の姿に何処か悲しみに満ち溢れ、泣き出す人の様な姿にも見えなくも無かった。そして、吠え終わった初号機は使徒に向かって走り出していった。

☆☆☆☆

ミンミンミンミンミンミー

パタパタパタパタ

変わらない季節での外で鳴き続ける蝉の声。そんな中、琵琶湖の側で四角形のスチール缶を置いて中に藁を敷き火を起こしていた。

業務用の油が入った缶を中身を取り出し下に藁を追加で入れられるように少し大口の空気穴を開ける。そして上の蓋は全開に開かせて網を乗せて完成。即席な炙れる物をシンジは、ミサトの家で作りに上げて琵琶湖まで持ってきていた。そして、強い火を起こす為にスチール缶の空気穴に向けて団扇で扇いでいた。

「ふ〜…こんな物かな。 あ〜…あちい」

麦わら帽子を被り、周りの木々がある為に虫に刺されない様長袖長ズボンの格好だった。彼はスチール缶と共に持ってきたクーラー

ボックスから捌かれてある程度調理された鰹の切り身を取り出した。その鰹にバーベキューで使われる串を3本挿してから網に乗せて、団扇で扇ぎ火を調節しながら炙っていく。皮側を炙る際に、苦味を出さない為に焦がさないように彼は炙っていく。その工程で焦がさないようにして、炙らな過ぎると美味しく無いので注意。

そして皮側が炙り終われば身の方も炙る為にひっくり返すが、身の方は焦げ目を余り付けない為に網から離して遠火にする。全体が炙れたのを確認したシンジは、炙った鰹をすぐに氷水に入れて冷やす。(串ごと) そして、串が冷えた所で回しながら引き抜く。

そんな工程を結構の量の鰹を炙って冷やしての事を終えると、登山に使われそうな大きなバックからレジジャーシートを取り出して地面に敷く。その上にキッチンペーパーを置いていき、氷水に入れた鰹をクーラーボックスから取り出す際に皮や身についた余計なコゲを落としながら出していく。キッチンペーパーに置いていく鰹は、天気の良い太陽の光で水気が飛んでいく。

水気が無くなった鰹を手にはラップを敷き、ラップの上に薬味をパッと敷いてから鰹を乗せ追加に鰹にかけるように再び薬味をかける。その後、ラップで鰹を包み込んでさらにアルミホイルで巻いた。それを新たな氷水が入ったクーラーボックスに入れていく。

そんな作業を1人でやっていく内に、最後の鰹を片付けようと手を伸ばすと彼の近くの草むらから音が鳴る。

ガサガサガサ

その音を聞いたシンジは、念の為に警戒心を高めて草むらを見ていた。すると、草むらから可愛い動物が現れる。

「にゃ〜」

「ミーミー」

猫3匹が草むらから現れた。1匹が親猫で、後に続く2匹の子猫。それを見たシンジは、警戒心を解き猫3匹の姿に顔が緩む。

「鰹の匂いに来てきたのかな〜?」

(……キヤー!? ナチュイイ!! 《造語 ナチュラル可愛いの意味》それも子猫まで〜!)



少しずつ近寄る3匹の猫達に、荒げたい自分を抑えていた。彼は動物なら殆ど好きであるが、一番好きなのが猫であった。黒猫の親子は、ある程度の距離を彼から取ると猫3匹はシンジを見ていた。だが、子猫2匹はお腹空いているのか彼に近寄ろうとするが親猫が首元を加え自分の横に運ぶ。そんな愛くるしい光景を見て、身体を震わせるシンジ。

（くそー!! 欲望のままにモフモフしたい! 愛でたい、撫でたい、モフモフしたい!!! まあ：餌を貰いに来たんだろうな。一本ぐらいやるか：）

最後に残った鰹を取り出して、バックからナイフを取り出して猫達が食べやすい大きさに切り分ける。最後に残った鰹はまだ薬味をかけていない為に猫も食べれる物だった。そして、その場を立ち上がり少し猫達に近寄る。すると親猫は警戒し始めたのか、彼の動きを観察するようになった。それを見たシンジは、少し笑いながら鰹が乗ったアルミホイルを猫達の近くに置くと自分は再び元の位置に戻る。作業が終わったシンジは、片付けをしていると猫達は鰹に群がり食べ始めていた。そんな光景にホッコリしながら片付けて、あの程度終わると後ろから鳴き声が聞こえた。

「にゃ〜」

「ん?」

突然後ろから猫の鳴き声に振り向くシンジ。するとそこには、触れられるほど距離まで来た猫達がいた。親猫はシンジを見上げていると、彼の足元に近寄り身体を擦りつけてきた。それに続く2匹の子猫も、親猫とは違う足に近寄り身体を擦りつけてきた。今この瞬間、シンジは喜びに満ち溢れていた。第3新東京市に来てから猫に触る事が無かった所為で、より喜びが強かった。相手は野良の為に自分から近寄れば逃げてしまうので、眺められれば満足と考えていたシンジだった。しかし、猫の方から近寄られて触る事を許された。

とりあえず片付ける手を止めて、しゃがみ込んで猫に手を伸ばすと3匹は逃げる様子も無く彼に懐いていた。

ナデナデナデナデ

親猫を撫でられ彼は、心の中で歓喜に溢れていた。すると、残った子猫達が彼の胸に向けて跳んだ。

「ミー」

「ミ〜」

「おっ!？」

突然の事に驚きながらも、子猫2匹を優しくキャッチする。抱えられた子猫達は、より一層に彼の胸に自分の事を擦りつけるように懐いていた。そんな姿に彼は、メロメロになりながらその場に胡座をかいて足の中に子猫達を収める。手が空き親猫の喉元に手を伸ばして撫でる。

ゴロゴロゴロゴロ

そんな音を立てながら為すがままに居る親猫。静かで自然に溢れた場所に好きな猫と戯れているシンジは幸せに浸っていた。そんな中、シンジは可愛らしい猫達を写メする為にポケットから携帯を取り出して猫達を撮影する。シャッター音が鳴るが、そんな音にも驚かずに親猫はシンジの側で横になっており子猫は既に寝ていた。

3匹の姿に彼は溜息を吐く。

(いや〜…満足! 久々に触ったわ〜、心安らぐわ〜。後は帰るだけだけど…元鞘に戻ったって言うべきだろうけど。あの人達は…俺の意見を聞かないでやんの)

シンジは心の中で、そう思いながら上を向き青空を眺める。

レイの部屋に襲来した2人とレイが、彼を引っ張りあつて時の事。

「レイ! これは上官命令よ、大人しく離しなさい!」

「駄目…断わります」

「諦めなさいよ、ファースト!」

そんなやり取りをしている3人。間にいる彼は、引っ張られてア

くどしか言えないでいた。場が膠着状態になり、どちらも引かない状況の中でミサトは提案出す。

「じゃあ、シンちゃんに決めて貰いましょう。それなら納得できるでしょ?」

「賛成」

本人の意思も関係無く話しが勝手に進んでいく。3人は一度彼を離して、彼の意見を聞こうとする。だが本人は呆れ顔でいたが、女性3人は気にせずに行った。

「シンちゃん、どっちにする? 私の家か:レイの部屋か、住むならどっち!」

力強く言うミサト。他の2人も彼の言葉を待っているのか真剣な表情。しかし、なんと無くテレビ番組使われていそうなセリフにシンジはミサトのセリフにイラツとする。

「あのね:言う必要ないでしょうよ。今日でレイさんの部屋から出るし、新しく部屋も見つけたし。俺がどっちにも付かずで話は終了でしょ?」

「駄目、決めて」

息の合わせた3人のセリフに溜息を吐くシンジ。彼も男子中学生であるが、一人暮らしに苦は感じさせない家事が出来る能力を持っている男の子。最初からミサトの家で住む事に、躊躇していた彼だったがレイと同じように一人暮らしが出来る機会に喜んでいたシンジ。

彼も彼でミサトもレイも女性にも関わらずに、羞恥心関係無い格好で部屋にいるものだから彼の気疲れは加速していた。確かに、信用してくれてる事には嬉しかったが限度があったのだ。シンジも男である為に、欲情しない訳では無い為にそんな赤裸々な格好での日々が修行に近かった。

「駄目も何も意見が分かれてるんだから、手っ取り早く本人である意見を出してるんでしょうよ?」

「駄目よ、シンちゃん! 貴方が居ないと私の日々の癒しが!」

「シンジ! 悪かったわ、あの時の言葉は冗談だったの!! ゴメン!

そして、助けて！ あの家、どんどんゴミ屋敷化して黒い奴が!!」  
「…シンジ君はこれからも一緒に住むの」

「駄々目、はい決定！ 終々了々、解々散々…」

最早悲願するように、腹部にミサトが抱きつき涙目で見つめアスカは右腕にレイは左腕にこの世の男性が見たら、シンジを亡き者としようと襲いかかるであろう光景。だが、彼は自分の意見を曲げずにいるとミサトは2人にシンジにとって余計な事を言いはじめめる。

「…ねえ、貴女達。 ここは手を組まないかしら？ 私達はシンちゃんと住みたいでしょ？ なら全員で住めば解決しない？」

「おいコラ、三十路前」

ミサトは2人を味方につける為に（最早なりふり構わず）、シンジを自分達と住ませようと提案する。 流石の彼もミサトの言葉にタメ口。 それを聞いた2人は、目を合わせてアイコンタクトをとったのか頷き合うと息を合わせて行動に移る。

アスカとレイは、彼の両腕を広げさせてシンジの腕を持ったまままで右回りする。

「what? what! what!」

為すがままに彼女達に回される焦る彼。 ミサトは一度抱きしめる力を抜いていた為に、彼女の腕の中で彼の身体が回転して背中が見えると再び抱きしめる。 左程重くない彼の身体を脇の下から腕を通して持ち上げて、彼の胸の前にミサトのガツチリと拘束した両手。 彼の両腕を後ろに持っていきアスカがホールド。 浮いた両足を脇に抱えるレイ。 女性3人に拘束されて、余りに異様な格好にシンジは冷や汗をかく。

「…ちよつと、君達…落ち着こうか。 なんだい？ これ…最早技だよ。 何処かのプロレス技の合体技…」

そんな彼の言葉にミサトとアスカはニンマリと笑い、レイは少し笑った。 何処か送還される気がしないでもない予感に駆られるシンジ。

「意見が3対1で…皆で住む事になりました」

「わく（棒）」

「フアツ!?？」

シンジは彼女達の企みを分かってしまい、驚き余りに可笑しな驚き方になってしまった。最早彼は完全拘束されて抵抗する手段が無くなってしまった。彼女達はシンジを連行していく。

「じゃあ…出発！」

「おー(棒)」

キィ

開かれる玄関。

「ちよつ！ 待てー！ フザケンナ〜!! なんだ、この数での実力行使は！ 俺だって男してやりたいこと一つや二つあるんだぞー！

おいコラ、聞いてんのか！ まってー！ 本当に待って!? あーーー  
……。 人の！ 人の!! ひ・と・の・は・な・し・を・聞つけー  
！」

ボタン

静かに閉められ、その部屋には静寂が立ち込めていく。

「はあ、本当になんだよ…あれ。俺に選択権なんか無いやん。

くそ…なんで俺の周りの女性は、男である俺と住みたがるのかねえ  
…」

あそこまで自分を無力化され、街中で運ばれている自分を見る通り過ぎる通行人の視線や通り道の商店街の人間達にはニマニマされるとされる始末。 恥ずかしさの余りに、ミサトの家に着き降ろされた瞬間に居間の隅で少し落ち込むシンジであった。

「いつか絶対仕返ししたるぞ、くつくつくつ」

彼がそう3人に仕返しをする事に悪い顔しながら決心すると、足の中で寝ていた1匹の子猫が可愛く欠伸をして起き始めては近くにあった片付けていなかったナイフを口に咥えて草むらに入ってしまった。

「あつ！　ちよつ、待て！　子猫！」

片手に未だに眠る子猫を親猫の横に置き、シンジはナイフを啜えた子猫を追いかける為に草むらに入ってしまった。子猫を追いかけるシンジを眺めながら、親猫は彼に任せたと云わんばかりの鳴き声を一つ。

「にゃ〜〜〜」

ガサガサガサガサ

「つ〜か〜ま〜え〜た〜」

「ミーミー」

シンジは子猫を追いかけて、芦ノ湖から離れ山の中にまで入っていた。その為、整理されていない山道を20分ほど子猫との追いかけつこのお陰で彼は汗だくになりかけていた。捕まえた子猫からナイフを取り上げ、ポケットに入れ子猫を抱き上げて来た道を帰ろうとする。

「あ〜…疲れた。流石に山道は疲れんな。まあ、後は戻って帰るか。　はあ、一人暮らしはもう無理なのかな…」

彼は男性なら憧れるような状況にも関わらず、愚痴を漏らしていた。

それもその筈、再びミサトの家に戻ればゴミ屋敷一步前までに汚れており仕方なく彼が片付け（他の3人にもやらせたが、片付けがした事が無いのか要領が悪くより長く時間がかかっていた為にシンジ1人でやる羽目に）をした。その後は良い時間になれば食事を作るがミサトのツマミやアスカの要望など比較的レイは何も言わず（肉関係含まれない）、シンジは3人それぞれのご飯を作る事になった。

そんなミサトの家に、男1人女3人での生活を数日過ぎると彼はより一層に頭を抱える事に。ミサトは彼が居なかった間のストレスが溜まっていたのか、シンジに酒のツマミの要望が多くなった。ア

スカは家事の能力が無いのか食事や洗濯など全部が、シンジに任せつきり。(彼女の洗濯物を洗って、洗い終わり乾いた下着を畳んでい  
る時には少し彼が涙が出そうになっていた)そして、レイが2人よ  
り頭痛を抱える事になった。ミサトの家には部屋が3つしか無く、  
4人では溢れる所シンジが居間で寝る事になった。元々彼は私物  
が少なかつたので、シンジは苦では無かつたが何とレイはシンジの服  
などを自分の部屋に持っていく行動をし始めた。

最初彼は彼女の行動に理解が出来なく、レイに聞くと本人はスラツ  
と答えた。

「シンジ君の匂いが付いた服を嗅ぐと落ち着く」

その答えに最早、椅子に座っていたシンジはテーブルに頭を打ち付  
けた。恥じらいも無く彼女は、シンジの匂いを好み彼の停止が無け  
れば彼女に服を持って行かれることに。(嗅ぐだけでは飽き足らな  
いのか、自分で着ることも多数)

そんな彼女達とこれからも暮らしていくのかと考えるシンジは、良  
心の塊と呼ばれても可笑しく無い彼にも疲労の影が見え始めていた。  
「:..なんだろう、俺がオカシイのか? 最早、周りに振り回され過ぎて何  
も解んなくなってきたぞ:..:うん?」

そんなシンジは子猫を抱えながら、来た道に戻っている所に廃墟に  
なっている建物を発見した。寂れており何処と無く異様な雰囲気  
を漂わせた小屋は、山の中で静かに佇んでいた。

「へえ:..:こんな所に小屋なんかあるんだ。なんか怖そうだけど」

そんな事を言いながら、シンジは廃墟になった小屋から離れ芦ノ湖  
に戻っていった。シンジが去っていたその後、小屋の中からは物音  
が小さく鳴らしていた。

「う〜ん…上手い!」

「本当、美味しい」

「この鰹のタタキ、良く出来てるなあ〜」

場所はネルフ本部の発令所、そこで3人のオペレーターである日向マコト、青葉シゲル、伊吹マヤが簡易テーブルを立てて鰹のタタキを食べていた。

「だけど、あの子本当に優しいなあ。元々葛城一尉の為に作ったにも関わらずに、俺らまでにくれるなんて」

味を楽しみながら、日向は彼の感想を述べていた。そんな日向の感想に、他の2人も頷いていた。シンジは芦ノ湖で大量に鰹を炙っていたのは、ネルフ関係の人間や親しい人間などにお裾分けする為であった。

「もう彼は嫁に出しても文句無しだな。中学生で男子にも関わらずに、この料理の出来栄え。性格も良く顔つきも中性的で可愛らしい。あの子と付き合える女の子は幸せだろうな」

青葉が鰹のタタキを食べながら喋っていると、ふと日向が気になった事をマヤに問いかける。

「そう言えば、伊吹ってこの中で一番彼と親しいよな? シンジ君とはどんな感じなん、伊吹?」

「えっ!? いや、シンジ君とは何も…。いつも優しくしてくれて、先輩と一緒にお茶会開くぐらいよ」

「ぶっちゃけの話…マヤちゃんって、彼の事はlike?love?どっちなんだ」

いきなり青葉からの恋話に、顔を真っ赤にするマヤ。

マヤは彼と会うまでは、男性との関わりが無く最低限でしか接触が無かった。そんな所にシンジと出会い、彼の触れ合いで自分より歳下にも関わらずに好意を持ってしまう彼女。歳にあってはいい彼の精神年齢に包容力がある男の子。



「いいいや!? シンジ君は良い子だし、私のような人間じゃあ…つり合わないと思う。それに私と彼じゃ歳が離れてるから…」

最初顔を紅くしながら言うマヤだったが、少しずつ落ち着いていくと彼女は変わって落ち込んでいく。彼女は確かに彼に好意を持っているが、完璧に近い男の子に自分とは合わないのではと思いい気分を落としてしまう。そんなマヤの様子に慌て始める2人。

「いやいやー！ 伊吹も悪くないなら、彼にアプローチして行くのも手だと思うけど」

「そうそう、マヤちゃんは可愛いだから自信持ちなよ」

その後も2人はマヤを励ましていた。



「うまいな」

「ああ…」

司令室でゲンドウと冬月が、シンジのお裾分けを食していた。暗い部屋で男性2人は、面を合わせるように椅子に座っていた。

「やはりシンジ君はユイ君に似ているな。大学の時も、作りすぎたのを私の所まで持ってきてくれて笑顔で渡してくれたもんだ。それが息子であるシンジ君も、これを私達に持ってきて笑顔で渡す所なんてそっくりだ」

「…そうだな」

冬月は昔の事を思い出しながら、鰹のタタキを味わっていた。ゲンドウの方は実の息子が、ここまで出来る人間だと思っていなかったのか少し言葉に間があった。だが、シンジが幼い頃の事を思い出せ

ば昔から何でも出来た子供だと思ひ出すゲンドウ。

「最早…あの子は婿でも嫁でも行けるな」

「冬月やめておけ。意外に洒落にならないぞ、あいつは…。最近のシンジを見ていると活発なユイにしか、私には見えないでいるのだから」

「そうだな、シンジ君は相手が男でも女でも関係無さそうに見えるかな。実際に今は…葛城君の所でレイも含め4人で住み始めている。彼は男であるのに、浮いた話すら出てこないし良く出来た子供だ」

当の本人であるシンジは、女3人の相手に頭を抱えている事は周りの人間は知らない。

「本当に彼は…関わる人間を変える力を持っているな。レイも然り国連軍やネルフの人間達も最初は、他人との距離を測るのが当たり前だったがあの子が介入すると全員が距離を縮めているのだから」

冬月が言った通り、彼が来る前のネルフの職員や国連軍の人間などは他人との距離を取っていた。それとは変わり、レイは他人との関わりを持つとうとしなかった。そこにシンジが介入すると、周りの人間は彼に集まり自然と他人との距離を縮めていた。

「…そんなシンジに隠して行かなければならないと思うと、私でも心苦しい」

「《人類補完計画》…。シンジ君がこの計画を知ったらネルフ…いや、大人達を嫌うかも知れないな」

それから2人は、司令室で会話無く鰹のタタキを食べ続けた。

☆☆☆☆

夜、ミサトの家では4人揃って帰ってきていた。

「 」

アスカは脱衣所で服を脱ぎながら、上機嫌なのか歌っていた。他にレイは今でペンペンを正座した脚の上に乗せてお腹を撫でており、ミサトはリビングのテーブルの側にある椅子に座り鯉のタタキを食べながら缶ビールを片手に上機嫌で飲んでいた。残り1人、シンジは夕食で使われた食器を流し台で洗っていた。そんな光景を第三者が見れば、シンジの立ち位置が彼女達の親に見えなくも無いだろう。

ガラツ

「 」

服も下着も身に着けた物を脱衣所に置き、アスカは一切身につけず風呂場に入っていった。

『あつ~~~~い!!』

「うん?」

食器を洗っていたシンジは、風呂場から叫び声が聞こえ振り向く。

ダダダダダッ

ターン

「あつ~~~~い!! シンジ!! 何よあれ!? すっごい熱いじゃない!」

アスカは行き良いよく、リビングと脱衣所と仕切るカーテンを開けてシンジに文句を言う。

「だから、言ったでしょ? 入る前に良く混ぜてから入れよと」

シンジは一旦洗っていた食器を流し台に置いて、最後に入浴する為か椅子の上に用意したバスタオルを持ちアスカに近寄り体に巻いてあげた。その行動にアスカは、今自分の姿が産まれたての姿だと気

付いて悲鳴を上げそうになるが目の前にいる彼は気にしていないのか表情一つ変えていなかった。

「それに女の子が男の前で、スッポンポンで出てきちゃダメでしょ。」

はい、脚に冷えたお絞り。 熱かったんでしょ？ 跡になるから冷

やしときな…やれやれ、待ってて羽織れる物持ってきてあげるから」

シンジは冷えたタオルを彼女に渡してリビングから離れ、アスカの部屋に向かい羽織れる物を取りに行く。 それを静かに見守ってしまつたアスカは、ミサトの方に顔を向けて問いかける。

「あれ…ミサト？ 私つて、そんな魅力無い…？」

アスカの反応は当然と言える。 彼女なりに自分の身体には自信があつたのだが、異性であるシンジに裸を見たにも関わらずに平然とされ少し落ち込むアスカ。 バスタオルで隠された身体から出た手足だけでも、彼女の美貌はあつた。

布が太股の真ん中より少し上から、下に沿って健康的な太股と脛脛。 女性ならではの丸みを帯びた形状、 太過ぎず細すぎない美脚。

バスタオルで隠された胸は程よい大きさが実っており、その上の肩と腕まではスラツと流れるような肌で美しさがあつた。 そして今髪留めが無い為に髪が下ろされており、今の彼女には何処と無く大人の女性と変わら無い美貌と幼い雰囲気相まって男性が見れば興奮物であろう。 しかし、シンジには何の反応も見られなかった。

「シンちゃんも、あそこまで見たのにあの反応じゃあ…見た目から言わせてもらおうと最早お婆ちゃんよね。 世話好きな…まあ、アスカ。

気にしないで、シンちゃんが変わつてただけだから」

「うう…なんか納得できない」

ミサトは軽く励ますと、アスカは納得出来ないと言わんばかりの表情しながら椅子に座り脚を冷やしていた。

(もしかして…シンちゃんつて、不能じゃないわよね？ 前から私がちよつかい出してる時も、そんな反応しなかったし。 …いや、でも前に事故で私の半裸を見せた時顔を赤くしてたわ。 後、ちよつかいじゃなく人肌恋しい時にシンちゃんを後ろから抱きしめた時も恥ずかしそうにしてたし。 うーん、わからん。 シンちゃんのツボが

…)

ミサトはビールを飲みながら、考えていたが結局解らないでいた。

アスカの部屋に足を運び、シンジは部屋に入り1人になると突如両手で頭を抱えてしやがみ込んでしまった。

(又アアー!! モロに見てしまった! やめてくれよ! 出しようにない俺の性欲を刺激するの! だから嫌なんだよ、彼女達は良いだろうけど俺が辛いんだよ! 表に出せない性欲がががががががっ! 何だよ! 俺の事を男として見てないの? それは落ち込むレベルだわ:、とりあえず気を取り直してなんか着れる物持っていけないと)

その後、シンジはアスカの部屋にあるダンスから下着と羽織を取り出して彼女に渡しにいった。

☆☆☆☆

ガヤガヤガヤガヤ

昼休みの第一中学校。生徒全員が昼食で自宅から持ってきた弁当や購買にあるパンなどを購入し、各自それぞれで食事をとっていた。

「なんやてー!?!」

「シンジ! イマ、ナンテイッタ!?!」

シンジ、トウジ、ケンスケは屋上に移動して、弁当やパンを食べていたがシンジの発言に驚きの余りに声をあげる2人。ケンスケは最早片言だった。

「だから今は4人で暮らしてるよ。俺とレイさん、アスカちゃんにミサトさんで」

今この場にはレイの姿は無かった。この日はネルフで零号機の実験により休みだった。

「なんて羨ましいんだ…シンジ変われ！」

「せやなあ、オナゴ3人に囲まれて暮らせたなら幸せやろうなあ…シンジ。どうなんや？」

凄い表情しながらケンスケは彼に迫り、トウジはシンジの様子に気付いたのか少し質問した。すぐそこまで近寄っているケンスケの事は、気にせずに間で食べながら話す。

「いや…本当に男1人の肩身の狭さ。日々気を使っていないと、何があるかわかったもんじゃあないよ？ ケンスケ君、変わるなら変わろうよ。出来るなら変わってほしいもん、家事云々は別に良いとしてラッキースケベとかは勘弁。あんな所じゃあ発散すら出来ないから、余計にムラムラするよ」

真剣な表情で話すシンジにケンスケは近寄った分だけ身を離してしまい、トウジは苦笑しか出せないでいた。そんなシンジに話を交えるために、トウジは恋話を持っていた。

「せやかて、シンジ。ワレかて男さかい、異性に興味はあるんやろ？」

実際に学校ではモテるんやから」

「そうだそうだ」

そう第一中学校に入学して間もなく、女子からのシンジの人気は高かった。学年関係無く学校の女子達は、彼にラブレターを下駄箱に送られるほど人気があった。しかし、シンジはラブレターだけでは無く告白もされたが全部断っていた。

「あるにはあるよ…だけど今は青春する前にやる事があるからね。」

恋沙汰で疎かにして人類絶滅なんて笑い話にすらならないし、後いつ死ぬか分からない仕事してる中でもし俺が死んだら残された恋人が可哀想じゃん。だから…俺には恋人すら作る気は今無いよ」

それを聞いたトウジとケンスケは、少し浮いた話でも出るかと思っていたが予想が外れ真剣な理由を言うシンジに戸惑う2人。今の

彼の肩には人類の未来がかかっていた。 余りにも重い話に、ケンスケが話の話題変えた。

「まあ、そんな所がシンジのいい所だからな。 そう言えば、今日街のゲーセンで『アイアンフィスト6』が入るんだってよ。 結構数入れるって話だから、俺らも待たずに出来るかも」

「おっ、それは行かんとアカンな。 どうやシンジ？ 放課後にでも行かへんか？ お前の王様には、苦渋を味合わせられたさかい」

「ごめ〜ん、学校の後は本部に行かないと…。 明日なら大丈夫だよ？」

「そっか、今日の午後は短いから早く行けると思っただけど…。

シンジが行けないなら、明日に回そうぜトウジ」

「せやな、焦る必要無いしな。 じゃあ、シンジ明日やな。 それとワシのベアーは一味違うからな」

「本当ゴメンね、明日は絶対行こう。 トウジ君…君にはメキシカン・マグマ・ドライブ2の餌食になってもらおう、フッフッフッ」

そんな少年達は、年相応の話をして日常ならではの遊ぶ約束を交わしていた。

☆☆☆☆

シユツ

ヒユツ

ババババババツ

凄まじい攻撃の数が、空気を切る音が鳴っていた。 しかし、その攻撃は相手に一つも当たらないでいた。

「あー、もう！　なんで当たらないのよ、シンジ何かズルしてんじや無いの!!」

ネルフ本部にある道場に、道着姿のチルドレン3人とミサトが居た。その中、シンジとアスカは模擬戦をしていたが彼女の猛攻にシンジは軽く躲していた。そんなアスカの言葉に彼は苦笑してしまう。

「な訳ないでしょ…それにアスカちゃん、マジでやってるでしょ？」  
「当たり前よ！　ここまで躲されたら、イラつとするわよ！」

端の方でレイは体育座りをしていて、その側でミサトが腕を組みながら2人の様子を眺めていた。

アスカは総合格闘技をドイツにいた時に教えられ、それをシンジに向けて攻撃していた。名の通り総合格闘技は、打撃・投げ技・固め技などを用いた格闘術。彼女は、立っていれば打撃で隙あれば投げ技や固め技に持ち込もうとしていた。しかし、シンジには通用せず打撃は避けてその中に織り交ぜて彼の道着を掴もうとすると払われた。それに彼は避ける際に、彼女から距離は取らずにひらりひらりと中に舞う羽のように避けていた。

「キーー…舐めてんのアンタ!?　アンタも攻めなさいよー!」

彼女はシンジからの攻撃が無い事に、腹を立てたのか彼に攻めてこいと催促した。余りにも防戦だけでは、シンジも訓練にならないと思い少し身体を自然体にした。

「じゃあ…行くよ」

「かかってきなよ…」

そう言った彼はアスカの返事を待たず、スツとその場をしゃがみ込むように爪先立ちする。その瞬間、片足をバネのように反発させアスカに低空で接近する。それを見た彼女は迎撃する為にシンジの顔を目掛けて前蹴りを放つ。

「ふんっ!」

しかし、既にシンジは途中で方向転換したのかその場におらず彼女の蹴りは当たらなかった。それどころかアスカはシンジの姿を見失ってしまった。今彼女の周りに不可解な音が道場を鳴り響かせ



ていた。

キユツダンツキユツダンツ

アスカはその音が鳴る方に顔を向けるが誰も居らず、そしてシンジの姿も捉える事も出来ないでいた。それと変わり、シンジとアスカの模擬戦を眺めていたミサトは驚いていた。

アスカからは自分の周りを探すが彼の姿を見つけない事は出来ないでいる、しかし第三者視点であるミサトからはシンジの姿は見えていた。だが、今のシンジは奇妙な移動方法を行っていた。

人間は二足歩行であり、足を使って移動するのが常識である。その足は腰より下が『脚』となるが、基本膝を使って前後左右に動く事が出来る。

例え話だが、二足の人間と四足の動物が同じ能力差でジグザグな動きをするに適したのはどっちと聞かれれば少し悩むであろう。簡単な話にしてしまえば、四足である動物が群を抜くであろう。理由は四足動物の場合、両手足を使いブレーキと加速の役割を二本で行って人間では出来ない全身を使つての動きが出来る為に瞬発な移動が可能にさせる。

では、二足である人間は歩く走ると言った移動は不向きなのだろうか。否、四足に勝る物は無くとも四足に近い物は人間には持っていた。

バスケット選手とかで使われるであろう『全身バネ』と言った物を使えば少し四足に近づける機動力を得る事が出来る。歩く際に膝を使わなければ不自然な動きになってしまい、走る際にも同じ。人間が脚を使つての動きには膝が重要である。

膝を曲げて進みたい方向に向けて伸ばす。この一連の動作によつて、人間は歩く難無くある事を学んだ。すれば人間は膝を伸ばさず、常に曲げていれば素早く動けるのか。

それを実践させているのがシンジの動きであった。彼は折り曲げていた片足で加速に使い、残った脚でブレーキにして使う動作を交互に使っていた。そして常に爪先立ちがポイントである。人の足は前がブレーキの役割で、踵が加速させる役割をもっていた。

元々つま先と大腿四頭筋は、ブレーキをかける筋肉である。大半の人間はつま先を使って歩いたり走ったりする。なので、普通の人間が踵を上げて走り始める所シンジはつま先立ちから踵をつけてから移動していた。

その為に移動してる時に、止まる時のブレーキ音とその場から動く踵を踏む音の正体。それに彼は動物のように身体を丸めては伸ばす動作を入れている為に瞬発力が常人離れた速さを出していた。

そして彼を捉えられないアスカに、シンジは彼女の死角を常に把握し近づいていく。近寄ったシンジは一度彼女の前に突然姿を現した。それに驚くアスカは、瞬時に彼の顔に左ストレートを放つがギリギリで横に躲かれたら、伸び切る前の左腕を彼は右手で掴み彼女の右側に回り込む。

シンジは左腕が伸びきった瞬間、左腕を彼女の右足に円を描くように持っていく。するとアスカの身体は左腕を自分の右足に持って行かれ、身体がつんのめり前転するように転がってしまった。

バタンツ

道場の畳にアスカが横たわった音が鳴り響く。

「……………」

彼女は余りの事に頭が追いついていないのか、仰向けのまま天井を眺めていた。それを見たシンジは身体を起こし、ミサトの方に向けて声をかける。

「ミサトさん、終わったよ」

「はっ!？」

彼の声信じられない物を見て唾然してる所を我に戻るミサト。人間に出来ると思えぬ機動力、無駄の無い相手を転がせた芸術的な技。ミサトなりにシンジの事で、もう驚く無いだろうと踏まえていたが彼の引き出しの多さに驚いてしまった。

「シン…ちゃん? 何あの動きは…」

「えっ? 人間が持つ物を使つての移動方法ですよ、少し疲れますけど」

その言葉に寝ていたアスカが起き上がり、凄惨な形相でシンジに襲い

かかる。 それを見たシンジは、驚きながらも彼女の攻撃を再び躲していく。

「キ〜!! 腹立つわ〜、あんなデタラメな動きをしたのに! 息ひとつ切らして無いなんて…シンジ。 覚悟しなさい!!!」

負けず嫌いな彼女には、自分を簡単にあしらわれた事に腹を立てて彼に襲いかかっていく。 それにシンジは少しやり方を変えて、彼女の攻撃に合わせて畳に転がせる。 面白いほどに彼女はシンジに躲かれては、畳に転がせて他の人間が見れば新たな遊びだと思われる光景だった。

「はあつはあつはあつ…何よ、アイツ。 私も体力ある方だけど…はあはあ。 汗を流しも息切らさ無いなんて、おかしいわよ」

流石のアスカも疲れたのか、横に寝っ転がっていたが彼にミサトの側まで運ばれ引き続きでレイと模擬戦をやっていた。 アスカと変わり、レイは教えられた物をシンジに向けて攻撃するがアスカと同様に簡単にあしらわれていた。

ミサトは横に壁に寄りかかりながら座るアスカに、あの日の事を話した。

「アスカ…シンちゃんは、普通の子供とはかけ離れてるわ。 私も前に模擬戦やった事あるけど…一回も攻撃が当たらなかったわ」

「えっ! うっそ?!

アスカは一度、ドイツに来たミサトと手合わせした事があり彼女はミサトの実力を知っているつもりだった。 歳上で経験量が違い勝てなかったが、努力と時間でミサトに勝てるとアスカは思っていた。 それが自分より勝るミサトを、一度も当てる事すら出来なかった話を聞けば驚くであろう。

「後もう一つ…彼、護衛の諜報部員7人から逃げ切ったのよ」

「…本当に何なのよ、アイツ」

最早驚きを超えて呆れてしまうアスカ。 そしてふと気付いたのかアスカは、気になることをミサトに聞く。

「じゃあ、何でアイツは使徒との戦いであんなになるのよ? あそこまで戦闘能力と身体能力があれば、使徒も簡単に倒せる筈よ。 …前

の一つは、私だけど」

「そつれが分かんないのよね。シンちゃんのエヴァの操縦にミスは無いんだけど…毎度毎度と大怪我を背負ってくるのよね」

ガシガシと頭を搔くミサト。チルドレンの中では頭一個とは言わず、飛び抜けた能力を持っているにも関わらず使徒との戦いでは苦戦を用いられる。ミサトは何故彼が苦戦するのかが理解出来ないでいた。

「世の中分らない事があり過ぎなのよね…」

ミサトはそう呟くと、それを見ていたアスカは前に顔を向け未だ模擬戦をやっている二人を眺めた。

（確かにシンジは、デタラメ的に能力は高いけど…最後は私が超えてみせる！それが私の今の目標なんだから）

アスカは彼に初めて顔を合わせてた時に言った言葉を、消えること無く彼女の胸の中で燃え上がっていた。そんな中、シンジとレイは模擬戦をしていたが彼女も彼の体力についていけなかったのか横たわっていた。

その後、3対1で彼と模擬戦をやったが1対1と同じ様に彼女達の攻撃は彼には当たらないでいた。

そして、新たな使徒は静かに日本に近づいてきていた。

## エンジンエルヴァイツァ

第3新東京市の街全体に警報が鳴り響いていた。

ウーウーウーウー

この警報の意味は、街の住人達に緊急避難警告を知らせる物だった。住人達は、素早く行動を行い指定されたシエルターに避難していく。

最初に襲来した使徒の時は、まだ住人達は危機感が無く避難がスムーズに行われずトウジの妹であるサクラと父親のカズキが逃げ遅れてしまっていた。その為、それを踏まえ国連軍に所属する軍人達の動きは的確で正確に住人達を避難させていく。

そして第3新東京市は使徒迎撃形態に移る中、ネルフ本部からエヴァを現場に向けて専用レールに乗せて移送していた。

現在、紀伊半島沖に使徒が確認の報告が届いたネルフは行動を起こしていた。

「今の第3新東京市は、無傷で実践における稼働率は100%って言った所だけど。今回の迎撃は海から本部に向かっていている目標を、上陸直前に水際で迎え撃ち：一気に叩く！被害は少ないに限るしね。その為、今は零号機は機体調整で出撃出来ないけど：初号機二号機で目標に対し波状攻撃。接近戦で行くわよ」

ミサトはネルフの通信機等を搭載された車に乗り、車内から画面にエントリープラグ内を写したシンジとアスカにマイクを使いブリーフィングしていた。既にエヴァに搭乗した2人は、一足先に現場に到達していた。

『了解よ、ミサト。あくだけ私だけで充分なのに：折角の日本のデビュー戦が』

『なら、アスカちゃんに任せるよ。俺が後方でバックアップ、その場で臨機応変に動くから』

『シンジったら、わっかる〜!』

「貴方達勝手な事はしないで…って、言いたいけど実際に戦うのは貴方達だからね。自分のやり易い戦い易いように動いてね」

使徒が襲来しミサトが乗っている車内には、オペレーターが3人も一緒に乗っており緊迫としていた空気は3人の会話を聞いていたのかオペレーター達は少し肩の力を抜いていた。

『でも、2対1って卑怯でやだなあ。趣味じゃない』

「私達に選ぶ権利なんて無いのよ…生きていくにはね」

ポツリと呟いたアスカの言葉に、ミサトは頭では彼女の言い分も分からないではいたが人類存亡をかけている現状では甘い事は言っていられないと遠回しに言った。

『はいはい…分かってわよ。じゃあ、目標が海から現れ次第攻撃開始するわ』

「頼んだわ、2人とも」

『了解です、ミサトさん』

プツ

そして、迫り来る使徒の為に一度両機の通信を閉じた。ミサトと他のスタッフが乗った車両の中は、機械音だけになり中の人間の会話は無かった。

(無事に帰ってきてね…2人とも)

そんな中ミサトは首にかけて十字架のペンダントを片手で握りしめ、2人の無事を願った。

★★★☆☆

浜辺で使徒を待ち構えるエヴァ2機。 戦闘準備が整い、初号機にはパレットガンで二号機はソニックグレイブが装備されていた。

両機は使徒が来る方向での海に向けて、戦闘待機を行う事数分。

海の間こう先から、大きな水柱が立ち目標の使徒が現れた。 見た目は、身体は大きく足は細く肩と一体化したような腕。 背中には四つの突起物があり、頭部は無く顔だと思われる仮面はS字を十字にしたような様なデザインで目だと思われる穴が4つあった。 比較的、今回の使徒は人型に近いフォルムだった。 しかし、そんな使徒を見てシンジは思った。

(コア：…デカイな)

そう今回の使徒の腹部にある部位、コアは彼が戦ってきた使徒の中で一番と言えるほど『大きかった』。 本来、使徒のコアは弱点とも言える部位である。 その弱点が大きい物となれば、狙われやすいと言つて過言でもない筈。 そんな事をシンジが考えてる中、アスカは使徒を確認した瞬間に相手に向かって二号機を走らせる。

『じゃあ、シンジ。 援護お願いね！』

そんな明るい感じで言うアスカの言葉に、シンジは真剣に考えていた事が気が抜けたのか軽い返事を返す。

「ほい…ほーいっ」と

トパパパパパッ

初号機は手に持ったパレットガンで、使徒に突撃する二号機には当たらないように発砲。 使徒は初号機から放たられる攻撃を、A.T.フィールドを展開して防御体勢の為かその場から動かないでいた。

そんな所に海に浸るビルを足場に、素早く使徒に接近していきその手前に一際大きなビルを踏み台にして二号機は高く飛翔する。

『だあああああああ』

ソニックグレイブを高く振り上げ、使徒に向けて矛を振り下ろす。 先の刃が使徒の体に食い込んだ瞬間、そのまま縦に切り裂かれ一刀

両断と化した。

見事縦一線に切られて沈黙する使徒。無事、使徒を倒したようだ。それを見ていたミサトは、二号機に通信を入れていた。

『お見事！ ナイスよ、アスカ！』

『どつてことない敵でしたわよ、ホホホ』

難なく使徒を倒した事に喜ぶミサトに、当然と言わんばかりのアスカ。そんな中、シンジは溜息を吐いていた。

(…良かった、今回の使徒は難なく倒せて。毎度毎度…ギリギリな戦いばかりだったから今回のように楽に倒せても良いよな？ でも…気になるよな、こんなアツサリと…)

場は使徒を倒し、二号機は陸に戻るためか使徒から離れて始めている。だが、その時シンジは見てしまった。まだ使徒が震えている事に。

「アスカちゃん！ まだ動いてる！」

『えっ!?!』

『何ですって!?!』

シンジの言葉に驚く2人。

使徒は切り裂かれた2つの身体を動かし、個々にある背中の中の2つの突起物が切り口の方に移動して新たに手足に変えて使徒は『二体』として少し身体が小さくなりながらも復活を遂げた。仮面は太極図のような形になっていた。

『うそ〜っ！ なによこれ〜っ!?! こんなんインチキツ!!』

『気をつけて2人とも!! 来るわっ!』

ミサトの言った通りに、凹凸として二体になった使徒は一度海に潜り込み初号機と二号機に向けて接近していく。

「くそつたれええええ！」

『たあああああああ!!』

迫り来る使徒と交戦する2人。初号機に向かってきた凸の使徒に対してパレットガンを連射させる。A.T.フィールドを中和し、直接ダメージを通すために一点射撃をシンジは試みる。

ドキヤッ



初号機の精密な射撃で凸の使徒の左腕は吹き飛ぶが、挟れた箇所から瞬時に再生をして何も無かったように元に戻る腕。

「めんどっー!」

それと変わり、凹の使徒と対峙する二号機はソニックグレイブを巧みに使い凹の使徒を刻んでいくが凄まじい再生力の為かダメージが無かった。

『え〜〜! なんでえ〜〜!?!』

『アスカ! コアを狙って!』

『わかってるわ!!』

二号機はソニックグレイブを横に薙ぎ払うように横に振る。その攻撃が凹の使徒に当たり、コア諸共切り分けた。

しかし、そこから彼等に使徒の脅威が襲いかかる事に。

シュツバツ

二号機に横に真つ二つになった凹の使徒は、再び個々で再生し始めて新たな使徒として現る。しかし、切られ数が増える使徒であったが分裂する度に体は小さくなっている。

『〜〜! 本当にインチキ! ツ!?!』

分裂していく様子を見て、悪態を吐くアスカだったが増えた二体の使徒は二号機を襲う。最初の一体と分裂とした凹凸の使徒とは変わり、より小さくなった二体の使徒は動きが速かった。

巧みな連携で、二号機を襲いかかる凹と凹凸の使徒の攻撃になす術も無くやられていた。

『きゃー!?!』

「アスカちゃん!? くそっ、邪魔だあ!!」

彼も彼でアスカを助けに向かうとするが凸の使徒が立ち阻まれていた。ミサトの方は余りの状況に、何も指示を送れずにいた。

そんな間にも、凹と凹凸の使徒二体に二号機は弄ぶように攻撃していた。そんな状況を打破しようとする二号機は反撃を行うにも、一体の使徒に攻撃を行おうとするが邪魔をされ手も足も出せないままでいた。

『二号機、完全に沈黙!』

「アスカちゃん!？」

なす術も無く二号機は倒されてしまった事に、シンジは驚きながら目の前の凸の使徒と闘っていた。だが、現実是非常だった。二号機の相手をしていた凹と凹凹の使徒二体は、残った初号機に矛先を変え始めた。

「くっ！」

現状、シンジは3対1での状況で戦っていた。だが、彼はそんな戦況の中で諦めないでいた。

(どうする……どうするどうするどうする! 今の状況だと、比較的マズイ。俺だけで4体まで増える使徒相手にするのは、絶望的状况……。だけど! アスカちゃんだけでも、回収する!! やれるやれないじゃあない……やって見せるんだ!)

考えがまとまったシンジは、一先ず凸の使徒を蹴り飛ばして距離を取り迫り来る凹と凹凹の使徒の方に機体を向ける。素早くなった2体の使徒に対して、初号機は二号機が横たわる場所に向かって走り出す。それを邪魔をする2体の使徒に、初号機は手に持つパレットガンを使い凹を止める。そこに凹凹が後ろから初号機に襲いかかるが、シンジの特別な2つの視点のお陰で後ろまで見えていた為に後ろ蹴りで応戦する。

初号機は無事に二号機の場所までたどり着くと、使徒は一度一体としての大きな身体に戻り行く手を阻むように立っていた。だが、そんな事を気にせずシンジはミサトに通信を繋げる。

「ミサトさん!」

『ッ!? 何、シンちゃん』

「二号機のアンビリカルケーブルの根元って、場所は何処ですか!？」

『えっ! エーと……27番ゲートよ!』

「了解!」

シンジはミサトから聞いた回収場所をモニターで確認すると、初号機を動かし二号機の側に立つ。すると使徒は、何故か二号機に向けて光線を放つ。しかし、シンジは光線を難なく一点のA・T・フィールド張りで左腕に纏い弾く。光線が駄目だと分かると、使徒

は二号機に直接攻撃を仕掛ける為に、一度高く飛び上がり両腕を上  
振り上げて叩きつけようとする。

しかし、それも初号機が身を持って阻み二号機を守る。

「ぐっー！」

だが、使徒の攻撃が重なったのかシンジの口から声が漏れる。初  
号機は両腕で使徒の攻撃を防ぐと、フロントキックで使徒を蹴り飛ば  
す。すると、使徒は分裂をして再び二号機に襲いかかる。凸の攻撃  
を初号機は、片手で受け止めると使徒の腕を掴み凹に向けてぶん投げ  
る。

最終的には、使徒は4体に分裂しようとするがその瞬間に隙が出来  
た。初号機は尽かさず二号機の片足を掴み、少し振り回すと陸の向  
けて高く放り投げる。

「ミサトさん…今だ！ ケーブルリバーズ!!」

『わかったわ!!』

二号機に繋がれたアンビリカルケーブルは巻き取られ、空中にいる  
二号機は27番ゲートに向かっていく。それを見た使徒は、撃ち落  
とす為にか二号機に向けて4体が光線を撃とうとしていた。

「させるかっー！」

初号機は4体並ぶ真ん中の2体に、片方にはパレットガンで撃ちも  
う片方は接近して回し蹴りを放つ。すると、真ん中2体は身体を強  
制的に身体の方を変えられ隣の自分に光線を撃つてしまい同士討  
ちをしてしまう。その間にも二号機は、27番ゲートに回収されて  
いった。

残った初号機は、等々一体で使徒と戦う事に。

「…さて、どうしたものか」

そんなシンジが悩む所に使徒は分裂して、初号機に接近していく。

先頭立つ凹と凸の2体の使徒は、初号機の周りに配置につき接近戦  
を持ち込む。残った凹凹と凸凸の使徒は少し遠めから初号機を  
狙っていた。素早い身体で初号機に攻撃するが、シンジの巧みの操  
作術によりエヴァは使徒の攻撃を躲していく。しかし、初号機は残

念な事に使徒の攻撃を完全には躲しきれてはいなかった。

皮一枚では無く、小さな傷を負うほどであったが使徒の攻撃が数が多くエヴァの装甲が少しずつ剥げていく。幸いな事に初号機は致命的なダメージは無かった。

「ふっ！ らっ！ しゃっ！ チェリオツ!!」

シンジも凹と凸の使徒の攻撃速度慣れ始め、遠くから狙撃する攻撃も難なくと躲せるようになり逆に反撃をする初号機。それを見たミサトは、前に諜報部員達から逃げ切った彼がエヴァでやってのける事に驚いていた。

「…っ!! やはりか!」

そんな初号機を見て判断したのか、使徒は4体同時にエヴァに近接戦闘を持ち込む。厄介な事に分裂、合体と多彩に動き状況に合わせて攻撃力や機動力を補ってくるようになった。

その為、流石に異常な戦闘能力と2つの視点を持ったシンジであっても少し押され始めて戦況が著しく悪くなっていた。

「がっ!? しゃあっ! ぐはっ!」

四面楚歌になっても尚、シンジは初号機を止める事無く使徒と戦っていた。だが、少しずつと機体にダメージが蓄積してるのか初号機の動きに遅れが見られてきた。

「くそっ! エヴァが俺の思考に追いつけてこれなくなってきた! ぎゃあっ!」

等々初号機は使徒の攻撃をまともに喰らうようになって、それを使徒はより一層に初号機を攻め立てる。その為、初号機はシンジの操作に追いつかなくなり使徒の攻撃を喰らい続ける。

そんな状況を見て、ミサトはシンジに撤退命令を送る。

『シンちゃん!! 逃げて! お願い!!』

エントリープラグ内に泣きそうなミサトの声が反響する。そんな中でシンジは、ミサトの声は聞こえておらず今の戦況を覆す事だけを考えていた。

「シンちゃん!? 聞こえる? 撤退よ!」

ミサトは必死にシンジに命令を送るが、彼は返事も出来ないほどののか返答が無かった。

「初号機、損傷率60%突破! アンビリカルケーブルも断線! フル稼働の為に残り稼働時間、1分を切りました!」

初号機の状態を述べる日向。今の戦況に機体状況が、正に最悪とも言える。返事が帰ってこない通信を切り、ミサトは考えた。

(どうすれば…流石のシンちゃんでも今の状況からひっくり返す事は0に等しい。通信を入れても、使徒の猛攻を対処してるからか返事も返してこない…。奥の手は…初号機諸共N2爆弾で使徒を攻撃する事。それによって使徒は倒せなくとも第3新東京市への侵攻は一時止まるわね。…でも)

ミサトはネルフの立ち位置と人としての感情が、心の中で混ざり葛藤していた。だが、そんな思考してる間にもモニターに映る初号機は動きが無くなっていき使徒の攻撃を貰うようになっていた。

(くっ! 悩んでる暇すらないか…ごめんなさい、シンちゃん!)

「日向君! 国連軍に通達、N2爆弾を用意! 目標はエヴァ初号機!」

「えっ!?」

ミサトの言葉に日向は驚く。それもその筈、N2爆弾を使って狙う目標がエヴァ初号機なのだから。

「今使徒は初号機に釘付け。その間にも使徒にN2爆弾を当てて仕舞えば、使徒も一時的に止まるわ」

「でも、葛城一尉!」



立てる理由は、A・T・フィールドであった。

足元にその場で展開し、足場を作ったお陰で初号機は陸と走る事変わらなくなった。

初号機は凄まじい速さで使徒の懐に肉薄し、柔軟性を生かした前蹴りを使徒に放つ。使徒は初号機の蹴りにより身体が浮く。落ちてくる使徒に初号機は猛攻を仕掛ける。

右左と両手のフックを使徒に当てると、右手と右足を後ろまで持っていき右手を円を描くようにして宙に浮く使徒を叩きつける。叩きつけられた使徒はバウンドするが、初号機の攻撃は止まらない。

バウンドした使徒にレバーブローを入れて、より使徒を浮かすと右エルボーを使徒に当てた瞬間に左ストレートを使徒の仮面に放った。

初号機の左ストレートにより、吹き飛ばされる使徒。

「凄、い…」

ミサトが初号機にそう呟くが戦闘は続いていた。吹き飛ばされた使徒は4体に分裂しては、初号機を4方向から囲うように陣形をとった。凸の使徒が初号機に接近して右腕を振り上げ、初号機に叩きつけようとする。

が、初号機は迫り来る使徒の右腕を右手で降り下げようとする右腕を掴む。そして、そのまま時計回りに右手を回すと凸の使徒は引つ張られ初号機の右足の方に身体を傾ける。すると、初号機は凸の右足を右足で蹴り上げる。凸の使徒は、蹴られた衝撃で初号機の右側に転がせられる。

初号機は使徒の脚を蹴った脚を振り上げており、そのまま凸の使徒に踵落としを入れては後ろに振り上げる。

ドカツ

凸の使徒を相手する初号機の後ろから、迫っていたが後ろに振り上げた初号機の右足が凹の使徒に当たる。初号機は凹の使徒を気にせず、足元にいる凸の使徒を振り上げた右足でサッカーボールを蹴るように吹っ飛ばす。

突如初号機の横から光線が飛ぶが、初号機は当たる面を逸らす様に身体を回転させる。当たるはずだった光線は、射線上にいる凹凹の

使徒に炸裂。　同士討ちを狙った様に見せた初号機は、先程光線を放った凸凸の使徒に接近する。

ゴシヤツ

凸凸の使徒に肉薄すると右の掌底をアツパー気味に、使徒の腹部に入れる。　鈍い音を立てながらも、使徒は身体を浮かす。　自分の体より高く浮いた使徒の下を潜り抜け、凸凸の使徒の背後から、初号機の猛攻を受ける事に。

初号機は左回し蹴りを放つ。　すると蹴られた使徒は再び浮く。

右フックに左アツパーを使徒の体に打ち込む。

そして、海面近くまで落ちてきた使徒に右レバーブローを入れて浮かせた所に左のロシアンフックを使徒の仮面にたたみ込み海に叩き落とす。

上半身から海に叩き落とされた凸凸の使徒に対して、使徒の左脚を右手で掴み上げては初号機は使徒を少し上に持ち上げながら、左後ろに引つ張り上げる。　最早人形に近い使徒は、初号機に反撃出来ないでいた。　そして左後ろに引つ張り上げた初号機は、その動作を使い左手は拳を作り使徒の仮面を殴りぶつ飛ばす。

それを終わると同士討ち喰らった凹凹の使徒は、よろめいていた。　そこに初号機は接近してはある程度の距離を詰めると、左脚を高く振り上げては使徒に踵落とし入れる。　踵落としを貫つた使徒は、後ろに倒れるが初号機は待たなかった。　尽かさず右回し蹴りを入れては左後ろ回し蹴りを放つ。　宙に浮いてしまった使徒に、左後ろ回し蹴りを放つた脚を下ろさず踵落としで叩き落とす。

そして叩き落とした使徒に初号機は、凄まじい右のローキックを入れると使徒は再び宙に浮きながら回転していた。　そこにワンツーと右と左のジャブを入れると使徒の回転が遅くなる。

止めと言わんばかりの前蹴りで使徒を高く蹴り上げ、初号機は勢いをつける為にその場に右回転を入れる。　勢いがついた所に、丁度良い高さに落ちてきた使徒に左回し蹴りを仮面を蹴り放つ。

メキヤツ

そんな音を立てながらも、吹き飛ぶ凹凹の使徒は凹の使徒に当たり



ながらも勢いが強すぎて2体とも吹き飛んだ。

そんな光景を見ていた大人達は、驚きすぎて口も開かずに唯々モーター眺めているだけだった。そんな所に別の問題が発生した。

「葛城一尉！パイロット…シンジ君の様子が！」

「どうしたの!?!」

切羽詰まるマヤの声にミサトは聞く。

「シンジ君のバイタルが確認できるようになったんですが…彼の心音が徐々に弱くなっています！それに脳の反応すら検出されません!!!」

「何ですって!?!?!」

マヤの言葉に驚くミサト。それもその筈、人間は脳で命令しては目や口など体を動かしている。だが、今のシンジには脳が働いておらず一時的な植物人間になっていたが、他の植物人間とは違いがあり彼の場合は生命維持すら出来ない植物人間であった。

「急いで人工マッサージを！心臓が止まってしまえば、脳にダメージが入ってしまう！それだけは阻止して！」

「!? りよ、了解！」

焦りながらも指示どおりに動き始めるマヤ。戦況は初号機の暴走によりひっくり返す事が出来たのだが、代わりにパイロットの問題が出てしまった。何故、突如シンジの容体が変わってしまったのかミサトには想像も出来ずにいた。

「葛城一尉！国連軍から通達！只今、初号機の上で待機。何時でもN2爆弾を投下できる模様！」

そんな所に日向は国連軍からの通達を述べる。

（それだ！）

ミサトは日向の言葉に、今の状況を打破出来る案を思いつく。しかし、不確定で不安な要素ばかりな賭けに近い作戦だった。だが、瞬時に考え決意する。

（だけどイタズラに戦闘が長引けば…シンちゃんの危険性が。やるしか…無いわね）

「マヤちゃんは、初号機にあるポイントに指定した信号を送って！」



徒の腹部に刺さり勢いが強かったのか飛ばされていた。

そして落ちてくるN2爆弾に対して、使徒がその場所まで串刺しのまま飛んでいく所に初号機は一度右手を広くとA・T・フィールドを消えた。見事使徒をN2爆弾が落ちる場所に持つていくが、使徒は危険予知を持つているのかその場から逃げるようと動こうとする。

初号機は右手を横向きに掌を使徒に向けると、使徒の近くに再びA・T・フィールドを展開した。使徒はA・T・フィールドが無い方に逃げようとする、初号機は開いていた右手を閉じた。

すると、初号機が展開したA・T・フィールドはググツと伸縮を始め使徒の周りを囲い始める。使徒は突如、周りに張られたA・T・フィールドによって逃げ場を失い上空に逃げようとするが時は既に遅し。N2爆弾は吸い込まれるように、筒状のA・T・フィールドの中に入ると大爆発する。爆心地が筒状のA・T・フィールド内であった為に、爆風は全てが上空に駆け上がった。

パッキイイイイン

そんな破れたような音を立てながら、初号機のA・T・フィールドは消える。そして、A・T・フィールドが消えると初号機は力無くその場に倒れた。

使徒はN2爆弾が直撃した為、消えた筒状のA・T・フィールドの中から体の大半が溶けた使徒が現れた。

これにより、人間と使徒の戦いは引き分けて終わった。

## 2つの心は…

『本日午後3時58分15秒、第7使徒と交戦の後に国連軍によるN2爆弾で攻撃。これにより使徒の構成物質が52%の焼却に成功』  
ネルフ本部のブリーフィングルームで、壁から吊るしたシートにモニターを投影する。その為、部屋は暗くされていた。それを眺める人間は多数。映画館のように席は、階段状になっており先頭にはプラグスーツのままアスカが座っていた。

その後ろにはミサト、加持、リツコの三人。一番後ろには冬月、ゲンドウ、そしてレイがいた。

「それにしても…N2爆弾を使用したのに地図を書き直す事が無いとはな。あの戦闘は良く出来た物だ」

冬月は、使徒と初号機の戦闘記録を見ながら呟く。その呟きがアスカに聞こえたのか、その身を震わせる。今、この場にシンジがない理由は戦闘が終わった後に初号機は回収されたのだが最悪の事に、シンジはICU（集中治療室）に行くほどに容体が悪かった。

生憎戦闘の後、シンジの脳は普通に活動開始するが先の戦いでの負荷が強クフィードバックが起きてしまい身体に極度な疲労が押し掛ける。そして初号機は本来の性能を上回る戦闘により、機体に予想以上の負担の為に大きな修理を行う事になった。

『これらが先の戦闘での結果です。尚、使徒は周囲に強力なA.T.フィールドを展開。これにより使徒との接触は不可能かと』  
ギリッ

マヤが読み上げた後に、N2爆弾により傷ついた使徒が動かない画像が映される。それを見てアスカは齒軋りを起こす。それもそ

の筈、アスカは途中でのリタイア。そして、呆気なく倒されてはシ  
ンジに救出され高い評価を見られる戦闘。一度は倒れたのにも関  
わらず、再起動としては引き分けまで持ち込んだのだ。

プライドの高いアスカには、苦渋が心の中を支配していく。そん  
な所にゲンドウがアスカに話しかける。

「二号機パイロット…」

「っ！ はいっ！」

突然に最高責任者に話しかけられたアスカは、驚きながらも立ち上  
がり後ろに振り返る。

「…君の仕事は、何かわかるか」

「エヴァの操縦と…使徒に勝つ事…です」

「分かっているのならいい、私達は負ける事は許されない。その為  
の我々ネルフが存在するのだから」

そう言い残してゲンドウは退室する。それを追うように、冬月と  
レイも部屋から出て行く。残された4人だったが、ゲントウがいな  
くなってアスカはその場で両手を握り締めて顔を俯かせる。

「……………」

それを見ていた大人3人は、アスカに声をかける事が出来ないでい  
た。

☆☆☆☆

ガンツ

アスカは更衣室のロッカーを右手で殴った。

（何やってんのよ、私！ 私はこんな醜態を晒す為に、エヴァに乗って

わけじや無いんだから！)

ロツカーを凹ました右手を引き抜くと、彼女の手には傷が出来てしまい血が滲み出していた。だが、そんな傷が出来ていても今の彼女には痛みを感じていなかった。

(結局は全部がシンジに尻拭いされて：私は何も出来ないでいた)

既にプラグスーツから制服に着替えていたアスカは、殴ったロツカーをそのままに更衣室を後にする。暗い気持ちを持ったまま、通路を歩いていると前から加持が現れる。

「よっ、アスカ」

「か：加持さん」

憧れで好いてる相手、加持が現れた事にアスカは名前を呼ぶ事に詰まってしまった。それを見た加持は、溜息を一つ吐く。加持は俯いたアスカに近寄るなり、彼女の傷ついた手を取る。それに対して、アスカは加持に手を取られた事にビクツとなる。

「どうしたんだ、アスカ？　こんな傷作って。女の子が傷を残したら、将来困るぞ？」

加持は今のアスカの心境を察しているのか、敢えて詳しく聞かず軽い感じに話しかける。彼もアスカの性格を知っている為に、刺激の無い言葉を送る。だが、その言葉が逆にアスカを刺激してしまった。

ポタポタツ

アスカの目から涙が溢れ出していた。先の戦闘、不甲斐ない自分、そして自分を咎める事無い大人達の対応。それらが混ざり、感情が溢れてしまい外に出してしまうアスカ。そんなアスカをより近寄り、軽く抱きしめる加持。

「：アスカ、自分を責めるのは良くない。確かに自分で納得出来ない事があるだろう。でも：次がある。そこで挽回すれば良いんだよ」

アスカの頭を自分の胸に当てさせ、頭と背中をポンポンとリズム良く優しく叩く。その後も彼女は、加持の胸の中で静かに涙を流していた。



「それらが関係各所からの抗議文と、被害報告書はそれで全部よ。後はこれが国連軍からの請求書」

ミサトは本部から提供された個人専用の部屋にいた。それと同じ様にリツコもいた。ミサトの目の前には、デスクテーブルに一塊の紙の束があった。

「ねえ…リツコ。もしだけど、あの戦闘が惨敗で終わってたらこの量じゃあ済まなかつたわよね？」

「当たり前よ。テーブルに乗らないぐらいの書類に、最悪貴女の首が飛んでいたかもしれないわ」

軽く言うリツコに溜息を吐くミサト。本来は戦闘での周りの被害は極小。しかし、一度ミサトの指示によりN2爆弾を初号機を目標に投下を命じた。その事に国連軍は激怒、確かに勝たなくてはいけない戦いだが子供が乗ったエヴァに対し人類がエヴァ以外での攻撃力を持った兵器で狙うなど、彼等の人情には無かった。結果、N2爆弾をエヴァに当たる事は無かったが国連軍は姑息と作戦責任者に集められる書類を全て投げつけた。だが、1日あれば終わってしまふ量だった。そんな書類を眺めながら、ミサトは椅子に座りコーヒーを入れるリツコに話しかける。

「ねえ、初号機の修復…どれくらいかかる？」

「あの戦闘での負担、機体ダメージだとフルピッチで10日間って所かしらね。二号機は2日程度よ」

「使徒は？」

「現在自己修復中。第二波は10日間とMAGIは予測してるわ」

「残ったエヴァ2機による殲滅は出来ないの?」

「残念ながら、零号機ともに二号機はA・T・フィールドが張れない為に使徒に近寄る事すら出来ないわ」

「…手も足も出せないか」

今の使徒は自己修復してる為か、強力なA・T・フィールドを展開していた。常に肉眼に見えるほどのA・T・フィールドは、ドーム状に展開され正に結界となっていた。その為、零号機と二号機はA・T・フィールドが張れない為に中和すら出来ず近寄る事も出来ないでいた。

「MAGIの計算だと、あの暴走状態の初号機がやったA・T・フィールドでしか破れないらしいわ」

「…本当に初号機は規則外の機体ね。一度動かなくなつては、再起動して圧倒的な戦闘能力。でも気になるのが、突如のシンちゃんの容体が悪化。リツコは何か分からない?」

椅子の背もたれに寄りかかりながら、ミサトはリツコの方に首を曲げる。聞かれたリツコは、少し難しい表情をとっていた。それを見たミサトは、不思議そうに見ていた。

「どうしたのよ…リツコ?」

「…予測なんだけど、あの暴走は暴走じゃあ無いんだと思うわ」

「何よそれ…」

本来、エヴァはネルフが誕生してから作り上げられた物。その際、製作途中でのエヴァの暴走は多数あった。殆どが暴走したエヴァは暴れ回る物ばかりだったが、今回の戦闘では野性味は無く人間らしい戦い方をしていた。

「MAGIも使って検査したけど…」 時的にシンジ君の精神が、エヴァ初号機に乗り移ったと見ているわ」

ガタンツ

リツコの言葉にミサトは、勢い良く立ち上がり椅子を倒していた。

ミサトは身体を震わせ、リツコに近寄り両手で襟元を掴む。

「ねえ…リツコ? あんたまさか、この件知ってたんじゃあないの!?

シンちゃんが初号機にこう言う事になることを!」



ミサトは声を荒げてリッコに叫ぶ。それに対してリッコは、静かに経緯を述べていく。

「事の始まりは…シンジ君が二号機に乗った時よ」

話し始めたリッコを見て、ミサトは手を離して再び椅子に座った。

「私は実際に見た訳では無いけど…ミサト。貴女は見たわよね、使徒を倒す所を」

「…ええ」

「その時の記録を細かく調べただけど…倒す前の瞬間。二号機からシンジ君の反応が消えているのよ。私も最初は機械の不具合での事だと思ったわ…だけど、違っていた。本来、今でもアスカでは張れないA・T・フィールドがあ那时的時は張れた理由はシンジ君のお陰なのよ」

「リッコ…それは本当なの？ 確かにあの時の二号機にはシンちゃんのアスカが乗っていたわ。最後、使徒を倒す時は…まさか！」

ミサトは何かに気づいたのか、顔を真っ青になっていく。そんな彼女を見て、少し落ち着く為にコーヒを一口飲むリッコ。

「そう…その時のアスカのシンクロ率は過去最高の96.8%を出した。今は71.5%なのに…。エヴァは本来、選ばれたチルドレンしか乗れないのはミサトも知っているわね？」

「…マルドゥック機関から選抜され、私は詳しく無いけどエヴァと繋がりがある少年少女しか乗れない話よね」

「そうよ、それに対してシンジ君を乗せた二号機はアスカを乗せてる時と同じに変化が無かった。本来はあり得ない事よ…。1つの機体に2人のパイロットを乗せれば、少しでもアスカのシンクロ率に変化が起きてもおかしく無い筈。それなのに、逆にアスカのシンクロ率は上昇して…A・T・フィールドまで張れるようになった。

使徒を倒す瞬間に、アスカのシンクロ率が96.8%まで上昇してシンジ君の反応が消えた。後は、分かるわね…」

そう、本来エヴァは選ばれた子供しか乗れない兵器。1つの機体に乗れたとしても、他のエヴァとの互換性が低く乗れたとしても本来の能力は出せないであろう。シンジが乗る初号機はテストタイプ、

アスカが乗る二号機はプロダクションモデル。この2機の違いは大きく、乗れるパイロットも変わってくるものである。

しかし、シンジはその常識を覆し難なくと二号機に乗る事を成功させる。そして、先の戦いで二号機とアスカの間を中継したのがシンジであった。その為、シンジは二号機と一時的な融合を果たし彼が二号機を通してA.T.フィールドを展開させアスカのシンクロ率を底上げたのだった。

リツコからの説明にミサトは、身体を震わせていた。

「まさか!? あの時のシンちゃんは、二号機と同化したって言うの!」  
「そう見るのが適切ね。だから私は、前にシンジ君にシンクロテストをやらせた時にエントリープラグ側にリミッターをかけたのよ。  
…だけど、呆気なく意味を為さなかったけど」

リツコも、先の戦闘データを見て対処を行ってはいたが効果を発揮する事は無かった。それを聞いたミサトは、立ち上がりリツコに向かって頭を下げる。

「ごめん! リツコ。貴女もシンちゃんの為に対処していたのに…私は貴女を責めてしまった」

「いいのよ、結果として私にした事は無意味だったわけだし。でも、今回のデータでこの件は対処出来るわ」

「なんか良い案でもあるの?」

「ええ、前から決まっていたシステムの雛形である『ダミーシステム』を元に作れば金輪際はシンジ君はエヴァと同化する事は無いわ」

☆☆☆☆

ピツ…ピツ…ピツ…

規則的なリズムで鳴り続ける機械。その音を知らせる機械は、ベットに横たわるシンジにコードが繋がれていた。ICUから普通の病室に移動され、シンジはネルフ直属の病院で眠っていた。

「……………」

そんな彼の横に、レイはパイプ椅子に座って眠る彼の顔を眺めていた。

（今回も…私は戦闘に参加出来なかった。いつもシンジ君に助けられてばかり…怖い。彼が…もし次の戦闘で死ん…でしまうかもしれない。駄目…シンジ君が居なくなってしまうたら、また私はあの暗い世界に戻ってしまう）

少しずつレイの表情は険しくなり、膝に置いた両手に力が入る。

彼女にとって、シンジは光を照らす存在になっている為に彼が居なくなる事になれば今度こそ心が壊れてしまうだろう。一度壊れかけた時は、彼が身体を引きずりながらも彼女の部屋に足を運んでは沈む彼女の心を掬い取った彼のお陰とも言える。

嫌な想像をして身体を震わせながら、レイは布団の中に手を入れ彼の手を探し出す。シンジの左手を見つけると、布団の中から引きずりだして両手で包み始めた。

（あったかい…落ち着く。これがあったから、私は戻ってこれた…）

そして笑顔。私を照らして…中からも暖めてくれる。昔までなら、司令さえいれば良いと思っていたけど…今は違う。貴方が私にくれた様に…シンジ君。シンジ君を私が暖めたい…そして笑って欲しい。私には…それしか出来ないもの…）

レイは彼の左手を自分の額まで持って行き、祈る様に目を瞑っては自分の体温を彼に渡すかの様に少し力を込める。すると、彼女の髪に変化が見られ始めた。

元々、青空のような色を持った彼女の髪の毛の色が根元から少しずつに白くなっていく。そして、左手を彼女に掴まれて眠るシンジにも変化があった。眠る彼の胸から、布団越しで優しく光が灯ってい

く。すると、最初は青白くなっていたシンジの顔は徐々に血の気が戻り始めた。

そんな変化は、彼女が彼の手を握る力が抜けると同時に彼女の髪は戻り始めて、彼の胸からの光は消えていった。

「…んっ」

祈るのを終えたのか、彼女は彼の手の感触を確かめるように頬擦りを始めた。少しして堪能したのか、彼女は目を開き若干だが口の端を上げていた。そんな所に彼女のスカートのポケットに入れた携帯が震え始める。

ブーブーブー

ピッ

「…はい」

『レイ…至急、本部に来て』

「了解」

ピッ

電話の相手先は、ミサトであつたが淡々と要件言いレイも返事を返して通話を切る。レイは彼の手を再び布団の中に戻して、病室を後にした。先程の超常現象は無かった様に、再び病室に規則的な電子音が鳴り響く。

☆☆☆☆

「じゃあ…これから、訓練に入るわ」

ネルフ本部内の訓練室。床は木の板が敷かれ、周りは出入り口の

周り以外はガラスが壁に貼り付けられていた。そんな訓練室の真ん中に、ミサトと面を合わせて二人の少女が立っていた。

「……」

「何なのよ……このカッコ？」

今のレイとアスカの格好は、カラフルな衣装が着られていた。それに対して、レイは気にしていないのか無表情。アスカは、今から訓練として何をするのか理解出来ないでいた。

「今回の使徒は、最大4体まで分裂を可能させる使徒。個々で撃破は無理に等しいと、MAGIの計算で出たので使徒が1体の時にコアを破壊するのが有効らしいわ。だけど、普通に攻撃しても再生されてしまう為に……一点集中の重い攻撃が必要なの。目標の使徒は単体になれば攻撃が重く、分裂した分だけ動きが速くなりコンビネーションを使ってくる。その為にエヴァ三機を使って、コンビネーションで使徒のコアを攻撃して破壊。」

この流れを作る為に……貴女達に今から一緒に踊ってもらおうよ」

「え~~~~~?!?!」

「……」

ミサトが訓練の説明を終えると、訓練の内容に声を上げるアスカ。レイは気にしていないのかりアクションは無い。

「シンちゃんは、意識が戻り次第でこの訓練をさせるわ。使徒の再活動予測は10日……もし10日間にコンビネーションが完成しなければ、初号機を囮に使い再びN2爆弾で攻撃。今世界にある製造された全てを、初号機諸共に……そしてトドメを残り二機で殲滅」

「……?!」

「何よそれ?!」

ミサトからの言葉に、2人は表情を豹変させた。そして、ミサトから説明された2人はより一層に表情が険しくなった。

時は遡り、ミサトはシンジの問題が解決の策をリッココから聞くと安堵の溜息を吐いて再び椅子に座った。

「ハア…それにしても、本当の問題は今回の使徒に対してね。一体のとしての攻撃には分裂、最大4体まで分裂しては一体一体の動きが速くコンビネーションまで持っていて…正直な所お手上げね」

ギシツと椅子の背もたれに寄りかかり、天井を見上げるミサト。それを見ていたリッココは、懐ろからフロツピーディスクを取り出した。

「ミサト、貴女にとって今の使徒を倒すアイディアがあるけど…必要かしら?」

「何よ! リッココ、とっておきの奴でもあったの!? いや、持つべきものは友よね〜!」

ミサトは懐ろから出したリッココが持つフロツピーディスクを、素早く取り喜んだ。しかし、リッココの表情は優れなかった。

「アイディアの提案は私じゃないわ…」

「? じゃあ…誰よ」

「加持君よ」

「げっ…」

アイディアを出した人間の名を聞いたミサトは苦い顔をした。

バンツ

部屋にデスクテーブルを叩く音が鳴り響く。

「何よこれ!? これが作戦言えないわ!!」

「でも、勝算はあるわ。 ……少なくともね」

ミサトは、両手を叩きつけたデスクテーブルに置かれたノートパソコンの画面を睨みつけていた。

「加持の奴！ 何考えてんのよ!! コンビネーションの案はいいわ。だけど、コンビネーションがダメだった時は初号機諸共に使徒をN2爆弾で攻撃なんて…」

少しずつ勢いが無くなっていくミサト。 それを見て、リツコは加持の作戦を説明し始める。

「この作戦だけど、MAGIも加えての作戦なのよ。 目標は4体まで分裂しては一度に倒さなければ、個々で再生をし続ける。 まして一体の時に倒すには、あの大きなコアを破壊するには最低でもエヴァ2機の一点集中攻撃が必要される。 だから、3人のコンビネーションを完成させるか：初号機を囷にして使徒と一緒に攻撃。 そして、今製造されている全てのN2爆弾で弱った使徒を2機のエヴァで殲滅させられる。 ミサト、決めるのは作戦部長である貴女なのよ。 ……まあ、他に作戦があるなら話は別だけど」

MAGIの計算では、N2爆弾はl i t t l e b o yの核爆弾とも変わらない威力である。 しかし、本来の核爆弾とは違う点がある。 それは放射能だ。 N2爆弾には、核では無く窒素を使い凄まじい威力を生み出す兵器である。 その為に最初に襲来した使徒での使用後は、周りを爆風で捲き込むが放射能を残さない兵器であった為に使徒相手に使われた。

だが、問題が1つ。 1つのN2爆弾で半径17.1kmの距離を？み込むほど威力に対して、今現在で製造されている数は5つ。 それを一点に爆発させてしまえば、5つの爆弾が干渉し1つだけでも凄まじい威力が人類で最強の兵器『ツァーリ・ボンバ』とは行かなくとも下手してしまえば過去に起こした『ブラボー実験』に近い事を再現してしまう可能性があった。 そうなってしまうえば、日本の一部が吹き飛んでしまい第3新東京市は甚大な被害が被るであろう。

「決まってるわ、コンビネーションの案で行くわ！ 必要以上にシンちゃんには、傷ついてほしくは無いわよ。 それにそれをしてしまえ

ば…彼に対する裏切りになってしまう……」

バシユツ

ミサトは、そう言い残して部屋を出て行く。残されたりツコは、ボソツと呟いた。

「…加持君つたら、損な役を進んでやるんだから」

★★☆☆☆☆

♪~~~~~ ♪~~~~~

「はいはい！ 2人ともリズムに合わせて！ アスカ！ 必要以上にテンポを上げない！ レイ！ 動きが単調になってるわよ！」

音楽が流れている訓練室で、指導するミサトの元に2人の少女が音楽に合わせて踊っていた。しかし、アスカは曲に流されているのかワンテンポ早く踊ってしまい、レイは模範通りに動いてる所為かぎこちない動きになっていた。

パンツパンツ

「はいはい、2人とも！ もっと曲に耳を傾けて、お互いに合わせようとしなさい！」

「はあ…はあ…はあ…」

「……いきなり、できる訳無いわよ…。 はあ…はあ…」

踊り始めて一時間。2人は息を切らし、顔から滴るほどの汗を流し肩を動かしながら呼吸をするほど疲労していた。アスカはレイに合わせて踊ろうとすると必要以上に踊るテンポが遅くなってしまい、レイがアスカに合わせてようとするとテンポが早まってしまつて



いた。

水と油のような2人。後に休憩を挟みながらも、2人は踊り続けたが1日目はダンスしての質は上がるがコンビネーションとは程遠い物であった。

2日目。

「アスカ、レイ。踊っているのは自分だけじゃ無いわ。隣にいる人間の息を合わせる事を考えつつ…踊りなさい」

♪♪♪ ♪♪♪



♪♪♪

「くっ…!」

「…っ」

ミサトの指示通りに、2人はチラチラと踊ってる間に横目で見ながらも合わせようとするが…。アスカがレイに合わせようとして踊るがテンポにズレが生じ、変わってレイがアスカに合わせようとする。自分の動きが疎かになっていく。正にお互いがお互いの動きを駄目になっているのが、目に見えて分かる。

「…はあ〜」

流石のミサトも、残り8日間で2人が息を合わせられない未来しか見えないのか溜息を漏らしてしまった。



ネルフ本部の食堂。ネルフ職員が使われて食堂に重苦しい空気を漂わせる空間が存在していた。その為か、その空間の近くにはネルフ職員は近寄らず食堂の端でテーブルを挟み少女2人が黙々と食事を取っていた。

「……………」

「……………」

不気味に食器が金属に叩かれる音だけが鳴り響く。レイはシーフードカレーを食べており、一方アスカはパスタを食していた。2人の顔には生気が無く、レイは常日頃無表情であるが誰が見ても何処か焦っているような雰囲気を漂わせていた。アスカの方は、疲れの所為か最早パスタを作業のように口に運び味わずに顎を動かすだけの動作を行っていた。

(…駄目。このままじゃあ…葛城一尉が言った通りにシンジ君が…)

(……なんだろう、食べてるのに食べて気がしないわ。踊りだつて…ファーストとは合わせられないし。どうしろつて言うのよ…)

そんな暗い気持ちになっている2人の所に、紙コップを片手に近寄る男性の姿があった。

「よっ、2人とも。元氣無さそうだな」

2人に近寄った人物は加持であった。不満を1つも持っていないさそう顔で、2人に話しかける。

「あっ、加持さん…」

「……………」

ペこり

アスカは加持の登場で、少し気持ちに余裕が出来たのか彼の名を口から出す。レイの方は、彼を見るなり頭を下げてお辞儀をする。

そんな2人の反応を見て、加持は内心溜息を吐く。今彼女達が、今後のコンビネーションの出来に作戦が決まってしまうのだから。

それによって、初号機を囮にした作戦が実行されれば機体は大破、そしてフィードバックでシンジに甚大なダメージが予測されている。

作戦の提案は、加持だが彼はシンジが憎くて囮と言う作戦を考えた訳ではない。1番勝率のある作戦だと踏んでいるだけで、彼の本命はコンビネーションでの作戦であった。

しかし、人の感情だけで使徒を倒すには不可能な為に加持は心を鬼にして囮作戦をリッコに通してミサトに作戦の案を渡させた。

「どうだい？ ダンスの方は」

そう聞かれた2人は、目に分かるほど表情を暗くしていく。それを見た加持は、少し囧作戦での話を持ちかける。

「…そっか、駄目そうなんだな。これは当日の作戦は囧の方になるかもな」

「っ！」

「言つとくけど、今回の作戦を提案したの俺だけどコンビネーションの案に賭けていたんだが。これは…期待しすぎたのかもしれない、2人に」

「……」

「…くっ！」

そんな加持の言葉に、レイは元々表情をそこまで変えない女の子だが誰が見ても怒りの感情で染めた顔で加持に睨みつけていた。アスカは、尊敬する人から失望したと遠回しの言われ方に悔しそうな表情になる。

「そんな2人は今後も、強敵な使徒が現れる度にシンジ君に助けられるだな。まあ…確かに彼はシンクロ率も戦闘能力も高い。だが、彼にも人の心がある。いつまでも彼に頼りきりだと…見捨てられるぞ？」

2人は少しずつと身体を震わせ始めた。

レイは心から大切な人物であるシンジが自分との接し方が変わり、嫌われる想像をしてしまい心の底から恐怖がこみ上がり身体を震わせる。

アスカは自分でもエヴァパイロットとしてのプライドがあり、このまま彼に成績を持っていかれるのと先の戦闘での貸しも返していないのに今回の作戦でシンジを囧にしてしまえば自分が何故、日本まで来たのか分かんなくなってしまう事に身体を震わせる。そして、2人はお互いに目を合わせるとお盆を持ち始め返却口に向かっていった。加持は、そんな2人の後姿を眺めながら溜め息を吐く。

「…ふう」

「嫌な役、ご苦勞様。 加持君」

「おお、リツちゃん」

加持の後ろから近寄ってきたリツコに、彼は軽い態度で名前を呼ぶ。

「どう？　今晚一緒に飲まない？　私の奢りで」

「おつ、珍しいね。　リツちゃんからの御誘いなんて」

「自分から嫌な事をしてくれる人間には、私は心から尊敬するわ。

だから、そのお礼よ」

「…まあ、あのままじゃあ2人のコンビネーションは高まらないからね。　悪戯に時だけを進ませても彼女達に進歩ないだろうさ。　そ

れにシンジ君が傷付けば葛城は悲しむからね」

「加持君…損するわよ」

「いいさ、それで良い方に流れれば…」

リツコは溜め息を吐き、加持は苦笑しながら子供2人が向かっていった方向を眺め続けていた。

### 3日目

♪♪♪　　♪♪♪

音に合わせながら訓練室で踊る少女2人。　そんな2人の踊りを眺めているミサトは思った。

（少しだけ…2人の踊りに変化があった。　だけど、まだまだ荒削りね。　確かにお互いに合わせようとする気持ちと動きがあるのだけれど…何かが足りないわね）

その後も2人は踊り続けたが、余り進歩は無くまた1日が終えていった。



先の戦闘から4日が過ぎ、病室で眠り続けているシンジ。規則正しい電子音が病室内に鳴り響く中、突然病室に変化が現れた。時は夜中、突如彼の胸から小さな光が灯り始めては…光は胸から少しずつ身体全体に広がっていく。暗闇の病室に小さく灯るシンジの身体であったが、数分経つと静かに光は消えていき眠っていたシンジに変化が見られた。

「…っ、うくん」

少し呻く彼だったが、呻き終わると彼の瞼が開き始めていく。そして、目を覚ました彼は病室の天井を眺めながら一言。

「…………お腹空いた」

## 形の合わないパズルのピース

…なんだろう。

身体が…ふわふわする。

なんか不思議な感覚だ。

自分が自分を認識がハッキリとしない。

周りは暗く、浮かんでいるような感覚で身体を動かそうにも身体が無いのか動かせる気がしない。

少し時が過ぎると…心が苦しくなる。なんだろうな、負の感情で心が乱れ何とも言えない感覚に捉われる。

次に視界が開かれた。目の前には、海があり海面を見る姿勢になつていた。気がつけば、俺は自分が何かに攻撃されてる事がわかった。

そして…俺の心は、色で例えるなら赤。それも黒に近い赤でドス黒い感情が満ち溢れて行く。自分の身体が自分の身体で無い事を確認する事もせず、俺は感情に任せて身体を動かす。

憎悪 嫌悪 怒り 絶望 無念 悲しみ 苦しみ 後悔 恐怖

恨み 不安など、色々な負の感情が俺の中で暴れ出している。そして感情は『噛み殺せ！』の一言に凄まじく集中し始めて身体は、勝手に動いていく。

目の前にいる『何か』を、記憶に無い動きで身体を動かして攻撃を行う。

元から知っていた様な動きで、『何か』と戦い最中に突如と何かの頭に入り込んできた。それは地図のような画面が頭に浮かぶ。その地図には×印がある場所にマークされていた。深く考える事も無く、俺は『何か』をマークされた場所に追い込もうと動く。

何故か俺は知らないA・Tフィールドの使い方が頭に浮かぶ。

そして槍と同じ要領で、『何か』に放つ。そして、目の前に爆発が見えると俺は意識が遠のく…。

☆☆☆☆

突如と何かに引き寄せられるような感じを受けたシンジは少しずつ意識が戻ると、視界も開かれて行く。すると目の前には天井が見える。知ってるか知らないと言われるとどちらとも取れる。そんな思考を走らせると、空腹の為に身体は信号を発信した。

「……お腹空いた」

☆☆☆☆

初号機と使徒との戦いの映像を、ブリーフィングルームのモニターで映されていた。そこには、椅子に座るシンジと彼の横に立つミサトが2人で映像を鑑賞していた。

彼の意識が戻った際に、食事を取ってひと段落してからの事だった。

「……これが、シンちゃんの戦闘結果よ。貴方の記憶には無いと思うけど……」

ミサトは、彼がエヴァに取り込まれた事は伏せながら戦闘結果を見せて報告する。だが、この後の作戦もあってミサトの気分は良くない

かった。

「あ…あのね、この後なんだけど。今アスカとレイが行ってる特訓に、シンちゃんも加わってもらうわ…。 作戦内容は…3人のコンビネーションを高めて、分裂する使徒を殲滅。 もし…特訓自体が駄目な場合だけど…」

彼女は少し、少しずつと声が消えてしまいそうなほど小さくなる。既に映像は消えて、黒に染まるモニターを見つめるシンジを見てミサトは恐怖に襲われていた。

何か取り憑かれているようにも見えるほどに彼はモニターを見続ける。そして、当初の作戦が実行出来ない場合は彼を生贄当然の事をさせなくてはならない事に彼女は言いにくそうになっていた。

「…その場合は、初号機を囮に…今製造された全てのN2爆弾を使つて使徒に攻撃。 M A G I の計算なら…使徒は殲滅出来るみたい。 だけど…初号機は大破確定だそうよ…」

言いつらい事を言い終えたミサトは、下を向き彼の反応を待った。

今の彼女の心境は、酷く乱されていた。それもその筈。 家族当然とも言える彼を、今も命かけて使徒と戦っている。 毎度ながら、楽には勝利は取れずシンジは必ず言っているほどに負傷している。 どんな時も弱音吐かず、勇敢に使徒と戦う彼を大人が勝利の為に非道とも言われてもおかしくない作戦をさせようとしているのだ。

最早、彼がミサトを作戦の事で責められたとしても彼女は受け入れる覚悟は持っていた。

しかし、彼女が恐れているのはシンジが…彼が自分達に絶望し見捨てられる事だ。 使徒との戦いで戦力としてもそうだが、家族としての彼を失うのが一番にミサトは恐れていた。

最悪な事をイメージが過る度に、ミサトは身体を震わせる。 ネルフの立場としては彼を戦わせなくてはならない自分と、家族としての自分がミサトの中で混ざりあっていた。

「…はあ」

「っ!?!」



シンジの突如である溜息に、酷く怯えるミサト。顔を上げ彼の方を見ると、シンジは彼女の方に顔をゆつくりと顔を向ける。そのゆつくりとした動きにミサトは恐怖しかなかった。彼の顔が：どうなっている事が。

「了解です。じゃあ、俺も早く2人の特訓に参加しないといけないですね？」

彼はいつもと変わらない表情だった。

その表情を見たミサトは思わず、瞳から涙を流す。そして、彼の前で跪くとシンジの膝に乗る両手を掴み謝罪するように頭を下げる。

「ミ、ミサトさん!？」

「…ごめんなさい。私達：大人達の決定で貴方の命を脅かす事になつてしまう」

驚くシンジであったが、彼の手を強く握りながらも震わせるミサトの手と彼女の体制に理解していく。

彼女達の立場では、使徒を倒すのが最優先にしなくてはいけない組織。しかし、人としては非道だと分かっているながらも子供にその役目をやらせる事にミサトは謝罪していた。自分より年下の少年に：恥も関わらず涙を流しながら。

それをシンジは…。  
パフツ

「っ！」

「ミサトさん、気にしないでとは言いません。だけど…信じてください。俺を…レイさんやアスカちゃんを」

シンジは片手をミサトの頭に乗せて、ゆつくりと撫でる。

「ミサトさんは…俺らを信用できませんか？」

「っ!? そんな訳っ！」

ガバツと顔を上げるミサト。それを見た彼は、人の心を穏やかに

させるかのような笑顔で言う。

「俺は皆…人類全部とは言いませんが、貴女達を守りたい。よく漫画や小説のような主人公みたいには、出来ないのは知っています。なら、自分が出来る事はやりとげるつもりです。だから…ね？ 信じて、俺らを。俺、レイさんとアスカちゃんを…そして俺らの帰りをね」

自分より年下の少年から、人としての大きな器を見せられミサトは涙流しながら少し笑った。



「…はあ…はあ…はあ…」

「はあ…はあ…はあ…チツクシヨウ…」

特訓の為に着せられた少女2人は、訓練室で息を切らし汗を流していた。アスカの方は、悪態を吐いていた。それもその筈であった。

残り日数は半分が切りそうなのだ。それなのに…2人は、息を合わせるので精一杯なのか進歩がそこまで見られない。

「…もう一度」

「分かってるわよー」

だが、疲労が溜まる身体に無理にでも動かしてお互いの動きを合わせようと努力していた。しかし、歯車も歯が合わなければ上手く回らないのは当然。

「合わ…せようとして」

「してるわよー」

お互いがお互いに合わせようとしてるが、何故か2人の動きに一致する事は無かった。残り時間が少なくなる度に、2人の焦りがより一層と動きに変化を生じ合わせるのが困難になっていた。

「…」

「……」

無表情ながらもレイは必死と、自分の意味とプライドの為に動くアスカは少しずつと動きが遅くなっていく。しまいには、無言で2人は止まってしまふ。

どうしても合わないお互い、無情にも過ぎる時間。2人の気持ちが少しずつと折れそうになる。

そんな所に…彼は2人の前に姿を現わす。

「うゝす、頑張ってる?」

「!!?!」

訓練室のドアから頭を出して2人の様子を眺めるシンジ。

2人は、シンジの顔を見て彼女達の顔には力が程よく抜け始める。

今の彼の顔は、緊張感など無い優しい笑顔で2人を見ていたからだ。

★★★☆☆

彼女達の休憩を挟み、シンジも2人と同じ衣装に着替えていた。

「じゃあ、シンちゃん。さっき見せたダンスを踊ってくれるかしら

?」一先ず、シンちゃんが踊れるか知りたいし」

「わかりました」

♪♪♪  
♪♪  
♪♪  
♪♪

流れ始める曲と合わせて、シンジは覚えたダンスを踊りだす。それを見る3人は、シンジのダンスに魅力されていた。レイとアスカの踊りは、例えるならテストの解答を答えを見ながらただ書いているようなもの。

しかし、シンジの場合はダンスの振り付けに感情が籠っているのか不自然さも無く綺麗に踊っていた。

これにはミサトもガッツポーズ。彼なら2人を引っ張って、呼吸を合わせられると間違いないとミサトは確信した。

「じゃあ、シンちゃんも特訓に参加できるわね。では、本格的に3人の呼吸を合わせるわよ！」

そうして、残り5日の3人での特訓が開始された。

☆☆☆☆

少しずつ過ぎていく時間の中、3人の踊る訓練室を映すモニター室で書類を書いているミサト。

彼女は、作戦責任者として前回の戦闘による報告書や請求書などの処理をしていた。

今、3人の特訓には独自にやらせてより呼吸を合わせられると思ってミサトは自分の仕事に回っていた。今の所は、シンジが投入された事にレイとアスカの踊りにキレが出るようになっていた。

プシュー

突然、モニター室の扉が開かれた。すると、そこには加持の姿が見えた。

「よお、葛城。上手く行ってるか？」

「当たり前前田のハイキックよ。シンちゃんのお陰で2人の動きに良い方に変化があるもの。最早、作戦はコンビネーションの方になるわ」

声の主が解ると、顔も上げずにカリカリと書類に記入していくミサト。それを見て呆れる加持。

「葛城く、自分の仕事も大事だが…彼等の側にいた方がいいと思うぞ〜?」

「どう意味よ…それ」

「彼も人間って事だよ、確かに子供としても人間性にしても出来た子だ。けどな…あの子だって溜めてる物はある筈だ。そんな時に頼れる大人がいなければ不安定になるぞ」

加持の言葉に、自分の本当にやらなくてはならない事を考える。

確かにシンジは普通の子供とは思えない性格を持っていて、今の環境や状況に愚痴も言わないでいる。だが、流石に次の作戦や前の戦闘後には訓練など過酷な事が立て続けに起きれば大人でも気が滅入るだろう。

そんな彼に任せきりはマズイと思い、ミサトは持ったペンを置き、三人がいる訓練室に足を向けていた。

「やれやれ…」



残り4日、シンジの参加により2人の少女の踊りには少しずつ動きを合わせられている事が見て判るほどだった。

「はーい、午前の訓練は終了よ。お昼ご飯食べた後、午後も引き続きで訓練よ」

「はい…」

「はーい」

「…了解です」

3人はミサトの指示に返事をして訓練室を後にする。

残ったミサトは彼らの訓練結果を見て、少し不安があった。アスカとレイは少しずつ動きが良くなっていくが、シンジの動きが少しずつとラグがあるように彼女達から遅れていくのが解る。

今の所、指摘されればシンジは2人の動きに合わせて事が出来るのでミサトは問題視しなかった。だが、何となく胸に引っかかる感覚があったから不安なのだ。

（考え過ぎかしら…今の所は、シンちゃんが加わった事で2人の動きは良くなってる。

だけど、前の戦闘から直ぐに復帰してから休み無しに訓練…。でも、シンちゃんは疲れた様子も見られないから大丈夫だと思っけど）  
そんな事を考えながら、自分も昼食を済ませるために食堂に向かった。

♪〜☒〜♪

午後も訓練室には音楽が流れている。その音楽に合わせて3人は踊っていた。左からアスカ、シンジ、レイと並びで3人お互いのリズムに合わせてようとしていた。

「ほらー！…もつと音楽に合わせて、リズムも合わせて！」

ミサトは3人に指摘を飛ばしては、シンジ達はより一層とお互いに

合わせようと必死になっている。

「…ツ！」

歯を食いしばりながら、2人に合わせようとするレイ。

「なんで合わないのよー！」

苛立ちを隠さず必死に合わせる為に身体を動かすアスカ。

「ハア…ハア…」

リズムに合わせていく内に少しずつ息を切らし始めるシンジ。

どうしても3人のリズムが合わしきれない。何処か噛み合わない

歯車のように、ぎこちなくお互い同士が動きを阻害し合っている。

2人から3人になってからは、改善された所はあったが作り上げられたパズルのように最後のピースが無い状態であった。

ガツ

「ツ!?!」

「えっ?… きゃあ!?!」

シンジはターンした時に足を纏れてしまい、アスカを押し倒すように倒れ込んでしまった。

「いったーい、バカシンジ! 何すん…の…よ」

下敷きにされたアスカは、申し掛かるシンジの体制を見て驚いていた。それはアスカの胸に頭が挟むようにシンジが倒れ込んでいたのだ。

それを見たアスカは、恥ずかしさの余りに瞬間的に赤面しシンジを退かそうとする。

「このスケベ…」

最初は荒げた声で叫ぼうとするアスカだったが、シンジの様子を見て声を失っていく。

「ハア…ハア…ハア…グッ！」

何処か痛みに耐えるように、顔色は悪く動いていたのはあるが息の切らし方と汗のかき方が普通では無いのがアスカには見て解るほどだった。

「大丈夫! 2人共!?!」

だが、ミサトの声に反応するようにシンジは一旦深呼吸をしてから

何も無かったように立ち上がる。シンジはアスカから離れて、顔色は完全とは言わないが何も無かったように手を差し伸べる。

「ごめん、アスカちゃん。足纏れちゃて…大丈夫？」

「う…うん」

あの状態からの対応に、アスカは何処か気の抜けた返事になっていた。

ミサトはシンジが疲れてしまったての転倒だと思い、一先ず休憩を入れることに。

「無理にやっても逆効果だし、少し休憩を挟みましょう。時間は30分で」

ミサトは指示を出すと、アスカを起こしたシンジは一目散と訓練室を出て行く。

「じゃあ、トイレに行つてきまーす」

「はいはい、時間までにもどってきてね。ふ…良かったわ、何も無くて。今シンちゃんに何かあったら大変なもの」

訓練室から出て行く後ろ姿を眺めていたアスカは、何処か違和感を持ち彼女もシンジを追うように訓練室を出た。

「…くっ、身体中が痛いなあ。ハア…ハア…昨日起きてから少し痛みあったけど、徐々に酷くなってるな…これ」

シンジは通路で壁を片手でつきながら、痛む身体で歩いていた。ヨロヨロと弱ってる身体を無理に動かしながら、医療室に向かっていた。

「少しでも痛み引かせないと、動けなくなるなんてシャレにならないし…痛み止め貰いに行かないと…」

自分のそんな姿を見せないように、シンジは自分なりに解決させる為に彼なりに急いでいた。

しかし、そんな姿を後ろから見ている者がいた。



「……なんなのよ、アイツ」  
そんな一言を呟いて再び訓練室に戻って行く少女がいた。



カタカタカタカタ

キーボードを叩く音が鳴り響く。 リツコは今までの初号機のデータを、あるシステムに打ち込んでいた。 今の所、戦った使徒の数は5体であり1体はまだ倒してはいないが戦闘記録としてあるのでリツコなりにアレンジして入力されていく。

「ふー…とりあえずはデータを入れ終わったわね」

ひと段落ついたのか、リツコは背もたれに寄りかかり体を伸ばす。 彼女は数時間も座り続けて作業していた。

今までのデータにより、初号機がシンジに加わる負担を計算され彼の容体を分析されていた。

「…やっぱりシンジ君の容体は良くは無いわね。 初号機とのシンクロが高いのもあるけど…フィードバックが強く出ている。

彼自身には外傷とかは無くて、初号機で受けたダメージが殆どがシンジ君の身体に刻み込まれているわね…」

エヴァとのシンクロ。

普通のロボットとは違い、操縦桿を使つての操作では無くエヴァと自分を繋げて動かすのだ。

それは操縦者とエヴァが一心同体になり、動かす事が出来てダメージを受ければエヴァだけでは無く操縦者側にも影響を受けてしまうのだ。

例えば人間は思い込みの強さで、色々な現象を起こしてしまうのが一例でしょう。暑いと思えば暑い、寒いと思えば寒いなど普通の棒で手の甲に押し当てた時に火傷の跡になってしまうなど。人間の身体は脳が支配している。

それにより熱くも無い棒を熱いと強く思い込めば、身体が反応して火傷と言う現象を起こすのだ。エヴァのフィードバックも同じ原理で、エヴァ自身のダメージがシンクロにより脳と繋がり操縦者の身体に刻まれてしまうのだ。

だが、実際にはエヴァ初号機から受けたダメージは緩和されてるのかシンジに受けたダメージの現象は少ないと言える。彼と初号機のシンクロ率だと、ほぼ生身と言えるほどの一心同体だった。しかし、結果に残るのは片目が潰れれば一時的に見えなくなるなど本当のダメージはシンジの身体には刻まれていないのだ。

その代わりに幻痛が凄まじく彼に襲いかかっていた。四肢の一部を無くした人間が、無い箇所が寒いなど痛いなど言う現象。

これが今のシンジが罹っている症状なのだ。先の戦闘によりエヴァとしての性能以上の動きによる筋肉痛や、使徒から受けた攻撃によるダメージ。これらがシンジの身体で体感しているのだ。普通大人でも悲鳴を上げてもおかしくない痛みを彼は抑え込んでいる。14歳とは思えない精神力と人間性。それをリツコは危惧していた。

「何処か…彼が心が折れた時、反動が強すぎて壊れてしまいそうね」  
そんな事をポツリと独り言を呟いた。するとリツコのいる部屋に來客。

プシュー

「リツコさーん」

「お届け物だ」

入ってきたのは加持と背負われたシンジだった。不思議な光景にリツコは問いかけた。

「どうしたの、シンジ君」

「途中で拾ってね、目的先がリツちゃんの所だったから運んで上げた

のさ」

「ありがとうございます、加持さん。助かりました」

加持はそつとシンジを下ろして、空いてる椅子に座らせる。

「リツコさん、頼みたい事がありました」

「何？ シンジ君が私に頼みたいなんて」

シンジは真剣な表情で、リツコにある物を作つて欲しいと頼み込む。

「それに関しては構わないわ。後シンジ君、貴方今身体中痛いでしょ？」

「…ええ、身体中痛くて先程医療室に行つて痛み止め貰つて飲んだばかりなんです。ここに向かつてる最中に、加持さんと会つて此処まで運んでくれたんです。本当に助かりました、加持さん」

ペコリと隣に立つ加持に頭を下げる。そんな加持は笑いながらシンジの頭に手を乗せて撫でた。

「構わないさ、君は大人じゃ出来ない事をして戦つてくれてるんだ。

そのくらい甘えてくれても構わないさ」

そんな言葉にシンジは心が少し軽くなった気がした。



残り2日まで時間は過ぎていく中、訓練内容は進行していなかった。本当に3人の動きに一つ何かが足りないのか、未だに噛み合わないでいた。

「…2人とも一度、シンちゃんと組んで踊って貰える?」

ミサトは何か感づいたのか、シンジと2人のどちらかと組ませれば原因が解るかも知れないと思い実行に移す。

シンジとアスカで踊らせると、アスカのリズムに合わせてシンジが踊る。

変わりシンジとレイでやってみると、お互いが合わせようとする為にスムーズだった。

それを見てアスカを2人に合わせる為に言うが、本人も合わせようと努力している。ミサトも残り少ない時間の中で、完成させなくてはならない焦りで一言。

「最早これはシンちゃんとレイのコンビでやったほうがいいかもね」「ッ!?!」

その言葉にアスカは、怒りと不甲斐なさに身体を震わせて突如その場から逃げるように走り出していく。

「アスカちゃん!!」

その後を追いかけるシンジ。

使徒再活動まで残り43時間17分。

## 繋ぐ線と線

### 繋ぐ線と線

サー

水が流れる音が聞こえてくる。ジオフロント内に設置されているガーデンには、川に見立てたような配置に水路があり其処には少女が1人体育座りで座っていた。

「…アスカちゃん」

「……………」

アスカを追いかけてきたシンジは、少し距離を置いて話しかけるがアスカは無言だった。彼なりに今の彼女の心境を理解しているのか、余計な事は発さずに彼女の方からの返事を待つ。

「…なによ。なんでついてくんのよ」

「それは…」

「なんで私が責められてるの！ 私だって合わせようとしてるのよ!!  
なのになんて!?!」

アスカは彼女なりに人と合わせようと必死でいた。しかし、彼女は過去の事があって人との関わりは最低限しか行っていない。

その為に人と合わせるのが困難になっていた。

アスカの後ろ姿を眺めていたシンジは、ゆっくりと彼女に近づき横に座り込んだ。

「…アスカちゃん」

突然隣に座り込むシンジに驚くアスカ。彼は顔を合わせようとせずに、独り言のように話始める。

「俺はアスカちゃんの過去に何があったのかは知らないし聞かない。

誰にだって向き不向きがあるよ。アスカちゃんが必死になつて俺らと合わせようとしてるのは感じているよ?。」

シンジの言葉に耳を貸しながらも、黙ってアスカは聞いていた。

「アスカちゃん？　俺との最初の出会い覚えてる？　『私がエヴァ2号機パイロット、惣流・アスカ・ラングレーよ。　サード・チルドレン、碇シンジ。　私は貴方を超えてみせる！』って言われたなあ」  
（…よく覚えてるわね）

アスカは自分でシンジ相手に、そんな事言っていたとしみじみと思いついて出していた。　だが、彼が何故そんな事を掘り出したのか理解出来ないでいた。

「俺つてさ…自分でもお節介焼きだと自覚してるんだ。　でも、俺は皆に必要されたいと思ってるから色々としてんだよね。　それに対して皆が喜んでくれていると俺も嬉しくなるんだよ。」

「だけど、何故か俺と競おうとする人間が少ないんだ。」

「だから…アスカちゃんのような人がいると俺は嬉しいんだ」  
「えっ…」

実際に彼が第3新東京市に来てから、シンジにライバル心や対抗心を燃やす人間は居なかった。　それには理由があり、人当たり良く接する彼の雰囲気、周りの人間はシンジとの関わり方は緩やかな物だった。

その為に彼と何かで競おうと人間が存在しなかった。　だが、そんなアスカだけはシンジに対して対抗心を持っていた。　今のエヴァパイロットの中では確実にシンジが上位の存在なるだろう。

そんな彼を超えればアスカは目的の為に大幅に努力を重ねていた。　ネルフに来てからも、シンジの記録を塗りかえようと挑んでいたのは彼は知っていた。　努力を惜しまずに前向きに進み、シンジと言う壁を乗り越えようとするアスカ。　今まで居なかった存在に、シンジはアスカに好感を持てた。

「君が困っているなら相談を受けよう。」

倒れているなら起こしてあげよう。

傷ついた時は癒してあげよう。

落ち込んだ時は支えてあげよう。

助けてほしいなら向かいにいこう。

戸惑っているなら背中を少し押し上げてあげよ。

俺はアスカちゃんの壁として超える日を待ってる。」

「なんで…私にそんなに構うのよ。バツカみたい…」

少し照れくさそうに頬を赤らめ、チラツとシンジの方を見てみると彼もアスカの方に顔を向けていた。キョトンとしながらも。

「だって、アスカちゃんの事が好きなんだもん」

「なっ!!?」

余りにも無垢で損得を求めず、ただ単純にアスカの事を思つての一言だった。それにアスカは、見事に顔を真っ赤になる。

彼女は、ある一件から時は過ぎ容姿は良い為に色々な男から浮いた言葉を数え切れないほど聞いてきたが…大抵彼女の性格が分かる手の平を返す。その為にアスカは大抵の褒め言葉などは右から左に聞き流すようになっていた。

だが、彼女はシンジの事を多少なりと知っている為に心からの言葉だと理解してしまう。加持にも褒められた事はあるが、好意を知らせる言葉は貰った事は無く…況してや同年代の異性からの言葉には衝撃が強かった。

「なななななっ…」

顔は熱くなり、頭の処理が間に合っていないのか彼女はテンパっていた。そんな乙女な反応に彼は微笑み、顔は前に向かって何処か遠い目をしていた。

「ミサトさんの家に一緒に住むようになってから、最初の方なんてね…自分の事は自分でやって。何処か壁を感じていたんだ。けど、少しずつと任せられるようになっていく内に…アスカちゃんの表情が柔らかくなっていくのを見続けていたんだ。

そんな時にアスカちゃんが、ある日の晩御飯でハンバーグを出したら笑ってくれたよね？」

「……………」

アスカは少し赤みを残しながら、シンジの横顔を眺めながら聞いていた。

(…確かに、私の好きなハンバーグが出た時は不意にも喜んだわね。

顔に出てたんなんて…)

幼い頃にアスカの母親であるキョウコ・ツエツペリンは、得意な料理がハンバーグであって彼女の好きな食べ物になっていた。

「食べた時も少し驚きながら、食べる速さが上がって美味しそうにお代わりしてくれて…あの時は嬉しかったなあ。

本当の笑顔を見せてくれて、喜んでくれる君が好きになったんだ」  
プロポーズに近い台詞に再びアスカの顔だけでは無く、身体中と言わんばかりに赤く染まっていく。そんな中アスカは、ふと思い出す。

(あの時のハンバーグは美味しかったけど…何処かママと同じ味に近い物があつたのよね。シンジは私のママなんて知らないはずなのに…)

そんな事を思い出していると、彼はゆっくりと身体を後ろに倒した。アスカは横になるシンジの顔を追いかけると、目と目が合い彼は柔らかい表情を浮かべる。

「俺の中では、今ミサトさんの家で一緒にいるアスカちゃんにレイさん、ミサトさんの事は家族だと思ってる。大好きで…大切な…かけがえのない家族。

だからアスカちゃん…甘えてよ。頼りないと思うけど、俺は君を支えていたいんだ」

シンジは悪意など一切無い笑顔をアスカに見せる。それを見せられた彼女は…少しずつと心に纏っていた氷が暖かい熱によって溶かされていく。

彼と出会い、共にして彼女も知らないふりしていたが優しく照らす日向のように身を暖められていた事に。

それが彼の言葉によって、彼女が幼い頃から作り上げた形になった氷は水が変わっていく。内から溶けた水は、彼女の瞳から長い間堰き止められた物を瓦解させて…外に溢れ出ていく。

ポロポロと一度出てしまった涙は、アスカの顔を濡らしていくが心は暖まっていく。

「本当にアンタ…バカよ。 出会ってから…そんなに…立ってないの



に」

「時間なんて関係ないよ。俺がアスカちゃんが思う気持ちには本当なんだから」

アスカは加持ですら少し壁を作り、本当に気を許す存在が母親だけだったが…今此処に気を許し頼れる存在が目の前にいた。いつも笑顔を見せてくれて、一見自分と同じような外見だが男らしく頼もしい男の子が。

「グスツ…本当にお節介ね。だけど悪くないわ」

「それは良かった」

シンジは身体を起こし、アスカの両目から流れる涙を右手の人差し指で掬い上げる。

その涙のように、彼はアスカの心を暗い底から掬い上げた。その為、アスカは頭をシンジの胸に押し当てて身体ごと身を彼に預けた。

「アスカちゃん？」

「アンタの所為で泣かしたんだから…責任とりなさいよ。疲れたから、少し寝るわ」

「ははっ、仰せのままに…お姫様」

シンジはアスカに押し倒されるが抵抗せずに再び身体を横にして、彼女の寝やすい体制になる。目を閉じ彼の身体の上で余計な力が抜けた表情の彼女の頭を優しく痛まないように撫でて、彼も目を閉じ彼女の温もりを感じながら眠りについた。

(暖かい…心地いい…。こんなにも男に触れているのに嫌悪感が湧かない。…コイツなら信じてもいいかなあ。

それにしても…あんな紛らわしいセリフ、シンジったら平気で言うんだから。

少し…本気に思ったじゃない)

アスカは目を開けて顔を上げ、彼の寝顔を眺める。彼女の心境など知りもせずに呑気に眠るシンジの顔を見ると、アスカは少しずつと睡魔が訪れ瞼を下ろして行く。

(ああ…人に寄り添うなんて絶対に無いと思ってたけど…意外に……良いものね……)

彼の体温を感じながら、アスカはシンジの寝顔を愛おしそうに見ていく内に彼女は夢の世界に旅たつていく。

☆☆☆☆☆☆

「結構：響いたわね。 シンちゃんの拳」

「そりゃあ、そうだ。 彼なりに葛城に伝えたい言葉を行動に乗せたんだからな」

アスカが訓練室から抜け出した後、シンジはアスカを追いかける際にミサトの腹部に拳を一度添えてからねじ込んだ。 力では無く技で放った拳は、ミサトの身体に衝撃を与えていた。

ミサトなりにアスカに発破をかけるつもりで言った言葉は、余りにも彼女の心に抉つたに等しい。

それを感じとったシンジは、敢えて言葉に出さずに傷を負わせず行動で表した。

「はあ：最後までシンちゃんに面倒かけるなんて…。 大人して情けないわ」

意気消沈するミサト。 彼女も大人として立ち回っているが、今回に関しては作戦の中に保険で初号機を囮にするのがある為に焦っているのだ。

その所為か、普段言わない事も溢してしまう心境に陥っていた。「彼も分かっている。 同じ過ちさえしなければ、許してくれるさ」

加持は軽くミサトの肩を叩き、弱っている彼女を励ます。 そんな所にレイはミサトの方に近寄ると、加持にとっては驚く事になる。

「葛城一尉…大丈夫です。シンジ君は、誰かを責めたりなんかしません。二号機の人…今は余裕が無いだけで帰ってきた時は元気になっていると思います。シンジ君が私を支えてくれた…ように、二号機の人にも必ず…」

レイは自分なりに一緒に住むミサトを励まそうと、以前のレイにはあり得ないと言える行動だった。それを目の当たりにした加持は、変わる前のレイしか知らない為に余りの変わり様に驚く事に。

(…本当に彼は関わった人間を良い方向に変えてくれる。俺も…その1人になるかな)

加持は何処か遠い場所を見ているように…。

それから一時間過ぎた頃、シンジがアスカと一緒に戻ってきてからミサトはアスカに頭を下げた。それに対してアスカは、何も責めずに軽く返事をしてからは…彼女はレイの方に近寄り顔を合わせる。

「…何?」

「!?…」

突然近寄ったアスカにレイは、シンジと会う前のような能面に近い表情で口を開く。余りの表情にアスカは、一度怯むが自分の中で決めた事を曲げるのはプライドが許さないのか…顔を引き締める。

彼女は今までレイとの交流を控えていた。シンジとの関わりにより、幾分か柔らかくなっていたがアスカにはレイの事は少しばかり人形のような印象を持っていた。

その為にレイの事が苦手意識を持ってしまい、同じ場所に住む間柄ながら距離を置いていた。何処かレイの人形のような雰囲気は、妻を失った時の父親と重ねて見てしまっていたアスカ。

だが、シンジのお陰かアスカは人との関わりを持つとうと思うようになった。目の前にある問題を片付ける為にも、アスカは今日から彼女なりの一歩を踏み出す。

そんな事を知らないシンジは、顔を合わせて黙る二人を見て少し慌てていた。そして：

パンツ

「!?!」

渴いた音が鳴り響く。

突然アスカがレイの左頬を引っ叩いた事に、三人は驚いた。尽かさずシンジは二人の間に入ろうとするが、アスカの口が開く。

「悪いわね。　だけど…これで、アンタも私に手を出せるわね。　最初からアンタの事が気味悪いと思ってたのよ」

「……」

叩かれ赤くなる左頬を気にしていないのか、レイはアスカの目を合わせる。　何処か吹っ切れたのかアスカは、もう苦手に思えていたレイを普通に見れていた。

アスカは左頬をレイに差し出すようにして、親指で『此処だ』と言わんばかりに挿す。

『レイ』、アンタなら分かるわね。　アイツが私達にして欲しい事が。

なら、平手でも拳でも私に喰らわせなさい。　それでおあいこよ」

レイはアスカに言われて、ゆっくりと右手を握りこむ。　それを見ているシンジは困っていた。　いきなりの展開について行けず、どう止めようか考えている時に彼の両肩を軽く乗せる人間が二人。

「彼女達がやりたいようにさせなよ、シンジ君。　あの二人も今のままじゃあ駄目だと思つて、お互いを認め合う為に必要な事さ。」

見守るのも：男の役目さ」

「…そうね、シンちゃん？　貴方のお陰で、あの二人が進歩しようとしている。　それを喜びましょう」

加持とミサトは、あの二人が今成長しようとしている事に気付いていた。　犬猿に近い仲では、息を合わせた所で所詮はその場凌ぎ。

だが、お互いに認め合えれば話は別である。　その者同士の心の壁が薄くなれば、言葉にしなくても分かり合える事が可能になる。　それが『息が合う』と言うだろう。

バキッ

そうしてレイはアスカに言われた通りに、渾身の右フックが喰る。アスカの顎に的確な角度で入った為に、彼女は殴られた勢いとダメージによりよろける。口の中が切れたのか、血を吐き出し口元を拭うアスカ。

「…ぺっ、良いモン持つてるじゃない。これで恨みつこ無しね」  
「…ええ」

お互いに少し微笑み、名前で呼び合える仲になった。その後引き続き訓練に戻った。

それからは、彼女達の動きが合わせられるようになり着実に三人の動きにはぎこちなさは無くなっていく。

その日の訓練は、大きな進歩がありキリが良い所で終了となった。使徒再活動まで40時間が切られていた。



使徒と戦う子供が訓練している中、暗い部屋でゲンドウはゼーレと会談されていた。

ゲンドウの周りには石版のようなモニュメントの映像が映し出されている。12枚もあるモニュメントが全てゲンドウに向けられて、その中で01と書かれたモニュメントの下には映像で映された『キール・ローレンツ』の声が響く。

『碓君…今日はどうした？ 突然私達を集めるなど、つまらない事では無いのであろうな』

「はい、とても大切な事で貴方達にお願いしたい事がありましたお呼びしました」

ゲンドウは一度頭を下げて感謝の意味を示す。そして次の戦闘に備えて、ゲンドウは本題を持ち出した。ゲンドウの頭上に色々なデータが映し出される。

「本日：貴方達にお渡ししたデータに入った物を作り上げる為に協力をお願いしたい為にお集まりさせて頂きました。」

これらを用意するには、ネルフだけでは間に合わないのです」

『…ふむ、確かに中々面白いと見られる物があるな』

『これは新たな戦力に繋がると見た』

ゼーレは新たな兵器の詳細に、この先に新たな使徒との戦いで勝率が上がる兆しが見えたのか彼等に笑みを浮かべる。

2つの兵器の詳細データには、性能以外に兵器の姿が現れていた。

『マステマ』

サイズはエヴァとほぼ同じな大きさ。特殊ガトリング砲に3枚のブレードが周りに搭載されている。ガトリング砲を包むように搭載されたブレードフレームは、対象を確実に切断する為に超振動。

そして、最大火力であるN2爆弾が：二基。

近・中・遠距離の3つを対応を考えられた兵器である。

『ラバルトウ』

見た目は三角錐に近い只のシールド。しかし、このシールドは守るだけでは無く、真正正銘の兵器である。シールドの内側には、様々な機能を内蔵されていた。ラバルトウはマステマよりは小さなサイズの兵器である。

『碇君：これらは赤木博士が発明したと？』

「はい、その通りです」

『ふむ、流石だな。科学者で開発部としても優秀。素晴らしい、これらを完成すれば計画の進行が速まるだろう。』

早速こちらで用意しておこう、健闘を祈る』

ブント

ゼーレのモニュメントが消える共に部屋は明るくなり、端で会談する前から立っていた冬月がゲンドウに近づき話しかける。

「良いのか、碇。本来『ラバルトウ』はシンジ君が発案した兵器で

あつたのだろうか？ なぜ2つ共彼女が発案した話にしたのだ」

以前シンジはリツコに頼み事していたのは、自分が使いやすいつと  
思つての兵器を作つて欲しいとの事だった。 それに加えリツコも  
『マステマ』を発案したのだ。

「何…簡単な事だよ。 ゼーレの老人達に餌を与えない為だ。 シン  
ジの価値を知らせるのは確実に悪手と言つても過言ではない。

余りシンジの事は表に出さないのが得策とも言えよう」  
「大切にされているなシンジ君は」

冬月の言葉に、ゲンドウは少し微笑みながらも冬月には見せないよ  
うに背を向けた。

しかし、冬月はお見通しなのかゲンドウの不器用さに笑っていた。

☆☆☆☆☆☆

満月が地上に光を照らす時間帯、海辺に強力なA・T・フィールド  
を展開されており肉眼でも確認できるほどのドームが存在した。

グチュグチュ

キチャ

プシツ

バリツ

ドームの中から歪な音が鳴り、波の音とともにその場所を支配してい  
た。 その音には…どこか肉を裂いたり潰したりしている音に近  
かった。

N2爆弾により、身体の大半が焼き爛れ動きを止めた使徒。 自分

で展開した結界のようにA・T・フィールドの中で、色々な箇所を操作しているのか身体の一部一部が動いては少しずつと再生されていた。

それと同時に使徒は身体を丸くさせて、身体の修復と：使徒の弱点と言えるコアが点滅していた。他にも使徒の顔である仮面に4つの穴にも、不規則に光を灯したりしていた。

人類には、まだ使徒の正体など行動理由がはつきりとしてない相手。しかし、使徒にも学習能力があるのかコアの光と仮面の穴から灯る光は何処か法則性があるのかもしれない。

使徒も次の戦いに備えているのか、その時まで自ら展開したA・T・フィールドの中で身を潜めていた。

ドクンツ

ドクンツ

ドクンツ

そして：少しずつと回復が終わるにつれて、使徒は脈動するように身体が震え始めた。

海には波の音に混じりながら、使徒の鼓動に近い音が鳴り響いていた。





タンツ

タタタタンツ

タタンツ

ダンツ

3人の動きは揃って踊り終わり、見事息を合わせ最後の体勢で佇んでいた。

「良くやったわ、3人共。これなら作戦実行出来るわ!」

ミサトの言葉に、息を切らしながらも彼等の顔は滲み出るように笑顔になっていく。それにつられるように、3人は右手の拳を上突き上げる。

「しゃー!」

「どんなもんよ!」

「ムフー」

上からシンジ、アスカ、レイの順に彼等は声を出す。3人は1日挟んで訓練に集中し身体中から汗を流すほど、コンビネーションを磨いた。残り15時間が切っていたが、彼等の動きは一致されていた。

形が歪の鉱石でも、研磨すれば形は整い見た目も良くなる。3人と言う石も、少ない時間の中でお互いを磨き合い：今ここに立派な光る鉱石が誕生される。

「3人とも、お疲れ様。この後は汗流して晩御飯食べて、明日に備えて就寝：わかった?」

この時の時刻は、20時ほどだった。MAGIの計算によれば、次の日の11時に使徒が再び活動すると予測されている。

ミサトの指示に、シンジは少しずつ息を整えてから手を挙げてから意見を述べる。

「あのミサトさん? その晩御飯は俺が作っていいですか?」

「大丈夫? 訓練で疲れたのに：晩御飯まで作るなんて、大変でしょ

？」

「今回出そうとしている晩御飯は、余り手の込んでいない奴なんで」  
シンジの言葉に少し悩むミサトだが、彼の好きにさせようと思いついた。

「なら、構わないわ。食堂の方にも話しといてあげるわ」

「ありがとうございます、ミサトさん」

そうして、3人は浴場に向かっていった。

汗を流し身体を綺麗にして、シンジは食堂のキッチンにエプロンを身に着けて食材の前に立つ。

「よし、今日はコイツらを使った飯にしよう」

シンジは風呂に入る前にミサトに頼んでいた物があつた。寸胴鍋である。

直径と深さがほぼ同じで円筒形の深鍋を、寸胴鍋と言われている。汁物などを大量に作る時、大量に茹でる物がある時に用いられている。

元来、西欧の調理器具であるが世界的に広く普及されており、日本でも懐石料理や大衆食堂など給食等々で欠かせない物である。

そして、それを使い煮込む食材は…カボチャ・ナス・トマト・タマネギ・ズッキーニ・ピーマンである。

食材達を洗い、水を切ってからシンジは包丁を手にする。

カボチャを4分の1に切り分けて、ヘタや種を取り除きサイズを1.5cmほどに切っていく。タマネギも同等に4分の1に切ってからバラす。ピーマンはカボチャと同じ手順でヘタと種を取り除く。ナスとズッキーニは乱切りして、トマトは横切り。

全て切り終わると、シンジは寸胴鍋の底にトマトを隙間が無いように敷き詰めてから塩を上から満遍なく振り掛ける。

その上にタマネギ・カボチャ・ズッキーニ・ナス・ピーマンの順に重ねていく。野菜達の間には塩を挟んでいる。

鍋の上まで野菜を入れ終えたら、始めは中火で10分から15分。後は、とろ火で20分から30分蒸すと完成となる。

だが、シンジはこんな事もあるうかと用意していた物があつた。使った材料。

強力粉…400g

砂糖…20g

塩…6g

牛乳…200cc

水…80cc

ドライイースト…4g

バター…20g

ボールに常温の牛乳と水を入れて混ぜる。上からドライイーストを振り掛けて、自然に溶けて沈むまで置いておく。

2個目のボールには、強力粉と砂糖に塩をさつくり混ぜる。そして最初のボールの中身を8割入れては混ぜ、残りも入れては混ぜる。

最後にバターを4つに切つて入れ、手で握るように混ぜていく。

こねて丸めたらボールにサランラップで蓋をして、冷蔵庫に8時間ほど事前に低温発酵させていた。

野菜達と一緒に出来上がるように、パンも焼きあげていく。

「よっしゃあ、完成」

《野菜のさつぱり蒸し煮》と《手作りパン》が出来上がり食器に盛り付け、食堂のテーブルに座る方々に運び出した。

「本当に凄いな。シンジ君、良いお嫁さんになれるな」

「いやいや…俺は男だから婿ですよ。加持さん」

テーブルにはミサト・アスカ・レイ以外にも、加持・リツコ・マヤも席についていた。

「ありがとうね、シンジ君。私達に分まで作ってくれて」

「本当に美味しそうですね、先輩」

「いえいえ、お気になさらずに。後で良いので青葉さんや日向さんにも届けてくださいね」

全員に料理が行き届き、一斉にお辞儀をする。

「「「「いただきます」」」」」

そして食べ始まり、シンジは自分の料理に失敗が無いか確認していると…

「美味しー!!」

「何よこれ！ 苦手なピーマンが食べられる!?!」

「美味しいわ…」

「パンだけでもスープだけでも上手い。だが、両方合わせても見事にマッチしている…流石だ」

「野菜は塩だけで味付け、じっくり滲み出た本来の野菜スープ…美味しいわ」

「先輩先輩！ パンなんか、もちもちで甘いですよ！ うーん、手が止まらない〜!」

上からミサト・アスカ・レイ・加持・リツコ・マヤと感想を述べていく。皆が良い表情で食べているのをシンジは幸せそうに見て、彼も食べ続けた。

「「「「「」」」」」馳走様でした」

全員が食べ終わり一息をついていた。そんな中、加持はシンジに質問をした。

「シンジ君、中々美味しい物をありがとう。だけど…何故自分で作ろうと思ったんだ？ 此処なら頼めるのに」

加持の質問にシンジは少し悩みこむ。周りの人間は、加持の言葉に納得していた。何故、訓練後に疲れた身体で自分で作り上げたのか。

「うーん…別に深い意味はありませんね。此処の物も美味しいですけど、俺が作った物で食べてくれた人が喜んでくれたらななど。」

あ、そう言えば野菜スープは訓練中にふと思いついた物ですね。まさに俺とアスカちゃんにレイさんだなあと。

1つ1つの食材に特徴があつて、工夫すれば味が出せる。これも今の俺達と一緒にだと思つたんです。  $1+1+1=3$ になる数式を…10にも100にも。

それを明日に見せますよ」

口の端を上げ自信に満ち溢れた表情をした彼に、周りの人間達は不思議と次の戦闘では負ける想像が出来なかつた。

そして夜は満ちていき…明けていく。